

---

# 緋色の眼 ~ PAST ~

ジョン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

緋色の眼〜PAST〜

### 【Nコード】

N6329C

### 【作者名】

ジョン

### 【あらすじ】

「会って伝えたい事があるの」 その一言から、全ては動き出した。神々の黄昏事件から九年後の世界で、日本は大きく動こうとしていた。九我山家襲撃事件を始めとして、次々と連鎖的に起こる事件。その根底には、誰もが願うほんの些細な願いがあった。そして、希望の光と未来への希望が交差した時、新たなる運命が廻り出す。緋色の眼シリーズ最終作。

## プロローグ（前書き）

緋色の眼シリーズ最終作です。

これで、緋色の眼という話は終わりになります。  
皆様よろしくお願いいたします。

## プロローグ

都内某所・居酒屋。

十数年ほど前の話だ。御崎と八神の戦争という中々に大きな事件があったその一年後。

この国史上例の無い大事件が勃発した。一般的には飛行機墜落事件とされているが、  
本当の事実を知る者には、こう呼ばれていた。 反逆の十文字事件。

数の十名家の元締め、十文字家の長男、次男、三男、長女、次女が起きたその事件。  
死者は数百人にのぼり、怪我人は千人以上にも達し、一つの町が壊滅した。

「あの事件は酷かったね。うん、私はその頃病院に居ただけどさ」  
情報屋と名乗った女は、そう言うとコップに入っていたビールを

一杯あおった。

一介の記者である自分が何故、こんな事件を調べているのかという、知りたいからだ。

あの飛行機墜落事件は、色々とおかしかった。様々な憶測が飛び交った情報。

ネットの掲示板では、魔王光臨とか非科学的な事まで書いてある始末。

普通なら無視するのであるが、そのどの憶測にも妙な信憑性が全てあったのである。

「病院に居た？　おいおい、アンタは全部知ってるって話だったじゃないか。」

あの国中が大騒ぎになった事件が何故引き起こされたのか。何故、不問となったのかをな」

「知ってるさ。本人に聞いたからね」

「……本当か？」

「ああ、本当だとも。信じるも信じないも君次第だけどね」

「……話してみてくれ」

「まあ、待て。まずは契約内容の確認と行こうか。私は報酬として、反逆の十文字事件の真実と、現金で一千万円用意している」

「一千万円は初耳だが……」

「少し経費がかかりそうなんだね。これはすぐに君に差し上げよう。そして、問題の私の依頼だが……」

女は一枚の写真を記者に渡した。まだ年端も行かない少女が、笑顔で写っている写真。

純粹に綺麗だと思った。可愛いかそうでないかではない。笑顔が、綺麗だったのだ。

昔自分が記者を志したときも、同じような写真と記事を見てなりたいたと思った。

だが、現実はどう思うと、自重気味に笑ってしまう。

「この子を探してほしい。探すだけで良いんだ。他は何も望まない」

「何で俺なんだ？ 探偵でも雇えば良いだろうに」

「君の事は調べさせてもらった。中々のコネクションを持っているようだね。」

ヤクザ関係。その他企業諸々。何より、警察関係への強みがある」

「怖い怖い。そこまで調べられているとはな」

「私達は今、正直警察とは接触しにくい。腐った政治家や権力者なら居るんだけどね。」

でも、今欲しいのは現場への影響力を持っている者。それで、偶々あの事件を

調べようとしている、君の話を聞いて連絡してみたというわけだよ

「……わかった。その依頼を受けよう。その子の名前とか情報を教えてもらいたいのだが」

「焦るなよ、早い男は嫌われるぞ。そう、まずは反逆の十文字事件

についてだ。

その全てを話し終わったとき、君はその写真の子の情報を手に入られるだろうね」

そう言うと、女は店員を呼び寄せて更に幾つかの酒と料理を注文した。

「おい……この店はあまり安くないんだぞ」

「安心して、ここは私が出すよ。さつき写真を見た時の一瞬見えた君の輝きに、乾杯」

女 七海遠音は悲しげだが、それを感じさせない笑顔でグラスを打ちつけた。

一人の少年が居た。

その少年は体が弱く、常に寝たきりだった。

少年が成長したある日。不可解な化け物と少年は出会った。

だが化け物は少年の理想とした少女へと姿を変え、献身的に少年の世話をするようになった。

それは、奇跡としか言い様の無い事。やがて、少年は少女に惹かれていき、愛を知る。

愛の為に少年は戦った。どれだけ傷ついても、どれだけ悲しくても少年は戦った。

結果、少年と少女は愛の結晶を育み、そして一つの命が奪われた。

一瞬にして、世界が闇に覆われた。残ったのはどうしようもない怒りと愛の結晶。

少年は怒りのままに最愛の兄妹と周囲を破壊した。容赦なく、ただ泣き叫びながら

第1話・Bad - Holiday(前書き)

新キャラが続々と出てきます。

## 第1話：Bad - Holiday

武の街。九我山特区という場所がある。九我山とは悪鬼を討伐する一族の中でも有名な一族だ。

俗に鬼憑の一族と呼ばれ。十名家の中でも有数の戦闘力を誇る一族である。

そんな九我山が支配する街の名が九我山特区。豊かな自然に囲まれた古めかしい街。

特区にはそれぞれの街の特徴がある。ここ九我山特区は、武術の鍛錬や知識を身につける街。

いくつもの流派の道場が押し並び、古今東西の様々な武器も売っている。

だが、その全ては九我山によって管理されており、他での販売は一切見とめられていない。

それほどまでに管理体制が行き届いた街だった。そして今時刻は夜中。九我山家の長男、九我山令は

部屋の電気を消して、一人物思いに耽っていた。

(うーん……やっぱり、希恵ちゃんだな！)

令は現在21歳。大学にヘラヘラと通いながら休日には九我山の仕事をしている。

ずっとこの家を取り仕切っていた姉は、八年ほど前に嫁に行ってしまう、現在は息子が二人も居る。

令自身は片方が鬼憑を持っているため、その子に継がせてもいいのであるが、

父と母はなんとなく自分に継いでほしいような空気を出している。それはわかっているのだが、

(よおし……送信つと)

令は遊びたかった。九我山の家に捕らわれていてはおちおち合コンにも行けない。

……正確に言つと、まだ一度も行けていない。とある人物により、全て妨害されているのだが

その事実には気づいていなかった。だが、友達からの連絡により、いよいよ明日合コンに出れる。

しかも入学してからさりげなく気になっていた希恵ちゃんが来るのだ。

明日は全てを投げ打つても合コンに参加するつもりで居た。

(紫ちゃんへのアリバイ工作も完璧だ。フッフ……明日こそは！)

自分に彼女ができない最大の理由を思い出し、令は軽いため息をついた。すると、唐突に警報が鳴り響いた。

九我山特区に攻め入ってくる馬鹿は滅多に居ない。ここはあらゆる武術家が集う街。

しかもほぼ全員が九我山に中世を誓っている。下手すれば、十名家でも最強の戦力だ。

だが、警報はなっている。令は飛び起きると大慌てで服を着替え、外へと向かい飛び出した。

外に出ると、建物は破壊されておらず特に異常は無いように見えた。だが、違和感がある。

人が誰も居ない。気配が全く無い。いつもなら警備が飲んだくれが居るのに今日は居なかった。

それどころか、警報がなったにも関わらず警備が誰も出てくる気配が無かった。

令は走って警備員の詰所へと走る。扉を空けてゆっくりと中へと入ると、警備員が倒れていた。

「あー……大丈夫ツスカあ？」

反応が無い。床に倒れて目を瞑ったまま微動だにしない。一応呼吸はしているようで、穏やかな呼吸音が聞こえる。

警備員を再び床へと戻すと、令は立ち上がってモニタールームへと向かう。その途中にも何人が倒れていた。

警備員といってもプロの中のプロを集めた精鋭の筈。それをここまで簡単に無力化するとは只者ではない。

(ヤッバー……母さんと父さんが居ない時にこんな事になるなんて)

父と母は娘の様子を見るのも兼ねて、八神と合同の仕事へと鬼憑使いを沢山連れて行ってしまっている。

残っているのは令と紫。後は訓練中の鬼憑使いだけ。それは令への信頼の証なのだが素直に喜べない。

モニタールームへたどり着くと、いくつかの操作を行い全ての監視カメラへと目を通す。

すると、一つの人影が一台のモニターへと映っていた。その場所は、特別倉庫。

九年前の神々の黄昏事件の際に回収された幾つかのコアや結晶が保管されている場所だった。

いくつかは海外の勢力に返還したのであったが、幾つかは邪魔だと受け取ってもらえなかった。

その結果、コアの大半は日本へと残り、十名家が管理する事になっている。

だが、それも後少し。知人が立ち上げた組織に全てを預ける手はずになっていた矢先にこの事件。

(ど、どうしよう……お姉ちゃんに殺される)

姉もその組織の関係者だ。自分のこの失態を知ったら、恐るべき罰が待っているだろう。

普段は優しくて旦那さんに甘えまくりの姉なのだが、仕事に関しては鬼の一言。

悩んでいても仕方が無い。今は腹を決めるとこの建物の先にある特別倉庫へと足を向けた。

特別倉庫は警備員詰所を通らなければ行けない場所に立っている。発生した悪鬼が出れない為の柵。

頑丈な壁。鋼鉄製の扉。現在、その扉が開かれ一人の人間がその前に立っていた。

黒のスーツの上に黒のコート。体格は大きなコートのせいでよくはわからないが、身長はやや高め。

顔は同じく黒のフルフェイスヘルメットに覆われており、わからない。

手にはコア。その黒スーツはそれを一瞬見た後、そのままコートの中にコアを収めた。

コツコツと音を立てて歩き出す黒スーツ。すると、突然足を止めた。

「いよお！ それ持って何処へ行くんだコラア！」

その声と共に、何の前触れも無く火柱が上がった。そして何時の間にか、正面には一体の悪鬼。

赤と黒の体によく見る鬼の顔。言葉を喋れる所から上級悪鬼だと判断。

上級悪鬼の中でも高位の悪鬼は人間とほとんど変わらない知恵を持っている。それが人と交わり

生まれたのが鬼神という存在。そして低級・中級と人が交わったのが混血と呼ばれる種族。

令や十名家の人間は例外無く、混血の末裔だった。

「おいおい、シカトか？ 食い殺しちまうぞ、おいしい」

だが、黒スーツは何も答えない。興味深そうに鬼を見つめている。すると、背後で何かの引金がかかる音。

咄嗟に黒スーツは横に移動すると、さっきまで居た場所に銃弾が撃ち込まれる。

背後を向くと、令が心からめんどくさそうな顔で、銀色の拳銃を構えていた。

「あのー……それ、返してもらえないツスカねえ？」

「……………」

「あー……だんまりツスカ。んじゃ、仕方ないんで力ずくで行きますよ」

「つしやあ！ 喧嘩だぜい！」

鬼は空高く跳躍すると、そのまま令に向かって落下していく。令の家の力は鬼憑と呼ばれる

悪鬼と融合する力。だが、令だけは別格の神憑という力が使えるのである。

鬼の体が段々と反意思化 粒子のような状態に戻っていく。令がそれを大きく手を広げて受け止めようとすると、

「何やってんのよ!」

「ウボオツ!?!」

凄まじい勢いで金色の光をまとった少女がほとんど粒子化していた鬼に飛び蹴りを放った。

鬼は体を完全に碎かれると砂のように地面へと降り注ぐが、すぐに体を構成し直し、

「う、姐さん……」

「ゆ、紫ちゃん……」

鬼だけでなく令も冷や汗をかきながら少女の名を呼んだ。少女鳴神紫は不機嫌そうに乱れた髪をかき上げ、

「令……あたしに許可無くそのアホと合体しちゃ駄目ゆーたでしよ」

「で、でも……この人強そうだし」

「もー黙って言うこと聞いととき。あたしがそこの奴いてこましたるから」

紫の体からバチバチと雷が発生し、黒スーツを威嚇する。紫の目

から見ても只者でない事はわかる。

黒スーツは腕をダラリと下げてやや重心が後ろの構え。その所為か、妙に間合いが取りにくい。

しかし、紫はそんな事を気にしないタイプだった。大地を強く蹴り、黒スーツへと迫る。

「くたばりいやあ！」

雷を纏った拳を振り回し、チンピラのように特攻していく紫。黒スーツはそれを巧みに避け、カウンターのよう拳をあわせた。容赦の無い一撃が紫の額にめり込む。

だが、紫は痛みなど感じないようにニヤリと笑うと、黒スーツの袖を掴み、

「あたしのはかなり痺れるんよー！」

放電を開始。周囲に稲光が閃き常人だったら耐えられないほどの電流が黒スーツを襲う。

やがて、コートが燃え尽きスーツとヘルメットだけの状態になると、ついに黒スーツが動いた。

足元から黒い染みが発生し、その中から野太い腕が現れ紫の体を思いきり殴りつける。

咄嗟にガードしたものの、その威力は凄まじい。紫と一気に距離が開く。

そして、黒スーツは両手を上げ、何も無い場所から拳銃を作り出した。それを見て令は、

「あれって……神璽さんと由加さんと同じだ……」

黒スーツの行動は姉の知り合いの榛名神璽と棗由加と同じ力。世界にたった二人しか居ない

結晶使いだけが使える力。すなわち、黒スーツの正体は神璽と由加のどちらかという事になる。

何故、何故、何故、と令の頭の中に疑問が湧く。神璽には拳銃の使い方を教えてもらった事がある。

一緒に由加の風呂を覗こうとした時に人柱にされた思いでもある。だが、二人とも良い人だった。

真意はわからない。今は九我山の敵。そう判断し、令は式神【無装】を顕現させると、

「紫ちゃん、ごめんね」

足元で粒子化のままいじけていた鬼と視線を合わせて、神憑の力を発動。

令の体の中に鬼の粒子が吸い込まれて行き、令の瞳が真っ赤に染まり、鬼を模した赤と黒の鎧が顕現。

令の式神、無装は千島蒼威の大我とよく似ている。同じ銀色の球体で形が変化する式神。

だが、無装の球体は一つ。そして、無装に取りこませた武器の形しか取る事ができない。

令はその中の一つ、リボルバー拳銃の形を選ぶとそれを黒スーツに向けて狙いを定めた。

更に炎が拳銃へと纏わりつき、そして引き金を引く。炎を纏った銀色の弾丸が、黒スーツへと物凄い速さで迫る。

黒スーツはとっさに顔避けるが、弾丸の威力は凄まじい。少し掠っただけで、ヘルメットが半壊した。

その隙間から見えたのは、神璽のトレードマークの金髪。やはりと令は確信した。

だが、神璽もそれだけでは終わらない。拳銃から反意思の弾丸を

発射し、令の眼前で破裂させた。

轟音が響き渡り、悪鬼が憑依して強化された令と言えども三半規管がおかしくなり、尻餅をついた。

その間に神璽は身を翻して、空へと浮き上がり飛んでいく。

「逃げられる思ってたのかー！」

紫が雷を針のように細く形成し、神璽へと何発か撃ち込むが目立った外傷は無さそうだ。

だが、それでもいい。紫は「ふう」と息をつくとき、尻餅をついている。

紫はそんな令の体を思いきり蹴り飛ばすと、鎧を砕いて無理矢理令と鬼の合体を解除。

「あ、姐さん！ ひでえよー！」

「うーるーさーい。あたしの令と勝手に合体してんじゃないわよ。いいから、アンタは中へ戻りいや」

「へい……」

鬼はすぐすぐと再び粒子化すると、令の腰に下がっていた筒の中へと入って大人しくなった。

紫は手を差し出して、令を立てさせてやると、おもむろに切り出す。

「これから、どうするん？」

「そうだよ！ ヤバイよ！ こんな事お姉ちゃんにバレたら僕ら病院直行コースだよ！」

「た、確かにそれは嫌やわ！ 律ねーさんならやりかねんわあ……」

九我山家の発言力は律、父、母、令紫、鬼の順番。嫁に行ったというのに、今も尚強い発言力を持っている。

これは、姉の耳に入る前に自分達で処理をしなければならぬ。紫はそう考え、一度頷くと

「よし、神璽さんを追いかけるよ！」

「紫ちゃん、居場所とかわかるの？」

「ふっふーん。逃げる直前にあたしの電気を纏わせておいたんよ。大まかな位置ならわかるでー」

「凄い！ やっぱり紫ちゃん凄いよ！」

「もっと誉めてくれてもええよ。まあ、とりあえずは由加さんに話聞かなきゃね」

「由加さん日本に居るのかなあ？ また海外行ってなきゃいいけど」

「それなら大丈夫やで。昨日ママさんが電話でゆーとったけど、四条のお屋敷に泊まってるらしいで」

「いやあああ！ 莉王兄ちゃんが居るじゃん！ あの人世界一口軽いから絶対バレちゃうよ」

「大丈夫。兄ちゃん馬鹿やから、下手うたなきゃわからんって」

「そ、そうかもね……」

「んじゃ。事後処理したら速攻出発するでー。幸い大学も春休みやしね。

とりあえず、警備員のおっちゃん達はあたしが酔っ払って感電させてもーた事にしとこ」

「え……今から？」

「当たり前でしょー。あんま遠いとあたしでも探知できなくなつてまうもん」

「あああああッ！ 明日は合コンなのに……希恵ちゃん来るのに……」

令がそう呟いた瞬間。紫の纏っていた空気が一変した。そして、自分が失言した事に気づく。

慌てて笑顔で取り繕うも、もう遅かった。紫は拳を鳴らし、笑ってない笑顔で自分を見ている。

「アンタ、また行こうとしてたんね」

「しゅ、しゅしゅしゅしゅしゅめんなさあああいつー！」

令の悲鳴が、深夜の九我山家に響き渡った。

第2話・Hello・Friends(前書き)

由加、登場です。

これから、続々と緋色の眼のキャラが出てくる予定です。

## 第2話：Hello - Friends

事後処理が終わったのは夜明けの頃だった。あの後倒れた警備員は全て病院へと搬送し、

紫が「酔っ払って電撃しちゃったんよ。ごめんなさい」と謝り、給料には便宜を図ると

令が約束した。その後令は非常用電話を使い、母へと連絡すると母は深夜にもかかわらず、

相変わらず顔を見なくてもニコニコしているのがわかる口調で、出かける事と紫の事を快諾した。

破壊された特別倉庫も、こっそり知り合いの式神を使った業者へと連絡し修繕してもらった。

自分達が出かけている間は叔父や他の九我山の直系が管理してくれるらしく、後は出発するだけ。

「るるるーるるーるるるるるるるる」

鼻歌を歌いながら令は九我山所有のワンボックスカーへと、少量の着替えや武器を詰めこんでいく。

金属バットや予備の拳銃。それらを巧妙に隠しながら令は一通りの作業を終えると、

車の傍でタバコを吸っている鬼へと声をかけた。

「太郎くん。紫ちゃんと仲良くしてね」

「へーへー。わかってますよ、ご主人様」

太郎とは鬼の名前。令の母親がつけた名前だ。鬼は火鬼と呼ばれるかつての豪族が使役した悪鬼。

伝承によつては律が使役する四鬼にも所属する上位の悪鬼。だが、あまりにも意思と我が強く、

他の四鬼のリーダー格だった火鬼は、鬼憑の力が強い令へと預けられた。それが二人の出会い。

「それにしても、太郎君は変わった悪鬼だよな」

「自分でもそう思うぜ」

「下級、中級悪鬼は人の負の感情から生まれるんだけど、自分というものが無いんだよね。

だから獣のような姿なのかも。太郎くんみたいな上級悪鬼は自分を持つてるから人と似てるのかもね」

「俺だつて律姉えにボコされなきゃよお。普通に人食つて、誰かに討伐されて終わりだつたぜ。

だが、楽しいよな。人間っつーのは、言葉を覚えて、色々人間の文化を体験したが、

やっぱ次生まれるなら人間になりてーって思うぜ」

「なれるさ、きつと。……さて、そろそろ出発するから紫ちゃん呼んできてくれない？」

すると鬼　太郎は、呆れた顔で車の助手席を指差すと、

「もうとっくに乗ってるぜ」

そんなこんなで、令一行は九我山特区を出発した。運転するのは令。後部座席では、太郎がのんびりと雑誌を読んでいる。

紫も紫で何故か用意してあったカラオケセットと車のスピーカーを繋ぐと、車の中でカラオケ大会が開催された。

マイクを奪い合う太郎と紫。令はそれを注意するのは最初から諦めているので、運転に集中する。

目指すのは四条家の屋敷。車で高速を使えば二時間ほどの距離だ。四条家頭首の四条莉王は姉の幼馴染で、自分が小さい頃から兄と慕った人物。

「紫ちゃんも莉王兄ちゃんと会うのは半年振りぐらいだったけ？」

「ライライライ！ イエイエツイつつ！ ……ん？ あたし新年会とか出てないから一年以上は会ってないんよ」

「おお、そうなんだ」

「りーとあーくんには会ったんやけど……ってコラア！ 太郎、あたしのマイク取るんやない！」

「るせー！ 俺にも歌わせろお！ いつもいつも威張りやがってえ！」

「あたしは九我山の食客。あんたは令の奴隷。はい、どっちが身分が高いんやろねえ？」

「ぐう……」

「んじゃ、七曲目行くでー！」

再び始まる紫リサイタル。話の腰を完全に折られた令は話し掛けでも無駄だろうと思い、再び運転に集中。

この二人はよく喧嘩したりするが案外仲は良い。そもそも、本当に嫌いだったらお互いがお互いを無視するはず。

だが、この二人はそうじゃない。現に今も、

「お、姐さん。四条家の近くに美味しいラーメン屋あるらしいぜ」

「んじゃ、昼飯そこにしよかー。太郎は中入いれんから車の中に貰ってきたる」

「おお。サンキュー」

何時の間にか仲が良くなっている。小さい頃からの付き合いである令はそれを何度も見ていた。

紫と始めて会ったのが十三年前。太郎と始めて会ったのが、十二年前。

姉はその頃にはもう九我山の一員として働いていたため、令は姉と遊んだ記憶があまり無い。

だが、二人が居てくれたお陰で寂しくなく、真っ直ぐに育ってこられた。それだけには感謝している。

「令、何ニヤけどん？」

「どーせ、希恵ちゃんの事考えてたんだろ」

「何やて！ 令、言っとくけんなあ、希恵ちゃん結構ヤリマンなんやで。初体験小学生とかゆーてたし」

「うわあ、そいつ淫魔にでも憑かれてんじゃないね？」

「お願いだから知ってても思っても、そういう事は言わないでえ  
エエエツ！」

二時間後、令達は四条の家の屋敷の前にきていた。屋敷に来るのは数年振りだというのに、

相変わらず昔のまままでその屋敷は周囲に溶け込まずに存在していた。太郎は令の腰に入っている

筒の中に粒子化して入っている。九我山では悪鬼が居るのは常識なのだが、他の家では違う。

むしろ九我山は何代か前までは悪鬼と共存する嫌らしい一族と思われてきたのであった。

だが、十名家に所属した事によってその逆風を払拭したのである。今でもやはり、そういう考え方は大きい。悪鬼を討伐して生活しているのだ、当然だろう。

だが、令は討伐しているといった意識で悪鬼を殺さない。

悪鬼とは人間の負の感情から生まれる生物。だから、自然に還す。そんな感覚でやっていた。

「うわー、超懐かしいわ。令、さっさと入る」

「うん」

門を開いていつも通り入っていく。相変わらず警備なんて欠片も存在しない家。

一族の大半は四条特区に住んでおり、変わり者の莉王と一部の直系だけがこの家に住んでいる。

庭に入ると池の前に、ちょこんと座っているぬいぐるみを抱えた少女が見えた。

「あ、莉那ちゃん。久しぶり」

令が心からの笑顔で声をかけると、少女　　四条莉那はちょこちよこと令の下まで歩いてくると

「こんにちは、令君、紫ちゃん」

「おー！　りーか。相変わらずちっこいねえ。おとうちゃんかおかあちゃんはおる？」

「お父さんは、お仕事。お母さんも何日か前におじいちゃんちに行っちゃった」

「あら。遥緋さんまで居ないのか」

「お母さんもお仕事みたい。由加おねえさんなら居るよ。あーくんと寝かしてる」

「私ならここに居るよ」

莉那と話していると、唐突に声が聞こえた。莉那はその声を聞くと嬉しそうに声の主の下まで

駆けて行き、ひざ辺りにぶつかると抱きついた。それに苦笑しつつも、

優しく莉那の頭を優しく撫でている女性　　結晶使い、棗由加。

最後にあつた時とは雰囲気が違っている。

後ろで一つに縛っていた髪はぱっさり肩口で揃えられ、元々凛々しいのが余計に凛々しく見えてしまう。

「あ、九我山の令です。どうも、お久しぶりです」

「お久しぶりでーす」

「ああ、久しぶり。大きくなつたね」

「今日はちょっと、由加さんに聞きたい事があつて来たんですけど、お時間よろしいですか？」

「……灼汰を寝かしつけたら莉那と遊ぶ約束をしてただけだね。

莉那、ちょっと待ってくれる？」

「……うん」

明らかに消沈した様子の莉那。令はそれを見ると、紫をひじでつついた。

その意味を理解した紫は、笑顔で莉那の所まで歩きしゃがんで視線を合わせると、

「お姉ちゃんと遊ばへん？ こう見えてもあたし遊びの達人なんやで」

「そういえば、大学でも妙な遊びばっかしてるよね……授業出ないで」

「うっさい、だまっとけ。どうや、りー？ あたしと遊んでくれへ

ん？」

「うん……！ 遊ぼう」

「決まりや！ 令、太郎も遊ばしたるから、筒貸してや」

紫は令から筒を受け取ると、莉那の手を握って広い離れのほうへと歩いていった。

由加は「すまないね」と令に謝罪すると四条の屋敷の中へと通した。

主が居ない四条の屋敷は静かだと思ったのだが、そうでもない。先程から太郎の悲鳴と

紫の悪魔のような笑い声が響き、話し合いどころではない。そして、一発の爆発の後、

妙に静かになった頃に由加がお茶菓子を持って、再び部屋へと戻ってきた。

「他人の家だから勝手にわからなかった。遅れてごめん」

「いえいえ、お構いなく。由加さん、お仕事は休暇中なんですか？」

「うん。これから大規模な仕事がありそうだからね。先取りの休暇みたいなものかな」

「やっぱり、忙しいですか」

「うん、でも楽しいよ。蒼二とか郁人とか運命も頑張ってるしね」

「ははは、神璽さんも頑張ってるじゃない」

令が半ばカマかけの意味で、令が神璽の名前を出すと途端に由加の顔が険しくなった。

やはり、神璽に何かあったのだろうか。そのまま由加の言葉を待っている、

「あの馬鹿が何処に居るか知らない？ 先月あたりから連絡がつかなくなっただけ」

「え……」

「私と海外で仕事してたの。そしたらアイツ、連れに外人とやらなきや男が廃るとか言い出して、

こっそりとナンパしてたの。私が居るのにだよ？ もう、信じられなかった。

だからボコボコにして海に沈めて一人日本に帰ってきたの。それから、行方不明」

（流石神璽さん……相変わらずだ。由加さんも色々な意味で相変わらずだけど）

「由加さん。これから話す事は絶対他言無用でお願いできますか？  
無論、蒼二さん達にも」

「……話による」

「神璽さんについてです」

「……いいよ。絶対に喋らない」

由加の言葉を聞くと、令は昨日の深夜あつた事を由加に話した。  
九我山家への襲撃。

神璽の事。コアが一つ奪われてしまった事。全てを話すと、由加はお茶の湯のみを握り締め、

「あいつめ……！ 居なくなつたと思つたら今度は人様に迷惑かけるなんて……！」

怒りの炎を燃え滾らせ、由加は低く唸つた。幾つかの修羅場を潜り抜けてきた令でも、  
流石にその迫力には逆らえず、ゴクリと唾を飲むと神璽をフオロ  
ーするように、

「いやいや。た、多分神璽さんにも事情があるんだと思いますよ。  
何か様子もおかしかったですし」

「……実は、こつちも気になる事がある」

「何ですか？」

「最近の研究でね。結晶つて、無尽蔵に作られる事がわかつたの。  
一度、刹那達が日本の全ての結晶を集めてコアを作つたのは知つ  
てるよね？」

「だけどそれは、神々の黄昏事件で失われた。でもね、最近また日  
本で幾つか発見されたの」

「へえ……」

「結晶つてどうやら上級悪鬼の死骸に反意思が集まって出来るらしいの。その悪鬼が元になって

結晶の悪鬼が作られる。私の結晶の悪鬼は九尾の狐。あれは様々な奇跡が折り重なって

生まれた悪鬼。それが討伐されるとまた元の結晶に戻るんだけどね」

「なるほど、知りませんでしたよ」

「それで結晶の話に戻るんだけど、その発見された結晶が次々奪われてるんだよね」

「また、鬼神でしょうか？」

「それはわからない。大罪の残党って考えもあるけど、私は罪歌達と同じように人間だと思う」

「それが、今皆さんが調べてらっしゃる事なんですか」

「そう。後、私達も組織拡大に向けて色々動き出すからその辺も色々だね」

「時期が来たら僕ら九我山も協力させていただきますよ」

「もう、協力してもらっていると私は思ってるけどね。九我山を始めとした十名家には

多額のお金を出してもらったし。私達は、九我山を仲間だと思ってるよ」

「僕個人としても、力になりたいんですよ」

「それは助かる。神憑の君が入ってくれるなら百人力だよ」

「まだ未熟者ですが、その時はよろしくお願いします」

「こちらこそ、よろしくお願いします。それと、しばらく神璽の事は君達に任せていいかな？」

「私も仕事が一段落着いたら合流するから。今度こそ、深海に沈めてやる」

「あ……ははは。も、勿論です。その代わりと言ってはなんなんですが……」

「何？」

「お姉ちゃんにだけは絶対バレないように、どうかお願いします。バレたら確実に僕らお仕置きですよ！　つか、下手したら病院送りです！」

「任せて。律は時雨さえ居れば何も考えないから、常時時雨をつけておく」

「助かります。じゃあ、逐一連絡取りますので、よろしくお願いします。」

二人は顔を見合わせ、同時に笑った。

第3話・From - Sister (前書き)

そろそろ忙しくなるので。

また週に一回か二回更新になります。

### 第3話：From - Sister

由加との話が終わった後、莉那と由加の強い勧めによって、四条家に一泊していく事になった。

莉那が太郎の事を恐れないか危惧していた令だが、意外にも仲良くなっていたようで

晩御飯が終わった後も、莉那と灼汰と紫と共にボードゲームへと興じていた。

令も誘われたのだが、一つ気になる事があったので、一人庭で携帯をいじっている。

それは 今日都合コンがどうなったかと言う事。午後六時から開始なので、

もう三時間も経っている。知らない面子も多々来るため、憧れの希恵ちゃんがどうなったかを

確かめるために、令は一番仲の良い友人、染谷へと電話をかけた。

「あ、もしもし？ 俺だけどださ……」

「あ、令か。テメエ、いきなりドタキャンしやがってよ。今回は鳴神にバレなかったん

じゃないのかよ？」

「バレては無いんだけどね……ちょっと、家の方でゴタゴタがあったさ」

「あーなるほど。んじゃ、詳しくはきかねえ。んで、合コンだがついさつき解散になったかな。」

俺は元々付き合いで参加しただけだから、何人かとメアド交換しただけで終わったぜ」

「へえ……お持ち帰りとかあったの？」

「あ、希恵ちゃん多分お持ち帰り。新田のダチの黒田って奴がお前の代わりに来てよ！」

「さんざん口説いて、今は新田と黒田と希恵ちゃんと設楽さんの四人でカラオケだってさ」

「一瞬、眩暈がした。新田と黒田を後でどうしてやるうかと、頭の中で考えながら」

「今は短く笑うと、」

「……わかった。悪かったね、いきなり電話して」

「気にすんなよ。希恵ちゃんの事は残念だったな」

「気づいてたんだ……」

「高校時代からの数少ないダチだ。それぐらいはわかるよ」

「あはは。まあ、元々憧れみたいなモノだったし。今度は絶対出るからまた誘ってよ」

「おう。ってーか、お前よお。鳴神と付き合っちまえばいいじゃないか。大学でも」

「いつも一緒に居るしさ。それに、同じ家に住んでるんだろ？」

「いや、それだけはないね。紫ちゃんは、家族みたいなモンだし」

「ん、そうか。んじゃ、ゴタゴタ終わったら連絡くれ。飲みにでも」

行くっぜ」

「うん。ちょっと時間がかかるかもしれないけど。連絡するよ」

そう言って、令は電話を切った。「ふう……」とため息をついて、夜空を見上げる。

ムカつくぐらい綺麗な、満天の星空。隣に希恵ちゃんが居てくれたら……と思うが

現実には、白いコートの男が立っているだけだった。

「空しい、空しいよ………っ！ 莉王兄ちゃん何してるの!？」

「やっと気づいたか」

何時の間にか隣に立っていたのは、白いコートを着込んだ四条家頭首、四条莉王。

子供が出来てから黒く染めた髪を撫で付けながら、莉王はニヤリと笑うと、

「女々しいな。女を取られて一人夜風に吹かれるか」

「遙緋さんにブン殴られて、惚れたマゾの莉王兄ちゃんよりはマシだよ。」

「っというか！ 何で殴られて惚れるの!？ お姉ちゃんもお母さんもお父さんも」

「妙に納得してたしさ。何かあの時、僕だけ家で一人アウエーな気分だったんだよ!」

「男と女なんてそんなモンだ」

「何で遙緋さんが莉王兄ちゃんと結婚したのかわからない……」

「ふむ……確かに、それは俺も思った。本当に、何でだろうなあ……」

「知らないのっ!? 結婚して五年以上経つよね!? ……ああ、もう!」

莉王兄ちゃんと会話していると、いつも僕だけがツッコミ役に回っちゃう」

「相変わらず、無駄にテンション高いな」

「誰の所為だよ!」

「まあいい。そろそろ寒いので中に入ろう。莉那と灼汰にお土産を渡さなくては」

莉王はいそいそと歩き出し、屋敷の中へと向かった。令も納得いかないような顔でそれに続く。

玄關に入ると、暖かい空気が流れホツとした雰囲気になり、二人は靴を脱いで広間へと向かう。

取り留めの無い会話をしながら広間の近くまで来ると、突然広間の襖をぶち破って太郎の体が廊下へと飛び出した。

体が帯電している所から見て、大方紫に殴られたのであろう。そして、襖の奥から現れたのは殴った張本人、鳴神紫。

紫は涙目で太郎の体をゲシゲシと蹴ると、ようやく莉王と令に気づいてようで、

「お、兄ちゃん久しぶりやん」

「相変わらずだな、紫。今度は一体何なんだ？」

「あたしが、折角令との子供作ってな。これから養育費やら色々かかるゆーてるのに、

太郎があたしから根こそぎお金奪ったんよ。あたし、所持金0円やで！

「どうやってこれから働かない夫と子供育てていけばええんかわからなくなつて、つい……」

「令、貴様……紫を孕ましておいて、働かないだと……？」

「僕の名誉の為に言っとくけど。紫ちゃんが言ってるのはボードゲームの話ね。

「なぜか、僕が旦那さん設定になつてるけど、実際はありえないから」

「うわー。令、マジでつまらんわそのリアクション。やっぱ関東人はだめやね」

「駄目で結構」

そんな言い合いが続いていると、奥の広間から莉那と灼汰が不思議そうな顔をして出てきた。

そして、父親の姿を見つけ、顔を輝かせると嬉しそうに二人は抱きつく。

莉王も莉王でそれが嬉しいようで、少し令達の手前、恥ずかしそうに顔を赤らめると、

「ママが居ないのに、一緒に居てやれなくてすまなかったな」

「別にいいよー。由加おねえちゃんが居てくれたし、令くんたちもきてくれたからね」

「それよりもパパ！ お土産はあるのー？」

「うむ、あるぞ。お前達の為に特注で作らせたチョコレートケーキだ。由加に切って貰いなさい」

「わーい」

「あーくん。危ないから、おねーちゃんと一緒に持ってこ」

「うん」

莉王からケーキの入った箱を受け取ると、莉那と灼汰は仲良さげにケーキの箱を持って台所へと向かった。

それを見届けると、莉王は令と紫に改めて向き直り、

「よし。これからどちらか酒に付き合え。由加も交えて久しぶりに飲むぞ」

「んじゃ、僕付き合いますよ。莉王兄ちゃんにいくつか話すこともあるしね。」

というわけで、紫ちゃん。明日の運転よろしく。後、太郎君を布団に運んであげて」

「へーい。あたしはりー達からケーキ分けてもらったら、もう寝るわ」

「じゃあ、また明日」

「うん。おやすみー」

紫は太郎の足を持つと、そのまま引きずりながらキッチンの方へと向かう。令はそれを

ヤレヤレと言った顔で見送ると、莉王と一緒に部屋へと向かった。

翌日の昼頃、莉王と由加と共に明け方近くまで飲んでいたら、令はフラフラになりながら、身支度を整えていた。

朝まで一緒だったにも関わらず、しかも自分よりかなり多く飲んだ筈の由加と莉王は、ケロツとした顔で立っていた。

大学の友人の中でも一、二を争うほどの酒豪である令だが、上には上がいる事を悟った。

そして、全ての荷物を積み終えると、

「それでは、お世話になりました」

「うむ。困った時は、いつでも来い。四条はお前達を永遠に歓迎する。」

それで、これからお前たちはどこへ行くのだ？」

「とりあえずー。反応が下の方なんで……近さで言うなら浅葱方面やね」

「……何の事かさっぱりだが、まあ頑張るがいい」

「わーってるよ。兄ちゃん。由加さん、また報告入れますわー」

「うん。止めは私ね」

「わかつとりますよ」

（ああ、今度こそ神璽さん殺されちゃうかもな……）

由加と紫の会話を聞きながら、一人冷や汗をかく令。特に、紫が本気を出す事になれば、自分にも被害が来る。

ただ、全力で攻撃しなかったとはいえ、相手はあの榛名神璽だ。死線を潜り抜けた数が違う。

もしかしたら、本当に紫の本気を見る事があるかもしれないのも事実。

（とりあえず……一回捕まえないとな）

会話も終わったようなので、令は助手席へと乗り込み紫も続いて運転席に乗り込んだ。

太郎は昨日の気絶が長続きし、まだグッタリとした感じで後部座席に収まっていた。

莉王と由加に手を振って挨拶をすると、紫は車を発進させる。

姉の影響を受けている所為か、紫もかなりの車好き。ガンガンとスピードを上げて、

四条家から出て行くと、後は感覚に任せてその方向へと進む。

「紫ちゃん。次はどの辺り？」

「ん〜……近さで言えば、浅葱家がある辺りや。何で、あないなとこ向かってるんやろ?」

「わからないよ。それにしても、神璽さん。ユニオン関係の場所ばかり回ってるなあ」

「……ユニオンって何や?」

「ゆ、紫ちゃん……九我山関係なのにユニオン知らないの?」

「千島の蒼二さんが作った草野球チームだけ?」

「違うよ! 鬼神、純血、混血を区別しない世界を目指す組織の事だよ。まだ、完全には発足してないけど。」

「実際動き出すとなると、十名家の十文字派と渡り合えるぐらいの戦力を持つてるんだよ」

「ふうん……そら、どえらい組織やねえ」

そう言うと、紫の目が細められた。これは、もうその話は聞きたくないという紫のサインのようなもの。

長い付き合いだからわかる。紫が今、何を考え、何故この話を聞きたくないのかが。

だが、それは口にだす必要が無いので、令は軽くシートを倒して横になった。

しばらく無言が続き、スピーカーからラジオが流れる音だけが車内に響く。

三時間ほど経っただろうか、令が眠気にまどろんでいると、令の携帯がメモディーを奏でた。

「誰だ？」と眠そうにディスプレイを見つめると、そこに表示されていたのは「お姉ちゃん」の文字。

一瞬で眠気が覚めた。震える手を抑えながら、電話を取ると、

「も、もしもし？」

「ああ、令か。私だ、久しぶりだね。紫と太郎とは上手くやってるかい？」

「うん。ぼちぼちね。お姉ちゃんの方も変わりは無い？」

「ああ。北斗も南斗も洒落にならないくらい元気だし、時雨はカッコいいし」

「相変わらず、義兄さん大好きなんだね」

「心から愛してるよ。さて、ここからは真面目な話だ。」

お前達が九我山から出てるのは莉王からさっき聞いたよ。今は浅葱に向かっているそうだね？」

「うん。そうだけど……何か浅葱に用事でもあるの？」

とりあえず、コアの事がバレていない事に安堵の息をつく。紫もさっきからビクビクしながら

こっちを見ているため、サインで大丈夫と示すと、再び会話に集中。そして、律が言ったのは、

「浅葱が他勢力から襲撃を受けている。至急、浅葱本邸へと向かってくれ」

「ええ！？ それ、本当？」

「ああ、さつき梨香から救援要請が届いた。”あの二人”が向かったから心配ないと思うが、

一応の保険として、お前達も手伝いをしてやってほしい」

「ん。わかった。じゃあ、全力で向かうから一旦電話切るね。報告はそれだけでしょ？」

「ああ、無事を祈っているよ」

今は電話を切ると、紫に目配せを送る。会話の内容は聞こえていたのだろう。紫も表情を引き締めて、

車の速度を上げ、突然窓を開けると上空をにらみ始めた。

「……………どうしたの？」

「何か、キナ臭い話になりそーやね。令、上ちよつと見ててみい」

紫がそう言うと、上空のとある一転に紫が放ったであろう、雷が迸った。すると、景色が歪み、

一瞬だけ見えたのは、空を飛ぶ白い船。それには見覚えがあった。

同じ十名家に所属する、傀儡の一族一之瀬家の長女、一之瀬凜の

式神【空船】

「あの一之瀬が居るなんてね……………どうやら、もう一悶着ありそうだね」

第4話：Brother - Strike（前書き）

私生活が忙しくて、作業が進んでませんorz

## 第4話：Brother - Strike

夕方の小学校。下校を知らせるチャイムが鳴り響き、ランドセルを背負った小学生達が下校している。

そんな中一人の少年が友達に手を振って小学生とは思えない速さで校庭を疾走していた。

陸上クラブの生徒達がポカンとした顔で見ているのを尻目に、少年は大きく跳躍すると、

そのまま学校の塀を飛び越えて外へ。少年は大した感慨も無く地面に着地すると、そのまま走り出す。

足には子供用の重り。そんな重さを感じさせない走り、少年は商店街を駆けぬけていく。

少年の外見は至って普通。ただ一つ違うのはその目が緋色に染まっている事だった。

「おい」

突然声がして誰かが前に出た。少年は体重移動を駆使して、それを避けるが首を掴まれて

持ちあげられてしまう。手足をバタバタ動かすが、振りほどけない。

少年は緋眼を解くと、自分を持ち上げている人の顔を見て、笑った。

「お父さん!」

「よお、光希。お父さんにシカトぶっこいて帰るつもりだったのか?」

「違うよ。今日は、お兄ちゃんとお姉ちゃんが帰ってくるから急いでたの」

「まあ、んな事だと思っただわ」

「お父さんはまたパチンコ？ それとも本屋さんでエッチな本を買ってきたの？」

少年 千島光希は父である千島蒼威に問う。蒼威はそんな息子の全てを見透かしたような質問に  
やや慌てたのを隠しつつ、光希の体を地面に戻してやると、

「光希、男にはな。色々あるんだ」

「だからお母さんを怒らせてもいいの？」

「……いや、お母さんを怒らせるのが日課なんじゃないぞ。怒ったお母さんが可愛いから  
たまーにこつしてわざと怒らせるきっかけを作っただな。楽しく毎日を過ごすんだ」

「ふーん。お母さんを怒らせるのはわざとやってるんだー」

「ちょおお！ 変な所だけ脚色して理解しないで！」

「僕、子供だからわかんない」

「み、光希さん……？ 今川焼きでも買って帰るか？ お父さん奢っちゃうぞ」

「クリーム味ね」

「OK。任せなベイビー」

今川焼きを二人で食べながら家に帰ると、母親の千島遥が二人を出迎えた。

光希には微笑みの笑顔で、蒼威にはやや怒りの笑顔で。光希がランドセルを置いて手洗いうがいを

した後、リビングのソファールに行くと蒼威と遥はにこやかな笑顔で対面で座っている。

「光希、お父さん何買ったと思う?」

「またエツチな本?」

「ま、またってなんだよオイ!」

「今度はねー。またちよつとエツチなネットゲームの雑誌。お母さん、前に怒ったのにな」

「お父さんが言ってたよ。わざとお母さん怒らせて楽しんでるんだって」

「へえ〜……」

「み、光希! 今川焼き奢ってやったじゃないか。それに、それはそういう意味じゃないんだって!」

「ふ〜ん。食べ物で口止めまでしようとしたんだ」

「あ……あ、ああ………OK。遙ちゃん、話をしよう」

「問答無用」

四十を超えた今でもギャアギャアと騒ぎを続ける蒼威と遙を尻目に光希はノートを開くと

宿題を始めた。集中力があるのだろう、蒼威の悲鳴が響き渡っても気にせずに宿題をやっている。

そして数十分が過ぎ、再び光希が顔を上げると、ソファーに逆さになったボロボロの父の姿。

「お父さん……何やってるの?」

「裏切り者め……」

「お姉ちゃんが言ってたよ。お父さんがそう言うときは自業自得なんだって」

「遥緋のヤツ……」

「よし、宿題終わりーっ」と

ランドセルへとノートをしまうと、光希は鼻歌を歌いながらテレビを見始めた。

蒼威はしばらく黙っていたが、やがて冷蔵庫からビールを取り出し、それを飲みながら

しばらく光希と共にテレビを見る。すると、玄関の開く音がして、スーツを着た人物がリビングへと入ってきた。

「あ、お兄ちゃん！ お帰りー!」

光希は顔を輝かせ、兄である千島蒼二へと抱きついた。蒼二は持っていたスニーカーを置くと、  
しゃがみ込んで光希と視線を合わせ、

「久しぶりだな、光希。元気してたか？」

「うん！ お兄ちゃんに言われた通り毎日特訓もしてるよ」

「おお、偉いぞ光希。後でにーちゃんがお小遣いやるからな」

「ありがとう」

そう言うと蒼二は光希の横をすり抜けて、いつの間にかリビングへ来ていた遙と、

ビールを相変わらずの表情である蒼威へと、少し疲れた笑顔を向けた。

「ただいま」

「お帰りなさい」

「おい、蒼二。命と蒼華と煉次はどうしたんだ？」

「実はよ。一緒に来る予定だったんだが、二人とも熱出しちまっただわ。」

蒼華は絶対じーちゃんに会いに行くと言って聞かなかったんだが、流石に煉次が

酷くてな。結局、命と一緒に留守番してるって納得してくれたよ」

「そうか……残念だ」

「遥緋まだ着てねえの？ あいつが莉那か灼汰連れて来るだろ」

「莉那はお友達の誕生会があるから来れないみたいよ。あーくんも連れてくらしいし」

「あの姉弟はホント、仲良いよな……」

「その辺りは莉王君が徹底させてるみたい。ほら、あの子もお兄ちゃんと色々あつたから」

「なるほどねえ……」

「とりあえず、そろそろ遥緋も来るだろうから夕食の準備しちゃうわね。光希も手伝ってくれる？」

「うん。わかったよー」

そう言つと遥は光希を連れてキッチンへと行ってしまった。後に残った蒼二はネクタイを

緩めてリラックスした体勢でソファーに倒れこむように座る。

しばらく黙っていた蒼威と蒼二だが、やがて少し真面目な口調で蒼威が話を切り出した。

「仕事の方はどうよ？」

「まずまずだ。皆に支えられてもらつて何とかなっている感じかな。やっぱ、力だけじゃ

誰もついてこねえわ。やっぱ、人徳あつてこそその組織の長だつて

事を実感した。

後は時雨とか、八神と浅葱が結構サポートしてくれてるから、運営に支障は出てない」

「そか。俺の力が必要だったら何時でも言えや。まだまだ現役でいけるぜ」

「その時は、お願いするよ。とりあえず、学校の件は少し真面目に考えてみてくれ。」

親父に憧れてるってヤツもウチの組織には結構多くてな。陸人さんとかも結構名前が挙がるよ」

「うはは。何せ、俺様は日本最強だったからよお」

「過去の話だけどな。やっぱり、時代つてのはよく動くよ。小さいガキでも恐ろしい式神

とか持つてるヤツをかなり見てきた。九我山の令なんて、下手すりゃ俺並みだぜ。」

後は……最近台頭して来た賞金稼ぎの連中も結構強いヤツ居たわ」

「ウチの光希も何時か恐ろしい式神使いになるのかねえ……」

「アイツの式神つて……確か未だに名前ついてないんだよな？」

「ああ、一応具象系らしく、変な玉の付いたグローブなんだけどよ。陸人の爆轟見たいに爆破できるわけでも無く、何かの属性攻撃があるわけでもない。」

幾つか試してみたんだけど、少し防御力の高いグローブってな感じかな」

「……へえ。でも、それでもいいんじゃないか。別に光希に千島を強制させるわけでも、

俺達の世界へ無理矢理入れる気も無いんだろ？　つか、入れる気だったら軽蔑するわ」

「当たり前だっつーの。とりあえず、元気良く育ってくれりゃ俺としちゃ満足だ」

「へえ……」

と、二人が昔とは違う大人の会話をしていると玄関の戸が開く音がして、

続いて「ただいまー」という声。しばらく待っていると、勢い良く扉が開き、

キャリアケースを転がしながら蒼二の双子の妹　千島遥緋が部屋へと入ってきた。

「たっただいまー！　お兄ちゃん、お父さん、元気だった？」

「……こいつ、酔ってやがる。久しぶりだな、旦那とは上手くやってんのかよ」

「ん〜……相変わらず変な人だからねえ。ま、楽しくやってるよ。とりあえず、お兄ちゃん。これ、報告書ね。これで、私の仕事は終わりだから休暇だあ！」

「……代わりに俺の仕事が一つ増えたけどな」

「気にしない。気にしない。さて、光つちゃんは何処かなー？」

遥緋は光希を探して奥のリビングへと行ってしまった。相変わらず、バラバラだが繋がっている家族。

それに安堵すると蒼二は、長旅の疲れを癒すように少し眠りへと入っていった。

「お兄ちゃん。お兄ちゃん」

「違うわよ、光っちゃん。おにーちゃん。おにーちゃんだよ」

「わかった。ヴおにーちゃん！ ヴおにーちゃん！」

「そうそう。良くできましたー」

「えへへー」

そんな声が聞こえて、千島蒼二は目を覚ました。見えたのは見慣れないが数年前まで、

自分が住んでいた部屋。そして、私服に着替えた妹と年の離れた弟の姿。

蒼二は「うーん……」と唸ると、すぐそばに置いてあった目覚まし時計を見る。

五時十七分。まだ早朝だ。何故この二人はこんなに元気なの

だろうと思っ。

「……何か用事か？」

「朝のランニング行こうよ！ 久しぶりに競争しよ」

「そうだよ、お兄ちゃん。朝からダラダラしてるとお父さんみたいになっちゃうよ」

「それだけは、嫌だ」

蒼二は目を擦って立ち上がると、服を着替えて三人で玄関へと降りていった。

家を出ると外はまだ冬場な為、やや暗いし寒い。蒼二は着込んだジャージを動かしながら

軽く走り出すが、前の二人は違う。最初から全速力　しかも緋眼を発動させての。

物凄いで駆けていく遥緋と光希に追いつくために蒼二も仕方なく発動。

朝っぱらから全速力とは体に悪いなあ……と思いつつもすぐに体が温まったので、

とりあえずの寒気は解消された。そして、二人に追いつくと今度は速度を緩めて、何やら会話をしていた。

「……らんらんらんらん。時雨お兄ちゃん」

「らんらんらんらん。実はマゾ。ちゃんちゃん。梨香ちゃん」

「らんらんらんらん。男日照りー。ちゃんちゃん。由加姉ちゃん」

「らんらんらんらん。ツンテレ。ちゃんちゃん。陸人さん」

(なんだこいつら……)

遥緋と光希は妙に仲が良い。今もこうして、二人しか意味がわからないようなゲームをよくしている。

今ではこうして懐いてくれているが、物心付いてない時の光希は兎に角蒼二が嫌いだった。

近づけば、泣き。話しかければ、逃げ。酷い時は、部屋に入ってきただけで泣く始末。

だが、今ではこうして懐いてくれている。それだけは、嬉しい。遥緋ほどではないが。

「おにーちゃんも一緒にやろうよー」

「遠慮する」

「光っちゃん。あの人根暗だからこういうの苦手なのよ」

「根暗ってなあに？」

「ジメジメとした。男の中でも最低ランクの男の事よ。光っちゃんはそのならないようにね」

「うん！」

「遥緋デメエ……後で覚えとけよ」

「うつ……い、嫌だなあ。冗談に決まってるじゃん」

そんな話をしながら、三人は人気の無い山の中へと辿り着いた。都会の喧騒から離れた

静かな場所だが、段々と開発が進み自然が少なくなってきた。数年前はもつと緑があったのになあ、といった思いに駆られつつも蒼二は口を開き、

「よし、光希。お前の式神見せてみる。にーちゃんがちょっと相手してやる」

「えー。僕の式神。あんま強くないしなあ」

「まあ、とりあえず出すだけ」

説得に折れたのか、光希はため息をつくと渋々式神を顕現させた。それは、黒いグローブ。

甲の部分には無色の玉がついており、後は手をすっぽり覆っている以外変哲が無い。

何かを念じても炎が出るわけでもなく、触っても何ら変化がおきない。

「光希、何か頭の中に情報とか入ってこないか？ 声が聞こえたりとか」

「無いよー。最初、出した時にね。頭の中に何個か難しい漢字が出ただけだよ」

「それ、どんな形かかけるか？」

「僕子供だもんーわかるわけないじゃん」

「そうか……」

「それよりもさ、お兄ちゃんの久しぶりに見せてよ。あのカッコいい氷の剣」

「……まあ、少しなら」

そう言うつと蒼二は修羅雪を召還し、神威状態へと持っていく。黒かったチエーンソーは、

白鞘の日本刀へと成り、周囲に浮か白の紋様が、それに触れて裝飾付けていく。

名は修羅紅雪。九年前とは違い、もうほぼ完全に制御できていると言って良い状態。

「ちよつと、実戦やってみるか？ 峰打ちにしてやるから」

「じゃあ、僕緋眼使うけど、お兄ちゃんは無しでね」

「仕方ねえな。んじゃ、それでやろうぜ。遥緋、ちよつと見張り頼む」

「はいはい」

遥緋は少し離れた場所へと駆けて行き、周囲の状況をチエック。早朝な為か、人は居ない。

遠くから手で合図を受け取ると、光希が一瞬で緋眼を発動させて、蒼二へと走った。

九歳児と言っても、光希は蒼威を始め、様々な熟練者から訓練を受けている為、基礎はできていた。

更に、身長も低いので体を落として走られると、蒼二のような長身からは見難くなる。

「へえ、やるじゃん」

修羅紅雪を一振り、光希はそれを簡単に避けると背後に回り、拳を打ち付ける。

蒼二はそれを足ではじき、光希を下がらせると更に一振り。今度もそれを避けた。

だが、刃が刺さった部分から地面が凍りつき、一気に足場が滑りやすくなる。

「うわっ」

派手に光希が転倒し、蒼二はゆっくりと光希目掛けて修羅紅雪の刃を振り下ろした。

右腕を地面につけていた光希は、とっさに左腕を突き出してつけていたグローブでガード。

その瞬間、光希の頭の中に幾つかの漢字が見えた。だが、読めない。そして

「嘘だろ……」

蒼二の手から修羅紅雪が消えていた。



第5話・Commence - Hostilities (前書き)

土日ぐらいしか執筆時間がありませんorz  
細々とやっていきます。

## 第5話：Commence - Hostilities

修羅紅雪が消えた。だが、再び式神を顕現させると、何時も通りのように出てくる。

二、三回振って感触を確かめてみるも、いつもと変わらない。

蒼二も驚いているが、それ以上に光希の方が驚いているようで、言葉も無く座っている。

そして蒼二は、しばらくの黙考の後、

「光希、今何か感じたか？」

「また漢字が見えたよ！ 凄い、何か頭にビリビリが走ったみたい」

「どんな漢字かわかるか？」

「んとねー。殆ど読めなかったけど、雪と修行の修があったよー」

(俺の式神の名前……？ いや、だが名前なんて正式なものじゃない。ただ、思いつきで)

しばらく考えてみるが、全くわからない。光希自身がよくわかっていないのだ。

キーワードは漢字。年と共に漢字を知っていくので、今無理をして探す必要は無いだろう。

それに、光希はまだ小学生だ。まず戦いに巻き込まれるなんて事は無いはず。

「仕方ねえか。とりあえず、今日はこのぐらいにしておこうぜ」

「僕、お腹すいちゃったよー」

そう良いながら、蒼二と光希は遥緋のところまで歩き、帰路へとついた。

家について、家族全員で朝食をとる事になった。蒼威は朝ビールをついに禁止とされ、

チビチビと牛乳を飲んでいる。光希にとっては、当たり前前の光景だが、

蒼二と遥緋がこの家に居た時には、当たり前のように朝からビールを飲んでいた為、

二人は少し驚きを隠せなかった。

「お兄ちゃんとお姉ちゃんは、今日お仕事？」

「俺は、どっかのアホが提出した報告書を読んで提出しなきゃいけないからなあ……。」

何人かと連絡取らなきゃいけないし。一日、家に缶詰だわ」

「私は高校の時の友達と遊びに行くよー」

「……ぶっ殺してえ」

「ふうーん」

「悪いな、光希。もっと遊んでやりてえんだが、馬鹿な妹の所為で

「よ」

「ごめんね、光っちゃん。お土産いっぱい買ってくるから！」

二人はすまなそうに光希へと謝るが、当の光希はキョトンとした顔をして、

「僕、梨香姉ちゃんとお買い物行くからいいよ。お兄ちゃんとお姉ちゃんも来るかなーと」

思つて誘つてみたけど、用事があるならいいよねー」

「ほお、梨香とねえ……」

「テストで100点取つたらね！ ご褒美にゲーム買つてくれるつて約束してたの」

「成る程な。……梨香が年下に走つたのかと思つたぜ……」

「梨香ちゃん。あれ以来、彼氏できてないもんね」

光希は二人がどんな話をしてるのが、微妙にわからなくなつてきた為、一旦席を立って自室へ。

適当に着替えて、部屋で漫画を読んで時間を潰していると、豪快な車の音が聞こえた。

聞き間違えるわけが無い。アレは梨香の車のエンジン音だと判断すると、光希は下へと降りる。

降りた頃には、梨香はもう家の中に入っていたようで慌ててリビングへと向かうと、

ラフなジーンズにジャケットを羽織つた梨香の姿。それを見て、光希は顔を輝かせ、

「梨香姉ちゃん！」

「あ、光希ちゃんだ。100点おめでとぉ〜」

「へへっ。僕、頑張ったんだよ」

「偉い偉い。約束どおり、例のゲーム買ってあげるからね」

「わーい」

そう言うと梨香は光希から離れ、蒼二達へと向き直り幾つか耳打ちをした。

仕事の話なのだろう。自分は邪魔をしてはいけない。わかってはいるが、少し寂しい。

「計画は順調ですね。後は資金繰りをちゃんとすれば、おおよそ二年で施設は完成します。

その間、何をするかはまた会議で議題になるでしょうから、今は保留にしておきますけど、

やはり、幾つかの組織からは良く思われていないようで、その辺りの鎮圧が

当面の課題だと浅葱の内部では言われていますね。その辺りも考えておいてください」

「わかった。色々とすまねえな」

「いえいえ。私は、蒼二さんの理念が良いと思ったからついてきてるだけです。

浅葱で意見を聞いてみると、やっぱり純血だからですかねえ……

共存つてのは少し考え辛いらしいんですけども、賛成派と反対派は半々ぐらいです」

「確かに純血では考えにくいかな。逆に言えば、俺の理念は混血の傲慢と取られて

しまうかもしれない。でも、分かり合えると思うんだ。九我山を見ってみろ。

悪鬼と一緒に飯を食い。悪鬼と共に戦う。あれも、俺達の理想の姿の一つなんじゃないかと思う」

「その問題の一番のポイントは個人の意思を持っているのが、上級だけって事だよな」

「そうなんです。上級は希少価値が高く、基本的に表に出てくることが少ないんですよ。

下級、中級の悪鬼についての理念をどうにかしないと、論破されてしまいますからね」

「その辺りは色々話し合って、一応答えのような物は出てる。まあ、これは今度の定例会議でな」

「わかりました。……じゃあ、光希ちゃんちょっと借りてきますね。晩御飯も何処か

美味しい所連れてってあげたいんですけど、遥さん良いですか？」

「うん、何か悪いわねえ。ゲーム買ってもらったり、ご飯奢って貰ったり」

「いえいえ。遥さんや蒼二さんには私も色々食べさせてもらいましたから」

「梨香ちゃん……何で私が入ってないの？」

「う……ハ、ハル姉ちゃんのも美味しかったあ……ような気が」

無言の重圧をかけてくる遥緋に梨香は後ずさりながら後退してしまふ。そう、遥緋の料理

は激甘料理。変人と言われた夫の四条莉王も流石にギブアップしたという伝説も残っている程。

だが、家庭を持ってからは大分マシになったようで、激甘料理は自分専用となっていた。

「じゃ、じゃあ行つてきまーす」

半ば梨香に強奪されるようにして、光希は抱えられるとそのまま車に逃げ込んだ。

玄関ではいつも優しい姉の笑顔。だが、何故か今は弟の光希でさえ、恐怖を感じる。

だが、遥緋は光希の視線に気づくと急に表情を緩め、手を振ってきた。

光希も笑顔で手を振り返すと、その隙を狙ったとばかりに梨香が車を発進させる。

「ふう……怖かったあ」

「何で？ お姉ちゃんは優しいよ？」

「光希ちゃんは物凄く可愛がられてるからねえ。私も結構可愛がられてたんだよ。」

でも、ハル姉ちゃんは怒ると怖い。普段怒らない人だから、本当

に怖いんだよ」

「ふうん。スカートめくったりしたら怒るのかな？」

「うーん。一番効果覲面なのは貧乳だね。おっぱいちっちゃーいって言っの」

「そういえば、一回言ったらゲンコツくらった」

「あはは、でしょ？ だから、言っちゃ駄目だよ」

そんな話をしながら、梨香の運転によって一軒のゲーム屋へと辿り着く。だが、発売日だというのに全て売り切れ。

仕方が無いので、更に一軒。売り切れ。更に一軒。売り切れが五件ほど続き、昼の休憩を挟んでついに梨香の町まで来てしまった。そして、梨香お勧めの穴場の店に行くについにそのゲームは売っていた。会計を済ますと

冬なのでそろそろ日が落ちてきた。車に再び戻ろうとすると梨香の携帯に着信が入る。

しばらく会話しているのを光希はゲームのパッケージを見ながら待っていたが、やがて電話が終わったようで、

「ねえ、光希ちゃん。今日の晩御飯、私家で良い？ お父さんとお母さんが

光希ちゃんと会いたってうるさくてさー」

「いいよ。僕、詩歌おばちゃんの料理大好きだし」

「じゃ、決まりね」

梨香は車を走らせて、進路を自分の家へと取る。何気に都会ではあるが、自分の家は山の方にあるため、どんどん森のほうへと向かい、山を切り開いて作られた

高級住宅街へ。その住宅街の中でも一番離れた場所にある巨大な家が浅葱家。

といつても浅葱の本家はここに無く、二年前に浅葱の長老が亡くなつた為、

前の遠い屋敷を取り壊して、現在は蒼二達の家の際にあるビルが浅葱の本家となっていた。

車を止めて、梨香に促されるようにして家の中に入ると、

「光希いいイイツ！」

広い廊下の隅から一目散に駆け出してくる男 浅葱陸人。光希も久しぶりの再会に

笑顔で「陸人おじちゃん」と言っ駆け出すも、自分の隣を何が物凄い勢いで駆け抜けた。

それは、風の塊。塊は陸人のボディに命中するとその体を勢い良く壁に叩きつけた。

「全くもう。光希ちゃんが怪我したらどうするの」

「うっ……流石、俺の娘」

「陸人おじちゃん。大丈夫？」

「ああ、おじちゃんは最強だからな！ どんな攻撃も効かねえんだわ！」

「じゃあ、今度うちのお母さんと勝負だね」

「遙ちゃんには勝てねえよ。少しでも傷つけて見る。化け物が約三匹、俺を殺しにきやがる」

「お父さんとー。誠おじちゃんとー。徹おじちゃんだね」

「蒼威程度なら一撃なんだがなあ。残りの二匹はやばいんだわ」

「うん！ 僕も一回トイレにおじさん達閉じ込めたらねー。二時間ぐらいおっかけられちゃったよ」

「そ、それは、ある意味尊敬するぜ……」

そんな話をしながら、浅葱家のリビングへと向かう。テーブルには詩歌が作ったであろう

様々な料理。大半が光希の好きなもので占められており、光希は舌なめずりをして、台所へと向かった。

「詩歌おばちゃん。こんばんは」

「こんばんは、光希君。今日はいっぱい食べてっね」

「うん。詩歌おばちゃんのご飯。お母さんのと同じくらい美味しいもん」

「……遥の昔を知ってる私としては微妙な気分だけど、ありがとう。さ、食べましょつ」

そう言い、光希を促して席に着こうとした時だった。不意に光希

は式神の気配と、

よくわからない寒気のようなモノを感じる。その瞬間、突然詩歌が慌てた様に動き出し、

手先から幾つもの黒い線を出して、テーブルの奥。窓の付近で五角形を形作る。

直後。物凄い振動と轟音。綺麗だったリビングの調度品類が吹き飛ばされるが、

不思議と詩歌達の居るキッチン付近は隔離されたように何の変化もない。

「お母さん。光希ちゃん守ってね。すぐに応援が来ると思うから」

「うん。断絶解除するから、一瞬で出てね」

「おうよ。しかし、どこの馬鹿だよ……こりゃあ、ミンチにしてやらなきゃ気がすまねえな」

「ミンチどころじゃ済まさないわ」

陸人と梨香は先程までとは別人のような顔で冷たく笑い、詩歌が断った空間から足を踏み出す。

陸人の腕には赤い手甲。梨香の手には青い弓。それらを構え、一目散に飛び出していった。

呆然とする光希。何が起きたのかわからない。だが、まだ子供でも時雨や色々な人から

教育を受けてきた為、泣かない。そんな光希を詩歌は抱きしめると、

「大丈夫だから。すぐに静かになるからね」

「うん。僕、待ってる」

外に出た陸人と梨香。梨香は屋根の上に行くと、携帯を操作しながら敵を探す。

居た。黒服を纏った二十人程の人間。身のこなしが普通と違う。

隠密専用に訓練されたプロだと理解した梨香は、周囲に風の弓を六つ顕現させ、

「お父さん、見えたね？ 行くよ」

「任せな 行っつっつくぜえエエツ！」

拳を振りかぶる すると、黒服の集団の傍に、猛烈な爆発。だが、遠いので直撃はしていない。

梨香にはそれで十分だった。手に風を集めて弦を絞り、六つの風の弓にも同じく意識を集中させて、

一気に爆発止まぬ場所へと撃ち込んだ。何百にも匹敵する風の矢が敵を射抜かんと迫る。

そして直撃。短い悲鳴が幾つか響き渡るが、数が少なすぎる。

その頃には陸人は走って、黒服達に接近しており、余裕の表情で赤い手甲 爆轟を構え、

「テメエら……何処のモンだ？」

と問うも。当たり前の如く黒服達は何も答えない。黙って陸人ま

で音も無く走るとナイフを振るう。

陸人はそんなナイフを軽く避けると、カウンター気味に顔面に一発。

小爆発が起き、グチャグチャになった顔を抑えながら呻く黒服。

更に陸人は、隣に居た黒服に

上から叩きつける様な一撃。轟音を立ててコンクリートへと黒服の一人が叩きつけられる。

そこで初めて、黒服達は化け物と対峙している事を理解した。

所詮純血。だが、目の前に居る化け物は混血の自分達を簡単に静めている。恐怖が、生まれた。

「おいおい。だんまりかよ。んじゃ、終わらずぜ」

地面に両方の爆轟を叩きつけ、アスファルトを爆砕。それは、細かい弾丸となり一気に黒服達に降り注いだ。

圧倒的な威力。成す術もなく黒服達は弾丸に体を蹂躪されて、意識を失った。

だが、陸人の顔は浮かない。少し、苦々しげな顔でしゃがみ込むと、

「あー……ヤベエ。また、地区長さんから怒られちまうよ。後で、遙緋にでも直して貰うか」

そう呟き、今度は黒服達へ。胸倉を掴みあげて何か身分のわかるものは無いかと探していると、

服に変わった家紋がついている事に気づく。そして

「あらら。やっぱりバレちゃったですよ」

振り向くと、ニット帽をかぶった女が曖昧な笑顔で立っている。

その手には、鞘に収められた日本刀。

陸人はゆっくりと立ち上がって笑顔を返し、

「こんな事してどうなるかわかってんのかよ？ 狂乱の一族、三枝さんよオ」

「全て、覚悟の上です。私、三枝家次女　三枝万里は貴方達の敵です」

「俺らと戦うってこたあ……八神や他の十名家を敵に回すって事でもいいんだよな？」

「ええ。構いませんよ」

その瞬間、陸人は拳を振って足元を爆破させると、その勢いを使つて後退した。

そのすぐ後に、銀色の閃光がさっきまで陸人の顔があつた場所を通過。

流石に冷や汗が伝う。この女は只者ではない、思考を完全にそう切り替えると、

「え……？」

一目散に陸人は後ろを向いて逃走をはじめた。流石の万里もこれには啞然としたようで、

慌てて走り出し、陸人を追いかけるも　早い。三枝家の狂乱の力は、身体能力の強化。

これはまだ、軽くだが。更なる強化もでき、その代償として理性がなくなってしまう。

それが狂乱と呼ばれる所以。だが、眼前の男はその狂乱を持って

しても、差が一向に縮まらない。

「ま、待つですっ！ お前、本当にあの有名な浅葱陸人ですか!？」

「うるせー！ お前の相手はすぐに用意してやっから、待ってやがれ！」

「……………」

何を言っているかがわからない。すると、万里と陸人の間の空間に突如何処かで見えた事があるコンセプトが出現。

効果までは思い出せないの、一旦立ち止まると慎重に動きを伺う。

その中から、出てきたのは自分と同年代であろう黒髪短髪の男。

そして男は、一息つき、

「牧島郁人、ただいま参上って感じかな？」

万里を正面から見据えて、獰猛に笑った。

第6話：Local - Conflict (前書き)

遊ぶのが忙しかったり、ガツコが忙しかったりと  
書く時間が日に日に減ってますorz

## 第6話：Local - Conflict

「牧島郁人、ただいま参上って感じかな？」

牧島郁人。万里にはその名前に聞き覚えがあった。純血の牧島の長男だが、式神が弱かった為追放。

そして、神々の黄昏事件の際に七海遠音から魔具フラガラッハを受け取り、ラグナロクの大幹部ガルムに勝利。

それからは千島蒼二の右腕として、あらゆる戦いで名を上げてきた危険人物。

手に持っている剣は自分が見た時とは形は違うが、フラガラッハなのだろう。これは、絶対に油断できない。

(アレを置いてきたのはミスでしたね……)

自分が今持っている刀は一級品の業物だが、フラガラッハには遠く及ばないだろう。

剣術のほうは自分の方が上にしても、危うい。勝率はやや自分が不利と万里は見た。

そんな万里の焦りを知ってか知らずか、郁人は、

「どうです陸人さん。今のスゲーカッコいいタイミングじゃなかったツスカ？」

「テメエ……こっそり見てやがったな？」

「いや。陸人さんなら大丈夫かなーって思ってたんですよ。だけど、いきなり逃げ出すからねえ」

「うるせえ。さっさとソイツをやっちまってくれ。俺は、光希が気になってしょうがねえ」

「あ、光希君来てるんですか。わかりました、ここは俺に任せて行ってください」

「おう。適当にあしらっとけや」

ナめられたものだ。本気を出せば、こんな二人簡単ではないだろうが、殺せるのに。

だが、今は本気を出せない。どうこの場を切り抜けようかと考えていると、

郁人はフラガラツハを鞘から抜き、一気に万里へと距離をつめた。咄嗟に万里も刀を抜いて応戦。

郁人の上段からの一撃。刀で受け止めるも、それだけで丈夫なはずの刀にヒビが入った。

長期戦は良くない。そう判断すると、狂乱の力を少し強めに発動させて、万里は高速で移動を始めた。

郁人の唯一の弱点は、純血である事。すなわち、肉体は普通の間と変わらない。

フラガラツハには身体強化の力はない筈。遠音の事を知っている戒がそんな無駄な機能をつけるとは思わない。

絶えず動き回り、郁人の目が追いついていない事を悟ったその時、万里は斬撃を郁人に向かって放った。だが

「甘いよ」

万里の斬撃がフラガラツハによって受け止められた。そして、万里は気づく。

郁人の体にうっすらとコンセプトの紋様が光り輝いている。予想

するに、身体強化のコンセプト。

そう気づいた時には、もう遅かった。簡単に刀を弾き返され、大きく体のバランスが崩れる。そして、郁人は、

「フラガラツハ・緋澄」

そう口にした。途端にフラガラツハの形態が変わっていき、刃が三つに別れ、その全てが鞭のようにダラリと垂れ下がる。

その三つの刃はまるで生きているかのように動くと、その全てが万里めがけて襲い掛かる。

咄嗟に横に大きく跳んで回避するも、刃は自由自在に軌道を変えて追尾してきた。

二人の距離が大きく開く。そして、郁人は一度刃を戻し、今度は振り下ろすようにして刃を放った。

「くっ……!!」

一方的に打ち付けられる万里。しかも一撃一撃が重い。段々と万里の顔にも焦りが浮かぶ。

するとその時、上空から幾つもの火球が降り注いだ。流石に郁人も攻撃を止め、回避に専念。

その隙に万里は郁人から大きく距離をとると、先程までとは違い、嬉しそうな笑顔で

「うーちゃん！」

と声を上げた。そして、地上に一匹の黒き装甲を纏った龍が降り立った。それは、数の十名家二階堂家の三男、

二階堂雨龍とその式神、黒龍。黒龍は本来、独立して行動できるのだが、雨龍と合体する事もできる特異な式神。

「よお。約十年ぶりか？ 牧島郁人」

「ああ、そうですね。確か、大火傷してベソかいてた二階堂雨龍さんでしたよね？」

「……言うようになったじゃねーか。クソガキ」

「そりゃもう、九年経ちましたから。いい加減、おっさんは引退したらどうです？ また火傷したくないでしょう」

お互い笑顔で嫌味を言い合つと、郁人と雨龍は同時に動いた。黒龍とほぼ同化しているため、

雨龍の動きは早い。更に、雨龍には予知という嫌な力がある。案の定、郁人の放った三つの刃は簡単に避けられた。

急いで刃を戻すも、雨龍の方が早い。だが

「はいはい。また大火傷コースご希望でえ？」

女の声が響き渡ると共に、雨龍の眼前にコンセプトの紋様が出現した。突然の事に、流石の雨龍も体を止められない。

そして、体が紋様に触れた途端に爆発。荒れ狂う爆炎が周囲を一気に飲み込む。

「ナイス、竜胆」

「えへへ。バッチグーなタイミングだったでしょお？」

背後から現れたのは、郁人と同年代程度の女 牧島竜胆。姿形は人間だが、郁人の式神。

他の式神を奪い、自分のモノとする能力を持っている。郁人が今まで使った力の大半も、

竜胆の恩恵によるものであった。

「うーちゃん！」

「うるせえ、吼えんな万里」

炎を振り払って、全く無傷の雨龍が現れた。郁人も竜胆もあの程度で倒せたとは思っていなかったらしく、

平然と再び戦闘に集中する。そして、雨龍は万里を見据えると、

「援護しろ。俺とテメエでこの場食い止めて、後は奴らに任しておけばいいからな」

「うん……！ 私達なら、最強のコンビですね！」

万里は嬉しそうに再び刀を引き抜くと、雨龍を追いかけるようにして郁人と竜胆へと走った。

殆どの敵を風の矢で射抜き、梨香は一息ついた。郁人と竜胆が救援に来てくれたので、これで随分と楽になる筈。

九年前にガラムから貰ったGATEのコンセプトがある為、竜胆は世界中の何処に居ても、一瞬でここまでこれる。

ユニオンの中で最速の機動力を持つ、この二人は海外の任務に就くことが多かった。

しばらく会っていなかったが、前とは見違えるほどに強くなっている二人。

(私も、負けてられないな)

自分も浅葱を継いだ身。何処までも強さを追い求める必要がある。そんな事を考えていると、

不意に敵側が張った結界の最奥の空間がブレた。そして、現れたのは一隻の船。

それは 一之瀬家の長女、一之瀬凜の式神【空船】。能力はよくわからないが、船を作り出し、飛ばす能力を持っているらしい。

一瞬で判断したのは、今回の襲撃が十名家の十文字派の物によるものだということ。

「お母さん。そっちはどう?」

梨香が屋根の下に居る詩歌に声をかけると、

「今、連絡が終わったわよ。とりあえず、救援がくるまで耐えてくれて蒼二君が言ってたわ」

「ん。じゃあこの家を放棄するわよ。機密書類とかは置いてないよね?」

「うん。全部データ化して浅葱で保管してあるから。地下のコアはどうする?」

「問題ないと思うから、放置でいいよ。とりあえず、お母さんは光

希ちゃんと一緒に脱出して」

「わかった。梨香、死なないでね」

返事を聞くと、梨香は「うん」と頷き、穹蒼に力を込めると空を切り裂いて飛んだ。

目標は、一之瀬凜の式神空船へと向かう。詩歌と光希は竜胆が家の中に開いてくれたGATEで脱出したはず。

詩歌が戦力として抜けるのは少しキツいが、光希を危険な目にあわせるわけには行かない。

すると、空船の砲身部分が動き、その照準が自分へと向けられた。

「くッ………！」

慌てて軌道を修正すると、砲身から光が照射され、梨香のすぐ横を掠めて浅葱家へと着弾。

だが、威力は思ったほどではない。家の庭部分がピンポイントで焼かれているだけだった。

だが

「あそこは………！」

そこは、裏山側に掘られている浅葱家の地下室への階段。そして、そこにはコアが保管されている。

敵の狙いはコア　そう判断した梨香が、まずはコアを守ろうと身を翻すと、

空船の甲板から黒い誰かが飛び降りた。それは、一瞬空中で静止すると、凄まじい勢いで梨香へと迫る。

「な、何？」

黒のスーツに黒のフルフェイスヘルメットといった変わった格好。そして、雰囲気は禍々しい。

只者ではないと判断すると、空中で回転しながら風の玉を続けざまに三連射。風の玉はすぐに数十もの矢へと形を変えて、

黒スーツへと迫る。すると、黒スーツは足元に黒い闇を作り出したかと思うと、ジグザグと直角に移動し、全ての矢を避けた。

そのまま梨香を通過し、浅葱家へと向かう黒スーツ。だが、その前を赤い光が駆け抜けていき、一瞬動きが止まる。

梨香と黒スーツが同時に、狙撃位置を割り出し、そちらを向くと一台の車。その屋根の部分には狙撃銃を構えた九我山令の姿。

「あ、令君」

赤い鬼を模した軽装と仮面を被った令は、更に狙撃銃の引き金を二、三発引くと車から勢いをつけて飛び立つ。

足元に黒い雲を纏い、一直線にこちらへと迫ってくる令。黒スーツは、どこからとも無く拳銃を取り出し

「……………」

無慈悲に数発、光の弾丸を放った。だが、令には全て見えているようでライフルで弾をガード。

そのまま勢い良く黒スーツへと突っ込み、思い切り吹き飛ばすと、

「やあ、梨香ちゃん。久しぶり、彼氏できた？」

「それが全然……………って、今はそんな事話してる場合じゃないでしょ」

令と梨香は年が近い為、割かし仲が良い。姉の結婚式で始めて会った時に仲良くなり、

今でもその交流は続いていた。そして、令はハツとしたように表情を改めると、

「しまった！　じゃあ、追いかけてようか」

「相変わらずだね」

二人は再び中を舞い、黒スーツ　神璽に追いつこうとするが、眼前には何時の間にか接近していた空船。

その甲板に見えるのは、一之瀬の長女、一之瀬凜。そして、三枝家の長女、三枝千里。

いずれも令と梨香が知った顔ばかり、だが知っているだけで交流はほとんど無い。

彼女らは十名家の十文字派。そして、どちらかといえば梨香と令は四条派の人間である。

「姉ちゃんのライバルの一之瀬と三枝の長女か……やっぱ、ロクでもないや」

「でも、十名家が何で浅葱を……」

「何にせよ。敵には変わりないからね。行くよ、梨香ちゃん！」

「うん！」

令と梨香は中を舞って、空船の背後へと向かおうとするが、旋回能力、機動力は空船の方が巨大にも関わらず勝っていた。

仕方が無いので、空船から発射される砲弾や光線を避けながら、令は弾丸に炎を纏わせ、発砲。

鼓膜が破けるような激しい発射音と共に、弾丸が空船へと向かうが、一瞬銀色の閃光が走ったかと思うと、炎は消え去った。

視線の先には、眠たげな顔をした三枝千里。今、間違いなく弾丸を斬った。

そう判断すると、令は自分の得意な銃の形を無装に止めさせ、

(太郎くん、暴れていいよ)

(おーっしゅあアツ！)

体の制御を太郎へと渡すと、無装の形が変化し、刃が二メートルを超える大剣へと変化。

もちろん、これも普通の武器ではない。太郎が提案し、令が特注で作らせた

オリジナルの剣を無装に吸収させたもの。常人では扱えない代物だが、鬼憑状態の令なら難なく使える。

そして、令の強化された体の使用許可を得た太郎は、令とは違い、一直線に空船へと向かっていく。

太郎の空間把握能力と勘の良さは令も認めるほど。あっという間に全ての攻撃を避け、空船まで近づいてしまった。

「おらあアツ！」

大剣に炎が纏わり付き、太郎は空船の外装を殴るようにして切り裂いた。更に、一撃をいれようと剣を振るうも、

空船の機動力は高い。あっという間に、大剣の射程から離れてしまふ。だが、それでいい。

空船が逃げた先には、梨香が待機させておいた風の矢の大群。そ

れらは全方位から空船を囲むようにして降り注いだ。

「やっつけてくれますわね。流石、あの性悪の弟ですわね」

その光景を甲板でジッと見ていた凜は、賞賛の意味を込めてそう呟くと、一之瀬家に伝わる【傀儡】の力を発動。

凜の目が見開かれ、視界に入っている全ての風の矢を認識。そして、それに向かい命令した。

「曲がりなさい」

凜の目が一瞬、闇色の輝きを放った。それと同時に、梨香の放った風の矢は全て、軌道を変えられ、あらぬ方向へと飛んでいく。

傀儡の力は、視線に入ったモノ全てに反意思を使い、命令を下せる事ができる。

ただ、従わせる事が出来るのは中々条件が厳しい。生物でなければ、命令はほぼ確実に出来るのだが。

生物に命令するとなると、相手も反意思を持っているので、凜の意思以上に命令に抗おうとすれば、傀儡は解けてしまう

といった強力だが、欠点もやや多い力。だが、凜の意思は強靱。普通の人間ならば簡単に支配下に置かれてしまうほど強力だった。

「さて、反撃と行きますか」

と、凜が攻勢に転じようとする、轟音が響き渡り、何か黒い物が空船へと叩き付けられた。

甲板や装飾を破壊しながらそれは転がると、凜と千里の丁度中間辺りの距離で止まった。

新調したらしい黒いヘルメットはほぼ半壊、神璽は壊れたヘルメットから素顔を覗かせないように、

抑えると、すぐにヘルメットを修繕し、自分が飛んできた方向を睨む。

そこには、空中に悠然と佇み、右手から雷とはまた違う閃光を発する、紫の姿。

「あの女は何ですか……」

「……」

「無視ですか。貴方、本当にそんな方でしたっけ？ 私が聞いた榛名神璽は……」

神璽は、顔を凜の方へと向け、その足元に「黙ってる」と言わんばかりの一撃を叩き込む。

当てるつもりが無いことはわかっていた凜は、そのまま冷たい目で神璽を見た後、

「ちゃんと、回収はなさってくださいたんでしょうね？」

神璽は無言で頷くと、紫目掛けて歩こうとする。だが、その足取りはおぼつかない。

相当なダメージを受けている事は明白だった。凜は「はあ……」とため息をつく。

「撤退します。雨龍と万里を回収してください」

空船に命じて、弾幕を張りながら令と梨香を近づけないように仕向けると、神璽はノロノロと立ち上がり、

前面に黒い領域を作り、そこから異形の腕を作り出すと、それを地面へと向けて伸ばした。

数秒の沈黙の後、凄まじい炎が舞い起こり、その腕を足場にしながら、黒龍が昇ってきた。

背中には少し負傷した感じの万里。やがて、雨龍が悪態をつきながら甲板へと上がると、

「では、さようならの挨拶を」

神璽と雨龍は空船の背後へと向かうと、追いかけてくる令と紫と梨香目掛けて、雨龍は特大の火球を、

神璽は、領域から何十発もの反意思を込めた鬼砲を大量に浴びせかけた。

一瞬の後に爆発。その勢いを利用して、空船は更に加速し、結界内を突き抜けるとそのまま夜の闇へと消えていった。

「令、追いかけるで。下で倒れてた三枝の残党もトラックで逃げてもうたし」

「うん……。じゃあ、梨香ちゃん。僕らは行くから、後始末頼んだよ」

「わかった。ありがとうね、令君。紫さん」

梨香はそう言うのと降下して行き、地面に座り込んでいる陸人の下へと向かっていった。

紫と令も車へと戻ろうと、中を飛び始めるのだが、紫は令の様子がおかしい事に気づく。

「どっしたん？」

「……いや、少し気になる事が幾つかあってね」

立て続けに起こる事態に、令の頭はパンク寸前だった。いくら考えてみても、疑問だけが残る。

何故、何故、何故と。令を苛む様に次々と広がっていく疑問。紫は敢えて声はかけずに、

黙って令を手を握ると、誘導するようにして車の方まで引っ張って行った。

第7話：Rough - Sea（前書き）

遅ればせながら、アクセス解析で遊んでいます。  
Daysとか、結果が結構面白いんですよね。

罪歌、狂の話だけが他のキャラと六百人以上  
読者数の差をつけています。

次が命で、その次が遥緋の話が読者数が多いです。

……やっぱ、秋月姉弟は人気があるんだなあと改めて思いました。

PASTじゃめっちゃ影薄いですけどね。

## 第7話：Rough - Sea

昨日の夕方の浅葱家襲撃事件は、久しぶりにこちらの世界に大激震を起こすほどの事件だった。

狙われたのは八神の傘下の家でもある浅葱。そして、襲ったのは十名家十文字派の二階堂、三枝、一之瀬。

すなわち 十名家同士の対決という図式。詳しく知っている者なら、ユニオンと十名家の戦いとも評するだろう。

ユニオンとは、千島蒼二、天美運命、牧島郁人、棗由加、榛名神璽の五人がトップとして存在する団体。

傘下には八神も入っているため、必然的に十名家の四条派もそれに加わる事になる。

その理念は共存の為の組織。鬼神、混血、純血、悪鬼、それら全てとの共存を目指している。

幾分マシになったとはいえ、鬼神と混血と純血には大きな溝がある。ユニオンの傘下の家ではそれらは少ないが、

他の家は違った。悪鬼は人類の敵。その悪鬼から生まれた鬼神も人類の敵。

混血は力を持たない純血を見下し、純血は強大な力を持つ混血を心の底では侮蔑している。

これが、今の世界の姿だった。そして ユニオンの長、千島蒼二は仮設されている

ユニオンの仮本部の最上階で、報告を聞きながらこれからの事を考えていた。

「 以上が、今回の事件の顛末。十文字に連絡を入れてみても音信不通。三枝も駄目。

一之瀬と二階堂は、長女と三男の行動を知らなかったみたいで、大慌てなのが現状かな」

「成る程ね。おい、運命。これから何人が引き連れて二階堂の本家へと行くぞ」

蒼二はそう敵かに告げて、コートを羽織ろうとすると、不意にその頭に湯飲みが投げつけられた。

「グハツ」と短く悲鳴を上げて、湯飲みを投げつけたであろう女天美運命へと非難めいた視線を向けると、

「痛えよ！ いきなり何しやがんだ！」

「運命の事はお義姉様と言え。言わなきゃ、すぐ命と離婚させる。蒼華と煉次の親権も渡さないから」

「……っ。わかったよ、義姉ちゃん」

「少し気にいらないけど、まあいい。早くコートを着込め、お義姉ちゃんを待たせるな」

「誰の所為だと思ってやがる……！」

「何か言った！」

「別に……」

蒼二は諦めたような表情で返事をする、運命の後に続いた。七年前に命と結婚してからというもののいつもこの調子。

何回か大きな問題（主に命の独占）について抗争を繰り広げてきた二人だったが、

今はこうして義姉と義弟として、同じユニオンの幹部として協力

しながら暮らしている。

そして、二人はビルを降りながらも、これからの行動や問題についても話し合いを進めた。

「神璽は見つかったのか？」

「全然。海外で由加を怒らせてそれっきり。全く、浮気なんて最低の極みだよ」

「あいつも、ホント懲りねえよな」

「でも、進展はあったみたい。とりあえず、信頼できる人に探させてみたいだよ」

「わかった。それと、浅葱の事後処理はどうなっている？」

「浅葱の一族はしばらく本家に身を寄せるみたい。陸人も梨香も怒ってて常に臨戦態勢。」

それを郁人と竜胆に宥めてもらいながら、二人には一旦海外での調査を終了してもらって

昔みたいに情報収集に徹してもらおう。あの二人、ああ見えて人脈結構あるからね」

「逃走した一之瀬の空船は？」

報告の全てを頭にいれ、状況を整理しながら蒼二は次々と運命へと質問をぶつけていく。

正直、考えなければいけない事は、この他にも沢山ある。だが、浅葱襲撃は良くない。

八神の下の家でもある浅葱を攻撃されて、黙ってしまっていては、

ユニオンに関する

世論は確実にマイナスへと向かう。それを打開すべく、蒼二はあらゆる事を聞きながら

同時にそれをどう生かすかを考えていた。

「それは、九我山の令が追いかけてくれている。九我山の意味ではなく、令個人の意思でね。

後、光希と遙ママは狂の家……ああ、七海の傘下の平和なヤクザの所の客人扱いにした。

瀬戸内の方だからね。こっちと違って暖かいし、戦場にはならないほど長閑な所だよ」

「ヤクザかよ……まあ、七海傘下のヤクザは義理と人情系の古めかしい奴らだからな。

だが、警戒は怠らせるなよ。母さんと光希に何かあってみる。俺は絶対に許さん」

「パパを護衛につけようかと思ったけど、もしもの時に由加と居ないと困るからね。

空我と大和はお店の経営が忙しいとかナめた理由で欠席。後でぶっ殺すけどいいよね？」

「そう言っただけや。こっちは善意でお願いしてるんだからよ」

「むう……蒼二はあいつらに甘い」

会話をしながら、ビルの一階までたどり着いた二人は、相変わらぬの言いあいだか会議だかわからない話し合いを続けながら

表に止めてあった一台の車へと、運命は助手席へ、蒼二は後部座席へ乗り込んだ。

運転席には遥緋が既にエンジンを吹かしており、いつでも発車できる体勢。

「お義姉ちゃん、お兄ちゃん遅いよー」

「ごめんね、遥緋。蒼二の馬鹿がコート着るのに手間取ってたの」

「うわ……この年になって一人で着れないんだ」

「減給されてもいいなら信じる。お前の常識的判断を期待する」

「も、もう！ お義姉ちゃんも冗談が好きだなあ！」

慌てて取り繕うように笑顔を浮かべる遥緋をジッと睨んだ後、蒼二はため息をつき、

「まあいいや……目的地は、二階堂家な。安全運転で頼むぜ」

「任せてー」

そうとうと遥緋はアクセルを思いっきり踏み、車を急発進させた。そして、蒼二は気づく。

自分は遥緋の運転する車に乗り込むのは初めてという事と、実技試験を二回落ちた遥緋の

運転の相談にのっていたのは律だという事実。そしてそこから導き出される答えは、危険。

周囲の車をどんどん追い抜き、大きな道路へ。更にそこでも法定速度を守ってると思いたい速さで疾走していく。

助手席に乗る運命は平然としていた。どうやら、鬼神にはこの程度にスピードは全く脅威ではないらしい。

「お、おい……安全運転は？」

「大丈夫だよ。いざとなったら、コンセプトで何とかするから」

遥緋のコンセプトは触れた物を死滅。力の度合いによつては分解する事が出来る奇異な力。

それを車の前面に発生させておけば、確かにぶつかっても”こちらには平気”だろう。

無事に着く事だけを祈りながら蒼二は、とりあえず、落ち着くことに決めた。

「そつえば、お兄ちゃん。蒼華ちゃんと煉ちゃんは体調良くなったの？」

「あー……熱は下がったみたいだな。蒼華は熱が下がった途端、家から脱走をしゃがって、

命が散々叱ったらしいぜ。さつき電話したら、今は二人して肉まんを大量に食ってるんだとよ」

最愛の娘はどこで教育を間違つたのか、蒼威と陸人を足して、命で割つたような感じの女の子になつてしまった。

息子は息子で姉の影となり、見えない所で姉への被害を少なくするために動くような感じ

に最近はなつてきていた。可愛くなくはないが、将来が恐ろしくてたまらない。

「ははは……相変わらずだね」

「お前のトコの莉那は大人しくて羨ましい限りだ」

「大人しすぎるのが欠点だけどね。あの子、灼汰にぐらいしか言いたい事言わないし」

「蒼華は毎日言いたい放題だぜ。唯一、悪口を言わないのが親父の事だけ。どこで教育間違っただら……」

「ああ、何かお父さん凄い好かれてるよね。莉那も灼汰も大好きだもん」

遥緋と蒼二の子供。すなわち、蒼威と遥の孫である蒼華と煉次と莉那と灼汰は、兎に角蒼威に懐いていた。

その次に遥に懐いており、ようやく母親である命と遥緋がきて莉王と蒼二という順番である。

「蒼威パパは尊敬できるよ。それにしても、莉那は運命の事が嫌いなのか？ この前話しかけたら逃げられたんだけど……」

「ああ、あの子恥ずかしがりやだからね。後、苦手な人は適当に笑って流すから大丈夫だよ」

「俺、この前話しかけたら笑って逃げられたんだけど……」

「嫌われてるねー。とりあえず、お兄ちゃんは目つきが最悪だからね」

顔には出さないが、姪に苦手だと思われるのは精神的にかなりキツイ蒼二であった。

こっそりと心中でもう少し笑顔を増やしてみようと考えている間にも、運命と遥緋の追撃は続く。

「納得。蒼華と煉次がこんな捻くれた目つきにならないと良いけど……」

「遣伝って怖いよねー。蒼華ちゃん、お兄ちゃん似だから気をつけないと」

「女の子がこんな犯罪者のような目つきはいけない。うん、やっぱり離婚しろ」

「テメエら好き勝手言っでんじゃねえエエ!」

その日の夜。太平洋のド真ん中、周囲には島一つ見えないその海の上で、何かが動いていた。

波に呑まれるように時折姿を消しながら、二つの人影がぶつかりあっては、離れてを繰り返していた。

性別は男と女、そして両方の服装はお互いボロボロ。かなりの長時間戦っている事がわかる。

それでも、二人はぶつかり合う。互いの目的を果たすために

「ッ」

黒髪の男が、闇色の塊を相手のまだ幼い少女へ向かって投げつけた。少女は悠然と空を飛翔しながらそれをかわす。

闇の塊は海水に着弾すると、闇を広げ海の一部を侵食し、その部分を消した。

だが、すぐに海水が流れ込みその部分は再び海となり、高く高く波を立てる。

そして、そのまま少女は体当たりするように男まで接近し、男の腹部に手を当てると、

「……戻って」

直後、男の体が突然吹き飛び、何度も波の間を跳ねながら数百メートルほど転がっていった。

だが、少女は表情を緩めない。油断は出来ないとばかりにすぐに男へと追いつくと、

その幼い体からは信じられないような蹴りを男の腹にぶち込み、海の中へと叩き付けた。

……男は浮かんでこない。そして、ハツとしたように何かに気づく少女。

何かに集中するように目を閉じると、海の一部に手をかざし、

「……そこ」

風が舞い起こり、その場所に竜巻が起きた。それに巻き込まれているのは、黒髪の男。

男は少女を見て、感心したように笑うと一度腕を振っただけで、竜巻を打ち消した。

「大したガキだよ……かれこれ、10日の付き合いか？」

「……ガキじゃないもん。それと、11日だもん」

「細かいなあ」

「……いい加減、諦めて。……君を行かすなって言われてるの」

「嫌だね」

「……じゃあ、殺すけど。……ああ、駄目だ。……殺すなって言われてるんだ」

「一体、誰の依頼なんだよ？」

「……教えない。……何でも屋は信頼がいのち」

少女の周囲に、荒れ狂う風が吹き荒れた。その凄まじい風に、流石の男も少々危険を意識。

男は最大級の力を練り上げると、闇の塊を大きく広げるようにして顕現。

そして、少女が風を解き放つのと同時に、闇の塊に命令して同じ程度の風を舞い起こす。

だが、男の力は紛い物。純正の少女の力にはやや押されてしまう。だが、それでいい。

男は闇の塊を全力で良く蹴ると、その勢いを利用したまま全力でとある方向を目指す。

少女もそれに気づき、男を追いかけるように飛んだ。二人が飛んだ先には、一つの島国がある。

日本という、男と少女が生まれた国が



## 第8話：Innocent - Girl（前書き）

学業は忙しくないのですが、遊ぶ事に関して、色々イベントが多い季節なので投稿頻度が激減します。

現在の状況をお伝えしますと。

PASTは二話書き溜め分があります。

そこからの展開に少し迷っているので進み難いです。

Daysの方は

牧島郁人	3100文字
牧島竜胆	3100文字
御崎朱音	3887文字

まで書けてます。

この三本の短編は少し長くなりそうです。

というわけで、しばらくはスローペースでお付き合ってください。

第8話：Innocent - Girl

気だるそうな顔をした女はコツコツと靴音を立てて、長閑な高級住宅地を歩いていた。

視線の先には、周囲とは明らかに異質な建物 念同の一族、七海の老家。

女 七海遠音が此処に帰ってくるのは、十数年ぶりだった。だが、何一つ変わっていない。

自分が妹と悪戯して破壊してしまった木も、相変わらずそこだけが不自然に無くなっている。

「見た目は、変わらないな。関係はここまで変わってしまったというのに」

そう感傷気味に呟き、遠音は玄関へと足を進める。すると、門の扉が開き、ガラの悪い男達が現れる。

滅多に人が近づかないこの屋敷に人が近づいているのだ。警戒の意味を込めて、男達は視線を遠音へと送った。

そして、遠音がその視線に応えるように、かけていたサングラスを外すと、

「お嬢……」

「遠音様……」

男達の表情が驚愕に染まった。大方、自分は死んだ事にでもされていたのだろう。

”あの日”以降、家に帰っていないので当然といえば当然なのであるが、少し変な感じがする。

十数年前の今頃だったか、中学生だった七海遠音は、妹達と共にその頃敵だった勢力に誘拐された。

気が弱かった奏は終始泣いており、一番下の神楽は誘拐されたという事実には気がついていない。

頼れるのは長女の自分だけ。それを悟ってしまった所為か、遠音は泣かなかった。

自分達が知らない所で、大人達は良くわからない会話を続けている。自分達はただの交渉材料ではない。

工場の小屋に閉じ込められて、泣き喚く奏と神楽を励ましながら遠音は逃げる算段を立てていた。

だが、所詮中学生程度の発想。嚴重に管理された小屋から出る事すら難しい。

途中から遠音は思考放棄し、ただ流されるように一日中同じ事を繰り返した。

そして、ある日

「出る」

と短く告げられて男達に連れて行かれると、海を挟んで父と家の者達がこちらを睨んでいる。

何の取引をしたかは知らない。だが、もうお互いに話し合いはついていたようで男達のリーダー格が声を張り上げ、

「二人選べ！ 三人のうち、二人だけ解放しよう！」

ドキツとした。そして、わかっていた。まず、自分が選ばれる事は無いだろうと。

遠音は念動の力が弱く、妹達は式神を操っているのに遠音は式神の召還すらできていない。

案の定、父が選んだのは優秀な奏と神楽。わかつてはいたが、心が酷く痛んだ。

遠音はそのまま男達と小型艇に乗せられ、離れていく家族を呆然とした目で見送る。

「嬢ちゃん。災難だったなあ。ヒヤハハハ」

男が下卑た笑いを浮かべながら、遠音の体を弄った。だが、それすらもその時の遠音にとってはどうでもいい。

遠音は黙って上空を見上げ、”迫ってきているミサイル”だけを直視し、現実を悟る。

私ごと、殺すんだ。そう思った時には、視界が真っ赤に染まり、意識を失った。

そして、遠音が次に目を覚ますと

「っは……」

突然、遠音は我に返った。辺りを見回すと、既にそこは血の海。首や腕が変な方向に曲がった男達が血を撒き散らして倒れている。遠音は偶々手に掴んで泡を吹いていた男を、一発平手で叩くと、

「私は、今何をした？」

「あ……が……頭首様に捕獲……命じ……られて、お嬢が……あ……殴って」

「そうか。すまなかったね」

男を投げ捨てる、遠音は七海の本家を見据え、十数年ぶりの対応がこれかと、薄く笑いながら門を蹴破る。

庭に入ると、何人もの七海が拳銃を構えて念動で威力と精度を上げた弾丸を正確に急所へと撃ち込んだ。

だが、遠音の【超動】にはかなわない。全ての弾を弾き返すと、男達は悲鳴をあげる間も無く沈黙。

周囲に目をやると、屋根の上に式神使いらしいのが数人。大地を蹴り、一飛びで屋根までたどり着くも、

その余りの速さに式神使い達についてこれていない。それもそうだろう。自分の速さは人間を超越している。

超動を再び発動させ、あらゆる方向から力をかけ、式神使い達の全身の骨をへし折ってやり、

「ふう……」

と一息つき、力を溜めて叩きつけるようにして屋根に拳を打ちつけた。轟音が鳴り響き、屋根だけでなく家屋全体に亀裂が走る。

そこまでしてしまえば、後は超動を使い瓦礫を竜巻のように激しく動かすと、残りの七海目掛けて瓦礫を叩き付けた。

悲鳴と轟音が鳴り響き、後に残ったのは静寂。遠音は、軽く跳躍して地面へと降り立った。

「お久しぶりですね。父様」

と屋敷の廊下で目を見開いている父へと向かって言い放った。

「遠音……お前、体は……」

「見ての通りですよ。貴方に吹き飛ばされても、しぶとく生き残ってやりました」

最大限の嫌味を込めて、遠音は笑いながら言うと、七海惣一は疲れたように息を吐き、

「私を殺したいなら、殺せば良い。お前を殺そうとしたんだ。当然だろう」

「……私は別にそれには怒ってないよ。その後について、私は腹を立てている。」

そして……これから娘に殺されるかもしれないというのに、貴方に何の輝きも見えないのもね！」

「輝き……?」

「……はあ、もういいや」

遠音は悪態をつき、ずかずかと家の中に土足で踏み込もうとした。だが、足が動かない。

何かに固定されるようにそこから一步も動くことが出来ない。

ハツとしたような表情で、視線をとある一方に向けると、そこには悲しげな顔をした妹 七海神楽。

「やあ、神楽か。驚いたよ、綺麗になつたね」

「姉様……そのお体はどうされたんですか? 確か、姉様のお体は

「

「フッフ、秘密だ。私は、謎の組織に拉致され、改造人間として仕立て上げられてしまった

とでも言えば信じてくれるのかい?」

「私は真面目に聞いているんです! 私が、お姉様やお父様がどれだけ心配したか!」

神楽の悲痛な叫び。その言葉により、遠音の顔から笑顔が消え、感情の無い表情だけが残った

目を覚ますと、何もかもが無くなっていった。今まで当たり前のようにあったもの。

その全てが見当たらない。体を動かそうと思っても、上手く動かない。手が無い。足が無い。

見えるのは巻きつけられた包帯のみ。腕は肘から下が無く、足は膝から下が無い。

最初に襲ってきたのは空虚。何も考えられない。何も考えたくない。ただ、涙が零れたのだけはわかる。

それから遠音は、喋る事が無くなった。家族は一度窓から様子を見に来ただけで、会話をする事なく、帰ってしまった。

それでも何時か 何時か迎えにきてくれる事だけを信じて、遠音は自分に出来る事を精一杯はじめた。

義手と義足を念動で動かす。それも、元の体を使うのと同じような感覚で。

一月が過ぎた。半年が過ぎた。そして、一年が過ぎた。だが、家族は迎えに来ない。

それでも遠音は一日中、殆ど休む事無く念動を使い続けた。そしてその力はいつしか、念動を超えた他の力。

遠音の血の滲むような努力と才能が合わさって新しくなった、後に【超動】と呼ばれる力。

その名をつけたのは遠音ではない。七海でもない。その病室のドアを、最初にノックした客人だった

「また、やってしまったか……。クソ、今日はなんて日だ」

また物思いに耽ってしまったようで、何時の間にか地面には妹と父が倒れている。確かに、神楽の念動は強力だった。

他の念動が兇戯に見えるぐらいに。だが、遠音の肉体と超動はそれを凌駕する。

それに負けるわけにはいかない。大切だった人が、素晴らしい力だと褒めてくれたこの力は、自分の誇り。

「っ……強すぎますよ、姉様」

「……これが、お前と私の差だよ。努力したのはわかった。でも、私はもっと努力した」

「見捨てた私達を殺す為ですか……？」

「違うよ。その逆だ」

「？」

「まあいい。それより、私はさっさとここに保管されているコアを貰っていくとするよ」

「だ、駄目ですよ！ アレは……来年、ユニオンに」

「だから、貰っていくのさ。来年じゃもう遅いんだ」

「ね、姉様達は何をしようとしているんですか……？」

「もう一度、会いたいのさ」

そう言つと、遠音はポケットから機械のような物を取り出し、屋敷を歩き回つた。その画面上には一つの点。

その点を目指して、面倒なので家の壁を破壊しながら遠音は進む。すると、不自然な階段が地下へと向かつて続いている。

昔住んでいたときには見なかった階段。降りて行くと、無駄に広い地下室に黒の点、コア。

コアに向かつて機械を押し付けると、コアはその中に吸収されるように消えて行き、

「これで、また一步」

満足したように遠音は機械をポケットにしまうと、再び地上へと戻つた。そして、ふと違和感。

倒れていた七海はおるか、妹と父の姿も無い。代わりに、一人の男が立っていた。

あの時と同じように、男が

「よお」

初めてのノックの後に入ってきたのは、見知った顔だが、一番意外な人物　十文字戒。

家のしがらみで一年に一回は顔を合わせ、また年が同じな為に、よく話をする男の子。

ここ一年ほど顔を見ていなかったが、病弱だった前とは違い、精悍さが漂っている。

「お前が入院してるって聞いたからさ……ちょっと、紹介も兼ねて来て見た」

戒の視線の先には見た事の無い女の子がモジモジしながら立っていた。この部屋に入っているのかがわからずに、

困っているような少女に、遠音は久しぶりに口を動かすと、

「入って良いよ」

「……あ」

嬉しそうに部屋に入ってくる少女。だが、戒の隣に座ったまま顔を赤くして俯いてしまう。

戒はそんな少女の肩を愛おしそうにポンポン叩くと、

「<sup>オウ</sup>希<sup>キ</sup>って言うんだ。仲良くしてやってくれ」

「戒の彼女？」

「そんなようなもんだ」

「生意気、まだ中学生なのに」

「中学生が彼女作っちゃいけねー法律なんてねーだろ？」

そう言いながら戒は笑った。それに釣られて遠音も笑い、希も小さな声で笑う。

これが、遠音の全ての始まり。自分の人生を変えた日でもあった

「よお」

目の前に居たのは、十文字戒ではなく、秋月狂。遠音も名前と顔ぐらいは知っていた。

かつて日本を震撼させた死罪六神という組織の二位にして、秋月罪歌の双子の弟。

そして、風の噂で聞いた程度だが、自分の義弟となった人物。

「はじめまして……かな？ 奏と結婚したらしいね。うん、おめでとつ」

「ありがとよ。義姉ちゃん？」

「遠音で良いよ。……いや、ここは遠姉エとかかな？ うん、やっぱり何でもいいや」

「そーかい。ま、例え義姉でもよオ。神楽ちゃんとお義父様やられちゃ、黙ってるわけにもいかねーから。アンタを捕まえるぜ」

「出来るものなら、どうぞ？」

そう言い終えると、遠音は大地を蹴って移動すると、狂の背後へと回った。

常人では視認出来ないほどの速さ。そう、常人なら。だが、狂は緋眼使い。それも、緋眼の始祖の直系。

遠音の動きを全て捉えていた狂は、背後からの手刀による一撃を、屈んで避けると、

「秋月の緋眼、ナめんなよ？」

遠音を囲むように全方位から、圧縮した風の玉を放つ。流石の遠音もそれは避けられないように、

腕で顔と胴体を隠すようにしてガードを固めた直後、無数の風の玉が遠音を襲った。

無数の打撃音のようなものが響き渡り、遠音の着ていた衣服は次々と破れていく。

そして、破けた遠音の服の腕の部分から見えたのは、人の手では無い。

「お前……その体」

「……！」

遠音の手は真っ黒で無機質な物体で作られた義手のような物。足も同じ材質できているらしく、履いていたジーンズの隙間からも、同じように黒い義足が見えていた。

これが、あの異常な身体能力の正体だと一瞬でわかった。故に、言葉にし難い。

「……見たな」

遠音の目が据わった。それと同時に、猛烈な殺気が狂を襲う。さっきまでとは全くの別人。これまでの強さは本気ではなかったらしい。狂の背中に冷や汗が伝う。

(仕方ねえ……アレ、やるか)

狂は心を落ち着けると、遠音を正面からジッと見据えた。遠音の小さな動きも見逃さないように、ただ集中力を高めた。

それに呼応するようにして、狂の右目が緋色を超え、緋色の光を帯びるように発光し始める。

今までの緋眼とは明らかに違う。そう気づいた遠音は、全力で大地を蹴り、一瞬にして狂へと距離を詰める。

だが、何かがおかしい。狂の発光する緋眼と至近距離で目が合った瞬間、何かが変わった。

「緋眼、零式」

これが秋月の緋眼の昇華型の緋眼、零式。その名の通り、自分の速さが零になったかのように錯覚させる緋眼である。

緋眼が発している光は、遠音の目から直接脳へ届くと、その身体

能力を鈍らせる働きがある。

そして狂自身も、千島の緋眼の昇華型終式と同じ程度の速さまで速度を上げる事で、

遠音自身が動けなくなったかのような錯覚を与える事が出来るのであった。

「ッ！」

狂の風を纏った一撃が、遠音の胸を貫こうと迫った。これは、くらったらマズい。そう判断した遠音は、

超動の力を無理やり自分の体に使うと、ギリギリのタイミングでヒットポイントをずらした。

だが、完全に避けきれた訳ではない。右肩を狂の手刀が貫き、激しい痛みが走る。

更に超動を使った遠音は、一気に狂から体を引き剥がすと、大きく後ろへと飛んでいった。

「流石に……どん底から這い上がってきた者は強いね」

「まあな。だが、今のを避けられるとは思ってなかったぜ」

「この力は私の誇りだ。そう容易くは破らせんよ」

と会話を終わると、服についていたポケットから一枚の板を取り出すと、それを思い切り地面に叩き付けた。

すると、板はスノーボードへと変化する。右肩の出血を抑えながら、遠音はそれに乗ると、

「今回はこれで退かせて貰うよ。妹達によろしく伝えてくれ」

「……へいよ。次は、最初から本気でやるぜ」

「それは私もだ。今度は、君のどん底からの輝きを見せてもらいたいものだね」

そう軽く、狂に笑いかけると、超動の力を使いスノーボードを操る事で空へと消えていった。

追いかけても良かったのだが、七海の怪我人を病院へ運ぶのが先決。それに、零式の後遺症もある。

「とりあえず、嫁さんに連絡しなきゃな」

酷だとは思ったが、狂はまず、自分の愛する妻へと電話をかけ始めた。

## 第9話：Disappear - Princess（前書き）

今回で第一部完。みたいな感じですね。

次回から、三つのルートに分かれて話が進みます。

令ルート

光希ルート

ユニオンルート。

大まかに言うと、みたいな感じになります。

途中やや派生するかもしれませんが。

これで、ストック分全部出したので、次回投稿は何時になるか全くの未定です。

## 第9話：Disappear - Princess

八神の頭首にして、その腹黒さは折り紙つきと言われる、八神時雨。

いつも思考を読ませない曖昧な笑顔を浮かべている彼だが、今日はやけに落ち着きが無い。

現在いる場所は、八神の屋敷。その廊下を世話しなく歩き回る  
こと二時間。

仕事は全く手につかない。使用人や部下達も、いつも人の倍働く時雨を気遣い、仕事を変わってくれている。

「ああ……もう。なんで、僕がこんなにドキドキしなければ……」

時雨がここまで動揺している原因は、自分の戸籍上は母親となっている女性の事。

十年以上前には敵であって、数年前からは頼りになる味方で、最近では母となった八神罪歌。

関係は悪くは無い。とは思っている。流石に年が近く、ずっと罪歌と呼んできた女性を母親とは呼べない。

そしてその罪歌は現在出産準備の為に、八神に特別に建てられた設備の場所で暮らしていた。

「覚悟はしていた……でも、いきなり30近くも離れた妹だなんて……」

診断の結果は女の子だった。という事は、自分の子供よりも年下の妹が出来ると言う事。

そして、時雨と律の子供である双子の八神北斗と八神南斗は、現在庭の一角でこっそりと何かをやっていた。

小学校の上がったばかりの双子は好奇心旺盛で、稀に時雨すらも困惑させような事をやってのける。

「ねえねえ。これをこうしてね」

「うんうん。こーゆーことだよね？」

パツと見た感じでは見分けがつかない双子。だが、能力的にはかなりの差が出てしまっていた。

北斗は緋眼を継ぎ、南斗は鬼憑を継いでしまっている。だから、南斗はどんなに望んでも八神の跡継ぎにはなれない。

いっその事、まだ幼い内から二人を引き離して、それぞれの立場をはつきりとさせた方がいいのでは？

と悩むも、時雨自身、この仲が良い双子のどちらとも離れたくない。

「パパ。見てみて、持ちちゃいけない花火を改造してみたー」

「凄いんだよー。なんと、にじゅー連射なんだー」

「そうかそうか……って、それは駄目だよっ!？」

時雨がそう言った時には、もう既に時遅し。どこから持ってきたのか、ライターで導火線に火をつけると、

瞬く間にそれは燃え上がり、大量の花火が八神の屋敷に向かって放たれた。

慌てて重場で花火を叩き落すも、その凄まじい音までは消す事は出来なかった。

そして、少し離れた場所の障子が開き、出てきたのは不機嫌な顔をした自分の嫁。

「時雨、北斗、南斗、これは一体何の騒ぎかな？ このクソ忙しいというのに、こんな集中を乱すような騒ぎを起こしているわけだ。相応の理由があるんだよね？」

「ど、どうしよう南斗……」

「パパぁ……」

息子達の脅えたような視線を受け、流石の時雨の背中にも冷や汗が伝う。

ここ最近、律に構ってやれていない所為か、その分も追加されているような律の怒りに、

時雨は無理やり笑顔を作って、律を見据えると、

「い、いやぁ……なんていうのかな。まぁ、まずは話し合おう」

「だから、話し合ってるじゃないか。理由を説明しろってね」

「うーん……二人がね。二十連射花火を作って、つい発射してしまっただよ。」

僕は頑張って止めたんだ。だけど、式神にも限界があつてね。音までは消せなかったんだよ」

その言葉を聴くと、律は二人の子供の方を向く。よっぽど躡けられているのか、はたまた怖いのか。

北斗と南斗は一瞬ビクツと震えた後に、すぐさま頭を下げ謝罪の言葉を口にする。

「ママ、ごめんなさい」

「ごめんなさい」

「次から気をつけるんだよ。新しく、家族が生まれるんだからね」

「え、僕達の弟か妹が生まれるの？」

「わーい。げぼくだー！」

大喜びする北斗と南斗。だが、律と時雨は顔を見合わせてどう説明しようかを迷っていた。

確かに年下ではあるが、血縁上は叔母に当たってしまう。これも、正宗と罪歌の年の差が

原因なのだが、上手く言葉にする事が出来ない。

そうこう考えているうちに、北斗と南斗は笑いながら屋敷の中へと走って行ってしまった。

「……そうだ。時雨、いつその事、も、もう一人ついでに……なんて……」

「ま、またかい？」

「嫌か？」

「嫌じゃないけど。しばらくは無理だと思っよ……また、戦いが始まるっとしてからね」

「ああ、浅葱への襲撃か。誠に遺憾だが、やられた以上こちらも黙っているわけにも行くまい」

「そうだね。今、蒼一と遥緋と運命が、影響力の強い二階堂に話をつけに行ったよ」

「凄まじい戦力だな……あの三人なら、二階堂ぐらい潰せてしまうんじゃないかと思う。

二階堂は何だかんだ言っつて、三男の雨龍が一番戦いには秀でていくぐらいだしね。

ただ、勝ちへの執着や、自己の利益への執念を考えると、やっぱり二階堂は強いんだ」

「十名家では、どれぐらいなんだい？」

「戦力的には五月以上、九我山以下つて所かな。十名家でありながら、同じ十名家の

三枝を下の一族として使っつてるといっつ下衆な一族だよ。雨龍の兄も父親も僕は嫌いだ。

雨龍だけは評価しても良いかな。なんだかんだ言っつて、数年前は背中を預けたからね」

「成る程……二階堂つて言えは次男はかなり昔に戦死した事件があったよね。それで、

雨龍が二階堂特区を任されて、長男の龍一が今は二階堂を実質仕切っつてるんだっけか。

確か、その時にあの頃の死罪六神だった罪歌達と何か一悶着あったらしいけど」

「ああ、アレか。雨龍の犯罪奨励政策か。あの若さであんな事を考えるなんて、流石二階堂といっつべきか。

笑っつちゃうよね。十文字派に属してはいるくせに、やっつてる事は全

く十文字と正反対なんだから」

「そういえば、十文字特区はアレだったよね。そう思うと、確かに笑えるよ」

「そう、何せ 【安泰】の町、十文字特区だからね」

安泰の街、十文字特区は正に高級住宅街と言ってもいい位の家が大量に並んでいる。

どの家にも広い庭。豪華な造りの家。高級な外車が押し並び、金の象徴といった感じである。

住んでる人間の大半は、中年から老人。特に、高級官僚の定年組が多い。

これまでの人生で汚い事やってきた者は、金を多く持っている。その金を使って、十文字への寄付金と

老後の趣味を満喫しながら、この街の住人は毎日のびのびと生きている。

その金の対価は、絶対的な安全。この国で十文字の街を攻撃すると言う事は死に等しい。

一ヶ月に一度は賞金稼ぎが住人の誰かを狙って、この特区に進入するのだが、ここ数年の死者はゼロ。

どんな悪人でも、金を払ってここに住んでしまえば、絶対的な安全が保障される点から、

この街はずっと昔から悪の温床となっているような街だった。

「さて。今日も元気にお仕事。お仕事」

そんな街の中、そう呟いたのは、黒髪の一部を真っ白に染めた青年。最近、成人したかしていないか位であろうその外見。

名は十文字千秋。十文字家の頭首、十文字戒の四つ子の兄妹達の一人。

兄である戒は十文字の仕事よりも大切な事があるので、数年前からは四つ子が十文字特区の守護を担当している。

千春と千夏は夕食の準備をしている為に、現在は弟の千冬と共に分担して特区の様子を見回っていた。

すると、腰に携帯していた無線機から音声 flowed。それは、弟の千冬から。

「秋兄い。久しぶりに侵入者だよ。うはっ、賞金稼ぎ共じゃん。」

黒澤元代議士が入ったからかね？ あの人、相当汚い事やってたらしいから」

「それでも、十文字特区の人間だよ。場所は何処？」

「北地区の門。先に戦闘に入ってるよ」

そう言うのと、ブツリと通信は切れた。千秋はため息を吐くと、周囲に漂う反意思を集めて、

それを履いていた靴へと集中。それに自分の意思を付加して、魔具へと変えていく。

反意思はそれを叶える。例え、空を飛べる靴という非科学的な物でも現実に変えてしまう。

「さあ、行くかね」

助走をつけて、跳躍すると千秋の体は中へと舞う。風を切り、目的の場所を目指す。

目的の場所はすぐにわかった。ライトアップされていて、尚且つ幾つかの爆音も響いている。

そこまで飛ぶと、もう勝負は粗方ついていた。何人かのフリーの式神使いが、大量の悪鬼に囲まれていた。

その中心には弟の千冬。千冬の周りに居るのは全て人型悪鬼。だが、何か様子がおかしい。

人型悪鬼は統率されたような動きで、陣形を固めており、更に武器まで持っている始末。

「相変わらず、実験好きなこつて」

そう呟く千秋。人型悪鬼の胸部には、何か機械のような物がついていた。

それは、千冬が作った特製の魔具。寄生型悪鬼の反意思の流れを読み、それを魔具として作った忌まわしき兵器。

その全てが、同属の人型悪鬼に取り付けられており、千冬の命令の従うようになっていた。

千秋はゆっくりと地面に降り立ち、千冬の隣まで行くと、

「僕の出番は無さそうだね」

「うん。じゃあ、殺しまーす」

千冬が手を上げると同時に、様々な武器を構えた人型悪鬼が全弾を式神使いへと叩き込んだ。

相手は式神で防御したものの、その全てが通常兵器ではない。幼い頃に十文字で作った

試作品が幾つか紛れ込んでいるため、その防御は数十秒と持たな

かった。

あつという間に肉と血が飛び散り、式神の気配は全て消えさせる。人型悪鬼達は武器を

降ろし、千冬の方を向いて直立不動の体勢。そして、千冬は笑顔で、

「食べて良いよ」

人型悪鬼達が死体に群がり、肉を貪っていく。千秋はその光景に「うえっ」と目を背けつつ

「食事前には見たくないわあ……」

「秋兄い。知ってるかな？ 悪鬼が何故人間を食べるのかって」

「美味しいんじゃないの？」

「違うよ。体に残った反意思を食べてるのさ。悪鬼の体は基本、全て反意思で構成されてるからね。」

存在を維持するには最も手っ取り早い手段って事さ」

「でも、ここに居りゃ別に食わんでもいいだろ」

「まあね。でも、死体の片づけがめんどくさいからさ」

十文字特区は人間のクズが集まる街。それ故に、ドロドロとした反意思が常に渦巻いている。

悪意とは別名反意思。その名の通り、人の悪意が世界に反する意思となりやすいのだ。

善意や他の意思からも、反意思は当然生まれる。だが、悪意より

も生まれる反意思は弱い。

今の時代。人は強い善意や意思よりも、強い悪意に縛られて言うても良いほどである。

だから、反意思を使って魔具を作る十文字、反意思を吸収して生き延びる悪鬼。

双方にはこの街は色んな意味で住みやすい街であった。

二人はそのまま歩いて、十文字特区の中心に建てられた巨大な屋敷へと向かった。

そこが十文字の本家。十名家の中でも一、二を争うほどの大きさだが、住んでいる人間は少ない。

他の十文字は姉を殺そうとした為に、全て殺した。辛く、悲しい戦いだった。

それでも、戒や千秋達四兄妹はたった一つの命を守るために全てを犠牲にし、今を生きている。

実の両親を手にかけてのは戒だが、話によると最後は「好きにする」と言い、自ら命を絶つたらしい。

そして、月日は流れ。今の十文字の屋敷には昔よりはやや人間は増えたものの、相変わらず少ない。

「春、夏。ただいま」

「おー、お帰り」

「もうすぐご飯だよー」

広い庭には大きな木製のテーブルが並べられ、そこには八つの椅

子がおいてあった。

近くでは、妹達がバーベキュー用の鉄板で肉を焼いている。相変わらず、大雑把な料理だ

と千秋と千冬は苦笑いすると、近くに座っていた十文字家頭首、十文字戒へと向き直ると、

「兄さん。殲滅は完了したよ」

「秋兄いは何もしてないじゃん。俺が全部やったのにさ」

やや不満そうな千冬を視線で嗜めると、戒は家族にだけに向ける本当の笑顔で、

「お疲れ様。すまないね、本当なら俺が行くべきだったんだろうが」

「気にしないで。兄さんも少し精神的に疲れてるみたいだから、僕達が全部やるからさ」

「そうそう！ あの子なら、きっと大丈夫だよ」

弟からの気遣いに感謝しながら、戒は目を細めた。その雰囲気からは最強の式神使いと恐れられるような迫力は無い。

何処にでもいる、普通の優男な感じにも見える。そして、千春が鳴らしたフライパンの音を号令に、

今居る十文字家は全員席に着くと、手を合わせ「いただきます」と全員同時に言い食事が始まった。

もの凄い勢いで、肉や野菜をかきこんで行く千秋と千冬に対し、戒の箸はあまり進んでいない。

それを見た千夏は、心配そうな顔で兄へと問う。

「お兄ちゃん……美味しくなかったー？」

「いや、美味しいよ。ごめん。少し、考え事をしてね」

「姫の事だよね……。ごめん、全力で探してるんだけど、全然網に引つかからなくてさ。」

あの子の事だから、危ない目には遭ってないと思うけど。早めに見つけるようにするよ」

「仕方ないさ。あの子が本気を出したら、俺でも捕まえられないからね。」

千夏は悪くないよ。とりあえず、あの子につけた生命反応の魔具はまだ点灯してるから

平気なんだとは思っただけど……ああ、やっぱり心配なんだ」

そう言うと、戒は懐から一枚の紙を取り出した。文面には、「会って伝えたいことがあるの。しばらく出かけてきます」

の書ききだけが残っていた。一見すると、何をしたいのかよくわからない文章だが、

戒にはその全ての意味がわかっていて、それ故に悲しい。こんな思いを溜めていた事に気づいてやれなかった自分に怒りが沸く。

だからこそ、戒は決意した。仲間に協力を求め、もう一度、取り戻そうと。

全てはたった一人の為に。だが、それこそが十文字戒の全てでもある。

(待つてるよ……後、少しだから)

その思いは誰に聞こえる事も無く、戒の胸の中にただ刻み付けられた。



第10話：雷 - Thunder - (前書き)

まあ、彼女に関してはわかっていた人が多いのではないのでしょうか。  
な、回です。

リアルが激しく修羅場ってます。

なんか、月に二回程度の投稿になりそうです。  
ごめんなさい。

令と紫はすぐさま車へと乗り込むと、エンジンをかけて車を急発進させた。

運転しているのは紫。その隣には太郎。そして、後部座席の椅子を全て倒して、

巨大なベッドのようにした場所には令が大の字で寝転がっている。鬼憑の力を使った

反動か、それとも何かを考えているのか。令は冷たいお絞りを目に当てて、ずっと無言。

「太郎、顔変えとき」

「おつよ」

太郎の鬼のような顔が変化し、やや人間味を帯びた顔へと変化する。これが、上級悪鬼火鬼の本当の顔。

それでも完全な人間のようににはなっておらず、髪は真っ赤で、その髪の隙間に埋もれるようにして

角のようなものが見え隠れしていた。紫はそれに満足すると、更に速度を上げて空船を追う。

放った雷がまだ完全に離れていない為、位置はかなり細かく特定できる。空船はこの車から

約三キロほど離れた場所を飛んでいる。だが、向こうは空。こちらには道路を走るしかない

ので、中々距離は縮まってくれない。紫はイライラしたようにハンドルをトントんと叩く。

「姐さん。落ち着けて」

「……ごめん。久しぶりだったから、少し昂ってるんよ」

「気持ちはわからんでもねえけど。その分、令に負担が行くんだからよ」

「わかつとる……」

時刻はそろそろ帰宅ラッシュの時間。渋滞に巻き込まれでもしたら、確実に追いつけない。

紫はチラリと窓の外を見る。まだ、住宅が幾つかあるが、外は完全に真っ暗。

もうしばらく運転すれば、山の多い地域へとたどり着く。そこが、唯一のチャンス。

そう考えていると、寝転がっていた令が起き上がり、

「次は、僕と紫ちゃんの二人で行く。太郎くんは運転よろしく頼むね」

「おう、任せとけ」

「……紫ちゃんもそれでいいよね？」

「うん……で、でも令の体は大丈夫なん？」

「大丈夫。僕が紫ちゃん守る。そして、紫ちゃんは僕を守る。あの時見たいにね」

紫と令が出会ったのはずっと昔。令が小学校の低学年だった頃の事。

初めての出会いは、戦場だった。九我山が救援によって向かった、人間と悪鬼の戦い。

初めての戦闘でガチガチに緊張していた令は、姉の律や太郎ともはぐれてしまい、戦場を一人で彷徨っていた。

「おねえちゃん……たろうくん……」

時折響く爆音に驚きながら、令はコソコソと森の中を駆けずり回った。

そして 血塗れの女の子を見つけた。体中から血を流し、今にも死にそうな女の子を。

「何やクソガキ。……見世物やあらへんで」

それが、二人の初めての出会いだった

「令、空船が見えたで！」

その声で、令は我に返った。気がつく、車は山道に差し掛かっており、少し離れた上空が僅かに歪んでいるのが見える。

一之瀬凜の空船は結界の機能でもついているのか、音や姿が見えない為探知し難い。

紫は既に太郎と運転を変わっており、令の隣で上の窓から顔を出して、冷静に見ている。

令は無装を顕現させると、太郎へとそれを手渡し、

「余裕があつたら砲撃支援をお願い。でも、一番大事なのは太郎くんの命。それだけは守って」

「任せな！ 俺は死なねえ。お前も、姐さんも死ぬんじゃねーぞ」

「わかつてる」

「誰にモノゆうとんねん。アホ」

三人の会話が終わると、紫は車の屋根の上へと立つ。そして、太郎は運転席の窓から

一発炎を弾丸を発射すると、前方にあつたガードレールをぶち壊した。

その先にあるのは断崖絶壁。それでも太郎は更にアクセルを踏んで、スピードをあげた。

紫は屋根の上で集中している。そして、車がついに崖から落ちようとしたその時、

「行くでえ……雲河！」

紫の声と共に、車のタイヤの下に質量のある雲の道が作られた。それは、どんとどんと伸びて行き、一つの道となる。

鳴神紫の力は、事情を知らない九我山以外の人間からは、雷の式神であると思われている。

だが、令は知っていた。そう

「令、本気出すよ」

「うん」

紫はただの人間ではない。雷神の鬼神　鳴神紫。それが、紫の本当の姿。

紫は体から穏やかに、そして時に激しく放電を開始する。それに合わせて紫の姿も変わっていく。

髪の間隙からは鬼族の角。頬には悪鬼特有の紋様。体にこれといった変化は無い。

雷神は元々人間とかなり形に近い悪鬼なのだ。それと人間のハーフである鬼神の紫は、

親よりもかなり人の姿に近い。

「久しぶりにみたけど、相変わらず綺麗だ」

「……照れるやないか。おいで」

放電を止めた紫から差し伸べられた手を取り、令も車の屋根へと上がった。猛スピードで走っている車の上に

居るはずなのに、風が無い。これも紫の力なのだろうか。紫は視線でそれに答えると、

前方を飛んでいる空船を見据えた。すると、空船の砲身がこちらを向き、狙いを定めているのがわかった。

「令、行くよ」

「うん。どこまでも」

破壊の光が車の屋根を掠めると同時に、二人は中へと舞い。そのまま勢いよく空船へと向かって飛んでいく。

紫は令と手を繋ぎ、力を込めて狂化を最大限まで引き出すと。力を緩めてリラックスした体勢へと移行。

そして令は 九我山の鬼憑を超えた、更に上位の力【神憑】を発動させた。

何故、令だけが神憑と呼ばれるのか。そう、九我山の長い歴史の中でも、”鬼【神】と合体した鬼【憑】使い”は令一人だけ。

紫の体が粒子と化して行き、令の体に一瞬吸い込まれたかと思うと、すぐに雷が迸った。

雷は令の体に入ったかと思うと、紋様へと変化し、令の体に刻み込まれる。

普通の悪鬼のような、鎧が出るのとは違う。純粹に、能力だけが令に宿った。

「逝っけえエエエツッ！」

令の手の平から凝縮された雷の球が放たれた。反意思で作られたそれは、凄まじい速さで

空船へと接近するも、空船のハッチから出てきた何かに、真つ二つにされてしまう。

目を凝らすと、それはジェットスキーに乗った三枝千里。その後ろからは黒の龍。

「千里と兩龍やで。どーする？」

「答えは決まってるよね？」

「勿論」

「ぶっ潰す。だよな」

更に加速し、夜風を切り裂きながら千里と雨龍へと接近。雷を拳に纏わせ、体勢を整えると

千里はジェットスキーを蹴り、中へと跳躍すると、すれ違い様に令へと刀を一閃。

神憑を使い、身体能力が鬼神並みに上がっている令でも、早いと感じる一撃。

「ッ」

体を投げ出すようにして、それを避けると千里は地上へとどんどん降下していく。

それを拾うように動き出すジェットスキー。アレは凜が操作しているのだと予測すると、

上空から幾つもの火球が降り注いだ。更に速度を上げて、それを回避すると、眼前に雨龍が現れた。

「読めてンんだよオ！」

黒龍と合体した雨龍の拳が、令へと迫る。二階堂の【予知】は厄介な力だ。目から取り入れられる

全ての情報が頭へと叩き込まれ、未来が本当に見えるかのように予測できてしまうのだ。

だが、それは”見えれば”の話。令は雨龍の視認を越える速度で蹴りをカウンター気味に繰り出すと、

そのまま雨龍を吹き飛ばし、力を練る。

「いづくでえ！」

「えーと……必殺、稲妻落としだったね」

その言葉と同時に、地上へと落ちていく雨龍目掛けて、何発もの雷が雨のように降り注ぐ。

一撃一撃が当たる度に、雨龍の体が細かく痙攣するも、相手は最硬の黒龍。油断は出来ない。

「やってくれるじゃない。九我山のボーヤ」

再び接近してきた千里は今度はジェットスキーに乗りながらの斬撃。どちらかというと、

雨龍よりも千里の方が、一撃必殺の攻撃なのでこちらの方が遙に手ごわい。

更に彼女は狂乱の力も持っているのだ、一時的な力は令とほぼ互角なので、再生能力もあてにならない。

「坊やじゃない、令です」

「あら失礼」

けん制に雷を何発か放つも、ジェットスキーは速度と小回りが利く為に中々当たらない。

だが、確実に令の思惑通りに戦いは進んでいる。そして

「おらぁアア！」

紫の作った雲河を走りながら、太郎が炎の弾丸を連射し、一撃で

ジェットスキーを半壊させる。

部品が飛び散り、千里は舌打ちすると狂乱の力を発動させ、人間とは思えないような跳躍力で

雨龍の背中へと飛び移ると、雨龍と千里はジェットスキーを補充する為か、空船目掛けて飛んでいく。

これはチャンスだ。令と紫はそう判断すると、自らも追いかけるの止め、車の屋根へと一旦着地。

「太郎くん。無装返して」

「お、アレをやるつもりか？」

太郎がニツと笑う、令は返事代わりに笑顔を返し、

「紫ちゃん。アレやるよ」

「任しときー！」

令の無装が形を変えて、見た事もない無骨で巨大な拳銃の形へと姿を変えた。それは、小型のレールガン。

様々な部品や、複雑な機構を組んで作ったオリジナルの兵器。そして、令は拳銃内部に設置されたコンデンサへと電流を送った。

サイズも通常の拳銃よりも遥に巨大だ。普通の人間が撃てば、反動で体がおかしくなってしまうほどに。

だが、紫と合体した令はたやすくそんな常識をぶち破る。まさに、令と紫専用の武器だった。

「さて、今度は紫ちゃんの番」

そう告げると、雷とは違う光が令の手から溢れ、レールガンを激

しい光が包む。

これが紫の式神【威光】。光に触れたモノの威力や強度を何倍にも増幅する力。

鬼神である紫と、鬼憑使いの令がわざわざ合体する理由は、一つの体で二つの式神が使えるようになるからである。

更に、二人の式神の相性は、今のレールガンのようにかなりお互いの欠点を補える。

「太郎くん。車出して」

「おうよオ！」

雲河を車が疾走する。令は腰を落として、慎重に銃口を空船へと向けた。空船から何発か光や大砲が飛ばされてきたが、

太郎が炎の障壁を作ったり、中に居る紫が雲河の数を増やしたりして、それらを何とか避ける。

そして、空船との距離が数メートルまで近づいた瞬間、令はその引き金を引いた。発射音は無い。

だが、弾丸が船体に命中した瞬間、鼓膜が破れるような轟音が響き渡り、空船の後部が丸ごと消え去っている。

「やったか……？」

ゆっくりと煙を吐き出して下降して行く空船。すると、その中から煙を吐き出して、新たな空船が現れた。

今まで乗っていたのよりはかなりサイズが小さいが、それ故に中々早そうな機体にも見える。

甲板に居るのは、雨籠、千里、万里、凜と何人かの三枝だろう。肝心の榛名神璽の姿だけが見えない。

「……」

突然声が響き、慌てて振り向くと、そこには相変わらず黒いスーツに黒いヘルメットを被った神璽がそこに居た。

後ろでは、凜の空船がかなりの速度で遠ざかっている。どちらを優先すべきか。と一瞬迷ったが、

凜達の事はユニオンに任せておけば良いと判断し、令は眼前の神璽へと意識を集中させる。

「神璽さん……貴方、何をやってるんですか？」

令の質問に神璽は答えない。ただ、懐から一枚の紙を取り出すと、それを令に押し付けた。

そして、神璽は胸辺りに領域を出現させ、そこから煙幕を作り出すと煙の中へと姿を消した。

慌てて煙の範囲外に脱出するも、かなりの煙幕を作った所為か、周囲が全く見えない。

煙が完全に風邪に流れていった頃には、神璽の姿はもう何処にも見えなかった。

「紫ちゃん。気配わかる？」

「あ……結構微妙やね。そろそろ効果薄れとるから、大まかな方向しかわからんわ」

「そう……一体、なんだってんだよ！」

令は苛立ちを隠せずに、誰も居ない空へと悪態をついた。

第11話：愛 - Love - (前書き)

明日は人生で一番待ち望んだゲームの発売日です。

その為、しばらく投稿数が激減します。

元のペースに戻るのは、新年かと。

千絵姉エを攻略するまでは……死んでも死にきれん。

令はしばしの悪態をついた後、神憑の力を解除し再び紫と分たれた。途端に令の体は、

脱力したように沈み、慌てて紫がそれを支えて、雲の道を走っている太郎の下へと飛ぶ。

神憑の力はなまじ強力な分、その反動も強い。荒く息をする令を心配そうに見つめながら、

紫は車まで辿り着くと、後部座席のシートにそつと令の体を寝かせ、自分は助手席へ。

「それで、これからどうするんだ？」

「とりあえず、令の体の調子が戻るまで休憩や。アタシは由加さんに手紙の事とか連絡」

せなあかんから、太郎は安全運転で下まで降りてやー」

「うー」

太郎はそう言うと、再びエンジンをかけて慎重に崖まで車を走らせていく。その間に紫は、

神憑が渡した手紙を開き、中を見る。「二十年前の勝負」中にはそれだけが書いてあった。

意味が分からない。由加と神憑は何か勝負をしていたのだろうか？ だが、考えていてもわからない。

紫は携帯電話を取り出し、アドレス帳から由加の名前を選ぶと、電話をかけた。

「あ、由加さんですか？ 紫ですー」

「ああ、紫か。そろそろ連絡があると思っていた。  
こっちは今、浅葱襲撃事件で大騒ぎだけど、そっちには何か進展  
があった？」

紫は順を追ってこれまでの事を説明した。一之瀬の空船の事。そ  
れに神璽が乗っていた事。

先程まで戦闘していた事。そして、最後に神璽から預かった文面  
の事を説明すると、由加はしばし考え込み、

「二十年前……。紫、私はこれからそっちに合流する。蒼二や運命  
にはこちらから説明して

おくから、お前達は私がそちらにつくまで、ゆっくりと体を休め  
てて」

「あ、はい。今の消耗が激しいんで、街のほうまで降りてホテルに  
でも入っておきますわ。

場所は後でまた連絡しますんで、とりあえず、浅葱方面へと向こ  
うていてくださいー」

「わかった。迷惑をかける」

そういうと、由加は電話を切った。紫はため息をつき、太郎に街  
の方へと向かうように命令すると、自らも眠りにつく事に決めた。

令が目を覚ましたのは、翌日の昼頃だった。慌てて起き上がると、隣には太郎が座っている。

車を運転しているのは、紫。そして、助手席には何時の間にか由加が乗っていた。一体、何が起きたんだらう。

寝起きの頭でぼんやりとそんな事を考えていると、由加が不意に後ろを向き、令が目覚めた事に気づいた。

「令。おはよう」

「あ……お、おはようございます」

「悪いけど、しばらく一緒に行動させてもらう事になった。よろしく頼む」

「それは構いませんが。今の状況を説明していただけますか？」

「昨日の夜、紫から連絡を貰って、二人と合流したのはさっきかな。当面の目的は勿論神璽。」

浅葱襲撃の件に関しては今、蒼一と遥緋と運命が二階堂に話を付けている。

郁人と竜胆は一時浅葱を離れて、今はユニオンの状況整理をしてくれているよ」

「はあ……それで、僕達は今何処に向かっているんですか？」

「神璽についての情報が、さつき五月の颯太からタレこみが入った。何か、アイツは六道特区

に今居るみたい。同じユニオンで九我山と仲のいい、彼からの情報だ。信用してもいいと思う」

「ええ、颯太兄ちゃんは信頼できる人ですよ」

令にとつて、莉王の他に兄と慕っているのが、十名家の五月家の長男、五月颯太。

莉王がムチならば、颯太は飴。律や莉王に理不尽な要求をされた時に、いつも助け舟を出してくれたのが颯太だった。

無口で愛想がないとよく言われるが、感情を出すのが苦手なだけで、本当は心優しい人物だである。

大学生になつた今でも親交があり、幼い頃から二人で一緒に旅に出た事があるぐらい仲が良い。

「それにしても……何で、神璽さんは六道特区何かに……」

「……六道特区はね。私と神璽が育つた場所なの。六道の研究である結晶と人間の融合体の

被験者として、私と神璽ともう一人はそこに居た。それで、ある時に、私と神璽だけが

先生と呼び慕っていた人に連れられて、六道特区から逃げ出したの。そこからは今も知ってる通りだよ」

「はい。確か、神璽さんは旧一課に管理されて、由加さんは六道特区に戻されたんですよね。

それで……神代事件をきっかけに、こうやって今に至つたとお姉ちゃんから聞きました」

「うん。あの時に蒼二や遥緋と出会ってなかったら……今頃どうなっていたか、想像もしたくないよ」

「そうなんですか……」

由加は相当過酷な人生を送ってきたのだろう。表情には出さないが、声色で大体わかる。

そもそも、令達の世代からしてみると、蒼二を初めとする今のユニオンの幹部達は、

英雄と呼んでも言い位の活躍をしている。神代事件から始まり、神々の黄昏事件に終わった

あの時期の戦いは、令自身幼かった為に殆ど覚えていないが、当時は本当に酷かったらしい。

御伽噺ではない、本当の世界の危機。目の前に居るのはその事件の当事者。

何となく、信じがたいがそれが現実だというのを、令は心の奥でそう悟っていた。

「とりあえず、六道特区へと向かおう。そこで、私は神璽と話を付けてくるから。」

令や紫や太郎は、私のサポートをお願いできるかな？ 手伝ってもらって厚かましいのだが

この問題だけは、私と神璽でちゃんとやらなきゃいけない気がするの」

「ええ、それはもう大丈夫ですよ。お姉ちゃんにバレなきゃ、何だつてやりますよ。」

ねえ？ 紫ちゃん、太郎くん」

「そうですわー。律ねーさんにバレたら……考えるだけで恐ろしゆ

うてかなわん」

「想像するだけで怖えよな……律姉えが笑顔で槍を担いで追いかけてくるんだぜ……」

太郎の言葉に令と紫は、お仕置きの事を想像してしまったのか、顔色が一気に悪くなった。

そんな三人の反応をしばらく見ていて、やがて由加はハツとしたような顔をする、

「大変言い難いんだが……律、襲撃事件の事知ってたよ」

その言葉に、令はまだ神憑のダメージが残っていたのか、「うーん」と唸ると気絶し、太郎は口を開けたまま硬直。

紫は「どええええええええええ！？ あたしら殺されてまうううう」と動揺した結果、車が豪快に回転して

ガードレールへと思いつき突っ込むと、白煙を上げてしばらく沈黙した。

その頃、研究の街【六道特区】の最奥。廃棄された六道の第十七研究施設の入り口の前に神璽は居た。

相変わらず、黒のスーツにフルフェイスのヘルメット。それを取るわけでもなく、まだ電気が生きている施設の中へと入る。

ムツとするような薬品の匂い。血が染み付いた廊下。その中を、

神璽はゆつくりと歩いていく。

時折、何かを思い出すようにして止まり、やがて動き出しを繰り返して、神璽はついに一番奥の部屋へと辿り着いた。

そこは何かを監視する為に作られた場所。粉々に砕かれた強化ガラスの向こう側には体育館程度の広さの場所。

「……………」

神璽は、ガラスを飛び越えてそこへと降り立つと、懐かしそうに周りを見渡す。

大体の物が無くなってはいるが、自分達が寝食を共にしていた置の敷かれたスペースだけはそのまま残っている。

そこには、三人分の食器。三人分の布団が残っている。そして、机の上には古ぼけた一枚の写真。

そこに写っているのは、勝気な瞳をした子供。呑気な顔をした子供。知性的な顔をした子供の三人。

「また。ここに居たのか」

遠くからやや呆れたような声がした。神璽がその声のした方向を向くと、そこには見知った顔。

五月家長男　五月颯太が、相変わらず何を考えているのか読めない瞳で神璽を見ている。

神璽はそれに対して、答えを発するまでも無く、ただ軽く肩を竦めた。

「さつき、由加に連絡をした。もうすぐ、お前の望みは叶う。だけど、わからない。」

何故、お前はそんな格好をしている？　そもそも、それになる意味があるのか？」

神璽は颯太の問いに、しばらく黙考した後。やがて、声を出した。

「いや、最初は意識していなかったんだよ。ただ、普通に顔を隠してやるべき事をしようとしただけ。」

「だけど、同じ技を使ったら何か、令が勘違いをしたみたいでさ。折角だし、ちよつと悪戯してみただけさ」

「概ね理解した。……もういいだろう。それは取ればいい」

神璽はそう言われると、ヘルメットを取り外した。そこから現れたのは、神璽のトレードマークである染めた金髪。

だが、その下にある顔は榛名神璽の物ではなかった。中性的な顔をした、男か女かわからないような人物の顔。

「令の誤算は、結晶使いはこの世に二人だと思っていた事だね。まあ、無理も無いけど。」

「多分、結晶使いが本当は三人居るなんて知ってるのは、今生きてる中では君だけだよ。颯太君」

「……令、素直な子。あまり苛めるな」

「怒るなよお。私だって、最初は騙す気は無かったんだ。ただね。」

「勇一君は随分楽しそうな人生を送ってたみたいだし。」

「私と亜矢子ちゃんの事を全く考えない行動も幾つかしているんだ。偶には罰が必要なのださ」

「……経緯を聞いた俺としては、仕方の無い事だと思う」

「つれないねえ。颯太君は、女心が分かっているよ」

「お前が言うな、紡」

黒スーツに黒のヘルメットを被っていたのは、榛名神璽ではなく、  
颯太の言葉通り六道紡。

令が勘違いするは無理も無かった。結晶使いはこの世に二人。それが、令を取り巻く環境の常識。

だから、逆に紡はそれを利用して神璽への意地悪を試みたのであった。その為の手も、幾つか打つてある。

紡の目的は、元々神璽が居ない状態の由加を此処まで連れて来ること。幾つか計画案を練ってはいたが、

偶々令が勘違いしてくれたので、その計画を応用して、ついに此処までこぎつけた。

きつと明日には到着するだろう。そして、友達の依頼も果たせるだろう。紡は明日が楽しみでならない。

「颯太君。明日だよ。明日は私達のこれからの運命が決まる日。楽しみだねえ」

「……俺、複雑な心境」

「だろうね。悪いけど、私にとって二十年前の約束はこの世界よりも大事だからさ。」

残念だけど、颯太君は二の次ってわけ。でも……貴方の気持ちはとても嬉しかったよ。

こんな自己満足に、信頼を捨ててまで協力してくれた事には、確かに感謝している」

「……太宰治の名言の通りにしたまで」

颯太は紡から視線を逸らすと、そっぽを向いてそう呟いた。しばらく呆気にとられていた紡だが、

やがてその言葉の意味がわかったのか、ケラケラと笑い出す。颯太はそのままそっぽを向き反応をしない。

紡は颯太をからかうのを止めると、写真を見つめて懐かしそうに笑った後、

「今更感が漂うけど……納得したいんだな、私は」

颯太に聞こえないようにそう呟いた。

太平洋上で死闘を繰り広げていた少女と黒髪の男は、肩で息をしながらアレから二日経ってもまだ戦っていた。

少女が起こす風に対し、男は様々な力を使い、必死に逃れようとしているのだが、相手も相当な熟練者のようで逃がしてくれない。

そもそも、何でこんな事になったのだろうと思う。”恋人に海に沈められ”、ようやく帰国の目処が立ち、

彼女への印象を少しでも良くする為に、髪を黒に染めなおし、いざ日本へ帰ろうと思ったら、見知らぬこの少女に襲われて、

かれこれ、何週間も殆ど休む事無く戦っている二人。

その内、深夜3時から六時までは、休憩の時間という暗黙のルー

ルも出来てしまい。男は心から困っていた。

「なあ……お嬢ちゃん。俺、君に何かした？」

「……してない。……私は、ただ依頼をこなしているだけ」

「だーっ！ もう、誰の依頼だよ全く！ 意味がわからねえ！」

「……言えないしわかんない。……最初は貴方の監視だったのに、途中から足止めになったから」

「ああそう……」

「……貴方、榛名神璽だよな？ ……名前だけ聞いた事がある」

黒髪の男 神璽は濡れた前髪をかき上げると、

「そうだよ。何、お嬢ちゃんもしかして俺のファン？ 残念ながら。お兄ちゃん、

もう心に決めた人が居るんだわ。ちょっと女遊びしようとしただけで深海に沈める怖いお姉ちゃんだけだな」

「……死ねばいいのに。……あ」

「あん？」

少女は服のポケットから防水加工された携帯電話を取り出すと、操作を始めた。

中学生ぐらいの日本人の女の子だ。まだこんな若いと言うのに、修羅場を幾つも潜り抜けてきた神璽とまともに戦う。

少女はメールを開いているようで、何回か文章を読み返しているのだろう。目を上下させている。そして、携帯を再び仕舞うと、

「……計画変更だつて。此処からだ……うん。決定」

少女が神璽に向かって手をかざす。すると、爆風が舞い起こり、神璽の体を再び海の上をすべるように飛び始める。

さっきまでと同じ行動。だが、唯一違ったのは自分の向かっている方向。さっきまで少女が向かわせてくれない方向へと飛んでいる。

「……あ、駄目。……速度守つて」

神璽が風に乗って速度を上げようとすると、正面から突風が吹き荒れ、速さが弱まる。

「なんなんだよーもう!」

もはやヤケクソ。と言わんばかりに、ついに神璽は抗うのを止めて少女の起こした風へと乗った。

第12話：風 - Wind - (前書き)

何か、酒と音楽の勢いで書いてしまったので投稿。

JOINTは久しぶりに聞いた神曲。

今回から、ややこしい話になります。

書いててめんどくせーと思った展開は初めてです。

後、キャラ名千島蒼二でWebゲーやってる人を見つけて笑ったW

ww

自分も某MSTで罪歌と狂使って色々キャラ設定考えてたなあ。

キャラ作りするには、ああいうゲームはもってこいです。

それでは、今度こそ間が空きますー！。

第12話：風 - Wind -

夜通しの運転の甲斐あつてか翌日の午前中には、令達は六道特区の近くへと来ていた。

通常、特区は一つの街を結界で覆い、周囲から完全に隠蔽して運営していくのであるが、

六道特区は海の一部を埋め立てて出島を作り、最奥部以外は一般開放もしているという異端の特区。

通称【研究の街】。表向きには日本でも有数の学問都市として栄えているというのがこの特区の在り方だった。

学生や研究員溢れるメインストリートを紫が運転する車は走る。

そして、奥の方にある検問の近くまで行くと、

「人払いの結界やね。……典型的には、そこいらのとかわらへん」

式神の中でも結界と呼ばれる異端の式神は、こうやってルールを付加した空間を作る事が出来るのである。

術者の力量、力によって内容は異なるが、神代刹那の【楽園】は結界の式神の中でも最強クラスの力。

あらゆる事象や現象を思いのままに操るが、それは結界の範囲内だけの話。

戦闘能力は低いが、悪鬼の討伐には欠かせない式神なので、召還できたらもはや仕事にあぶれる事が無いといわれる程。

そして、特区の大半に張られている結界の内容の大半は、悪鬼と式神を知っている人間のみが入れるというもの。

その為、一般人の大半は検問がある事は知っているが、無意識の内に行動を操られ、特区側へと向かう事はまず無くなる。

稀にそういう類のモノに対して感覚が鋭い人間が入ってしまうのだが、その辺りは特区の管理者によって処理されるというのが基本

だった。

「そういえば、令。あたし、六道の事とか何も知らんのよ。六道って何してる一族なん？」

「……紫ちゃんが僕の家に来て、十年以上経つけどさ……流石に同じ十名家なんだから、

それぐらいは知ってて欲しいな。てゆか、紫ちゃん、由加さんのトコのユニオンも

最近まで何の組織だか知らなかったよね!？」

「……だって。あたし、鬼神やもん。人間の事は人間で何とかしてください」

誤魔化すように拗ねたような態度を取る紫。令はそれを呆れた目で見る。すると由加が口を開き、

「紫。ユニオンはね。鬼神、純血、混血が共存する世界を作る為の組織なの。主な活動は、

迫害されている鬼神を見つけ、保護する事。純血と混血の抗争の抑止力となる事。

基本はそうやって活動して、世界の流れを少しずつ変えて行ってる」

「そうなんすか。……確か、由加さんはその幹部なんでしたね？」

「そう。私以外にも四人居るよ。郁人、蒼二、神璽、運命。立場は違うけど、皆共存を望んでる」

(……サダメ? いや、あのアホババアがそないな事するわけない

な。クーちゃんやヤマちゃんなら別やけど)

「どうかした？」

「いえー。何か嫌な奴を思い出してただけっすよ。……そのユニオソって、鬼神もおるんですか？」

「うん。何人が居るよ。今度本部に来て見ると良い。きっと、仲良くなれると思うから」

「その中に、ちっこくて、どーみても中学生で、めっちゃ暴れまくる鬼神おりませんか？」

「アイツとも、もう何十年かあつとらんくて、生きてるといいんですけどねー？」

「いや。基本的に皆、十歳前ぐらいだね。その鬼神って紫の知り合いなの？」

「ああー、なんていうやら。あたしの妹みたいなモンですわ」

「紫ちゃんの妹か……何か、無駄に騒がしそうだね」

「つてか……俺は姐さん育てた親の顔がみてえんだが」

「おとうちゃんはまだ生きとると思うでー。一度、集落には帰らんとあかんかもな。」

「ああ、後アイツはめっちゃ喋らん奴やで。特に、アイツは女と話さん。ガキの癖して、メンクイでなー。」

「好みの男見かけたら、何十年もストーカーするような奴やで。きっと、世界の何処かでまた男を泣かしたるんやないかな？」

紫は令と出会う前に何をしていたかについては、何時も適当に流して会話を終えてしまう。

だから、令にとって紫の身の上話を聞くのは、本当に久しぶりの事だったし。雷神の王が生きていると言う事も、

妹みたいなのが居ると言う事も、今始めて聞いた。それに何か胸の中に嫌なものを感じながら、しばらく黙って座っていると、

「お、アレ。颯太兄ちゃんやない？」

六道特区の海に面した道路のガードレールに、一人の男が座っていた。周囲に人気は無い。

男 五月颯太は、令達の車に気づいていたのだろう。ゆっくりと腰を上げ、道路の真ん中で止まった。

紫はそのまま車を停止し、太郎は他特区の為、一応の配慮の為に粒子化すると令の筒の中へと入る。

そして、三人が車から降りると、颯太は挨拶をするわけでもなく、淡々と言った。

「由加。アイツ、待ってる。場所、お前達が昔良く遊んでいた場所わかるな？」

「……颯太。お前、何を知っている。私も神璽もお前に境遇の話は殆どしていない。

情報を貰った時から怪しいとは思っていたけど……お前は何を企んでいるの？」

「……処罰やその話は後。早く行け」

「……わかった」

由加は颯太の横をすり抜けると、そのままその奥にある建物を見据えた。十年ほど前に、自分が脱走した施設とは違う。

ここに来た記憶も無い。だが、記憶には無くても体が覚えていた。確かに、自分はここに居たと。

一瞬立ち止まった由加だが、もうそこからは振り返る事無く、地下へと続く入り口目掛けて歩き出した。

( ……気に入らない気配がするな )

( どういう意味？ )

結晶の中に居る、自分の人格をベースとして作られた九尾の半身の意思が忌々しそうに声を上げた。

神璽が数十メートル範囲内に居る時だけ、余剰の反意思と意思だけを抽出し、

お互いの持つ半身を合体させる事で、完全な九尾に戻す事が出来るのだが、今はまだ遠いようだった。

( “俺様” クラスの匂いがするの。ワタシだけじゃ、ちょっと敵しいかもね )

( 九尾の狐と同じくらい……本当に、神璽なのかな？ )

( 少し遠いけど、半身の匂いもするね。わからないけど、進むしかないよ )

( わかってる )

由加が建物の中へと入っていくのを見送ると、令は颯太がいつもの颯太らしくない事に気づいた。

何時もは直立不動で必要の無い時は全く動かない颯太だが、今は何か落ち着かないのか、

手を握り締めて開き、握り締めては開きを繰り返している。小さい頃から、一緒に居たが

こんな颯太を見るのは初めての事だった。それを不審に思い、令は颯太へと問うた。

「颯太兄ちゃん。処罰って何？　ねえ、何で神璽さんが此処に居る事知ってるの！？」

「……お前は、何も知らなくて良い。安心しろ」

いつも通り、優しく笑うと颯太は令を見た。子供の頃からそうだった。令が悪戯しても、

何か悪いことをしても颯太はいつもこうやって、令の事を諭してくれていた。

だが、今はもう子供じゃない。純粹に、不安と怒りが浮かび、令は怒った瞳で颯太を見据え、

「僕はもう子供じゃない！　ねえ、何が起きてるの？　一体、あの神璽さんは何なの？」

僕、ずっと思ってた。あれは神璽さんと違うって！　空船と戦った時だっておかしかった。

神璽さんは女の子を大事にするのに、凜さんに攻撃を仕掛けていたし、何より、

”僕は神璽さんの素顔”をまだみていない！　ねえ、何か言つてよ！”

そうまくし立てると、颯太の顔に僅かな感情の変化が見られた。だが、何か嬉しそうでもある。

まるで、子供の成長を見た親のように。そして、颯太は一度「ふう」とため息をつくと、

「アレは、神璽じゃない。忘れ去られた、由加の友達」

「その人が、二十年前の勝負をしに由加さんと神璽さんに挑んでるの？」

「そう。正確には、由加だけだと俺は解釈している」

「何で今更……」

令がそう呟いた時だった。建物の方から嫌な感覚を感じとった。

颯太もそれに気づいたようで、顔をやや顰める。

一番大きな反応をしたのは紫。ガクガクと体を震わせ、体の力が抜けたのか、膝を地面につくいた。

「な……なんやこれ。真正正銘のバケモンやないか……」

太郎も嫌な気配を感じとっているようで、筒の中に入ったまま震えているようだった。

それは　悪鬼にしかわからない。強大な悪鬼の気配。雷神の鬼神の紫でさえ、恐れ戦く

化け物の気配が由加の入っていった建物の中から感じられる。人間である颯太と令には

そう強く感じられないが、同じ種族である太郎と紫には得体のしれない恐怖が襲い掛かっていた。

「ゆ、紫ちゃん……?」

「令、逃げるで。……あの中に居るのは、マジモンのバケモンや！  
ウチのお父ちゃんよりも 気配がでかい。あん中には神話レベル  
気配を出す悪鬼があの中におるんやで！」

「由加さんはどうするんだよ?」

「馬鹿！ 由加さんだって、九尾の狐が中におるんやで！ あの伝  
説の悪鬼がや！」

あたしらとはもうレベルが違う。子供のお遊びの時間は終わった  
んよー!」

「……じゃあ、紫ちゃんと太郎くんは先に行つて。僕は、一人でも  
やるから」

「馬鹿いうなや！ アンタ一人で何が出来るつて言うん!?!」

「もう、何もしないで見てるのは嫌だ！ 何か出来るのに、何も  
しないで逃げるのはもう嫌なんだ！」

「令……アンタ」

令は無装を剣の形に顕現させると、前へ向かって歩き出す。する  
と、眼前に突き出されたのは銀色の金属バット。

颯太の瞳の色が変わっている。【千里眼】を発動させたのだろう。  
それは、これ以上進んだら攻撃するという意思表示。

今まで何度も稽古をつけてもらったが、令は律や莉王や颯太に勝った事は無い。だけど、今回はかりは譲れなかった。

「本気か？」

「悪いけど、僕は僕のしたいようにするよ」

「面白い！」

颯太の無双バットが閃き、令の顔面へと突き出された。それを腰を捻ってかわすと、令は一旦颯太から距離をとる。

無双バットは打ったモノを重量、質量関係なく望んだ場所まで飛ばす危険な能力。

それ故に剣で受け止めるだけで、吹き飛ばされてしまう。颯太を倒すには、まず近接攻撃では難しい。

そうなれば、死角から狙撃をするのが常套だが、颯太には千里眼がある為に死角は無い。

すなわち、攻略不可能。緋眼のような速さで、切りつけられればいいのだが、生憎そんな力は持っていない。

「っしやああアアア！」

その時、筒の中から粒子状態の太郎が飛び出し、令の中へと進入した。慌てて鬼憑を発動させると、

太郎の力の恩恵が湧き上がり、軽装と鬼を模した仮面が令の体へと顕現された。

（太郎くん？ 大丈夫なの？）

（ああ、俺は姐さんと違って馬鹿だからよオ。相手がどんなバケモ

ンだつて、もう考えるのもめんどくさくなつた。

それによ、一回颯太兄ちゃんと戦つてみたかつたんだよ。良いだろ？ なあ？)

(太郎くんらしいね。わかつた。今回は体は僕が動かすから、反応の方をよろしく！)

(おうよオ！)

令は剣に炎を纏わせると、颯太へと向かつて斬りかかつた。それを、バットを振つて迎撃しようとする颯太。

まずは、剣と無双バットを触れさせない事、太郎の直感と鬼憑で強化された身体能力を駆使して、バットを避ける。

だが、颯太も一流の式神使いであり、十名家の五月の長男。並みの腕ではない。

バットを振り回し、アスファルトに思い切り叩きつけると、石礫を弾丸のように発射した。

令は無双を巨大な盾へと変えて、礫をやり過ごす。だが、その時には既に颯太は、令へと接近していた。

そして、盾目掛けて無双バットを振つ　ろつとしたが、体重移動を駆使して、横へとステップ。

次の瞬間。盾の正面からも凄い勢いで炎が噴出した。流石の颯太にも冷や汗が伝う。

一旦距離を取り、颯太は一瞬目を瞑つて意識を集中させると、

「令、強くなつたな」

賞賛の笑みを送りながら、周囲に三十個程の白球を顕現させた。

これも、無双バットの能力の一端。

颯太は物凄い速さだが、一発一発にちゃんと命令を込めて、白球

をバットで打っていく。

最初の何発かは令目掛けて、だが、これは鬼憑状態の令にとっては苦でもない。

だが、白球は打ち出されることに、空中でぶつかり合い、乱反射して令と颯太を覆うようにして結界のようなものを作り上げた。

「っ  
！」

突然背中に痛みが走った。白球が背中へとぶつかり、またすぐに球の群れへと弾き返されていく。

いつ、どこから攻撃が来るのが全く分からない。前方だけならまだしも、死角から来られては避け様が無い。

だが颯太は違う。千里眼の力を使い、あらゆる方向を知覚しているので、球の流れや、いつ何処から攻撃がくるのかも全てわかっている。

正に、式神と一族の力の長所を利用した、昇華された力だった。

「令、諦める。まだ、俺に勝つのは早い」

「……嫌だね」

「余り困らせないでくれ。俺、令をあまり傷つけないで」

「……颯太兄ちゃん。一つだけ言っておくよ」

「何だ？」

「そうやって、蚊帳の外に置かれるほうが僕は百倍傷つくんだよ！」

令の無装が形を変え、二丁の拳銃の形へと変化した。そこから放

たれたのは炎の弾丸。

それは上手くぶつかり合っただけでなく、颯太の白球を貫いてしまっただけの威力だった。

片手ずつでの狙い撃ちだが、一発一発外す事無く丁寧に白球が破壊されていく。

「良い腕だ。神璽にお前を紹介したのは間違いじゃなかった」

颯太は疲れたように、無双バットを突然降ろした。そして、海の方を黙って見つめる。

しばらくした後、震えていた紫が何かに弾かれるように立ち上がり、

「この気配……！」

「令、ゲームオーバーだ。最後の招待客が来た」

颯太は何処か悲しそうな声でそう呟く。すると、凄まじい突風が吹き荒れ、何かが高速で飛んでくるのが見えた。

目を凝らしてよく見てみると、少女が男の片足を掴んで凄まじい速さで飛んでいる。

そして、最後に高く上昇すると、空中でジャイアントスイングをして、持っていた男の足を離す。

「うわあああああああああッッッッ！」

轟音を立てて、令の近くのアスファルトに男が激突した。粉塵が晴れ、令がその男を見ると。

どこかで見えた事がある顔だった。でも何か違和感がある。服ではない。髪の色。

令が言葉を発しようとしていると、先に男の方が声をあげた。

「おお！ 令じゃん！」

「……神璽、さん？」

「おお、そうそう。てか、此処どこ？ あの嬢ちゃんに此処まで無理やり連れて来られてさ。

後さ……由加と最近会った？ 会ってたら、何か俺の悪口言ってたかな？」

神璽が早口でそうまくし立てるも、令は流れについていけない。口をパクパクしたまま硬直しているだけ。

颯太に事情を説明してもらおうとするも、颯太は颯太で飛んできた少女と何時の間にか喋っており、

「時間通りだ。流石、名だたる何でも屋なだけある」

「……いえ。……料金は今回は結構です。……紡さんに、依頼していた事でチャラになるので

……依頼の方はどうですか？ ……あの子、子供だから見つけにくいかもしれませんが」

颯太は、少女の問いに薄く笑みを作ると、とある方向を指差した。少女が釣られてそちらを向く。

そして、そこに立っていたのは

「お前に子供って言われとうないわ！ 碧、お前今まで何しとったん！？」

懐かしそうな顔で立っている紫だった。

第13話：蛇 - Basilisk - (前書き)

キラ キラにマジ泣きしてしまいました。

18歳未満の方々にはアレですが。

千島蒼威を「傷だらけの遠い明日」から知っている人の中には  
現在やってる人も居るんじゃないでしょうか。

兔に角笑って泣けるゲームでした。

そんなわけで、相変わらず次回更新は未定です。  
Daysの郁人になる線が濃厚です。

「……わあ、久しぶり」

「なあなあ、お前らこの子と知り合いなのか？」

少女と神璽の会話が重なり、更に場が混乱に陥る。今はもう何がなんだかわからないし。

紫は紫で懐かしそうな顔で、少女だけを見ているし、太郎は暇そうに海を眺めている。

そんな状況を打破しようと思ったのか、颯太は神璽の前へとゆっくり歩いた。

「お、颯太じゃん。久しぶり」

神璽は笑って颯太へと手を差し伸べたが、颯太は何か複雑そうな表情で、無視した。

更に放心状態の神璽へと向かって、一発やや強めの蹴りをお見舞いする。

「痛っ！ お前、何するんだよ！」

「もう少しすれば、俺が何故蹴ったかがわかる。とりあえず神璽、あっちの建物の行け」

「あ？ 何？ あそこで俺の歓迎パーティでもやってるの？」

「いいから！ 俺、キレる前にさっさと行けっ！ 中に由加居る！」

「はっはいいい！」

普段穏やかな颯太の剣幕に驚いたのか、神璽は乱れた服もそのまま建物へと駆け出していった。

そして神璽の姿が見えなくなると、今度は硬直したままの令達の方へと向き直り、

「紫、碧。続けて良いぞ」

「何かもうワケがわからないんだけど、紫ちゃん。その女の子は誰？」

「あー……こいつは、風早碧。さっき話に出たあたしの妹分なんよ」

「……私の方が、年上。……外見で決めないで」

「あーうつさい！ 鬼神なんやから一年も二年も生まれた差なんか関係ないやろ！

アンタがそんな中途半端な年齢で成長を止めるから、ややこしくなるんやろつが！」

「……肌は、女のいのち」

「何やコラア！ まるで、あたしの肌があんたよか老けてるみたいやんか！」

言い合いを続ける紫と碧と呼ばれた少女。大体分かったのは、彼女も鬼神であると言う事。

令は頭を掻いて、太郎の方を見た。完全にこちらの事には興味ない様で、炎で遊んでいる。

とりあえず、挨拶ぐらいしておこうと思った令は、碧の前まで歩いて行った。

「……紫。この子、誰？」

「令や。十名家に九我山つておつたる？ その長男で、あたしのパートナーや」

「えっと。九我山令です。お名前は……風早碧さんでよろしいんですよね？」

「……うん。紫がきつとお世話になってます。……紫のお姉さん代わりの、風早碧です。」

「……この前まで、海外で何でも屋のお仕事をしていました。」

「えっと……という事は、貴女も雷神の鬼神で？」

「……私、風神の鬼神です。……雷神と風神の一族は仲良かったんです。……母親同士が双子なので」

人間の世界の世界の関係で言うなら、私と紫は従姉妹同士となります。

「……十数年前にあったとある喧嘩の影響で、私と紫は海外で離れ離れになってしまい、ずっと探してたんです」

「はあ、なる程。……てか、紫ちゃん。ずっとウチに居候してて、碧さんを探そうとすらしなかったよね」

「だって、百年近く一緒に居たんやで。いい加減、そいつの顔も見飽きたわ」

「……相変わらず素直じゃないな。……私に会えて、おしっこ喜びそうなくらい嬉しい癖に」

「そんな事あるかいポケエ！」

再び言い合いを始めた紫と碧。流石に仲裁に入る気力も体力も残っていない令は、颯太の傍まで歩くと、

「颯太兄ちゃん。……全部、話してくれるよね？」

「ああ」

「その口ぶりからすると、久しぶりに会った僕の成長を見てみたかったのかな？」

だから、颯太兄ちゃんはわざと僕を試すような事をして

「いや、違う。少し、それもあつた。でも、本当は……ストレス解消に、誰かと喧嘩したかっただけ」

「え……」

「一応の事情は、仕方ないから話してやる。あつちも、当分終わりそうにないし」

颯太と令は未だに言い合いを続けている紫と碧の方を見た。何時の間にか、太郎も巻き込まれているようで、

紫と碧の真ん中に立たされては、どちらかに暴行を加えられ、殆ど涙目な状態。

それを呆れた目で見つめた後、颯太は一回咳払いをすると、今回の事の発端を語り始めた。

時間は遡り、由加は建物の中へと入ると奥の方に何か気配を感じた。まだ微弱ではあるが

かなり嫌な感じがする。それでも、今更引くことは出来ない。全てを知る為に此処まで来た。

何故、自分が此処を知っているのか。何故、懐かしいと感じてしまっのか、何故、涙が出そうになるのか。

由加自身にはわかっていないものの、先程から歩くたびに様々な感情が込み上げてくる。

壁についた血の染みも、薬品の匂いも何故か懐かしい。そして、直感だけで角を曲がって行くと、何かの監視施設のような場所へ着いた。

「ここは……」

ガラスを飛び越え、少ししたの空間へと降りる。そして、勝手に涙が零れた。

良く分からないが、涙が止まらない。何故泣いているのかもわからない。だが、由加は一度気を引き締めると、涙を堪えた。

「変わらないなあ。昔から亜矢子ちゃんはすぐに泣き止む子だったね」

由加は弾かれたように背後を振り返った。見ると、畳の敷いてあ

るスペースの一角。

子供用の机に腰をかけて、一人の人間が笑顔で自分の事を見ていた。男か女か判断が難しい外見。

胸がやや膨らんでいる事から、多分女だろうと由加は予測すると、声をかけた。

「お前、誰？」

「六道紡。君たちが、ずっと探していた六道家の頭首さ」

紡はやや悲しそうにそう呟いた。由加はその発言に目を見開き、硬直した。六道紡。

神々の黄昏事件の際にガルムから名前を聞いて、以後ずっと探していたのだが、消息はついに掴めなかった。

過去に六道特区に乗り込んだ事はあるものの、そこに六道の直系の姿は無く、

下の六道の人間達が人の為の研究を続けていたので、何もしなかったのではあるが、まさかこんな場所に居るとは思わなかった。

「教えて……あの手紙は何なの？ 何で、貴女は今頃私たちの前に現れたの？」

「うん。もうすぐわかるから」

紡は机から降りると、由加に近づいて優しく頭を撫でた。不思議と抵抗する気は無かった。

ただ、昔にも同じような事があった。そう思い、由加は目を瞑り、紡は手に力を込め、

「返すね、亜矢子ちゃんの記憶」

「亜矢子、ごめんね。本当に、ごめんね」

「ママ？　ねえ、どこに行くの？」

「……か、かくれんぼよ。亜矢子が鬼ね」

「うん。いーちーにーい、さーんしーい、じーお、ろーく……………」  
「ママ？」

「ゆーいち君。亜矢子ちゃん。今日は何をして遊ぶ？」

「俺、おままごとがしたい」

「嫌だ。勇一はこの前つーちゃんとチューしてたじゃん。あんなのおままごとじゃない」

「子供だなあ。亜矢子は。夫婦なんだからチューぐらいするだろー」

「勇一の馬鹿！」

「……じゃあさ。今日は私が娘の役をやるから、亜矢子ちゃんがお嫁さんね」

「それなら……やってもいい」

「亜矢子ちゃんもゆーいち君の事、好きなの？」

「うん……っーちゃんも？」

「うん。じゃあ、正々堂々の勝負ね！ 勝っても負けても私たちは友達！」

「わかった。私とっーちゃんはずっと友達だからね」

「うん。ゆーいち君も亜矢子ちゃんも私もずっと一緒だから！」

「うんー！」

「来い！ 早くこっちに来るんだ！」

「おじさん……誰？」

「嫌だよ！ ここから離れたくないよ！」

「うるさい。さあ、急げ！」

「つーちゃん……？ 先生は？」

「うそつき」

「つーちゃん？」

「私を一人にしないで言ったのに。約束したのに」

「違うよ。先生がね」

「あんなの先生じゃない！ あの人はただの裏切り者なんだから！」

「つーちゃん。何を言ってるの」

「もう、いいよ……二人とも大嫌い！」

全ての記憶が由加の中から溢れ出した。眼前に居る紡の事も思い出した。

そして全てが繋がった。母親にどう捨てられたのか。その後どうなったのか。

断片的に覚えていた全ての記憶が繋がり、由加は紡を正面から見据えた。

「久しぶり、つーちゃん」

「うん。久しぶり、亜矢子ちゃん」

「つーちゃんが、私の記憶を持ってたの？」

「そうだね。六道の継承の力については知っているだろう？ 六道内ですら使えないが、

全ての経験、記憶、知識を他の六道に提供することの出来る便利な力だ。

「だけど、私は異端だね。更に、他人の記憶を奪ったり、それを返す事も出来るんだ」

「あの時、先生が私達を渡した時に、つーちゃんは奪ったんだね」

「そうだね。今思えば、私も子供だったよ。怒りに任せて、君たちを糾弾し。」

あまつさえ、自分の事を忘れさせて他人になろうとしたんだ。かなりのアホっぷりだ」

紡は自嘲気味に喉を鳴らして笑った。その動作一つにも、懐かしさがこみ上げてくる。

六道紡は見た目や喋り方は子供じみているのに、妙に動作が大人っぽく見える子だった。

「それで、つーちゃんの目的は何なの？ 二十年前の勝負は……勇

一 神璽をかけたの勝負だったよね？」

「そうだね。実はさ。亜矢子ちゃんと勇一君が両思いだというのは薄々感じていたんだ。

でもね。今になっても、君達は結婚していない。どういう事だい？ まだセックスもしてないんだろ？」

「う……」

神璽と由加の関係は、神々の黄昏事件の際に一步進んだモノになるうとしていたのだが、

その間に様々な事件がおき、更にはユニオン設立の為にかなりの時間を費やして居た為、

まだそういう関係ではない。一番の問題は、神璽の女癖の悪さなのだが、それに関してはもう殴って反省させるのが常となってしまうっていた。

そして紡は、妙に顔を赤らめると、恥ずかしそうに付け足した。

「実はさ……」

「何？」

「私、五月の颯太君にプロポーズされたんだ。一年ぐらい前に海外で出会って、一緒に仕事したんだけどね。何かその過程で惚れられてしまっただけ……うん。結婚してくれって」

「嘘お！？」

意外だった。あの五月颯太がプロポーズするとはとてもじゃないが想像できない。

だが、それが真実なら何故、彼がこの場に居て自分を此処に呼び寄せたのかわかる。

由加がそう考えていると、紡は表情を引き締め、更に続けた。

「でもね。私は今でも勇一君の事が好き。亜矢子ちゃんと勝負するって約束もしたしね。」

だから、この場に勇一君を呼んでもらうから、決めてもらおう。どっちをお嫁さんにするかをね」

「神璽、ここに来るの？」

「お友達に何週間か前から宅急便で届けられるように頼んどいたんだよ。」

ま、それがあったから令をここまでおびき寄せたりしたんだけどね。」

「どづいづい事？」

「私の友達の依頼はね。鳴神紫と自分を会わせる事。ちょっと調べたらあの雷神の鬼神が  
九我山に居るって事はわかったから、後は計画を微調整してこうなるように仕向けたわけさ」

その言葉に由加は怒りが沸いた。その為だけに、九我山と浅葱を襲ってコアを奪った

となれば、流石に由加としても黙ってられない。双方ともまだ死者は出てないものの、

大怪我した人や無関係な人まで傷ついている。そして、由加は、

「その為だけに、浅葱と九我山を襲ったの!? つーちゃん。流石にそれはやりすぎ!」

怒鳴る由加。だが、紡から返ってきた答えは、

「違うよ。あの事件を起こしたのは、全て私の意志だ。決して、ふざけてやったわけじゃない。

真剣に、君たちと敵対することを覚悟しての行動だ。罵るなら罵れば良いよ」

「じゃあ……何でそんな事を……」

紡はくるりと後ろに振り返ると、由加と少し離れた場所で止まり、”力”を発動させた。

凄まじい悪意が周囲に充満し、それら全ては紡の体の中心。胸から発せられている。

嫌な予感がした。由加の記憶では、紡は結晶を移植していなかった筈。

だが、紡の体から出ているのは紛れも無く、自分達と同じ気配。

そして、反意思で領域を顕現させた紡は、

「亜矢子ちゃん達の中に入ってるのは、九尾の狐なんだよね？ お爺ちゃんがそう言った」

「うん。二人で半分になってるけどね……」

「私の中の結晶はね。」バジリスク” っていう西洋じゃ有名な大悪鬼の核なんだ」

「何で、つーちゃんが……」

「私ね。許せないの。この計画を立てた純血達が。あいつらは不老不死の方を求めて、

六道を上手く操ってさ。私達の人生をこんなにしてまで、自己の利益だけを求めてたの。

そこにあるのは保身だけ。知ってる？ 私たちが被験者になる前にも何人が居たって事を」

「え……」

「私達は最後の段階の被験者だったの。あらゆる人体実験をして、安全に結晶が移植できる

かも知れない程度まで研究が引き上げられてからのね。私は、それを全て知ってしまった。

継承をする事だね。彼らの苦悶の表情、泣き叫ぶ声。全てが耳にこびりついて離れない」

「そんな……」

「だから、あいつらをぶつ殺してやる為に、私はとある勢力の手伝いをしているの。」

何のリスクも背負わず、ただ人を踏み台にして生きてきたあいつらを、この力で殺してやるの！」

紡の目には激しい怒りが浮かんでいた。さっき言っていた継承の力が本当なら、紡が怒る理由も分かる。

自分だって腹立たしい。こんな悲しいのは自分達だけだと思っていたのに。自分達もまた人の犠牲の上に立っていたのだから。

しばらく沈黙が流れた。紡も由加も何も喋らない。昔はあんなに仲が良かったのに。

今では紡が遠く見えた。いや、紡はもっと遠くに感じているのだろうと思う。

自分には神璽が居た。神璽には自分が居た。でも、紡には誰も居なかった。その苦しみがどれ程なのかは容易に想像できる。

自分達の罪も、立場も、嫌な記憶も、全て紡は背負ってくれていた。由加の目に再び涙が浮かぶ、

すると、紡はさっきまでの怒りは何処へやら、といった顔で由加の方を振り向くと、

「さあ、亜矢子ちゃん。久しぶりに三人揃ったね」

由加が紡の視線の先を見ると、神璽が息を切らせてただ呆然と立っていた。

第14話：涙 - Tear - (前書き)

今で令、神璽、由加の話は一段落つきます。

次回からは雨龍、万里、千里と蒼二達の話が中心です。

ですが、全く執筆が進んでないと。

冬休みも結構予定入っちゃってますしねえ……

颯太に蹴られた神璽は慌てて、建物の中へと入った。最初はヘラヘラ笑っていた神璽だが、

中を進むにつれて、段々と表情が引き締まっていく。自分は此処を知っている。

そして楽しい事や、悲しい事が沢山あったと、記憶には無いが、何故か心がそう告げていた。

(そっぴゃ、いつも三人で遊んでたなあ)

具体的には何も覚えていないが、自分達は確か三人だった。それも九年前に思い出した

事ではあるが、ずっと二人で居たと思っていた神璽にとって、かなり有益な情報だった。

ガラムから教えられた六道紡も世界中を駆けずり回って探したが、九年経った今でも見つからない。

もしかしたらもう死んでんじゃねえかな？と失礼な想像をしつつ、神璽がついに最奥へ辿り着いた。

割れたガラスから下を見てみると、由加ともう一人誰かが居た。もう一人は自分に気づいているようで、ニコニコと笑いながら、

「さあ、亜矢子ちゃん。久しぶりに三人揃ったね」

と言った。亜矢子是由加の昔の名前だ。そして、今奴は三人と行った。神璽の中で、想像力が膨らむ。

黙っていてもしょうがないので、神璽はガラスから飛び降りると、下のスペースへと着地。

由加は悲しそうに俯いて、こっちを見ていない。仕方が無いので、



れたかな？」

「ああ……うん。なんていうか、久しぶりだね」

「私の……私達の用件はもう、わかっているよね？」

「あ、ああ……」

紡の能力おかげで、全ての記憶を取り戻した神璽だが。混乱する事は無く、意外に落ち着いていた。

紡の事は昔から好きだったと思いな残っている。由加に苛められても、仲裁に入ってくれて。

ファーストキスは大阪の女だと思っていたが、実は紡であって。そう思うと、凄くドキドキした。

女に関しては百戦錬磨と呼ばれる神璽だが、紡と由加はその中でも別格。命を懸けてでも守りたいと思える人だった。

「ささ、亜矢子ちゃん。私と並んで並んで」

紡に引つ張られて、由加はやや呆然としながらも。しっかりと、自分から目を離さない。

いよいよ決断の時が来たようである。正直に言つと、二人とも好きだった。

過去の自分だったら二人とも嫁にする！とでもアホな事を言っていただろう。だけど、今は違う。

紡の思い、由加の思い、全てを受け止め、それを真面目に考えて神璽は答えを出した。

「つーちゃん、ごめんな。俺、由加に骨抜きにされちゃったみたいだ」

「……そう。うん、わかった」

「別につーちゃんが嫌いなわけじゃない。むしろ好きだ。由加と同じ位好きなんだ。」

でも……由加と居た時間の方が長くてさ。もうね、俺由加無しじゃ居られないんだよ」

「神璽……」

「もう一生浮気をしません。携帯の中身も整理します。うん、だから俺は由加と一緒に居たい」

神璽は真面目な顔でそう言っているものの、内心は冷や汗かきまくりのテンパリまくり。

正直に言えば、泣きたいぐらいだった。紡に至っては、目に薄く涙を溜めている。

由加も由加で紡の事が心配らしく、紡の肩を抱いたまま離れようとしな。

「あーあ。やっぱ、ふられちゃったかあ」

「で、でも。つーちゃんの事も大事にするよ。折角また会えたんだ。しばらく一緒に居ようぜ。」

なんだっいたらユニオンに来れば良いよ。俺の仲間たちを紹介するから」

「そうだよ。つーちゃんもユニオンにすればいい。皆、気のいい人だから。きつとすぐに」

仲良くなれるよ。私達ともまた三人ですつと入れるし。三人で本

部に行こう。

九我山と浅葱の襲撃だって、ちゃんと謝れば律も梨香も許してくれるからね！」

由加と神璽の言葉に紡は嬉しそうに笑った。それに釣られて、由加も神璽も笑った。

だけど、そこで紡の笑顔は消えて、悲しそうな表情と、揺るぎの無い決意が秘められた瞳が新たに現れた。

「嬉しいけど。それは無理。近い内にね、ユニオンと私達はぶつか。もう、決定事項なの。」

私は私の仲間と犠牲者達の報復の為に動く。ユニオンも邪魔するなら叩き潰す。

「ごめんね……折角再開できたのに。今度は敵同士だ。でも、それも全部わかってて、今回呼び出したんだ」

紡はそう言うと、上に向かって手をかざし、掌から蛇を模した破壊の光線を放射した。

蛇砲と鬼神・悪鬼の間で呼ばれる。蛇系悪鬼の反意思の光線。それは天井を貫き、このスペースに光をもたらした。

だが、それはすぐに遮られ、巨大な船が再び天井を多い尽くした。

「つーちゃん！」

「何でだよ……！」

「こうなる事はわかってた。だからね、最後に決着をちゃんとつけたときだったの。」

道は違っちゃったけどさ。今度こそ、約束守ってね。次に会う時は仲間として、ケジメある立場で臨んで欲しい」

「……わかった」

「俺達はユニオンの幹部だ。悪いけど、そっちが調和を乱すなら容赦はしないよ」

「うん。わかってる………最後に勇一君、一つだけ言わせて」

「ん？ どうした？」

「亜矢子ちゃんと私が居るのに、何人もの女の子とエッチするなんて、最低！」

そう言つと、紡は悲しそうに笑って空船へと昇って行つた。追いかける事も可能だが、神璽が長旅で疲弊しているし、由加は由加で落ち着きを取り戻せていない。

今戦つても紡には絶対に勝てない。さっき少し見せてもらった力の片鱗だけでよく分かつた。

「つーちゃん……」

やっと会えた。やっと思い出せた。なのに、大切な仲間は何度も行つてしまった。

謎も幾つか残っている。相手の目的も、勢力の規模も良くわかつてはいない。

そんな事を考えながら、由加と神璽はしばらく二人になった思ひ出の場所で、呆然と立っていた。

空船の甲板へと上がると、一之瀬凜が一人ぼんやりと立っていた。その隣には颯太の姿。

気配から察するに、この船に乗っているのは颯太と凜と自分だけなのだろうと予測。

紡はゆっくりと凜達の方へと歩いていった。そして、近くまで行くくと、

「やあ、凜ちゃんご苦労様。これまたでっかい空船を作ってきたモンだねえ。それと、この間はごめんよ。」

「……？ ええ。前回はやや失敗作でしたから。今回は一日かけて納得できるものを作ってきましたのよ」

凜がどうやって様々な空船を作っているかは良くはわからないが、素晴らしい式神だと思う。

紡が知っている昔の凜の式神は、ここまで強力ではなかった。”あの事件”以降から凜の式神は爆発的な成長を見せている。

六道家の人間としても、紡個人としてもかなりの研究意欲をそそる逸材だ。そう考えていると、凜は颯太と紡の微妙な空気を悟ったのか、

「私は少し所用があるので失礼しますね。下に行けば幾つか部屋もありますので、勝手に使ってくださいな」

凜はそう言うと、空船の床を抜けて下へと消えてしまった。後に残ったのは、颯太と紡だけ。

しばらく何も言わなかった二人だが、やがて紡は口を開くと、

「やっぱり、フられちゃった」

「そうか」

「あらら、何か嬉しくなさそうだねえ」

「好きな人が、泣きそうな顔をしている。喜べない」

そこで紡は、自分の瞳から涙が零れ落ちている事に気づいた。二十年ぶりに会えたのに、勇一と亜矢子と敵になってしまった。

だけど、六道家の頭首として、結晶と人間の研究だけは許せなかった。その為、あの研究に

関わった者は全て処刑した。自分達はまだマシな方だったが、過去の研究はそれは酷いものだった。

名前は全て番号で呼ばれ、数百人の子供が殺されている。それを指示したのが、今の政府の上層部の人間や、著名な学者達。

「颯太君……私は、これから沢山人を殺すんだよ。君には相応しくないと思うんだ……」

「俺だって人殺し。関係ない。……お前を愛してる」

「そう……ありがとう。あはっ。返事はまだ流石に無理かなー」

「ごめん。……俺、何時までも待つ。今はゆっくり」

だから、結晶の研究を全て知っている者の業として、紡も自ら結晶を移植して力を背負った。

六道の罪は全て自分が背負わなくてはならない。だから、この力を以ってこの悪夢を始めた者達に鉄槌をくらわす。

それが六道紡の目的。勇一の事は半ば真剣だったものの、その目的の前では霞んでしまう。

そして紡は、涙を拭いて顔を上げると、しばらく颯太と一緒にただ空を眺めていた。

颯太から全ての話を聞いた令は、自分の愚かさを知った。何もわかっていない子供だった。

ただ、表面的にしか物事を捉えていないで、それ意外の可能性を考えようとしなかった。

悔しさだけが胸に残るままで、とりあえず神璽達と一緒にユニオンの仮本部へと戻る事になった。

目的は紡の動きや、碧の事や神璽の帰還を報告する為。最初は同



「……喉かわいた」

「ああ、じゃあお金渡すからそこで買ってきなよ。僕と紫ちゃんの方もお願いできる？」

「……いい。ここは、おねえさんが奢ってあげる。……何が飲みたい？」

「僕はアイスコーヒー」

「あたしは酒！ チューハイでもなんでもええから、買ってきてや」

「……うん、わかった」

碧は自動販売機のあるスペースへとたつたと駆けていく。酒なんか売ってないだろうに。

だが、ここはユニオンの本部だ。変な人間が多いからもしかしたら、あるかもしれない。

そんな微妙な期待をしながら、令は黙って天井を見つめていた。

これから、どうしようか。颯太から話を聞いた以上、これからも関わっていく事は可能だ。

でも、自分が役に立つのか？ 何も知らずにただ流されていた自分がこれからは足でまといになるのではないか？

といった感情が心の中で膨らんでいく。そんな風に、令が一人悩んでいると、

「お待たせ」

碧の声が聞こえた。令はゆっくりと起き上がり、

「昼間からお酒とは良い身分になったものだね、大学生」

硬直した後に、どっと冷や汗が噴出した。正面に居た紫も同じように、カチコチに固まっている。

「……この人。お酒の自販機教えてくれた人。……知り合い？」

「いやあ、お嬢ちゃん。知り合いも何もね……この子は、私の弟だよ」

目の前に居たのは、令の実の姉　八神律。私服にユニオンの制服をひっかけたラフな格好

で令と紫をニコニコ笑いながらで見ている。そして、令と紫は人生の終わりを悟った。

太郎は、自分の存在を隠そうとしているのか一瞬筒の中で震えた後、気配を消している。

「……ああ、少し似てますね。……はじめまして、風早碧です。紫の従姉妹です」

「ほほお。じゃあ、君が報告にあった風神の子か。はじめまして、八神律です」

どうもどうもと頭を下げあつ律と碧。それが終わると、律は顔を上げ。

「とりあえず、ここで話もなんだし。紫は彼女を連れて、七階へ行ってくれ。」

そこで、彼女の身の振り方について色々鬼神課の人間と話し合っとういしい。

太郎も一緒に行くといいよ。私もお前の仲間を丁度連れてきていたしね」

「う、ういっす！ ほな碧、太郎、行くで」

「……うん」

「お、おうー！」

筒の中から太郎が飛び出し、令に申し訳なさそうな顔でエレベーターの方へと走っていく。

……これで、味方は居なくなった。これから自分ひとりで御仕置きを受けるのかと思うと

本当に死にたくなる。というよりも、死ぬかもしれない。

「令、少し話そうか」

「う、うん……」

律に連れられて、令は少し歩いた先にある会議室へと入った。自分と姉以外誰も居ない。

それが更に令の不安を掻きたてる。律は律で、のんびりと椅子に構えている。

令は謝罪の前に、まずは報告から済ませる事にした。颯太の事。紡の事。碧の事。

話す事が多かったが、律は最後まで何を言うまでも無くただ聞いていた。

「……以上が、これまでに僕が関わってきた事です。黙って聞いてくださいね」

「ふむ。お前にしては珍しく直情的な行動だったね。まあ、それは良しとしておこう」

「お仕置き、無いの？」

「相手が相手だ。それに、お姉ちゃんがお前の立場だったら、もっと酷い事になっていたかもしれないしね」

「はあ……」

とりあえず、怒られると言つ事は無さそうだった。だが、律はまだ話を聞く態勢で居る。

ジツと自分を見つめ、何かを引き出そうと見ているのだ。何が目的なのだろう。

令自身、話したい事は多くあるものの、それが多すぎて何を話したいのか良く分からない。

しばらくすると、律はそんな颯太の心中を察したのか、自ら語り始めた。

「それで、令。お前はこれからどうするんだい？」

「……わかんない」

「何でわからないのかな？」

「気持ちがあつきりしないんだ。結局、僕はこの戦いに関わりたのか、関わりたくないのか。」

それすら良くわからない状態ですつと此処まで来ちゃった。ただ、大儀だけを信じてね。

九我山がやられたから。浅葱がやられたから。そんな柵に囚われて、僕は六道特区まで行き

て、真実の一端を知った。これからも、戦いは続きそうだ。しかも、十名家とユニオンという

日本を真つ二つに分けてる巨大な勢力どうしがね。きっと沢山の死者が出るだろう。

そんなのは嫌だ……でも、僕は何処に立てば良いのか。どう関わっていけば良いのか。

それがわからない。足手まといや皆の邪魔になるかもしれない。そんな事ばかり、考えてる」

「なるほど、立ち位置と戦う理由に悩んでいると」

「うん……」

「でも、お前には答えが出てるようにお姉ちゃんには聞こえたけどね」

「……え？」

「お前は抗争によって、沢山の死者が出る事を嫌がった。それでもう、理由はあるじゃないか」

「でも、僕はどつやって戦ったら……どんな立場で戦えばいいんだろっ」

「そんなもん、お前自身しか無いだろうに」

「僕自身……」

「どんな場所だろうが、どんな立場だろうが。お前はお前の意思を貫きなさい」

「でも、それでユニオンに迷惑がかかったら……」

「そしたら、お前はユニオンを倒せばいいじゃないか」

「そ、そんなの無理だよ。何で僕がお姉ちゃん達と戦わなきゃ……」

「ユニオンと言ったって絶対的な正義じゃない。黒い部分なんか腐るほどある。」

「良いか、令。お前はお前が納得できるやり方でやれば良い。お姉ちゃん達だって、」

「自分が納得できる戦い方をしてるだけ。お前との差は、人数の違い。それだけなんだよ」

「お姉ちゃん……」

「幸い、今はまだ平和だ。大きな戦いまではしばらく時間があるだろうね。」

「それまでじっくりと考えれば良いのさ。大切なのは人に流されないう事。たとえ、お姉ちゃん」

「の意見であっても、お前がそれをおかしいと思ったら、否定するやり方を取りなさい」

「……うん。お姉ちゃん、ありがとう。何となくだけど、進める気がする」

「そう。なら、お姉ちゃんも安心だよ。……さて、そろそろ紫達を迎えに行こうかね。」

それに、時雨ともう二時間も会話してない。ああ、時雨成分が絶  
対的に足りなくなってきた」

(義兄さん成分って何だよ……)

さっきまでの真面目だった姉とはガラリと代わり、義兄スイッチ  
が入った姉を見ながら、令は心の中でこっそりぼやいた。

## 第15話：もし、また会えたなら（前書き）

雨龍編スタートです。

これで、年内のパストの投稿はもう無いと思います。

近日中に旅立つので。

時間があればDaysが何とか投稿できるかなあといった次第です。

後、旧キャラ投票が色々あって更新できなくなったので。

新しく作ってみました。

トップページと、それぞれの話の最後にリンクがあるので。

仕方ねえから投票してやんよ。

という人は良かったらコメントなんかも添えて投票していただくと幸いです。

携帯とPC両方に対応しております。

追記携帯からだ投票は出来てもコメントつけられないみたいですね

こつこつ意見はかなり参考になるので協力していただけると大変嬉しく思います。

では、2008年にまたお会いしましょう。

## 第15話：もし、また会えたなら

一之瀬凜の式神【空船】に送り届けられて、三枝万里、千里、二階堂雨龍の三人は二階堂の老家へと帰ってきた。

先頭を雨龍、その後千里が続き、少し離れて万里がそれに付き従うように歩く。

屋敷の中に入ると、自分達の部屋がある棟へと向かった。そして、三人が雨龍の部屋の前まで辿り着くと、

「うーちゃん。これからどうするの?」

「……万里。貴女、雨龍様になんて口の利き方をしてるかしら」

「あ……申し訳ございません。お姉様」

「私に謝罪は要らない。雨龍様に謝りなさい」

「はい……。申し訳ございませんでした。雨龍様」

千里に脅えるようにして、万里は雨龍へと深々と頭を下げた。二階堂と三枝は同じ十名家でも

二階堂が過去に戦争で三枝を下の家として使役していた為に、今も尚こうやって二階堂には敬語を使わなくてはならない。

雨龍はその辺どうでもいいようで、めんどくさそうに手を振ると。

「あー……わかったわかった。俺は千里と今後の話をやるから、お前はもう寝ろ」

「はい……では失礼します。おやすみなさい。雨龍様。お姉様」

「おう、お休み」

「……………」

しばらく千里の反応を待っていた万里だが、やがて悲しそうに目を背けると、廊下をとぼとぼと歩いていった。

雨龍はそんな千里をあらゆる感情が籠った目で見た後、ドアを開けて部屋の中に招き入れ、

「お前、いい加減素直になってやれよ。妹の事、本当は大好きなんだろう？」

「…………今更どのツラ下げて、あの子に優しくすればいいのよ。全部、私が悪いの。」

あの子の才能にイラついて、あの子を一方的に傷つけて　それでも、あの子はいい子だから

私の事なんか少しも恨まずに、自分が足りてないと思ってくれる。その結果がこのザマよ」

千里は雨龍の部屋のソファに座ると、膝を抱いて悲しみを堪えるようにそつ返事をした。

万里は才能に溢れる子だった。そして、幼く愚かだった自分は、自分の弱さを認めずに、

一方的に万里の心を傷つけた。今だってそう。優しく頭を撫でてやればよかったのに、それが出来ない。

万里に触れるのが怖い。万里を愛おしいと思えば思うほどに、自分の罪に千里は苦しんでいた。

そんな千里を見て、雨龍は冷蔵庫から何本かの酒と氷とグラスを取り出すと、

「お前の心の傷も、万里とこんな関係になっちまったのも……全部二階堂が悪いんだ」

「雨龍……」

「待つてるよ、千里。もう少しだ。もう少しの辛抱だからな」

グラスに酒と氷を注いで、千里へと差し出した。

雨龍もまた万里と千里と同じく、二階堂に人生を狂わされた被害者。本当の雨龍は優しい子。

だけど、二階堂がそれを許さない。広まっている雨龍の悪名の大半も、雨龍が望んだ結果ではなく、二階堂が望んだ結果となっていた。

そして、二人がしばらく黙って、考え事をしながら酒を飲んでいくと、部屋のドアが蹴り開けられた。

「雨龍う……お前、何て事をしてくれやがったんだ！」

部屋に入ってきたのは、二階堂龍一。雨龍の兄にして、現在の二階堂の頭首。

雨龍は冷ややかな目で立ち上がると、血管を浮かせて怒り狂う兄に冷たい声で問う。

「どうかしましたか？」

「一之瀬の馬鹿女と一緒に、浅葱を攻撃したようだな！ 何でそんな事をしやがった！」

お前の所為で……こっちは滅茶苦茶だ。このクス！ 明日はユニオンの幹部が二階堂に

話をつけにきやがるんだぞ。テメエ……どう責任とるつもりだア  
！」

話している間にも、龍一の拳や足が雨龍の体に突き刺さる。血と泡を吐き、悶絶しても龍一は攻撃を止めない。

蹲る雨龍に再三の蹴りや拳を浴びせ、やがて、それにも飽きたのか雨龍の髪を掴んで立たせると、

「もし、ユニオンと敵対するようになったら……お前の命で償わせるからな！」

そう言った後に、最後に思い切り雨龍の頭にグラスを叩きつけると、龍一は乱れた服を直し、

「千里！ 後で抱くからな。準備したら俺の部屋で待っている」

「……かしこまりました。龍一様」

そう言つと、龍一は倒れた雨龍を強引に立ち上がらせると、引つ張るようにして部屋から出て行った。

あれだけ殴られたにも関わらず、雨龍は悲鳴や泣き言一つ上げずに、黙々とただ耐えていた。

強くなったと素直に思う。それだけの覚悟が雨龍にはあるのだから。自分も腹を決めなければ

千里は再び膝を抱え込むようにして蹲ると、

「希い……私、どうすればいいのかな」

その言葉はもう意味がないとわかっけていても、千里はただそう咳くしかなかった。

「千里ちゃん。やっぱり、好きな人にはちゃんと告白しなきゃ」

生まれて初めて出来た親友は、そう言つと顔を赤らめた。きっと自分でも大胆な事を言つたのだらうと思つているのだらう。

初めて会つた時から、彼女はそんな感じの子だった。純粹で、初々しくて、汚れの無い綺麗な女の子だった。

「でも……彼は三枝よりも位の低い家の子だし」

「でも、好きなんだよね？」

「うん……」

「じゃあさ。私なんかどうなるのかな？ 戒君と私の立場なんて、凄い差があるよ」

彼女の言う通り、彼女と恋人の戒の立場は本当に真逆にある。自分ともそう。

ここで、殺し合いをしていないというのが、信じられないほどに。だが、千里は彼女の事が好きだった。

戒に紹介され、会つてから僅か二時間でこんな事を話すまでに気があつてしまつている。

彼女の境遇については、戒から全て聞かされている。最初は驚いたが、今ではそうでもない。

「じゃあ……告白、してみようかな？」

「それで、千里ちゃんの好きな人はどんなタイプなの？」

「うちの学校の剣術部の子なんだけど……正直、私より弱いだよ。でもね、凄く一生懸命で。」

何か見ててカッコいいなあ……って思ってたなら、何時の間にかね……うん」

「素敵じゃない。戒君にも少し見習わせたいわ」

「戒は引きこもりだからねえ……」

「そこがまた魅力でもあるんだけどね」

「何それ。彼氏自慢？」

「あはっ。ごめんね」

「いいよいいよー。私だって、彼と付き合えたらいっぱい自慢するんだから！」

「報告、楽しみに待ってるね」

彼女と居れた時間はそう長くは無かったが、それでも千里の心に刻み付けられる程に安らかな時間だった。

家が遠い為に、長期休暇のときや、たまに電話するぐらいしか出

来なかったが、それでも千里にとってはかけがえのない親友。

だが　その幸せもそうは長く続かない。その僅か数年後に世界で一番悲しい事件と、千里の運命が大きく変わる事件が起きた。

「嫌…… お願いです。やめてください！」

真剣で切り刻まれる最愛の彼。

「三枝…… なに、これ……」

彼の夢も希望も、万里の身も心も、全てがその日壊された。

「クズはクズらしく、クズ共と群れてればいいんだよ。人の女に手を出してんじゃねエ！」

無理やり、初めてを奪われた。彼の前で。彼が血か涙かわからないものを流している顔を見ながら。

その場に響いていたのは、自分の泣声と、彼の呻き声と、二階堂龍一の楽しそうな笑い声。

それからだ。全てが変わってしまったのは。彼は病院に行っただけで転校してしまった。

龍一の女の一人として屈辱の日々を味わった。そしてその歪みは、自分のたった一人の妹へ。

お姉様あ！

無邪気で純粹な妹の笑顔が酷く嫌味に映った。

今日ね。今日ね！　悪鬼を沢山倒したんですよー

才能溢れる妹が疎ましかった。

私はお姉様を尊敬しているんです。何時か、お姉様みたいに強くなりたいんです

傷ついている自分を放って置いてくれない妹に怒りが生まれた。

そして、千里は万里を拒絶し、ついにはこんな所まで来てしまった。きつと、これが最後のチャンス。

千里よりも万里の方が式神の面から見ても、剣術の面から見ても優れているので、万里は近い内に三枝の頭首へと選ばれるだろう。

だが、万里が今もこうやって戦っているのは、全て雨龍の為。そして、自分の為。

本当は戦いたくない。本当は誰も傷つketたくない。人を殺せば、表面上はいつも通りなモノの、影では一人苦しんでいる。

今まで一緒に暮らして、何度もその場面を見てきた。しかし、触れる事はかなわなかった。

だから 千里は決めた。この最後のチャンスを活かし、万里を三枝から解放する。

それが、何年もかけて準備してきた千里と雨龍の目的の一つだった。

「希……もし、また会えたなら。また相談に乗ってくれるかな……」

そして、もう一つの目的でもある親友の顔を思い出しながら、千里は部屋から出て行った。

最近、体の調子が良くない。何回も胃の中の物を戻してしまうし、酷く寂しいと思う事が強くなってきていた。

良くない兆候だと、万里は一人暗闇の中で頂垂れた。今日も、上手く話せなかった。

姉との仲が悪くなったのは、十数年前から。姉の親友が亡くなっ  
てしまった頃だったか。

当時小さかった万里は殆どその親友の事を覚えていないが、優しいイメージだけは残っている。

その事件から、千里は変わってしまった。万里に辛く当たるようになり、殆ど話しかけても無視されてしまう。

だから、頑張った。強くなって、姉に認めてもらおうと頑張った。そして、その努力は報われた。

だが、それは、最悪な形で。

「万里を、時期頭首に推薦しようと思う」

父の発言に誰も異論を挟まなかった。模擬戦をやっても、千里は一度も万里に勝つ事は無く、

更には万里が姉を気遣って手加減していた事も、父によって公表されてしまった。

そして姉はこう陰口を叩かれるようになった。「三枝の無能長女」と。

(お姉様は、無能なんかじゃないのに)

万里が一生懸命否定しようとするれば、するほど周りの目は妹にかばってもらう駄目な姉。

そして万里は、姉を立てる事の出来る良い子。として評価は鰻上に上がっていった。

違う。違う。違うのに。いくら叫んでも、誰もわかってくれずに、姉妹の溝は広がっていく。

(どうして……お姉様に認められなくて、笑いかけて欲しくて頑張ったのどうして

私の行動は何時も姉を苦しめる結果になってしまっただろ……)

そんな万里を救ってくれたのが、三枝の上の家の三男 二階堂雨龍。次男は戦死してしまった為に、

三枝では万里を雨龍の御付として、その身を差し出した。

姉が長男の龍一にどんな事をされているかはこっそりと見てしまった事がある。

だが、自分が雨龍を拒めば、姉はきつと雨龍の分まで負担を背負わされてしまっただろう。

「はじめまして。三枝家次女、三枝万里と申します」

「ああ、お前が万里か。……そんな、脅えんなって。俺は兄貴と違って、お前を食い物にするつもりはねエからよ」

「……は？」

「お前は、フリだけしてりゃいい。家の奴らに何か聞かれても、俺が言っなど言っていたとでも説明しとけ」

「雨龍様……」

「だーもう！　うるせえな。それに、雨龍様つてのも止める。フツ  
ーに呼びやがれ」

意外な事に、二階堂雨龍は自分に優しくかった。自分に酷い事は一切しなかったし。

それどころか、色々な相談にのってくれる兄のような存在だった。いつしか万里は、その優しさに懐き、  
年を重ねるごとに雨龍を頼りになる兄貴分から　好きな異性と  
して見てしまっていた。

「万里」

万里が物思いに耽っていると、背後から声が響いた。振り向くと、そこには傷だらけの雨龍。

また龍一にでも殴られたのだろう。万里の心の中に龍一への怒りが燃え上がった。

姉を傷つけ、更には雨龍まで傷つける二階堂龍一。万里が地球上で一番嫌いな人間だ。

「何？　うーちゃん」

「明日、やるぜ。そっちの準備は大丈夫なんだろうな？」

「大丈夫だよ。三枝の何人かは、もうこの屋敷に何日も前から居るし。装備も用意した。」

……問題はうーちゃんの方だよ。本当に、やるの？　戒君が協力してくれるっていつても。

「やっぱり……二階堂はうーちゃんにとって」

「お前も知ってるだろ？俺が正妻の子じゃないって事を。俺と母さんがどんな目にあっただかを」

「うん……」

雨龍の母親は、雨龍の父が無理やりモノにした女の一人だった。そして、雨龍が生まれた。

何時もの二階堂家なら、沢山の金を渡して女と子供をそれこそゴミのように捨てただろう。

だが、生まれた子供 雨龍は幼いながら、予知の力を使った。流石にこれを外に捨てるのは不味いと判断した二階堂は、雨龍と母を二階堂へと軟禁した。

母は正妻にひたすら苛め抜かれ、雨龍が十歳の頃に病気で亡くなってしまう。

雨龍は雨龍で、二階堂に苛められながらもひたすら耐えて、死んだ次男に代わり、二階堂特区を任されるまでに成長した。

「もう、戻れねえんだよ。俺が俺が龍介を殺したあの日 いや、母さんが死んだあの日からだな」

戦死とされている二階堂家の次男。二階堂龍介を殺したのは、雨龍自身。

二階堂の中でも一番雨龍を苛め、母の死骸を穢したあの男を雨龍は黒龍と共に殺した。

後悔は無い。死んで当然だったと今でも思っているし、今の今まで殺した事すら忘れていた。

「うーちゃん……なら、私ももう何も言わないよ。うーちゃんとお

姉様にずっとついてく」

「……そうか。ありがとよ」

万里は自分と千里についてく見たいだったが、きっとそれは無理だろうと思う。

自分と千里の共通の目的は、万里を三枝から解放し、普通の生活をさせてやる事。

血と暴力のこの世界。自分や千里はもう人を殺しても何の感想も沸かないが、万里は違う。

一人殺す度に、悩みぬき。自分を追い詰める。このままでは、いつか心が壊れてしまうだろう。

しかも、このまま行けば三枝の頭首とまでなり、二階堂の都合の良い捨て駒として扱われてしまう。

だから、自分と千里は入念な計画を立て、三枝や十文字と取引し、万里の為に命を張ると決めた。

(こいつが居たから……俺は、俺は今でも生きている)

万里が居たから、どんな時でも味方で居てくれたから。雨龍は様々な汚名を被っても平気で居られた。

今度は自分が万里へと恩を返す番だ。雨龍は信頼している人だけに見せる笑顔を浮かべると、万里の頭を優しく撫で、

「もう寝ろ。明日は色々疲れるだろうからな」

「……ん。じゃあ、一緒にね」

万里と雨龍の唇が重なり、そのまま二人は布団の中へと納まる。

そこは、二人が唯一対等な関係で居られる場所だった。

## 第16話：本当に、色々あったよね（前書き）

最近、緋色の眼を寝る前に読み返してみると。

自分の文章の酷さに泣きたくなります。

更に、設定に幾つかの矛盾を発見してまた涙目www

一番ビビったのが、

初期の時雨は口が悪いという事。

一人称が「俺」だし。「父さん」ではなく「親父」だし。  
若かったというのもありますけどね。

だけど、昔の時雨の方が感情がむき出しだった気がします。

PAST終わったら、一話から全部書き直そうかなと。

もう予定の半分ぐらいなので、後半分ほどの十六話ぐらいでしょうか。

そんなわけですが、次回投稿は全くの未定でございます。  
正直、忙しすぎる。

## 第16話：本当に、色々あったよね

遥緋のとんでもない運転を体験し、途中寄った場所で幾つかの仕事済ますと、本格的に二階堂特区へと向かう蒼二達。

蒼二が車を運転してもいいのだが、昨日までの仕事の疲労が残っているのも、無駄な体力は使いたくない。

下手をすれば、二階堂家との戦闘になるかもしれない。二階堂もそこまでバカではないだろうが、用心にこしたことは無い筈。

運命はアイマスクをして、完全に寝入っており、遥緋は鼻歌を歌いながら高速を爆走中。

手持ち無沙汰になった蒼二が暇つぶしに携帯を弄っていると、郁人から着信が来た。

「蒼二さんですかっ!?!」

「何だ? いきなり、そんな大声出してよ」

「当たり前ですよ! 二階堂特区に運命さんと遥緋さんの三人で行くなんてどういう神経してるんですか!?!」

もう少し、組織の長という事を自覚してください。貴方達の身に何かあったらどうするんですか!」

「す、すまん……」

「とりあえず、俺も十数人程度引き連れて二階堂特区の傍で待たますから、そこで合流しましょう。」

いいですか。今度こういう事をするのなら、必ず俺にも連絡くださいね。

今は神璽さんも居ない状態で、更に由加さんまで出てっちゃって

るんですから」

「ん？ 由加どうかしたんか？」

「何か、令君達と大事な用事があるそうで……」

「ふうん。じゃあ、しばらくは皆バラバラだな。とりあえず、本部の方は莉王とか時雨に任せておこう」

「もうとつくにお二人とも来て下さってますよ……律さんも来てくれるので、何とか運営に支障は出ないでしょう。」

「ああ、運命さんも一緒に居るんですよ？ きつと寝てるんですよけど。起こして仕事させてください。」

「運命さんが幾つか仕事を止めてるんで、回ってない仕事があるんですよ」

「わかった。そう伝えておく」

「じゃあ、特区の近くになったら、また連絡ください。竜胆のGateで一気に向かいますから」

「おう」

「郁人も口やかましくなったなあと思いつつ、蒼二は電話を切った。それもその筈、」

「郁人は九年前の神々の黄昏事件の時に、一つの約束をした。それを律儀にも今も守っているのである。」

「名剣・フラガラッハを使う今の郁人は、海外でも有名に成る程に強くなっている。」

「昔は育てているつもりだったが、今ではこちらの方が助けられて」

いると感じる事が多くなっていた。

「また、郁人君に怒られたんだ」

会話が聞こえていたのか、遙緋が鼻歌を中断して話しかけてきた。どうでもいいが、運転に集中して欲しいと思いながら、蒼二は自嘲気味に笑うと、

「ああ、よっぽど俺らの事が心配なんだろうよ。煉達ももうちょい、適当な奴に意思を託せよ」

「それが郁人君の良い所だもん。きっと、灼也達もわかっていたんだよ。郁人君なら、意思を託せるってね。」

でも……私としてはあんまりそれに縛られて欲しくない。もっと、自由に生きてもいいと思うんだけどね」

「そうだな……だが、お前がそれを言うか？ お前、何回郁人に迷惑かけたよ。」

前に莉王と喧嘩した時なんか、クリスマスだったのに郁人呼びつけてたよな!？」

「あ……アレは、うん。なんていうのかな。あ……てか、お兄ちゃんだったて。」

千島戦争の時に、郁人君の家に逃げ込んだじゃない！ 竜胆ちゃんと二人の愛の巣に、

何週間も寄生しちゃってさ。きっと、顔には出さないけどかなり迷惑だったと思うよ」

千島戦争 それは、過去にあった蒼二の浮気疑惑から起きた今思えば、馬鹿馬鹿しい戦い。

命はわんわんと泣き喚き、運命は阿修羅姫を振りかぶって、蒼二を追い掛け回し、

更にそれを見ていた蒼威の財布から、おっパブ嬢の名刺が見つかった為に、第二次千島戦争まで起きた忌むべき事件。

最終的には、家の状態を嘆いた光希の作文により一応の終局を見せたが、蒼威、陸人は病院送り。

蒼二は一ヶ月近く命と会話してもらえなく、更には遙にまで五時間の説教をくらった。

「……ああ、そんな事もあったなあ」

「本当に、色々あったよね。気がついたら私もお兄ちゃんも何時の間にか親になっててさ。

昔をこうやって思い出すと、少し変な気分になるよ」

「そつだな……」

高校を卒業したらあつという間にここまで来てしまった気がする。命と結婚し、蒼華と煉次が生まれたと思ったら、蒼華なんかはもう小学生だ。

年をくつたなあ……と蒼二は自嘲気味に笑う。ユニオン設立前にも小さいながら戦いはあった。

神々の黄昏事件のような大きな事件ではなかったものの、色々と考えさせる事が多かった。

そして、ついにここまで来た。頼りになる仲間を支えられてユニオンを設立した。

これからもつと大変になるだろう。だが、それでいい。そう決めたから。

そして、とりあえずは困っている部下を助けようと、蒼二は運命を起こす事にした。

郁人は蒼二との電話を終えると、ため息と共に携帯を懐へとしまった。

現在、郁人が居る場所は数年前に移転した浅葱の老家。そこは、ビルとその隣にある小規模な屋敷。

完全に梨香の趣味で作られた家屋の地下室では何人かの人間が緊張した面持ちでまばらに過ごしている。

彼らは郁人直属の部下に当たる。年下も居れば年上も居るが、それなりに上手くやっている。

というよりも、部下達は自分を尊敬してくれているのだ。牧島を追い出され、落ちぶれても

郁人はこうして今、力を手にしてユニオンの幹部へと上り詰めている。

(そんなに……良い事ばかりじゃなかったけどね)

郁人は首にかけられている剣の形をしたネックレス　フラガラッハを軽く指で撫でた。

郁人の意思によってフラガラッハは巨大化し、四つの型へと変形

できる魔具だ。

九年ほど前にとある女性から貰ったのだが、結局あれから彼女の姿は見えていない。

このフラガラツハも十文字が作ったものらしいのだが、当の十文字はノーコメントを貫いている。

そして、その四つの型を手に入れる為に郁人は四つの意思を犠牲にした。

彼らとした約束は今でも覚えている。　蒼二、遥緋、罪歌、狂を守り、力を貸す事。

そして郁人は、九年経った今。ユニオンの幹部として蒼二達の敵をフラガラツハでなぎ払ってきた。

「郁人さん。どうしたんですか？」

しばらくフラガラツハを撫でながら一人物思いに耽っていると、部下の一人が話しかけてきた。

名前は南野喜一。顔や体には無数の切り傷。だが、それに対して背は170センチ無い。

顔はかなりの童顔で。表情や性格も穏やか。その為かユニオンの女性隊員に人気がある。

郁人よりも幾つか年上ではあるが。むしろ年下に見えるほど。郁人は微笑を作り、顔を上げ、

「いや……ウチの頭の非常識な行動に頭を抱えていただけですよ」

「確かに千島さんは度胸がありすぎですよね……あの二階堂にたった三人で話をつけにくなんて……」

でも、自分らからしたらあの人達の力は桁が違いますからね。何か大丈夫かなあ……とか思ってもしまっんですよ」

確かに喜一の言つとおりだった。あの三人の中だと一番凶悪なのが遥緋の輪廻転生。

九年前よりも格段に使用の幅が広がっており、専用武装と戦闘スタイルも固まっていた。

次点が蒼二と運命。神威という式神を超えた力と九尾の狐の鬼神だ。喜一がそう思うのも無理が無い。

「そうっすね。……っと、そろそろ時間だな。皆、ちょっと集まってくれー！」

郁人は部屋に居た全員に声をかけた。時計を見ると、そろそろいい時間だ。

蒼二達の居場所から判断するに、もうそろそろ二階堂特区付近だろう。そして、

全員が郁人の傍に集まると、郁人は頭の中で自身の式神 牧島竜胆へと話しかけた。

(竜胆、そろそろ仕事だぞ。ちょっと地下まできてくれ)

(……はあはあ……はあ……)

(ど、どうした?)

(あー……もう！ 北斗君と南斗君にこっちは振り回されてるんだよあー！

蒼威さんも陸人さんも疲れ果てて寝転がってるしさあ。もうちょい待って。もうちょい

したらあの子達捕まえてお仕置きしてやるんだからあ！ じゃあね！)

そう何故か怒鳴られて郁人はため息をついた。仕方が無いので、郁人は部下達へと向き直り、

「あー……うん。今回はいつもと違って特に作戦は無い。二階堂も馬鹿じゃないだろうし」

多分戦闘は起きないと思うけど、ちゃんと警戒はしておくように。もし、万が一の事態が起きたら喜一さんの指揮の下に、臨機応変に対応してください」

「あれ、牧島さんは来ないんですか？」

「ああ。竜胆のGateで移動するまでは一緒に行きますよ。ただ……申し訳ないんだけど。」

俺はその後竜胆と一緒に政治家の護衛につかなくちゃならないんです。

本当なら断るような依頼なんだけど。その人が結構大物で、蒼二さんの政治的判断の結果

俺がしばらくつく事になったんで。この戦いが終わったら、陸人さんが代理してくれますから、その後は彼の指示に従ってください」

その言葉に、部下の何人かは動揺したようだ。浅葱陸人といえば、身内では馬鹿だのアホだの言われてはいるが、

他の家からの評判は悪くない。というよりも、ユニオンには陸人や蒼威のファンが多い。

二人に共通するのは、圧倒的なまでの強さと家に縛られない自由奔放な生き方。

他の家で死者を馬鹿にすれば殴り合いを起こし、家と家の歴史なんか意にも介さない。

家に縛られてきた者が多いユニオンにとっては、この二人の生き方が眩しく写るのだろう。

(まあ……ぶつちやけ、我俣とも言えるんだけど)

郁人自身、蒼威や陸人に巻き込まれて幾つか酷い目にあったことがある。

だが、何故か笑って許せてしまう。そんな魅力が二人にはあるし、あの二人は本当に困った時は一番に力になってくれる。

そんな事を考えていると、自分のすぐ近くにコンセプトの紋様が出現した。

全員がそこに目をやると、紋様の中からは一人の少女　牧島竜胆が姿を現す。

「あ、皆ごめんなさいー。八神の坊ちゃん達に苦戦してしまったんですよお」

その言葉に全員が「わかる」みたいな顔をした。この屋敷に北斗と南斗がきてからというもの

この場に居る全員があのだ二人の悪戯に被害を受けた。ある者はトランプにはまり、一時間ほど情けない格好で吊るされた。

またある者は、彼女との電話の様子を全て屋敷の中に流されもした。郁人自身も、トイレに入っていたら……とまで思い出して身を震わす。

「全くもう。あの二人は律さんが居ないとすぐにハメを外すんだよねえ」

北斗と南斗は相当律の事が怖いのか、律が居る前では本当に天使のような良い子だった。

だが、律がユニオンに呼び出されてからは、その本性がすぐに曝け出されたというわけである。

「まあ、後で律さんに全て報告するとしておこうか」

「うっわ。郁人陰険ー。いい年してチクリなんて恥ずかしいよおー」  
「？」

「女のお前にあの痛みはわかるまいよ……」

「？」

竜胆は不思議そうな顔で郁人を見た。だが、これだけは説明するわけには行かない。男として。

竜胆から視線を外すと、携帯電話が再び鳴った。今度かけてきたのは蒼二ではなく運命だ。

心から眠そうな声で、郁人に恨み節を幾つか吐いた後、現在位置の情報を寄越した。

そして、幾つか仕事の確認事項をすると通話を切り、

「二階堂特区の奥。住宅街の入り口に居るってさ。頼むぜ」

「あいよおー」

紋様が更に大きく広がり、その場に居た全員を呑み込んだ。

二階堂特区に入り、有料駐車場に車を停車させると、三人は車から降りた。

蒼二は生きてここまで辿り着けた事に感動し、遥緋と運命は思い切り伸びをしている。

この二階堂特区は俗に犯罪の町と呼ばれている。十数年前までは本当に酷かった。

雨龍の犯罪奨励政策によって、街の治安は特区最悪と呼ばれるほど。それが後の死罪六神結成にも繋がったという最悪な場所だった。蒼二も遥緋も運命もここに来たのは初めてではない。九年前に運命とここで戦った事があった。

「いや、懐かしい。どつかのアホ狐をボコしにここまで来たっけなあー」

「うう……遥緋。蒼二が意地悪言う」

「お義姉ちゃん、無視して。あの人根暗だからそういう事しか言えないんだよ」

「どつかの貧乳は罨に引つかかってたなあー」

蒼二は滅多に見せない晴れ晴れとした笑顔でそう言う。遥緋もこれにはカチンときた。

何か言ってやろうとするが上手く口に出れない。そして、そのまま三人はお互いをけん制し合いながら特区の奥へと進んでいく。相変わらず、汚い街だった。だが、数年前よりは格段に治安が安定している。

罪歌達を作った自警団の事件がまだ緒を引いているのだと蒼二は

思う。聞いただけの話だが、かなり激しい戦いだったらしい。

そのまま三人は、雑多な人ごみをの中をすり抜けるようにして二階堂特区を進んでいく。

まだ夕方だというのに酒臭く、遠くからは罵声や悲鳴のようなものも聞こえてくる。

だが 周囲に居る人間は楽しそうだった。これもこれでありかな。と思いながら蒼二は先頭を歩く。

「む……」

しばらく歩いていると、巨大な屋敷の一部が見えた。特区の中心街から少し離れた場所に

二階堂家の屋敷はある。他の家のような日本家屋ではなく、要塞のような無骨な作り。

見ただけで成金趣味だとわかる二階堂の本家は、今は表向きはひっそりとしている。

「ん。郁人もう来るって」

「わかった」

何時の間にか電話をしていた運命がそう告げると、前方に突然コンセプトの紋様が現れた。

その中からは予想したとおり、ユニオンの制服を来た人間がぞろぞろ出てくる。

最後に郁人と竜胆が出てくると、総勢三十人程の人間が蒼二達の前につきつちりと並ぶ。

(相変わらず慣れねえ……)

「こついう堅苦しいのは苦手な蒼二。だが、組織の長としてそれだけはいけない。」

規律があつてこそその組織だ。なあなあ of 適当な感じでは周囲にも示しがつかないし、何より上手く行かない。

そんな葛藤を経て、蒼二は気を取り直し、

「皆、よく来てくれた」

「良く来てくれたじゃないですよ……全くもつ」

ジト目の郁人がやや呆れたように蒼二へと返した。

「悪いな。だが……ただケジメをつけに行くだけだ。まさか、戦闘にはならんだらう」

「そうなんですけど。やっぱりこついうのはちゃんとしなくては駄目です。」

……では、俺はもうあつちの仕事に行かなくちゃならないので、後は皆さんお願いします」

「お願いしまーす」

郁人と竜胆は軽く頭を下げると、再びコンセプトの中へと入り、消えてしまった。

「さて、どうしたもんか」と蒼二が考えていると、その前に運命が一步前に出て、

「お前達は此処で何時でも突入できる体勢で待機してて。それだけで、かなり相手に緊張感与えられるから。」

でも、変な刺激だけはしちや駄目。こついう場では小さなきつか

けでも戦いが生まれちゃう。

兎に角、何時でも動ける体勢で待機ね。中には私達三人で行くから」

先に指示を出した。だが、それでいいと思う。大勢でぞろぞろ行っても無駄なだけだ。

すると全員は無言で頷き、あらかじめ決めてあった隊列へととなり始めた。

ある者は式神を顕現し、ある者は標準武装や電子器具を取り出してテキパキと動いている。

「流石は郁人の所だね。こういうのはきっちりしてる」

「……そうなのか」

「私の所だっちゃんてちゃんと教育してるよー。まあ、お兄ちゃんはいつも基本一人だからね」

ユニオンでは、運命や神璽や由加は当然の如く個人的な部隊を幾つか持っている。

郁人の隊は剣を中心とした式神使いや、それをサポートする役割を持つ隊員が多い。

運命の隊は大多数を相手に出来る式神使いが多いし、由加の隊は隠密行動が出来る隊員ばかり。

神璽の隊はオールラウンダー。どの役割もそつなくこなす事の出来る臨機応変な隊員で構成されていた。

その全ての上に立つのが蒼二。その為に、個人的な部隊等は持っていない。

そして、遥緋や竜胆や梨香や時雨は戦闘部門以外の部の統括や、幹部の補佐を行っていた。

「んじゃ、そろそろ中へ行くか。後は頼むぜ。俺らが離れたら、隊長の指示で動いてくれ」

「了解。お前達、もしもの時は頼む」

「皆さん、よろしくお願いします」

三人は隊員達にそう言うと、二階堂の屋敷の門を潜った。

第17話：楽に死ぬと思うなよ（前書き）

次回は……二月かな？

何かしばらくは、二週間に一回ぐらいのペースになりそうです。

後、緋色の眼のプロローグと一話書き直しました。

蒼二の心理描写が結構増えてる感じです。

前よりは格段にわかりやすいんじゃないかと。

ちびちびと直して行きたいと思っています。

また読んで頂けたら幸いです。

## 第17話：楽に死ねると思つなよ

二階堂の屋敷は変わった屋敷だった。巨大な庭を囲むようにして、無骨な建物が三棟程立ち並び、

それよりも更に小さな規模の建物が監視塔のように幾つか存在している。

無駄に豪華な作りの庭を進みながら、蒼二はそんな感想を抱いた。暖かい感じはしない。

一見綺麗ではあるが、何か得たいのしれない嫌悪感のようなものを感じる家だった。

しばらく歩いて行くと、玄関が見えた。そして、その前には一人の女が立っている。

「こんにちは、ユニオンの千島蒼二です」

先に挨拶をしたのは蒼二。女はその名前を聞くと、一瞬顔を顰め、だが次の瞬間には無邪気な笑顔が戻り、

「こんにちは。三枝家次女、三枝万里です。龍一様達がお待ちするお部屋まで案内させて頂きます」

そう言うところりと踵を返し、ドアを開けた。万里に促されて中へ入ると、やはり中も豪華。

「こちらになります」と告げられたので蒼二は調度品類から目を離すと、運命達と共に万里の後へと続いた。

階段を登り、長い廊下をしばらく歩いて行くと、万里が立ち止まり、

「こちらのお部屋になります。どうぞ」

半分まで開けられたノブを掴み、中へと入る。少し緊張したが、いきなり攻撃とかは無かった。

眼前には大きなソファがあった。そこに座っているのは初老の男と、三十代半ばの男。

顔には見覚えがある。二階堂家の前頭首二階堂竜男と現頭首、二階堂龍一。

そのソファの傍らには何故か傷だらけの雨龍と、三枝の長女、三枝千里が立っていた。

視線で促されるままに、対面のソファに蒼二が座った。運命と遥緋は何時でも動けるように、

ソファの両端に立ってそのまま周囲に警戒を払う。そして

「はじめまして。ユニオン代表で来ました、千島蒼二です」

「はじめましてだな。二階堂の前頭首、二階堂竜男だ。隣に居るのは、現頭首の龍一。」

そこに控えているのが三男の雨龍だ。今回は三男がそちらに迷惑をおかけしたようだ。

まずは、それをお詫びしたい」

「ええ。流石に、九我山と浅葱がやられてしまっただけでもこちらも面子が立ちません。」

こちらとしてはそれ相応の謝罪と、雨龍と千里と万里。三人から事情を聞きたいのですが」

「構わない。謝礼もそれなりの額を用意した。後日、浅葱と九我山ともその辺りを

話し合うつもりだ。……………雨龍。千島殿に全てをお話しろ。この二階堂の恥さらしが！」

竜男は突然激昂し、雨龍を睨んだ。だが、雨龍は全く動じていない。侮辱されても、

大した表情の変化すら見せずに、そのまま飄々と立っている。

その態度を不遜だと思ったのか、蒼二が何かを言う前に、黙っていた龍一が声をあげた。

「雨龍。お前なんだその態度は……」

「失礼。元々こういう人間でして」

軽く龍一をあしらうと、雨龍は蒼二と目を合わせた。何回か会った事がある二人。

殺し合いをした事もある。だが、蒼二は雨龍の事が噂ほど酷い奴では無い事を知っていた。

暴力的で人を破滅へと追い込む二階堂雨龍は、表面上のものでしかない。

会うたびに同族というか、何か似たような空気を蒼二は雨龍に感じてしまう。

「久しぶりだな。千島蒼二。テメーがユニオンの頭だって知った時には、流石に驚いたぜ」

「そうか。雨龍、お前がそこに居る三枝姉妹と共に、ユニオンの傘下でもある九我山と浅葱を襲ったというのは本当か？」

「そうだけ。後は一之瀬の凜。お前んとこの榛名も居たぜ。ま、ありや偽者だろうけどよ」

「……偽者？」

「その辺はよく知らねエ。だが、ありゃ榛名神璽じゃねーわ。万里と千里と凜が近くに居て、

口説かねえなんて、あのこっちの世界随一の女ったらしのする事じゃねエだろ？」

(アイツ……こっちの世界の奴にも有名になったのか)

榛名神璽は出会ってから十数年経つが、未だに良く分からない部分が多い。

由加の事が一番好きなくせに、女と付き合っつのを決して止めなかった。そして由加がいつも

それに怒って神璽を海底或いは火口に叩き落そうとするのが何時ものパターン。

もはや楽しんでおるとしか思えないのだが、神璽のその広い女性関係のお陰で、

ユニオンが意外と助けられているのも事実なので、蒼二も由加も強く注意する事が出来ない。

「そう……か」

「ウチの兄様もよ。折角モノにした女を榛名に取られたらしいぜ。

ま、どうせ金と暴力で

脅して奪ったような女だ。兄様のトコに居るよか、榛名の方が随分マシかもなあ」

雨龍は馬鹿にしたように龍一を見た。途端に龍一の顔が赤く染まり、雨龍を睨むが、

蒼二達の手前どうやら自分を抑えたようだ。竜男も顔を赤くしているところから見て、

女を神璽に取られたのかもしれない。なんとなく、蒼二はそんな事を思ってしまう。

「そんな事は後だ。雨龍、何故浅葱と九我山を襲った。何で、お前達にコアが必要なんだ？」

「コア……だと？　おい、雨龍。俺はそんな事聞いてないぞ！」

今度こそ我慢できなくなったようで、龍一は立ち上がると雨龍へと掴みかかった。

それを冷たい目でジツと睨む雨龍。力を込めて、龍一の手を引き剥がすと、ソファーへと突き飛ばす。

おかしい　龍一にそんな感情がよぎった。雨龍は今まで自分に逆らった事が一度も無い。

何故。何故今日に限ってこんなに反抗するのだろうか。考えても答えは出ない。

「兄様。少し落ち着いてください」

襟元を直しながら雨龍は侮蔑の感情を込めて、龍一を見下ろした。そして　懐から大型のリボルバー拳銃を取り出すと、蒼二へと自然な動作で構える。

「　っ！」

運命が阿修羅姫を引き抜き、それと同時に千里も式神を顕現させて戦闘態勢へと入る。

全く動じてないのが、張本人の雨龍と蒼二だった。

「これが、答えだといったらどうするよ？」

「馬鹿の称号を進呈するぜ。緋眼使いの俺に、そんなモンが当たると思ってるのか？」

「だろうな」

雨龍はケラケラと笑って拳銃を弄ぶ、そして一旦は部屋の緊張が解けた。だが

「ンじゃあ、こっちはどうかなア？」

そのまま自然な動作で、雨龍は拳銃を横に向けると、無造作に引き金を引いた。

ドンツ！という発砲音が響き渡り、弾丸が竜男の顔に命中し、肉片を撒き散らした。

その瞬間。全員が言葉を失った。何が起きたのか。生温い鮮血だけがとめどなく流れている。

「雨龍……お、お、お前えええ！」

信じられないというような顔で龍一が立ち上がり、だがそのまま硬直してしまう。

雨龍は何か感慨深そうに拳銃をジッと眺めている。龍一には何の興味すらない。

「せ、千里！ 斬れ。この裏切り者をブチ殺せ！」

「……死ぬのは、アンタよ！」

千里が虚空から刀を引き抜き、目にも止まらぬ速さで龍一の全身

に切り傷を負わせた。

そして、千里の刀が一瞬光ったかと思うと、再び斬撃を放ち、龍一の両腕を吹き飛ばした。

「あああああああああああああ！」

「あの人はもつと痛かった筈だッ！」

そして、千里が龍一の首を跳ね飛ばそうと刀を再び振るおうとすると、飛び込んできた運命が阿修羅姫でそれを阻止した。

蒼二は式神を発動させ、何時でも動ける体勢で状況を伺っている。龍一は放つて置いたら失血死してしまうだろう。ゆっくりと、遥緋が傷を治そうと近づいていく。

「動くな。千島遥緋」

遥緋の眼前に巨大な黒い鉄板を合わせて作られたような竜が現れた。それこそ、二階堂雨龍の式神・黒龍。

黒龍は遥緋が一瞬驚いて隙を作った瞬間に、龍一の体を持ち上げ、龍一の顔に自身の顔を近づけると。

「十数年だ……貴様を殺すこの時をずっと雨龍の中で待っていた！我が主を傷つけ、主の友を傷つけてきた貴様……楽に死ねると思っなよ」

黒龍は手に力を込めて龍一の体の骨をへし折っていく。その度に絶叫が部屋に響き渡り、出血で綺麗だった絨毯に赤い染みが広がっていく。

そして

「黒龍。そろそろ仕上げに入りな」

「おう」

黒龍は大きく振りかぶって、ぐちゃぐちゃの龍一の体を窓に向かって投げ捨てた。

大きな音が響き渡り、下へと落下していく龍一。その体に向かって、火球を大量に浴びせかけた。

物凄い勢いで龍一の体は燃え、そのまま下にあった大きな池へと落下していった。

「ハハハハハハハハ。いいぜえ。万里、千里。もう戻れねエがそれでいいな？」

「はい！」

「勿論よ」

楽しそうに雨龍は笑うと、懐からリモコンを取り出し、全てのボタンを同時に押した。

すると、事前に二階堂の屋敷に仕掛けておいたあらゆる爆弾が一気に作動し、そこら中で爆音や悲鳴が響き渡った。

完全にパニックに陥った他の二階堂は敵襲だと完全に勘違いし、戦闘態勢に入っていく。

それこそが、雨龍の狙い。頭首が殺されれば確実にユニオンの仕業だと思っだろう。

現に、外に居たユニオンの部隊には既に攻撃が及んでいた。

「遙緋！ 運命！ 外の鎮圧は任せた。俺は此处で雨龍を捉える」

「うん。任せて」

「了解」

運命は九本の尾をズボンのスリットから出して、そこから狐砲を放ち天井を吹き飛ばした。

そして遥緋の体を抱えて、庭の方へと落ちていった。

蒼二はゆっくりと立ち上がり、修羅雪を虚空から抜き放つと雨龍を睨みつけた。

「千里、万里。お前達も行け。あいつらに鎮圧されたら計画が大幅に狂う」

「うん！」

「……万里。貴女に片方任せるわ。仕留めるとは言わないけど、しばらく動けなくしてやりなさい」

「は、はい！」

久しぶりに姉に何かを頼まれて、とても嬉しそうに万里は返事をした。

千里はまだ何かを言いたそうにしていたが、敢えて何も言わずに狂乱の力を発動させると、1階へと降りていった。万里もそれに続く。

そして、部屋に残ったのは黒龍と雨龍と、蒼二の二人と一匹。

「雨龍……お前こんな事して。流石にもう、俺らにもフォローは出  
来ないぞ」

「お前が人の事が言えるのか。元、死罪六神の千鳥蒼二君よオ」

「……確かに、そうだな。だが、俺は今ユニオンの長だ。残念だが、お前を殺す。」

「またはユニオンに身柄を拘束させてもらっぞ。これ以上、犠牲を増やさないためにもな」

「ハッ。やってみやがれ。俺は負けねエ。テメエも色々背負ってんだろうが、こっちも世界で一番大事な奴の人生がかかってンでなア  
！  
！」

そして、黒龍に吸い込まれるようにして雨龍と黒龍が一体化した瞬間、蒼二と雨龍は同時に動き、それぞれの式神がぶつかり合った。

庭に下りると、運命と遥緋はこれからの事を短く話し合った。

「遥緋。私は部隊の方に向かう。お前なら、二階堂を殆ど傷つけずに無効化できるしね」

「ん。わかった」

運命はそう言うと、再び大きく跳躍し、建物を飛び越えて行って

しまつ。

すると「こつちだ」という声と共に、何人かの二階堂が遥緋を囲むようにして、包囲した。

皆気が動転して目先の敵しか見えていない。もはや、言葉が通じるとは思えない。

遥緋は、ベルトに吊り下げていた小物入れから銀色の破片を取り出すと、輪廻転生の力を発動させた。

途端に銀色の破片が物凄い勢いで元の形に再生されていき、三メートル以上の鉄の棒へと変わった。

「行きますよ！」

緋眼を発動させ、棒を振り回しながら二階堂へと接近した。突き、なぎ払い、次々と昏倒させていく。

すると、上空から鉄の破片が降り注いできた。敵の式神の力だと判断すると、自分の周囲に死滅のコンセプトを発動。

次々と存在そのものが殺されていき、遥緋の傍には塵一つ残らない。そして、一旦棒から手を離し、片手を二階堂の術者達にかざすと、

「ごめんなさい」

三十秒程で全ての構成まで全て読み切り、空間自体に働きかける分解を発動。

というよりも、空間全てを認識してその異物である式神に狙いを定めるとでもいうのか。

遥緋の絶対防御によって手をこまねいていた術者達は一気に式神を分解され、バタバタと倒れていった。

「さて、次は……」

振り返ると、三枝千里が立っていた。持っている刀からは血が滴っている。

先程発光した妙な刀だ。多分、式神だろうと予想すると、遥緋は身を低くして走った。

千里同じく走った。遥緋は棒を一度分解し、粒子状にまで戻すと再びそれを再生。

今度は一メートル半程度で再生を終わらせ、長さを調節。千里の間合いに入らないようにしながら、慎重に棒を振るう。

「ユニオン最凶の、千島遥緋か」

「今は、四条ですけどね」

狂乱を発動させ、身体能力を上げてても遥緋の棒の動きを見切るの  
は剣士である千里にも難しい。

万里なら一瞬で見切れるだろうな。と心の隅で思い、表情に出ないようにして笑う。

そして自身の式神【乖離】の力を発動させ、一気に乖離で棒を断ち切った。

乖離の力は、発光した瞬間にどんなモノであろうと断ち切ってしまうという厄介な力。

一気に遥緋の間合いを詰め、斬ろうとしたのだが、その瞬間、遥緋の姿が消えた。

敢え無く空振りし、後ろからの殺気を感じる。

「ッ  
！」

そのまま回転するようにして、乖離を振りまわすと何時の間にか遥緋が背後にあり、棒で乖離を受け止める。

乖離の切断の力を発動させようとしたが、遥緋の棒の方が早かった。

千里の斬撃を受け流し、そのまま一度流れにそって回転させると、千里の側頭部に思い切りのいい攻撃が来た。

「痛っ」

そのまま吹き飛ばされるも、千里はすぐに体勢を立て直した。流石に、強い。

ユニオンでも最強クラスの式神使いとして、地味だが遥緋はそれなりに有名である。

事前に得た情報では、神代刹那を直接打ち破ったのは遥緋。あのラグナロクのスルトを

破ったのも遥緋。単純に考えて、相当な実力者の筈だった。

「あの、降参しませんか？ 今ならまだ」

そして、かなりの甘ちゃんだ。未だにこの状況を最小限に食い止めようと頑張っている。

だが、自分達はもう戻るつもりは無い。大切な妹の未来の為。大切だった友達の為。

千里はこんな所で間誤付いてる暇は無い。強く　もっと強くと自分に問いかけた。

「いいわ、本気の狂乱。見せてあげる」

もはや手加減等一切必要ない。狂乱の力を殆ど制御するのを止めると、大地を蹴って千里は走った。

先程までよりもかなり早い。流石の遥緋も緋眼終式を発動させて、千里の斬撃を避けていく。

だが、それでも紙一重。元々の凄まじい剣の技巧に加え、狂乱と式神まで上乘せされている。

刀に纏わりついていた光も、オーラとなって刀身の大きさを変えている。

（一気に決着つけなきゃ）

そう決意すると、遥緋はもう一度鉄の棒を分解し、粒子化させると再び再生。

今度は際限なく。元の大きさまでの再生だ。伸びてくると、それを大地に突き刺し、

遥緋はそのまま棒に掴まって上昇。この鉄棒の本来の長さは実は三十メートル。

地上より三十メートル高い場所まで辿り着くと、遥緋はポケットに入っていた破片を全てばら撒き、

「輪廻転生！」

全ての破片に対し、再生を働きかけた。すると、一つ一つは小さな破片だったのだが、

次々と巨大な刃や凶器に変化して行き、地面目掛けて物凄い速さで落ちて行き始めた。

その数、数百程。あらゆる武器が千里の周囲目掛けて勢い良く落ちていく。

（本当に……化け物みたいな女ね）

乖離に再び光を纏わせ、全てを”切断”してやろうと剣を構えた。やがて、武器が落ちてくる。

狂乱の力と自身の剣技を組み合わせる次々と降り注ぐ脅威をぶつ

た切っていく千里。

そして最後の一つを斬り飛ばすと自分が致命的なミスを犯していた事に気づいた。

上空で棒に掴まっている遥緋が片手をこちらに向けていたのだ。

「マズイ！」

このままでは遠距離から式神を破壊されてしまう。咄嗟に身を投げ出そうにも今までの戦術からかなり計算高そうだ。

自分の逃げられる範囲内全ての空間を認識しているのだろう。そして、逃げようにも地面に刺さった数百もの武器が邪魔で逃げれない。

本当にしたたかな女だ。千里は遥緋の事を高く評価した。だが、諦めたわけではない。

「はあああつ！」

斬撃が届かないならば、届かせればいい。そう式神に意思を込め、乖離を振った。

すると乖離に纏わりついていたオーラが、弧状に変化し上空目掛けて飛んでいく。

上空に居た流石の遥緋もこれには焦った。発動するか、否か。そのタイミングに迷う。

すると、オーラが遥緋の掴まっていた棒の中間地点に触れ、棒が切断された。

更にオーラはそのまま上昇し、遥緋の右肩にを斬り裂いて空へと消えていく。

集中が乱れた遥緋は、不完全なまま分解を発動。放たれた巨大な力が地面で分解を始め

大きく砂埃が舞い上がる。そして、支えを失った遥緋も肩から血

を流しながら地面へと落ちて行った。

第18話：このクソつたれな世界で一番大事なアイツの為なら（前書き）

寒いですね。

執筆していると指の感覚が無くなります。

暖房つけっぱなのにな……

そんなわけで、次回の投稿も全くの未定です。

七話ぐらい先までは書けているのですが

Daysとファーストコンタクトの作業が全くすすまないのと

二月から忙しくて本当に何時投稿できるかわからないので。

申し訳ありませんが、スローペースで行かせて頂きます。

個人的な目標としては、

PAST最終話よりも前に、

Daysの書きたい話を全部投稿しておきたいのです。

これからもこの緋色の眼シリーズをよろしく願いします。

## 第18話：このクソつたれな世界で一番大事なアイツの為なら

万里は千里と途中で別れると、一度自室へと戻った。そして、部屋に置いてあった一振りの太刀を見据える。

全体で三メートル程の人間には扱えないような太刀だ。だが、重さは殆ど感じない。

そういう風に作られているのだ。この太刀の名は、布都御魂。魔具の一族の長・十字字戒が作った最高の魔具の一つ。

万里の剣の才能に惚れ込んだ戒が、万里の十五歳の誕生日に送ったものである。

その力は絶大。まだ自分がこの太刀の全ての力を引き出せたとは思えないが、自分でも恐ろしいぐらいの力は出せる。

「……大丈夫」

自分に言い聞かせるようにそう呟くと、万里は一度、布都御魂を振った。早い。

神速の速さで放たれた斬撃は一瞬にして屋敷の壁を切断し、大きな穴を開けた。

そこから見えるのは、ユニオンと二階堂が争いを繰り広げている場面。

二階堂は戦闘面では十名家の中でも、強い方とは言えない。その為か、結構押されている雰囲気があった。

何より、今回来ているユニオンの人間達はかなり鍛えられていた。剣を主流として使う隊のようだが、

同じ剣を使う万里から見ても、技巧がかなり優れていると感じる。

「ん……」

時計を見つめ、その後遠くの空を見つめる。そこから何かを判断したのか、万里は呼吸を落ち着け、式神を発動。

ボツという音と共に、万里の周囲に炎が生まれた。それはすぐに形を成すようにして集まり、万里の背中に翼を作り上げた。

これが、万里の式神【炎翼】。力としてはそんなに珍しいものではないが、万里にとっては最高の相棒の一つ。

そして更に狂乱の力を発動させ、万里は落下するようにして地上へと落ちていった。

「行きますっ！」

地面スレスレで体勢を立て直し、低空飛行でユニオン側へと突っ込んでいく。

物凄い速さで万里が通過した後には、遅れて炎のラインが出来上がり、ユニオンをかく乱していく。

そして、体勢を崩した所に高速移動しながら狙いを定め、炎の羽を撃ち飛ばした。

過去に千島蒼威の戦いを映像で見て、万里自身が真似た技である。実を言うと、数年前までは結構なファンだった。

(……：皮肉だよな。今、あの人の息子と敵対してるんだから)

やはり高度な模倣のお陰か、炎の羽はユニオンにかなりの打撃を与えたようだった。

その隙を利用してか、二階堂がどんどん攻め込んでいく。勿論、万里に礼は無い。

そうするのが当然。といったような感じで、二階堂は我先にと力を使用していく。

「ばーか」

もう脅える必要は無い。万里は、チラリと屋敷の方へと視線を送った。

すると自分の家の部下。三枝の人間と目が合い、お互いとも頷きあう。すると

「何をもたついている！ 貴様ら早く加勢せぬか！」

二階堂の直系だろうか。いやに偉そうな一人の男が三枝家の人間をそう怒鳴りつけた。

いい気なもんだ、と万里は思う。仲間ではない。一方的な支配の癖にこんな時だけは助力を請う。

三枝家の人間もその言い方に不服を覚えたのか、適当な、だが反抗的な態度で二階堂を睨むと、

「うるせえよ」

と一言だけ言い放ち、ゆっくりと自身の式神であるう。拳銃型の式神を構えて一発発砲。

完全に味方だと思っていた二階堂は、そのまま自分が死んだ事すら気がつかないまま絶命した。

それを機に、次々と三枝家の遠距離型の式神使い達が二階堂に向かって攻撃を始めて、次々と二階堂の人間を殺していく。

流星のユニオンもこれには慌てたようだった。自分達の理念の一つである無益な殺し合いの調停を思い出したのか、

次々とその争いに加わってこようとする。だが、そうはさせない。万里がその前に立ちふさがる。

「邪魔しないでください。これは、長い間二階堂に虐げられてきた三枝の反乱なんですから」

「そ、そんなわけにはいかない。明らかにこれは」

「貴方達他人に何がわかるって言うんですか」

せめてもの情けとして、鞘に収まったままの布都御魂で殴りつけるとその場に昏倒させた。

それを皮切りとして、ユニオンが再び戦闘態勢に入り、万里を囲むようにして包囲する。

五人ほどのそれなりに強力な式神使いに囲まれる万里。だが、全く動じていない。

「……仕方ないですね」

布都御魂の鞘に手をかける。三メートル故の長さか、抜刀術には向かないこの太刀。

殆ど投げ捨てるようにして鞘から刀身を引き抜くと、そこには美しい刃が輝いている。

一瞬の躊躇の後、ユニオンの隊員達がそれぞれの式神の力を発動させた。それと同時に万里は布都御魂を大地へと突き刺す。

ぶわつと一瞬風が起きて、布都御魂の刀身が光ったかと思うと、ユニオン隊員の式神がなくなっていた。

慌てて再召喚しようとするも、何故か出てこない。何度やってもいつもの感覚通りにいかない。

そして、万里はニヤリと笑うと目にも止まらぬ速さで布都御魂を振るい、全員を峰打ちにすると、布都御魂に念じて再び鞘へと刀身を収める。

「貴方達の正義もわかるけど……私達にも譲れないものがあるんです」

と呟いた後、爆音が鳴り響いた。万里や周囲の三枝や二階堂でもない。

少し離れた場所　先程まで自分達が居た二階堂の応接室の屋根が物凄い勢いで吹き飛んで行き、

その中からは、巨大な氷の蛇が見える。そして、それから逃げるように空中を舞う黒龍。

「うーちゃん！」

と慌てた万里が雨龍の下へと向かおうとすると、紅色の閃光が万里の頬を掠めた。

振り向くと、そこには不機嫌そうな顔の天美運命。しかも、一人ではない。

他に三人の天美運命が、自分が気絶させたユニオン隊員達を抱えて、出口のほうへと跳んでいく。

どうせ式神の力だろう。なら敵ではない。そう思い

「お前達、これはやりすぎ。何人死んだ。何人が泣いたと思う」

「逆に聞きますけど、二階堂の所為で何人の人間が殺されたと思います？

何人もの女性が泣いてきたと思います？　これは、当然の報いです。やっていいのは、やられる覚悟のある人間だけですから」

「それは否定しない。一番気に入らないのは、私達ユニオンを巻き込んだ事。」

内輪の殺し合いなら内輪で済ませるのが筋。何故、今日なの？」

「当たり前じゃないですか。馬鹿な二階堂を後ろから効率よく討つ

には、戦う相手が必要です。

元々、ユニオンとは何時か敵対する予定でしたしね。丁度いいか  
と思ったからです」

「……もういい。じゃあ、こっちも本気で行くから」

運命は阿修羅姫を抜き放ち、凄まじい速さで万里へと斬りかかっ  
た。

上空で、二階堂雨龍は流石に焦っていた。過去の千島蒼二と戦っ  
た事はある。式神の能力も「黒い氷の小型チェインソー」と  
わかっていた。だが、久しぶりに手合わせした千島蒼二はそんな  
常識を、全て覆すような力を入れていた。

先程まで居た部屋　いや、二階堂の屋敷に根付くようにして、

巨大な八頭を持つ氷でできた蛇が雨龍を睨みつけている。

その首の一つに、蒼二は安定した様子で立っていた。幾ら蛇が大きく動こうとも、全く落ちる気配は無い。

よくよく見てみると、蒼二の履いているブーツには氷が纏わりついており、そのお陰で首に接着しているのであった。

「ナめてかかったな、雨龍。今なら、殺さないぞ」

蒼二は雨龍を見ながら淡々と言った。そこからは昔のように感情は読み取れない。

完全に十年ほど前とは別物になっている。何と言ったらいいかわからないが、風格のようなモノがある。

そしてその瞳は昔のように鮮やかな緋色で、断固たる決意を持った輝きは相変わらず色褪せてない。

だが　それは自分も同じ。もう、後には引けないし、負けられない。雨龍は再び気合を入れなおすと、

「ハッ！　まだだア！　もう勝った気で居るんじゃないぞ！」

そのまま蒼二へと向かって特攻。すると、八本のうちの四本の蛇の首が雨龍に狙いを定めて大きな口を開き、

その中から凄まじい量の氷柱をぶちまける様にして吐き出した。

もはや、それは氷柱の嵐。

四方向から放たれた夥しい量の氷柱は、全て雨龍の居る近くの空間もろとも侵食していく。

だが、雨龍は心を落ち着けて、予知の力を発動。周囲の状況から、最低限の被害のルートを探し出し、

道が無ければ火球や自らの拳で切り開いて行く。

「おらああアアッ！」

全ての氷柱を避けきると、雨龍は首に着地し蒼二へと巨大な爪を閃かせて襲い掛かる。

蒼二は蛇の首の上を滑るように移動し、中々雨龍を近づけさせない。逆に雨龍は滑る地面に足を取られ、

自慢の機動力を本来の力通りに発揮できない。最悪な式神に成長しやがった　雨龍はそう舌打ちすると、

一旦首から飛び跳ねて、再び空を翔けながら蒼二を口から吐く火球で狙い撃つ。

「罪歌ならまだしも、その程度の炎が俺に勝てると思ったか？」

炎は蒼二の修羅紅雪の一振りによって、あっという間にかき消されてしまった。

そして、七本の蛇の巨大な口が近づいてきて、雨龍の周囲を囲うようにして止まった。

流石にこれで一気に氷柱を放出されれば、避けれる可能性は限りなくゼロに近い。

蒼二は、ゆっくりと修羅紅雪を八頭目の蛇の頭へと突き刺し、

「詰み、だな。降参しろ」

「……………」

「もういいだろ。何があったのかはしらねーけど、これ以上殺して、調和を乱して一体何になる。」

一度、俺達に投降して全て話せ。もし、力になれるんだったら俺達は協力を惜しまないつもりだ。

流石に、襲撃の責任は取ってもらっけどな」

「……………ハッ。随分、まともな事言うようになったじゃねーか」  
「こつ見えても、組織の長だ。ハンパなガキのまんまじゃもう居られねーんだよ」

蒼二がそう言つと、雨龍は声を上げて笑つた。それは、何時ものような嫌味な笑いじゃない。

純粹に、楽しそうに雨龍は笑う。ゲラゲラとではなく、丁寧に、何かを反芻するかのよう

「千島蒼二イ。テメーは変わったな。死罪六神の頃のテメーたあ、全く違う。面白れエよお前。

でも、俺はよオ。馬鹿だからな。このやり方しか思いつかねーんだわ。

このクソつたれな世界で一番大事なアイツの為なら、こんな命惜しくねエ。だから こんなトコで終われねエんだよ！」

「……………雨龍」

蒼二は深くため息をつき、力を放出させた。蒼二自身実はかなり動揺している。

二階堂雨龍のこんな姿を見るのは初めてだった。その目は、今の自分とそっくりだと思ふ。

誰かの為に 大切な人の為に、全てを投げ打つても叶えなければいけない事がある。

そんな目。だからこそ 手を抜けない。一人の人間として、一人の愛すべき馬鹿として、

蒼二は全力で雨龍を潰そうと、全ての力を送り込んだ。

「待ってたぜエ！」

八頭の蛇が口を開いた瞬間、雨龍は黒龍の頭現を解いた。そして、黒龍の姿が消え

次に雨龍の体から真っ赤な紋様　コンセプトが飛び出した。まず、それは雨龍の体へと

刻み込まれ大きく体を変質させていく。体が膨れ上がり、翼が生え、人間としての外見をギリギリ

残したまま赤い鱗が雨龍の全身を覆いつくした。そして、変化が終わり雨龍の外見は竜人と呼ぶに相応しい外見へとなっている。

「なっ……!？」

流石にこれには蒼二も驚いた。だが、もう攻撃は止まらない。八頭の蛇全てから凄まじい量の氷柱が発射されていく。

雨龍は瞳孔が縦に割れた爬虫類の瞳でそれらを見据えると、再びコンセプトを発動。

紋様が幾つも出現し、それに氷柱が触れると途端に氷柱が変質し、一匹の氷の龍を形作る。

最低限自分の身を守るように紋様を集中させ、氷柱を龍へと変えながら飛翔する雨龍。

何百という氷の龍が生まれ、途端に形勢はほぼ五分にまで戻ってしまった。

「ハッ。奥の手は最後まで隠しとくもンだぜ？」

「……今回はお前が一枚上手だったな　だが、」

八頭の龍が氷の龍を食いちぎろうと、物凄い勢いで動き始めた。蒼二も緋眼を発動させて、氷の上を滑っていく。

「こつちも、このままじゃ終われねーんだよ！ 決着つけるぞ！」

蒼二は修羅紅雪の刀身から長い氷を生み出し、それを刃のように鋭く尖らせ、雨龍の氷の龍を一気に斬り裂いた。

斬られた龍達は再び蒼二の支配下に戻り、氷柱へと戻るがすぐに雨龍のコンセプトによって再び龍へと変えられてしまう。

キリがない そう、同時に判断した二人は、一気に距離を詰めて接近戦へと持ち込んだ。

蒼二の修羅紅雪と雨龍の変質した体。身体能力は雨龍の方が上のようで、緋眼でも追うのが難しい速さで攻撃をしかける。

蹴り、爪、あらゆる格闘技の技を使いながら、雨龍は踊るようにして蒼二を追い詰めていく。

「……ッ！」

雨龍は強かった。神威を使う自分の方が圧倒的に有利なはずなのに、追い詰められている。

自分もまだまだ強さが足りない そう、自嘲気味に笑うと蒼二は終式を発動。

一気に氷の地面を蹴り、雨龍の背後へ。雨龍はそれに何とか反応したが、避けきれなかった。

腕を交差させて修羅紅雪の刃を受け止める。が、そこからどんどん雨龍の体が凍り始めて行った。

「クソがアッ！」

口から火炎を吐き、蒼二を一旦遠ざけた。ダメージは無い。蒼二に触れる前に炎は消されてしまった。

実力は拮抗しているように見えるが、慣れないコンセプトを使用した為に雨龍の体力は急激に消耗していた。

そろそろ時間の筈　とまで思った所で、二階堂特区内に張られていた結界に異変が起きた。

空間が歪み、周りの景色を塗りつぶして現れたのは　一之瀬凜の空船。

それを見ると、蒼二は何かを考えながら雨龍を見据え、

「十名家が嚙んでいたのはやはり本当らしいな。雨龍。お前達の目的は何なんだ？」

「約束ってヤツかね？　どいつもこいつも譲れねーもんがあんだよ」

「……ふん。なら、あいつらからも事情聴取しなきゃな！」

蒼二はそう言うと、八頭の蛇を空船へと向けようとした。だが、突然氷の蛇が消えた。

何の前触れも無く存在が消え、一気に下降していく蒼二。すぐに修羅紅雪の力を再び発動させ、氷の足場を作ると

二階堂の屋敷の屋根にどうにか着地した。下を見ると、運命が片膝をついて血を流している。

その前をフラフラと、頼りない足取りで三枝万里が歩いていた。

万里は、一度蒼二を睨みつけ、

「邪魔するなら、容赦はしません」

そう言い残し、空船から下りてきた黒い紐に掴まって一気に引き上げられて行ってしまった。

少し離れた場所からはジェットスキーが何故か浮かび上がり、それには三枝千里が乗っている。

完全にこちらの敗北だった。無駄に兵力を使わされ、二階堂の大量虐殺も止められなかった。

周りには死体が溢れている。唯一の救いは、ユニオン側の隊員の死体が見当たらない事。

だが、蒼二は一度歯を食いしばると、腹立たしそうに地面を一回蹴った。

雨龍は空船に乗り込むと、内蔵されているシャワーを使い、壁に手を突きながら中を歩いていた。兎に角、これで何とかひと段落着いた。

後は戒や他の十名家に任せて、今は何も考えずに寝転びたい。そんな衝動に駆られる。

フラフラとした足取りで空船に割り当てられた自分の部屋まで歩き、ドアを開けると、

「万里……」

ベッドに真剣な表情をした万里が座っていた。しかも、手には何かを持っている。

何時もとは違う万里の様子に不安を覚える雨龍。そして、万里はゆっくりと雨龍を見据え、

「うーちゃん……私、妊娠しちゃったみたい」

そう震える声で呟いた。

第19話：救えないね。ホント（前書き）

全く執筆が進んでません。

次も二週間ぐらい先になると思います。

次回からは少しだけ光希編に入ります。

## 第19話：救えないね。ホント

「うーちゃん……私、妊娠しちゃったみたい」

わかってしまった。自分がどれ程愚かなのか。結局、自分にも汚い童男の血が流れているのだ。

一度だけ万里にせがまれてそのまましてしまったのだが、その一回でまさか

と思うも、雨龍はもう引けない。自分が望むのは万里の幸せ。ならばする事は一つ。

「……お前は、どうしたいんだ？」

バカだ。最低だ。万里の答えは手に取るようにわかる。そして、それによって万里がまた傷つくという事も。

だけど、雨龍は何とか声の震えを抑えながら、そう言ってしまった。

「私……産みたい。折角授かった命だもん……うーちゃんと私の大切な子どもだから……」

「そうか。　じゃ、お前はもう用済みだ」

心が酷く痛んだ。まだ、まだ今なら戻れる。そう心に問いかけるも、それでも自分には万里を幸せにする資格は無い。

見る。万里の顔が呆然としている。謝れ、今すぐ抱きしめて謝罪しろ。頭の中にそんな選択肢が浮かぶが、雨龍はそれを振り払った。

「え……」

「戦えねエお前には用事はねエ。今からお前の新居としばらくの生活費を手配すつから、それが終わったらお前はこの船を降りろ」

万里の瞳から涙がポロポロと零れ落ちた。辛い、目を背けたい。だが、それは許されない。

「う、うーちゃん！」

「うるせエ！ テメーがしろって言ったからこんな結果になつちまつたんだ！ 母親としての責任を取れ。俺は父親としての責任を取る！」

「じゃ、じゃあ……結婚してくれるの？」

「駄目だ。お前は三枝の人間だ。そもそも、二階堂の子を身ごもつたお前を千里やお前の父親が許すと思うか？」

お前は、子を産む事に専念しろ。まずは、それからだ。これ以上、船には乗せねえ」

「そ、そんな！」

「話は終わりだ。……さつさと出てきな」

万里の手を掴み、無理やり立たせると雨龍は負担をかけないように、外へと追い出した。

しばらく動かなかつた万里だが、やがて泣声を上げながら雨龍の部屋から遠ざかっていく。

……五分が経過しただろうか。雨龍は、ベッドに大の字になって寝転がり、

「うっ……うっ……うわああああああああああ」

泣いた。母親の葬式でも泣かなかつた雨龍が十数年ぶりに涙を流した。声をあげ、涙を流し、みつともなく泣き叫ぶ。

世界で一番大切な者すら失ってしまった。もう、万里は二度と取り戻せないだろう。

子供は万里の人生の妨げになるのなら、雨龍が一人でも、愛情を持って育てあげるつもりだ。

だが、もう止まらない。止まらない。二階堂を潰した。これから、雨龍は三枝と十文字との取引に応じなければならぬ。

それさえ上手く行けば、万里は自由の身だ。何処へだって行ける。好きな相手と一緒に居られる筈。

自分達二階堂が曲げてしまった万里の幸せになる筈だった人生がやっと帰ってくる。

その為なら、幾らでも金や物を与え続ける。たとえ、それで自分が幸せになれなくとも。

「雨龍……」

雨龍の影から、黒龍が顔を出した。十年來の友であり、式神である良き隣人は気まずそうな声で、

「俺は、お前の味方だ。それだけは、真実」

そう言うと、再び影の中へと潜ってしまった。「バカが……」と雨龍は微笑を作り、心の中で礼を言う。

顔を上げてシートで涙を拭う。まだ、心は痛むがそんな事は言っ  
てられない。

すると、ドアがノックされ雨龍が返事をしてから間をおいて、千

里が部屋に入ってきた。

確実に機嫌が悪い。そう思わせるような表情の千里は、雨龍の胸倉を掴み上げ、

「あの子が泣いてたわ。アンタ、何をしたの？ 場合によっては夕  
ダじゃ済まさないわ」

千里の瞳は本気だった。雨龍は真正面から千里を見据え、全てを  
話した。万里の妊娠の事。

自分の責任の取り方。それら全てを話し終えると、千里は脱力し  
たようにベッドに腰掛け、

「そう……あの子が、妊娠」

「許してくれとは言わねえ。ただ、責任だけはきっちり取る」

「わかってるわよ。でも、かえって好都合かもね。これで、三枝と  
の取引は確実に進む。」

お父様も二階堂の子が跡継ぎなんて嫌でしょうから。嫌でも私が  
頭首になるわね」

「そしたら万里は自由だ。まだアイツは二十代前半だ。何かやるに  
は遅くはねえ。」

きっと良い相手や友達もすぐに出来るだろう。金は俺に任せろ。  
例え更なる汚名を被ってもあいつらには不自由はさせねえ」

「私だつて勿論何かするわ。あくまで非公式になっちゃうけどね…  
…。まあ、まずは

こっちのやる事を終わらせなきゃね。万里には最高級のマンショ  
ンを用意しとくわ、

後は専属のお手伝い　これは三枝の万里派の使用人で良いわね。  
二十四時間体勢で警護させるわ」

「頼む……俺はもう二階堂じゃねえからな。人を殺すしか能のねえ。  
ただのチンピラだ」

「……………でも、親でもあるじゃない」

「親……か」

二階堂は最悪の家族だった。誰もが腹に何かを抱え、上辺だけ笑いあっているような家族。

あんな家庭だけは絶対に作りたくない。どんなに貧乏でも、どんなに苦しくても、

お互いを思いやり、助け合えるような家族になりたい。そう、幼い頃から思っていた。

だが　結局それも夢物語でしかない。雨龍は自分を嘲り、話題を変える事にした。

「それで、戒の仕事つーのはアレか……十年前の、あの事件の関連か？」

「そうね。私の中でも、凜や遠音の中でもまだあの事件は終わっていないのよ。

悲しかった。とても悲しかった。何で、あんな事が起きちゃったんだろう……」

あれさえ無ければ、あの子は今でも隣で真剣に私達の話聞いていてくれたと思うわ……」

「希さんか……。俺も、龍一に苛められたのを何回か助けてもらっ

たぜ。

スゲー優しい人だった。母さんと同じような……母性みたいなモンを感じた思い出がある。

それで、アイツの目的は？ 俺にはさっぱり見当もつかねーんだがよ」

「多分……コアを集める事で何かをしようとしている。それも、希関連の何かをね。

詳しくは遠音辺りが知ってると思うから、今度合流したら聞いてみるわ」

「わかった。万里の方の件も含めて、頼むぜ」

「姪か甥の父親になる人の頼みじゃ、断れないわね」

そう言うと千里は軽く、雨龍の頭を撫でて外へと出て行った。

「千里姉ちゃん」と呼んでいた子供の頃に戻った感覚がして、少しくすぐりたい。

大切な思い出を胸にしまうと、雨龍は再び何時もの無愛想で攻撃的な表情を作り、

「万里……ごめんな」

と呟いた。

二階堂特区の建物の影。二階堂龍一は辛うじてまだ命を保っていた。

龍一の式神は自身の体を鋼鉄へと変える式神。その効力によって、炎と出血する傷口を止めたというわけである。

また、鉄さえ取り込めば前と同じように体を部分的には再生することもできる。

床を這うようにして二階堂の地下倉庫まで行った龍一は、何とか腕を再生させてここまで来たというわけであった。

(殺してやる……絶対に殺してやる)

雨龍にナめられ、三枝姉妹にも土をつけられた。凄まじい憎悪が胸の中で膨らんでいく。

二階堂としての権力は失った。だが、もしもの時の為に龍一は賞金稼ぎ達と親交を結んでいた。

奴らは金と力を裏切らない。とりあえず、彼らの下に行き体をゆっくり治した後に雨龍と千里に復讐する事にした。

その為にはまず、此处から脱出しなくてはならない。ユニオンに見つかるのも厄介だ。

(制服を奪うしかねえな……)

ユニオンの制服を着ていれば、何とかこの場は切り抜けられるだろう。

龍一は音を消して移動し、一人の隊員らしき男への背後へと接近した。

そして、予知の力を発動させようとした時

「久しぶりだね。二階堂龍一」

男が振り向いた。そして、龍一と目が合う。何処かで見た事がある男だった。

遠い昔に何処かで　　と思いついたところで、完全に記憶が復活した。

それと同時に、驚きが生まれる。何故、何故コイツがこんな場所に居るんだと

「て、テメエは……」

「ああ、まだ覚えていてくれたんだ。嬉しいよ」

男はあの時と同じような笑顔を作った。だが、目は笑っていない。どれだけ修羅場を潜り、人を恨んだらこんな冷たい目つきが出来るのだろうか。と思うほどの冷たい目。

少しは成長したんだな。とそんな目の力を無視して龍一は立ち上がると、腕を剣の形へと変えた。

「ハッ。テメエがまさかユニオンに居るとはなあ。だが、お前じゃ俺には勝てねえよ」

「やってみれば、わかるぞ」

「このボケがア！」

龍一は勢い良く走り出す。男も虚空から式神であるう剣を抜き放ち、応戦の体勢を取った。

剣を地面に突き刺し、ゆっくりと腕を組む。その間に龍一は距離を詰め、男の顔に剣を刺そうとしたのだが、

「うおっ!？」

急に地面がぬかるみ、大きく体が沈んだ。そして、一瞬の激痛の後にすぐ地面が元の固さへと戻る。

周りからは白い煙が噴出していた。意味が分からない。昔はこんな力を持っていなかった。

しかも動こうとしても体がびくりとも動かない。半身が埋まるようにして、そのまま地面に固定されてしまっている。

「お、おい！ 何をしやがった！」

「……さあね。さて、これからどうしようか？ 二階堂龍一君」

「ま、待ってくれよ。あの時の事は謝る。アイツにも二度とちよっかいは出さない！」

だ、だからよ。まずはこれを解除して話し合おうぜ。な、なあ！」

「……僕もあの時謝ったよね。土下座したよね？ でも、お前はどっしりしたっけ？」

「う……あ……頼む……まだ、まだ死にたくねえ！」

「……ふう。僕もまだ甘いな」

泣いて言葉を発する龍一を見ると、もはや恨みは消えつせた。そ

ここにあるのは哀れみだけ。

男は剣を再び地面に突き刺し、力を加えてやる。すると、再び龍一に激痛が走り、

地面がぬかるんだ。そして、男はもはやどうでもよさそうな口調で、

「次、会ったら殺すからね？」

「……ああ、もう二度とお前の前には現れねえ。ただし、お前が居なくなるんだがな！」

龍一の腕が物凄い勢いで伸び、男の体を串刺しにしようとした。だが、男は予想していた。

その軌道を完全に見切り、剣を一度振るって遠くへと斬り飛ばした。

龍一の顔が驚愕に染まると同時に、男のブーツが龍一の頭へとめり込んだ。

「救えないね。ホント」

男はそう言うと、剣の切っ先を龍一の頭へと触れさせた。次の瞬間、龍一が液体化し、

嫌な匂いが周囲に蔓延する。悲鳴もなく、抵抗もなく今度こそ二階堂龍一は死んだ。

だが、心は晴れない。こんな悪党一匹殺した程度で、何かが変わると思えなかった。

あの時の、絶望。彼女の泣いた顔。今でも覚えている。それから、我武者羅に力を求めた。

純血が混血に勝つ為には、絶対に式神で優位に立たなくてはならない。最初は微弱だった

自分の式神もようやく此処までこれた。

「さて、そろそろ戻らないとな」

今回の任務に当てられたのは非常に幸運だと思った。やはり、自分の目に狂いは無い。

ユニオンに入ってよかった。この任務につけて、非常に良かったと思う。

これで、完全に過去とは決別した。後はもう進むしかない。あの時守れなかった者を取り戻したい。

男はそんな決意を瞳に宿らせると、再び元の表情に戻りその場から去っていった。

戦闘が終わり、蒼二達は一度部下を全て二階堂の正門に集めて、点呼を取らせた。

幹部の負傷者は運命と遥緋。遥緋は右腕を斬り飛ばされかけ、肩にはかなりの血痕が残っていた。

運命も同じように全身に無数の血痕の後。こちらは鬼神の為に今ではほぼ全回復しているようだった。

「お前らがやられるなんて珍しいな」

「ごめん。相性があまりよくなかったみたい。全部斬られちゃったよ」

「こつちは全く刃が立たなかった。阿修羅姫は消されちゃうし、蒼威パパと同じような

技を使ってくるし。何より、剣のキレがハンパじゃない。郁人よりも上だったね」

「そか。とりあえず、俺も逃がしちゃった。神威を使ったのに情けねえ事だが。

命があっただけ拾いもんだな。とりあえず、お前達は怪我を治す事に専念してくれ。」

あー……南野。部隊の方の損傷はどうなってる？」

蒼二は少し離れた場所に居た、郁人の部隊のまとめ役へと声をかけた。

一応、名前ぐらいは知っていた。郁人の部隊に七年前に入ってきた人間の一人だった。

式神は人並みより少し上ぐらい。だが、頭の回転の速さと人に好かれる性格の為に、

ユニオン内部の他の隊の人間からも人気があるとまでは、郁人から聞いていた。

「あ、はい。こちらは重傷者が五人。軽症者は七人ですね。遥緋さんに治して頂いたので、

全員命に別状は無いです」

「わかった。皆ご苦労だったな。全員怪我を治す事に専念してくれ。気分や体調の悪い奴は

すぐに言ってくれ。二階堂特区内の病院を一応、手配させているからな」

そう全員に声をかけると、喜一がこちらに近寄ってきた。

「もうしばらくしたら、八神の人間が此方にきて調査を始めるそうです」

「そうか。何から何まで手回してもらってすまないな」

「いえ、これが仕事なので。とりあえず、ウチの部隊は撤収でよろしいですか？

流石に治してもらったとはいえ、ここでは環境が悪すぎます。一応、自分は八神が来るまで

ここに居るつもりですが、他の奴らはそれでよろしいでしょうか？

「いや、お前も下がっていいぞ。後は俺達に任せてくれ」

「え……」

蒼二がそう言うと、一瞬喜一の顔に疲れたような表情が浮かぶ。

だが、それは一瞬の出来事。

数瞬後には何時もの笑顔が浮かび、人懐っこそうな目で蒼二を真正面から見つめると、

「少し、疲れたみたいですね。申し訳ありませんが、お言葉に甘えさせていただきます」

「そうしてくれ。何かあったら、郁人にすぐ相談しろよ？ 信頼あ

ってこそその隊だからな」

「はい！」

喜一はそう言うと、部隊の人間に混じって歩いて行ってしまった。しかも、怪我で辛そうな隊員を背負って。自分の目からみても、良い部下を持ったと思う。

怪我をしている隊員は混血だった筈、そして喜一は確か純血だった。

だが、二人の間にそんなどうでもいいわだかまりは無い。少なくとも表面上は。

自分の考えた理念がこんな所でも垣間見えて、蒼二は優しく目を細めた。

第20話：千島家、西へ（前書き）

投稿頻度が少なくて申し訳ありません。

執筆中小説はもうクライマックス終盤までなのですが、諸般事情により、二週間に一回ぐらいとなっております。

たぶん、四月になれば一週間に一回。

それぐらいかそれ以上に戻せると思うので。

それまではこのペースでお付き合い頂けると幸いです。

K I R A K I R A S h o w T i m e 届きました!!!  
これ聞きながらバリバリ書くだけは書いていこうと思います!  
a s o n g f o r はマジで神曲すぎる。

## 第20話：千島家、西へ

ユニオンと十名家の抗争が激化したのと、浅葱家が襲撃された事件があったので、

千島家は七海傘下のヤクザへと身を寄せる事になっていた。

蒼威はもう殆ど引退した身であるが、浅葱の力になる為に今は陸人達の下へと行ってしまっている。

そんなわけで、遥と光希は秋月奏 旧姓七海奏と一緒に新幹線に乗って、岡山県へと向かっていた。

「……だからね。奏ちゃん。狂君はそんな事をしないとは思っけど、携帯のチェックはかかさない事ね」

「は、はい。とても勉強になります」

光希は乗り物に乗ると、すぐに睡眠に入ってしまった為、遥と奏はここ二時間程、ずっと夫婦について語り合っていた。

既に結婚して数年経ち、子供も立派に成長してくれているが、結婚生活に不満が全く無いというわけでもなかった。

「狂さんってば、最近私の事ほったらかしなんですよね。確かに、お仕事は忙しいのはわかりますけど。」

家に帰ってきてても善とばかり遊んでいましたね。ホント、何の為に私はここに居るんだろう

って思うときが最近結構多くなってるんですよねえ……たまには、かまって欲しいんですけど」

「そついうのは、ちゃんと言わなきゃ駄目よ。男つてのは本当に鈍感なんだから。」

蒼威君なんて、私を約七年放置プレイだよ!? 子育てが忙しかったから、浮気なんて考えた事も無かったけどね」

「七年ですかあ……。遙さんは凄いですねえ。私なんか、三日連絡が無いだけで、涙が……」

「ちゃんと夜は抱かれなきゃ駄目よ。自分は好かれると思って、疎かにしてると。」

男なんてのは、性欲の塊だからね。どんどんお互いの気持ちが離れて行っちゃうものなの」

「わ、わかりました。帰ったら、久しぶりに甘えてみようと思います」

そう奏が鼻息を荒くして、自分を炊きつけている時だった。

「奏お姉ちゃんって抱っこされたいのー?」

唐突に眠っていた筈の光希が目覚めており、不思議そうな顔をして遙と奏の顔を見ている。

流石に子供にこんな話は出来ない。遙は慌てて、フォローに走るうとするも、

「み、光希。お菓子食べる?」

「んーん。お腹いっぱいだからいいや。で、奏お姉ちゃんは誰に抱っこされたいのー?」

「きよ、狂さんに抱っこされたいなー。なんて……ははっ」

「わかった。今度狂兄ちゃんに会ったら言っておくね。お姉ちゃんが抱っこして欲しいって」

「い、いいわよ……明日には会うんだから」

「あ、そういえばそうだね。……お母さん、僕ちよっとトイレ行ってくるー」

「い、行ってらっしゃい。知らない人についてっちゃ駄目よ」

「うん」

光希が手を振りながら、電車内を駆けていくのを見送ると、遥と奏はドツと疲れたように椅子に体を預けた。

「……光希君。恐ろしい子ですね」

「蒼二や遥緋の倍くらい素直な子だけど、その分こつこつ時に破壊力があるのよ。あの子は……」

それから更に一時間後、目的の駅に辿り着いた遥達は荷物を持って、電車から降りた。

奏は何回か此処に来た事があるらしく、駅構内にある物件の説明をしながら、駅の外へと出た。

そこに待っていたのは、遥が予想していた通りの黒塗りの高級車だが、そこから出てきたのは、

どうみてもヤクザには見えない、地味と言ったら失礼か、優しそうな雰囲気を持つ男だった。

「お久しぶりです、奏お嬢様」

「鬼塚さんこそ、お久しぶりです！　こちらが件の千島遙さんと息子の光希君です」

鬼塚と呼ばれた初老の男は、遙と光希にキッチリとした動作で体を向けると、深々と礼をして、

「はじめまして、鬼塚小太郎と申します。誠心誠意、貴女方のサポートや身の安全を守るべく

本日より組員一同、一丸となって御守り致しますので、どうかよろしくお願い致します」

「はい。こちらこそ、よろしく申し上げます。ほら、光希もご挨拶しなさい」

「千島光希です！　これから、しばらくお世話になります」

「はい。よろしく申し上げます。では、立ち話もなんですから、早速我が家へのご案内致しますので、ご乗車ください」

奏は助手席に、遙と光希は後部座席に乗り込むと、迎えに来たのは鬼塚一人のようだった。

従兄妹から聞いていたヤクザ像とは少し違う感じに、やや遙は戸惑いつつも、何とかなるだろうと思いきや、いやいやに事にした。

光希は光希で、初めて乗る高級車に期待を膨らませており、さつきから世話しなく中を見渡している。

鬼塚は、丁寧な運転で車を進めながら、段々と人が少ない住宅街の奥の方へと向かっていく。

「奏お嬢様も此処に来るのは久しぶりでしょう。最後に来たのは、

遠音様と……あ、失礼」

「いえ、お姉様の事はお気になさらずに。父と旧知の仲である鬼塚さんの事です。」

お姉様は表向きには亡くなった事になっていますが、生きていられる事は知ってるのでしょうか?」

「ええ……惣一様からそれだけは、聞いておりました。大変、残念だと思えます。」

あの事件は本当に酷かった。私も何回もお見舞いへと向かったのですが、全て惣一様に止められてしまいましたね」

「……父は、逃げたんですね。お姉様をあんな体にしてしまった事から。だから、お見舞いも全て禁止した。」

お姉様が病院から脱走してからも、敢えて探そうとはせずに、ずっと皆を騙して」

「そう、惣一様を責めないであげて下さいませ。アレは、七海の頭首として、歴史を背負う者として

仕方の無い行動だったのです。現に、惣一様はずっとその事を気にやんで、ついには体調まで……」

「わかってます……でも、お姉様は……きっと、悲しかっただろうなあ」

それきり、車の中での会話は無くなってしまふ。だが、そうこうしているうちに、車は鬼塚家へと辿り着いた。

八神の家を小さくしたようなスケールだが、それでも近隣の家と比べると明らかに大きい。

やがて、車が止まり、鬼塚は遥と光希から荷物を受け取ると、先

頭を歩いて家の中を案内する。

人の数はそんなに多くない。やはり、ヤクザなだけあって、居る人間はどう見ても堅気ではないが、

それでも、遙が見てきたヤクザよりは幾分マシなように見える。何というのやら、落ち着いた雰囲気の組であった。

「どうぞ、こちらへ」

三人が通された部屋は、広々とした和室。多分、鬼塚の私室であろう。幾つかの家具に紛れて、奥のほうには

仏壇や写真が飾ってある。そして、遙達は鬼塚と向き合つようにして、座布団の上に座った。

すると、部屋の障子が開き、入ってきたのはまだ若い男。長い黒髪を不潔に見えない程度に整えており、

目の付近に傷でもあるのか、サングラスをかけていた。男が持っているのは、お茶と菓子。

「はじめまして、鬼塚二郎と申します」

挨拶を終えると、男　二郎は、丁寧な動作で、お茶とお菓子を配り始める。

「あらあら。二郎さんと私は初対面でしたっけ？」

次郎を見て、不思議そうに奏は鬼塚へと問う。それに、二郎は一礼すると、会話しても良いかの許可を取るように、

鬼塚のほうを見つめた。そして、鬼塚はそんな二郎を見つめて、嬉しそうに笑つと、

「そうですね。二郎、奏お嬢様や千島さん達にちゃんと自己紹介を

しなさい」

「わかりました」

そう言うと、二郎は鬼塚の隣だが、やや後ろ側に正座し、正面から三人を見つめると、

「先程も言いましたが、鬼塚二郎と申します。まだ若輩者ですが、一応この組の若頭を務めさせて頂いています。

誤解の無い様に申しますと、私は親父殿の実の息子ではございません。記憶を失い、街を放浪してたチンピラだった

私を拾ってくれたのが、親父殿との出会いでした。それから約八年。鬼塚組に誠心誠意仕えさせて頂き、

この度は、千島様の護衛兼従者として精進させて頂きたい所存にございます。」

二郎は土下座でもせんばかりの勢いで、遙達へと頭を下げた。流石にこれには、遙も光希も戸惑い、

「あ、はい。よろしくお願いします」

「よ、よろしくおねがいしますー……」

その言葉を聴き終えると、二郎は満足したように再び顔を上げて、鬼塚の言葉を待つ。

「ハハハ……この子は、こつやって堅い子ですが、根はいい子なんです。どうぞ、お気軽に接してやってください。

さて、次郎。早速千島様をお部屋にお通しして、この家の事を説明してあげなさい」

「はい。では、参りましょう。秋月の奥様、これにて失礼致します」

「ええ。どうか、遙さんや光希君の事をお願いしますね」

「この命に代えても、お守りいたします」

電話がかかってきた奏を尻目に、遙と光希は二郎の後に続いて敷内の生活に必要な場所を案内されていた。

「こちらを右に曲がりますと、トイレ。左に曲がりますと、お風呂があります。一応、男女分けがあるので

ご安心を。覗きやその他セクハラ行為があつたらすぐにお申し付けください。私自ら、処罰に行きますので」

「は、はあ……」

「光希様は、お母様とお風呂にお入りになるのですか？」

「んー……僕はどっちでもいいよー」

「では、慣れるまではお母様とでどうでしょう。慣れてきましたら、不肖私が、お背中をお流しいたします」

「わかりましたー。よろしくね。二郎兄ちゃん」

「……は。では、お部屋へと参りましょうか」

二郎は先程までとは少し違い、軽い足取りで、遙達が住む部屋へと案内した。そこは、大切な客用の客間。

大きなテレビに、豪華な調度品類。更には、屋敷に殴り込みがきても、遠くまで抜けれる地下通路まであると

二郎は二人に説明した。好奇心旺盛な光希は、早速地下通路に行きたいと言ったものの、非常用なので、

普段使われては困りますと二郎が苦笑しながら言うと、渋々とだ  
が了承した。

「お部屋の説明はこれぐらいですね。食事の時間は、朝は八時。昼は十二時。夜は七時半となっております。

お風呂の時間は特に制限はありません。好きな時間にお入りください。後は……あ、嫌でしょうが、

私は千島様の護衛を兼ねております。何処かお出かけするにも、ついていかなければなりません、よろしいですか？」

「あ、それはもう。こちらはお忙しいのにわざわざそんな事をしてもらって、こちらからもお願い致します」

「いえ。何処か行きたい場所があれば、何時でも行って下さい。何処へでもお連れ致しますので。

この辺りは結構昔の風情が多く残っている場所ですね。お祭りとかもやはりかなり大きな規模で開催されるのですよ。

来週には桜祭りも開催されますし、良かったらお申し付けください  
い

「よろしく願います。申し訳ないんですけど……早速一つ行きたい場所があるんですけど」

「はい。何処へでもお連れ致しますよ。ただ……夜までにはお戻り頂く必要がありますが」

「実は……ですね。兄の家がこの近くでして、久しぶりに会いに行きたいのですが……」

二郎の運転する車に乗る事、十分。遙が住所の説明をすると、意外にもかなり近所に兄の家はあった。

見たところ、普通の家よりややランクが高そうなその家。表札には「海野」の文字。

遙には二人の兄と姉が居た。名前は徹宵と良子。二人ともつくの昔に結婚しており、良子なんかは遙と同じく孫まで居る。

今回訪ねて来たのは、兄の徹宵の家。運動神経が良く、頭の良かった兄は蒼威と同じく労働が嫌いだった。

大きな会社を立ち上げたものの、あっさりと息子が成人したら社長 の座を譲ってしまい、

今は悠々自適に、「会長」という身分の下毎日遊び呆けていると聞いていた。

「では、私は車の中で待っていますので、ごゆっくりとどうぞ」

「え……二郎さんもどうぞ、上がってくださいな」

「いえ……久しぶりに家族水入らずでお楽しみください。私は車の

中で家の仕事をやっていますので、どうか御気になさらずに」

「本当にありがとうございます」

「二郎兄ちゃんまた後でねー」

「はい」

遙と光希はそう挨拶すると、家のチャイムを押して、返事を聞くとドアを開けて家の中へと入った。

玄関口に立っているのは、四十代後半のスラリとした体つきの男。外見は、俗に言うならチヨイ悪親父といった風貌。

「おお！ 我が妹と甥っ子ではないか！ 何でこんなトコにいるんだ？」

「兄さん……この前事情を書いた手紙を送ったじゃない……」

「うむ。きつと、桜が読んでそのまま俺に伝えなかつたんだろうな。だが、過ぎた事だ。」

立ち話もなんだから、上がっていけ。蒼威君や蒼二や遙緋は一緒じゃないみたいだな」

「あの人達は、仕事よ」

「なるほど。ささ、上げれ上げれ」

徹宵に促されるようにして、遙と光希は靴を脱いで家へと上がった。

よく分からない置物が 沢山置いてある廊下を抜けると、広いリ

ビングへと出た。

パツと見た感じでは普通のリビング。だが、違和感が一つあった。それは、ソファアールの上に座って本を読んでいる一人の人物。

「太陽君はまだ……子供できてなかったよね？」

「うむ」

「じゃあ……あの子は誰の子？」

遙はムスツとした顔で音楽を聴きながら分厚い本を読んでいる中学生程度の少女へと視線を向けた。

「お前が知らないんだ。知らない子に決まっているだろうに」

流石の遙も、この徹宵の発言には腰が砕けそうになった。

## 第21話：天才少女と鍋戦争（前書き）

お久しぶりです。

今回は多分三月二十三日ぐらいに投稿します。

今回含めて二話ほど、こんなまったりとしたお話となります。

今回は蒼威が久しぶりに主人公です。

Daysの方をしばらく更新してませんが、今必死こいて書いてます。

奏か紡。どちらかの話が次回投稿されるでしょう。

最近全然駄目ですが、

これからもこの作品をよろしくお願い致します。

## 第21話：天才少女と鍋戦争

遙がよろよると、近くにあったソファーに座り込むと、ヘッドフォンをつけていた少女が遙と光希に気づいた。

分厚い人でも殺せそうな何かの本をゆっくりとテーブルへと置き、ヘッドフォンを外すと、

「……徹宵さんの知り合いですか？」

少女は訝しげな目で遙と光希を見た後、徹宵の方を向いた。

「うむ。俺の妹の遙と甥の光希だ。遙、光希。こいつは、ミキ。太陽の会社と

親交が深いとある政治家を通じて、現在我が海野家に居候中というか、住み付いてる」

「太陽さんは快諾してくれたわ。何か、文句でもおありで？」

「うむ。強いて言うなら、スカートの裾ぐらい直したらどうだ？光希には刺激が強すぎる」

ミキは自分の格好に気がついたのか、慌ててスカートの裾を直した。

光希は光希で「おじさん、僕は見てないよー」と真っ赤な顔で抗議しているが、徹宵は気にもとめない。

何が何だか良く分からないが、遙はもう気にしない事にした。

蒼威と結婚して非常識には慣れたつもりだったが、よくよく考えれば自分の家も

結構変わっていたのだった。だから、昔のように深くは考えるの

はやめよう。そう思い、

「えっと。ミキちゃんだったけ？ 良かったら、光希と仲良くしてあげてね。」

私達はしばらくこっちの方に滞在している予定だから」

そう言つと、ミキは何か考え込むようにしてしばしの間黙ると、

「ええ、こちらこそよろしくお願いします」

そう挨拶をし、光希の方を向いた。光希は光希でもうニコニコ笑いながら、ミキを見ている。

「私はミキ。こう見えて、来年から中学生よ」

「僕は光希。来年から小学校五年生だよ。よろしくね」

ミキと光希は笑いあつと、何かを話し合った後に階段を上がつて二階へと行つてしまった。

とりあえず、仲良くなれたようで遙はほっと一息つく。すると、何時の間にか

キッチンへと行つていた徹宵がコーヒークップを二つ持って、遙の対面へと座つた。

そして、珍しく真剣な顔で遙を見据えると、

「お前も感づいてると思うが、あの子は普通の子じゃない。

太陽に電話で幾つか聞いたのだが、IQはバラつきはあるものの170程と見られている。

更にそれに加えて、運動神経も抜群といった本当の天才だ」

「ええ。こんな難しそうな本を読むなんて、普通じゃないもの」

遙は机の上においてあった分厚い本を見つめながら言った。

「それで、結構辛い目にあったりもしたらしい。というか、彼女の存在は戸籍と通っている

学校以外殆どわからないんだ。調べようとした所で、かなり上から圧力が来たよ。

ま、昔の俺だったら挑んだのだが、もう結構年だな。頭は働くの体がついてこない」

「そうね。でもこれで、桜ちゃんも少しは安心できるんじゃない？  
なんたって、

兄さんは小学生の時から桜ちゃんに迷惑をかけてきたんだもの、  
これからは桜ちゃんに尽くしてあげればいいと思うわ」

「そう！　ってわけで、俺と桜は四日後から二人で世界一周旅行に行ってくる！」

「……は？」

一瞬、何をいつているのか理解できなかった。だが、徹宵はそれに気づいた風も無く

どンドンテンションを上げながら、話を続けていく。

「いやあ、流石我が妹。兄のピンチの時にわざわざこうして此方に滞在してくれるとは。

我ながら素晴らしい妹を持ったと思うよ。うん。だから、ミキをしばらく預かってくれ」

「ちょ！ ちよつと！ そんな事いきなり言われても困るよ。私らだつて蒼二の同僚の家の方のご好意で泊めていただいでるんだから！」

「……護衛だろ？ 外の車に乗っている彼は、どうみても堅気じゃない。

というよりも、彼は有名だ。「鬼塚の二郎」と言ったらこの辺りのヤクザや住人の伝説だぜ。

そんなわけで、これからちよつと頼んでくるわ」

「え……ちよつと、兄さん！」

徹宵はどすどすと廊下を歩いて玄関から出て行ってしまった。あなつた海野徹宵を止める術は無い。

良子か桜がこの場に居てくれれば別なのだが、良子は海外。桜は出かけているようである。

仕方が無いので遥がため息をついてコーヒを飲んでみると、玄関のドアが開き、

困った顔の二郎が徹宵に引っ張られるようにして、リビングへと入ってきた。

「二郎さん。ウチの馬鹿兄が申し訳ありません」

「いえ、流石に少し驚きましたが、状況が状況らしいので仕方ないですね。

ウチとしては特に断る理由もございません。光希様の遊び相手も出来るのでむしろ

歓迎したいぐらいです。ただ、ウチはヤクザです。彼女の身元保証人にその辺りの事を

話しておいて貰えませんか、後々にめんどくさい事になります。

そこだけは、お願いできるでしょうか？」

「うむ。今日中に連絡をつけておく！俺達の世界一周旅行の為に！」

徹宵がそう息巻いて拳を突き上げると、リビングの入り口の方から

「違うでしょうが！」

と怒鳴り声が響き、蓮根が徹宵の頭に振り下ろされた。鈍い音が響き渡り、

徹宵の目が白目を向いたかと思うと、大きな音を立ててその場に崩れ落ちた。

「全く、暴力的な嫁だ」

頭がまだ痛むのか、顔を顰めながら徹宵はビールを一杯あおった。あの後、徹宵が気絶してしまった為に話は進まなくなってしまった。

そして、桜は二郎と光希と遥を夕食に招待して現在は六人で地鶏鍋をつついている。

「徹宵さんの非常識さ加減の所為でしょうに」

ミキがそう言いながら、鶏肉を箸でつまむと徹宵はお玉を取って野菜を大量にミキの皿に入れた。

「うっ………！」

「好き嫌いはいかんぞ、ミキ」

「なんて大人気ない………」

いがみ合うようにして視線をぶつけあう徹宵とミキ。本当に他人なのかと思ってしまう程だ。

ミキもミキで謎が多い子だ。徹宵が海外に行くという話をする、大した反応を見せる事なく

二郎の屋敷に行く事を快諾した。二郎が懇切丁寧にヤクザだという事も説明したが、

ミキは顔色すら変える事無く普通に頷いていた。そして、携帯を取り出し何処かへ電話する

と「話は纏まった。よろしくです」と二郎に頭を下げた。本当に変わった子だと思う。

「二郎さんって、確かご近所の鬼塚組の方でしたよね？」

「はい。ご迷惑をおかけしております」

徹宵の妻にして遙の幼馴染でもあった桜がそう聞くと、二郎は申し訳なさそうに頭を下げた。

「鬼塚組は昔から此処にあるらしいからねえ。でも、馬鹿な成金ヤクザじゃなくて。」

昔気質の組つて聞いてましたけど、こんな礼儀正しい子が若頭なら納得できるわね」

「でもヤクザはヤクザです。暴力と恫喝でしか私達は何かを成す事しか出来ません。」

それでも、私達に出来るのは仁義を通し、道理を重んじるぐらいです。」

今でこそ、そのような組は少なくなつてしまいましたが、私達はそれだけは貫いていこうという方針でやっています」

「いやいや。ウチの馬鹿旦那にも少しは見習わせたぐらいですわ」

二郎は本当に良い子だった。遙の目からみても、それぐらいはわかる。

頑なにサングラスを外そうとしないのも、何か言い難い事情があるのだろうとは思つた。

そんな事を考えていると、こつそりと自分のお椀に箸が伸びている事に気づいた。

「光希。ニンジンはちゃんと自分で食べなさい」

「えー……」

「ニンジン食えんと女にモテンぞ」

徹宵がそう茶々をいれると、光希は何故か意外そうな顔をして、

「え、でも僕結構モテるよ」

「む……どういう事だ？」

「神璽にーちゃんに教えられた通りにしたら、麻衣ちゃんと美奈ちゃんとチューできた。」

「それでねー。この前は、七組の姫子ちゃんにラブレター貰ったんだー」

「なっ………！」

これには遙も絶句してしまった。光希と蒼二達の一番違う所は、この純粹さだ。

何かしてもらえるならそれを快く受け入れ、興味のある事の前には一般道徳は消え去る。

普段悪い事をしない良い子だから油断しがちなのだが、ある意味では蒼二よりも危ない。

苛めや悪口は蒼威が徹底させた為に、全くといっていいほどしてはいないが。

まさか自分の知らない所でそんな事をしていたとは思い、将来が少し怖くなった。

「み、光希にはまだそうというのは早いわよ。もうしちゃ駄目よ？」

「んっ………わかった。この前、お姉ちゃんにも怒られたしね」

光希はそう言うとニンジンが無理やり飲み込み、ニッコリと笑った。

遙がそれに笑顔で返すと、ミキが何やらぼおとした顔で遙と光希をジッと見ていた。

「ミキちゃん。どーしたの？」

「はっ？ …… ああ、うん。何か眠くなっただけ」

ぼんやりと、だが何処か寂しげな顔でミキはそう呟いた。

「鍋は戦争だぞ！ そんなたるんだ精神でどうする！ 肉と肉の奪い合い。」

これぞ鍋醍醐味。一度取られた肉はどんなに口惜しかろうが勝者の物。

この地鶏の最高の部分をな。俺はさっきからこつこつ集め

「ふん。なら、私はその戦争にもう勝利していると言ってもいいでしょうね」

ミキが箸で自分の取り皿を示すと、何時の間にかかなりの量の鶏肉がそこにあった。

そして、対照的に徹宵の取り皿からは鶏肉の姿が消えている。

徹宵の顔が絶望に染まったと同時にミキはにんまりと笑うと、一気に鶏肉を口へ運んだ。

「うあああああああああ！ お、俺の地鶏がアアアアッ！」

「勝利の味は何よりも美味だわあ」

再び暴れだした徹宵だが、再び桜が背後から蓮根でぶん殴り、本日二回目の気絶となった。

「じゃあ、桜ちゃん。ミキちゃん。またね」

鍋も終わりそろそろ帰宅時間となった為に遥と光希と二郎は玄関口でそう挨拶をした。

徹宵は気がついたらあのままいびきをかいており、どうやら寝てしまったようだった。

「突然ごめんねえ。まさか、あの馬鹿が世界一周旅行を準備してるなんて知らなかったから。」

「ミキも困ったでしょう。何とか話がついてよかったけど。二郎さん。よろしく願います」

「私居候だもん。そのぐらいの覚悟はしてたよ。桜さんが気にする事ないわ」

「はい。鬼塚組総力を上げて、大事にお預かりさせていただきます。……それと、ミキちゃん。もう明日からウチで生活するって事でいいんだよね？」

「ええ。構いません。こちらこそよろしく願います」

二郎とミキはお互い頭を下げあう。光希は光希でもう眠そうであ

り、とろんとした顔でただ行く末を見守っている。

「海外に行くんだから、良子姉ちゃんとも多分会えると思うんだけど。」

何か伝えておく事ある？ 遙も蒼威君も、もう五年以上会ってないんでしょ？」

「うーん……お元気ですか？ ぐらいかなあ。たまーに、国際電話がかかってくるし。」

一応、毎年何気に年賀状くるからねえ。特に伝える事はないかなあ」

「わかった。じゃあ、帰り道気をつけてね」

「うん。そつちも気をつけて。あの馬鹿兄がいるから平気だとは思うけど」

そう言つと、遙は桜達に背を向けて玄関から出た。

「光希、また明日ね」

「うん。また明日ー」

後ろでは眠そつな声で光希とミキがそつ挨拶していた。そして、再び二人は二郎の車に乗り込み、鬼塚家への帰路につく。

光希は車に乗って数分で寝てしまった。この子なりに気を使って疲れたんじゃないか。

と思ひ、優しく頭を撫でてやる。思いがけない事態が幾つか起きたが、何とか収集の目処がついた。そんな事を思っていると、

「本日は私までご馳走になってしまい、すみませんでした」

二郎が運転しながら申し訳なさそうな顔でそう言った。

「いえいえ。やっぱりご飯は皆で食べた方が美味しいですし」

「そう言って頂けると有難いです。鬼塚組の皆で食べる食事美味しいのですが、

たまにこうやって人様の家族の団欒の場にお邪魔させて頂くのも大変良い経験でしたよ」

「二郎さんだって家族が居るじゃないですか」

「……私は、記憶を失って街を放浪してたチンピラでした。自分が誰かも分からず。

ただあったのは……生まれつきなんでしょうかね。暴力だけは人並みはずれてたんです。

そんな人間のクズだった私を、親父殿は本当に息子のように扱い、養子にまでしてくれて……」

「ああ……変な事言っただけで申し訳ないです」

「いえ、お気になさらずに」

「記憶喪失かぁ……何か、凄く悲しいですね。大切だった事、今までの自分。

その全てが思い出せないなんて……」

「……気がついたら海に居たんです。服はボロボロでお金も一円だっただけで持ってなかつた。」

きつと何処かの不埒な事をしでかしたのでしょうか。心の中は悲しみに満ちていました。

大切な何かを失った、そんな喪失感があったのを覚えています。それが寂しくて、悲しくて、何かに八つ当たりするように私は暴力を振るって生きました。

何人もの人間を傷つけ、何時しか愚連隊を結成し、それで 親父殿に出会ったんです」

「そうなんですか……」

「だから、今は楽しいです。組の皆も私に礼儀作法や仁義、人として当たり前の事を教えてくれました。

そして、私はようやく過去から逃れ、こうやって光希様や奥様と楽しい時間を過ごさせていただいています。

今日は、本当に楽しかったです。明日以降も改めて、よろしくお願ひします」

「ええ、こちらこそ」

遙がそう言いながら笑うと、二郎もようやく口元を緩めた。

第22話・千島蒼威の華麗な一日（前書き）

次回は近いうちに投稿できると思います。次からは九我山姉弟編に入るかと

## 第22話：千島蒼威の華麗な一日

ここ数日、千島蒼威は心配で堪らない事があった。

それは、七海傘下の岡山のヤクザへと預けられている光希と遥の事であった。

遥が悪い男達に変な事をされていないか。光希がヤクザに脅えて泣きじゃくっていないか。

悪い想像ばかりが頭をよぎる。思えば、自分も遥に七年程同じような事をしていた。

今更ながらに正宗とつるんで仕事なんかするんじゃないかと後悔する。

「やっぱり、心配だ」

蒼威は携帯電話を開き、光希と蒼華と煉次と莉那と灼汰の写真が表示されている待受けを見つめた。

蒼威が今居る場所はユニオンの本部。浅葱襲撃に続き二階堂壊滅という事件が起きた為に

一度全員が本部へと集合する手はずになっており、続々と色々な場所から隊員達が集まってきている。

蒼威自身、少し前まで何時もの面子と浅葱家に居たのだが、事態が事態の為にここまで来たというわけであった。

そして、蒼威は電話帳から遥の電話を呼び出してみる。が、繋がらない。電波が届かないそうなの。

嫌な予感がした。今度は光希に護身用に持たせてある携帯へと電話すると、こっちは通じた。

「もしもし」

「おお、光希か！ お父さんだ！」

「そんなの表示見ればわかるよ！。で、何か用？」

「……何か対応が豪くドライだな。どうだ？ そっちは上手くやれてっか？」

「うん。お友達も出来たし、皆良い人だし。毎日楽しいよー」

光希の言葉に蒼威はほつと一息ついた。どうやら、予想していた事態にはなっていないらしい。

「お母さんは何してる？」

「んー？ お母さんはねー。二郎兄ちゃんと買い物行ったよ。そういえば、随分と遅いなー。午前中に買い物に行った筈なんだけどね」

「……………」

「お父さん？ お父さん？ どうしたのー？」

「じ、ジロウって誰かな？ お父さんの知らない人みたいだけど…」

「んー、カッコいいお兄ちゃんだよ。僕らに凄く良くしてくれてさー」。

昨日もね。お母さんとミキちゃんと一緒に遊びに連れて行ってもらったんだよ」

「……う、うわあああああああああああッ！」  
「えー？」

蒼威は奇声を上げてつい通話を切ってしまった。ジロウ。誰だそれは。

イケメンの若い男だろうと予測。そういえば遙は昔結構なメンクイだったと思い、膝がガクガクと震えた。

呼吸が落ち着かない。というよりも、もはや頭の中には仮想ジロウが構成されており、四回ほどなぶり殺しにした所だった。

これは一家の危機だ。勝手にそう判断した蒼威は、椅子にかけてあつた上着を着ると、

「ジロウめ……へへへ。殺してやるぜえ」

ニヤニヤと笑い、壁を殴りながらユニオンの本部を歩いていく。完全に我を失っていた。

だが、そう上手くは行かないようで、

「蒼威さん。何処へ行くんですか？」

そう後ろから声がかかった。振り向くと、そこには書類の束を抱えた時雨の姿。

「ヒへへへ……ちよっくら、岡山に行ってくるわ」

「冗談は存在だけにしてください。さ、これから僕と律と蒼威さんで戦略会議ですよ。」

それが終わったら、確か隊員の人達から演習だって頼まれていたでしょうに。

ああ、それと莉王との約束もどうするんです？　莉那ちゃんと灼汰君のビデオ上映会もやるんでしょ？」

「あ……」

そういえばそうだったと思い直す。仕事はどうでもいいが、莉那と灼汰のビデオ上映会だけは外せない。

自分が行けなかった二人の入学式と七五三のビデオを莉王に命令して持って来させたのだった。

蒼華と煉次の方は家が近い為に行けたのだが、いかんせん四条家は自宅からでは遠い。

蒼威の顔に冷や汗が伝う。時雨はめんどくさそうに蒼威の裾を引っ張って行く。

(うむう……)

頭を必死にフル回転させると、竜胆を使うという手段を思いついた。

彼女のGateならほんの数分で岡山まで行けるだろう。それでジロウを殺るのに五分とし、遙といちゃつくのを十五分

とすると三十分程度で全ての用事が片付く。時雨もそれぐらいは待ってくれるだろう。

そう考え、脱出を図ろうとしていると、

「蒼威く〜ん」

廊下の隅からヘラヘラ笑いながら、陸人が現れた。しめた。この馬鹿を生贄にしてこの場を切り抜けよう、そう決めた。

だが陸人はいつもとは違い、妙に凄みを利かせて顔を真正面まで近づけると、

「この後の演習あんだろ？ 実はよお、詩歌が熱を出して俺が看病しなきゃいけないかった。

結構色んなヤツ呼んじまったから、お前一人で何とかさばいてくれや。何だったら時雨連れてつてもいいし。弱いけど」

「余計なお世話ですよ！ 最近風邪が流行ってるみたいですからね。お大事にとお伝えください」

「ちょ！ 待て！ お、俺だって実は用事が……！」

「おう！ ってーわけで！ 詩歌とラヴラブた〜いむ〜！」

蒼威を完全に黙殺し、陸人はそのままスキップしながら廊下の奥へと消えていった。マズイ。これで、完全に抜けられなくなった。流石にそこまで集めてしまつて

ポイコットするのも寝覚めが悪い。何より、尊敬してくれる人間を裏切る事になるのだ。

三十分。残された猶予はそれだけ。蒼威は時雨の手を振りほどくと、

「時雨、三十分だけ時間をくれ！」

「駄目です。そんな事言つて逃げる気なんでしょう」

殆ど間をおかず、時雨は即答した。昔から面倒を見てきたが、ここでここまで信頼されてないんだろ。

少し悲しくなってきた蒼威だが、今まで時雨にしてきた事を考えると、無理もないなあと思つてしまつ自分も居る。

「マジだつて。竜胆さえいりゃ、ホントすぐ終わるからよお！」

「 竜胆なら、郁人と一緒にどっかのお偉いさんの護衛に行つて  
るぞ」

近くにあつた自販機の方からそんな声が聞こえた。そこに居たのは案の定というか神崎森羅。

徹夜明けなのか、妙に眠そうな顔でコーヒー片手に微笑んでいる。

「ま、マジかよ……」

「マジだ。お前ら何やってんの？」

「これから戦略会議です。良かつたら森羅さんも参加してくれませんか？

できれば未来さんもお呼びしたいんですよ。やはり元一課の人間の意見は参考になりますしね。

未来さんと森羅さんさえいれば、ぶつちやけ蒼威さんなんて要りませんし」

「こ、コラア！」

睨みあつ蒼威と時雨。時雨は当然の事を言つたとばかりに澄ました顔で森羅の返答を待つ。

だが、森羅は申し訳なさそうに手を合わせると、

「悪いな。今日はこれでオフなんだ。これから嫁と娘と俺の三人で  
飯食いに行くんだよ」

「ああ。なら仕方ないですね。では、失礼します」

「おう。じゃあな」

呆然とした顔で浮き足立っていることが丸見えな森羅を蒼威は見送った。

そして再び時雨に引きずられるようにして、ユニオン本部の廊下を進んでいく二人。

「いやあ、皆さんお嫁さんと幸せそうでいいですねえ」

「俺だつて家庭を守ろうとしてんだよ！」

「はいはい。後で晩御飯奢りますから我侘いわないわない」

駄々をこねる子供をあやすように時雨はそう言つと、歩く速度を上げた。

いよいよマズイ。こうなつたら実力行使しないと決意すると、

「時雨〜！」

「あ、律か。丁度いい。この駄々をこねる子供を運ぶの手伝つて欲しいんだ」

律が野太い体を持つ悪鬼を連れて廊下を歩いてきた。何時も律が連れてくる四鬼である。

「ふむ。蒼威さん。いい加減大人にならないといかんぞ。お前達、運んでやれ」

「お、おい〜！」

四対の悪鬼に体をガツチリと固められ、蒼威は無言を言わず歩かされた。

しかも年下にまで説教をされて。もはや涙が出そうになってくる。そして

「はぐるかちゃあああああんツ！」

蒼威の声がユニオン本部に空しく響き渡った。

「光希、誰から電話だったの？」

鬼塚家の大広間。大型テレビに繋いだゲームをやりながら、ミキは光希に問う。

二人がやっているのは組員の一人が持っていたシューティングゲーム。

光希はもう四回ほど撃墜されているが、ミキはまだ一回も撃墜されていないという状態。

「お父さんだよ。元気かー？ だって」

「ふうん……光希のお父さんってどんな人なの？」

敵のボスの弾幕を器用に避けていくミキ。死にやすい光希にシールドアイテムを全て

与えながら淡々と二人は会話を続けていく。

「うーん……朝は誰よりも遅くて、起きたらパソコンでゲームやって。」

それに飽きたら外に出てパチンコ屋とか本屋とか図書館に居る様な人かなー」

「だ、大丈夫なのそのお父さん。お仕事とかは？」

「よくわかんない。たまーに一週間ぐらいお仕事に行くけどねえ。」

親戚の八神さんって人の家で何か色々とお仕事したり、色々な県に行ったりしてるよ」

「変わったお父さんねえ。じゃあ、三人家族なんだ」

「んー、何時もは三人だね。お兄ちゃんとお姉ちゃんは結婚して家を出ちゃってるし」

「あ、お兄ちゃんとお姉ちゃんが居るんだ」

「うん。そういえば、ミキちゃんには兄妹とか居るの？」

ミキがボスの弾に当たって初めて撃墜された。だが、表情は全く変わっていない。

すぐにリトライボタンを押し、再出撃するとミキはしばらく黙った後に、

「居ないよ」

と寂しげに呟いた。何かマズイ事を聞いてしまったのだろうか。光希は不安になる。

そのまま二人が黙ってボスを倒し、次のステージに進むと広間のドアが開いて遙が帰ってきた。

「あ、お母さんお帰りー」

「遙さん。お帰りなさい」

「ただいま。ミキちゃんと仲良く遊んでた？」

「うん」

光希はそう快活に笑って返事をすると、遙の持っている紙袋を見た。

遙はその視線に気づくと思いついたように袋の中から何枚かの帽子やマフラーを取り出した。

いくら岡山とはいえ季節はまだ三月。肌寒い日もあるので念の為に買ってきたのだった。

だが、光希の趣味には合わなかったようで、

「ほら、光希。ちょっと被ってみなさい」

「えー……僕、その柄嫌だなあ。何か女の子みたいじゃん」

「いいからいいから。これ、結構高かったのよ」

「……嫌だ」

「そんな事言わないで。ね？」

確かに少し女の子みたいなお柄ではあったが、そこまで嫌がる程ではないとミキも思った。

だが、光希は頑なに拒否をし、遙とついには口論へと発展しそうな勢いになる。

遙も遙で蒼二と遙緋もこんな時期があったなあと思いつつ、光希を説得するのだが、

「しつこいー。お母さん。邪魔だからあっち行ってよ！ もうどっかいつちやえ！」

いい加減イライラしてきたのか、光希はぐずるようにそう行った。まだまだ子供だなあ……と何とか光希を宥めようと考えるが、その前にミキの平手打ちが光希に炸裂した。

強く頬を叩かれ、光希は涙目でミキを見上げた。ミキはしゃがみこんで光希の肩を掴むと、

「遙さんに謝りなさい」

「……」

「遙さんがどっかいつちやっついていいの？ 本当に突然明日いなくなっちゃってもいいの？」

「……やだ」

「そうですね。なら、遙さんに酷い事言っただから謝りなさい」

流石の遙もミキの突然な変化についていけなかった。凄く真面目な顔で光希を正面から見ている。

光希はさすがのこと遙の方を向くと、帽子を遙の手からゆっくりと受け取り、

「お母さん。ごめんなさい」

と謝った。それを聞くと、遙は笑顔で光希の頭を撫でた。恥ずかしそうに顔を赤らめる光希。

ミキもさっきまでの真剣な表情は何処へ行ったのか何時もの笑みが戻っている。

そして、光希から帽子を受け取って被せてやると、部屋の隅にあった鏡の前へと連れて行き、

「ほら、似合ってます」

「本当？」

「本当だつてば。結構カッコいいじゃない」

「……へへっ」

ミキに褒められて有頂天になった光希は嬉しそうに飛び跳ねた。

律と時雨の殺意が沸くイチャイチャしながらの戦略会議は一応の終わりを見せた。

二人とも話している事は真面目で合理的なのだが、時折視線が合ったりすると

お互い照れくさそうに笑ったり、机の下でこっそりと手を握りあったりしたり、

兎に角「こいつら、俺に喧嘩売ってんじゃねえか？」と疑問が沸いてしまうような会議だった。

更にその後は、ユニオンの部隊員から頼まれていた演習を行った。演習と行ってもそんなに本格的なモノではない。式神の訓練の延長上のようなものだと思っていたが

蒼威が指定された巨大な訓練施設に行くと、そこには数十人の屈強な男達と何人かの女性陣。

「な、何で僕までこんな事を……」

途中で拾ってきた律の弟、令の襟首を掴み蒼威はその二つのグループにげんなりとしていた。

本当は時雨を連れてくるつもりだったが、律が頑なに時雨をいじめないでと拒否するので

じゃあ、代わりに連れて来いと言って見たら数分後に涙目で弟が連れてこられたというわけであった。

精神力をかなり消耗したが、まだまだいける。この演習をさっさと終わらせて岡山に行かなければと決意し、

「じゃあ、令。お前は男性陣を任せる。俺が女性陣を引き受けるか

ら

「え……ええっ!?!? そんなぁ!」

「なんだ? お前、そんなに女の子としたいのか? 後でお姉ちゃんに報告せねばなぁ」

「……わ、わかりました」

令は肩を落として男性陣の方へと歩いていく。ドンマイ。と心の中でエールを送りつつ

蒼威は女性陣の下までゆっくりと歩いていった。彼女達は明らかに緊張しているようだった。

自分自身そんな自覚は無いのだが、やはり自分がかなり他の家には有名ならしい。

こんなガチガチでは演習の意味が無いので、蒼威はため息をつく

と、  
「緊張してんのか?」

全員が無言で頷く。

「じゃあ、こうしよう。お前らは今から全員で俺を殺すつもりで式神を打ち込んで来い。」

俺に一発でもくらわせられたら、お前らの気がすむまで訓練に付き合ってやるわ。

重要なのは連携だぜ、空気を読み、アイコンタクトでの意思疎通。まさか、単体で俺に勝てると思っただろ?」

そう言うと、何故か女性陣のやる気が上がったようだった。周り

と会話し、次々と武神を顕現させていく。

蒼威はそれを見て内心冷や汗をかいた。どれもこれもが、中々強そうなのである。

気配だつて中々の風格をだしていた。ひよっ子連中だと思つていたが、大きな誤算だつた。

「ひ、一つ聞いて良いか？ お前達、もしかして誰かの直轄の部隊出身か？」

すると女性陣の何人かが手を上げ、

「私達は九我山さん直轄ですね」

「私達は運命さんの隊ですよー」

「私達は棗さんの隠密です」

……最悪だつた。ユニオンの中でも屈強と言われるエリート集団の演習に当たつてしまったようだ。

令はどうなつた？ と少し離れた場所で活動始めていた令の方を見ると、

全員がヒヨっ子の隊員だらしく、令は相手によつて様々に武器を変化させて指導していた。

まだ若いが、流石は九我山の跡継ぎと言つべきか。剣術。槍術。棒術。格闘技。あらゆる武術を体得しているのがよくわかる。

あいつら見かけ倒しだつたのか。心の中でそうつつこむも状況は変わらない。そして、隊員の一人が、

「そろそろ行きます！」

と言った瞬間、全員が凄まじい勢いで襲いかかってきた。

地獄のような訓練が終わった。最後はもう意地で大我と緋眼終式までフルに使い、

ようやく彼女達をへとへとなるまで消耗させ、何とか訓練を切り上げてきた。

若いだけあって吸収や飲み込みがとても早い。将来が本当に恐ろしいと思いつながら、蒼威は膝を震わせながらシャワーを浴びた。

まずは体力を回復させなければならぬ。体を引きずってユニオンの食堂まで辿り着くと、

「Aセット特盛り。それと生ジョッキで」

と注文し、席へとついた。そのまま食べるように食事を進めているとようやく体力が戻ってきた。

よし これで、これかと思いついてこれから新幹線の切符を買って岡山へと行こう。と立ち上がるうとするど、

「おじーちゃあぁんツツ！」

食堂の入り口からショートカットの女の子が大声を上げて走ってきた。

その少女に手を引かれる　というよりもはや引きずられている感じで、もう一人髪の毛の長い女の子も居た。

ショートの少女は余りにも遅い、もう一人の少女の手を離すと、蒼威にタツクルるようにして飛びついた。

「ぐふうっ」

満腹でしかも疲労が溜まっている蒼威は、その勢いに負けて椅子へと叩きつけるように座らされた。

ショートカットの少女の名は千島蒼華。蒼二の娘である。もう一人の子が四条莉那。こちらは遥緋の娘であった。

蒼華と遅れてきた莉那は久しぶりに会った蒼威に抱きつくと、

「おじーちゃん、遊ぼうー。アタシね、しゃいにんぐういざーど覚えたんだよー」

「えー……おままごとやろうよお。蒼華ちゃんと遊ぶと絶対痛いんだもん」

膝の上に跨り、蒼威の服を引っ張りながらせがむ蒼華。立ったまま蒼威の裾を引く莉那。

二人の頭を優しく撫でて宥めながら、入り口の方を見ると煉次と灼汰と手を繋いだ命の姿も見えた。

これで、子供が五人。予想したとおり、蒼威は四人の孫が寝るまで散々遊びにつき合わされ、

その後。酒を飲みながら命の蒼二に対する愚痴を聞かされ、寝る

前になってようやく遙から折り返しの電話が届き、

少しの喧嘩をした後にようやく誤解が解けて、安心しながらようやく眠りにつけたという。

## 第23話：好敵手（前書き）

次回は何時になるんでしょうか……  
いや、PASTは書けてるんですよ。  
32話ぐらいまでですね。

Daysの方がスランプ状態です。  
話の都合上、幾つかいれておきたいので。  
また暫くまったりペースでお付き合い頂けると幸いです。

現在執筆中Days

六道紡（90%完成）  
七海奏（30%完成）  
三枝万里（30%完成）  
棗由加（60%完成）  
二階堂雨籠（10%完成）  
ファーストコンタクト2（80%完成）

という感じになっております。

## 第23話：好敵手

先日、蒼威と共に演習に参加できた事は令にとって、大きな一歩だった。

自分達十名家の長、十文字戒と同じように最強の式神使いと呼ばれる千島蒼威。

初めて彼の式神・大我を見たのだが凄まじい式神だった。

自分の式神と良く似ているからわかる。変形の精密さ。硬度、動きの正確さ。反応の速さ。

当然の事ながら全てにおいて上を行かれた。しかも、相手はかなり鍛えられた式神使い達。

自分では紫と合体し、尚且つ太郎のサポートが無ければあの人数は捌けない。

(やっぱり、凄いなあ……)

そんな事を思いながら、令はユニオン本部の近くにある団地の一室でため息をつく。

団地と行っても中々広い。太郎、碧、紫、令の四人で間借りしているのだが、全く不自由が無かった。

そして、備え付けのベッドから起き上がると突然部屋のドアが開き、

「……令君。律お姉さんが呼んでる」

この前までのポロポロだった私服とは違い、新しく令が買ってあげた服を着た碧が部屋へと入ってきた。

碧とはなし崩し的に同棲してしまっているが、本人は紫と一緒に居たいらしく

それなら令の新しいパートナーとして九我山で雇う事にした。  
碧の要求は三食おやつ付と一ヶ月に二万のお小遣い。これなら、  
全く苦ではなかった。

「わかった。じゃあ行こうか」

令が立ち上がると、碧が令の手を掴む。何故だか、令はこの風神の鬼神に懐かれていた。

紫曰く「アンタの無駄に長い前髪とヘラヘラした顔つきがヤツの初恋の人と似てるんよ」とのこと。

担当の美容師さんに感謝するばかりだ。令よりもかなり年上なのだが、その外見と性格から妹が出来たように感じた。

律は勿論として紫も姉御肌だし、太郎は小さい頃から自分の兄代わりだった。だからこそ、新鮮で嬉しい。

部屋から出てリビングを見渡すと、紫と太郎の姿は無い。先に行ったのだろうと判断すると

令は部屋に鍵をかけて、三階上にある姉と義兄の仕事用の仮住まいへと足を運んだ。すると

「失礼」

部屋から何人かの改造されたユニオンの制服を着た何人かの間人が出てきた。

全員、髪の色も変わった色である。やっぱり変な人が多いんだなあ、と思いつながら部屋の中へ入ると、

「よお」

そこにはガラの悪い男が居た。だが、何処かで見えた事がある顔。

部屋にはいつも通り、律、紫、時雨。そして　とまで思い令は

気づいた。

ダークスーツをラフに着こなしていたのは、太郎だった。だがおかしい。

角は出ていないし、悪鬼特有の紋様も見えない。そこには、普通の人間のような太郎の姿。

「……太郎くん？」

令がそう問うと、代わりに部屋の隅に座っていた律が答えた。

「そうだ。由加に反意思の構成を説明させ、外見を人間に近くした後に、少しばかりの特殊メイクを施した。

どうだ？ どう見ても堅気の人間には見えないだろう」

「……ある意味酷くね？」

「カッコいいよ太郎くん。これで、何時でも好きな時に外に出れるようになったね」

「まあな。棗のねーちゃんは凄えな。俺みたいな悪鬼に反意思の構成の仕方を教えるとはよ。

やっぱり人間の言語を勉強してよかったぜ。これはこれで楽しい。残りの四鬼のバカタレ共も覚えれば良いのによお。何であいつら覚えられないかね？」

「それは、お前が四鬼の中でも高い知能を持っていたからだね。最初は、お前だって

あいつらと何にも変わらなかった。でも、頑張っって私が言語を教えていくうちに

お前は段々姿を変え、今此処にこうやって居る。素晴らしいな。

お前は最高の悪鬼だ」

確かにそうだった。太郎は昔とかなり姿が違っている。古代人だつてそうだ。

「言葉」というものを覚えてからこうやって爆発的な進化を遂げている。

太郎のは悪鬼が言語を知る事によつて、進化したのではないかと思う。それは、とても素晴らしい事だと令は感じた。

だが、何故今日はこんな事をしているのだろう？ 令が疑問を持つと奥の椅子に座っていた紫が声をあげた。

「んで、律ねーさん。何でこないな事しとるんですか？」

「ああ、それだがね」

律は机の上に置いてあつた三枚の封筒を手を取った。

それを見た瞬間、令の疑問が全て解決した。紫は意味がわからなさそうに首を捻っている。

「明後日、我々の母校で今年もパーティが行われる。それに参加するぞ」

「あー、アレか。そういえば去年出とらんかったね」

「紫ちゃんが単位落としかけた所為でね……僕に三つもレポートを代筆させたし」

その封筒の中身は、律と令と紫が通っていた高校のパーティーの招待状だった。

毎年、卒業生全てに送られるこの招待状はもう言うならば、社交

界そのもの。

有名高校だった為に各界の著名人が訪れる事で有名である。

律が高校生の頃には女子高だったものの、令が入学できる年になった頃には共学になって

いたため、紫と一緒に三年間その高校に寮生として通っていたのだった。

そして、招待客一名につきもう一人外部の客をを招待しても良いという事になっていた。

「律……まさか、また僕にも行けとか言わないよね？」

「何を言っている。私の旦那様だ。死んでも出席してくれ。私に恥をかかせたいのかい？」

「うっ……また胃が痛くなりそうだ」

新婚当初に参加したのだが、大変重いパーティーだった。いや、

他の誰かとなら楽しかっただろう。

だが律の旦那として行った為に、当時の律のファンだった生徒から凄まじいプレッシャーをかけられた。

久しぶりに女性が怖いと思うぐらい陰湿で執拗な嫌がらせをくらい憔悴したのを覚えている。

それ以来この時期にはわざと仕事を入れて回避してきたのではあるが、また行くとなると気が重くて仕方が無い。

そんな時雨の状態をいつか知らずか、律は綺麗な笑顔を作ると

「では、各人準備をしておくように」

そう言い放った。

それから明日後。親が買ってくれたスーツに身を包み、髪を後ろに撫で付けて令は待ち合わせ場所に向かう。

何時の間にか皆居ないと思っていたらもう全員車の前で自分を待っている。

時雨は律が用意した何時もとは少し違うスーツに身を包み、太郎はこの前の衣装をそのまま着ている。

律は珍しいことに黒のドレスを着ていた。そして、碧は律が用意していたのだろう。真新しい緑色のドレスに身を包んでいる。

「わあ。碧ちゃん良く似合ってるよ」

本日、令は碧をパートナーとして連れて行く手筈になっている。すなわちエスコートだ。あんまり慣れては居ないが、律に散々口やかましく教えられた為に

少しではあるが作法ぐらいは心得ている。碧は恥ずかしそうに俯いて顔を赤くしていた。

緊張しているんだろうか。そんな思いから令が碧の手をとろうとすると、

「アンタ、あたしに喧嘩売ってるん？」

後ろから頬を抓られ、涙目で令が後ろを向くとそこには同じくドレスを着た紫の姿。

何時もは女性用スーツを着てネクタイを締めて参加するのに、今日は何故かドレス姿だ。

その所為で気がつかなかったのである。顔を見ると、珍しく時間をかけて化粧をしたようだった。

「う、ごめんごめん。誰だかわからなかったよ」

「……まあ、ええわ。アンタに期待したあたしがアホやった。ほれ、太郎。エスコートしい」

「へいへい」

めんどくさそうに太郎が紫の手をとり、車の中へと促した。

令もそれに習って同じように碧を車の中に促すと、最後に自分が座ってドアを閉めた。

助手席には珍しく律が座っている。流石にドレスを着て運転する気にはならないのだろう。

そして、時雨が運転する車は令達の母校である聖心学園へと向かった。

それから三時間後。令達は無事に辿り着き、高級車が立ち並ぶ聖心学園に辿り着いた。

卒業して何年か経つが相変わらず豪華な建物だった。正直、自分の今通っている大学よりも大きいし綺麗だ。

そして、碧の手をとって受け付けを済ませると学年が違う為に一

旦律と時雨と別行動を取るようになった。

巨大なホールには様々な年齢層の人間が居る。この場に居る人間の半分が卒業生だと思つとやはり歴史のある学校なんだと思つ。

何人か昔のクラスメイトとすれ違つたが、何故か全員妙にぎこちない挨拶で去つていく。

何かしたかな？ と思つても、大して仲良くなかつた事を思い出し令と碧は共通の友人を探した。

そして、ホールの奥の方を見ていると、

「令！」

と呼ばれ振り向く。そこには高校から同じ大学にまで通っている染谷の姿があつた。

「おー、この前は悪かつたね」

と挨拶し、手を打ちつけた。そして染谷は令の傍らに居る碧の姿を見ると、

「……お前、ロリコンだったのか」

「違うよ。彼女は僕よりも年上だよ。ね、碧ちゃん」

令がそう言つと、碧は頭を下げて、

「……はじめまして、風早碧です」

と挨拶した。流石に染谷もこれは失礼だと思つたのか、慌てて頭を下げて謝罪を始めた。

令にはそれが面白くて仕方が無い。染谷が碧の本当の年齢を知つ

た時の顔が見たくなる。

それから三人で話していると、

「おー！ 染谷やん」

染谷の肩をぶつ叩きワイングラスを抱えた紫と太郎が上機嫌で現れた。

最初は誰だかわからなさそうにしていた染谷だが、やがて食い入るようにつめた後、

「……ま、まさか鳴神か!？」

「そうやでー。お前、毎日大学で会ってるやんか」

「うわ。マジでわからねえわ。……そ、その後ろに居るのはお前の彼氏か？」

太郎を見た瞬間、一瞬染谷が脅えたような顔をした。令や紫は慣れているものの、太郎は人相が良くない。

しかも格好がラフな感じの為に、何処かの組の人間にも見える。

だが、太郎はそんな事には全く気づかず、何時ものようにニツと笑うと、

「紫の彼氏の太郎だ。……痛っ！ 痛えよ姐さん。嘘嘘冗談です！ 弟の太郎です」

紫に思い切り抓られて太郎は涙ながらに訂正した。紫は「冗談いふな」と少し顔を赤らめ

ながら令をチラリと見た後、太郎にヘッドロックをかけた。

それを見て相変わらずだなど笑う染谷。令自身も何時もの光景な

のに何故か笑えてしまった。

律は入ってすぐに時雨と別れると、化粧室に向かったフリをして校舎内へと進入。

かなり前に卒業したのだが、校舎は相変わらずだった。違うのは、男子トイレが増えた事ぐらいだろう。

懐かしい母校の匂いを感じながら律は階段を上がっていく。高校の頃もそうだった。

暇さえあれば何時もここの階段を上っていた気がする。この上にある場所は、律のお気に入り場所だった。

四階に設置されたテラスは学校全体を見渡す事が出来、遠くの山々も美しく見える。

授業がめんどくさかったり、嫌な事があつたりすると良くテラスへと上った。

律の学園生活はその場所に始まり、その場所に終わったと言ってもいい。

階段を上り終え、相変わらず立ち入り禁止の立て札がかかってい

るロープを超えると、予想していた通り、鍵が開いている。

(やはり……か)

ゆっくりとドアを開けると、満点の夜空が広がっていた。全くあの頃と変わっていない。

まるで高校時代に戻ったかのように、ここに来るのはいつも通り今日も二番手だった。

何故か何時も彼女の方が先に居た。それが悔しくて、彼女と様々な事で張り合った。

そんな思い出を胸に律は口を開くと、

「やっぱり此処か。相変わらずだね 凜」

テラスの一番奥には、あの頃と同じように一之瀬凜がムスっとした顔で景色を眺めていた。

律が此処に来るのは大方予想できていたのだろう。動じる事無くゆっくりと振り向き、

「久しぶりですわね 律さん」

数年ぶりに再会したライバル同士はただ獰猛に笑うと、そう挨拶をした。

言いたい事は沢山ある。とりあえず、律はまずは世間話から始めようと決めると、

「本当に久しぶりだ。今回の私の学年の幹事はお前だったからね。こうやって旧交を温めに来たのだよ」

「そうですか。貴女、一人称が変わりましたわね。やっぱり、結婚

した影響でしょうか？」

「お陰様で二人の子供に恵まれたよ。結婚式にはお前も呼んだんだぞ。来てくれても良かったじゃないか」

「どうしても外せない、大切な用事がありましたので。祝電は送ったじゃないですか」

「ほお、家の用事かね？」

「世界で一番大切な子の、運動会だったんですよ」

「なら仕方ないか。いやあ、私の世界で一番カッコいい旦那様をお前にも見せてやりたかったよ。」

「本当にカッコいいんだぞ。お前は高校の頃幾ら私が説明してもどうでも良さそうに聞いていたが」

「なら、後で挨拶に伺いますよ。今日は来ているんでしょう？」

「ああ。急がなくて構わない。どうせ、この後毎日会える筈だぞ」

「ユニオンの本部でだけだな」

律は重槍を顕現させて、凜へと向けた。対する凜の表情に変化は無い。ただ、淡々と律だけを見ている。

「律も悲しみを堪えているような表情で凜の言葉を待っている。」

「……私の親友の話、覚えてますか？」

「……あ、ああ。確か、希だったか？ 戒が当時付き合っていた女の子だったな。」

彼女は今、何をしているのだろうか。素晴らしい笑顔の持ち主だったと記憶してるよ」

「……消えちゃいました。反逆の十文字事件の時にね」

「っ!? あの事件か。アレは、お前たち十文字派が総力を上げてみ消しに走ってたよな。」

何だ。あの時に何かあったのか？ 凜、全て話せ。今ならまだ力になれるかもしれない」

律がそう言うと、凜はくすりと笑いを漏らす。嘲笑ではない、何かを愛でる様な笑い方だった。

「あらあら。随分とお優しくなりましたのね」

「ふざけてる場合じゃない。いいか、凜。私はな」

「結構です。律さんには絶対理解できませんよ。私がこの十年間どんな思いで生きてきたかなんて誰もわかるわけがないです。」

全部、私が悪い。私は贖罪の為だけに生きているから。その贖罪だって、単なる自己満足。

自分を救いたいのだよ。そんな厭らしくて、浅ましい存在なんです。私はね……」

「凜……」

「今日だって本当は来るつもりは無かったの。此処に保存されれる結晶は、仲間に取りに行ってもらった。」

律さんを此処で待っていたのだった。ただの時間稼ぎ。貴女は私に友情を少しは感じて

いたみたいだけど。私はそれすらも利用した。本当に、酷い女よね」

「……知っていたのか」

「だって、貴女が用事も無いのに何度も訪れているんですもの。少しは疑うでしょうに」

神々の黄昏事件の際にユグドラシルから回収した結晶の幾つかを律は此処の学長に保存してもらっていた。

この学校には式神使いの名家出身の子が入学してくるのも多い。その修練の為に悪鬼を発生する必要があったのだった。

律がこの学校に通っていた時期は、まだコアとか結晶については研究が進んでいなかった為に、森の中を歩き回って探していたのだが、

今ではこの学校の地下に特別室を作って、何人かの式神使いの立会いの下に訓練が行われているのだった。

「凜……」

律が携帯を取り出し、時雨と令に連絡しようとする、凜は傀儡の力を発動。

律の目に「携帯を投げ捨てる」と命令を下す。ほんの一瞬の隙をついた出来事だった。

慌てて抗った時にはもう遅い。律の携帯は自らの手によってテラスの奥まで投げ捨てられてしまう。

「貴女の事は嫌いじゃなかったわ　この学校で、私と対等に話してくれた始めての人だったから」

凜が悲しそうにそう呟くと、テラスの入り口のドアが開いて黒装束を着た人間が入ってきた。

いや 人間じゃない。そこに居たのは完全に統制された人型悪鬼。ナイフや刀まで装備している。

凜の傀儡の力で操っているのか？ と予想するも、確証は無い。どれだけやれるのかすらわからない。

だが、律はそんな不安を取り払うように獰猛に笑うと、

「私に武器を向けるとは、いい度胸だな」

重槍を振り回し、地面に一度叩きつけると臨戦態勢へと入った。

第24話：友達（前書き）

ギアスケット

次回投稿日は未定です。すいません。

## 第24話：友達

パーティー会場で談笑していると、碧は式神の気配の流れを感じた。

誰かが何処かで式神を使っている。だが、その反応が余りにも小さすぎる。きつと、自分以外の誰も気づいていないだろう。

風神の鬼神である碧は空気を媒介にして、感覚を伸ばして探知する事が出来る。

式神の気配。人の気配。反意思の流れ。人の匂い。それらを”世界”から掬い出し、感じ取れるのであった。

しかも上の方から感じるのは律がつけていた香水の香りまでするのだ。

(……どうしよう)

今にこの事を伝えるべきかどうか迷う。正直、この空気は悪くない。令と紫と太郎とその友達は楽しそうに談笑している。

この事を言えば、確実に空気が壊れてしまうだろう。この、楽しそうな空間を奪うのだ。

だったら、大して輪に加わってない自分が確認しに行けばいいだけの話。そう思い、行動しようとする。

「ヤバッ！ 令、太郎。そろそろ律ねーさんに頼まれた事する時間やで」

紫が何の前触れも無く時計を指差して騒ぎ出した。

「……何の話？」

「律姉エ。んな事言ってたか？」

「悪い。染谷。ウチらちよつと九我山関係のお仕事があるんよ。少し、席を外させてもらうで」

紫は申し訳なさそうに、手を合わせて染谷へと謝罪する。すると染谷は何か含んだ笑いを浮かべ、

「ああ、わかった。俺もお前らと話してばっか居ないで、他の奴らにも挨拶してくるわ」

「皆川とか川瀬にあつたらよろしゅう伝えといてや。ほな、行くで」

紫は令と碧の手を引くと、人を押しのけながら会場の外へ出て、人気の少ない場所へと向かう。

令と太郎は意味がわからなさそうにしているが、紫には全て分かっていた。

碧が何かを感じた事。空気を読んで自分ひとりで確認しに行こうとしていた事も。

「碧。お前、何か感じたんやな」

「……うん。式神の気配が幾つか。……一つは上の方。もう一つは下の方。」

……それだけならよかつたんだけど、上の方からは律お姉さんの香水の香りがしたの」

「碧ちゃん。それ本当なの？」

「……うん」

「コイツの感覚はめっちゃ鋭いんや。あたしが保障するで」

紫がそう言うと、令は少し考えた後に、

「わかった。じゃあ、確認に行こうか。もしお姉ちゃんが戦ってたらしマズイよ。」

今日は四鬼を連れてないから、鬼憑を使えないんだ。だから、太郎くんは時雨さんに

連絡しながら上の方、屋上の方へと向かって。僕らはその下の方に行っって見るから」

「おう、任せとけ！」

太郎はネクタイを投げ捨てて廊下を物凄い速さで走っていった。令は体から戦闘の

邪魔になるものを外し、全てポケットに詰め込み始める。紫は髪留めとイヤリングを外し、

流石にドレスはどうにもならないのか、裾を縛って動きやすい格好に変えた。

「……何で……信じてくれたの？ ……鬼神の言う事なんだよ？」

そう口にしてしまう碧。幾ら紫の知り合いとはいえ、簡単に信じすぎた。

ましてや自分は鬼神。人間の敵だ。海外にずっと居た碧は何度も人間に殺されかけた。

教会の連中なんて、自分を殺す為だけに平気で特攻をしかけてきたのに。

頭の中がぐるぐると気持ち悪いぐらいの思考の深みにハマっってい

く。そんな碧を、令は正面から見据えると、

「鬼神とか悪鬼だとか、僕にはどうだっていい。太郎くんや紫ちゃんと一緒に居るのも、

僕が二人の事を好きだから。たったそれだけの事なんだ。シンプルでわかりやすいでしょ。

碧ちゃんの事だって僕は好きだよ。それは風神の鬼神を気に入ってるんじゃないくて、

風早碧っていう一人の人物の事が好きだからなんだ。だから、信用しようかなって。」

「……令君」

「ま、令の家ががどうしよーもない変人一家やっていうのもあるけんな」

「うわ……折角僕が良い事言ったのに。全部台無しじゃん！」

「でも、本当の事やる？ 鬼神や悪鬼と一緒に飯食うなんてあんたらぐらいやで？」

でも逆に言えば、人間と飯食う鬼神や悪鬼もあたらだけや。変人同士、仲良うしいやって神さんの啓示なんかね？」

令と紫はそう言いあって笑うと、碧に手を差し出した。さあ、どうする？

と言わんばかりの二人の意地悪な表情。碧はため息をつき、

「……確かに、変わってるよね」

そう言い、久しぶりに信頼できる人へ向けた笑顔を作ると、その

手をとった。

そして、碧を先頭に校舎内を駆けていく。令と紫はこの学校の卒業生なので、大体何処に何があるかはわかる。

碧の下の方から式神の気配という発言から、一階にあった”あの部屋”だと判断し、階段を下りると

自分達が学生の頃に偶に使っていた物置部屋　という名の訓練施設へと向かった。

「やっぱり……」

部屋にあった無数の本棚の一つが動かされ、地下への階段がぼかりと見えていた。

躊躇する事無く三人は走って行くと、一番下にあった巨大な訓練施設へと辿り着いた。

体育館程の広さの空間に、頑丈に作られた幾つもの柱。そして、何かを閉じ込めておくような檻。

卒業前に来た時には、そこには一匹の悪鬼の姿は無かった。だが、今は七体程の武器を持った悪鬼が佇んでいる。

肝心の式神使いは何処だ　と令が目を凝らして探していると、

「あれれ？　凜ちゃん設定ミスったのかなー？」

「だーから止めようって言ったじゃん。九我山の連中が来ている時に強奪しようなんてさ」

セミロングの黒髪を一房だけ赤く染めた女と、襟足の一部を真っ白に染めた黒髪の男が闇の中から現れた。

令はその顔を知っていた。というよりも、この国で式神に関わっていてこの二人の事を知らない人間はモグリだ。

女の方が十文字千夏。男の方が十文字千秋。十名家最強の十文字

家の直系である次女と次男がそこに居た。

しかも、手には結晶を持っている。自分達の時と同じだ。という事は、颯太や雨龍達の元締めは彼らか。

と予想しているが、そんな二人は令を見ながら、ケラケラと何時ものように笑うと、

「よお、令じゃん。何か新しい女の子連れちゃってさー。俺にも少し分けてくれよ」

「これまたロリっ子だねー。アンタ、年上が好きだと思ってたけどさー」

今度は碧を興味深そうに眺めているが、これを令は完全に黙殺し、

「千夏。千秋。……結晶を持ってるって言う事は、お前達も九我山襲撃事件に関わってたの？」

「まあね。流石に悪いとは思ったよ。でもさ、頂戴って言うてもくれないじゃん」

「しかも私ら十文字じゃなくてユニオンに渡すとか言ってるしさー。アンタら十名家なんじゃないのー？」

確かに十文字ではなく、ユニオンに結晶を預けようというのは十名家に所属する家としてはおかしい。

ただ、九我山は十名家の中でも四条派だ。反逆の十文字事件や、過去にも幾つかの災厄を十文字は起こしている。

その中で何も言わない十文字を違う視点から支える、もしもの場合は潰す。という事から四条派が生まれた。

やはり、令自身。普通に話したり仕事する分には支障はないもの

の、十文字とユニオンだったらユニオンを信じる。  
そう言いたいのは千夏も千秋もわかっているように、

「ちょっと意地悪な言い方だったかな？」

「意地悪だね。でも、お前達の事は嫌いじゃないさ。信頼という点でユニオンの方が勝っていたのかな」

「だろうね。だからさ、こうやって無理矢理貰っていくしかないわけ。令にだって譲れないモノはあるだろ。」

僕らはこればかりは絶対に譲れないんだ。十名家システムがぶっ壊れたっていい。日本中から非難され

てもいい。それでも、叶えたい願いがあるんだよ。僕だけじゃない、協力してくれる雨龍や凜ちゃん達にもね」

「僕の譲れないモノか」

それが見つからない。漠然とはわかっているのだが、それを上手く言葉にする事が出来なかった。

それが律の言っていた自分を貫く事。なのかもしれない。だけど、まだわからない。

仕方ない　と令は微笑を作ると、今分かる譲れないモノ、結晶を奪還しようとする無装を顕現させた。

「おほつ。やる気になったみたいじゃん」

「お前達、行つけえー！」

千夏の合図によって、悪鬼達が一齐に襲い掛かってきた。令は紫と目配せをすると神憑の力を発動させる準備をした。

紫も一瞬で狂化する　が、その前に碧が既に狂化状態へと入っていた。何故と疑問が沸くが、碧は楽しそうに笑い、

「……それ、面白そうだね」

そのまま令へと抱きつくようにして粒子化して行った。途端に令の体の中へと吸い込まれる碧。

流石に碧を入れるのは初めてだったので上手く波長が合わない。体の節々が痛み、だがすぐに碧が令の体の中で落ち着いた。

途端に涼しく快適な気分へとなる。何故か、自分の周囲だけが清しいほどの気温に保たれていた。

それと同時に、感覚の幅が異様に広がった。今までの自分の周囲だけではない。離れた場所の気配や匂いも何故だかわかる。

「あー！　碧ずるいで！　……って、お前らマジ邪魔やつちゅーの！」

飛び掛ってきた悪鬼に凄まじい電流を浴びせる紫。だが、何体かの悪鬼はそれを上手く避けた。

普通の悪鬼とは何かが違う。紫のテンションが微妙に上がり、腕をブンブンと振りまわす。

その頃にはもう令と碧から興味の大半は失せており、更に狂化状態を上げる紫はそのまま悪鬼達の輪の中へと突っ込んでいった。

「碧、令！　今回はアンタらに十文字譲ったるわぁ！」

人型悪鬼の頭を掴み、投げ飛ばし、電流をブチかましながら紫は大声を上げた。

ああなっちはもう駄目だ。付き合いの長い碧と令は同時にため息をつく、千夏と千秋の方を向いたが、

「無益な戦いに興味はありませーん！」

「てゆうかあの子も鬼神とかマジ驚きー」

靴をローラーブレードのように変えて物凄い勢いでもう訓練場の奥の方へと走っていく。

それを呆然と見送っていた令だが、やがてハッとすると慌てて追いかけ始めた。

この奥には抜け道がある。しかも、それは森の中へと通じている筈。記憶を整理しながら走っていると、

「……何で、飛ばないの？」

「……飛べるの？」

「……うん」

「早く言ってよおー！」

碧に力の制御を任せると、紫と合体した時と同じように飛べるようになった。

だが、紫よりも更に早い。尋常じゃない速度でどんどんと千秋と千夏との差を縮めていく。

前方から二人が振り返りながら、魔具製のマシンガンを雨のように撃って来るが、その全てが見える。しかも、それに体もついてくる。

碧との神憑は紫よりもパワーが少ないと感じる分、それを補うほどのスピードがあった。

すると新たに千秋がバズーカを作り出し、前方の壁を破壊すると



威勢よく出てみたモノの、律は明らかに劣勢だった。凜の配下の人型悪鬼が郡を抜いて強いのだ。

人型悪鬼は確かに上級と呼ばれる部類に入るが、上級悪鬼の中ではランクがかなり低い。

過去の太郎や四鬼の方が遙に格上で手を焼かされる筈なのであるが、目の前に居る人型悪鬼はそれよりも強い。

武器を効率よく使い、更に連携まで仕掛けてくる悪鬼なんて見た事が無い。

紫や碧の父親のような百年以上生きた大悪鬼なら別ではあるが、これは夕チが悪すぎる。

「やるね……。何処からこんな悪鬼を仕入れてきた」

「今日来ているお友達の部下ですわ。それ以上でもそれ以下でもありません」

律とてやられっぱなしでは無かった。人型悪鬼の胸についている機械が実に怪しい。

そして、凜の友達と言えば大体わかる。しかも、このような意味不明な機械を作れるなんてもはや答えが出たようなものだ。

魔具の一族、十文字。この学校に千春、千夏、千秋、千冬、戒の誰かが居る。

想像しただけで嫌になった。十名家最強の一族の人間まで出てきてはもう、パーティどころではない。

「時間稼ぎをしても無駄ですよ。助けは来ません。一人で此処に来たのが不運でしたね」

凜は懐から赤い機械のようなモノを取り出した。アレもきつと魔具であろう。

口ぶりから察するに、特殊な結界を張る魔具だと予想。

「わかったみたいです。これは、結界の力を増幅された魔具です。任意の範囲に特殊結界を張り巡らし、人の立ち入りはおろか。悪鬼・式神の気配までほぼ消し去るといふ優れモノなんですの」

「ふっ……随分と用意周到じゃないか」

「貴女のような馬鹿みたいに強い相手に、私みたいな凡夫は正攻法じゃ勝てませんから。」

今のうちに謝っておきます。全てが終わった時に、またこうやって喋るといいですね」

凜はそう締めくくると、視線で悪鬼に目配せをした。数体の悪鬼がそれぞれの武器を構え、律を囲むように包囲していく。

重槍を振り回して、二体吹き飛ばすが背後から顔を殴られた。鬼憑状態ならダメージは少ないのだが、今は違う。

頭がクラクラとする。口の中に血の味が広がった。だが、この程度で気絶するわけにはいかない。

そのままの体勢でがむしやらに一体の悪鬼を槍で貫くと、あらゆる方向から重力をさせて体を引き千切り、そのまま凜へと走り出す。だが、凜は慌てない。手を掲げ小型の空船を召還すると、それを律目掛けて放った。

高速で動く空船は律の槍を避け、弾丸のようにその体にぶち当たると、テラスの壁へとそのまま律を叩き付ける。

「……これ以上傷つけるのは心苦しいですから。お前たち、やりなさい」

悪鬼が疾走し、律の体を押さえつけると、顔を無理やり上げさせて凜の姿を見させた。

マズイ このままでは傀儡の力に支配されてしまう。長い間死線を潜り抜けてない所為か体が鈍っているのも感じた。

その間にも凜がコツコツと靴を鳴らして歩いてくる。

「なんて顔してるんだ。馬鹿め……」

凜の顔は泣きそうに歪んでいた。高校の頃から知っていた。何回か酷い目に遭わせたり遭わされたりもしたが、心の綺麗な人間だと、律の笑いながらの言葉に、凜は慌てて表情を引き締めると、

「それでは、命令します」

「……っ。時雨……」

だが、凜の視線は自分の方を中々向かない。すると、突然体を支えていた空船が動き出し。

凜はそれに掴まると、高速で移動し、律から離れる。遅れて、悪鬼が何かに感づいたようで

上を向くと、無数の火の玉が降り注いできた。律も見上げると、その中には二つの人影。

「遅いぞ。旦那様と弟よ」

一つの人影が持っていた短刀を下に向かって思い切り投げつけた。それは、物理法則を無視し、異常な速さで落下して

律の左側に居た悪鬼を真つ二つにぶった切り、アスファルトへとめり込む。右側の悪鬼はけん制の火球は避けたものの、

上空から降り注いだ更に巨大な火球に焼き尽くされてしまう。そして、轟音を響き渡らせ、時雨と太郎が律の少し前へと着陸。

「遅くなつて悪いな、律姉え。時雨兄い何か女と絡んでてよ」

「ひ、人間きが悪いな太郎。ぼ、僕だつて逃げたかつたんだから。でも彼女達が……」

律のムツとした顔に睨まれて、時雨は冷や汗をかきながら弁解する。

何があつたかは後でちゃんと問い詰めるとして、律はゆっくりと立ち上がると、離れた場所に居る凜を見据えた。

太郎と時雨も同時に凜を見る。太郎なんかはもう、睨み殺すかのような目で見ていた。

「形勢逆転だな、凜。流石は私の旦那様だ。私と何処か愛の糸で繋がってるみたいだね」

「お、俺は！？　つか、碧が気づいたんだぜ。時雨兄いは俺が連絡しなきゃ」

「その通りだよ！ 何だか胸騒ぎがしたんだ！ ああ、間に合っ  
てよかった！」

太郎の声を打ち消すように時雨は大声をあげて、律を抱きしめた。  
律は律で顔を赤らめながら同じく時雨を抱きしめ返す。

まだ戦闘中だというのに、緊張感の全く無い二を太郎はもう無視  
する事にした。

地面に突き刺さった時雨の短刀を引き抜き、自らの炎を纏わせる  
と、

「んで、テメーはどうする？ この三人相手からまさか逃げれると  
は思ってたねエよな？」

「……………どうですかね」

凜は再び小型の空船を顕現させ飛びさろうとしたが、突然動くの  
を止めた。

テラスの外の空中の空間が何かおかしい。それに気づいた。する  
と、木の葉が一枚風に乗って外へと舞う。

それはテラスの外に出た瞬間、押し潰されるようにして地面へと  
落下していった。

そういえば、八神時雨の式神も重力を操る式神だったと思い出し、  
流星の凜にも冷や汗が伝った。

「凜……………もう、諦める」

「……………嫌よ。こんな所で終わってなんか……………！ そう簡単に、諦め  
られるのですかっ！」

校舎から少し離れた空間が一瞬ブレると、夜の闇を塗りつぶすよ

うにして一隻の軍艦が姿を現した。

その空船は、全ての砲身を躊躇い無くテラスへと向けると、即座に発射体勢に入る。

マズイ。式神と太郎の炎の力を最大限まで引き出し、防御体勢に入る三人。

凜は、飛んで来る砲弾に向かって空へと飛翔すると、

「私を避けなさい！」

傀儡の力を使って全ての砲弾へと命令した。すると、物理法則を無視し、砲弾は凜を避けるようにしてテラスへと着弾した。

断続的に続く爆発を太郎は律と時雨が空間を歪曲させて受け流し、太郎の炎が残りの砲弾を空中で撃墜する。

そして全ての砲撃が終わった頃には、もう空船と凜の姿は何処にも見えなかった。

太郎は苛立たしげに地面を蹴り、時雨はやれやれとため息をついた。そんな二人とは違い、律は何もない空間を見据え、

「……馬鹿め。友達が困ってるんだ。そう易々と引き渡すわけないだろうが」

悲しそうにそう呟いた。

第25話：希（のぞみ）（前書き）

次回投稿したら再び投稿頻度が減るかもしれませんが。  
基本、日曜日投稿を目指して頑張ります。  
というわけで、今回は20日に投稿予定です。

## 第25話：希（のぞみ）

「 四条莉王は一瞬、開いた口が塞がらなかった。その前には制服の肩部分が血でべっとりな遥緋の姿。」

「 蒼二達から報告を聞いていても立つても居られなかったが、仕事があるのでユニオン本部から離れるわけにもいかない。」

「 苦渋の決断として莉王が出したのは、玄関付近で仕事をするという事。誰もそれには口を挟まなかった。」

「 四条莉王の変人っぷりは、もはやユニオンの中では周知の事実。」

「 そして、かなりの愛妻家という事も。」

「 そんな莉王を見て遥緋は弱々しく笑い、」

「 ……いや、大丈夫だって。もう怪我は数日前に輪廻転生で治したからさ。」

「 ほ、本当か？」

「 うん。」

「 だ、だがこれ以上仕事はするなよ。お前の分も全て俺がやっておいてやる。」

「 今日はもう上がらせてもらえ。莉那と灼汰が今、仮設住宅に居るけど会いに行くのは明日だからな。」

「 ……ん、ありがとう。また夜にね。」

「 遥緋は莉王の頭を優しく撫でると、疲れたように歩き出す。莉王」

はそれを心配そうに見送った後、

書類の束を抱えて玄関から去り、一度自分のデスクへと戻った。しばらくそのままデスクワークをしていると、内線で呼び出しがかかる。

靴を鳴らしてユニオン本部の最上階まで歩いて行くと、そこには殆どの幹部や重役が揃っていた。

重役と言っても見知った顔ばかり。遥緋は勿論の事だがそこには運命と郁人の姿が無かった。

代わりと言ってはなんだが、久しぶりに神璽が幹部の席に座っている。莉王と目が合うと、軽くウインクしてきた。

そして、一番真ん中に座っていた蒼二が全員を一度見た後、

「ひ・さ・し・ぶ・り！ に見た奴が居るなあ……まあいい、会議を始めるぜ」

と神璽に最大限の嫌味を込めて開催宣言をした。神璽はひたすら恐縮するばかりで、特に何も言い返せないようだった。

「まずは、現在まで起こった状況を纏めよう。各員の報告を聞けば、何が起こってるかの全容把握ぐらいは出来るからな」

そして、神璽が立ち上がりこれまでであった事を説明しだした。外人の子とやろうとして由加に海底に沈められた事から始まり、

これには流石に失笑、もしくは呆れの声が混じったが。風神の鬼神が絡んで来た事。

五月颯太と六道紡の事。そして 自分達以外にも結晶使いが居る事。紡の目的。

その全てを話すと、誰も笑えなくなった。五月と六道が敵に回った、それだけで不安が広がっていく。

「じゃあ、次は俺だな。二階堂特区で何があつたのかを話すぜ」

次に立ち上がったのは蒼二。二階堂特区で起きた事を順に話していく。雨龍と三枝姉妹が二階堂を滅ぼした事。

運命と遥緋が負傷するほど三枝の力は強いという事。龍一の死体だけが何故か回収できないという事。

これにも激震が走る。十名家の中でも二階堂は有名であり、その一角が崩れたとなるとかなりの混乱が起きると予想される。

「今の所、目立った混乱は見られてないな。二階堂特区は元々死罪六神が過去に自治体系を

作っておいてくれたから、その応用で今は自治体が管理、運営を相変わらずの路線でやってるってよ。

……それも長くは持たないと思うが、まあその辺りは十文字の管轄だ。これはおいといて良いだろう」

そう言うと蒼二はそのまま席につき、次の九我山姉弟を指名した。令が基本的に説明し、律がそれに補足を加えていくという形だ。

十文字の千秋と千夏が居た事、凜と謎の改造型悪鬼。やはり彼等の目的は結晶を集めるといふ事であるという事。

そして、令が全ての報告を終えて席につくが律はまだ席に着かない。やがて、ゆっくりと息をつき、

「十名家の直系は覚えているのだろうか……希という子の事を」

その場に居た中で反応をできたのは莉王と奏だけだった。何処かで聞いた事のある名前。

律が戒の彼女だった子だよ。というと、奏はハツとしたように、莉王はまだわからなさそうな顔をしている。

「お姉様の病院に良く来ていた方でしたっけ……？」

「七海の場合はそうだろうね。莉王、お前は覚えているか？」

「……あー。確か、一度だけ。何かのパーティーで戒と一緒に話した記憶がある。」

髪が綺麗な子だったな。ああ、そうだ。俺の心眼が初めて効かなかった相手だ。あの子がどうかしたのか？」

莉王の言葉に律は少し言葉を詰まらせた後、

「彼女がこの事件の根底にあるような気がする。そして、もう一つはあの反逆の十文字事件だ。」

凜が言うには、彼女はこの事件の時に消えてしまったらしい。私個人の意見を言うなら、

私は彼女の事も調べる必要があると思う。反逆の十文字事件と彼女が繋がった時、戒達が何をしようとしているのかわかる気がするんだ」

律が全員にそう言うと、しばしの静寂が訪れた。誰も何かを考えるようにしているが、もはや答えは出ているようだった。

頭の中でこれからのプランを加筆修正しながらずっと組んでいた蒼二は、やっと考えが纏まったのか、ゆっくりと再び立ち上がり、

「方針は決まったみたいだな。重要なのは結晶をこれ以上渡さないようにするって事だ。」

簡単に言えば、もうユニオンに全部集めてしまおう。あの神々の黄昏事件の遺物をな。」

それと、律の言ったとおりその希って子と反逆の十文字事件も調

べてみようか。

仕事の分担は、これから俺達残りの幹部で割り振って、直属や色々な部署にまわしておくから一応一旦は解散になる。皆、ご苦労だった」

蒼二のその言葉によって、幹部以外の全員が席を立って部屋から出て行った。

十文字戒は、先程始めた慣れない洗濯に手こずっていた。家族は現在六人。

洗濯物も六人分。そして、手伝ってくれる妹や弟や友人は命を賭けての仕事に出ている。

一番困るのが、女性が三人も居るといふ事。誰が誰の下着かわからないのだ。とりあえず遠音はこんな子供っぽくないな。

と手にした下着を干夏と干春の籠に投げ入れ、ここまで終えてしまえば、後は服だけだ。

四つ子と戒と遠音のファッションの方向性は全員違うので、見ればすぐにわかるのだ。

小型の籠を四つ抱えて家の中へと入ろうとすると、上空から小型の気球が降りてきた。

「お、来たか」

籠を家の中へと置くと、戒は庭に立って気球が下りてくるのをじつと待つ。それから約数分。気球が庭に着陸し、

カバンや袋を抱えた三枝万里が泣きながら気球から降りてきた。彼女が今どんな状態にあるかは報告で聞いている。

千里や雨龍は何処かのマンションに引き渡すつもりだったらしいが、戒が良かったら十文字で預かると連絡したらあっさりと快諾した。

三枝からの家政婦も明日には来るだろう。戒は、泣いたまま動かない万里の頭を優しく撫で、

「いらっしゃい」

と言い、万里が持っていた荷物を受け取ると腰に手を回して家中へと促す、

「……………」

万里はまだ悲しいのか、ぐずぐずと泣いていた。仕方の無い事だとは思う。

悲しければ好きなだけ泣くしかない。泣いて泣いてようやく振り切って自分も此処に居るからだ。

家のリビングへと通すと、紅茶を探しにキッチンへ。遠音が台所を取り仕切っているので中々何処に何があるかわからない。

悪戦苦闘しながらようやく見つけて、紅茶を淹れた時にはもう既に三十分が経過してしまっていた。

「遅くなって悪いな」

「ううん。ありがとう……………」

それが幸いと出たか、万里はやや落ち着いたようだ・泣きはらした目で紅茶を黙って味わっている。

穏やかで、ゆっくりとした時間が流れていく。しばらくすると、ようやく何時もの万里の顔が戻ってきたようで、

「姫ちゃんは何処かへお出かけしてるの？」

と何時もの調子で喋りだす。戒はそれに気づき微笑と若干の心配そうな声色で、

「旅に出ちゃったみたいだよ。それが、今回の騒ぎの発端になっていると言ってもいいかな。」

あの子の願いの為なら、俺は十文字すら捨てても構わない。だから、遠音を初めとして

お前達がこうやって手伝ってくれるのがとても嬉しいよ。改めて礼を言わせて貰おう」

「……………ううん。私らだって戒君の口ぞえのお陰で三枝のやった事を不問として貰えるんだし。」

お互い様です。……………いえ、戒君には布都御魂だけでなく、またこんな事でお世話になっちゃって……………申し訳ないな」

「子供が産まれるんだ。友として心からの祝福と協力をしたただけだ。雨龍だっけきつと嬉しい筈だよ」

「そう……………かな。戦えない私なんて要らないって言われちゃったし……………」

ついてはいけない所を突いてしまったようで、再び万里は表情を

暗くしてしまった。

だが戒にはわかる。雨龍がそんな事を言ったのも、全ては万里を危険から遠ざける為。

万里には内緒であるが、三枝の頭首と取引をして万里を三枝から解放し、自由に生きていかせる話も少しずつ進んでいる。

二階堂雨龍が土下座してまで自分に頼んできたのだ。戒にはそんな願いを無下に断るわけにもいかない。

余りにも雨龍が浮かばれないので、少し弁護してやろうと思ひ、

「万里、一つだけ信じて欲しい」

「何を？」

「詳しい事情はいえない。でも、雨龍は世界で一番お前の事を愛しているんだ。

俺が保障する　それだけは、信じてやって欲しい」

「そう……なの？」

「お前は良い子だよ。だから皆に愛されている。でもね、あいつら素直じゃないからさ。

直接伝えることが出来ないんだよね……これは、何と言っただけ？　紡がいうにはツンデレ？ってヤツらしいよ」

「ふふつ。意味わからないよ。でも、少しだけ信じてみようかな……」

「そうしてほしい。それだと、余りにもあいつらが浮かばれないから」

万里と戒は笑いあつて、しばらく紅茶を楽しんだ。戒は昔から万里に優しくかつた。

年末年始に会えば必ずお小遣いはくれたし、万里にあつた武器が見つからなければ自ら武器を作つてプレゼントしてくれた。

だから、何か戒の力になつてあげたい。姫が居ないと自分が聞いた時、戒の明らかに疲れたような顔が一瞬見えたのを覚えている。

こつやつて自分を氣遣つて笑つていてくれるが、戒も辛いのがわかつた。万里は、紅茶を飲み乾し、真剣な表情を作ると、

「それで、戒君やお姉様達の今回の目的は何なの？」

戒のカップを支えている腕が一瞬震え、だがすぐに元のように戻すと、戒もまた真剣な表情を作り、

「 希を、世界から取り戻すんだ」

と言つた。それから何かを反芻するような顔で戒の話が始まつた。十文字戒が生まれた時の話。

それから四つ子が生まれた時の話。戒の初めての仕事の話。そして、希と出会つた時の話。

断続的に続いていく戒の話の節々には、確かな希への愛と優しい心が詰まっていた。

そして語られる反逆の十文字事件の真実。あの日、何が起きたのか、何がどうなつてしまつたのか。どうして希は消えたのか。

その話を全て聞き終えると、戒は一枚の手紙を差し出した。それは、姫から戒への手紙。

読んだ瞬間、万里は全てを理解した。何故、姫が失踪しているのか。戒が動き出そうとしたのか。

とめどなく、涙が溢れた。こんな悲しい事があつたなんて知らなかつた。戒が純血を嫌いな理由がこれ以上なくよくわかる。

「こんな事って……本当に……」

「全部真実だよ。俺は全てを承知の上で、希と愛を誓った。それがこんな結果になってるんだけど……」

「じゃあ姫ちゃんは……」

「そう。あの子が希を求めている。だから、俺はあの子が危ない事をしないうちに希を取り戻そうと決めた。準備は進めてある。」

後は、大量の反意思を集めるだけなんだ。それさえ終われば、俺が自ら希を取り戻してやる。あの時を無かった事にしてやるんだ」

この結果が良いか悪いかは、万里にもわからなかった。善と悪なんて人の主観によって違う。

戒が正しいというわけでもなく、間違っているというわけではない。ただ、希と姫への愛だけは確かに感じられた。

ならば、自分は戒の為に協力してやろうと決めた。姫の事も好きだ。戒の事も好きだ。彼等には笑っていて欲しい。そう改めて決意を固めると、

「戒君。頑張ろうね。私も頑張るからさ」

「ああ、とりあえず万里。お前は、子供の事に専念しないさい。流産なんかしてしまっただけは、雨龍に申し訳が立たない」

「気が早いよ。まだ、二ヶ月ぐらいだし。全然動けるからさ！」

「いや、駄目だ。家事は俺が全部やる。少なくとも遠音が帰ってくるまでは……」

「相変わらず遠音姉ちゃんに頼りっぱなしなんだ」

「面目ない……」

二人は顔を見合わせると、どちらともなく吹き出した。

四条特区にある高級ホテルの最上階のスイートルーム。豪華な作りのその部屋には一人の少女が難しそうな顔をしながら、外を眺めていた。

十代後半の程度の外見だ。だが、その目には年頃の少女のような安穩とした輝きは無く、冷たい無慈悲な目。

感情を無くした人形のような顔。しばらく少女が送られてきた様々な情報について色々一人思考を重ねていると、

「孤高のお姫さま、物憂げな瞳で何を見据えるか　って感じかねえ」

何時の間にか、ふかふかのソファアにどっかりと腰掛け、足を机の上に投げ出している少年が居た。

髪は燃えるような赤髪。頭にちよこんと乗せた変わった形のサングラスが、その突飛な外見を更に引き立たせている。

少女と同じ位の年齢だろう。だが、こちらの少年の目は少女と違い、年相応の楽しそうな目だった。

「分析ぐらい誰だってするでしょ。　　巡<sup>めぐろ</sup>。貴方は今回の事件をどう見る？」

巡と呼ばれた少年は、少女の問いに更に表情を緩ませ楽しそうに語りだした。

「どうもごつも。十名家対ユニオンでしょ。僕ちゃんの手下の報告によるとさ。

完全に争う姿勢だよ。僕らとしては、それはそれで美味しい汁が吸えるからべりいないすって感じ？」

「正直に、そして真面目に答えなさい」

少女に睨まれ、少年は残念そうに肩をすくめ、

「また、時代が動くよ。僕の経験から言わせて貰うと、これから確実に忙しくなるね。

心当たりがあるだけで、約三件程大きなお仕事が回って来る筈。それも、国からだ」

「うん。一昨日報告した中に、一件だけ。巧妙に偽装されてたけど、アレは国からの依頼」

「しかも、君が一番知りたがっている、あの忌まわしき反逆の十字事件に関する依頼だね？」

「……怒るわよ」

少女は遠く、四条特区に立ち並ぶ幾つもの建物を眺めた。あの時は、怖かった。ただひたすらに怖かった。

そして全てを失い、少女は今此処に居る。落ちぶれてしまったのはわかつていいる。でも、既に少女の中では過ぎた事にしかすぎなかった。

流石にからかいすぎたと反省したのか、巡は足を机から下ろし、

「捜査は順調さ。全てを知っている男と接触した。彼は非常に重要な人物だよな。」

こんな闇の事件に首ツッコまなきゃ良かったのにさ。黙って社会の歯車を演じてられなかったのかねえ」

「……酷い事、したの？」

「してないよ。まだ、話しかしてない。無論、脅迫じゃないよ。利害関係の一致ってヤツさ。」

勿論彼は僕等の詳しい素性をまだ知らないけどね。ただ 僕としては、この依頼にこれ以上前向きに動きたくは無い」

「わかってる。堅気……でもないか、でも素人を巻き込んだじゃう」

「政治家ってのは本当に、腐ってるよね。切り札を得る為なら、何だってするんだ」

「切り札、か……」

「だからアレは下に任せるよ。ガキの使いじゃないんだから、僕や君が直々に行く程じゃない。

ただね。問題はその後なんだよ。僕の予測が正しければ、絶対に一件胸クソ悪いのがくる。

その時はもう君次第だよ。僕は君に”炎”のような熱い恋をしてしまった哀れなチンピラさ。

君がやれというなら、全ての力を行使し、君の望む世界に作り変えてあげようじゃないか」

「とんだ責任転嫁ね。世界最高額をかけられた賞金首がよく言うわ」

「だが、必要なんだろ？ 僕みたいな自由で組織に縛られない巨大な戦闘力を持つ人間がさ。

そっちの話に関しては後悔も反省もしてない。あれが、僕の生きる意味だからさ」

「フン、認めるわ……私には貴方が必要なの」

「そうかい。じゃあ、何時でも良いからさ、”抜けたく”なったらすぐに言ってよね」

そう言うつと巡は立ち上がって、手を振りながら部屋から出て行った。少女は、疲れたようにソファーへとへたり込む。

全て お見通しってわけ。と、改めて巡の事を評価しなおすと、少女は薄く微笑んだ。

第26話：命の重み（前書き）

あ、すみません。

ちよつと次話投稿は完全未定です。

## 第26話：命の重み

見ていたのは、自分が自我を持った海。それまでは、ずっとひたすら歩いてきたような気がする。

この海辺で鬼塚二郎の全ては始まった。何故、自分の記憶が無いのかはわからない。外的要因だと医者は言う。

どうせ、ロクでもない組にでも居たのだろう。自分の体には身に覚えの無い銃創や切り傷がうつすらと残っている部分がある。

二郎自身、自分はかなり暴力的な人間だと自負していた。今思い返してみれば、悲しみだけが心の中に満たされていた自分は、

まず絡んできたチンピラを殴ると、金を奪って逃げたのだ。そのチンピラが仲間を連れて自分に仕返しをしにくる。

それを逃げながら撃退。そして金を奪う。それを繰り返していたら、クズの仲間が増え、

それが減ったりしながら、気がつくとは何時の間にかヤクザの集団に囲まれていた。

「兄ちゃん、随分と威勢がいいやんけ」

流石にヤクザには勝てなかった。散々殴られたり蹴られたりして、

二郎は鬼塚組の屋敷へと連れて行かれた。

そこで会ったのが、小太郎だった。ヤクザにしては優男のような風情だったが、本気で怒った時はやはり怖い。

二郎が街の人間にどれだけ迷惑をかけていたのかを怒鳴りつけ、何故そんな事をしたのだと問う。

「記憶が無いんだ。生きる為には仕方ないだろ」

完結に二郎がそう答えると、小太郎は更に顔を赤くし、

「それが、無闇に人を傷つけていい理由にはならない。人の道理として間違っている」

と再び二郎を殴りつけた。それから、金でも請求されるのかと思つたら、意外な事に小太郎は全く素性の知れない二郎を家に泊めたのだ。

何が目的なのかわからなかった。もしかしたら何処かへ売り飛ばされるのかもしれない。

そんな不安が心に押し掛かるが、そんな事は無い。小太郎に引つ張られるようにして、部屋に連れて行かれると、そこには二郎の分の料理があつた。

「食べなさい」

と顔や服がボロボロの二郎に小太郎はそう告げた。暫く周りを伺つていた二郎だが、空腹には勝てず箸を取って一口。

「どうだ？ 美味しいだろう」

今まで食べた何よりも美味しい気がした。何かが二郎の心の中で熱く響いたと思つたら、涙が零れてきた。

過去に同じような味を食べた事があつた。自分の為を思って精一杯頑張つた味。でも思い出せない。

二郎は泣きながら料理を口に運んでいった。久しぶりに、何か大切なモノを得た気がした。

それからしばらく鬼塚の屋敷に滞在していたのだが、小太郎や組員達は出て行けと何時までも言わない。

何か悪い気がした二郎は、自発的に掃除や鬼塚の家の使用人の手伝いを積極的にするようになった。

組員が何か仕事をする時には、全部についていった。鬼塚のヤクザとしての顔。または地域の用心棒としての顔。

その全てを見ながら月日は流れていく。何時しか、弟分が出来た。その弟分に更なる弟分が出来た頃だったか、

「坊主。お前は名前が欲しいか？」

と小太郎が二郎に問うた。上の組員からは「坊主」。弟分達から「兄貴」と呼ばれていた二郎は、確かに名前が欲しかった。

二郎がそう頷くと、小太郎はそのまま自分の事を語り始めた。血気盛んだった自分の所為で息子と妻が死んでしまった事。

それから暴力の一線から退き、他の形のヤクザを取ろうとした事。その全てを二郎は一言も漏らさずに聞いた。そして、全ての話が終わると、

「俺の養子にならないか？」

と小太郎は二郎に問う。自分には過去が無い。戸籍も無い。全てが無いと説明したが、小太郎はそれを笑って流すと、

「全部上手くやってやる。だから、どうだ？」

純粹に嬉しかった。二郎はそれを快諾すると、鬼塚二郎という名前と、家族と、戸籍を手に入れた。

とても嬉しかった。どんな物を貰うよりも嬉しかった。それから二郎は、鬼塚組の若頭として地域にどんどん顔を出していく。

悪意ある暴力には更なる暴力で。市内にあった悪徳の組をどんどんと追い詰めていく二郎。

自分のような馬鹿野郎を生まない為にも、街を綺麗にしたかった。七海の後ろ盾もあつたからか、一年もすれば街には鬼塚組だけが残っていた。

「良くやった。だが、本当に辛いのはこれからだぞ」

二郎が起こした抗争がきっかけで、住人は脅えていた。引越した家族も少くは無い。

またやらかしてしまった。後悔が生まれるが二郎はそこで止まらない。積極的に町内会や商店街の組合と話し合いの場を持ち、威圧的ではなく、対等な立場としての話し合いを進め始めた。これには、メンツが立たないと弟分達が反対した。

威圧的でないヤクザなんて笑いものだという。それでも熱心に説得を続け、シノギヤシヨバ代も何とかししようと歩み寄り、

三年が経った頃に町はようやく落ち着き、長閑だった町へと戻ったのである。

「本当にあつという間だった……」

海辺を見ると光希とミキが石を投げたり、波から逃げたりと楽しそうに遊んでいる。

不思議な子供達だ。ミキは二郎が感服してしまうほど頭が良いし、光希の運動神経は小学生とは思えないほど。

それでいて何処か二人とも大人っぽい所もあるが、逆に妙に子供っぽい所もある。

昨日何かは刺身の最後の一切れの取り合いで、光希とミキは延々と不毛な議論をしていた。

光希はジャンケンしよう譲らなく、ミキは確率論に任せる等愚か極まりないと喚く、結局仲裁がめんどくさくなった遥が

最後の一切れを食べてしまったのだが、二人はその後二時間ほど

文句を垂れていた。

そんな事を思いながら、二郎は時計を見た。そろそろ良い時間だ、二郎は声を張り上げ、

「そろそろお昼だから帰りましょう!」

と二人に言った。しばらくした後、二人は二郎に手を振りながら元気良く駆けて来た。

「今日のお昼ご飯は何かなー?」

「私はラーメンだと予想している。というか、ラーメンが食べたい。ぎつとぎつとで油多目の

チャーシューが七枚ぐらい入ってるような豚骨ラーメンが食べたいわ。もち、海苔つきの太麺で」

「残念ながら、お好み焼きだそうです。ラーメンなら、確か駅の裏通りに味の良い店があった

筈です。良かったら、明日奥様の体調が治っていらっしやったら行きましょうか」

「ま、マジですか二郎さん。そこ、麺の固さとか指定できます?」

「ミキはラーメンにこだわりでもあるのか、何時もの眠そうな顔とは違い、年相応の活き活きとした笑顔で二郎を見ている。」

「ええ、できますよ。光希君もそれでよろしいでしょうか?」

「さんせー!」

そのまま三人で他愛のない世間話をしながら、家までの道歩いていく。通りすがりのチンピラや、町内会の人間が挨拶をしてくる。二郎はその一つ一つに笑顔で応対していく。勿論、光希とミキへの配慮も怠る事は無い。

これが二郎の手に入れた物。何年も何年もかけて、自分が一度壊してしまった町を元に戻そうと頑張った結果。

何の事は無い普通の日常だが、記憶の無い二郎にとっては全てが新鮮だった。

時折、既視感を感じる事もある。だが、幾ら思い出そうとしても思い出せない。それでも、この日常がある限り、二郎の思いは消えない。

「二郎兄ちゃん、何か嬉しそうだね」

「お好み焼き好きなんですか？」

光希とミキの質問に、二郎は屈託のない笑顔を向けると、

「そうかもしれないね」

と優しい声で言葉を返した。

食事を終わると、光希は遙の下へとお見舞いに行った。昨晚から

風邪をこじらせていた遙だったが、

熱は下がったようで、少し疲れた表情をしながらも光希に静かに遊んでいなさいと注意を促した。

これで屋敷内で暴れる事は出来ない。腕を組んで何をしようか考えながら廊下を歩いていく光希。

二郎は午後から仕事らしい。だとすればミキと遊ぶのだが、ミキはミキで最近では難しそうな本を沢山読んでいる。

徹宵の家から持ってきた数冊の分厚い本。更に鬼塚家に所蔵されていたこの地域の古い歴史が書かれた本を飽きもせず眺めている。時折、電子端末を使って本と何かを確認しているのだが、説明されても光希には何を言っているのかさっぱりわからなかった。

「あら、光希。何してるの？」

何時の間にか正面に、沢山の本を抱えたミキが立っていた。とても重そうである。姉に教えられた通りに、光希は何冊か本を持ってあげた。

ミキは不思議な女の子だった。クラスや学校の女子と全然違う。育ちが良さそうだが、手入れが中途半端な髪型。

今は本を読む邪魔にでもなるのか、強引に後ろで一つに束ねられている。そんな彼女だが、

兎に角頭が良い。光希の春休みの宿題を夕飯の肉と引き換えに、僅か三時間で終わらせてしまった。

三科目のドリルはあつという間に終わらせてしまったし、読書感想文は五枚ギリギリまで丁寧な字で書いてある。

ここまで上を行かれてしまったら、もう光希はひたすらミキに憧れるしかなかった。

「暇だからさー。ミキちゃんはまだお勉強？」

「今から小太郎さんに幾つか質問しに行く所よ。それが終わったら遊んであげるから、少し待ってなさい」

「う、うん！」

そのままミキの後に続く光希。小太郎の部屋の前まで向かうと、ミキがドアを三回ノック。しばらくの沈黙の後、

小太郎の「どうぞ」という声が聞こえるので二人は部屋の中へと入った。人の良さそうな顔で光希とミキを迎え入れる小太郎。

ミキは小太郎の前まで歩くと、本や綺麗に纏められたメモを小太郎に見せながら、何か難しい事をしゃべり始めた。

光希には何を言っているのか全くわからない。学校の先生や兄や姉が喋っている事とも何か違う、レベルの高そうな会話だ。

流石の小太郎も困惑しているようで、偶にミキに質問をしながら、何とか話についていってるようだった。

「ふむう……難しいですねえ。確かにウチの組は長く続いています  
が　これは流石に」

「そうですね。こちらの記述とそちらの記述を様々な観点から分析して、類似項目を挙げてみました。

それとそれですね。……ええ、そうです。私の仮説が正しければ、この地方は　な、筈なんですが」

「確かにそれらしい記述もこちらにはありますが……いやはや、学  
が足りないようですよ」

「いえ。専門の知識を持った人でもこれを実証するのは難しいかと。  
唯一の頼りは、この地域に古くから

住まう人間が伝え聞いてきた伝承なのですが、流石の鬼塚家にも

記述しか残ってないんですか……」

「ええ、申し訳ございません」

「いえいえ。幾つか収穫もありましたし。今日は本当にありがとうございました」

小太郎とミキの会話が終わったようだった。暇そうにずっと座って待っていた光希は、伸びをして立ち上がり、ふと棚に目をやった。そこには一枚の古ぼけた写真。若い頃であろう小太郎の姿と、この屋敷では見た事がない女の人と男の人が写っていた。

だが、小太郎は今の小太郎と全然違っていた。兎に角、顔が険しい。眼光にも厳しいものがある。

しばらくジツと見ていると、それに気づいた小太郎が口を開いた。

「それは、妻と息子ですよ」

「この小さい子、二郎兄ちゃん何ですかー？」

「いや、それは二郎じゃないよ。私の一番初めの息子の敬太郎です。もう死んでしまいました」

「あ……う、ごめんなさい」

光希も流石に不味いと思ったのか、小太郎に頭を下げた。だが、

「どつして、亡くなったんですか？」

ミキが何故か話しをそう蒸し返そうとする。

「ちょ、ちよつと！ ミキちゃん」

光希が何とか嗜めようとするが、ミキは特に気にした風もなく、淡々と小太郎の答えを待っている。ミキの先ほどと同じくらい真剣な表情を見て、

小太郎は何かを察したのか、少し疲れたようで悲しそうな笑みを作ると、

「組同士の抗争がありましたね……その時、逃がそうとしたのですが、相手の組の車と正面衝突

してしまい、二人とも死んでしまったんですよ」

「だから、今のこの組の体系は穏健なんですね」

「ええ、それは二郎の意思が強かったというのもありますが、私はそう願っています。

最近は締め付けが厳しく、法の合間を利用してリスク少なく組を運営していく形が多いのですが、

私どもはそれを好きません。まあ、七海の庇護があるからこんな形で運営出来ているというのがあるんですがね」

「……そうですか。不躰な質問をして、すみませんでした」

「いえいえ、お気になさらず」

「……最後にもう一つ、聞いていいですか？」

「はい」

「死んじゃった息子さんと奥さんを、多大な犠牲と引き換えに生き

返らす事が出来るなら、小太郎さんはどうします？」

ミキの瞳は真剣だった。この年頃になると、そろそろ人の死というものが現実を帯びてくる年頃なのだ。

ペットの死。家族の死。様々な死を認識してしまう年頃だ。だから、小太郎には適当に答える事が出来ない。

一歩間違えば、大げさではあるがミキのこれからの人格形成に支障をきたしてしまうかも知れない。

小太郎はしばらく黙考した後、

「きつと、生き返らすような事はしませんね」

「……何ですか？」

「私が、鬼塚家が、彼女達を殺してしまいました。彼女達が最後にどんな気持ちだったのかわかりません。

でも、怖かったでしょう、もっと生きてたかたでしょう。それだけ、真実であると思います」

「じゃあ、どうして……！」

「それでも、私は生き返らせようとは思わない。私の都合で、彼女達を生き返らせたとしましょう。

それは命というものに対して、非常に失礼な行為であると私は考えています。

命は、一度きりだから大事にしなくてはなりません。一度きりだから人は何かを頑張れると私は考えます。

それでも、私の罪は消えません。私に出来る償いは、せめて目に映る人の命を救う事。ヤクザでありながら、出来る限りの命を救う、これがこの年寄りの最後に生き甲斐なのです」

「一度だけ……」

「そうです。それに、死んでしまっただら全てが終わりといい事ではないんですよ」

「どういう意味ですか？」

「命が終わってしまったとしても、記憶には残ります。誰かがその事を少しでも覚えていれば、その人間はまだ”世界”

に残っていると私は考えます。過去の偉人が良い例です。彼らの思想、言葉。それは今でもこの世界に生きている私達に影響を与えます。

ですから、本当に人が死ぬという事は、誰からの記憶からも、記録からも消えてしまった時であると私は考えているんですよ。少し、難しすぎましたかな？」

小太郎は、ミキを優しく見つめた。少しひっかかる所があるのか、ミキはまだ不満そうだ。

無論、これは小太郎主観の意見ではない。人によって命の価値は違うのだ。悲しいが、それが今の世界。

その旨も一緒に伝えると、ミキはしばらく黙考した後、今度は光希の方を向くと、

「光希はどう思う？」

今度は光希に問うた。いきなり話を振られた光希だが、少しは考えていたようで、ミキと小太郎といった

自分よりも何倍も頭がいい人間に意見を馬鹿にされないかと不安げな顔をしながら話をはじめ。

「ぼ、僕もやつぱり人を生き返らせるって普通は駄目だと思う。でも、やり方によっては、いいかもしれないけど。」

ぎせーが出ちゃうんだよね。だったら、それは駄目だと僕は思うんだよ。一人だけ幸せになっても

きっと楽しくなんかないと思うよ。僕だったらまず、犠牲になつたものの事を考えちゃうな」

「犠牲の定義にもそれはよるけど……」

「それって引きかえって事でしょ。例えば、お母さんがもし死んじやってつさ。」

いっぱいのお金と引き換えに生き返らすなら、多分僕はそのお金をあげて生き返らせちゃう。

そのお金は僕がいっぱい頑張つて働いて、誰にも迷惑をかけないでためたお金ならね。

でも、僕がぎんこーごうとーや、泥棒したお金じゃ生き返らせる気にはならないな。きつと、お母さん怒るもん。

お兄ちゃんやお姉ちゃんやお父さんもきつと、僕を怒るだろうしね」

「……つまり、光希はこういいたいわけね。間違つた方法で何かを成しても、それには意味がないと」

「難しい言い方だけど、多分僕はそう思つてると思うよ。誰かを泣かしてまで、僕は笑いたくないな」

光希の言葉はまだ拙いが、大体彼がどんな考えで生きているのかわかった。小太郎は嬉しそうに目を細めて二人を見ている。

完成されている思考の持ち主だが、まだ広さを知らないミキ。ま

だ幼いが、とても綺麗な思考を持つ光希。

小太郎はこの二人と出会えた事を少し感謝したくなった。小太郎もまた、光希とミキの会話に心が救われたからだ。

午後の穏やかな風を感じながら、小太郎はそのまま喋り続ける姿をしばらく見つめていた。

願わくば、この幸せが少しでも長く続くよう思いながら

## 第27話：約束の剣（前書き）

予定が崩れて暇になったので投稿です。

話の流れの展開上。先に27話を持ってきました。

次回こそDaysの由加です。そして28話になります。

## 第27話：約束の剣

牧島郁人は非常にイラついていた。原因は幾つもある。まずは、自分達が去った後に、二階堂で大きな事件が起きたという事。

十名家の二階堂が雨竜、千里、万里によって潰され、蒼二達もその騒動に巻き込まれたらしい。

事件が起きてすぐ、部下から連絡が入った為に郁人は現場へと向かおうとしたのだ。

だが、現在請け負っている仕事の依頼人はついにそれを許可してくれなかった。

曰く「私の身を守るほうが優先だ」との事。まるでそれが当然と云った風な口調で言いのけたのであった。

(アホかつつの……)

首から下がったフラガラツハを軽く触りながら、一人毒を吐く。

この剣は、蒼二と遥緋と狂と罪歌を守る為の剣なのだ。

それを使わなくてどうする。自分が今こうして生きていられるのも、全てこの剣の為に死んでいった四人の人格のお陰。

決してあんな権力塗れの馬鹿男を守るための剣ではない。何でこんな任務を自分がしなければならぬのだろう。

(仕方ないよお。ユニオンのパトロンさんの甥っ子さんなんだからあ)

現在、自分の中に入っている竜胆がそう語りかけてきた。

(それは、わかってるけどさあ……命狙われるなんて、自業自得じやん。

汚い事を散々やってきたんだ。誰かに命を狙われたり、恨まれるなんて当然だろ)

(世の中って難しいのよん。アタシらだって、きつと恨まれてると思うよお。

郁人だって、前に賞金稼ぎの連中にしつこく狙われてたじゃん)

(そして、今回はそいつらと一緒に仕事か。馬鹿馬鹿しくて涙が出そうだよ)

現在郁人は高嶺ビルという無駄に高い五十階からは双頭に分かれているビルにきていた。

八十階が今回の依頼者 高嶺源一郎の住居となっており、郁人はその八十階の一部屋に居る。

五十階までは誰でも上がれるのだが、現在はエレベーターでしかいけなくなっており、

しかも一階一階には熟練の賞金稼ぎ達が配備されている、最上階は百階。そこにも同じく式神使いが居る。

すなわり高嶺に辿り着くには、最低でも二十人の式神使いを倒さなくてはならないのであった。

外部からの攻撃にも対応している。四六時中八十階の外にはGateのコンセプトが張り巡らされており、

進入及び、攻撃はほぼ無効化されてしまうのであった。ほぼ完璧な守り。そんな生活が始まって早四日。

もはや飽きてきた。本当に、こんな場所に暗殺者が来るのかと思ってしまう。

(来ると思うよお。高嶺さんが昔やってたとあるプロジェクトの主要メンバーが次々と死んでるんだってえ。

しかもさ。皆発狂して自殺。それでも暗殺だと断定されたのは、

その人達の警備員も被害を受けてるからだっさ。証言もあるらしいしいい)

(ふうん……発狂ねえ。あのおっさんにはお似合いかもな)

(そーゆー事言っちゃ駄目でしょお)

(わかった。わかった。悪かったよ)

(よしよし。　　つとお。アタシそろそろ見回りの時間だったあ。ちよっと思って来るねえ)

郁人は竜胆を召還してやる。一瞬の空間のブレの後に、竜胆の姿が現れ、ニコニコ笑いながら部屋から出て行った。

その姿を見た後、郁人は一人落ち込んだ。自分ももう20代である。中学生だったあの頃からもうこんな所まで来てしまった。

髭も生えだし、体つきもずっと遅しくなった。身長だってもう180近くあり、蒼二を追い越してしまった。

だけど　　竜胆は全く変わらない。自分達が高校生だった頃であるうか。そこから成長していない気がする。

今まで竜胆と一緒に生長してきた。自分が老人になっても、竜胆も同じくそうなってくれると思っていた。

だが、最近では竜胆はずっとあのままの外見なのかもしれない。そんな疑問が最近よく湧く。

竜胆がいいならそれでいい。郁人は気にしない。だが、それは郁人は人間。竜胆は式神という事を嫌でも自覚してしまう。

彼女を愛してしまった。今でも心から愛している。彼女と家庭を築いてみたい。でも、出来るのか？

竜胆を式神だと思ってしまう度に将来がとても怖くなってしまったのだ。

「クソっ！」

そう毒づくくと、郁人は気晴らしでもしようと思つて部屋から出て行つた。エレベーターに乗り、八十階へ。

八十階は変な構造になっている。階の半分がパーティやらイベントやらが出来そうな場所となつており

後の半分は高嶺の私室となつている。その部屋への扉は一つだけ。そこからしか入る場所はない。

窓から侵入しようにも、やはり竜胆のGateによつて、それは阻止されてしまう。

そして現在はその場所は、用心棒達の休憩室となつていた。あらゆる料理。あらゆる飲み物。

あらゆる娯楽が設置されており、集団で居る者も居れば個人で酒を飲んで居る人間も居る。

(ふうん……)

来ている顔ぶれは中々だった。賞金稼ぎ達は単独で行動している人間も居るが、最近では

”組合”という集団に属す事が多い。個人でやれるのは強大な力を持つ極少数の人間だけ。

”鎚木”、”九十九”、”楔”といった組合の中でも有名所から来ている姿もちらほらと見える。

そんな中を歩いていくと、やはり自分も有名になつてしまつたよううで、何人かが殺気をぶつけてきた。

その殺気に何人かが反応し、騒がしかったホールは静まり返らなかつた。

「にゃーはははは。マジマジ、俺様ちゃん。こーみえて、ユニオン

の幹部だからさあ」

「えー。本当なんですかあ？」

「あ、じゃあ証拠見せようか？ ほら、このIDカードに榛名神璽  
て書いてあるっしょ？ ね？」

ホールの隅の方、料理を運んでいる係りの女の子の肩に手を回し  
ながら。サングラスをかけた黒髪

の男がヘラヘラ笑っていた。そして郁人は、今男が言った名前を  
もう一度心の中で復唱 榛名神璽。

何をやっているんだあの人は と思った時には、もう既に遅し、  
賞金稼ぎの何人かが立ち上がり、神璽の方へと歩いて行った。

「よお、榛名。テメーしばらく噂聞かなかったけど、生きてたんだ  
なあ」

「ひやはっ。黒髪にしちまってよお。何だ？ ついに怖気づいたか  
？」

馬鹿だ。と、郁人は思う。神璽はやはり、女癖が悪いのでどうし  
ても軟派野郎だと思われてる節がある。

他のユニオンの幹部は皆恐れられているのに、神璽だけはああい  
う少し有名な賞金稼ぎにはなめられている感が強かった。

だが それは表向きでしかない。榛名神璽もまた結晶使い。本  
気になれば由加と同じくらい強いのだ。

神璽はゆつくりと立ち上がり、女の子を後ろに下がらせると獰猛  
に笑い、

「何だ？ 何だ？ モテない童貞ヤローの癖みかな？」

そう言い放つと同時に、賞金稼ぎ達は式神の力を発動。

見ていた他の賞金稼ぎも退屈していたのか、大きな野次や歓声を浴びせかけるようにして騒ぎ始める。

そして 勝負は一瞬だった、神璽の影から野太い腕が現れたかと思うと、一瞬にして賞金稼ぎ達を殴り飛ばした。

その威力たるや絶大。弾丸のように吹き飛び、壁にめり込む三人の賞金稼ぎ達。神璽はニヤニヤ笑いながら立ち上がると、

「今、どさくさに紛れて榛名死ねとか地獄に落ちろって言った奴いるよな？ 出てこいよ」

全員に緊張が走った。お前だろ。いや、お前だと小さく呟きあう声が郁人にも聞こえた。

神璽は虚空からゆっくりと闇色の拳銃を取り出すと、賞金稼ぎ達に向かって発砲。

破壊の意思が込められた弾丸は、調度品や壁を完膚なきまでに破壊し、後に残ったのは恐怖だけ。

次々と悲鳴を上げて逃げていく賞金稼ぎ達を「何だかなあ」といった目で見送ると、郁人は神璽の近くまで歩いていった。

「……で、何をやってるんですか？」

どうせ、ロクでもない答えが返ってくるんだろうと予想しながら郁人が問うと、意外な事に神璽が真面目な顔になった。

「今回狙われてる奴らってのはな 俺達、結晶使いについての研究を進めていた奴らなんだ。

もう、犯人はわかっている。だから、今度は先回りして待ち伏せしているってわけだよ」

「それって……報告にあった、六道紡の事ですね」

「ああ、俺と由加の大事な友達だよ」

「……で、何で女の子を口説く必要があるんですか？」

郁人がそう問うと、天井にあった換気口の蓋が落ちてきて、由加がひよっこりと顔を出した。

そのまま猫のように床へと飛び降りると、コツコツ靴を鳴らしてこちらへ歩いてくる。

「最終ロツクまで外してきたよ」

「ご苦労。郁人、俺は口説いてたんじゃない。そのフリをして、最終ロツクのパスを聞き出してたんだよ」

神璽はまともな口調で、郁人に抗議するように呟く。流石の郁人もこれには感服し、神璽に悪いな。

と思い、謝罪の言葉を口にしようとする。だが、由加がその前に神璽に近づき、ポケットに手を入れると一枚の紙を取り出した。

そこに書いてあったのは携帯のメールアドレスらしき文字と、電話番号。神璽の顔が硬直した。

「郁人。嘘つきは死ぬまで嘘つきだから。信用しちゃ駄目だよ」

冷たい表情でそう口にする由加。いつもなら、ここでぶん殴るか、地面に突き落とすかするのに

由加はそのまま、高嶺の部屋に続くドアの方まで歩いて行ってしまった。流石の神璽もこれは不味いと

思ったのか慌てて由加の後を追いかけて始める。

(由加さん……戦法を変えたな)

郁人は知っていた。榛名神璽が他の女の子にちょっかいを出すのは、無論生来の女好きというのもあるが。

由加に兎に角かまって欲しいからである。ああやっていつもヘラヘラしているように見えるが、由加が居ない時の神璽はいつもより大人しい。

逆に、由加が他の男と話したりしていると、こっそりと暗殺計画まで立てるのだから、もはや神璽は由加に骨抜きにされているのだろう。

それを認めたくなくて、神璽は他の女の子にちょっかいを出す。出会ってから十年近く。結構傍に居た郁人にはそれがわかっていた。そんな微笑ましい二人を見ると、ふと竜胆をずっと見ていない事を思い出した。何かあったのだろうか。

心配になった郁人は心中で声をかけるが、帰ってきたのはノイズ混じりの声。

(い……と。……居る！……何が！)

(竜胆？ おい、竜胆！)

何かが起きている。確か、竜胆が見回りをしていたのは最上階の方。郁人は神璽と由加の方を向き、

「神璽さん！ 由加さん！ 竜胆に何かあったみたいです。もしかしたら敵襲かもしれません。」

俺は上を見てきますから、お二人はこの守護をお願いします！」

二人の返事を聞かないまま廊下へと飛び出すと、郁人はありつた  
けの意思を込めてフラガラツハへと力を送った。

見る見るうちに巨大化していく剣。エレベーター前でボタンを連  
打して待つが、エレベーターはかなり下にある。

郁人は舌打ちすると、フラガラツハを頭上に掲げ、

「フラガラツハ・灼」

と声を出した。その声に反応し、フラガラツハの形態がどんどん  
変化していく。刀身は大きく広がり、

柄や唾の部分も大きく変化していき、刀身全体に反意思のエネル  
ギーが纏わりついた。

郁人は体勢を低くし、柄と唾のエネルギー放出口から爆発的な反  
意思を噴出させ、

壁を突き破りながら凄まじい速度で上階を目指す郁人。そして、  
二十枚ほどの壁をぶちやぶると、屋上へと辿り着いた。

「うわっ……」

屋上には何人もの賞金稼ぎ達が倒れていた。まるで、台風でも起  
きた後のような惨状である。

何人もの吹き飛ばされた男達が白目を剥いて泡を吹いていた。そ  
して、端の方にはフラフラと立っている竜胆の姿。

誰と戦っているのだろう　竜胆のすぐ傍に誰かが立っているの  
はわかるが、ここからではよく見えない。

「竜胆！」

郁人はフラガラツハを竜胆の眼前に居る敵目掛けて投げつけた。  
郁人の意思に呼応して、フラガラツハは加速し、敵を狙い打つ。

その間に郁人は駆け出し、竜胆の下へと辿り着くと、かなりのダメージを受けているようだった。

何回も吹き飛ばされたのだろう。服はボロボロの、体は擦り傷だらけ。それでも生きてはいるようだ。

「郁人……ごめん。この人、強すぎる」

竜胆がそう疲れたような顔で言うと、その体をそっと抱きかかえ、離れた場所に座らせてやる。

軽く頭を撫でてやり、郁人は竜胆を痛めつけた敵の方を憎悪を向けて睨み付けた。

相手は細身。だが、フラガラツハが噴射しているのにも関わらず、その刀身を片腕で受け止めて微笑んでいる。

その姿を見た瞬間　郁人の体に電撃が走ったような錯覚がした。まず、浮かんだのは何故　という疑問。

だが、その疑問を郁人が口にするよりも先に、”彼女”が喋りだした。

「これが、あの時のフラガラツハか。うん。素晴らしい魔具に進化したね。美しい輝きが見えるよ」

「アンタ……あの時の……」

「久しぶりだね、郁人。　ああ、自己紹介がまだだったか。初めて会ったのは十年前なのに笑っちゃうよね。

改めて名乗らせて貰うよ。私の名前は　七海遠音。あの念同の一族の、元長女さ」

「じゃあ……奏さんの」

「そう。姉だ。表向きは死んだ事にされてるがね。だが、こうやって生き延びているわけだよ。」

「そうそう、前に君がフラガラツハの事について十文字家に一回来たじゃないか。」

「あの時も、会って話したかったんだがね。フラガラツハから、私が生きてるのが広まってしまつたのを」

「恐れた戒が会わせてくれなかったんだよ。うん。そんなの気にしなくていいのにな。」

「十年ぶりに顔を合わせたけど、相変わらず喋るのが長い人だと思う。だが、今は敵だ。」

「こんな場所に襲撃に来る。そして、賞金稼ぎを倒している点から見て、遠音も神璽が言っていた通り、敵なのだろう。」

「遠音さん。貴女には感謝しています。貴女がくれたフラガラツハのお陰で、俺は今日まで生き延びてきました。」

「だから、手荒な真似はしたくありません。大人しく事情を話してくださいませんか？」

「ふむ……あの時の子供が随分成長したもんだ。お姉さん、不覚にもときめいてしまったよ。」

「ありがとうございます。……遠音さん。貴女もやはり、最近起きている十文字の事件の関係者なんですか？」

「そうだね。今日は紡の手伝いで来ただけなんだが。やはり、私は戒や雨竜や千里達と行動を共にしているよ。」

「君達ユニオンとは真つ向からぶつかるつもりだ。君達にも君達なりの正義があるのはわかる。」

「だが、私にはそんなのどうでもいい。世界で一番大切だった人を」

取り戻す。もう、それだけなんだ」

「じゃあ ユニオンの幹部として俺は、貴女を捕まえます。俺達の正義の為に」

「いいさ。恨みっこなしだよ郁人。嬉しいね。私の予言はやっぱり当たったわけだ！」

遠音は楽しそうに足を踏み鳴らした。それだけで、アスファルトがひび割れ、陥没してしまう。

郁人の背中に冷や汗が伝った。そうだった。フルを一撃で殺すほどの力の持ち主だったと認識を改めなおす。

そして、遠音が投げ返してきたフラガラツ八を構え、郁人は気合と共に遠音目掛けて斬りかかった。

## 第28話：不浄の剣（前書き）

評価欄で読みたい仰って頂いたので、死罪編と交互位でやっていこうかなど。

万里編は話のバランスが崩れそうなので、もしかしたら無くなるかもしれません。

というわけで次回投稿日はわかりません。

日曜日辺りを狙って投稿しようと思います。

## 第28話：不浄の剣

フラガラツハを構えて、遠音に突っ込む郁人。すると、後ろから竜胆が身体強化のコンセプトをかけてくれた。

郁人の体に紋様が纏わりつき、体がふっと軽くなる。遠音は大きく跳躍し、傍にあったアンテナへと飛び移った。

すぐさまそちらに体を向け、フラガラツハへと意思を送り込む。

一瞬の間の後、フラガラツハの柄と鍔から反意思の光が噴出した。

目にも留まらぬ速さで加速し、そのまま遠音へと刀身を突きつけるようにして飛翔。スピードと体重の乗った一撃を、

超動によって逸らす。だが、郁人は空中で体勢を立て直すと、再び加速して遠音へと突撃した。

タイミングからして避けられない。正面からフラガラツハの刃を迎え撃つも、流星の遠音も空中ではその威力に勝てなかった。

「くっ  
「！」

そのまま急降下していき、地面へと叩き付ける。が、感触が

無い。すぐにフラガラツハを構えなおし、舞い起こった粉塵の中から

繰り出された猛烈な蹴りを弾いていく。そして、一度大きく後ろへと跳躍し、

「フラガラツハ・緋澄」

そう口にするるとフラガラツハの形態が再び変わった。鎖の繋がった刃が三つに割れ、だらりと下に垂れ下がる。

大きく振り回して、未だ舞い起こる粉塵の中へと刃を閃かせる郁人。すぐにフラガラツハはその中に居た遠音を発見し、

殆ど自動的に遠音へと向かって刃を向かわせる。 次の瞬間、  
何かがぶつかる音と共に、刃の一本が空中を舞った。

だが、他の二本は遠音の体に巻きついたようだった。 勢い良く引  
つ張ると両腕に鎖が巻きついた遠音が飛び出してきた。 だが、余裕  
は失われていない。

「やるねえ」

鎖や空中移動を使って巧みに移動し、足だけでも郁人に攻撃しよ  
うと迫ってくる。 フラガラツハは使えない筈であった。

流石に不味いと思ったのか、フラガラツハに命じて束縛を解除さ  
せるも、そこはもう遠音の距離だった。

拳を握り締め、凄まじい勢いの突きが繰り出される。 身体強化さ  
れた体でも、視認が難しい程の早さだった。

無理に避けようとはせず、そのまま遠音に突っ込むようにして、  
郁人は近づき

( 竜胆っ！ )

( あいよお！ )

左腕を覆うようにして雷撃砲が出現し、同時に発砲。 だが、遠音  
は超動によって無理やり自分の体の方向を変えると、

何とか雷の砲撃を避けた。 その隙を利用して、郁人は鎖を解除し  
鴉を纏って上空へと飛翔。

「フラガラツハ・煉」

フラガラツハの刃が再び一つに戻り、今度は細身の剣へと変化し  
た。 それを空中で一振り。

周囲に蔓延する反意思を全て吸収し、剣先のみがスライド。その隙間から変換・増幅された反意思がエネルギーとなり遠音の居た屋上へと放射される。

一瞬の静寂の後、爆音。今回放った反意思は衝撃概念を命じたモノ。多分、死なないであろうが戦闘不能には陥るだろう。そんな事を考えながら、下を凝視していると、

「ふい〜。死ぬかと思ったよお。言われた通り、賞金稼ぎさん達は一階に移しておいたよお」

空中にGateの紋様が現れ、その中から竜胆が顔をだした。

「ご苦労様。体の方は大丈夫か？」

郁人の問いに竜胆は体の部分部分を見た後、

「うん。鎖骨とかイッたかもしれないけど……あの人、多分手加減してたよ。皆で一斉に飛び掛ったけど。」

あの人笑いながら、ぶっ飛ばしてた。本当に、手も足も出なかったよお……」

「確かに……強すぎるな」

七海遠音は今まで出会った中でも最強の敵だろう。あの、ガルムとの戦いから自分は強くなったという自負がある。

あれ以上の修羅場は潜ってきたし、鍛錬も積んできた。それでも遠音の攻撃を一撃避ける度に背筋が凍りそうになる。

今まで一撃もくらってないのが奇跡なぐらいだ。まだ数分しか戦っていないのに、体力がかなり減ってしまっていた。

多分、運命や蒼二と同じぐらい強い。精神的にも能力的にも。冷

静にそう分析していると、爆発で起きた煙や粉塵が晴れたようだった。

ゆっくりと、竜胆と一緒に降下し、屋上へと降り立つ。着弾した部分には大きく穴が開いており、流石に強すぎたかなと反省する郁人。だが

「いいね。良い攻撃だった。君の成長が一目でわかったよ。私がある時見つけた小さな輝きは、

今も尚色褪せる事無く、更に強い輝きを帯びるようになっていた。いやはや、感激だ」

「な……っ」

爆心地から軽く跳躍して再び遠音が眼前に現れた。服はボロボロで、ギリギリ見てはいけない所が隠されているといった風情。

だが、それよりも目を引く場所があった。それは露出した遠音の肘から下の部分や、膝から下の部分。

そこまでは綺麗な白い肌があるのに、そこからは明らかに人のもので無い黒い光沢を放つ腕と黒い足。

その視線に気づいたのか、遠音は少し顔を赤らめ。

「これが、私の式神だよ。十年以上前に両手両足を奪われてしまっ  
てね。この辺りは奏にでも聞いてくれ。

そこから私の人間の屑のような生活が始まり、”彼女”に救われ  
私はこんな式神を召還したってわけだ」

「それが……式神」

「私の体内に食い込み、腕と足の機能をただけでなく。圧倒的な身体  
能力まで授けてくれた最高の相棒さ。」

そして、これがもう一つの相棒　　ダインスレイヴ。君のフラガラツハと同じく、神話に出てくる刀剣を元にして作られた魔具だ」

遠音は、胸にかけていた剣のアクセサリーを外し、力を込めた。途端に剣が巨大化し、真つ黒の剣が遠音の手に握られる。

禍々しい形だ。蒼二の修羅雪よりも、凶悪さが前面に押し出されデザイン。刀身はかなり長い。

とても、嫌な感じがした。この世の負の感情を全て凝縮したようなそんな事を思ってしまうほどに凶悪。

そんなダインスレイヴを少し悲しげな顔で握りなおすと、遠音は一步前に出た。

「醜悪な外見だろう　　だが、”不浄”な私にはお似合いという事かな」

その言葉と共に一瞬で黒の斬撃が飛んできた。偶々その一撃は構えていたフラガラツハへと当たり、何とか事なきを得る。

ダインスレイヴの黒い刀身が一気に伸び、郁人へと迫ったのだ。この距離は不味い。そう判断した郁人は、

フラガラツハを通常形態に戻し、遠音へと走った。同時に遠音も動き出す。ダインスレイヴを鞭のように振るい、郁人に斬撃を叩きつけようとする。

だが、竜胆が後ろから放った雷撃砲によって刃は弾かれ、その隙をついて、郁人は遠音を切り伏せようとした。

「甘い」

弾かれたダインスレイヴの黒の刃は一瞬にして元に戻ると、遠音はそれを腰溜めに構え、ダインスレイヴを勢いよく突き出した。黒の刀身は一瞬小さく縮み、だが次の瞬間には何倍もの大きさと

なつて郁人を飲み込まんよと凄まじい勢いで噴出。

「フラガラツハ・囚！」

フラガラツハが再び変形。刀身に四つの穴が開き、そこから反意思が噴出し、質量ある巨大な刃となった。

この形態と遠音のダインスレイヴの力は同じなのだろう。郁人の白銀の刃と遠音の闇色の刃が拮抗し合う。

「郁人。君の輝きは　こんなモノなのかい？」

直後、刃が物凄い勢いで押し返され始めた。

「っ　！」

「この程度の輝きじゃ、私の不浄は浄化されない　もっとだ！  
もっと、もっと君の輝きで私を　っ！」

ついにダインスレイヴの黒の刃がフラガラツハを破った。そのまま圧力に吹き飛ばされるようにして壁に叩きつけられてしまう。

「郁人お！」

竜胆が助けを出そうとするが、黒の刃は途中から竜胆にまで牙を剥き始めた。その姿は、まさに荒れ狂う竜そのもの。

黒の刃は暴走を続け、更に力を増していく。周囲の物を切り裂き、押し潰し、被害を拡大させていった。

そして　郁人のフラガラツハも例外ではなかった。刀身から始まり、全体にヒビが入っていく。

それでも果敢に押し返そうとするも、全く動かない。

「……っ！ この剣は！」

灼也さん。

緋澄さん。

囚さん。

煉さん。

あの四人が自分を捨ててまで、この剣を作ってくれた。自分を救ってくれた。だから、こんな所で

と郁人は強く思うも、そこでついに約束の剣 フラガラツハが限界を迎えた。

半分ほどから粉々に砕け散り、郁人の手に残ったのは柄と後少しの部分。たった、それだけ。

何か、大切な物が砕け散ってしまったような気がした。自分の根底を成す強いモノが。

「輝きが、消えたか……」

遠音が一度刃を戻し、今度は更に力を高めた刃を振り下ろそうとする。直撃をくらったら確実に死ぬ。

そんな事だけが漫然とわかるも、体が動かない。竜胆が何かを叫んだが、よく聞こえない。

ふと、遠音と目が合った。とても悲しそうな顔をしている。勝てるのに。邪魔者を消せるのに。

だが、複雑な感情と決意があるような目で刃をそして振り下ろす。だが、その黒い刃は 竜胆を貫いた。

「え……」

刃が直撃する瞬間。竜胆が郁人を守るように前に飛び出してきた。

あつという間に腹部を貫かれる竜胆。

彼女の生暖かい血液が顔にかかった。

思考が上手く働かない。

更に奥の方から別の黒い刃が伸びてきて、

竜胆の手や足。あらゆる部分を貫いて、空中へと吊り上げる。またも、鮮血が飛び散った。

そして、竜胆の体が粒子化していく。式神が破壊された時と同じように。鬼神が死んだ時と同じように。

式神を破壊されたら、意識は消えてしまう。それでも、郁人は意識を寸前に心から叫んだ。

「うわあああああああああああああああああああああ」

恐怖。絶望。悲哀。その全てが込められた絶叫を他人事のように感じながら、郁人の意識は闇へと落ちていった。

郁人が突然声を上げて出て行ってしまった。一瞬判断に迷った神璽と由加だが、一度顔を見合わせると、

とりあえずは、高嶺に話すのが先決だと思い、神璽が最後のキーロックを外して、高嶺の部屋へと続くドアを開けた。

そこに広がっていたのは、恐ろしく不気味な部屋だった。機械か何かのコードは不気味に部屋の中に吊り下げられたり、

あるいは何か生き物のように隅の方に固まっている。真正面は五十を超えるモニターで埋めつくされていた。

そこには五十種類の違う映像が流れており、部屋の中はその音が氾濫し、気が狂いそうな程に響き渡っている。

しばらく様子を伺っていると、突然音が止まった。そして 部屋の最奥。そこに居住できるようなスペースがあり、そこにあるソファアールに座りながら、高嶺は神璽と由加を不機嫌そうに睨み付けている。

「……賞金稼ぎ風情が、何の用かね？」

「いやいや、俺達はアンタの研究の成果さ。今は、二人でユニオンの幹部やってるけどな」

神璽のヘラヘラした物言いを不快に思う事無く、男の顔がその一言によって輝いた。

先程までとは全然違う。おもちゃを与えられた子供のような表情。よたよたとソファアールから立ち上がり、

神璽と由加の目の前まで走ってくるまじまじとその姿を観察し、聞いてもいない事まで喋りだす。

「ああ、やっと会えた僕の成果達。六道継人が裏切ってからはずっと国に回されて手を出せなかった。

それでもやっと思つけた。いや、会いに来てくれたのか。ははは。どうだい？ その力は。素晴らしいだろう？

僕もなりたかった。でも、怖いじゃないか。どんな害があるかわからない。それで、君達で実験したのだが、どうやら成功みたいだね。

それで、君達は辿り着けたのかい？ 人間を超えた、僕達の理想の生き物に！」

何とも反吐がでる物言いに由加は露骨に顔を顰めた。神璽は相変

わらずの笑顔のまま高嶺の首へ手を伸ばすと。  
首を掴んで締め上げながら、笑ってはいるが憎悪の籠った瞳で高嶺を見据えると、

「一つだけ聞くぞ。実験やこんなモンを移植された事は今はどうでもいい。だがなあ。」

俺の家族をハメて、追い詰めて。姉ちゃんにあんな苦勞をさせた原因は、お前なのか？」

何年前かに由加と神璽は互いの家族の事を調べて、会いに行った事があつた。その際に、由加の母は普通に生きていて妹までも生まれていた。それでも、何とか和解し、一年に一回は会いに行ったりもしている関係だ。

だが、神璽は違う。神璽の家族はたった一人の姉以外全員自殺に追い込まれていた。

その事を全て知っている由加は神璽の気持ち痛い程わかる。眼前に居る男が、神璽や自分の人生を狂わせた男なのだ。

自分だったら殺してしまうかもしれない。だが、それではこれから止めようとしている紡と同じだ。

殺さずに、生かして償わせる。今の自分達にはそれしか考え付かない。

「あつ……がつ！ ……あ、あれは。僕の叔父が政敵への見せしめに……そのついでに君を……」

大体の事情がわかったのか。神璽はようやく高嶺の首を離すと、苛立たしげに壁を蹴る。

まだ咽ている高嶺に何か言おうとするも、上手く言葉が出てこない。苛立たしい。兎に角人を不快にさせる男だった。

「お前、反省しろよな。あの計画で泣いた人の為に、お前はこれから生きていけよな！」

そう吐き捨てるも。高嶺は疑問を投げかけるようにして神璽を見ている。本当に、何故そう言われたかがわかっていないようだった。すると

「ああ、勇一君。無駄だよ。彼みたいな根っからの科学者ってのはね、犠牲つてものを考えない。

自分の研究意欲。知識欲。それを満たすなら何でもやる人間なのだ。だから、無駄だよ」

入り口のほうから声が響いた。声の主はわかっている 神璽と

由加を昔の名前で呼ぶ人間は

もはやこの世で彼女だけなのかもしれない。案の上、振り向くとそこには六道紡が立っていた。

金色だった髪は元の黒髪に戻され、格好も大分女の子らしくなっていた。

「つーちゃん……」

「こんばんは。亜矢子ちゃん。勇一君。高嶺源一郎に、罰を与えに来たよ」

邪気の無い顔で紡はそう優しく微笑んだ。



## 第29話：ロキの言葉（前書き）

なんというのやら、執筆が全く進んでおりません。  
一週間に一話投稿のペースで行くと、連載期間が  
一年を超えてしまうので恐ろしい。

本格的な大量更新は例年通り夏休みに入ってからですかね！。

## 第29話：ロキの言葉

紡はそう微笑むと、颯爽と歩き出した。だが、その前には由加と神璽が進路を塞いでいる。

とても、悲しくなった。どうして友達同士で傷つけあわなければならぬのだろうか。

神璽と由加は命を奪う事を良しとしない。逆に、自分は命で償わさせる事しか考えられない。

この男の口一つで、百人以上の子供が殺された。一般常識でいえば、死刑になる事は確実であろう。

だが、こちらの世界にはその常識がない。殺すか。殺されるか。強いのは強者の意見だけなのだ。

「邪魔をするなら　この前言ったとおりに頼むよ」

反意思を腕に集中させ、紡は歩き出した。正直　少しだけ興味がある。自分のこのバジリスクと九尾の狐。どちらが強いのか。

自分も高嶺と同じ根っからの科学者だな。と自嘲気味に笑い、集中した反意思をゆっくりと体の中に流し込んでいく。

一方の神璽と由加は拳銃と斧とコートを出現させて向かってくる。やはり、二人の方が戦闘慣れしているのが一目でわかった。

「魔具か……」

神璽と由加は気づいていないかもしれないが、彼らが今使った力は十文字の魔具と同じもの。

反意思に命じて、現象を起こすのではなく。一つのモノとして形作るという力だ。

確かに、それが一番単純だろう。だが、単純故にその力は純粹に強い。それでも、それが全てじゃない。

状況によって様々な手段を講じる。単純だけでは、同じ力を持つ者には絶対に勝てないと紡は知っていた。

「うん。知ってるよ　それと似た斬撃」

由加の振り下ろした斧を、紡は反意思を指先に集中させて受け止めた。よくよく見てみると、紡の指先は鉄のような色に変わっている。

更に腕に反意思を送り込み、とある反意思の流れに調整してやる。筋繊維や細胞が反意思によって変質させられ、更に強い力を発揮できるようになった。

紡は完全に由加の攻撃を見切り、それを最低限の力でつき返す。

由加が今放った斬撃の筋は紡の頭の中にある

過去の六道から継承した経験から七人が由加と似た角度、威力で攻撃してきたのである。

それを知っている紡には、由加の斬撃をを返す事は造作も無い。

「由加！」

神璽が反意思の弾丸を紡に向かって発射した。だが、その瞬間。

紡は全身にくまなく反意思を張り巡らし、目の部分にだけ、やや強くかけた。

それは　緋眼という混血が体内にある反意思を操作した時と同じ現象。

緋眼使い達は意識はしてないだろうが、緋眼を使う時はこの動作を行っているのだ。

それが、紡の叔父が緋眼を一時期研究していたのと、紡自身の研究を合わせて導き出した緋眼という現象の答え。

一瞬で加速し、神璽の懐にまで潜り込むと、足に反意思を集中させて、腹に強化された蹴りをぶち込んだ。

一応、ガードはされたが神璽は大きく後ろに吹き飛んでいった。そして、それを見ていた由加が、

「何で……つーちゃんが緋眼を使えるの？」

呆然とそう口にする。流石に少し、意地悪がすぎたかと思い紡は曖昧な笑顔を作ると、

「亜矢子ちゃんも勇一君も知識さえあれば使えるよ。私は亜矢子ちゃんや勇一君みたいに

力も強くないし、戦闘技術も無い。でも、知識だけはあるの。貴女達は武力で、私は知力で。

たったそれだけの話。もう少し、反意思を使ってあげようよ。魔具だけじゃ、私には絶対に勝てないよ？」

「私たち、やっぱり魔具を使ってるんだね……」

「そうだね。まあ、でもこれにも限界があるんだよ。緋眼の”式”や令の”神憑”。

遠音ちゃんの”超動”みたいな強化された力は、流石に構成が難しいだろうし、わからないよ。

あれはもう才能だね。春と夏が言ったんだけど、これらの力を使うには、代償。もしくは、何か精神的な要素が必要らしい。

現に私も使えないしね。ああ、でも継承の強化された力は何故か使えるんだ。でも、それを応用してもやはり今のところ成功してないんだけどね」

淡々と語る紡の言葉の大半の意味はよくわからなかった。だが、

兎に角応用すれば自分達にも他の家の力が使えるという事。

だが、今は無理だ。元々由加は器用なタイプではない。神璽の方がよっぽど上手く反意思を使って色々なモノを作る。

今の自分にできるのは 力押ししかない。緋眼への対策は蒼二や遙緋と一緒に訓練した時に立ててある。それを使うしかない。

そう判断し、由加は斧を一度振り回し、油断無く構えた。

「つーちゃん……強くなったね。昔喧嘩した時は私が絶対勝ってたのに」

「まあね。亜矢子ちゃんは凶暴だったよ。勇一君だって泣かされた事あったじゃないか」

「う……」

ようやく吹き飛ばされた痛みから解放された神璽が顔を赤らめて押し黙った。三人で会話するのは楽しい、でも今は敵同士。

お互いに譲れないものがあるのだ。神璽も由加も紡もそれをわかっているから敢えて何も言わない。

再び戦闘が始まり、紡は着ていた黒のコートを翻しながら、神璽の放つ弾丸を避けた。

一撃一撃の威力が強い為に、次々と部屋の調度品が破壊されていく。高嶺がそれに悲鳴を上げるが、三人は全く気にしない。

「これは、知らないだろうか？」

体内で反意思を練り上げ、紡は光の矢を手中に収めた。様々な色に絶える事無く変化する光に意思を込め、もう片方の手には弓の形をした光。

弦に矢を引つ掛けるようにして、由加へと放つ。 早い。ギリ

ギリのタイミングで避けるも、その背後に光の矢がぶつかる。

直後、物凄い光が炸裂し、プラズマが部屋中に駆け巡る。高温のそのプラズマは

周囲のあったもの全てを焼き尽くし、部屋の惨状がさらに酷くなつた。

「これね。【極光】の天道って一族の力なんだ。過去に十文字と同格だったあの家ね。まあ、滅ぼされちゃった訳だけどさ。

私の継承に少し記憶が残っていてね。うん。その模倣でやってみたんだが、これじゃあ分家程度の威力だ。まだまだ本家には遠い」

紡は笑いながらも、次々と闇色の光や、様々な力を放ってくる。こっちは二人なのに、明らかに神璽と由加は押されていた。

自分達は紡よりも遥かに多くの死線を潜り抜けてきたであろう。だが、紡には六道の継承の力がある。

祖先のしてきた実験。経験。全てを受け継いでいるのだろう。確かに凄い力だが。

逆にそれはそれで辛い事だと由加は思った。今も紡は被験者達の声が離れないという。どれほどの重圧がそれによってかかっているのだろう。

自分だったら　と少し想像してみたが、それだけで嫌になつた。だが、それに紡は十年以上も耐えてきたのだ。救えるのは、自分達しかない。

「つーちゃん……!!」

「由加、行くぞ!」

神璽が前面に押し出て、紡の攻撃を反意思によって相殺していく。やはり、神璽は自分より器用だった。

その間に、由加は先程までとは違い。足に反意思を溜めるイメージをして、それを思いの現象へと変えた。

筋力が世界の流れに反して異常なまでに強化され、由加は弾丸のような速さで紡へと距離をつめた。

近くまで寄ってしまえばそこはもう由加の距離。いかに紡の力が強かろうと純粹な殴り合いでは、由加には絶対に勝てない。

「ごめん」と呟き、渾身の力を込めて拳を振る由加。だが

「それでも、私の勝ちだよ」

足元から突然鎖が伸びてきて、由加の体を強く戒めた。紡は攻撃しながらも、空いている方の手で魔具を生成していたのだった。

由加や神璽が勝つには自分に接近するしかない。それを見越して、動きに反応する魔具を作っておいた。

そして、由加が縛られて、一瞬神璽に隙が生まれる。紡はそれすらも予測していた。右手をかざして、極光の光を放つ。

致命的な反応の遅れ。だが、何とか防御の反意思の結界を作るも極光の力は凄まじかった。

プラズマに体を焼かれ、膨大な衝撃と共に壁へと叩きつけられる。そして、残ったのは静寂。

由加は両手両足を拘束されており、動けない。神璽はダメージが回復しきっていないのか、項垂れたまま動けないようだ。

「さて……」

紡はコツコツと靴を鳴らして、部屋の隅に居る高嶺の所へと歩いていく。高嶺は悲鳴を上げて後ずさりするも、もはや部屋に逃げ場はなかった。

「あ……！ ま、待ってくれよ。金ならやる。ほ、僕の研究成果

だって全部見せてあげるから」

「……その前に、何か言う事はないの？」

「へ……？ わからない。何だよ。何なんだよお前！」

取り乱し、ただ大声で怒鳴る高嶺を軽蔑した目で紡は見下ろすと、

「答えがわかったら、助けてあげる。子供でもわかる事だよ。最初の文字は”ご”だ」

「ご……。豪遊？ 一生遊んでくらせる程の金か？ それとも、ゴージャスか!？」

「……全員に聞いたんだけど。ついに、誰一人としてわからなかったね。」

正解はごめんなさい。悪い事したら、謝るのは当然でしょ」

そういつと、紡は笑い、優しく高嶺の頭の上に手を乗せた。

「つーちゃん！ 駄目！」

由加の体内から九尾の顔が現れて、拘束していた鎖を食いちぎった。一瞬で反意思を溜め、由加は全速力で紡の下へと走った。

「もう、遅いよ」

紡は高嶺に乗せていた手を離し、立ち上がると由加の体を止めた。慌てて高嶺の様子を伺うが、表情は特に変わっていない。

だが、次の瞬間。目を見開き、耳を塞ぐ様にして意味のわからない

い事をわめき始めた。唾を飛ばし、口汚く何かを罵り、高嶺は頭を地面に叩きつける。

おぞましい光景だった。確実に心が壊れている。由加は、紡の方を見て、

「つーちゃん。何をしたの!？」

「彼の記憶を全て奪い、代わりに彼がしてきた全ての実験の光景だけを頭に叩き込んでやった。」

今の彼はそうだね。ずっと、自分自身の罪と真正面から向きあっている。

これで、私の復讐は終わり。この後、奴がどうなるが知ったことじゃないよ。

奴だつて私達の心なんか知ったことじゃなかったんだからね!」

紡の瞳は怒りに染まっていた。全てを知らない自分は、何も言う事は出来なかった。

どうして。どうして。と行き場の無い感情だけが体の中に溜まっていく。

紡が悪いのか。高嶺が悪いのか。頭の中がごちゃごちゃになり、由加の頭はどうかかなりそうだった。

そんな由加の感情に気づいたのか、紡は悲しそうな顔で笑い。

「亜矢子ちゃん。罪には、罰なんだ。これは、当然の結果だと私は思っているよ。」

法では裁けない悪を野放しにしている、どうするんだい。この男がこのままなら、いつかまた同じ実験を繰り返すよ。

なんとたつて、人の命を道具とと思っているんだからね。その行為は、人として万死に値する」

「それでも……こんなものって……私だって殺したいよ。でも、そんな簡単に命を奪っていいの？」

「こんな事をするなら、私達だって、コイツと同じじゃない！」

「じゃあ……亜矢子ちゃんは泣き寝入りするの？ この男の所為で、何人が死んだと思ってるの!？」

高嶺は頭から血を流しながら絶命していた。気が狂って自分を傷つけてしまったのだろう。失血死のようだった。

「……………」

「割り切れないのが正常さ。君みたいな正義感の強い子は尚更だ。この問題に万人の答えはない。」

「亜矢子ちゃんは亜矢子ちゃんの意味で、私は私の意志で行った。止められなかった、亜矢子ちゃんの負けだよ」

「九年前に戦ったロキの滅ぼしたいという気持ちが少しだけわかった気がした。」

「自分達がユニオンで幾ら頑張っても、こういう腐った人間は世界に溢れている。」

「どれだけ司法が発達しようが、社会が変わろうが、人間には救えない者が多い。だからこそ、ロキはやり直そうと決意したのだろう。由加がどれだけ救おうとしても、こうやって世界は進む。ロキもきつと、この葛藤に悩まされたのだろう。」

「人は、救えない。ロキの言葉が胸に突き刺さって離れない。」

「これで、私の復讐は終わり。やっと……私が建てた犠牲者達の慰霊碑に顔向けが出来るよ」

「建てたんだ……」

「この根本は六道が悪いからね。六道特区のあの研究所の入り口に立てさせたよ。時間があつたら、行ってみてくれ」

「うん。……つーちゃん。これからどうするの?」

「残念ながら、まだ敵だ。これから、私は私の意志で　この計画に協力してくれた友達のために動く。」

「……友達として忠告しておくよ。すぐにユニオンは私達が攻めてきたら降伏して欲しい。」

「私達だって無闇に傷つけたいわけじゃないんだ。結晶とコアさえ渡して貰えれば、すぐに引き上げる」

「理由によるよ。つーちゃん達、何をしようとしているの!?!」

由加は正面から紡を睨み付けた。紡は由加はやや距離を取ると、

「人間なら誰しも願う、当たり前前の事だよ。でも、それは世界の常識ルの所為で、出来ないんだ」

「その為に反意思を使うんだ……」

「うん。私達は　過去を変える。あの時を、無かった事にしてやるんだ」

過去を変える　。それは、確かに誰しも願う事だった。由加だつて変えたい過去がある。

母親に捨てられた過去さえなければ、今の自分は此処に無い。神璽とも紡とも出会ってない。

いきなり紡が言い出した途方もない巨大な目的に、由加は言葉を  
出せないで居た。

すると、轟音が鳴り響き、部屋の入り口にあった瓦礫が破壊され、  
一人の女性が歩いてきた。

そして、その肩には傷だらけの郁人が担ぎ上げられている。

「郁人！」

女 七海遠音が郁人を優しく放り投げる。だが、そのままふわ  
ふわと浮かびながら郁人の体は由加の所まで辿り着いた。

慌てて受け取り、生きているかどうかを確かめる。とりあえず、  
呼吸はしていたし、傷口もそこまで酷くは無い。

ただ、顔に涙の後があった。まだ目の辺りが濡れている。

「郁人に伝えておいて。 私は、悪意をもって君の式神を破壊し  
たってね」

その後、砕け散ってほぼ原型を留めていないフラガラツハを遠  
音は放ると、背を向けてエレベーターの方に歩き出した。

紡もそれに続くようにして、歩き出す。そして、部屋を出る直前  
に再び振り向くと。

「絶交したいなら、してもいい。もう、私は何もいわない。……で  
も私は止まらないから」

そういうと今度は振り返らずに出て行ってしまった。



第30話：あの日、上泉町で（前書き）

うーむ。

次回辺りからPASTの核心に入っていきます。

ああ、ファーストコンタクトも書かなきゃ……

死ぬほど忙しいのに、運命のDaysをこっそり書いている  
僕はバカなのでしょうかね。

### 第30話：あの日、上泉町で

千島蒼二と四条遥緋はかれこれ四日程、テレビの前に居座っていた。二人の周囲には、「上泉町」と書かれた大量のCD。

その反対側には「反逆の十文字事件」と書かれた報告書に加え、様々な食べ物や飲み物のゴミも散乱していた。

綺麗好きの郁人がこの共有オフィスの惨状を見たら、泣いてしまおうだろう。だが、その郁人は今、廃人寸前だった。

高嶺源一郎の護衛について、相手の七海遠音に竜胆とフラガラッハを破壊された郁人は、塞ぎこんでしまい何一つ喋ろうとしない。蒼二を始め、何人もが見舞いに行ったが、ついに郁人が口を開く事は無かった。完全に心が壊れてしまったようで、反応すら殆どしない。

「郁人君には……やっぱり、重荷だったのかな」

「……わからん。フラガラッハの起動時にあいつらとした約束か。だが、その剣が壊されて。」

更には竜胆まで破壊されちまったんだからな。相当堪えたんだと思う」

「竜胆ちゃん。大丈夫かなあ」

「聞いた話によると、同じ式神だから大丈夫だそうだ。研究部の奴の親父がやっぱり、竜胆と同じような式神を持っていたらしい。」

だから、大丈夫だとは思うんだが。最後は郁人の心の持ちようだよ。俺達には見守る事しかできねえ」

組織の長としても、友達としても郁人に何もしてやれない自分にイラついたのか、蒼二は再び仕事を始めた。

暇そうだった遥緋を拉致って、このCDに目を通し始めてから四日。上泉町という反逆の十文字事件の起きた町で残っていた監視カメラの記録を

二人は片っ端からチェックしていた。それと、部下に調べさせていた反逆の十文字事件の情報を集めて二人で話し合いを進めていく。

「あの日の昼時か。悪鬼が発見されたって報告が近所の警察署を通じて、近くにあつた倉本家とその討伐の任を与えられた。

その倉本の最後の記録が十四時頃、反逆の十文字事件が起きたのがその三十分後。

上泉町に巨大な結界が張られた瞬間に、炎や雷が周囲を破壊し。上泉町の駅周辺の全区画が焼け野原となっちゃったんだよね。

私も当時、時雨ちゃんから教えて貰ってびっくりしたよ」

「俺だってびっくりしたさ。一之瀬特区に居たんだが、どいつもこいつも大騒ぎだったぜ。

しかもやったのが、最強の十文字。十名家ももう終わりかなーって罪歌もボヤいてたわ」

「あ、罪歌さん。無事出産したって。正宗さんが気持ち悪いぐらいニコニコしてたよ」

「時雨もお兄ちゃんですよー。とか気持ち悪いイメトレやってたな……。話が逸れた。続けよう」

「うん。だから、その間に何かがあつて、その希さんって人が消えちゃったんだよね。

希さんの写真は今、莉王さんが確かあつた気がするとか言って探

してるからもう少し待ってね。

後は……由加ちゃんが六道さんから聞いた、過去を変える。これは、間違いなく反逆の十文字事件を

無かった事にするって解釈でいいのかな？」

「そう考えるのが妥当だろうよ。この日、悪鬼が発見されて倉本家が出て行った。

その後、何かあって律の言っていた希って女が消えてしまった。それが引き金となって、十文字が暴れだして、

反逆の十文字事件が発生したと。この流れであつてと思うんだ」

そこまでで何時も詰まってしまう。何か決定的な要素が足りないのだ。

莉王が希の写真を見つけてくれれば、監視カメラからその姿を探し出せばいい。

そのまま二人で相変わらず量の減らない監視カメラの映像を見る事二時間。

新しく配達されたピザを食べながら蒼二と遥緋が画面を見つめてみると、

「見つけたぞオ！」

部屋の扉が式神によってぶち破られ、莉王が大汗をかきながら部屋に入ってきた。

相当急いでいたのだろう。上着をあっという間に脱ぎ捨て、疲れたように蒼二の傍まで来ると、

「過去のパーティで戒と希と撮った写真があつた。見てみる」

莉王は二人の前に写真を差し出した。そこには若い頃の莉王と戒。

そして右端には綺麗な笑顔の女の子が写っていた。

顔は別に至って普通。だが、その笑顔には一切の邪気が無い。ただ、純粋な感情から現れた笑顔。

綺麗だ　と思わず蒼二も遥緋も唸ってしまうほどの女の子。しばらくそれを見てみると、遥緋が思い出したように、

「あっ」

と声を上げた。そのまま見終わったCDの山をしばらくゴソゴソと漁り、一枚のCDを再生し始めた。

しばらく再生した所で、その再生を止める。遥緋が「ここ見て」と指差すと、そこには確かに希が映っていた。

監視カメラの映像時刻は13時30分。丁度反逆の十文字事件の一時前前の映像だった。

「子供……?」

画面によくよく目をやると、希はベビーカーをひいている様だった。

「お兄ちゃん。この人、駅前交差点の方に向かってるね」

「ああ、確か……………この辺に」

四日も映像を見てきた所為か、二人の頭の中には完璧に上泉町の地図が作られていた。

すぐさま未視聴のCDの山から、駅前交差点のCDを出すと、再生を希が目撃された時刻へと合わせる。

その時刻には、事故現場が映っていた。巨大なトラックが横転し、周囲に野次馬がひしめき合っている。

その所為でよく周囲の状況が見えない。やがて、倉本が来たのか監視カメラの映像が途切れた。

黒くなってしまった画面を蒼二と遥緋が呆然と眺めていると、莉王が口を開く。

「ふむ。妙な話だな」

「何がだ？」

「只の事故なのに、何故情報規制をする必要がある。しかも、あのトラックの損傷は異常すぎる。

何か大きな力で前面から殴られたみたいだな。後、そこから三十秒前にまき戻して。

右端の巨乳の女の足元を見ている。隙間にベビーカーらしきモノが見える。色も見てみる。希がひいていたのと同じ色だ」

その言葉に慌てて蒼二と遥緋が巻き戻してチェックしてみると、莉王の言った通りだった。

ベビーカーが確かにそこに倒れている。流石の蒼二と遥緋もそれには感嘆してしまう。

よく、こんなモノをあの一瞬で見つけられたな、と。そこまで考えて、遥緋は一つ嫌な予感を覚えた。

「莉王さん……」

「む。何だ？」

「何で、ベビーカーに気づいたの？」

「い、いや。それは……偶々」

「しかも今、巨乳の女って言ったよね。わざわざ。……何？ もしかして、この女に見とれてたってわけ！」

莉王がしまった！という顔になると、遥緋がポケットから棒を再生させたのはほぼ同時だった。

蒼二はどうでもいいのか、何時もの事だとわかっているのか、暴れまわる二人を無視しながら思考を繋げていく。

すると、一つの仮説がたった。アホらしい。馬鹿らしい。と思うも、蒼二は写真を近くにあった機材にセットすると写真をパソコンに取り込んだ。

その写真をユニオンの情報課へと送る。しかも、最重要と名目付けて。

この年代の「のぞみ」という名前の少女の情報をあらゆる機関の情報網から探させる。

ユニオンの情報部は八神と浅葱の精鋭が行っているのです、その正確さと速さは日本一といっても過言ではない。

「あり得ないよな……」

そのまま、莉王の悲鳴が聞こえなくなり、二人がグチグチと問答を続けて、ようやく仲直りするのに四時間。

その間蒼二はずっと押し黙り、パソコンの前で調査の結果が届くのを待った。そして、二人が今晚何食べたい？

等という事を相談し始めた後、ようやく結果が届いた。それと同じに、四条家の夜の献立も決まったようである。

「じゃあ、今日は皆で外食にしようか。あ、お兄ちゃんちも来るー？」

「うむ。俺も久しぶりに蒼華や灼汰と会いたいな」

「……悪いが、まだ帰れなさそうだ。無論、お前等もだがな」

あらゆる機関。あらゆるデータベース。十代中盤辺りの全ての「のぞみ」という女性の顔写真と素性を調べた結果。

この顔で、「のぞみ」という名前の少女は該当しないという結果となったらしい。すなわち、この世には存在しない人間。

そして、今までの情報を繋ぎ合わせて行くと、蒼二が最初に考えた有り得ない仮説が立ってしまう。

でもまだそれは確定ではない。慎重に、更に深く調べていく必要がある。そんな事を考えていると、

破壊されたドアの破片を蹴散らすようにして、運命が部屋に入ってきた。

「蒼二。反逆の十文字事件で、また一つ新しい事実が出た。あの事件の生き残りを見つけて、

色々証言して貰った結果。変な事を言い出したの。子供を殺そうとした化け物に皆が石をぶつけたって。

……蒼二？ 何か変なモノ食べたの？ 凄く、変な顔をしているよ。いつもだけど」

運命のその言葉を聞いた瞬間 蒼二の仮説は真実となった。

夕方の駅で、海原靖は緊張に震えていた。此処まで来るのに、色々あった。

あの情報屋から反逆の十文字事件の全てを聞いた。それは、とても悲しい事件だった。

事件を起こした側にも、海原のようなあの事件で遺族を殺された者にも。尊敬する兄とその兄嫁と姪はあの日仕事の都合で上泉町に居たのだった。

兄と兄嫁の死体は見つかったのだが、姪の死体だけは今でも見つかっていない。それでも、やっと父や母の墓前にも報告が出来た。

あの事件の真実を、墓前で全て伝えた。その結果、靖の心は救われ、後はあの情報屋との約束を果たすだけ。

だが、予想もしない事が起きた。何の因果かわからないが、賞金稼ぎの組合の大手の一つ” 鍋木” までもがその約束の少女を探していたのだ。

誘拐され、式神によって反逆の十文字事件と少女の全てを吐かされ、ようやく手間賃と共に解放されたわけである。

だが、靖とてただの一般人ではない。何とか式神に抗い、幾つかの嘘も混ぜて全てを話した。これで、少しは時間を稼げる筈。

「ふう……」

今居る駅のベンチに腰掛け、とりあえずは休憩。あのような野蛮な賞金稼ぎの連中にあんな幼い少女を引き渡すわけには行かない。

この町に居る事は確かだった。金に糸目をつけずに、全ての人脈を使った結果。写真の少女をこの町で見かけたという人間を見つけたのである。

場所も大体わかった。後は 自分の足で彼らよりも先に少女を

見つけ、あの情報屋の女に報告をするだけだ。

それで、靖の中で反逆の十文字事件は終わる。無論、十文字に復讐はしたい。だが、勝てる筈が無い。

それもあつたが、靖はどうしても十文字の気持ちを汲んでしまうのであつた。彼が行つた行為はただの八つ当たりだ。

それでも、女から聞いた事実から考えると、仕方の無い事のように思えてしまう。きっと、彼は全てが憎かつたのだらうと、そんな事を思った。

(そろそろ行くか……)

体力も大分回復した。夜までには何とか手がかりを見つけた。そんな思いで、靖が立ち上がると、

突然腕が掴まれた。慌てて振り向くと、そこにはついさっき別れたばかりの賞金稼ぎ達。

振り向き様に一発顔を殴られ、残りの賞金稼ぎ達が通行人に見えないように体でそれを隠す。

「やっぱり、嘘だったか。そう簡単に、式神を騙せると思うんじゃないぞ。おい」

「う……あ」

「今度こそ真実を話せよ。また少しでも反応がありゃ、お前の家族だつてただじゃすまさねえぞ」

背筋が凍りついていく感覚。仕事一筋だつた靖に愛想を尽かし、別居状態にある妻と娘の事を思い出してしまった。

兄や兄嫁や姪。父も母も失っている靖にとっては、彼女達が最後の家族だつた。もう、失いたくない。

そして靖は渋々とだが、妻と娘の安全を約束させ、彼らと共に少女が居るらしき場所へと向かった。

その場所は　この地域一帯を支配するヤクザ。鬼塚組の屋敷。

「なあ、こんな手荒な事していいのか？　巡さんに下手したら殺されちまうぜ」

「俺達の雇い主はあんなガキじゃねえだろ。お嬢を始めとした幹部の方達だ」

「でも、巡はお嬢のお気に入りだぜ」

「お嬢だって鎧木の全権を持っているわけじゃねーさ。ま、俺ら下っ端が考えても始まらねえよ」

「そうだな。相手はただのヤクザみてーだし。適当に暴れて、さっさと四条特区に帰らせてえもんだ」

男達が笑いながら話すのを尻目に、靖はただ事が穏便に過ぎるのを祈るだけだった。

最近、ミキに元気が無い。小太郎と人の死について話してからというもの、ずっと一人で考え込んでいる事が多かった。

光希が話しかければ、相手もしてくるし、何時も通りに遊んでもくれる。だが、一人だけになっていると、ずっと沈んでいる。

光希にはそれが寂しくてしょうがなかった。自分はミキに色々教えて貰った。宿題もやって貰ったし、ゲームのコツだって教えて貰ったし、

光希が悪い事をすれば、何時も真剣に叱ってくれた。そんなミキに対して、光希が出来る事は何も無い。

仕方が無いので、大人の知恵を借りようと遙と二郎に相談する事にした。三人は二郎の私室のコタツに座りさつきからあーでもない、こーでもない議論が続けている。

「ミキちゃんはホームシックなのかな？ ほら、兄さんの所に居て、今度は此処でしょ。ご両親が恋しくなっただんじやないのかしら」

「私もそうだと思いますが、ミキちゃんは自分の事を滅多に話しませんからね。

ですから、何か家庭に問題があったりしましたら、余計に彼女の心を傷つけてしまう結果になってしまふのではないでしょうか」

「そうだよねえ……ラーメンなんてどう？ ミキちゃん、あの日はテンション高かったよね」

「うーん……食べ物で釣るってのも……」

「気晴らしに何処かへ連れてって差し上げたいのですが、今週は桜祭りの準備に追われてまして……」

つまりは手詰まりだった。時期が時期というものもあるのだろう。

鬼塚組は今、来月に行われる桜祭りの準備に忙しかった。

この地域で一番大きな規模のイベントだ。当然、鬼塚が自治体と話し合いをしながら、毎年盛り上げていくのが定例となっている。

一年で鬼塚組が一番忙しい時期だ。現に今だって二郎に無理を言っただけで相談にのっけてもらっている。

すると、二郎の私室の内線が鳴り、二人の「失礼」と言う電話を取って何かを話し始めた。

二郎の顔が時間が経つ毎に険しくなっていく。そして次の瞬間轟音が鳴り響いた。

「な、何？」

「事故でもあったのかな？」

「っ！」

二郎が慌てて部屋の窓を開けると、そこから見える屋敷の一部が破壊されていた。外では、組員達が何やら怒鳴り声を上げている。

「奥様、光希様。私についてきてください。多分、敵襲です」

遙と光希は無言で立ち上がった。そして、光希は結界が張られる感覚を感じ取った。式神使いだけにわかるその感覚。

遙は気づいては居ないが、大体の事情は知っている。もしも時は、父や兄や姉に教えられた通りに、母を守らなければいけない。

三人が急いで廊下の方に走って行くと、庭では何人もの組員が気絶させられていた。そして、その奥では今でも木刀や、鉄パイプを持った

二郎の舎弟達がどうみても堅気ではない男達を抑えようとしている。

「あ……」

二郎は言葉を失った。自分が築いてきた全てが、壊されていく。眼前で笑う男達によって。

怒りが一瞬で体を支配し、男達は血祭りに上げてやるごとく一瞬で懐にあつた短刀を抜き出し、男達へと迫ろうとするも、

「二郎！ 千鳥様とミキさんを連れて逃げろ！」

庭の一角に倒れていた小太郎が、普段からは感じられない気迫で二郎を怒鳴りつけた。

それによって二郎は我に帰り、悔しそうに唇を噛むと、振り返って光希の手を引き、ミキを探した。

「……ごめんなさい……ごめんなさい……」

ミキはすぐに見つかった。自分達が居た廊下の反対側で蹲り涙を流しながら、ひたすら謝っていた。

だが、今は事情を問いただしている暇は無い。二郎は慌てて駆け寄り優しくミキの手を握ると、

「奥様、走れますか？」

「うん。これでも結構こういうの慣れてるんですよ」

遙はそう頷くと、二郎の速さについてくる。正直、ここまでのスピードは期待してなかった。

これなら逃げられるかもしれない。そして、安全な場所に三人を移したら、すぐさまあの男達を血祭りに上げる。

チラリと後ろを振り返ると、男たちは顔を赤くして追いかけてきた。この距離なら逃げ切れるだろう。

門から出て、近所にある避難場所の所まで行けば完璧だ。だが

「逃がすかよオ！」

後ろに居た男の一人が腕から炎を出して、二郎達を狙う。話には聞いていたが アレが式神。

小太郎も式神を使えるらしい。だが、二郎には決して使わせようとしなかった力。

何故か、二郎には大した力のように思えない。簡単にかわしていく。だが、それが致命的だった。

二郎は避けられても、遙は避けられない。それを失念してしまった為か、遥に向かつて回避不可能であろう速さで炎が向かってきた。

咄嗟にかばおうとするが、ミキと光希の手を握っているので、上手く動けない。そして

「お母さん！」

光希が二郎の手を振り解き、遙の体を思い切り突き飛ばした。そして、炎が光希の体を包む。

「み、光希!？」

慌てて立ち止まり、遙と二郎とミキで光希の服を引きちぎってどうにか炎を離そうとした。

幸い燃えたのは上半身の服だけ。そして、光希の露になった上半身を見た瞬間。

二郎の中で何かが悲鳴を上げた。とても、何か大切な物が自分の中で叫んでいる。そんな感覚。

破壊衝動が体を埋め尽くし、二郎はゆっくりと立ち上がる、とかけていたサングラスを放り、追いついてきた男達を睨み付ける。

「……………」

怒りで言葉すら出てこない。その怒りは渦巻き、やがて懐かしい感覚が体を埋め尽くしていった。

そして、背後で何か地面に刺さる音が聞こえた。その音に釣られるようにして二郎が振り向くと、そこには

### 第31話：紅蓮、再び（前書き）

今回は二つの謎が解けると思っています。

片方は、神々の黄昏途中から考えていたネタです。

もう片方は紡のDaysに半分答えが出ていたので、わかってらっしゃった方も多いのではないのでしょうか。

今回で話が一応一段落つくと思うので。

しばらくPASTの投稿を控えようと思います。

正直、バイトが忙しくて書く余裕がないんですよ…

### 第31話：紅蓮、再び

二郎が振り向くと、そこには　一振りの日本刀が地面に刺さっていた。酷く、懐かしい感覚が実感を帯びる。

頭の中が焼けそうな位に熱い。何か良くわからない思い出が溢れかえってくる。

その中を狼、竜、鬼、様々な化け物が頭の中を通り過ぎていった。嫌気はしない。むしろ愛情すら感じる。そのまま、ゆっくりと歩いて日本刀の近くまで歩いて行くと、遥とミキと目があった。

遥は心配そうな顔で自分を見ている。ミキは泣きながら光希の手を握って謝っていた。光希は気絶しているようだった。

光希の胸の辺りには一つの首飾りが下げられている。古めかしい、よくわからない首飾りだ。

その首飾りが何なのかも、どういう意味をもつかもわからないまま、二郎は自然と口にしていった。

「光希君が……新しい……」

何故そんな事を口にしたのかはわからない。そして、目を再び日本刀へ向け、その柄に手を置く。

その瞬間、頭の中に電撃が走ったような感覚がした。攻めて着た男達は、

二郎の異様な気配に押されて攻撃をする事が出来ないでいる。そして　二郎は何故、自分が此処に居るのかを思い出した。

藍。起きて。

兄貴ィ。もつくたばったんじゃね？

この男が？ 冗談キツイよ瞬兄ィ。

瓦礫に埋もれていた千鳥藍は、語りかけてくる声によって目を覚ました。もう、体動かない筈なのに何故か動く。目を開けて見て見ると、反意思の黒い塊が三つ。自分の体を修復するようにして、覆いかぶさっていた。

「お前達……」

お、兄貴。生きてた生きてた。

やっぱりねー。

おや、おはよう。藍。

何をしているんだ、この三兄弟は。と思うも、答えは一つ。反意思の塊となっていた三人は、藍の体を修復するために己の存在を削っていた。

「何で、俺を助けようか……」

なに、恩返しだよ。お前には、百年前に命を助けて貰ったからな。

あの四人に触発されて、俺らも最期くらい良い事してみようって感じだな。

感謝しろよー。この命粗末にしたら地獄でぶっ殺すからなー！

そう言うと、三人は完全に藍の体に潜り込み、今度こそ消えてしまふ。その代償に、傷つけられた体の半分以上が修復されている。

修復が中途半端なのか。あちこちに傷跡が残ってしまった。だが、それでも良い。まだ、生きている。

此処でラグナロクの夢と共に、散ろうと思っていたが、思わぬ事で生き延びてしまった。

流石に存在を犠牲にして助けられてしまったのは、もはや死ぬ気になれない。

「ありがとう。刹那、瞬、彼方。そしてごめん　ロキ、ガルム、ラグナロクの皆」

藍の目から一滴の名前が零れた。ゆっくりと立ち上がり、ゆっくりと倒壊していくユグドラシルの中を歩いていく。

兎に角、この塔から脱出しなければならぬ。だが、壁を殴って破壊するほどの力までは残っていなかった。

階段を下りて下へと向かって行くと、何かが大量に爆発したような部屋へと辿り着いた。

その最奥には蹲って座っているガルムの姿。藍がゆっくりと近づいて行くと、ガルムは満足そうな顔で絶命していた。

腹に大穴が開いているが、その顔に全くの後悔は感じられない。

藍は、ガルムを抱き上げ、その下にあった彼の研究室へと向かった。

ユグドラシルの内部に作れ作れと滅多に意見をしないガルムが騒ぎ立てて作った部屋。

そのベッドに寝かしてやると、藍は部屋を出て階段を更に下りていく。

式神を召還するわけにはいかない。ここに顕現させてしまえば、蒼一と遥緋の身に危険が及ぶだろう。

「手詰まりか……」

ついにユグドラシルが倒壊したようだった。体が一瞬浮き上がり、部屋の天井へと叩きつけられる。

すると、すぐに海水が流れ込み、ユグドラシルを侵食していく。沈む方向とは逆に、藍は走る。

そして　行き止まりだった。倒壊した瓦礫が部屋を埋め尽くし、脱出口を完全に塞いでしまっていた。

流石の鬼神でも呼吸をしなければ死んでしまう。海水がここを埋め尽くしても、二十分持てば良い方だろう。

「クソッ！」

折角助けて貰った命もこんな所で消えてしまうのだろうか。そんなのは嫌だった。

藍は様々な人の命を背負って、今此処に生きている。こんな事で、粗末に捨てたくは無い。

壁を全力で殴り、少しずつ破壊して行くも、海水はすぐそこまで迫っていた。

そして、ついに爆発的な海水が部屋に一瞬で流れ込み、藍の体も水の勢いに押し流されてしまう。

(ここまでか……)

傷口が海水に染みるのよりも、助からない。その事実の方が余計に傷ついてしまう。

蒼二や遥緋の作る世界を見てみたかった。自分のような鬼神を救ってみたかった。

ラグナロクとは違うやり方で。殺すのではなく、生かす方法で生きてみたかった。

だが、それももう叶わない。神様はやっぱり全てを見ている、と自嘲気味に藍が笑っていると

「…………？」

何かが海水を切り裂いて飛んでくる。それは、光り輝く純白の羽。何時も隣に居た男の羽。

海水を消去しながらその羽は降り注ぐようにして、瓦礫に触れるとその存在を消去し始めた。

(ロキ…………？)

更に巨大な何かが全てを消去しながらこちらへと流れてくる感覚がした。

そして、巨大な瓦礫の一つが漂う藍の体を直撃し、瓦礫の壁へと叩きつける。

猛烈な痛みが走り、骨の何本かが折れた。だが、羽によって存在の幾つかが消去されていた瓦礫の壁は、

そのまま崩れ落ち、海水と共に藍の体を流していく。余りの痛みに意識が飛び、どれくらいの間が過ぎたのだろうか。

ようやく意識をはっきりさせた時には、藍は一人海岸に立っていた。

そして 記憶をなくした藍は二郎になった。千島藍とは違う生き方。生かす生き方をする鬼塚二郎へと

「 思い出した」

二郎　千島藍は、懐かしい式神を強く握り締める。九年ぶりの召還にも関わらず、相変わらずの力を保ち続けていた。

全てを思い出すのは、呆気ないものだった。それでも、生きていて良かったと思える。鬼塚二郎として過ごして来た日々も、悔いは無い。だから

「また、よろしく頼むぜ」

藍の体から紋様が出現し、式神へと優しく触れる。紋様によって装飾され、形が変わり、

刀身は日本刀ながらも装飾は西洋系の式神　レヴァティーンへ。その圧倒的な気配に、賞金稼ぎ達は戦慄を覚えた。どう考えても、勝ち目が無い。それ程までの差がある。

藍が一步踏み出す度に、賞金稼ぎ達は怯え、やがてその恐怖が限界に迫ったのか、一目散に來た道を戻って逃げていく。

それでも、藍は全く余裕を崩さない。後ろを向いて、遥と光希とミキの方を向くと、

「奥様。お久しぶりです。記憶が戻ってみれば、”俺”は光希君がお腹の中に居た頃に会っていたんですね。

あの時貴女が言っていた、「できますよ。」その答え、確かに拝見させていただきました」

「……まさか、あの時の男の子って、二郎さん？」

「はい。お久しぶりです」

そう挨拶をすると、今度はミキの方を向き、

「ミキちゃん。何があったのかは知らないけど、後で全部話してく

れるかな？ 怒らないからさ」

「……はい。全部話します」

ミキはまだ泣いたままだった。あの男達と何か関係があるのだから。小太郎もミキを連れて逃げろと言っていた。

遙達から目を背けると、再び怒りが渦巻いてきた。あの男達は”二郎”の築いてきた全てを破壊しようとした。

やっと手に入れた家族を傷つけ、やっと生まれた新しい可能性を危うく殺しかけた。その行為は万死に値する。

藍はゆっくりと息を吐き、久しぶりに緋眼を発動。そして再び大きく息を吸い、大地を踏みしめ、駆け出した。

凄まじい速度で逃げていく男達とどんどん距離を詰めていく藍。

やがて、そのうちの一人が、鬼塚の舎弟の一人を人質に取り、

「く、来るなあ！ 来たらコイツを」

藍は、体を狂化状態にまで変化させ、更に速度を上げて一瞬で男を殴り飛ばした。それだけで、顔が変な方向に曲がり、

空中で回転して地面へと叩きつけられる。別に、狂化をしないで倒せたのではあるが、鬼塚家の面々に嘘はつきたくなかった。

自分は、鬼神。わざわざそれを見せ付けるようにして、藍は戦っていく。嫌われても、差別されても構わない。

それでも、自分をここまで育ててくれた人間達に、偽りの姿を見せ続けるのは嫌だったのだ。

「おい……鬼神だと!？」

「ヤベエ……もう依頼所の話じゃねえよ。巡さんに報告しなきゃ

」

「あのガキはどうするんだよ!? 下手したら俺らが鍋木の上の連中に」

お互い怒鳴りあう賞金稼ぎ達を次々にレヴァティーンの峰で打ちつけていく。残りの賞金稼ぎ達は三人。

一人はどうかにかミキだけでも回収しようとしているのか、再びミキ達の下へと走り出している。

そして残りの二人は、藍の行く手を阻むようにして、今度は小太郎を人質にとっていた。

「親父殿……」

藍が今まで賞金稼ぎ達を殺していないのには理由があった。それは、小太郎が妻と息子を失った時に決めた理念。

この屋敷で二度と人殺しを起こしたくない。藍は二郎としてそれを徹底してきた。小太郎のその気持ちに感銘を受けたからだ。

身寄りの無い、記憶も無い、全てが無かった藍を優しく包み、人としての道や、言葉では言い尽くせない程の事を藍は小太郎に教わってきた。

血が繋がっていないなくても 息子として扱ってくれた。時に厳しく、時に優しく藍の心を正してくれた。

「二郎！ 俺はいい！ 早くミキさんを……！」

「うるせえ！」

男の一人が剣を振り上げて小太郎を黙らせようとする。どうすればいい 迷ったのは一瞬だった。

過去とは違い、憎悪ではなく、復讐の為でもなく、小太郎をただ

守りたい。その一心で藍は力を発動させようと意識を集中。

今度こそ、間違えない。今度こそ、守る。守れなかった母の時とは違い、”父”を守る。その思いに緋眼は応えた

「緋眼、終式！」

藍の目が更に濃く染まる。一瞬で加速し、賞金稼ぎの全身を拳で打ちつけた。

それは、一瞬の出来事。次の瞬間、倒れ付した賞金稼ぎ達の周囲に紅蓮の炎が舞い起こり、

小太郎だけを避けるようにして爆発。吹き飛ばされる男達に視線を送る事なく、藍は更に走り出した。

体が熱い。血液が沸騰しそうだ。最後の賞金稼ぎは泣きじゃくるミキの髪を掴んで立たせようとしている。

それに怒った遥が、賞金稼ぎの男をグーで殴りつけた。だが、それは気が動転した賞金稼ぎにとって火に油を注ぐ様な結果にしかない。

ナツクル型の式神を思い切り振るい、遥の体を吹き飛ばす。いかに遥が女としては強い部類に入ろうとも、式神に殴られてはただでは済まない。

柱に思い切りぶつかり、痛みを堪えるようにして蹲る。その瞬間、藍の理性はついに決壊した。

「何をしているんだあアアアッ！」

一瞬で追いつき、賞金稼ぎの腹部に全力で打撃を打ち込み、一瞬でミキを掴んでいた腕をへし折った。

更に浮き上がった体に更に拳を叩きつけ、地面に落ちる前に蹴りを放つと、吹き飛ばし

転がっていく男に一瞬で追いつくと首を引つつかみ、引きずる様

にして走ると、最後に壁に叩きつけ、

「そんなに傷つきたいか！ そんなに殺したいかア！」

レヴァティーンに全ての炎を集め、力を高めていく。

だが、そのレヴァティーンに何かが優しく触れた。藍が視線を向けると、刀身を掴むようにして涙目の光希が立っている。

手には式神であろう、無色とやや水色を帯びた玉がついたグローブをつけて。緋眼を使って追いついてきたのだろう。

藍の凄まじい式神の気配に膝をガクガクと震わせ、だが それでも逃げずに光希は口を開いた。

「二郎兄ちゃん……もう止めようよ。これ以上やったら死んじゃうよ」

その瞬間、レヴァティーンの姿が藍の意思に反して、ゆっくりと消えて行き、光希の体が稲妻でも走ったかのように一瞬震える。

それを見て、藍は光希の式神の正体に気がついた。多少形状は違うものの、光希の式神は藍の母が使っていた式神と同じ力であると確信。

ある意味では最強にもなれ、最弱にもなれるその式神を、両手で優しく藍は包み込むと、

「ごめんな。確かに、これじゃあ千島藍と何も変わらない。俺は鬼塚二郎だもんな」

「ちしまあお……？」

光希は意味がわからなさそうに、藍を見ている。今はそれでいい。後になって話せば良い事だ。

その時は、千島という家の事。千島藍という化け物の事。蒼二や遥緋と戦った九年前の事を教えてやるう。

だが、今はその前にやる事が沢山ある。見ると、ようやく立ち上がった鬼塚家の面々がこちらへと走ってきている。

藍は蹲っている遥を抱き上げ、光希とミキを伴い、そちらへと合流した。だが、何を言っているのかわからない。

弟分や舎弟も困ったような顔をしていた。だが　小太郎は、優しく微笑むと藍の頭を撫でると、。

「良くやったな、二郎。お前は私の誇りだ」

貴方は、私の誇りです

一瞬、心が決壊しそうになるも、舎弟の手前というのと、そんな状況では無い為に何とか堪えた。

小太郎はそんな心中を察してか、組員達に指示を飛ばし始めた。遙に病院で精密検査を受けさせねばならない。

捕まえた賞金稼ぎの身を七海に引き渡さなければいけない。わらわらと全員が散らばっていくと、後には光希とミキと藍だけが残った。

光希はやはり緊張したようで、疲れたように座り込んだ。そして、ミキはもう泣いていない。

赤く腫らした目を擦り、藍の方を真剣な目で見つめる。藍もそれに決意を感じたのか、真剣な表情になった。

「二郎さん。私、皆に言っていない事が沢山あるんです。今度の事は全部私が悪いんです。」

だから　いまさらですけど。もう全部話します。ごめんなさい。全部話したら、

絶対皆私に怯えちゃうと思ったから、ずっと言えなかった……」

「大丈夫だよ。ミキちゃんは悪くないさ。とりあえず、話の続きを聞こうか」

「はい……」

しばらくの迷いの後、ミキは小さな声で呟いた。

「私の本当の名前ね。      十文字未希って言うの……」

第32話：反逆の十文字事件（前書き）

PASTの核となる話です。

次話投稿は……七月後半っぽいです……

正直笑えないほど忙しいっす。

でも最近少し笑った事

弁護士 一之瀬凜子

### 第32話：反逆の十文字事件

最強の式神使い、十文字戒。彼の強さは、様々な属性の力を使える式神、森羅万象だけではない。

魔具使いとしても十文字史上最高と言われる力を持っていた。一瞬で複雑な武器を一から生成し、

モノの変質何かは、それこそ一秒かからない。だが、そんな十文字戒は、生まれた時から強いわけではなかった。

戒が生まれた当時の十文字はたった十人ほど。戒の両親と、その両親や兄弟位だった。血が濃い所為か何なのか、中々子供が生まれない十文字家。

特に無精子症になる男児が生まれやすく、緩やかにその人口は減ってきている。そんな中、生まれた十文字戒には誰もが期待した。

この子は、きっと凄い子になる。

誰もがそう期待し、戒を大切に大切に育て上げた。だが、十文字戒という男の子は体が弱かった。

二日に一度は熱を出し、病気が流行ればすぐにかかる。戒が五歳になる頃には誰ももう戒に期待しなくなっていた。

その期待は次の子。戒の母親の中に居る四つ子へと全て注ぎ込まれていた。その為か、戒は一人で遊ぶ事が多かった。

友達が居なかつたわけではない。だが、相手は同じ十名家の子だったので、兎に角家が遠い。

近くに居たのは一ノ瀬の凜だけだったが、凜は凜で一人で遊ぶのが好きな子だったので、そう毎日来てくれるわけでもない。

凄いのよ。千春と千夏と千秋と千冬は、もう魔具を使えるようになったの

親も家族も誰も自分に目を向けない。五歳にしてそう悟った戒は、頭の中に友達を作った。

とても優しく、とても可愛らしく、何時も一緒に居てくれる女の子。その子と一人で喋りながら、戒は毎日を過ごしていた。

そして、年をとる毎に戒の体は良くなっていた。熱を出す頻度が減り、生まれた弟や妹とも外でよく遊ぶようになる。

そう、この時の十文字は気づいていなかった。幼い頃に戒が熱や病気をよくしたのは、あまりにも血が濃すぎた為。

戒に宿る十文字でも最高峰の才能に、体が耐えられなかったのだ。戒自身もそれに気づく事なく、やがて、十文字戒が中学生になると、

「戒。来週、悪鬼討伐だって。式神の練習するよ」

一ノ瀬凜が相変わらずめんどくさそうな顔でそう告げた。知り合っつて数年近く経つが、最近ようやく戒は彼女を理解しつつあった。

めんどくさそうだが、根は優しいのだ。今日だって、友達と遊ぶ約束があったのに戒の事を優先してくれている。

そんな彼女に苦笑していると、凜は何が気に入らないのか大声を上げた。

「な、何笑ってるよ！ いいからさっさと準備して」

親は四つ子の式神や魔具の訓練に忙しいらしく、戒の式神はこれまで完璧に放置されていた。

魔具については、基本原理を少し教えられただけ。今回のように式神に関しては、凜に完全に任せきり。

もはや興味は無い事は知れているがこれはこれで少し寂しい。そんな思いが顔に出ていたのか、

凜は戒の手を優しく掴むとずんずんと訓練場まで歩き出す。

「凜。ありがとな」

「……………」

凜からの返事はない。ただ、耳が真っ赤になっているのが後ろから見るとよくわかる。

戒がくすりと笑いを漏らすと、仕返しにパンチがとんできたのもまた可愛らしい。

二人で訓練場に入り、しばらく召還の練習をしていると 戒は、一発で森羅万象を召還した。

凜はその凄まじい気配に大口を開けたまま暫く呆然とし、戒は戒で、

「おお。結構凄いな」

とケラケラ笑っていると、ようやく我に返った凜が興奮した様子で詰め寄ってきた。

「凄くない、戒。これなら、絶対奥様や旦那様も認めてくれるよ！ もう、これで苛められないね。

早速奥様や旦那様に報告しなくちゃ。ああ……今は四つ子ちゃん達の習い事の時間でしたっけ」

「言わなくていいよ。もう、慣れたし」

「でも、戒。やっと認められるのよ！？」

「……最近ずつと考えてたんだけどさ。無関心って結構いいものだぜ。何しても怒られないし。」

それでも十文字ってだけでやりたい放題だ。よくよく考えれば、俺って良い生活してたんだなあ」

「……寂しくはないの？」

「凜、お前が居る。春や夏や秋や冬も良い子だしね。少し遠いけど、遠音や紡や千里だって友達だよ。」

四条派だけど、律や莉王や颯太だって面白そうだ。雨龍は生意気だけど、そこが可愛いしな」

戒はそう言うと、快活に笑った。凜も戒の気持ち察したのか、それ以上何も言わない。

式神については適当に報告すると約束し、家へと帰っていく。家族が無関心だったのが幸いと出たか

式神についても何も聞かれなかった。そして、本番の日。初めての悪鬼討伐がやってきた。

この日の為に森羅万象を必死になって制御してきた戒。訓練場に教えられた通り反意思を割り込ませ、誰にも式神の存在がわからないように気配を隠す。

魔具の力の中でもかなりの高等技術だったが、魔具について何も知らない戒は、基礎だと判断しそのまま気にせず力を使っていく。

「お前の任務は、未確認の低級悪鬼の殲滅。報告は一之瀬の凜にして、終わったら家に帰ってきなさい」

「はい」

四つ子のは最後まで見ていたのに、自分のは見ないのか。心の中でそう笑い力を使って閉鎖地区を駆け出した。

凜が手回ししてくれたのか、監視と補助の式神は彼女だけのようだった。結界士は凜の従者だったので情報漏えいの心配は無い。

森羅万象の力で空を飛び、戒は標的である低級悪鬼を上空から視認した。透明な人型をした悪鬼。

特に害は無さそうだった。目を凝らして悪鬼を構成している反意思を見ても、大きな力は感じられない。

ただ 一つ気になったのが、その悪鬼を構成している反意思の全てが正から生まれた反意思なのである。

通常の反意思は世界に反抗する意思。すなわち、負の感情から生まれやすい。妬み、嫉妬、そうした汚い感情から生まれた意思の方がより力が強いのだ。

だが、あの悪鬼は違う。全ては正で構成されている。これも魔具の力の中では最高峰の技術だったが戒はまたしても気づいていない。地面に急降下し、悪鬼の前に立つと

「よお。こんばんは」

あまり怖くなかったので軽口と共に挨拶してみる。悪鬼は驚いたように立ち止まり様子を伺っていた。

何を考えているのかわからない。宇宙人のようにも見えない外見を不思議に発光させ、ただ存在している。

しばらく時間が経つと、悪鬼が手を伸ばしてきた。その気になれば一瞬で殺せる。面白そうなので、戒はその手を握り返してみた。

すると、突然悪鬼に変化が起き。身を震わせるとm大きく体が広がって戒を包むように広がり、

「う、うわぁ!?!」

流石の戒もこれには驚いた。すぐさま森羅万象を発動させ、駆逐しようとする。今度は戒の体内へと侵入。

すり抜けるようにして、すっと入っていく。不思議と嫌な感じはしない。悪鬼は一瞬で戒の外に出てきた。

だが、そこに悪鬼は居ない。目の前には全裸の女の子が不思議そうな顔をして戒を見ている。

普段の戒だったら、すぐに攻撃していただろう。だが、女の子の顔を戒は知っていた。

それは、いつも頭の中に居た友達。寂しかった戒の心を埋めてくれた空想上の女の子。

「何で……のぞみが」

戒は頭の中の友達に、のぞみという名前をつけていた。もはや忘れかけていた記憶だが、

幼い頃の戒はこの少女の存在でどうにか自分を保っていた。

誰からも期待されず、空気のように扱われた戒を、自分が頭の中で生んだとはいえ、少女は救ってくれた。

たとえ悪鬼だろうが、その恩人を戒は自分の手で始末する事が出来なかった。できるわけが、無かった。

「で、私の所に連れて来たってワケですか」

部屋のコタツに座り、一番の趣味であるプラモデルの組み立てを

行いながら、凜は呆れたようにぼやいた。

ロボットも組み立てるが、凜はもっぱら戦艦や戦車や軍艦を作るのが好きだった。

およそ中学生の女子としては信じられないような趣味だが、小学校の頃から凜はそうだった。

偽名を使って、雑誌のコンテストにもよく応募している程である。希は凜に借りた服を着て、何が面白いのか、飾ってあるプラモデルを見ながらきゅきゅと笑っている。

「それに、触らないで下さいね。凄く微妙なバランスで立ってるんですから」

視線だけで希を嗜めるも、すぐにそれは破られ、凜の作った戦艦は砲身をあらぬ方向に曲げられた。

「なっ　！？……戒、今すぐこの子を始末しなさい。お前がやらないなら、私がやりますから」

「お、落ち着けよ凜。のぞみも謝りなさい」

戒と凜が怒っているのがわかったのか、のぞみはしゅんと頂垂れ口をパクパクとあけた。

「……もしかして、この子。話せないの？」

「そのようだね。こりゃ……教育するのに骨が折れそうだ」

「戒、まさかこの子を十文字に連れて帰る気ですか？」

「当たり前だ。のぞみは俺の恩人だ。たとえば、悪鬼であろうとなん

だろうと、関係ないさ。

父親達にはバレンだろ。凜、のぞみはお前の友達と言う事にしとけ。俺は一旦十文字を

出るといつてしばらく一之瀬に厄介になるからさ」

「ウチは何とかなりますけど……十文字の長男の命令ですからね。出来るだけ、便宜は図ります。

でも、一つだけ約束して。もし、旦那様にバレた時は、すぐにご子を始末しなさい。

それが、約束。それを守れるならば、私は協力します」

「OKだ。絶対にバラさん」

そして、戒とのぞみと凜の奇妙な共同生活が始まった。十文字は家を出るといつても特に何も言わなかった。

逆に弟と妹の説得の方が大変だった。千春と千夏は絶対やだーと泣きじゃくり、千秋と千冬も不満そうに頬を膨らましている。

それでも何とか宥めて、戒は十文字を飛び出し、一之瀬の家へと住む事になった。のぞみにも正式に希という漢字をつけ、

凜と戒で言語を教える毎日。吸収力があるのか、それとも天才なのかはわからないが、三ヶ月もすれば希は日常で支障が無い程度には喋れるようになっていた。

問題は、言語を知って自我を確立してしまい、戒と凜以外には全く懐かない極度の人見知りになった事だろう。

それを解決する為に、戒は学校を休み、様々な友人の所を訪ね歩いた。遠音から始まり、莉王まで。十名家の同年代の子供全てに紹介し終えた頃には

希の人見知りも治っており、十文字家に帰って、毎日四つ子や戒と凜と一緒に楽しく暮らしていた。

「おねーちゃん。こっちこっち」

「おねーちゃん宿題教えてよー」

「千夏うるさいー。僕がおねーちゃんと遊ぶや約束してたんだぞ」

「千秋は僕の後だろー」

「はいはい。じゃあ、皆でやるうか。まずは、千夏ちゃんの宿題から片付けようね」

至福の時だった。毎日が楽しくて、楽しくてしょうがない。最近では、悪鬼なのに。希なのに。

戒はどうしようもなく彼女の事を愛してしまっていた。希もそれは同じなようで、戒には特別優しく接してくれる。

それを良く思わなかったのだが、十文字の家系。悪い虫がつくと困るのか、希の事を調べて見るも、見つからない。

訝しげに思った戒の祖父がもしやと思い、反意思の構成を調べてみると、希が悪鬼だという事が発覚。

すぐさま戒は呼び出され、散々殴られ、蹴られ、暴行を加えられた後に祖父は戒を怒鳴りつけた。

「貴様は、十文字生まれという意味がわかっておらんようだ……悪鬼と仲良くするとは気でも狂ったか！」

その後も戒の祖父はありとあらゆる言葉を以って希を侮辱し続ける。最初は大人しく聞いていた戒だったが、

やがてその表情から感情が次々と抜け落ちていき、最後には怒りの感情だけが残ると、

「……狂ってるのはテメーらだろ」

と小さな声で口にした。

「何い？」

「何故、悪鬼だから殺すんだ！ 悪鬼が不浄だなんて誰が決めた。お前みたいなの奴より、希の方がずっと人間らしい！」

「……のー！」

もはや、限界だった。希を守るにはこれしかない。戒は森羅万象を発動させ、十文字を迎え撃つ。

戒を侮っていた十文字は戦慄した。魔具という点から見ても、式神という点から見ても。

戒は自分達を圧倒的に凌駕しており、優秀と評していた四つ子ですら霞む程の力を持っていた。

そして、一日程殺しあいは続き、異変に気づいた弟や妹も、最終的には、泣きながら希を守る為に戒に協力してくれた。

「……もう、知らん。好きにしろ」

それが戒が最期に追い詰めた両親の最後の一言。直後、父と母は自身の式神の力によって命を絶った。

弟や妹には死体は見せなかった。これは、全て自分の責任。そう判断して全てを背負う。

全ては希と生きたいが為。あの幸せだった時を続ける為。戒は修羅の道を歩もうと決意。

そして、十文字の壊滅を知ると、すぐに十名家の直系が全て集められ、十文字の屋敷で話し合いがもたれる事になった。

「もはや、十文字に十名家は任せておけない」

それが四条派全ての見解。一之瀬と三枝だけが味方してくれるも、七対三では勝ち目が無い。

そんな十名家の面々をどうでもいいように見下ろし、戒は十文字の屋敷の窓を見つめた。

そして、森羅万象の力を発動。この日の為に戒が作った魔具も全て公開。

一瞬にして、全ての家が押し黙った。戒の力は常軌を逸している。この場の全員が揃っても勝ち目が無い。

「会議は終わりだ。これからの十名家の長も十文字でいいな。異論がある人は、手を上げてくれ」

結局、誰も手は上げられなかった。あげられるわけがない。目の前に居るのは歴代の十文字でも最強の男なのだ。

それさえ終われば、戒にはもう怖いモノが無い。希をただひたすらに愛し、友達と楽しく過ごすだけ。

やがて、内輪で結婚式が行われ。少数だが、気の知れた友人達に祝福されながら、戒と希は結婚した。

そして、それと同時に、新しい家族も生まれた。それは、戒と希の間に来た小さな女の子。

「名前は どうする？ 俺としては可愛い名前をつけたい。十文字って無骨な苗字だからさ」

「……一つだけ、考えてた名前があるんだけど。言ってみていいかな？」

「おお、言ってみる」

「この子にはね。私と戒君。それを取り巻く皆の”未”来への”希望”になってほしいの。」

だからね 未希。十文字未希ちゃん。どうかな？ 結構可愛いと思うんだけど」

「未希……か。確かに悪くはない。じゃあ、未希にしようか！」

未希が生まれて更に戒は変わった。子供は可愛い。本当に可愛い。病気と思われる位戒は未希の事を可愛がった。

妹や弟達も兄の子煩悩っぷりに呆れたが、それでも兄の事は好きだった。毎日が楽しくて仕方が無い。

未希が何か喋ったと聞けば、戒は何時間もビデオカメラを抱えて待った。未希が歩こうとしたら、細心の注意を払ってそれを応援した。

未希の夜鳴きも、未希の我侬も、未希の泣き声も、全てが戒にとって愛おしい。

嫌な顔一つせず、希の出番が無いほどに戒は未希の世話に明け暮れる始末。

「戒。貴方、これは流石に……」

「どっちが母親かわからないわね……」

凜と千里には散々呆れられた。それでも、彼女達は笑っていた。そんな幸せな日々が続いたある日。

偶には十文字全員で何処かへ出かけようと、千秋と千冬が提案した。

その頃の希は、凜と大喧嘩をしまい、酷く落ち込んでいたの

だ。千春と千夏も気分転換に何処かへ行こうと強く希を誘う。

戒も希を誘った。凜も嫉妬から怒ってしまった事を反省しているらしく、戒を通じて希の様子を聞いていた。

この旅行が終わったら、ついでに一之瀬に顔を出しに行こう。そんな考えで文字家は旅行へと向かう。

目的は、長野の温泉。車を戒が運転しながら、家族仲良く長野へと向かっていると、千春が突然気持ち悪いといい始めた。

仕方が無いので、偶々通っていた町で少しの小休止を挟む事に。

そこが 上泉町。

戒と千秋と千冬は喫茶店でお茶を楽しみ、千春と千夏は薬局へ行くのと、気晴らしに散歩をするつもりらしい。

希は希で、未希のオムツが切れてしまったらしく。新しく買ってくると言い、ベビーカーを引いて買い物へ行こうとしている。

「気をつけていけよ。やっぱり、俺もついていこうか？」

「いいよ。戒君は運転で疲れてるでしょ？ ここは私に任せて」

「じゃあ、お姉ちゃん。僕らがついていこうか？」

「むー……大丈夫だって。秋ちゃんや冬ちゃんや戒君は心配性すぎるよー！」

頬を膨らました後に、希は笑うと手を振って歩いていってしまった。戒と千秋と千冬も笑いながらそれを見送る。

それから三十分が過ぎ頃か、千春と千夏が先程までの気持ち悪そうな表情は何処へ行っただか、いつもの能天気な表情で帰ってきた。

「あれ？ お姉ちゃんは？」

「姫のおむつを買いに行つたよ。……それにしても、少し遅くない?。」

「ああ……。少し、様子を見に行くか」

戒がそう立ち上がった時だった。少し離れた場所で急激に反意思が膨れ上がった。しかも、それは希を構成している反意思。

導き出される答えはただ一つ。希が悪鬼の力を使っている。四つ子もそれに気がついたようで、戒達は通行人を押しつけながら、走り出した。

式神を使えばすぐだったが、人目が多いので使えない。時間が少しかかってしまったが、戒達がようやく希の反応する場所に辿り着くと

「何……。これ……」

横転したトラック。転がった未希のベビーカー。少ないが、人だかりも出来ている。その間に、透明な悪鬼の姿が見えた。

必死に何かを抱えるようにして、守っている。紛れも無く、人の形を無くした時の希だった。

未希の泣き声が響き渡っている。そして、人間達が希を棒で叩き、希から未希を取り上げようとしている。

戒と四つ子の中で、何かが音を立てて崩れていった。目の前では希が暴力に晒されている。

戒と四つ子は気づいていなかったが、希を殴っていた人達は、未希が化け物に襲われていると勘違いしていたのである。

どうにか赤ん坊を助けようと必死で、異物を弱らそうとする。悲しいのは、それを戒達知ったのは全てが終わった後という事。

当時の戒は無造作に、そして言葉にならない程の怒りを込めて、森羅万象の力を発動。

絶叫し、手当たり次第に力を振るう。四つ子も同じだった。式神を発動させて、手当たり次第破壊していく。

これが、反逆の十文字事件の真実。誰が悪いわけではない。勘違いが生んだ世界で一番悲しい悲劇。

「や、やめるんだ！」

何処かの家が、彼らを止めようと式神を発動させた。だが、怒り狂っていた戒には、火に油を注ぐようなもの。

一瞬で森羅万象の炎に焼き尽くされ、最終的に、上泉町の駅周辺区画は焼け野原と化した。

戒達は騒動の中で見失った希と未希を必死で探した。そして、ついにビルの裏側で未希を抱きかかえている希を発見。

慌てて近寄るも、もはや涙で前が見えない。希を構成している反意思の量がどんどん減っていくのが見なくてもわかる。

消えつつある希は、戒と四つ子に気がついたようで、最後の力を振り絞り人間の形を作った後に、笑顔を作ると、

「ごめんね……私ここまでみたい。未希ちゃんの事、お願いね。大切に育ててあげて……」

「馬鹿いうな！ 待ってる。今すぐ反意思を補充してやる。春！

夏！ ありつたけの反意思を集めて来い！ 秋と冬もだ！」

四つ子も涙を流しながら、町をかけていく。だが、人が死に絶えた町で反意思が見つかるわけがない。

希を構成しているのは、全て正の反意思。少量の反意思を見つかるも、それは全て恨みからでた負の反意思だった。

こんなものを足してしまえば、希の存在は変質してしまうだろう。つまり、二度と元には戻れない。

そうこうしている間に希はどんどん弱っていく。戒も必死で走り回り、反意思を求めた。だが、無い。

やがて 戒達が希の居た場所に戻った頃には、母を求め泣いている未希と、希の洋服だけが残っていた。

そして、十文字は純血を恨むようになった。

第33話：全ては、ほんの些細な願いから（前書き）

レポートを幾つか提出したのでその合間に投稿。

次々回位からPASTのクライマックスな展開に入ります。

### 第33話：全ては、ほんの些細な願いから

希の葬式は行わなかった。ただ、希の着ていた洋服だけを埋めた墓を作っただけ。

凜は墓にすがりついて泣きじゃくり、クールな千里も大声を上げて泣いていた。戒も泣いた。

四つ子達は泣きながら自分を責めて、責めて、ずっと責め続けた。

「僕が旅行に行こうなんて言ったから」

「あの時、買い物についていけば」

「私が体調悪くしたから」

「無理に旅行に誘わなければ」

毎日、十文字家には涙だけが流れていた。それでも、彼らが立ち直れたのは未希の存在があったから。

希の面影を持つ未希を大切に育ててあげよう。自分達の所為で失った母の代わりをしてあげよう。

それだけが彼らの生きる理由だった。未希から絶対に笑顔を絶やさないようにする。そして、いつか純血に復讐を」と。

しばらくすると、遠音が退院して十文字家にやってきた。その手足に希と一緒に召還した式神を携えて。

凜は自分を相当責めているのか、前にも増して十文字家に来るようになってしまった。未希の世話を率先して行い、未希の望む事なら何でも

やった。

やがて、未希が保育園に入る頃には、何かの行事があるとすぐに駆けつけてきた。一之瀬での立場、仕事の全てを投げ捨てても。

そしてその頃に、戒は保育園に入ってまもない未希にある日、真剣な表情で一つ問うた。

「未希。毎日が楽しいか？ 今の世界が好きかい？」

未希は無邪気な笑顔で、楽しいと答えた。保育園からの報告によると、中々良い人間関係を築いているらしい。

その事に安堵した戒達は、純血への復讐をやめた。未希が今の世界を楽しんでいるなら、それでいい。

だから ラグナロクには滅ぼさせない。潜伏していた千春と千夏に連絡し、ユグドラシルの動力部を爆破させ、

自らも仲間を引き連れて、鬼神達の討伐へと向かった。鬼神達には少し悪いと思いつつも、

未希の幸せを脅かすような存在を生かしておくわけにはいかない。そして、戒の思惑通り、ラグナロクの夢は絶たれた。

やがて、未希が保育園を卒業し、全員から愛されながら晴れて小学校へ入学する事になると、

「俺は反対だ。未希を純血の多い普通の小学校に入学させるだど？」

遠音、流石の俺でも怒るぞ」

「だが、未希は保育園の友達と同じ小学校に行きたいと言っている。それは、お前のエゴだぞ。

重要なのは、お前の感情じゃないんだ。未希の好きな道を選ばせてやれ。それが、親だろっが！」

ぶつかり合う遠音と戒の意見。戒は純血が怖くてしょうがなかつ

た。未希も希のように殺されてしまうのではないか。

苛められて、自殺に追い込まれてしまうのではないか。未希がもし居なくなってしまうたら、

もう戒は何にすぎって生きていけばいいのかわからない。遠音もその辺りの気持ちはわかっているようではあるが、

何時までもそれでは駄目だという事を薄々と感じていた。未希を溺愛してしまう余り、

戒は偶に未希の幸せを妨げるような事を無意識の内に取ってしまう事がある。

自分達はそのストッパーと、心を鬼にして、遠音は続けた。

「それにな。そういう娘のピンチを支えてやるのが、家族ってものだろう。私が言くと皮肉にしか聞こえないがね」

「……………いや、俺が悪かった。うん。ここは未希の選択に任せるのがいいだろう」

そんな小競り合いが幾つかあったが、それでも十文字家はかつての幸せを取り戻しつつあった。

戒はひたすら未希の世話に従事し、千秋と千冬は十文字特区の管理、十名家の管理を戒から引き継ぐ。

そして、希が消えてしまってから数年。未希はすくすくと成長し、家族に幸せを振りまいた。

運動会には十文字家だけでなく、遠音や凜や千里や万里も駆けつけて未希を応援した。

バレンタインデーには、未希に好きな人でも出来たんじゃないかと戒や千秋、千冬はドキドキしながら見守り、遠音や凜に呆れられた。

また、遠足にこっそりと魔具を使いついていき、頭と勘の良い未希に一瞬で見破られ、怒られた事もある。

それでも、再び笑顔が戻ってきていた。

そして、未希が小学校を卒業する少し前、学校から一つ課題が出された。それは、卒業式に渡す父親と母親への感謝の手紙。

未希は戒の分は書き上げたらしい。思春期なのか、最近距離を置かれていた戒は、遠音からそのような事を聞いた。

だが、母への手紙は白紙だった。無理もない。未希には、希の話は殆どしていなかった。病気で死んでしまったと嘘をついただけ。

そろそろ全てを話すべきか。それとも、成人するまで待つか。戒はしばらく決断に迷ってしまっていた。

自分が集め、編集した反逆の十文字事件の資料を見ながら物思いに耽る毎日。何時か、これを見せながら説明してあげなくてはならないからだ。

そして、そのまま卒業式も終わってしまったある日。戒が十名家の話し合いの仕事を済ませ、一度家に帰宅すると、誰も居なかった。千春と千夏と遠音は買物。千秋と千冬は遠出し、監査。未希の姿を探してみるも、何処にもいない。

「遊びにでもいったのかな……？」

小学校が十文字特区内に無かったので、偽装のマンションを一軒借りてある。そちらで友達と遊んでいるのではないか。

と思い、電話してみると出ない。警備会社に連絡して探させてみても居ない。一度、戒は部屋に戻ってみる事にした。そして

「あ………」

自分の部屋のパソコンがついていた。しかも、戒の集めたデータが開かれた形跡がある。

そして、パソコンの上には置手紙が置いてある。小学生とは思えない、丁寧な字でそこにはこう書いてあった。

お母さんに会って伝えたい事があるの。方法も大体わかったので、しばらく旅にでます。

ついに、恐れていた事が現実になってしまった。未希の式神の特性上、捕まえるのは不可能に等しい。

だから、戒は決めた。未希が何か危険な方法をとらない内に、自分自身の手で希を取り戻そうと。

少し家の中を調べてみると、未希がどのようにして希と会いに行くかはすぐにわかった。

倉庫にあった、かつての十文字が「時を越える魔具」を作ったという文献が何度も、何度も読み返された形跡がある。

「そんなに、会いたかったのか……」

未希は生まれてから一度も母親に会いたいと言った事が無かった。だけど、それは強がりだったのだろう。

未希がどんな思いで、この文献を読んでいたか。それを考えるだけで、涙が零れてきた。

だから 自分で作ろう、時を越える魔具を。構成の目処は頭の中で考えるだけで、すぐに立った。

だがそれには莫大な量の反意思が必要になってしまう。 戒は、仲間や家族に助けを求めた。

「私は私の用事も同時に進めたい。それなら、協力させてもらおう。あの時の約束どおりね」

六道紡は、相変わらずの笑みでそう答えてくれた。

「わかった。何でもやってやる。その代わり、今から俺の話す計画にお前の力を貸してくれ」

二階堂雨龍は、何時もとは違う真剣な表情で協力してくれた。

「私も雨龍と同じく、協力させてもらうわ。未希の幸せの為だったら、何でもやらせて貰う……そして、万里も救ってあげたいの……」

三枝千里は計画を殆ど話していないのに、未希と万里の為にとすぐに快諾してくれた。

「私の力は何の為にあると思ってるんだ？ 君達家族の為に。今更頭なんか下げるな。阿呆」

七海遠音は、自分を叱り付け、笑った。

「……やります。また会えたら、あの時言った酷い事を謝って、約束を果たすから」

一之瀬凜は、決意を込めた瞳で戒を見据えながら言った。

そして、その計画の第一弾として、九我山特区が紡によって襲撃されたのだ。

もう 止まれない。ユニオンと敵対関係になる事は、その頃にはもうわかっていたが、止まらない。

「邪魔をするなら 潰す」

全ては、母親に会いたい。誰もが願うほんの些細な願いから、こ

の国を分断する争いはこうして始まったのである。

ユニオンの本部ある、巨大な講堂。普段は殆ど人気が無いその場所には、今日は500人程の人間が集まっていた。

陳列された椅子に座り、制服を着たユニオンの人間達が何が始まるかを待っている。制服を着ているといっても、大半が改造されている。

式神や戦闘スタイルによっては、制服というのは邪魔になるからだ。大体が、慣れた服に制服を引っ掛けているというのがユニオンの基本。

前面に設置された幹部席には、一つの空き。牧島郁人がいつも座っている席だけが空席となってしまうている。

ユニオン最強の剣士と言われた郁人が式神と愛剣を破壊され、鬱状態に入ってしまったというのは有名な話。

それでも、郁人の隊は統率が特に乱れているようには思えない。

南野喜一を中心として、黙って全員が席についている。

やがて 時間がきたのか、中央の椅子に座っていた千島蒼二が

立ち上がった。それに伴い、話し声がどんどん無くなっていく。蒼二は壇上に上がり、マイクを二回叩くと、

「十文字の狙いがわかった」

とまず口にした。一瞬で、ざわめきが起きるもすぐにそれは消え去り、再び蒼二は喋りだす。

「敵は十名家の十文字派の直系。莉王や律と同じ世代の奴らだ。本家に問い合わせてみたが、

ほぼ全員が家出扱いとなっているらしい。ま、当たり前だわな。

本来は、十文字の下の家だし。

あいつらの狙いは、反意思を集めて あの反逆の十文字事件を無かった事にする事だ」

反逆の十文字事件と聞いて、全員表情が強張った。それ程までに忌々しい事件だった。

罪の無い沢山の人間が殺され、当の十文字はのうのうと生きている。

文句は言えない。相手は最強の十文字。その場でこちらが殺されてしまう。だからこそ、苛立ちが募っていた。

「あの事件で、一人の少女の命が、俺達人間によって奪われた。

勘違いで済ませられれば、それですむのだろうけど、実際はそうじゃないと思う。」

俺だって まともじゃ居られなかった。世界を恨み、人を恨み、その結果。運よくここに立っているわけだけだな」

そういうと、蒼二は一呼吸おき、

「俺達ユニオンの幹部連の全員の見解はこうだ。　これ以上、十文字の好き勝手にはさせない。」

もうそろそろ日本の各所に保管して貰っていたコアが全て届く。その後、十文字はそれを狙ってユニオンに攻めこんでくるだろう。また、戦いが始まるんだ」

蒼二は一旦喋るのを止めて、隊員達の反応を見た。ユニオンの中には戦いを好まない者も多い。

話し合いで解決させようという意思を持つ者が居る。蒼二だって出来れば、そうしたい。

すると、遠く離れた場所で一人の隊員が手を上げた。蒼二は彼に目をむけ「どうぞ」と発言を促す。

「俺、反逆の十文字事件で姉が顔に大怪我を負ったんです。今でも、その傷は残っています。」

もし、十文字が反逆の十文字事件を無かった事にしてくれたら。姉ちゃんの傷も無くなるって

事ですよな？　それなら　俺は、十文字を応援しちまいそうです。

あの傷で、姉ちゃんがどれだけ苦労してきたかを全て知ってる俺としては……なんていうか……その」

「いい質問をありがとう。確かに、君の言つとおりだと思う。それに、十文字を止めるって言うのは、俺達幹部の意思ってだけの話だ。君が戦いたくないのなら、戦わなくていい。俺達はそれを強要する気は全く無い。迷いのある奴は、死ぬだけだからな。」

ただ、俺達が止めたいって思うのは、そこに理由があるんだ。考えてみてくれ。

君のお姉さんは確かに苦労したのかもしれない。その傷もコンプレックスだろう。

たださ あの事件が本当に無くなったとしよう。そしたら、  
” 現在 ” は無いんだ。

君や君のお姉さんがその傷と向き合ってきた全ての思いも、時間  
も、今意見した君の気持ちすらも消えてしまおう。

だから、ここで全員に聞きたい。 君達は、 ” 現在 ” が好きか  
？」

蒼二の質問に、誰もが口をつぐんでしまった。現在が幸せ。本当  
にそうなのだろうか、と考えてしまおう。

あの事件が無かったら、どんな未来になっているかは、誰にもわ  
からない。

そのわからない未来と、現在を比較し考えてみるも、答えを出す  
のが難しい。それをわかっている蒼二は更に続けた。

「 反逆の十文字事件を消すっていう事は、あの事件の犠牲者や残さ  
れた遺族の今までの状態を消すって事と同義だ。

彼らの涙も、思いも、傷も全てが無に帰るが、もしかしたら犠牲  
者が帰ってくるかもしれない。はたまた、何処かでまた死んでしま  
うかもしれない。

だけど、俺達は十文字のやり方が気に入らない。愛する人を助け  
るだか何だか知らないが、あいつらは自分達の罪を無くそうとして  
いる。

全ての人の悲しみを踏みにじって、世界を変えようとしているん  
だ。どれだけ、大切な人を失うのが悲しいと思う？ 俺は世界を滅  
ぼしたかった。全てが憎かった。

それでも嫁さんを貰って、二人の子供に恵まれたんだ。俺は今、  
とつても幸せだよ。あの時、諦めずに死ななくて良かったって素直  
に思える。

そして、気づいたんだ。失った人は二度と帰ってこない。命は一  
度しかない。だから、人は生きていけるし、頑張れる。命を大切に

出来る。

さて、此処でもう一度問おう。俺達はいいつらの都合で一方的に攻撃され、尚且つ今この大切な現在を無くされようとしている。君達はこれについてどう思う？」

嫌だ。と誰かが小さな声で呟いた。それは徐々に広がっていき、やがて大音量へ。

中にはまだ迷っている者も居る。だが、大半の人間が手を上げて、思い思いの言葉を叫んでいた。

「なら、戦おうか。怪我人も出るだろう。下手すれば、死人も出るかもしれない。これも、暴力の一つだからさ。」

それでも、俺は戦う。あいつ等の恨みも、罪も全て背負うつもりだ。俺達は正義の味方なんかじゃない。

むしろ悪だ。あいつらの恨みや全てを背負える者だけが戦いに望んでほしいと思う。

俺たちは俺たち自身の現在と明日を守るために 争いという悪を行う、また変わらない”何時も”を迎える為に！」

蒼二がそう言うと、一際大きな拍手が鳴り響く。その時、自分がユニオンの長として認められた事を、蒼二は初めて実感した。

第34話：お父さん、お母さん（前書き）

……いえない。

もう一ヶ月も本編書き進めてないなんて……

もう少しで余裕が出来るんで、そしたら何とか……

というわけで。

次回から緋色の眼シリーズのクライマックスに入ります。

### 第34話：お父さん、お母さん

物心ついた時から、幸せだった。毎日、大好きな家族に囲まれて暮らす日々。だから、当たり前のようにずっと笑っていた。

お父さん、遠音ちゃん、春ちゃん、夏ちゃん、秋ちゃん、冬ちゃん。これが、私の家族。

その他にも凜ちゃんや雨龍君、千里ちゃんや万里ちゃんも良く訪ねてきてくれて、ずっと私と遊んでくれた。

だから、寂しくなんてなかった。お母さんが居ない。学校の友達に同情的な目で見られた事があるが、私には遠音ちゃんがお母さんだった。

「いいかい、未希。私は君のお母さんじゃない。でも、娘と同じように愛している。それだけは、わかってくれ」

でも、遠音ちゃんは、私にお母さんと呼ばれるが少し嫌なようだった。皆、それについて何も言わない。

私はその理由を知っていた。前に、私が夜更かして寝たふりをしてる時に、酔った遠音ちゃんが泣きながら私の髪を

撫でて一人泣きながら呟いていた事が原因だろう。しかも、お母さんに対して何か事情を抱えてるのは一人じゃない。凜ちゃんもそう。

だから、お母さんの話をしようとする、話を逸らされる。私が知っているお母さんは、リビングにある一枚の写真だけ。

万里ちゃんに聞いても、千里ちゃんに聞いても、どうしてお母さんが居ないのかは、どんな病気で亡くなってしまったかは教えてくれない。

そして年と共に、何か事情があると知った私は、段々と母親の事を口にしなくなっていた。何時か、話してくれると信じて。久しぶりに母親の事を意識したのは、小学校卒業の少し前だったか。

「私、お母さんと美容院行ってから卒業式行くんだー」

「私は今日一緒に、中学の制服買いに行くんだよ」

という友達との会話。別に良かった。服や美容院なら、遠音ちゃんや凜ちゃん。もしくは春ちゃんと夏ちゃんも行ってもいい。

卒業式だって、皆で来てくれるって言っていた。お父さんなんか、また新しくビデオカメラを買ったしね。

そして、もう一つ理由があった。担任の先生が配ってくれた、卒業式に両親に渡す感謝の手紙。

「未希ちゃんは……一枚でもいいのよ。それか、お姉さん達や叔母さんにでもいいわ」

先生は先生なりに気を使ってくれたようで、一応、私は用紙を二枚貰う事に決めた。

お父さんへは普通に感謝の気持ちを書いた。そして、もう一枚はと迷う毎日。

お母さんってどんな人なんだろう。イメージが全く無いからよくわからない。……会いたい。それまで我慢していた

思いが溢れかえって止まらない。やっぱり、私はお母さんに会いたかった。遠音ちゃんや凜ちゃんと一緒に居る事も嫌いじゃない。

でも、一度くらいお母さんと買い物や、お話をしてみたかった。声だけでもいいから聞きたい。

そんな思いが募っていく日々。十文字家の魔具でどうにか出来な

いかと考え、ひたすら過去の文献を漁った。

その中の一つ、時を越える魔具の記述に私は夢中になった。これさえあれば、お母さんに会える。

きつとびっくりするだろうなあ、と笑いながら想像する日々。でも、それは遠い場所で紛失した事になっている。

しかも百年以上前の記述だ。本当にあつたかも定かではない。でも、あるかもしれない。

お父さんもそんな私の変化に気がついたのか、妙に神妙な顔で、一日中パソコンに向き合って居る事が多くなった。

「お母さん……」

結局、そのまま卒業式も終わり、ある日、私が帰宅すると、家には誰も居なかった。暇だったので、私は部屋にあるパソコンをつける。

だが、ネットに繋がらない。無線式だったので、お父さんのパソコンの接続がおかしいのかと思った私は、お父さんのパソコンの接続を確認。

すると、反逆の十文字事件と書かれたファイルを見つけた。何で自分の家の名前が書いてあるんだろう。しかも、反逆って。

お父さんには悪いと思ったが、私はそのファイルを開いてしまった。そして 全てを知ってしまった。

「そんな……お父さんが、……お母さんが……皆が」

なまじ頭が良いだけに全てを理解してしまった。お母さんが、純血の人達に殺されてしまった事。

でも、その純血の人達は私は守ろうとしてくれた事。それを知らないお父さん達が町を一つ壊滅させた事。

その中心には私が居た。物心すらついていない私が。誰もが、私

を守る為に犠牲になっている。

お母さんもお父さんも、私を助けてくれようとした人達も。悪いのは、私の存在があったから。

「私が……悪いの？」

違う。違う。わからない。わからない。数式は簡単に解けても、この答えばかりはわからない。

何か、私に出来る事は無いのか。私が生まれてたから悪いのか。思考はどんどん悪い方向へ向かっていく。

そこで 一つの妙案を思いついた。それが、文献にあった時を超える魔具。それで過去に行ってお母さんを助ければいい。

あのトラックさえ突っ込んでこなければ、お母さんは今もきっと此処に居てくれている。私を抱きしめてくれる筈。

だから、時を超える魔具を探しにいこう。そう決めると、私は旅の支度をして、十文字特区在住のとある政治家さんの家を訪ねた。

その人に時を超える魔具が最後に使われた場所 岡山県のとある地域に住んでいる人を紹介してもらおう。無論、お父さん達には絶対に内緒という事も言い含めて。

「もしかして、君がミキちゃんかな？」

そして、海野太陽さんと出会い、その両親の徹宵さんと桜さんの家へと私は案内された。

徹宵さんは言葉に表せない位微妙な人だ。頭が良いくせに、やっている事は愚か極まりない。

桜さん曰く、これは海野の血統だそう。遺伝子レベルで海野の男児は愚か極まりないとの事。

そんな桜さんと徹宵さんは私を殆ど家族同然に扱ってくれた。図書館に行きたいと言えば、何時間でも付き合ってくれたし。

貸し出し数が十冊までという条件も、どう言い含めたのか、それを無視して五十冊程一気に借りてくれた。そんな日々が続いたある日。

光希と遙さんと二郎さんがやってきて、何だか知らないうちに今度は鬼塚の屋敷へと連れて行かれる事になってしまふ。

最初は、とても光希が羨ましかった。遙さんは光希を溺愛しているようで、とても大切に光希を扱っている。

寂しそうにしていれば、話しかけ。光希の為ならそれこそ何だつてやる。母親の愛情が、私にはとっても眩しく映った。

そして見ていれば見ているほど、私もお母さんに会いたくなる毎日。だが

「それでも、私は生き返らせようとは思わない。私の都合で、彼女達を生き返らせたとしましよう。」

それは命というものに対して、非常に失礼な行為であると私は考えています。

命は、一度きりだから大事にしなくてはなりません。一度きりだから人は何かを頑張れると私は考えます。

それでも、私の罪は消えません。私に出来る償いは、せめて目に映る人の命を救う事。

ヤクザでありながら、出来る限りの命を救う、これがこの年寄りの最後に生き甲斐なのです」

「それって引きかえって事でしょ。例えば、お母さんがもし死んじゃってっさ。

いっぱいのお金と引き換えに生き返らすなら、多分僕はそのお金をあげて生き返らせちゃう。」

そのお金は僕がいっぱい頑張つて働いて、誰にも迷惑をかけないでためたお金ならね。

でも、僕がぎんごうごうとーや、泥棒したお金じゃ生き返らせる

気にはならないな。きつと、お母さん怒るもん。

お兄ちゃんやお姉ちゃんやお父さんもきつと、僕を怒るだろうしね」

光希と小太郎さんの言葉が重く響いた。仮に、時を越える魔具を見つけたとしても、大量の反意思が必要になる。

しかも、これから私がしようとしている事は、小太郎さんの言葉を真に受けるなら、命への冒涇だ。

よくよく考えてみれば、人は何時か絶対に死ぬ。私だけがお母さんを失っているわけじゃない。世の中にお母さんがいない人なんてそれこそ大勢だろう。その中で、私だけがのうと犠牲を払ってお母さんを生き返らす。

常識的に考えて、卑怯以外の何者でもない。でも、黙っていれば誰もわからない。欲求と理性がせめぎあう。

そんな事を迷っていたら、今回のような事件が起きてしまった。私が居たから、鬼塚の人達が襲われてしまった。

もう、覚悟を決めるしかない。本心ではどうしたらいいかわかっている。でも、お母さん

「未希ちゃん。未希ちゃん！ 大丈夫？」

未希は光希の言葉によつて、我に返つた。気がついてみると、背中に物凄い冷や汗が出ている。

背筋を震わせ、改めて部屋の状況を確認してみる。現在部屋に居るのは、二郎、光希、未希、

小太郎、そして鬼塚を襲つた男達に囚われていた記者となる男の五人。未希は自分の素性と目的を全て明かし

この場にいた全員に頭を下げてから、ずっと思考の深みにはまっていたというわけであつた。

「もう一度確認するけど……君が未希ちゃんなんだね？ 私は海原靖。七海遠音とい名乗る情報屋に

頼まれてずっと君を探していたんだ。その名前に心当たりはあるかな？」

「は、はい。遠音ちゃんは……その、私のお母さんみたいな人です」

その言葉に、一番驚いていたのは小太郎だつた。拳を握り締め、唇を震わせながら、

「と、遠音お嬢様が、お母様代わりでいらつしやつたのですか。では、遠音お嬢様はお元気で

いらつしやるのですか？ 失つた手足は今、どうなさっているのですか？」

「詳しくは私も知らないんですけど。遠音ちゃんは両手両足がちゃんとありますし、元気ですよ。

小さい頃からずっと、面倒を見てくれた、本当のお母さんのよう

な人なんです」

「そうですか……それは良かった。今度、遠音お嬢様にお会いしたらお伝えください。」

私は今でも此処にいます。貴女の事だって何時だって歓迎致しますと」

「わかりました」

未希が笑顔でそう返事をする、小太郎は心が救われたように笑った。何があつたのかは未希にはわからない。

それでも、反応から察するに遠音の事を大事に思っていてくれる人なのだろうと安心した。

そのまま暫く沈黙が続いたが、やがて、気まずそうに靖が口を開く。

「それで、これから未希ちゃんはどうするんだい？ 私としては依頼主の七海遠音に発見の連絡を入れたいのだが。」

……その前に、君には、酷な話を一つしなければならぬ。それを聞いてくれるかな？」

「はい。全部覚悟してます」

「……わかった。今、君の親である十名家の十文字派は、ユニオンという組織と戦争状態にあるんだ。」

ユニオンというのは、鬼神、悪鬼、純血、混血という差別を全て無くそうという理念の下に活動している組織。

それには十名家の八神派も組み込まれている、もうこの日本を真っ二つに割っている組織同士に抗争が始まる。

私個人の情報だから信憑性は低いが……十文字派は、コアを手に

入れる為に、ユニオン傘下の家を幾つも襲ったらしい」

「え……。お父さん達が……？」

「ああ。いかに十文字が最強であろうと、あの千島蒼二を筆頭に天美運命まで居る組織だ。戦力はほぼ互角。

かなり危険な争いになってしまっただろう。……すまない。これ以上は君を動揺させるだけだね。ここで終わろう」

未希は顔を青くして黙ってしまった。自分のした事が原因で、父親達が戦争を引き起こそうとしている。

いかに頭が良かろうが、まだ未希は小学校を卒業したばかりなのだ。そんな子供に、この言葉は重すぎた。

そして更に、最悪な事が起きてしまう。

「千島蒼二って……僕のお兄ちゃんの事じゃん。何で……お兄ちゃんと未希ちゃんのお父さんが戦うの？」

「な、なんと。君は、あの千島蒼二の弟なのかい!？」

靖にもこれは予想できていなかったようで、口を開けたまま硬直してしまふ。小太郎は大体の事情を知っていたのか

苦々しげな顔で居る。未希と光希にかける言葉が見つからない自分に苛立っているようだ。

二郎は一人俯き、「あいつら……本当に……」と何やら感傷に浸っているようである。

未希と光希も顔を見合わせたまま動けないで居た。両方の兄と父が殺しあうのだ。想像したくない。冗談であってほしい。

「しゅめ……ん……なさい」

未希が先に泣き出してしまった。その為に、光希は泣くに泣けない。何をしていいのかわからない。

部屋には未希の嗚咽だけが無情に響き渡っていた。光希には、どうにも出来ない。頼りになる母も居ない。

未希の父親と大好きな兄が争う。だったらどうすれば　と考えていると、二郎　藍がようやく口を開き、

「でも、今ならまだ間に合うんじゃないかな？」

「え……」

「まだ、十名家の十字派とユニオンの抗争は始まっていない。だったら、ここでごちゃごちゃ考えているよりも

動いたほうが良いと思いますよ。よくよく考えてみれば、この事件は未希ちゃんとお父さん達が冷静に話し合えば

終わるんじゃないでしょうか。大切なのは、未希ちゃん。君の気持ちだよ。全てを知って、君はどうしたいのか。

その答えは、もう出てるのでしょうか？」

「……はい。大体の気持ちは固まりました」

「なら、すぐに出発しようか。というわけで、準備してきてください」

「え……？」

「君も立派な鬼塚の客人だ。そんな君に後は一人でどうにかしろ。なんて言ったら鬼塚の名が廃ります。」

だから、俺が責任もって最後まで関わります。幸か不幸か、俺に

も全く無関係という話じゃなさそうですしね。

海原さんは事情が事情なので、しばらく此方の屋敷で静養なされてはどうでしょうか。傷も暫くの通院が必要でしょう」

「い、いいのですか……?」

「構いませんよね、親父殿」

「ああ、お前の言うとおりで。ヤクザだろうが、なんだろうが、困った時はお互い様ですからね」

「本当に、申し訳ない」

靖が深々と頭を下げると、藍は手を一回叩き、

「では、お二方は準備の方をお願いします。光希君と親父殿は少し残ってください。大事な、お話がありますので」

そして、未希と靖が部屋から出て行き、部屋には小太郎と光希と藍の三人だけが残った。

どうやって話したものと、藍は苦笑する。とりあえず、この二人には全てを話しておかなければならない。

一人は血の繋がった一族。もう一人は、血は繋がっていないが家族だからである。

「先程見て頂きわかったと思いますけど、俺は 鬼神という悪鬼と人間の間に生まれた生物です。」

こう見えて二百年程生きています。本名は、千島藍。そして、九年前にラグナロクという鬼神の組織に所属し、

光希君のお兄さんとお姉さんの、蒼二と遥緋と殺し合いました。

結果、俺は負けたものの、大切な事を彼等から

教わり、仲間に生きると命を繋げられ、その過程で記憶を失い、ずっと鬼塚二郎としてこの場所で生きてきたんです」

光希は啞然としている。小太郎は小太郎で、何処か藍の正体には感づいていたのか、特に動揺した様子は無い。

暫く会話が止まり、静寂が訪れた。小太郎は何も言わない。藍は真っ直ぐに光希と小太郎を見ている。そして、

「ほ、本当なの……？ 二郎兄ちゃんは、ぼ、僕のご先祖様？」

「そうだよ。君のその首にかけている飾りがあるだろう。それは、俺が蒼二と遥緋に託した物なんだ」

「あ……お兄ちゃんとお姉ちゃんが言ってた。この首飾りは、とっても大切で、悲しい物だって。

「ご先祖様が生まれてくる僕の為にくれたものだって言ってたよ！」

「ああ。君を、新しい千島の新しい可能性だと見込んで、な」

「うん！ ありがとうね。二郎兄ちゃん」

「いえいえ。以上で話は終わり。後で、携帯電話を貸してくれるかな？ 蒼二か遥緋に連絡を取りたいんだが」

「わかった！ じゃあ、僕は未希ちゃんのお手伝いしてくるね」

光希は笑って手を振ると、部屋から出て行った。まだ、まともに理解していないのだろう。それとも順応が早いのか。

どちらにしても、面白い。あの時、滅ぼさなくて良かったと素直

に思える。それ位に、藍は光希に期待していた。

式神の面から見ても、性格の面から見ても、確かに蒼二の言ったとおり、新たな可能性が十分に期待できる。

そして、光希が居なくなると必然的に小太郎と藍は向き合う事になった。何を言えば良いのかわからない。

それでも、言葉に表せないほどの感謝の気持ちはある。藍は、小太郎に深々と頭を下げ、

「親父殿……本当に、今まで育てていただいてありがとうございます。このご恩は一生忘れません」

「……馬鹿者」

「……は？」

「親が子供を育てるのは当たり前だろう。……二郎、お前は私に夢を見させてくれたんだ。二度と、子育てが出来ないと思っていた

この私にもう一度チャンスをくれた。感謝するのは此方の方だよ。この九年間、私がどれ程幸せだったか。どれ程、救われたか……

お前がどんな存在だろうと、どんな罪を犯していようと、お前は私の大事な息子だ。私は何時だって、お前の味方で父親なんだ」

小太郎の言葉が胸に響き、過去の記憶が蘇る。悪鬼だった父は、藍と会話する事無く、討伐されて消えてしまった。

たった一人の家族だった、母は千島によって追い詰められ、自分が最後に焼き尽くしてしまった。

そんな自分の事を、全てを知った今でも息子として扱ってくれる小太郎の優しさが、思いが、藍の心を決壊させようとする。

唇が震え、どうしようもない感情が体の中を駆け巡る。藍は、何とかそれを堪えて顔を上げ、

「では、行ってきます　お父さん」

そう言うと、藍の顔が優しい笑顔を形作った。

### 第35話：約束の空へ（前書き）

クライマックス突入です。

ここらで一気に畳み掛けたいところですが、  
相変わらず、忙しいという現実orz

### 第35話：約束の空へ

凜ちゃん。遊びにきたよ！

希は、とても心が綺麗な子でした。彼女を知っている人間なら、誰でもそれを知っている筈です。

悪意なんて持った事が無い、とっても綺麗な心。誰かが困っていれば、どんな人でも見捨てずに助ける。

正に、慈愛に満ちた少女でした。

凜ちゃんー？

そんな希の事が私は大好きでした。家族よりも、大事だったと言えるでしょう。でも、心の奥底では

私は希に嫉妬していたんです。自分も、あんな美しい心が欲しい。あんな風に生きてみたい。

それは、希と関わった誰しもが一度は思う事ではないのかと、今ではそう思えます。

あはっ。無視しないでよ。今日はね、プレゼント持ってきたんだよ。

希は全てを手に入れてました。暖かい家族。大切な恋人。そしてもっとも愛おしい娘。それもたった数年で。

それに比べ当時の私は 何も持っていないませんでした。一之瀬史上、最も力が無い式神使いでした。

ある意味では私と戒は似ていました。戒は無能と決め付けられ、私はそのまま無能という事実。

凜ちゃん？ 泣いてるの？

私の式神は、戦闘能力が皆無に等しかった。手の平に金色の光を集めて、それでモノに触れるとそれを操作できる力。

正直な話。一之瀬の傀儡の力と殆ど変わりません。威力だけで考えてみると、傀儡の方が力強かった位です。

その事を、新しく入学した学校のクラスメイトに陰口を叩かれ、私は一人落ち込んでいました。

曰く、同じ十名家なのに、九我山さんの方がずっと強い。そして、当時の私は、お世辞にも社交的とは言えませんでした。

逆に、律さんは馬鹿みたいに人気がありましたので、私は格好の標的だったでしょう。女子校では日常的な事です。

でも……悔しかった。何度、教室を抜け出して泣いたことかもう、限界だったのです。

私はしつこく事情を聞いてくる希に、やけくそで全てを話しました。バカにしたいなれば、お前もすれば良いと言う感じで。

……思い返してみれば、私は愚かでした。私のこんな……こんな駄目な式神を初めて凄いと言ってくれたのが、希だったのに。

「何時か、でっかい飛行機を動かして、一緒にお散歩したいね」

それが希の私の式神を見た時の感想でした。その言葉に、どれ程救われたか。どれ程心が軽くなったか。

そんな事も全て忘れてしまっていた私は

凜ちゃんの式神は無能何かじゃないよ！ 私が保証してあげるから！ ね、元気出して！

うるさいわよ……

え……？

貴女みたいな悪鬼に保証されて、何になるっていうのよ！？  
人間じゃ無いくせに、知った風な口を利かないで！

その、最低な一言を発端に私は爆発してしまいました。あらん限りの言葉で、希を罵倒し、傷つけました。

どの位怒鳴っていたかは覚えていません。私が疲れて喋るのを止めると、希は何時ものように笑ってました。

その瞳に大粒の涙を溜め、悪鬼でごめんね。と笑うと、希は私の前から走り去って行きます。

呆然とする私に残されたのは、どうしようもない罪悪感と、希が私に持ってきたプレゼントの入った袋だけ。

「私は……」

取り返しのつかない事をしてしまった。だけど、希に会うのが恐い。あんな酷い事を言ったら流石の

希でも怒ると思っていた私は、ただ家の中で泣くだけでした。それが、そもそもの間違いだったのです。

式神は自分の根源なのです。存在の力だと私は解釈しています。

こんな矮小な私に、強い式神が在るわけがないのです。

戒や遠音や四つ子ちゃん達は力が強い。それはある種の心の強さでは無いのでしょうか。あんな事があつたわけですからね。

だから私だって このままじゃ駄目でした。変わる必要がある。そして、今度こそ希に謝りに行こう。そう考えてた矢先、

「凜……希が……消えちゃった……」

旅行へ行っていた筈の戒達がズタボロに打ちのめされて、一之瀬家へとやってきました。その直後です。

お父様達から戒達が一つの町を消滅させた事を聞いたのは。結果、戒達は身柄を拘束され、十名家会議へと出廷。

結果的に戒達は無罪となり、十名家の私達十文字派が金と権力に物を言わせ、全ての後始末を行いました。

その時の私と言うと 抜け殻でしたね。朝から晩まで泣きじやくり、希へと必死に謝り続けていました。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

どれだけの謝罪の言葉を述べようとも、彼女はもう帰ってきません。私達は、永久に喧嘩したまま終わったのです。

厭らしい私は、どうにか償いたくて未希の世話を率先して行いました。希にそっくりな未希に許しを請いたいのでしょうか。

よくわかりませんが、私は愛情を持って未希の世話に従事しました。未希の為なら、何だつてしました。

お父様達から存在を疎まれても、一之瀬の仕事を投げ出してでも、これが私にできる唯一の罪滅ぼしです。

全てを失っても良いから、私は未希にだけ愛を注ごう。ですが、その内に遠音が退院し、十文字家に住む事になった

ので、段々と遠音に未希の世話を任すようになった私。それでも、出来るだけ未希に何かしたかったのです。

「凜。無理だけはするなよ……誰も、悪くないんだ。無理に自分を責めるのは良くない」

「わかってます……」

「私だって悔しい。希のお陰で、また笑えるようになったのに。生

きる力を取り戻す事が出来たのに　っ！

その笑顔も、力も、希を守ってやれなかった。だったら、こんな笑顔と力に意味はあるのかと問う毎日だよ」

遠音も相当苦しいみたいでした。遠音の式神は希と一緒に召還したようです。ですが、その力を使えなかった。

希が与えてくれたのに、何も使えなかった。私だって　とまで思った所で、一つの事を思い出しました。

あの日、希がくれたプレゼントの中身は何だったのでしょうか。慌てて家に帰り、机の引き出しにずっと保管

していた包みを開けるとそこには　工具セットが入っていました。私がプラモデル用に欲しかったヤツです。

慌てて電話をかけて、戒にその事を聞くと、

「……大切にやってくれ。希が初めて、自分で稼いで買ったプレゼントなんだ」

涙が、零れました。安物ですが、希は私の為を思って、頑張つてこれを届けてくれたのに私は

工具セットを抱きしめて、しばらく泣いていると、もはや迷いは無くなりました。

式神の力を発動させ、光を手にも宿らせませす。そして　その手に希の工具を持ち、心を込めてプラモデルを作っていきます。

一パーツ一パーツ心を込めて。そして、力を使って完成した初めてのプラモデルが後に私の式神名となる【空船】。

希と一緒に飛べるように。また希と一緒にそこでお話できるように。心を込めたら、式神はそれに答えてくれました。

そして今、私は　百隻以上の空船に囲まれています。全ては、この日の為に、と心をこめて作った傑作集です。

「希 約束、守るから。帰ってきたら、今度こそ一緒に飛ぼうね」

一番大型の空船に乗り込み、全ての空船と感覚を繋ぐ。それだけで、その周囲にあった小さなプラモデル達が  
浮き上がりながら、次々と巨大化していき、私達の約束の空へと  
上昇していきました。

十文字家の屋上から、次々と空船が上昇していくのを見て、戒も  
森羅万象の力を使い、上昇。

現在の十文字家の周囲には、三つの柱が立っている。戒と四つ子  
達で作った、今日の為の魔具である。

それを見た後、もう一度周囲を確認。すぐ近くには、ボードに乗  
っている遠音。空船の先頭付近には、

黒龍。その背中の上には、雨龍と千里と颯太が乗っている。そし  
て、自分達より更に前の場所には紡の姿。

此方の準備はほぼ万全だろう。後は、四つ子の作業を待つだけで  
ある。

「皆。こっちは準備完了。 そ、そろそろ、ゲートを開けるよ？」

千春の少し震えた声が、周囲一体に響き渡る。その言葉に、戒達  
は緊張した面持ちで無言の肯定をした。

譲れない思いがそれぞれにはある。ユニオン側もそうであろう。だが、こればかりは負けるわけにはいかない。

全てを奪われ、唯一の娘の些細な願いですら叶えられない世界なんて認めない。戒は息を軽く吸い込み、

「皆、行くぞ　　っ！　希を、世界から取り戻すんだ！」

そして、空中に魔具で作られた巨大な門が現れた。それはゆっくりと開き、その奥の風景、ユニオン本部を映し出す。

凜の空船を先頭に、次々と仲間達はその門を通り抜けて、ユニオン本部付近へと空間転移をした。

戒もすぐに速度を上げて、門を潜りぬける。一瞬の眩暈の後、すぐに景色が変わり、かなりの量の式神の力が襲い掛かってきた。

「流石に、読まれていたか……」

目標の結晶及びコア輸送トラックが先程確認した時とは違い、停車していた。そして、その付近には既にユニオンの布陣がひいてあった。

何人もの式神使い達が次々と攻撃してくるが、戒にとってそれは大した脅威では無かった。ゆっくりと腕を振り、森羅万象を発動。

五指に炎が灯り、それはすぐに五つの巨大な火の玉として、地面へと叩きつけられる。　直後、怒号と悲鳴。手加減したとはいえ、

何人かの式神使い達が爆発によって地面へと倒れ付していた。だが　数が少なすぎる。もっと居たはずなのに、と思っていると、

「お久しぶりです。戒さん」

遠くから声が響き、それは一瞬にして接近してきた。大気を切り裂いて、九我山令が拳を構えて疾走してくるのを視認。

すぐさま、けん制として雷撃を放つが、令はそれを軽々と避ける。速い。今までの令とは段違いの速度だった。

「令か。また、成長したようだな」

「お陰様で　色々と考えさせられましたよ」

一瞬で戒に接近し、拳を乱打する令。だが、それは戒の着ていた魔具製のコートがすばやく反応し、全て弾き返した。

だが、令は全くひるんだ様子が無い。戒の空中での回し蹴りを軽く回転してかわし、そのまま戒の肩を掴んで、回転するように地面へと投げつけた。

「っ！」

「碧ちゃん。行くよ！」

「……うん！」

令は落下する戒目掛けて勢い良く下降すると、手甲のついた右腕を振り下ろした。直後、令の右腕が何倍にも巨大化し、戒へと命中。

これが碧の式神【打出ノ拳】手甲型の式神であり、腕の部分とそれに触れたモノの大きさを好きな大きさに変えられる力。

通常の何倍もの太さの腕で殴りつけられた戒だが、魔具製のコートを着ていた為に、骨は折れていないようだ。

そして、それでも何とか会は空中で姿勢を建て直し、大地へと着陸する。だが

「しゃあああああッ！　派手に行こうぜ十文字さんよオ！」

上級悪鬼の火鬼　太郎が燃え盛る巨大な剣を振り下ろしながら、上空より攻撃を仕掛けてきた。

戒はそれを紙一重で避け、転がりながら太郎から距離を取り、体勢を立て直そうとする。

だが、攻撃はまだ終わっていないなかった。太郎の影から新たな敵影。紫が無駄に放電しながら、戒へと迫る。

接近戦しかない。戒はそう判断し、懐から魔具製の短刀を取り出し、腰を落とす。

「残念やったな！」

戒の射程に入る直前、紫が大きく飛び上がり戒を大きく飛び越した。そして、その後ろには見た事が無い

小柄な少女。紫の放電は少女　碧の存在を隠す為の放電だったのだ。碧は、戒の放った斬撃を紙一重で避け、

その腕を掴むと、小柄な体を活かして、下段から顎を跳ね上げるような蹴りを見舞う。

幾ら最強の式神使いといわれる戒でも、肉体は生身の人間と大差無い。何とか魔具の膜を作り、少しは防御した

ものの、頭がクラクラして膝をつきかけてしまう。

「……太郎ちゃん、行くよ」

「ちゃんをつけんな、ちび！」

太郎と碧の風と炎を纏った拳の一撃が戒に炸裂し、戒は近くにあった木々をなぎ倒しながら転がっていった。

「……ちびじゃないもん。碧だもん」

碧のローキックが太郎に炸裂し、痛みに飛び上がる太郎。その合間を紫と神憑した令が走っていく。腕にはレールガン。放電しながら、コンデンサへと電力を送っていく、その照準を戒へと合わせた。

「厄介なコンビネーションだ。何時の間に、こんな強くなったんだか」

戒がそう言いながら起き上がり、コートの袖から鎖分銅を射出した。完全に射撃体勢に入っていた。令はそれを避ける事が出来ない。胸の中心に鈍い痛みが走り、吹き飛ばされてしまう。

その間に戒は碧と太郎が接近してくる前に、力を練り上げる。先ほどまでとは違い、一つの属性ではなく複数の属性の力を構成。結果、燃え盛る氷。放電する炎といった常識では考えられない力が発生。

「これが、森羅万象の真骨頂だ」

その一つ一つの力のレベルが高い。いや、高すぎた。直撃したら確実に命が無いと判断した。令達はすぐに防御体制に入るが、間に合うかどうか微妙な所。その時だった。

上空で何かが光る気配。上を向くと、無数の狐を模した光が戒目掛けて流星のように降り注いでいく。

「あ……さ、運命さん！」

着弾した付近に猛烈な爆風。そして、令の目の前に天美運命がゆ

つくりと着地し、

「助っ人に来たよ、令。ユニオン関係じゃないのに……………ってあれ？」

運命は、令ではなくその隣に居た碧を見て硬直した。碧も碧で一瞬呆けたような表情で固まる。

そして 令の中から紫が慌てて飛び出してきて、運命を驚きを隠せない顔で見据えると、

「ば、ババア！ アンタ、何でこんなトコにおるんや！」

「……………運命、人間嫌いだった筈」

それに一番困惑したのは、令だった。何故、この二人が運命の事を知っているのだろうかと思う。

「あれ……………紫ちゃんと碧ちゃんは、運命さんと知り合いなの？」

「知り合いというよりも、この二人は昔九尾の狐に属してた鬼神。その時に、運命と喧嘩して出て行ったの」

「ふ、フン！ あたしは謝る気はないで。アレはババアの方が悪いかんね」

「……………私も。あれは運命がくーちゃんを苛めたから悪い」

どうやら深い因縁があるようで、紫と碧は敵意をむき出しにして令の後ろへと隠れた。

……………威勢が良いくせに運命の事が恐いようである。自分も姉や梨

香から聞いた程度だが、昔の運命は

兎に角恐かつたらしい。令が出会った頃には穏やかな人物となつてはいたようだが。すると運命、持っていた阿修羅姫を地面に突き刺し、頭を下げ、

「あの時は、確かに運命が悪かつた。ごめんね、紫、碧。運命は凄く反省してるから許して欲しい」

その言葉に今度は度肝を抜かれたような表情になる紫と緑。それもその筈。二人の知っている天美運命とは

絶対に自分の非を認めない我が俣の権化のような存在だったのである。その運命がこうやって素直に反省して

頭を下げている。本当にこれが天美運命なのかと思ってしまうほどに、運命は変わっていた。その光景を見ていた令は、空気を読んだのか、

「ほら、謝ってるよ。 僕の言いたい事がわかるね？」

と二人を嗜めるような視線を向けて言い放った。

「あ……ああ、も、もうええよ。ウチらから二十一年近く前の事を何時までも怒っておらんし」

「……私もいい。くーちゃんとやまちゃんはまだ生きてるの？」

「生きてるよ。空我と大和はなんだっけ……女の子を言ばせるお店を初めたから、最近は全然会ってないけど」

その言葉に大きく反応したのは碧だった。ドス黒いオーラを撒き散らし始め、何やらブツブツと呟き始める。

少しだが、和やかな雰囲気 flowed。紫と運命は照れくさそうに、お互いの視線を合わせようとしない。

そして 完全に蚊帳の外に置かれていた太郎が、ため息とともに令達に告げた。

「おい。十文字戒はとっくに行っちゃまったぞ」

第36話：あなたの悲しみに寄りそう（前書き）

うーむ。

ブログ、始めました。

<http://hiro-hiro-seesaa.net/>

良かったら訪問してください。

DaysとPASTのトップからリンクで飛べます。

### 第36話：あなたの悲しみに寄りそう

十文字派とユニオンの抗争は激化の一途を辿っていた。ユニオン本部に突然現れた巨大な門からは大量の空船が

ユニオン目掛けて迫って来た。しかも、その空船は最悪な事に、特攻専用の空船であった。

次々と本部にある重要施設や拠点にそのまま押し潰すようにして墜落し、その混乱に乗じて指揮系統は分断。

十文字派の直系達が何処に居るかの所在も掴めないまま、戦いの流れは確実に十文字派に流れつつあった。

一番辛いのが、無線の電波障害が激しい事。その類の魔具が何処かに設置されているのか、通信が取れない。

すなわち、行き当たりばったりでの戦闘になってしまっている。そんな状態では少数精鋭の十文字派の方が遥に有利。

「……………」

牧島竜胆は、ユニオン本部の別棟にある入院施設の窓から、状況を見ながら現在の状態をそう分析していた。

部屋の隅には、廃人の如く壁に持たれかかったままの郁人。今度は、竜胆の声ですら殆ど届かなくなってしまうている。

話しかければ抱きしめてガタガタと郁人は震えたまま長時間放し続けてくれない。あの戦いで自分が郁人の為と思った行動は、

郁人の心に重大なトラウマを与えてしまったようだ。しかも、フラガラツ八まで壊されては、もう立ち上がれないようである。

そんな郁人を誰も責めなかった。このユニオンが設立された頃から、常に前線に立って剣を振ってきたのは郁人だという事はユニオンの誰もが知っている。そんな郁人を責められる者等誰も居ない。竜胆自身も責めれない。

「郁人お……」

話しかけても肩をびくつと震えさせ、郁人は布団を被ってその中へと潜ってしまった。

現在、状況は相当危うい。自分達も手伝いに行かなくては、酷い結果になってしまうだろう。だが郁人を置いてはいくのも苦しい。これは甘さだろうか。それとも、過保護すぎるのか。竜胆にはわからない。心が理解するのを拒否している。

だから、竜胆にはなるべき刺激しないように郁人が元に戻ってくれるのを待つしかない。だが　と焦りが浮かぶ。決断が迫られていた。

「ね、ねえ、郁人お！」

竜胆は意を決して郁人へと近づいて行く。布団を引き剥がし、郁人を真正面から見据えた。

「竜胆……」

此处で焦ってはいけない。竜胆は心を落ち着けて、話を続けた。

「私は生きてるよ。郁人が守ってくれるお陰で、今日も生きてるよ。だからさ、もうそんなに脅えないで。」

郁人が守ってくれた分、私が守り返すから、そんなに自分を責めないで。弱気にならないでよお……」

「でも……フラガラツハも……」

「神璽さんと由加さんが直してくれたよ。私がずっと預かってた。郁人が戦う気になったら渡してくれって」

竜胆はポケットから、新しくなったフラガラツハを取り出し、郁人の手を優しく掴むと、フラガラツハを握らせる。

その瞬間、郁人の目から涙が零れた。約束を守れなくて、ごめんなさい。竜胆を守れなくてごめんなさい。

と心の中で再び感情が溢れかえってきた。牧島に捨てられたあの日から、竜胆を絶対守るって決めたのに、

フラガラツハを手にしたあの日からもう絶対に逃げないって決めたのに。弱い自分はまたこうやって塞ぎこんでいた。

竜胆とフラガラツハを破壊された時の絶望。もう、生きているのが嫌になるくらいの絶望が郁人を埋め尽くしていた。

「俺は……もう、守れない……守れる気がしない」

遠音の強さに勝てる気がしない。どうしようもないまでの力の差。また、フラガラツハと竜胆を破壊されてしまう。

暗い未来の想像が再び郁人の心を埋め尽くしていく。郁人と繋がっている竜胆には、それがすぐにわかった。

ゆっくりと近づき、郁人を思い切り抱きしめ、震える声で竜胆は  
呟く。

「 竜胆の、花言葉って知ってる？」

「 ……知らない」

「正解は、「あなたの悲しみに寄りそう」だよ。パパさんがアタシに名前をつける時に、これを思い出したみたいなの。」

郁人がどんなに辛くても、アタシが守ってあげられるように。一緒に居てあげられるようにって。」

皮肉だよねえ。そんな名前をつけておいて、数年後には自分が郁人を辛い状況に追い込んでいたんだからさ」

「……………」

「郁人は一人じゃないんだよ。アタシはどんな事があっても郁人の味方で、恋人で、式神なの。」

絶対に傍に居るの。蒼二さん達だって、皆郁人の事を思ってくれてる。もう、一人じゃないんだよ」

竜胆の言葉にも郁人は俯いたままだった。流石にもう、限界である。このままでは本部ごと郁人までやられてしまう。

特に七海遠音の存在は危険だ。郁人を守るためにも、あの女は自分が倒さなくてはならない。

竜胆は気合を入れて、頬を一回叩くと鴉を顕現させて、部屋から出て行った。後に残された郁人は、フラガラッハを

見つめていた。前よりも、攻撃的になったデザイン。直した二人の性格がよく出ていると思う。

「どろしろってんだよ……………」

どろしろうもない怒りが沸きあがった。

「好きな女も、約束も守れなくてよ……………」

再び涙が零れていく。

「もう、疲れたのに。もう、無理だと思ったのに　俺にはそんな器用な事は出来ない筈なのに！」

何かが郁人の中で渦巻き始め、

「俺は　っ！　どうしようもない雑魚だった筈なのに！　誰からも期待されなかったのに！」

郁人は激情のままに立ち上がり、窓を開けて外を見た。あちこちで炎が上がり、悲鳴や怒号が聞こえる。

本当に、状況が切迫しているのを肌で感じた。このままでは、不味いという事も。

そして、ふと視線を下にやると、

「あ……」

南野喜一を初めとした、郁人の隊の全員が棟の入り口前に整列していた。その後ろの方には竜胆の姿もある。

ずっと、待っていたのだろうか。こんな駄目な人間を信じて。仲間がやられているのがわかっていても。

それでもただひたすらに自分を信じて。

このまま、尻尾巻いて逃げてどうすんだよ。

そんな思いが生まれる。部下の顔を見ていたら、不思議と心が軽くなつていった。その思いは更に強くなっていく。

七海遠音がどうした。ダインスレイヴがどうした。超動がどうした。あの脅威的な身体能力がどうした。

自分には最高の部下が居る。最高の恋人が居る。最高の式神

が居る。そして、最高の剣がある。

「俺はもう……あの時の牧島郁人じゃないんだよな」

全ての力に嫉妬していたあの頃と違う。今は　ユニオンの最高幹部の一人、牧島郁人なのだ。

来ていた服を脱ぎ捨て、部屋の隅に竜胆が用意していた何時もの戦闘用の服を着込み、階段を下りていく。

そして、部下達の前まで歩くと、その動きを止めて喜一を見て、軽く何時もの笑顔を作った。喜一もそれに応え、

「お待ちしてました、隊長。それでは、ご命令を」

そう口にした。

浅葱陸人と神埼森羅の相変わらずのコンビは、最悪な状態にあった。まず、現在居るのは二人だけ。

陸人の部隊は空船の特攻により、負傷者多数。その結果、前線から退いてしまっている。

森羅の隊は現在分散して他の隊の救助活動が主な活動となっている。その過程で一人でコアを守護していた

陸人と出会い、こうして先ほどまで妙な機械をつけた人型悪鬼と戦闘していた筈なのだが、

「お前と居ると、ホント退屈しねえわ。無論、悪い意味で」

「森羅。人生にはな。スリリングというスパイスが必要不可欠なんだよ！」

「テメエのは少し効きすぎだア！」

現在、森羅と陸人は数十のものの機械で出来た龍と水を主成分とした龍の猛攻から何とか身を守っていた。

原因は、数メートルはなれた場所に潜んでいる二階堂雨龍のコンセプト。建物の陰に隠れつつ、

じつくりと此方を追い詰めるようにして龍達を操っている。話に聞いていたのとは違い、相当な策士のようなのだ。

「埒があかねえな……。通信拾ってみつと、さっさと他のトコ行かなきゃ不味いみてえだしよ」

「ああ。七海遠音と六道紡のコンビが止められないらしい。もう、時雨と律のコンテナと、奏と狂の

コンテナからコアが奪われちゃったらしい。後はコアが入ってるコンテナは三つか。遥緋ちゃんのと

蒼威が守っているコンテナと、この俺達が守ってるコンテナだけだ」

「チツ……。状況は最悪か。郁人と竜胆がいねーから、こっちの機動力が完全にやられちゃってるし」

「愚痴るな。今は今の戦力で戦うことだけを考える。あいつなら、きつとその内来るさ！」

「わかってるっての！」

そう言うと、陸人は隠れていた物陰から飛び出し、間近に迫っていた龍を爆轟で握りつぶした。

それだけでは終わらない。爆発に巻き込まれた龍をそのまま他の龍へと投げつけ、その間に移動。

龍達の爪や羽の攻撃を避けながら、一瞬にして十数匹の龍を元の氷や機械へと破壊し、戻していく。

「相変わらずだな……」

森羅は背後から陸人の死角に回りこむ龍を次々と圧縮した水で撃ち落していく。段々と龍の数は減ってきたが、

それでも今度は龍の残骸を踏みつけるようにして、機械を装備した人型悪鬼達が迫ってくる。

だが、陸人は止まらない。殴り、蹴り、掴み、投げ、次々と悪鬼達をも破壊していく。やはり、凄い。

昔からそうだった。何時も真っ先に切り込むのが陸人、その後に蒼威が続く、最後に森羅がつく。

現在蒼威と一緒に居ないが、何時もと変わらない。相手が人間じゃないだけ。そう思うと、気がかなり楽になった。

「つしゃあ！ 森羅、どんどん行くぜえ！」

「ああ。ケツ持ちは任せろ」

そして、森羅は意識を集中し、地面の下を通っている排水溝へと意識を集中。水の全てを支配する感覚。

勢い、水量、それらを操作し、勢い良く地面を突き破らせ圧倒的な水の本流が陸人を避けて、悪鬼を飲み込んでいく。

だが、その水と水の間から黒い手が出てきて、陸人の顔面を掴むとそのまま飛翔し、コンテナへと叩きつけた。

雨龍が黒龍と合体したのである。だが、近接戦闘なら陸人の得意分野。すぐに爆轟を振って反撃し、雨龍と距離を取る。

森羅も加勢に行こうとしたのだが、建物の奥から更に悪鬼が向かってくるのが見えたので、そちらの相手をする事に。

そして、コンテナの上で獰猛に笑う陸人。そして、黒龍の中に入っている為表情が伺えない雨龍は、

「よお。はじめましてかな？ 俺は、浅葱陸人だ」

「知ってるぜ。柳村の葬式で乱闘起こしたり、五行の管轄で昔爆弾事件起こした浅葱陸人だろ？」

「あー……古傷を抉るんじゃない。これでも、反省はしたんだからよお」

「そして タイマン張らしたら、十名家の直系以上とも言われてんだよな」

「……お！ おお、マジか！ うっは。これで詩歌と梨香も俺の事を少しは見直すかも」

「だーが、それも今日で終わりだ。テメエは此処で俺に負けンだからなア！」

雨龍はそう言うと、陸人目掛けて襲い掛かった。陸人も、一度拳を打ちつけると、雨龍目掛けて走り出す。

そして、雨龍の右の拳と陸人の右の拳がぶつかり合い、爆発が起きる。 負けたのは、雨龍だった。

硬い筈の黒龍の拳部分にヒビが入っている。それに舌打ちすると、今度は左手を叩き潰すように振り下ろすも、

「遅エんだよ！」

陸人の拳の方が速かった。左アッパーが顎部分に炸裂し、後ろへと仰け反る。その間に陸人は距離を詰めて、

更に左右のストレートを雨龍の顔面部分にブチかまし、コンテナへと叩きつけた。流石に、強い。

だが、まだ雨龍には余裕があった。そう、まだ予知の力を発動させていない。たかが、純血だと思っていたのが

仇になったようである。雨龍は黒龍の召還を止め、口の中の血を吐き出と、

「第二ラウンドだア！」

雨龍の体から真っ赤な紋様が飛び出し、それによって雨龍自身も変化していく。翼が生え、指や耳が鋭くなり、

最後に雨龍の緑色に輝く目の瞳孔が縦に割れた。体が恐ろしく軽い。やはり、コンセプトを習得してよかった。

雨龍はニヤリと笑い、先程までとは段違いの速度で陸人に接近し、思い切り殴りつけた。それだけでは終わらない。

倒れる前に更に一撃を加え、倒れないようにし、更にもう一撃。そして、陸人が反撃を試みても、

「読めてんだよオ！」

予知の力により、陸人が攻撃してくるのは読めている。それに力ウンターを合わせ、拳を陸人の顔面に叩き込み、

そのまま勢い良く殴り飛ばす。コンテナの上から吹っ飛び、瓦礫

の中へと叩き込まれた陸人。

雨龍はそれに満足気に笑うと、更に紋様を顕現させて、森羅の水を水の龍へと変え、

「残りはテメエだけだぜ、神崎森羅」

そう話しかけるも、森羅は雨龍の方を向かなかった。相変わらずの表情で、悪鬼を駆逐し続けている。

やがて、数匹程人型悪鬼を水で押し潰した頃に、森羅はようやく口を開き、

「戦いの最中に余所見とは、随分余裕あんだな」

と言った。その言葉に、雨龍が後ろを振り返ると、そこには陸人が額から血を流して笑っていた。

アレだけ殴ったにも関わらず、全く外傷がないように見える。化け物並みの耐久力だと雨龍は半ば

呆れたが、再び気を引き締めなおし、陸人へと意識を向けた。

「まだやるか？」

「当たり前だ。動けなくなるまで闘りあう。これが、喧嘩の醍醐味ってヤツだろ？」

「上等だ！ 龍化した俺に純血のテメエが勝てると思ってやがるのかア！」

再び陸人を殴りつけようと、雨龍が飛び出そうとすると、陸人はすぐ近くに漂っていた雨龍のコンセプトを見つめ、

それに潜り抜けるようにして飛び込んだ。そして、コンセプトに

触れたので途端に陸人の姿も龍化していく。

馬鹿だ　と雨龍は笑った。いかに龍化しようとも、これは自分のコンセプト。触れれば、自分の配下なるのだ。

そして、浅葱陸人は強い。肉弾戦なら遠音までとは言わないが、強い部類に入る。それを操れば　とほくそ笑み、

「よっしゃ。おい、浅葱陸人。まず手始めに、テメエの親友を半殺しにしてくな」

そう命令すると、陸人は翼をはためかせ空中へと飛翔。そして、そのまま雨龍の方に向かってきて、

そのまま雨龍の顔面に回し蹴りを放った。突然の事に、受身も取れずに吹き飛ばされていく雨龍。

頭の中には　何故？　という疑問。動揺したまま立ち上がると、陸人は野生の獣のように笑い、

「おい、クソガキ。一つ良い事教えといてやるぜ」

「な……」

「俺の心を支配出来るのは、この世界でたった一人。　浅葱詩歌  
だけなんだぜッ！」

「テ……テメエには常識ってモンがねえのかああッ！」

そのまま猛然と雨龍へと襲い掛かり、手当たり次第に殴りつけていく。強化された陸人の拳は

先程までよりもずっと凶悪だった。心眼で一発目は避ける事が出来ても、二発目に体と思考がついてこない。

しかも陸人は肉弾戦なら自分よりずっと強い。更に手にはそのま

ま爆轟までついているのだ。殴られて痛みで

思考が麻痺しながらもそんな事を考えていた。そして、完全にグロッキー状態になった雨龍を陸人は見据えると、

「行くぜえ！ 必殺　ラブラブ右ストレートオツ！」

凄まじい勢いで繰り出される拳。だが、その間に誰かが割り込んできた。黒い腕に陸人の爆轟が掴まれている。

見上げるとそこには、七海遠音が立っていた。凄まじい速さだ。あの一瞬で、割り込んできたのだ。

そんな事を思い、警戒しながら陸人は遠音から距離を取った。更  
に下の方では、三枝千里が森羅に迫っている。

状況は最悪そのもの。流星の陸人にもこれには焦った。

「すみませんね。浅葱の旦那様。お宅のお弟子さんを半殺しにして  
しまいましたよ」

誰の事なのかはすぐにわかった。自分の弟子と言われれば莉

王か時雨のどちらか。しかし、莉王は強い。

そして時雨はあまり強くない。莉王が敗北する光景は想像できな  
いが、時雨がボコボコにされている様子は

簡単に想像できた。我ながら酷いとは思いつつ、陸人は笑い、

「ま、アイツじゃアンタにや勝てねえわな　ああ、だけど。何か、  
スゲーム力つくなア！」

そのまま左拳を振り回すも、遠音には簡単に避けられてしまった。  
そのままお互い距離を取り、

何時でも動ける体勢へとお互いが構える。そして、勝負は一瞬の  
内に行われた視認が難しいほどの速度で

お互いの拳が顔を掠めていく。だが、それも長くは続かない。陸人の突き出した左腕が超動によって、固定。

一瞬動きが止まり、その左腕遠音の回し蹴りが直撃。鈍い音がして、陸人の左腕があらぬ方向へと曲がった。

「ぐああアアツ！」

「凄い！ 純血で此処まで私の速さについてこれるのは貴方ぐらいでしょうね」

遠音はそう褒めると、コンテナに拳を一発叩き込み大穴を開けた。そこには黒く光り輝くコアがある。

超動によってそれを浮き上げらせ遠音は懐から機械を取り出し、その中へとコアを吸い込んだ。

陸人は痛みで何もする事が出来ない。森羅は と思い、そちらを向くも、三枝千里と切り結んでいて

此方どころではないようだった。そして、視界の上の方にとあるモノを見つげ、陸人は笑顔を作ると、

「へっ……まだ、そう言いきるのは早いんじゃないの？」

「え？」

「ようやくきやがったか。おい、郁人！ 引きこもりは治ったのかよー！」

直後、遠音と陸人の間に一本の剣が突き刺さった。それは、攻撃的なデザインの銀色の大剣 フラガラッハ。

凄まじい衝撃に、コンテナは跡形も無く吹き飛ばされ、その上に乗っていた陸人と遠音も問答無用で飛ばされるも、

何とか体勢を立て直し、上空を見上げた。すると、次々と紋様が出現し、ユニオンの郁人の隊が次々と剣の式神を構えて、降下してくる。

その光景を見て、遠音は獰猛に笑った。空中の一人。黒衣を着込んで凄まじい速度で落下してくる郁人だけを

見ている。そして、郁人は華麗に陸人と遠音の中間辺りに降り立つと、フラガラッハを引き抜き、

「遅れて申し訳ないです。後は、俺に任せてください。もう、負けませんか」

切っ先を遠音に突きつけ、そう言い放った。

### 第37話：すれ違う思い（前書き）

ブログの方ではdaysやるとかほざいてましたが。  
体調の問題で急遽PASTに。寒いよー

### 第37話：すれ違う思い

純血生まれ、しかも滅ぼされた御崎の下の家。式神は、能力不明の刀剣。身長は低い。それが、自分のステータス。

それでも、何とかそれなりの式神関連では有名な高校に入学し、それなりの日々を送っていたあの頃。

思春期の青少年なら誰でも体験する恋、友情。好きな子は同じ部に所属する十名家のお嬢様。しかも、結構自分に厳しい。

そんな自分だが、彼女には憧れていたもので、少しでも釣り合う男になろうと努力をした。誰よりも、素振りをし。誰よりも訓練を長くした。

その結果かどうかはわからないが、何だかんだのうちに彼女と恋仲になり。そして、その全て奪いつくされた。

二階堂龍一。あそこまで腐った色情魔は人間の歴史の中でもそうは居ないだろう。学内でも二階堂の権力を使って

やりたい放題。気に入った女は全て奪い、また男が居た場合は学校を強制退去。もしくは、半殺し。

自分もその例にぶち当たり、結果。彼女は自分の前で龍一に弄ばれ、更に半殺しにされて自分は無実の罪を着せられて退学。

(そこからかな……)

力が無いのが悔しかった。あんな人間のクズさえ、自分は殺す事が出来ない。だから、自分もつとクズなのだろう。

何時かヤツを殺してやる。その一心で家を飛び出して、当時は賞金稼ぎ業が盛んではなかったので、フリーとして暗躍。

汚い事は何でもやった。血で血を洗うような生活。何時の間にか、心は荒んでいく一方であった。

その結果、式神の真の力を知り、敵を倒し、或いは殺し、また在る時には売りさばくという当初の目的を忘れたまま過ごす毎日。

（僕の人生の転機が始まったのは）

そして、ユニオンという新しく出来た組織と対立し、牧島郁人と出会った。今の郁人は覚えていないだろうが、

一瞬で戦闘不能に成る程の斬撃をくらい呆気なく気絶してしまった自分。それだけなら、まだいい。強い人間なんて多く居る。

だが、牧島郁人は純血上がり。しかも、無能が原因とされ、牧島を追放されているほど。最初はただの興味本位だった。

暇つぶしにどんな人間が見てやろう。たった、それだけでユニオンの採用試験を受けに行くと、

「ユニオンに入って、貴方が何をしたいのか、お答えください」

面接官は面白い事に、牧島郁人だった。その事実には自嘲気味に笑い、自分は答えた。

「人を知りたい。強さの意味についても、僕はもつと知りたい」

まさか受かるとは思ってもいなかった。最初は数ヶ月で辞める気満々だったが、配属された場所が浅葱陸人の下

として働く場所だったのだ。彼が良く溜める仕事の処理をさせられ、彼の世にも馬鹿馬鹿しいトラブルにも付き合わされた。

すると、何時の間にか自分が笑っていた事に気づく。部下や上司と馬鹿なトラブルに巻き込まれ馬鹿騒ぎを繰り返す日々。

気がつけば一年が経過し、何時の間にか郁人の隊の中心役として、

勝手に部署を変えられてそこでも大騒ぎを繰り返す。

(幸せに浸かっていたんだよね)

あれから数年、何時の間にか郁人の腹心の部下となり、彼の背負った物や、彼の強さの意味を知ってしまった。

それは、自分よりも重いかも知れない。それでも、郁人は諦めない。全てを背負って、自分達の前立っている。

それを知った頃から、再び自分の中に意思が芽生えてきた。二階堂龍一から、彼女を救い出そうという意思が。

(結局成功したわけだけど……やっぱり、神様は僕が嫌いみたいだね)

龍一を殺し、後は彼女に任せよう。あの時、逃げた自分に彼女を幸せにする等、とんだ笑い話だ。

彼女の事は事後処理だけ何とかしたら、もう忘れよう。悪いのは自分。そう決め付けて、ユニオンで仕事をしていた

矢先にこれである　と、南野喜一は悲しそうな顔で、大地にゆっくりと降り立った。そう　眼前に居るのは、

「き、喜一君……」

あの時と変わらず、泣きそうな顔をした三枝千里。自分が守れなかった、過去の恋人。

「……上手く言えないけど、謝っておく。守れなくて、ごめん。でも、龍一はちゃんと始末しておいたから」

「喜一君。まさか　っ!」

「僕はもうあの時とは違うんだ。汚らしくなったユニオン牧島部隊副隊長　南野喜一。君の、敵だ」

喜一は虚空から剣を抜くと、千里の横を通り過ぎて氷と龍と人型悪鬼の討伐を始めてしまう。

それは、千里を守れなかった喜一のケジメ。もう、二度と千里の心を求めない。そして、傷つけない。

暫く俯いていた千里はそれを違う意味で解釈したようで、歯を食いしばり悲しみを心の奥底に封じ込めると、

冷たい表情を作った。もういい。自分は自分の家族と友達だけを救う為だけに剣を振るおう。そう決意し、

「かかってきなさい」

千里を囲んでいた郁人の部隊の人間にそう告げると、三人ほどが同じ剣の式神を構えて、突っ込んできた。

流石に剣を主体とした部隊だけあつてか、身のこなしは隙がない。だが、それはあくまでも一般レベルの話。

千里のような、十名家の直系にとつては大した事のない脅威。狂乱の力を発動させ、身体能力を若干高めると、

音も無く三人の式神使いの斬撃を全て捌き、同時に乖離を振って一人の式神を断ち切り、もう一人の顔を殴りつける。

骨の折れる嫌な音。そして、最後の一人が剣に闇色の光を纏わせて斬りかかって来た瞬間。もう千里は男の背後にいた。

直後に血が噴出する音。全身を切り裂かれ、男は呻き声を上げて倒れた。

(ふん……バカみたい)

喜一は自分に背を向けたまま相変わらず戦っている。もう、眼中にないってワケ。と千里の心も固まった。

残りは郁人の部隊十数人と、神崎森羅と浅葱陸人と牧島郁人。陸人は負傷しているの、千里の狙いは森羅。

もう、迷わない。もう、決めた。希を取り戻し、万里の人生を元通りにする。それだけが、もう千里の全てだった。

目の前に居るのは、命の恩人にして、竜胆を破壊した女。そして、郁人が出会った中でも最強の敵。

遠音と無言で睨みあう郁人。陸人は腕の怪我が酷そうだったので、増援を呼びに行ってもらっている。

チラリと視線を動かし、周囲の状況を確認。喜一指揮の下に、ダメージの残っている雨龍と龍と悪鬼を攻撃している。

厄介だった三枝千里は森羅が抑えてくれている。後は、遠音をどうにかすれば、ここでの戦いはこちらの勝ちだ。

フラガラッハを何時でも動かせる体勢にもって行き、腰を落とす。遠音は相変わらず、腕組をして笑っている。

「……良い目だよ郁人。私への憎悪で溢れている。やはり、式神を壊して正解だったね」

「言いたい事は、それだけですか？」

その瞬間、一瞬でフラガラッハを構えて疾走。遠音の反応が一瞬

遅れた隙に、

「フラガラツハ・灼」

フラガラツハの形態が変わり、巨大な突撃用の槍のような剣へと変化し、柄や装飾の部分から反意思の光が

あふれ出す。だが、何時とは違い反意思は噴出の他に、刀身からも噴出されていた。その反意思の光は、

刀身に纏わり付き、回転するようにして覆っていく。そして、突撃体勢に入った瞬間。

「っー！」

今までの倍近い速さで、遠音へと剣先が届いた。完全に油断していた遠音は、そのまま勢い良く吹き飛び、

近くにあった建物の壁を突き破り、それでも勢いが止まる事がなく、暫くした後、ようやく止まった音がした。

啞然としてしまう周囲。郁人自身も、予想以上の威力に戸惑いが隠せなかった。これが 新しいフラガラツハの力。

今までのように反意志をただ噴出させているだけではなく、回転や自在な出力変換の機能がついていた。

それと引き換えに、重量が増し、精密な動作が難しくなっていたが、これは鍛錬次第で何とかなると郁人は実感を掴む。

(それにしても……あの二人らしい強化の仕方だな)

そのまま遠音が吹き飛んでいった方向に歩いていく郁人。すると、瓦礫が嵐のように吹き荒れ、その中から

若干出血しているが、それでも楽しそうな表情をした遠音の姿が現れた。その手には、黒の剣。ダークインスレイヴが

既に握られている。そして、遠音の目がカツと開き、完全な戦闘体勢に入った瞬間、

「む……」

「時間か」

「……行くわよ」

空に闇色の花火が上がる。それと共に、雨龍はコンセプトを解いて黒龍を再召喚。森羅と戦っていた千里は、乖離を振り回して、全ての水を問答無用に切り裂くと、黒龍の肩へと飛び乗った。

最後のおまけとばかり、大量の火球を吐き出す黒龍。その炎をに遮られるようにして、遠音と郁人は見つめあい、

「追いかけて来い。そこで、最期の決着をつけよう」

遠音がそう挑発した笑みを浮かべながら言うが、郁人は特に表情を変化させずに言い返した。

「……望むところです」

「……良い目だね。容赦なく、頼むよ」

遠音は何故か悲しそうな目で郁人に笑いかけると、超動を使い瓦礫の竜巻を起こし、その中心を上昇していく

黒龍と遠音。様々な攻撃がそれに向かって集中するも、殆どが瓦礫に当たって遠音達へと届かない。

だが ユニオン側もそう簡単には諦めなかった。式神の攻撃の

隙間を縫うようにして、令、梨香、竜胆の三人が  
遠音達を追う。遠音は超動の嵐を解除すると、瓦礫を蹴飛ばし、  
三人目掛けて吹き飛ばした。

「甘いよお！」

三人の前に Gate のコンセプトが現れ、瓦礫はその紋様に触れた途端吸い込まれるようにして消え、

遠音達の頭上に出現した紋様からそのままの勢いで飛び出した。  
竜胆が会心の笑みをうかべ、

その隙に乗じて梨香と令が一気に距離を詰めようとした瞬間、

「令君！」

梨香に蹴飛ばされ、若干方向が変わってしまふ令。だが、その横を、赤い熱線が凄まじい勢いで通り過ぎていった。

「この式神……千夏か！」

現在碧と太郎には下の応援に駆けつけてもらっている為、令は紫と神憑状態にあった。紫との神憑は、力が

強くなるものの、碧のような広範囲の索敵や凄まじいスピードは出せない。だから、気づけなかった。

数百メートル離れた場所から、あんな熱線が放たれた事に。そこに視線をやると、確かにそこに十文字千夏が居た。

赤を基調とした鳥型ロボットのような式神に乗っている。ただ、追撃するつもりはないのか、次々と熱線を放ち、

門に誰一人近づけさせないようにと、空中を自由自在に飛び回っている。

「ああ、令は四つ子と仲良かったのか。あの子達、信頼した相手にしか式神見せないからさ」

上空から遠音の鞭のような闇色の斬撃。それを避けて、電撃でけん制。梨香も飛び回りながら、けん制してくれている。

だが、七海遠音は強すぎた。超動の力を自分自身にかけている為、ぎこちない浮遊だが、

梨香の数百発の矢や令の電撃は一発たりとも当たっていない。そして、超動の力を利用して梨香の動きを一瞬止めると、

梨香に地面に叩きつけるような蹴りを見舞う。流石に不味いので、令が助けに行こうとするも、梨香は地面より少し前で

何とか体勢を立て直したようだった。それに安堵していると、

「戦いの最中に余所見はよくないな」

「しまっ……！」

何時の間にか背後に六道紡が立っていた。慌てて回し蹴りを放つも、紡の瞳が一瞬で緋色に染まり、

簡単にその蹴りは避けられてしまった。そして、胸に手を置かれ、

「蛇砲」

破壊の衝撃。黒の蛇を模した反意思が叩きつけられ、そのまま勢いを殺せずに令は地面まで叩きつけられてしまった。

「さて、そろそろ完全撤退だ。戒君は一番厄介なのと戦っていてね。自分で十文字本家に Gate の魔具を建てるそうだからさ。

だから、今は死守だね。戒君が最後のコアもって十文字本家に入るまで、私達の作った門に誰も通しちゃ駄目だよ」

紡の言葉に、遠音達は頷くと下から尚も攻撃してくるユニオンに向かつてあらん限りの攻撃をぶつけた。

悪鬼や無人の空船もほとんど十文字側の立てた門から、ユニオン目掛けて降下していく。流石にこの攻撃の苛烈さでは

空中に上がってこれているものは少ない。令や梨香や竜胆といった空中戦に慣れている者達も、ある程度の距離からは

上がって来れないでいる。そうやって暫く弾幕を張っていると、黒龍の中から雨龍が紡に尋ねた。

「んで。戒のヤツは誰とやりあってんだよ？ まさか、蒼二か？」

「惜しいね。彼の父君、千島蒼威だよ。あの最強の式神使いと名高い人物だ」

そう言うと、黒龍の肩に乗ってオーラの斬撃を放っていた千里が青い顔をしながら口を開いた。

「千島蒼威か……」

「そついや、千里と万里はあのおっさんのファンだったな。万里なんか、技を模倣しているぐらいぞっこんだったぜ」

「何だ、雨龍。嫉妬か？ 全く度量の小さい男だね」

「テメエの胸程じゃねーよ」

いがみ合う遠音と雨龍。それを無視して、紡も蒼威の事が気になったのか、

「果たして、どちらが最強なのかね？　これは私にもわからないな」  
そう心配と楽しさが混じったような表情でさらりと口にした。

ユニオンの隊員の一人、海山天音は啞然としていた。純血生まれだが、普通の何処にでもあるような家庭の出身ではない。

親が何処で道を踏み外したのか、裏社会にどっぷりと浸かり、生まれてから二階堂特区にて、それなりの人生を送っていた際に

ユニオンにスカウトされて千島蒼威の部隊に所属する事となった。配属されてみれば同期の人間達は全員蒼威を尊敬というか

もはや崇拜の域に達している程敬っていた。どうやら、話によると最強の式神使いと呼ばれているらしいが、天音の

目に映る千島蒼威は相当な駄目人間だ。二日酔いで仕事にくるし、備品のパソコンでネットゲをしていた事

も多々ある。更に、余り人と仲良くしたくない自分にヘラヘラ笑いながら愛想よく話しかけてくるし、

この前なんかは奥さんに電話で二時間以上説教されていた。だがと天音は現在目の前で行われている光景をただジッと見て、

「……………凄い」

とただ一言。戦っているのは、上司である千島蒼威と敵勢力で、天音ですら名前を知っている程の男、十文字戒。

数分ほど前に戒は音もなくここでコアを守っていた天音達の前に

現れた。一瞬で、全員が反応し、

天音も式神の力を発動させようとした瞬間、もう決着はついていた。戒の周囲から様々な属性の力が吹き荒れ、

殆どの隊員が一瞬で式神を破壊されてしまう。天音は新米だが、運良く攻撃の範囲から逃れたのだろう。

全くの無傷で瓦礫に埋もれているという始末。しかも、その間に部隊の先輩達は蒼威の指示によって、怪我人を

運びに行ってしまったので、天音はただ一人。この戦場に残されてしまっているのだ。そして、そんな天音を他所に戦いはどんどん苛烈さを増していく

**第38話：愛してるぜ、クソったれ共（前書き）**

今回で、千島蒼威については、  
自分の中で書きつくせたいと思っています。

ちよい暇がなくてブログの方で投稿日告知  
出来ませんでした。すいません。

第38話：愛してるぜ、クソったれ共

千島蒼威と十字戒は、実に対照的な態度で向かい合っていた。蒼威はリラックスした体勢で、煙草を啜えてヘラヘラ笑っている。対する戒は、いつでも動ける体勢で、表情を引き締め蒼威の動きを一瞬でも逃さないようにと、集中している。

二人がこう相對するのは、約十年ぶり。神々の黄昏事件の時以来だ。それを思い出したのか、蒼威は口を開き、

「久しぶりだな、十字戒の坊ちゃんよ」

「ええ、本当に久しぶりだ。十年前も同じような光景だったな。周りには瓦礫ばかりで、俺とアンタの二人だけだった」

戒がそう言うと、蒼威は我慢できなかつたように嘖き出し、

「ぶははっ！ おい天音え！ お前、存在を忘れられてんぞ」

少し離れた場所で瓦礫に埋もれていた天音へと声をかけた。それを聞いた天音は、恥ずかしさと

蒼威の全くの緊張感の無さに、呆れを通り越した怒りを覚え、

「どうして貴方は一秒でいいから、真面目になるって事が出来ない

んですか!？」

と怒鳴り返す。

「うお。マジで怒るなって。……へいへい、真面目にやりますよーだ」

そして、次の瞬間。蒼威が目にも止まらぬ速さで動き、戒へと接近。完全に虚を突かれた戒は、慌てて臨戦態勢に入るも

緋眼使いである蒼威はその頃にはもう、回し蹴りのモーションに入っていた。何とか、ギリギリで受け止められるといった所。

戒は魔具の膜を張って、衝撃を殺そうとするがその時にはもう既に、蒼威の式神、大我の剣が背後に迫っていた。

迷ったのは一瞬。風の力を自分自身にかけて、戒は勢いよく空中へと飛翔。だが、蒼威もそれだけでは終わらない。

すぐさま大我の足場を形成し、それを飛ばして同じく空中へ。戒もそれを予測していたのか、五指に火を灯し、巨大な火球を撃つ。

「はっ」

蒼威の周囲に現れた五つの銀色の球体が、風呂敷のように大きく広がり、火球を完全に受け止め、或いは受け流した。

その間に戒へと接近し、足場の二個の大我を翼へと変え、残りの二つを長さの違う剣へと変えた。

戒も接近戦になる事を見越し、コートから大剣の魔具を取り出す。そして、ぶつかり合う刃。蒼威の連激にも戒は必死に

くらいつき、攻撃の終点が見えると一気に薙ぎ払うような一撃。それと同時に衝撃波が発生し、蒼威にそれはぶつかった。

だが、全く引かない。若干のダメージはあったようだが、蒼威はそれに耐え、戒へと接近すると、

「痛えな」

と言い、袖口から隠してあった最後の大我を射出。銀色の球は戒の腹部を直撃。そのまま吹き飛ばし、

「まだまだア！」

更に蒼威の掛け声と共に、八つの大我があらゆる武器に変化しながら戒を追いかけて行く。

戒は何とか空中で体勢を立て直すと、蒼威の大我の迎撃体勢を取る。縦横無尽に駆け回る武器達は

非常に厄介だ。全力で行くしかない、そう判断し、森羅万象の力を一気に放出した。あらゆる属性の力が大我達に

襲い掛かるも、蒼威もそれに負けないように全ての大我に意識を集中させて、戒の攻撃をかわしていく。

(っ……なんて式神だ)

内心そう毒づく戒。大我という式神は、力という点で見ると普通の式神だ。属性の攻撃も無い。ただ、自在に変化

出来るだけ。それでも、千島蒼威がそれを使うと最強クラスの式神となる。緋眼を使い、全ての動きが遅く見得る事に

よる操作性の向上。更に、十数年培ってきた変化の早さ、奇抜さ、精密さ。そして、長年戦ってきた経験。

それら全てが揃った大我はあらゆる属性の力が使える戒の式神と同格以上。戒の心が急速に冷えていく。

「仕方ない……か」

元より、ユニオンを完全に潰すという事はしたくなかった。ユニオンが生まれてからは、十名家の日本管理の負担もずつと減り、内輪でのしょうもないいざこざも少なくなっている。十名家を束ねるものとしては

負担が減るのは嬉しいし、教会のような海外の大勢力も数年前とは違い、おいそれと手を出せなくなっている。

だが、自分の邪魔をするのならもう容赦はしない。殺して、殺して、二度と立ち向かえなくしてやる。と戒は決意。

「森羅万象」

蒼威への攻撃を一時中断し、戒は右手に炎の力を宿す。そして

「出て来い、魔具」

周囲の反意思を集めて、数十ものナイフ型の魔具を作成。そして、右手をナイフにかざして炎を灯す。

森羅万象の力がナイフに宿り、次の瞬間。戒の命令に従って、蒼威目掛けて燃え盛りながら襲い掛かる。

当然の事ながら、蒼威は燃え盛るナイフを睨みつけると、大我を一つ剣に変えて、ナイフへと接近。

緋眼を使い、数本のナイフの斬撃を楽々と避けると、一本ずつ破壊しようとした

「なっ　！？」

ナイフが突然爆発。莫大な森羅万象の炎が蒼威へと襲い掛かった。だが、それだけでは終わらない。

更に蒼威の四方に今度は槍の魔具を作成し、今度は森羅万象の電撃を纏わせて、炎の中へと射出。

一瞬の鈍い音の後に、炎の中に電撃が迸った。続けて、風の斧。氷の剣。四つの属性の武器が全て蒼威を

殺す為に襲い掛かっている。これが、十文字が最強と呼ばれる理由。式神プラス魔具という反則的なまでの威力。

流石にアレをくらっては自分自身でもひとたまりが無い。と、戒は自分の力の威力に、少しの戦慄を覚えた。

「ふん……」

そして、コアを回収しよう。そう思い、ゆっくりと地上へ降りていこうとする戒。その時、

「おい、コラ！ 勝手に終わらせてんじゃねーよ」

軽口の後に、銀色の丸い形をしたモノが四つの属性の中から現れた。表面は焼け焦げ、斬撃の後が

痛々しいほどに残っている。そして、その丸い物体は二つにぱっくりと割れると、その中からは無傷の千鳥蒼威の姿。

流石の戒もこれには開いた口が塞がらなかった。蒼威の大我という式神の耐久力の異常さが信じられないといった感じである。

「アンタ……あれを耐え切ったのか？」

「おう。結構面白かったぜ。氷の力なら、ウチの息子の方が間違いない。威力は高かったけどな」

「化け物め……」

「そりゃ、お互い様だ。さて、反撃行くぜえ！」

再び蒼威は緋眼を発動し、今度は戒へと接近。十個の大我のそれに続く。二つは蒼威の飛行をサポートし、

四つは攻撃用に、後の四つは蒼威の身を守る為に、といった布陣だ。まず最初の二つが一気に戒へと襲い掛かり

おとりの役目を果たす。様々な武器に変化し、絶え間なく襲い掛かり、思考する隙を与えない。

そして残りの二つは、守りの四つと結合し、三対三力の割合で、二つに分かれると、近くにあった巨大な残骸二つへと

球体から線のようなものを飛ばして、残骸へと巻きついた。そして、蒼威は一気に距離を詰めて戒と近接戦へ。

攻撃していた大我を手に取り、斬撃を戒へと浴びせる。戒も魔具製の炎の剣を振り回して、身を守るが蒼威の方が

剣の腕は上だった。次第に追い詰められていった戒は、一度距離を取ろうと、十指に炎を灯して、全力の炎を解き放った。

流石の蒼威でもこれは耐え切るのは厳しいので、一瞬で移動して何とか炎の範囲から逃れる。戒もそれを確認すると、

距離を取ろうと後ろを振り向くと

「うお!?!」

何時の間にか巨大な瓦礫が背後から迫っていた。その瓦礫に巻きついているのは、弦のようにしなやかで、常識では

考えられない強度をもった銀色の線。大我だ。ピンと張られて、奥の方にある回転している大我に振り回されているのだ。

更に横からも気配。もう一つ、同じような瓦礫が戒へと迫っている。式神では今から十分な威力は出せない。

咄嗟に手の平から爆弾の魔具を作成し、二つの瓦礫目掛けて投げつけた。数瞬後に爆発が置き、瓦礫は破壊したものの

今度はその爆発の中から、先ほどの二本の線が延びてきて、戒へと巻きついた。

「しまった……」

「ちゃんす！」

思うように身動きが制限された戒へと蒼威が迫り、まずは顔面に一撃。更に、ボディーへと拳を二発。

前のめりになった戒の頭を掴み、大我の勢いも使った膝蹴りを叩き込むと、空中用の二個以外の大我を全て

集めて、右腕へと集中。巨大な拳を作り、戒の体を地面へと叩き落とした。どうにか、魔具の膜を張って

地面への直撃を避けた戒は大地にめり込みながら、空を見た。遠くはなれた上空では、仲間達が必死に

Gateを守っていた。全ては、戒と、希と、未希の為に。こんな所で間誤付いている暇は無い。

再び闘志が燃え上がり、戒は痛みを堪えて立ち上がると、ポケットに入っていた転移用の魔具を投げ捨てた。

すると、自動で魔具達は戒の周りを囲うようにして、地面へと突き刺さり、起動を始めた。

「おいおい、逃げんのかぁ？」

蒼威はゆっくりと戒の正面へと降り立ち、不満そうに口を尖らせる。戒はその言葉に、ふっと笑いをこめると、

「十分だ。それで、アンタと決着をつけてやる」

「上等！」

時間が惜しいとばかりに、蒼威は緋眼を発動させて駆け出した。

そして、再び始まる猛攻。

先ほどまでとは違い、地上戦。大我は全て違う形の武器に変化し、蒼威の周囲へと漂っている。

だが、それが厄介。目にも止まらぬ速さで蒼威は武器を掴み、様々な攻撃をしかけてくる。

それに対し、戒は正面から挑まなかった。靴を魔具製のローラーへと変え、機動力を上げ、蒼威の猛攻を凌ごうとする。

だが、蒼威もそれでは終わらない。緋眼の昇華型、終式を使い、更に速度を上げて戒へと接近。

大我を一つ、槍の形に変化させると、戒の腹部へと突きを一撃。次に、柄の部分で頭を勢い良く殴りつけた。

戒はそれを紙一重でかわし、自分の肌に先端が刺さるのも気に留めずに、槍を掴むと、魔具の力を発動。

「これは、初めてだろう！」

大我の表面に小型の装置が出現し、だがそれは一瞬にして大我へと飲み込まれると、次の瞬間に爆発。

大我の一つが跡形も無く飛び散り、蒼威は式神が破壊されたダメージが本人にフィードバックし、顔を顰める。

が、それでも引かない。大我を四つほど操作し、それらは空中から戒を襲う。

(む……)

四つの斬撃を風の力を使い、かわすと戒は一つの事に気がついた。それは、十年前に戦っていなかった

ら気がつかなかったと思える事。明らかに、あの時と戦いのスタイルが違うのだ。千島蒼威は非常に強かな

戦い方をする。勝負を急がないタイプだ。猛攻の間にもじっくり

と戦術を練って次の展開を考えているような男だったと

記憶している。だが、今は違う。獣のように荒々しい。十年前と、今と。何が違うのか。そして、答えは出た。

森羅万象の中でも余り使うことの無い、大地の力を使い、地面を蹴ると、蒼威目掛けて大量の石礫を浴びせかけた。

蒼威はそれにすばやく反応し、大我で全て防御。その瞬間を、戒は見逃さなかった。今の一瞬の中で、蒼威が一番最初に

守った場所。そこから今の状況を比較してみると、一つの事実が浮かび上がった。戒は足を止めて、魔具の剣を抜くと、

蒼威を迎え撃たんと構えをとる。蒼威も両手に剣と刀。更に斧や特大ナイフを引き連れて戒へと接近。

「ハッ！ よーやく、やる気になったか」

「フン……」

やはり正面からでは勝ち目は薄かった。緋眼の速さに戒がついていけるわけもなく、一瞬で全身を切り裂かれ、

戒は血を撒き散らして、吹き飛ばされた。殺すつもりはないのか、致命傷には至っていない。

それが、蒼威の敗因。この勝負、自分の勝ちだと戒は確信して、こつそりと仕掛けてあった魔具の力を発動。

大地から鉄アレイに似た魔具が飛び出し、蒼威の足目掛けて襲い掛かる。だが、それを蒼威は避けた。

無理矢理足を曲げて、器用に魔具をかわすも、魔具は音波のような衝撃を蒼威の足目掛けて放った。

一瞬の痛み。だが、蒼威はそれを堪えると、大我をハンマーの形に変えて、魔具を一気に叩き潰した。

「ふう……危ねえなア！」

そして、体勢を立て直した戒に再び襲い掛かろうと走り出した瞬間、蒼威の破れたズボンの隙間から鮮血が噴出した。

それを待っていたとばかりに、戒は魔具の剣を振り上げ、蒼威の胸を正面から切り裂く。だが、紙一重の所で

かわされて傷口が浅い、剣を投げ捨て両腕を突き出すと、森羅万象の力を使い、燃え盛る氷を顕現。

そのまま燃え盛る氷は、無防備な蒼威の胸元へと直撃し、蒼威はボールのように勢い良く、瓦礫を破壊しながら転がっていった。

それを見届けると、出血箇所を魔具で何とか応急処置をしながら戒は歩き出し、語る。

「アンタは確かに最強の式神使いだよ。正直、十年前にあのままやりあつたら負けていたのは俺だった。

だが、今はアレから十年経った。……十年って長いよな。俺の大切な娘は、来年度から中学生だ。

ようやく、希に会わせてやれる。長かった、本当に長かった……」

蒼威の返事は無い。血に塗れた瓦礫にもたれ掛かったまま動かない。そして、戒はもう一人。

蒼威の部下らしき女に目をやるが、完全に状況についてこれないようで、口を開けたまま硬直している。

あの様子なら問題はない。と結論付け、戒は更に語りだした。

「……アンタの緋眼は確かに強力だ。ある状況下では、魔具よりもよっぽど強い力だろう。

だが、強い分負担も大きい。紡によると、昇華型もあるそうだな。あの極限の速さがそれなんだろうが。

今回はそれが、勝敗を分けた。      アンタ、もう緋眼に体がついてこないんだろ？」

いかに蒼威が異端であろうとも、歴代の千島の中でも最高の力を  
持っていたとしても、年には勝てなかった。

五年程前から、前のように蒼威は緋眼を使うのが難しくなってい  
た。医者にも、もう数年以内に緋眼に体が

ついていかなくなるとも言われた。だが、千島蒼威という人間は  
そんな小さな事は気にしない。

守るべき者の為ならば、たとえ数十分でも戦える体に仕上げ、後  
の事は全く考えない。そういう生き物なのだ。

「元々アンタは体格がそれほど良くない……よく、今まで戦ってき  
たと思うよ。」

……ああ、認めよう。最強の式神使いは、俺なんかじゃなく、間  
違いなくアンタだよ。千島蒼威」

そう言うと、戒は踵を返して転移の魔具を起動させようとした。

蒼威は、傍にいる女が助ければ何とかなるかもしれない。

だが、死ぬかもしれない。戒にとってはどちらでもいい。だが、  
これだけ凄い。と思える男を自分で殺すのは

なんとなく気分が乗らないのだった。そして、反意思を散布し、  
いよいよ転移の魔具が活動を始めたときだった

「おい……」

いきなり襟を掴まれ、一気に戒は引き寄せられると顔面を一発殴  
られた。そう、戒を殴ったのは

信じられない事に、今も体中から出血を続けている千島蒼威だっ  
た。

「なんだと……？」

「まだ……決着はついてねえぞ……」

と威勢の良い事をいうも、蒼威の体は満身創痍。立っているのも辛そうなほどだ。

「……っ。何故、立ち上がった」

「まだ、終われねえんだ……何もわかってねえバカが、まだ立っていないからな……」

「アンタにだけは言われたくないな……」

戒がそう言うと、蒼威は先ほどまでとは違い、真面目な顔で一つ、話を切り出した。

「人生の先輩として……一つ教えといてやる。今日の……テーマは、親と子についてだ……」。

俺あよ、子供の力ってスゲエと思う。今回のテメエらが起こした事件だって、お前の話しぶりから察するに、

お前の娘の為にそうじゃねーか。はっ……！ スゲエな。……親にこんな大事件起こさせるんだからよ」

「そう、全ては、あの子の為に。幼くして、母を理不尽な理由で、奪われたんだぞっ!？」

あの子がどれだけ辛かったと思う！ どれだけ、母親に会いたかったと思う！

良い子だからな。あの子はそんな事を億尾にもださなかった。ずっと自分を殺して、生きてきたんだ！

だから、俺はこの世界に再び反逆する。理不尽には理不尽で！

反意思を使つて！ あの子のあるべき幸せを取り戻す！」

「気持ちはわかるぜ……そりゃ、親は子供の為なら何だってできるよな。生憎、俺は少し前にそれを自覚したわ……」

全てを与えてやりたい。幸せにしてやりたい。今だってそう……息子や娘の為に、俺は戦つてんだ……」

蒼威はそこで一旦区切ると、口から血の塊を吐き出し、語気を強めて再び喋りだした。

「だけどなア！ ……間違つたモンを子供にやっちゃあよオ！ 本当の幸せなんざ……一生こねエぞ！」

お前は戦士としちゃ、一流だが……親としては二流だ！ ホントに、これで全部幸せなんて思つてんのか！？

親がこんなバカな争いをしてるってのが、本当の意味で、テメエの娘の幸せに繋がると思つてんのかよっ！」

「アンタに……何がわかる……っ！」

「わかるさ。俺だつて……人の親だ」

「……っッ！ バカにするなア！」

戒は怒りのままに、蒼威を殴りつけた。腹部に一撃、顔に三発。最後に思い切り瓦礫に叩きつけて、

大きく肩で息をする。蒼威の言葉の意味がわからない。あの事件さえなくなれば、希も生きている。

反逆の十文字事件も起こらない。自分達が殺めてしまった人間達もまだ生きているのに。と頭の中で

正当化の理由を並べていく。心の奥底では戒もわかりたい。だが、

蒼威の言葉を正面から聴いてしまったのは

全てが台無しになってしまう。体を張ってくれている仲間も、未希の幸せも、どんどん遠のいてしまっていくのだ。

「何が悪いってんだよ……娘を幸せにするのが……そんなに悪い事なのかよ……」

そう、吐くように呟くも蒼威は再び立ち上がると、バカにしたような顔を作り、

「はっ……。お前、娘の事何にも考えちゃいねーよ……そこにあるのは、正当化したいテメエの心だけだ。

俺だったら……もし、嫁さんが……死んじゃって……ウチの次男坊が会いてえって言ったら、正面から向き合うね。

話して、話して、お互いが納得できるまで話して……んで、母親の分もいっぱい愛してやるさ！ 嫌になるぐらいなア！」

「……………」

「結局テメエは娘の気持ち理解できてんのかよ！ 幾ら自分のためにしてくれるとはいえなあ……！」

……父親がこんな人殺しの種振りまいてるの知ったら、お前の子は、どんな気持ちになると思ってたんだよ！」

「何も……何も知らない癖に……」

「知らねえよ！ 知ってどうする！ 同情しろってか！？ いやいやバカな親だな！ テメエも！」

テメエは本当に娘の事をきちんと考えたのか？ 目先の未来だけじゃねえ、これからずっと生きていく未来を！」

喜ばせてやるだけが、親じゃねえんだよっ！ 右も左もわからねえ子供に、道を示すのが本当の親じゃねえのかっ!？」

「何も……何も知らないくせにッ！ アンタが勝手に未希を語るなあアアッ！」

全力で撃った。森羅万象の四つの属性を。まともにぶつかれば、ただではすまない威力で。

だが、蒼威はそれを半分くらいながらも、自身の血塗れの拳を振りかぶり、戒の顔面を殴りつけた。

よるめいた戒は、まだ威力の余韻が残っている手で、転移用の魔具に手を突いてしまう。そして、鳴り響く警報。

転移用の魔具が不安定な動作を起こし、周囲一体が光り輝き始める。そして 一瞬の閃光の後に、

戒は自分の家の近くで、へたり込んでいた。周囲には、ユニオン本部にあった瓦礫と、半分壊れた転移用の魔具。

蒼威の姿は見えない。一緒にいた女の姿も見えない。何か、幽霊をみたような気持ちで、フラフラと戒は自分の家へと歩き出す。

先ほど蒼威が怒鳴っていた言葉がまだ耳に残っている。それから逃げるように、戒は次第に走り出していた。

戒から離れること数十メートルほど、千島蒼威は先程よりも酷い怪我で、瓦礫に半分体を埋もれさせていた。

体がピクリとも動かない。体がどんどん冷たくなっていく。これが、死期か、と自嘲気味に笑い、煙草を吸おうとするも

指の一本すら動く気配がしない。仕方がないので、千島蒼威は何

かを考えることにした。

すると、一番古い記憶が蘇ってきた。これが、走馬灯かとまた笑う。だが、出てきたのはロクでもない記憶ばかり。

言いたい事も言えない。無視され、空気のように扱われる少年が居た。そんなある日、聞こえてきた荒々しい自分の声。

その日から何かが変わった。最低でも最高のバカが二人。魔女のような女。女顔でエロい先輩。常識外の生物。

大人しい女の子。皮肉気な声。大人びた可愛い子。名は遙。強いけど根暗なバカ三号。そして、

何よりも嬉しかった双子の娘と息子。まだ幼い男の子。それからも続く、様々な顔。

悪くは、なかった。最低でも、最高で、何時も、何時も、バカみたいに傷だらけだった一生だったが、それでも良い。

「も」

伝えたいことはまだあったが、ここでもう自分は終わりだろう、と笑う。

最後の最後で蒼威は意地の張り合いに負けたのだ。それよりも、今は気になる事がある。

遙は許してくれるだろうか。蒼二はちゃんとユニオンを運営していけるだろうか。遥緋は病気になったりしないだろうか。

光希はまともな育ってくれるだろうか。陸人は離婚しないだろうか。森羅は子育てがちゃんとできるだろうか。

それと同時に心配事も多い。まだまだ、自分が居てやらにゃ駄目だと思っても、もう、限界が近い。

唯一誇れるのは、自分は父親を超えたという確信がある事。子供が笑えない千島ではなく、笑える千島を作れた。

静かな会話の無い家庭じゃない。騒がしくてトラブルも多かったが、笑いの絶えない家庭を作れたのだ。素直に誇れる。

「愛してるぜ、クソったれ共」

もう一度同じ言葉を呟き、蒼威は笑ったままゆっくりと目を閉じた。

第39話：七海遠音の不浄（前書き）

遠音は作者的に十名家じゃー一番好きなキャラです。

### 第39話：七海遠音の不浄

戒が十文字の正門を潜ると、魔具が反応し、周囲にあった囲いが全て爆発した。その瓦礫の下から出てきたのは

新しい魔具。家を囲うようにして、三本の短い支柱が現れた。後に残ったのは、無駄に広い庭と、一軒の家だけである。

十文字特区は完全な戦闘体制に移行しようとしていた。既に、街の住民は四つ子達が全て転送しているので、問題

は無い。この十文字特区全てが、戒達の要塞へと変化しつつある。十文字家を囲うようにして立つ、三本の巨大な塔。

更に上空には兵器生産プラントが漂っている。これら全ての魔具を作ったのは四つ子達である。

純粹に感動してしまった。弟と妹達の思いがどれ程の物かが一目見てわかるほどに。だが、落ち着いている暇は無い。

戒も戒で時を越える魔具を作る準備を進めていると、轟音が響き渡り、目をやると、遠音がどうやら空中から着地したようである。

「ご苦労だった。皆は無事か？」

「ああ、雨龍が少し殴られたぐらいかな。……ほら、これが私達が奪ってきたコアと結晶だよ」

何故だか、神妙な顔で遠音は懐に入れていた魔具を取り出し、戒へと放り投げた。そして、それを見届けると

遠音は近くに置いてあったコンテナを超動によって浮き上がらせ、再び戒の方を見た。

「じゃあ、行ってくる」

「気をつけるよ。牧島郁人は一度倒したとはいえ、油断は出来そうに無い相手だからな」

「ああ、わかってる。先ほど手合わせしたが、良くて相打ち。悪くて、私が殺されてしまうだろう。」

ふふふ、この短期間にまたフラガラツ八を強化なんてしゃがって、これを使わなくてはならなくなってしまうたじゃないか」

そう言うと、遠音はコンテナをポンポンと叩き、笑う。戒はその言い草に顔を顰め、

「負けるなよ。希が帰ってきてても、お前が居なきゃアイツは泣いてしまう。希だけじゃない。」

未希だって泣くだろうし、俺だってお前が死んでしまったら悲しい。だから」

と言うと、遠音の顔から表情が抜け落ち、そして、とても悲しそうな笑顔を作った。何かを、堪えるような顔だ。

遠音が何を考えているのかわからない戒はそのまま、遠音の言葉を待つ。やがて、遠音は観念したように笑うと、

「私は、希が帰ってきた世界に居ちゃいけないんだ。私は、不浄だから。希に会った瞬間、罪悪感で壊れてしまう」

「な……！？ バカな！ 希が死んだのはお前の所為じゃないぞ！」

「違うんだ……私は希を裏切ったんだ。ああ、最期だから全て白状しておくよ。今日が私の人生最後の日。」

十年程前かな。君にフラガラツ八を貰った後に、私は希を裏切ったんだ。私の命の恩人を。大切な親友を」

「何を言っているかわからない……！」

そういつ遠音に戒がイライラした風にいうと、遠音は黙って歩き出してしまう。そして、十文字家の敷地から出てコンテナを置き、そのままそこに止まると暫く戒から顔を背け、やがてぼつぼつと語りだした。

「私はな。……十年前、君がフラガラツ八をくれた日に、自覚してしまったんだよ」

「だから、何をだ？」

「君への、恋心だ。あの日程死にたくなつた日はないね。君は、希が一番愛していた人なのに。」

私は君の心を求めてしまった。どうしようもなく、好きになってしまったんだよ。十文字戒という人間がね」

思わぬ遠音の告白に、戒は度肝を抜かれた。七海遠音とは子供の頃からの付き合いだ。

だが、遠音が自分の事を好きだ何て気づきもしなかった。というよりも、全く予想がつかない。

希が居なくなつてからは、ずっと十文字家の為に遠音は尽くしてくれている。何故かといわれれば、

希の事を本気で思っていてくれたに違いないからと、勝手な解釈をしていた戒には、二の句がつけない。

それを予想していたのか、遠音は悲しげに笑うと、

「だから私は、何時か、希が帰ってきたら死ぬとあの日決めた。卑怯だろ？ 常識的に考えれば

希を取り戻す方法なんてあるわけがない。だが、厭らしく不浄な私は、それから目を背けたんだ。

君達家族を騙し、ずっと嘘で本心を隠してこの十年生きてきたよ。

だが、やっとそれも今日で終わる。

偽りの家族は崩壊し、本当の家族に戻れるんだ。そこに、私が居るわけにはいかない！

希を裏切った自分を何度殺したいと思ったか！ でも、厭らしい私は自分で自分を殺す事が出来ない！

ここでもまたウソをついた！ 希に繋いで貰った命だからと！ また、希をダシにして私はウソをついたんだ！」

最後の方は涙でかすれた独白。戒は七海遠音が泣いた顔を始めて見た。同時に、切ない気持ちにもなる。

どうすればいいのかがわからない。遠音を救いたければ、希を諦めなくてはならない。

希と未希を救いたければ、遠音を諦めなければならない。何も思い浮かばない。背中に冷や汗が伝う。

だが、そんな迷った表情を浮かべた戒に遠音は一瞬で近づくと、思い切り肩を掴み、

「何を迷っているんだっ！」

と怒鳴りつけた。そして、そのまま顔を落とし、表情を見えないようにすると、震える声で話し出す。

「……お願いだ。私の心を、少しでも、ほんの少しでも理解してくれるというなら、このまま行かせてくれ……！」  
もう、限界なんだ。希や君達にこれ以上ウソをつくのは嫌なんだ……っ！  
信じてくれとはいわない。でも、これだけはウソじゃない。私は、希の事が何よりも大切だった。  
生きる力のなくなった私に、笑顔を、力を再びくれたのが、彼女だった。だから、もう希を、彼女の思いを穢したくない……！」

「遠音……」

その時、戒は遠音の事を始めて理解できた気がした。どうしようもなく、七海遠音は誠実な人間だと。

本当の意味で、希を裏切るのなら、自分の命すら投げ出してしまふ。それは、とても悲しい優しさであると思った。

だが、戒には答えは出せない。遠音の気持ちにも、希への気持ちも、この短時間ではどうにもできない。

戒が答えを出せないまま、何かを言いかける。それを察すると、遠音は戒から離れ、

「春、魔具を起動させる」

と無線を取り出し、呟く。そして、千春の返事と共に十文字特区内に設置された三つの黒い塔が光を帯び、

それぞれの頂点から光を発して、十文字家を蔽った。これは、結界の強化版の魔具だ。

並大抵の攻撃では突破できないほどの防護壁が、十文字家を蔽っている。その薄い光の壁越しから、

最期に遠音は戒へと手を振って、そのまま歩き出した。戒は壁越

しから何度も遠音の名を呼ぶ。

だが、遠音は振り向かない。袖で一度涙を拭くと、そこにもう後  
悔や躊躇いの色は無い。

「さようならだ。この十年、辛かったけど、楽しくもあつたよ」

その声は誰に届くわけでもなく、閑散とした十文字特区の中に消  
えた。

六道紡は険しい表情で、十文字特区の南側を見ている。戒が戻り、  
魔具が発動したの後は時間を稼ぐだけ。

だが、それが一番厄介。相手は日本でも最高クラスの戦力を持つ  
ユニオンだ。油断は一切出来ない。

もう暫くすればあちら側の準備も整い、牧島竜胆の Gate で一  
気に攻め込んでくるだろう。

「おじいちゃんめ……孫を困らせるような力を、ほいほいあげちゃ  
うんじゃないよ」

Gate の能力は本当に恐ろしい。だからこそ、準備には万全を  
期した。塔の近くにある屋敷の屋根に座りながら

紡は眼下を見る。そこには、人型悪鬼や大型悪鬼の群れ。本来な  
ら、混沌とした光景に見えるだろう。

だが、今は違う。四つ子の魔具によって完全に統制された悪鬼達  
は、それぞれの武器を手に持ち、隊列を構成している。

その武器だって殺傷能力は低いものばかり。これが、十文字の甘さであり、強さであると紡は思った。

兎に角、戒が魔具を作るまでの時間を稼ぎたいのだ。だから、装備は攻撃重視ではなく守り重視で固められている。

「……ふふつ。なんというやら、珍妙な戦いだよ」

そう自嘲気味に笑っていると違和感。隣の家屋根を赤い髪をした少年がたらたらとかつたるそうに歩いていった。

頭の上のつけたサングラスがポイントのカジュアルな服装をした子だ。紡は、一瞬心臓が止まりそうな程驚いた。

理由は二つ。あれほど警戒していたのに、ここまでの接近を許した事。そして、もう一つ。紡は、その少年の名前を知っていたのだ。

「太宰巡……っ！」

「……ん？ うおお！ 気づかれちゃったわ！」

少年 太宰巡は、演技なのか素なのかわからないリアクションをすると、快活に笑った。邪気の無い年相応の笑顔だ。

だが、紡は知っている。眼前に居る少年は、数年前に教会に世界最高額の賞金をかけられた指名手配犯なのである。

海外で一番大きな教会に対するテロ行為だけではない、教会の執行者を幾人も屠り、各地の支部を破壊しまくった男。

それだけではない。過去の記憶を継承している六道だからこそわかる、太宰という名字の意味。それら全てが

重なって紡は緊張状態に陥ってしまったが、すぐに気を取り直して、巡へと質問をぶつけた。

「太宰君だったよね。ここで、何をしているのかな？」

とやんわりと質問してみたところ、巡はへらへら笑いをつくり、

「わーお、六道のおねーさんに覚えられて俺、マジ感激っすわ。折角だから、質問に答えちゃおうかな。

俺ですわー。アレなんすよ。お友達に頼まれて、あの十文字の魔具ぶっ壊したいんっすよね。

でも俺、魔具とかマジ苦手なんでー。良かったら、手伝ってくれないっすかね？ ぶっ壊すだけでいいんすよ」

「無理だね。君は、私達の敵なのかい？ だとすれば、悪いが、容赦はしないよ」

そう言いあつと、他の屋根に千里と雨龍の姿が現れた。紡がこっそりと、救援信号を送ったのだ。

ただ、この時にユニオンが来てしまうと厄介なので、自分と同じく塔を守っている遠音と凜には連絡をしていない。

巡は目をぱちくりとさせた後、三人を見つめてニヤリと挑発的に笑う。どうやら、この状況にも全く動じていないらしい。

「んー……俺は、敵対する気はないっすよ。俺の敵は、教会とこの世界の救えないクソツタレ共ですわー」。

でもまあ、俺諦め辞めてユニオンの採用試験受けようと思ってるんすよ。だったら、ここであんた等潰して、

ユニオンへの手土産にするのも悪くはないのかなーって思うんですよね」

その瞬間、千里と雨龍が動いた。確実に敵だと判断したのだろう。千里は狂乱の力と乖離を同時に発現させ、

左方から、雨龍も黒龍を召還して一気に合体すると右方から、そ

それぞれの攻撃が左右同時から迫るが、

巡はめんどくさそうに両手を広げると、千里の乖離の刃と、黒龍の拳をいとも簡単に受け止めた。それに戦慄したのは

雨龍と千里。自分達の本気の攻撃が、この少年には全く通じていない。式神の力か。それとも血統かと

判断がつかないので、一瞬の内に後ろへと下がる。そして、当の巡は、少し機嫌が悪そうな表情を作ると、

「ちょ！ 人の話は最後まで聞いてくださいよお！ そっちの三枝のお姉ちゃんの剣、結構受け止めるの怖かったんすよ！？」

「ナめやがって……なんだ、このガキ」

「切断を発動させてなかったとはいえ、傷一つ無いなんて……」

千里と雨龍がそう言うも、紡は黙って様子を伺っている。そして、巡の発言は続く。

「でもつすね。俺、鎚木だったからアンタらが何で今回こんな事件起こしたか、全部知っちゃってるんすよね。

お宅ら在必死こいて探してた、未希ちゃんも、その事情も、十文字戒と十文字希の事も全部知ってるんすよ。

他人事ながら、泣ける話じゃないっすか。お母さんと子供を会わせてあげたい。その為にユニオンともめるなんて、

ある意味共感っすよ。俺だって、同じような事情があって教会に喧嘩売ったワケっすから」

「む……何故、鎚木のような賞金稼ぎが私達の事を……？」

「少し考えればわかると思うっすよ。ユニオンと十名家がぶつかっ

て一番得をするのは誰かつーね。  
未希ちゃんをさらって、色々やっちゃまったのをユニオンの所為にし  
たら、どうなるかつーね」

その言葉を発した瞬間、千里がキれた。どうしようもない怒りが、  
千里を支配し、再び巡へと迫る。

今度は確実に殺す気である。紡と雨龍が静止しようとするも、狂  
乱を本気で使った千里には追いつけない。

流石に不味いと判断したのか、巡真面目な表情をつくり、体を半  
身に構え、ステップを始める。

「あの子に、何をしたアツ！」

直後、千里のオーラを纏った斬撃が巡を飲み込んだが、手ごたえ  
が無い。代わりとばかりに、背後に気配。

慌てて乖離を振りぬこうとするも、逆に腕を取られ、優しく腹部  
に巡の手が触れた。

「あー……極光三十七っ！」

次の瞬間、衝撃。巡の手から光が溢れ、膨大な数の光が照射され  
た。

その内の一発が千里の体は大きく吹き飛ばされたが、大した威力  
ではない。だが、光は消える事無く十文字特区へと散っていった。

そして千里は、回転して体勢を立て直し、再び攻撃を始めんと巡  
を睨みつけ、動きを止めた。

眼前には七色の光を纏った巡が、空中に浮いている。見た事のない  
力だ。警戒するに越したことはない。

「……ふん」

「三枝のおねーさんもちゃんと話聞いてっば。未希ちゃん誘拐は失敗したんすよー。良かったよ、子供誘拐なんてクソツタレな行動が成功してたら、俺、鎬木の奴等皆殺しにせざるを得なかつたもん。」

「つーわけで、未希ちゃんは現在ユニオン側的な勢力と一緒に居るらしいから、安心して平気っすよ。」

巡はそう言いケラケラと笑うが、千里は気が気でない。やがて、奥で静観していた紡がため息をつき、前に出来た。

「それが……太宰の極光か。実物の極光は始めて見たよ。私の中にある天道のはもつと凄かつたけどね」

それよりも、君は一体何をしたいんだい？ 私らに共感するのなら、何故ここにきたんだい？」

「あちゃー、やっぱ六道のお姉さん鋭い！ つーわけで、正解を発表します。はい、時間稼ぎっす！」

巡がそう言った瞬間、先ほどの光が十文字本家の前に一瞬生まれ、収束して一つの刃を作ると、結界を切裂いた。

轟音が響き渡り、大気が振動。そして、一瞬だけ結界が消え、すぐに魔具は結界を張りなおし、また同じように

ふさがれた。不味い と紡は内心焦った。今の攻撃で確実に誰かが十文字家の中へと入った。

その為の時間稼ぎと布石を敷いたのが、巡だ。もう少し注意をしておけば良かったのだ。だが、もうどうしようもない。

戒なら何とかしてくれるだろうと信じるしかなかった。そう、眼前の空にコンセプトが見えたのだ。

懐かしい、自分の先祖が使っていたGateのコンセプト。幾つ

もの紋様が十文字特区の端の方に出現し、中から

ユニオンの人間達が次々と現れては、忙しく動き回っている。

「おほつ。ついに、ユニオン来ちゃいましたねえ。んじゃ、俺はこの辺で。縁があつたらまた会いましょ。

後で、鬼塚つて家を調べてください。したら、未希ちゃんの居場所はわかると思いますし、先ほども言ったように

今は、安全な勢力と一緒にいるようですから、心配はないとおもいますよー。未希ちゃん本人が動き出さない限りね」

「……そう。なら、いいわ。今回は見逃してあげる」

「もし、未希に傷一つでもついてて見る。俺ア、世界の果てまで追つてでもテメエを殺すからな」

巡がそう言うと、雨龍と千里はまだ警戒しつつ巡の事を睨んだ。

それに肩をすくめるだけの反応を見せ、

巡は極光の力を使って空を悠然と泳ぐようにして移動していく。とりあえず、目的と約束は果たした。

暫くはユニオンと十名家の戦いを静観するのがいいだろう。本当に、ユニオンが信頼できる組織なのかも見極めたい。

そんな事を考えながら、巡は一人悲しく呟いた。

「さて……ウチのお姫様は、どんな答えを手に入れるのやらねえ」

十文字本家中、一人佇む少女が一人。その手には、刀身と装飾

は日本刀のツインブレードが握られている。

バチバチと発光する力を制御化に完全に置くと、少女は歩き出した。ようやく、この十年の答えが出せる。

少女　”海原”沙姫は十年程前に、反逆の十文字事件に巻き込まれ、家族を失い、闇の世界で生きる事を決めた。

才能があつたのだから。崩壊する瓦礫から自分を守る際に、式神の力が勝手に発動し、瓦礫を破壊したのだ。

最愛の父と母は、抱き合い、お互いを守るようにして絶命していた。地面を何度も手の平で擦った形跡がある。

きつと、自分の事を探してくれていたのだからと、子供心なりに理解し、泣いた。後は簡単だった。式神を持つて歩いていたら

声をかけられ、世界の裏の情報を知った。何時か、あの事件を起こして人間に復讐するつもりだった当事の沙姫は、貪欲に力を

求め、生きていくために賞金稼ぎの組合。鎬木へと入り、才能があつた沙姫は数年で鎬木の幹部へと上り詰めた。

(長くて、短い十年だった……)

復讐の相手はこの国最強の十文字。だから、沙姫は機会を伺った。やがて、今は亡くなった知人を介して、巡と知り合い

沙姫は今日ここに居る。巡との契約は今日までだ。沙姫が十文字戒と対峙するその日まで、巡ともう一人の身の安全を

保障するというのが二人の契約。巡の極光の力のお陰で、一番めんどくさい結界を突破できた。

後は十文字戒と対峙するだけ。今日、沙姫の十年間の答えがでる。十文字戒が、あの事件を起こした理由は調べた。

それについて沙姫は同情もしないし、自分の人生を狂わした事件を許すわけでもない。ただ一つ、聞きたい事があるのだ。

そして、十文字家の庭へと出た。侵入していた事は気づかされていたのだから。臨戦態勢の十文字戒がそこに居た。

「はじまして、鎚木の元幹部、海原沙姫と申します。 貴方が起こしたあの事件で、家族を奪われた人間の一人です」

「……っ」

そして、十年ぶりにあの日、あの時、あの場所に居た、加害者と被害者の二人が向かい合った。

**第40話：千島蒼二が此処に宣言する（前書き）**

次回はファーストだと思えます。

投稿時期はまたも未定！

## 第40話：千島蒼二が此処に宣言する

竜胆が幾つも張ったGateのコンセプトの中から次々とユニオンの人間達が、十文字特区の入り口付近に降り立つ。

最初に出たのは観測、諜報に長けた式神使い達。それを様々な機材とあわせ、十文字特区の状況を

事細かに記載し、データを転送して幹部達の下へとそれは届けられた。物を作り出すのに長けた式神使いが

作った簡易型の本部では人が慌ただしく動き回り、口論や報告の音が周囲に溢れている。

そして、ユニオンの上役達は見晴らしの良い場所に何人かで陣取り、次々と運ばれてくるデータを見ながら、戦術を

決めていた。その中心にいるのが、蒼二。先ほどから、携帯電話を三つ。報告用の魔具を二つぶら下げて、次々と

指示を飛ばしていた。

「ああ、そうだ。四番隊は、東側。七番隊は西側。悪鬼の駆逐はそれぞれの戦闘班で、やってくれ。」

あ、おい、由加。その機械に触るなよ。お前すぐ機械類壊すから。

……ああ、すまん。九番隊の

ボスはいいつか……あー……とりあえず、後で人を送るから。副長、君が指揮を頼む」

「蒼二さん。榛名さんが、奏さんにセクハラして血みどろです！」

「あのバカ……由加、頼むわ。後、柏原。とりあえず、全般的な形は決まったから、隊長格を全員呼んでくれ。」

あー……陸人のおっさんは負傷か。森羅さんもわき腹やられてし。あの二人はいいや。」

詩歌さんと未来さんに状況だけ後でメールで送つといてくれ。つか、おい莉王！ 遥緋！ イチャついてねーで、さっさと来い！」

次々と声を飛ばして指示をしていく。勿論、蒼二だけではない。

郁人と竜胆も各地で人を集めているし、

運命は分身を飛ばして、十文字特区の悪鬼達の分布図を索敵班と一緒に作っている。由加と神璽は何時も通り。

そして、各所に居た隊長格、といつてもほぼ顔見知りばかりの面々がぞろぞろと集まってくるのが見えた。

奥の方には案の定ケロッツとしている神璽と怒っている由加の姿も見えた。ざつと見渡す限り、全員居そうだ。と判断し、

蒼二は、落ち着いて頭の中では更に考えを巡らせながら、喋りだす。

「とりあえず、神璽が最初だけ働いた結果から察するに、十文字本家に攻め入るには、あの三つの塔を破壊

しなきゃならん。しかもその前には、強化され、統率も取れる人型悪鬼の大群だ。笑つちまうほど敵は強大だな。」

ま、くよくよ言つても始まらない。索敵班の報告によると、右の塔には七海遠音。左には六道紡。んで、あれ

ちよつと前の方にある塔には一之瀬凜だ。この三つには、とりあえず対抗できる人間が居る隊をぶつけて行こう」

そこで一旦区切り、蒼二は由加と神璽を見た。

「六道紡はお前達二人で何とかできるか？」

蒼二に言われ、由加は強く頷き、神璽は何時ものようにへらへら笑うと、

「ああ、つーちゃんとタメ張れるのって俺らぐらいだな」

「うん。私達に任せて！」

そう応えた。それに満足したように蒼二は唇を歪める。そして、次に郁人と竜胆を見ると、

「七海遠音は郁人、竜胆。お前達二人に頼んでいいか？」

そう、若干心配そうな声で問うが、郁人は冷静に頷き、竜胆も気合が入った笑みを浮かべ、

「ええ。俺と、竜胆で今度こそ勝ちます」

「そうゆーことっすう！」

どうやら懸念していた程、傷ついてはいないらしい。そう判断し、更に蒼二は言葉を続ける。

「一之瀬凜の空船は数が多い。後、あそこは前進するのに必要なポジションだ。でかい戦力をぶつける。

律、時雨、梨香、狂、奏。で行こうと思う。後、あの空中プラントには、竜胆の Gate をもう設置したから、

遥緋と莉王で一気に壊滅してくれ。状況から察するに、あそこで悪鬼を生産してるっばいしな。

俺と運命は、三つの塔が壊されるまで本部の守りと状況判断に専念

したい。それでいいかな？」

誰からも否定の声は出ない。とりあえず、間違った戦略とは誰も思っていないさそうだ。と、蒼二は安堵した。

だが、その余韻を楽しんでいる暇は無い。状況は段々と悪くなっている。タイムリミットは、時を越える魔具

が作られてしまうまでの時間だ。ぐずぐずしている暇は無いので、蒼二は最初の指示を出す。

「よし、まずは前進だ。先頭は、遥緋、由加、神璽。この前言った、アレをブチかましてやれ。

あの辺りの悪鬼を排除したら、今説明したように格隊に別れて、それぞれの仕事をこなしてほしい。

死ぬな。とは言わない。だが、無駄死にだけはするな。何かあったら、すぐに本部に連絡を寄越してくれ。

こちらにも出来る限りの事はする。だから

とまで言いかけた時、隊員の一人が蒼二達の方へと息を切らせて走ってきた。

「う、ウチの隊の海山から今報告が入ったのですが、蒼威さんが十文字戒と交戦し、瀕死の重傷だそうです！」

し、しかも魔具の力によって、今あの二人は十文字本家のすぐ傍に居ると……」

誰もが言葉を失った。あの千鳥蒼威が瀕死の重傷。信じられないといったような顔で誰もが言葉を出せない。

遥緋は顔面蒼白になり、蒼二を見る。心の動揺は、ほんの数秒。ユニオンの長として、蒼二は言葉を紡ぎだした。

「報告、ありがとう。こつちで後々策を練るから、一度下がってくれ。また、指示を出す」

そう、言い放つ。隊員はそれ以上何も言えず、一礼すると自分の居るべき場所へと走っていった。

重苦しい沈黙が一瞬生まれ、それを破ったのは神璽だった。

「おい、蒼二！ 後々ってどういう事だよ。蒼威さん瀕死なんだからっ！？ だったら今すぐ」

とまで言いかけて、神璽は気がついた。これは、個人の感情であると。蒼威とは付き合いが長い。

それ故に、大事だと思っている。だが、今の自分の立場は 　とまで思考が回ったのだ。

蒼二もそれに気づいたようで、声低く、淡々と喋り始めた。

「そう　だが、俺はユニオンの長だ。部下に対する責任がある。ここで、俺の感情を優先させてみる。

何人死ぬと思う！ 俺は、たった一人の為に、自分の感情で！ あんな悪鬼まみれの場所に突っ込めと命令する事になるんだ。そんな事は、出来ない」

それが、ユニオンの長としての蒼二の責任。蒼二は、蒼威の事が嫌いではない。父親としても人間としても

尊敬している部分は秘密だが、多々ある。それでも、蒼二は蒼威を優先することは出来ないのだ。

蒼威を助けに行こうとすれば、沢山の犠牲者が出てしまう。命は平等だ。そんな命令出せるわけが無い。

その場にいた全員がそれを理解した。だが、諦めたわけではない。そして、遥緋が口を開き、

「じゃあ、私が最初に前進したらそのまま救出に向かうのはどうかな？」

「あの空中のプラントはどうする。遥緋と莉王の隊は、数は少ないがユニオンでも一番制圧、破壊に向いている隊だ。」

お前達二人の能力を考えてみてもな。しかも、報告によるとあそこには十文字の四つ子が居る。」

並大抵の式神使いじゃ返り討ちだ。だからこそ、お前達二人に行ってもらうしかないんだ」

「じゃ、じゃあ……」

と問答は続く。全員で、どうにか人員を避けないかの議論が始まった。だが、浮かばない。

何処も強大な敵が相手だ。下手したら、そこから崩れてしまう。だから、中々いい案が出てこない。

暫く問答が続いていると、やがて、一つの手が上がった。その手を上げていたのは、九我山令だ。

「あの……僕、紫ちゃん、碧ちゃん、太郎くんの四人であるのプラントに行くのって、駄目ですか？」

「……悪くは無いが、その四人じゃ不安が残るのも事実だしな」

「僕、あの四つ子とは昔から良く遊んだんです。だから、あいつらの式神の特徴も良く知ってます。」

でも、莉王さんや遥緋さんは、どんな能力か、どんな式神かもわからないでしょう？」

だったら、僕らに行かせてください。そうすれば、遥緋さんも蒼威

さんの救出にいけると思っんですけど」

そう言う令だが、蒼二はまだ不安そうだ。令の實力は手合わせしたことがあるので、わかっている。

その時は本気ではなかったという事も　だが、まだ若いという点や、個人の式神の強さ等の

不安要素があるのも事実。しかし、メリットも大きい。四つ子の式神については何もわかっていない。

でも、令は知っている。しかも、空も飛べるのだ。廃案にするには惜しい　とも考えていると、

「蒼二、私からも推薦したい」

そう、律が声を上げた。近くに居た莉王もうんと頷いた。それでも、

「だがなあ……」

とまだ迷ってしまう。すると、律は眉を吊り上げて蒼二を睨み、

「蒼二、あまりウチの弟をなめるなよ。こんなチャラチャラしたりだが、物心ついた時から、

何処へ出しても恥ずかしくないように、それなりに厳しく育てたつもりだ。實力だってあるし、

神璽に預けたのがいけなかったのか、ゴキブリのように中々殺そうとしても死なないしな　」

「ちよ！　さりげなく俺の指導否定！？」

神璽の言葉を黙殺し、その後綺麗な笑顔を律は作ると、

「何より この私の弟だぞ？ 莉王と遥緋のような変人夫妻より、  
ずっと信頼できるはずだ」

「いやあ……莉王さんと結婚した所為で、私まで変人カテゴリに入  
れられてるう……」

「は、遥緋っ!?!」

そんな問答が続くと、笑いが起きた。蒼二も失笑を堪えられない  
ようだった。

顔を上げて、令を正面から見据えると、

「じゃあ、令。頼んでいいか。そこに居る、紫、碧、太郎も、よろ  
しく頼む」

紫たちも蒼二の言葉に力強く頷き、そして、会議が終わった。そ  
れぞれがそれぞれの場所に散らばり、

装備や準備を整え始めていく。幹部達は忙しそうに、連絡を入れ、  
隊長格達もその指示に応えていた。

本当に、十文字派とユニオンの抗争が始まるうとしている。

そんな光景を見ていて、令の足が若干震えるも、

すぐに自分で自分の足を殴って震えを止めようとするが、上手く  
いかない。すると、肩が叩かれ、後ろを向くと

真面目な顔の律が立っていた。先ほどまでとは違い、真剣な表情  
だ。それに釣られ、令も表情を引き締める。

「進めるようには、なったのかな？」

「……少しだけ。多分、これからずっと進むために、僕は行こう

「としてるんだと思う」

それが、令の結論。この戦いの果てに、何かがある気がするのだ。どちらが悪いともいえない、この抗争。

考えさせられる戦いがあった。考えさせられる出会いがあった。そこから、進むためにこの戦いを往く。

相手は小さい頃に良く遊んだ友達。四つ子という世界の中に、一時期だが令は居たのだ。

気持ちはわかるが、令だって彼等の起こそうとしていることは気に入らない。変えたい過去。それは、

令にだってある。だけど、変えられない。それでも見つけた事が一つ。それで、終わりではなく、その先もあるという事。

「お姉ちゃんに、ずっと聞きたかった事があるんだけど、聞いてい  
いかな?」

「何かな?」

「お姉ちゃん。僕が子供の頃、僕の事嫌っていたでしょ?」

律はその言葉に少し驚いたようだった。後ろに居る太郎や紫も驚いたような顔をしている。

当たり前だ。律と令の関係を二人はずっと見ていたのだ。律が高校に行っていた少しの時代に

離れては居たものの、帰省してくれば普通に接していたようにも見える。だが、令は知っている。

律が、自分に嫉妬していた事を。律は厳しく育てられ、好き勝手でできなかったのに、令は甘やかされ放題。

単純に考えて嫌うだろう。無邪気に笑って、楽しそうに紫と太郎と遊んでいる令を疎ましいと思っていただろう。

そして、暫く見詰め合う二人。やがて、観念したように、律は首を振り、

「知ってたか。うん……それは、真実だよ。お姉ちゃんは、お前の事を確かに嫌っていた。」

それでも、幾つか幸せな事もあった。それも事実。結果的に、お姉ちゃんはお前の事が、今は嫌いじゃないしね」

「だから、僕の事を苛めたり殴ったりしなかったんだね」

「ああ。軽蔑したかい？」

そう、律は問う。その表情は無表情で、感情は読み取れない。令も、同じように無表情だったが、

やがて顔を崩し、何時もの笑顔を作ると、

「ううん。僕は、お姉ちゃんの事を尊敬してる。僕が、お姉ちゃんの立場だったら、こつも上手くはいかないだろうしね。それに、僕はこれでまた一歩進める気がするんだ」

令が一番変えたい過去。それは、自分自身の生まれ。何故、男の子として生まれてきたのだろうか。

何故、神憑の力があるのだろうか。それが 律から全て奪ってしまつたというのに。

そう思っていた。だが、律は言ってくれた。幸せな事もあったと、嫌いでないと、だから、自分は男で、神憑でいいのだ。

自分が全てを奪った姉がそう言ってくれたのだ。もう、迷うことは無い。

「ありがとう　じゃあ、行って来る」

「ああ、幸運を祈る」

そう言つと、令は歩いていってしまった。紫と太郎と碧も追いかけて行きたいが、何となく近寄りがたい。

律にも令にも。姉弟の問題を目の当たりにしてしまつては、かける言葉が無い。

だが、悪い終わりかたではない。むしろ、いい終わり方だ。これで、二人のあいだの最後の蟠りが消えた。

すると、律は紫と太郎と碧の前まで歩き、顔を見せないようにして三人を一気に抱きしめると、

「今から話す事は、アイツに内緒だ。いいな？」

と低い声で口にした。紫と太郎は恐怖から慌てて頷き、碧は普通に頷く。

「羨ましかつたんだ　私になくて、あの子にはある神憑の力がね。何度願つたか、あの力が自分になれば　と。」

だが、今はこう思うよ。あの子が、神憑の持ち主で良かったと。私がついていたら、確実に歪んでいた。

でも、令は歪んでないよな。姉と家族思いのとても良い子に育ってくれた。この辺りは、太郎と紫に、特に感謝している」

「律姉え……」

「や、ウチらはただテキストに遊んでただけで……」

と、律の言葉に何処か恥ずかしそうに言葉を紡ぐ太郎と紫だが、

「……太郎ちゃん。紫。謙遜しない。律お姉さんは感謝してるんだから」

碧のその言葉に、黙ってしまふ。そして、律は抱きしめた三人の背中を強く叩き、体を離す。

そのまま、呆然としている三人を、何処か濡れたような瞳で見つめると、

「あの子を、守ってやってくれ。少し頼りない部分もあるが、あの子が、神憑を持っているのも、お前達と一緒に居るのにも、絶対何か意味があると思うんだ。だから、頼むぞ。我が弟と、妹達よ！」

律はそう言うと、背を向けて太郎達の下から立ち去った。そして、後に残された太郎達に様々な感情が渦巻く。

悪鬼と鬼神。人間の敵。ずっと、それが自然だと思っていた。九我山家と出会うまでは。

変わった家だと思う。敵である悪鬼と鬼神に、弟を守ってくれと頼むのだから。だが、それでも嬉しかった。心が震えるほどに。

「ふ、ふん。律ねーさんに、ああまで言われてもうたら、絶対死守やで！ お前等、わかつとるやるな？」

「たりめーだよ。それが、俺の此処に居る意味だ」

「……うん。私も、令君と律お姉さん大好きだから、絶対死なせない」

鬼神と悪鬼に迷いは無い。後はもう、約束を果たすだけだ。そう

決めると、太郎達は令の所へと走り出した。

ついに、準備が整った。蒼二は、新しく設置された仮説本部の一番高い場所へと立つ。敵は、遠くて近い。

数百メートル進めば、最初の戦闘が始まる場所が見える。そして、その更に奥。妙な障壁で守られている

十文字本家が見えた。そして、眼下。自分の部下達が隊列を整えて、最終調整に入っていた。

それを暫く眺めた後に、蒼二はついに戦いを始めることを決意した。目を見開き、声を大にして叫ぶ。

「皆、見えるか　これが、十文字の出した答えだ！　あちらは、

徹底的に闘りあう構えだ。最も愚かな事にな！

だから我々も、あちらの流儀に従うとしよう！

いで解決できる時間は過ぎ去った！

何時でも過去にすがっている馬鹿共に教えてやれ

世界の、クソツタレだが遵守すべきルールを！」

っ！　この

とそこまで言うと、更に息を吸い、

「これより、ユニオンは数の十名家、十文字派に攻撃を仕掛ける  
っ！」

己が明日を守る為に、悪行を行えと、ユニオン代表、千島蒼二が此  
処に宣言する！       ただし、罪は全員が背負えっ！」

力の限りそう叫んだ。すると、大きな返事が聞こえた。まちまち  
で、それぞれの思い思いの言葉だが、それでいい。

それをきっかけとして、ついにユニオンの全部隊が動き出す。先  
頭を進むのは、緋眼を発動させた遥緋と、

その左右を移動する由加と神璽。その後に、幾つかの部隊が式神  
を構えて、移動している。それを迎え撃つは、悪鬼達。

遠距離から装備された魔具を使い、攻撃を仕掛けてくる。遥緋は、  
足を一旦止めて、意識を集中させた。

動きの止まった遥緋を守るようにして、由加と神璽が魔具の障壁  
を張り、そして、背後の部隊の隙間から、九尾の狐が

姿を現した。そして、神璽と由加の丁度間ぐらいで足を止め、

「千島の嬢ちゃん。行けっか？」

「うん。じゃあ、行くよ。神璽君、由加ちゃん、キュウちゃん  
っ！」

次の瞬間、遥緋の輪廻転生の分解の力が発動した。何時もの、完  
全に死滅してしまう力ではない。

悪鬼達の体も、装備されていた魔具も、全て同時に反意思へと分  
解したのだ。そして、大量に生まれる

反意思を九尾と、由加と神璽が取り込む。すると、九尾の体が大  
きく膨れ上がり、神璽と由加がその中に

取り込まれ、銀色の機械のような九尾の狐へとなった。

「っしゃあ！ 久々に派手な喧嘩だぜえ！ 用意は良いか？  
ガキ共」

「平気だよ」

「久々なのに態度でけえなあ……行けるぜ！」

機械音がして、九尾の尻尾に大量の砲門が現れた。その数、一尾に百十一個。

それに反意思が次々と装填されていき、

「九百」「九十九連」「狐砲」

九百九十九もの狐砲が轟音を立てて一斉に発射された。目標は、眼前に居た大量の悪鬼達。そして、着弾。

目で見ているだけでも、恐ろしいほどの威力だった。その間に、神璽と由加は合体を解除して、九尾は二つに分かれると、由加と神璽の胸の中へと消えて行った。そして、風の式神使いが、舞い起こった粉塵を晴らすと、そこにもう障害物は無い。在った建物も全て破壊し、吹き飛ばされかなり戦況が見やすくなった。

「っーわけだ！ 各員、ちゃんと仕事しろよっ！」

神璽がそう言つと「お前が言つな」コールが怒号のように突き刺さった。それに悲しそうな表情を作った神璽は

肩を落としながら由加と自分の部隊を率いて紡の待つ塔へと向かって行く。郁人の隊何かは、既に接近して

軽く戦闘行為を始めていた。一番大所帯の凜の場所へは、総大将として莉王が指揮を執って進んでいった。

「じゃあ、医療系の人は私についてきて！」

最後に残された遥緋は、最低限の医療系式神を使える人間を連れて、蒼威と天音の搜索へと向かった。

流石の遥緋も今回はかりは、焦りが浮かぶ。あのデタラメに強い父親が負けるなんて、いまいち想像がつかない。

（お父さん……）

心配だが、それに囚われてはいけない。そう判断し、遥緋は頬を一度叩き、少し走る速度を上げた。

## 第41話：俺の名前は

十字街特区の上空に浮かぶ空中プラント。削り取られた大地が浮かび、その上に中規模の工場が存在している。

時折、大地の下部から悪鬼や武器が排出され、地上へと落ちていく以外は静かなものだ。

その工場から少し離れた場所に、ひっそりと紋様が一つ。Gateの紋様だ。その中から、そろそろとユニオンの精鋭達<sup>e</sup>が息を殺して現れた。急遽派遣された由加の隠密行動に秀でた部隊の人間達だ。

「全員準備完了。行けます」

下からの報告を聞くと、リーダー格が手を上げるのを合図に全員が足音を立てずに走り出す。

警備に当たっていた悪鬼達が気づくのよりも早く、それぞれが式神を顕現させて、一瞬で悪鬼を切り刻んでいく。

その間、僅か数秒。戦闘が起こった事すら感じさせない所業だ。そして、工場内に進入しようとした時だった。

「流石ユニオンってわけか。各家の良い人材が引き抜かれてるだけあるねえ」

突如として響き渡る声。それと同時に、短い悲鳴。全員がそちらを向くと、そこに居たのは十文字千秋。

黒髪の一部を白に染めているので間違いない。その手には、白い爪型の式神。足にも、同じような

色をした装甲が、靴を初めとし、ほぼ全身を覆っている。そして、全員が一瞬で、戦闘体勢に入った。

まず三人が、刃の式神を構えて向かっていく。早い。と千秋は薄く笑い、式神を一度振った。

轟、という音と共に、三本の真空の刃が三人を同時に切り裂いた。更に、着ていたコートから魔具を一つ取りだすと、

「悪いけど、僕らの目的は殺すことじゃないんだ。お帰り願おうかな」

それは、丸いボールのような魔具。次の瞬間、ボールが二つに割れ、中から突風が吹き荒れた。

隠密部隊全てを包み込むように突風は吹き荒れると、そのまま大地から空へ、やがて風んび包まれながら、

ゆつくりと時間をかけて地面へと降りていく。何人かの式神使いが攻撃しようとするが、暴風の障壁という

意味合いもある魔具なので、破れないでいる。千秋はそれを満足げに眺めていたが、隠密部隊の一人が

笑っていることに気づいた。しかも、中指を立てて。

「強がり……？」

のようには見えない。思案顔で物思いに耽っていると、突然、何の前触れも無く上空に複数の式神の気配。

不味い　　と思った時には、上空から無数の式神の攻撃が迫っていた。

「秋兄い、俺が行くよ」

無線から弟の声が聞こえ、工場の上の部分だけに、黒い亀の甲羅のような装甲が現れた。

千秋の弟、千冬の式神である。それが盾となり、上空から降り注ぐ攻撃から何とか工場を守ったものの、

サブで使っていた建物や、資材置き場が一気に壊滅状態へと追い込まれた。

これほどの数の攻撃を一気に仕掛けてくるような人間は、千秋が知っている中でも数少ない。

そして、見知った式神の気配。それは

「春、夏、冬。敵は、あの泣き虫令だ。あいつの相棒の鬼神達も居るよっ！」

十文字特区の上空。紫との神憑を一度解き、そのまま紫におんぶしてもらおうような体勢になる令。

恥ずかしいが、空を飛べないので仕方が無い。太郎は足から炎を噴出して、少しではあるが飛べるので、

碧の肩に掴まりながら、ふわふわと漂っていた。

「……奇襲、失敗」

「だな。令、これからどーするよっ？」

そう、碧と太郎が令に問うと、令は紫に背負われたままじつくりと下を見て、

「性格と式神的に、千春と千夏が来るね。良い？ 十文字の四つ子の式神は、何の因果か四神型なんだよね。」

千春が青竜。千夏が朱雀。千秋が白虎。千冬が玄武。それらは、ただの四神型の武器の式神でしか

ないんだけど、あいつ等は魔具と式神を融合させて、改良してるんだ。だから、式神破壊を狙うなら、武器の部分を狙う事」

淡々とそう告げていく。今更ながらに、あの頃一緒に遊んでおいて良かったと令は思う。

十名家では一番年下な方だったので、令には同世代の友達が少ない。莉王や颯太とも仲は良かったが、

それは同年代ではない。だから、本当に話したい事も話せなかった気がする。だが、そんな令を見捨てずに、輪の中に

入れてくれたのが十文字の四つ子だった。だからこそ、自分が決着をつけたいのだ。

「じゃあ、作戦を説明するよ。四つ子の中で、一番強いのが末っ子の千夏。あいつの式神はヤバイ。」

僕と太郎くんが鬼憑しても勝てるかは微妙だね。飛べないし。だから、上空は紫ちゃんと碧ちゃんです止めをお願いしたい。

その間に、僕は太郎くんと降りて千秋と千冬の相手をしながら、プラントを完全に壊すから。

多分、その頃には莉王兄ちゃんの手も空いてるし、そしたらこっちへ転送してもらって、僕らはサポートって形にしようか」

令の言葉に、紫と碧と太郎は黙って頷いた。そして、令は無装の形をサブマシンガンへと変えた。

太郎も太郎で碧の邪魔にならない程度に炎を噴出し、紫と碧は反意思を集中させている。すると、下の方から

赤い光線が射出された。それを合図に、紫と碧は移動を開始。

「碧、行くで」

「……うん。ついてこいよ、紫」

碧と手を繋いだ太郎がまず先行。眼下には、既に赤と青の竜と朱雀を模した式神が迫っている。

二つ共に千春と千夏の姿は見えない。きっと、中に収納されているのだと予測。

「令、容赦しないよー!」

「たとえ幼馴染でもね!」

その声が聞こえると朱雀の翼となっているパーツの一部がスライドして、ミサイルが大量射出された。

しかも、追尾式。碧は自ら前に出て、ミサイルを引き付けると、紫達を通れる道を作る。

すぐさま千春の青竜がフォローに入る。それを確認すると、碧は方向転換し、青竜の方へと進路を変え、

太郎も足から炎を噴射し、一気に距離を詰める。青竜も碧の意図に気がついたのだろう。

進路を変えようとするが、神憑状態に入った令の電撃がそれを阻む。

「お姉ちゃん。大丈夫だよー」

碧の後ろについていた朱雀がその大きな口を開き、赤い熱線がその中から放たれる。

結果としてミサイルは全て破壊され、爆発だけが起きた。粉塵と煙が舞う上空で、全員が一瞬視界を失う。

そして、令が碧に煙を吹き飛ばしてもらおうと声を上げようとした時だった。

「見つけた!」

煙の中から青竜が現れ、その口から巨大な刃が飛び出す。それでは、終わらない。

青竜の全身が可動を始め、形態を変えて行く。中が開き、パーツとパーツが連結し、

中に搭乗していた千春の鎧と武器となり、全長五メートル以上はあるであろう、長剣を携えた

千春が令へと迫る。令も無装を太郎お得意の大剣の形に変化させ、迎え撃つ。

「っ!」

拮抗。だが、千春の方が力が上だった。そのまま下方へ衝撃に飛ばされる令はニヤリと口を歪め、

次の瞬間、神憑の力を解いた。光と共に紫の体が再び顕現し、そのまま令の足を掴むと、

ジャイアントスイングの要領でプラントの方へと投げ飛ばす。そして、上方に居た碧も千夏の放った

弾幕を回避し、太郎を風で包んで令の方に向けて打ち飛ばした。

「令、いっくぜえ!」

「うん！」

空中で再び神憑を発動。令を炎と鎧が包んでいき、足から炎を噴射すると更に加速してプラントへと向かう。

令の視線の先には、既に体勢を整えている千秋と千冬の式神が見えた。改造された白虎と玄武の式神だ。

無装を拳銃の形に変えると、ばら撒くように弾丸を発射。防御体勢をとった千秋と千冬に一瞬の隙が生まれ、

「太郎君！」

「ああ！」

太郎が更に力を送り込み、無装の形が大剣へ。炎が一瞬でそれに纏わりつき、令はまず千秋の白虎へと

接近。だが、その前に黒の装甲板が出現した。千冬の式神の一部である。それを知っていた令は、

大剣を中へと放り投げ神憑を解除。そして、太郎が装甲板の奥に顕現し、空中で燃え盛る大剣を握ると

勢いを利用して千秋へと叩きつけた。剣撃だけでなく、炎も白虎に纏わりつき、たまらないように

千秋を搭載した白虎は移動し、そのまま変形。そこには白い虎の鎧を纏った、千秋の姿。

「やるじゃん。僕、ちょっと令の事ナメてたよ」

「そういえば、お前には結構昔からかわれてたね」

「冗談交じりだけだね。僕らと対等に話してくれるのってお前だけだったし。」

「ただ、今は容赦しないよ。僕らの邪魔をするのなら、お前だって場合によっては殺す！」

「そう、皆と話して決めたから」

「そうか……多分、僕は殺さないかな。僕は、お前たちみたいに過去を変えたくは無いからね」

「……ふん」

そして、千秋が高速で移動し、令へと爪を閃かせて接近。

「令！」

太郎が燃え盛る大剣を令に投げ渡し、自身は更なる炎を体に纏わせて令に背中を預けるような

体勢で千冬へと構えた。千秋も千冬も油断することなく、集中力を高めて令と太郎へと迫る。

そして、接近した千冬の爪が横から令を一閃。これを腰を落とすて令は回避。そのまま、無装を

拳銃の形に変え、千秋ではなく背後に感じる千冬の式神の気配の方向へと、視線を向けずに発砲。

太郎もそれに合わせるようにして、炎を千秋めがけて振りまく。

千秋はそれを軽くステップして回避し、

千冬は装甲を盾として気にせず突っ込んでくる。

「僕らの式神は」

「そんなにヤワなもんじゃないんだよね！」

そのまま二人が令と太郎に同時攻撃を仕掛けた時だった。再び、

神憑の力を発動させると令は炎を足元から

噴射し、二人の攻撃はぶつかる直前に飛び上がって回避すると、無装を散弾銃の形へと変えた。

マズイ　と千秋と千冬はすぐに形態を変えて、白虎と玄武の装甲で全身を包んでいく。令は、少し引き金を

引くのをためらってしまった。そして、装甲がほぼ閉じきった辺りで引き金を引く。

令の中にいた太郎はそれに気づいていた。今、令が最初から本気で引き金を引いていたら確実に勝っていた。

いかに式神と魔具があるうとも流石に散弾銃の威力は凄まじい。だが、令にはそれを引かなかった。

その代償に令は千秋と千冬の命を確実に奪っていたからだ。

(そんなに……大切なのか)

結果として散弾銃の威力はほぼ装甲によって阻まれ、それでも衝撃は凄まじく千秋と千冬は吹き飛ばされていく。

追いかけたのは、軽装甲の千秋の方だ。胸をブーツで踏みつけ、令は白虎の顔面部分を炎を纏わせ

破壊すると、中に見えた千秋の顔へと銃口を向けた。

「千秋、もう諦める……。過去は、絶対に変えちゃいけないんだ」

「っ！ お前に、僕らの何がわかるってんだよ！」

「わかるよ。僕だって変えたい過去の一つや二つはある。それで、涙を流した事だってある。」

でもな。千秋、確かに過去は変えられないけど、未来は変えられるんだ。だから　」

「うるさいんだよっ！」

千秋は突然激昂し、撃たれても構わないのか無理やり起き上がると爪で令の胸部を爪を爪いた。

それだけでは止まらない。令の髪を掴んで顔に更に拳を叩き込むと、

「僕は、絶対お姉ちゃんを取り戻すんだ！ お前にわかるか？ お兄ちゃんの苦しみが！」

僕らが全部お兄ちゃんから奪ったんだ。母親と父親の興味と期待も！ お姉ちゃんの命も！

だったらもういい。僕は命を失ってもいいから、お兄ちゃんの幸せを取り戻す！ もうそう決めただ。邪魔すんな！」

そう怒鳴りながら殴りつけると、令は一度血を吐き、千秋の事を睨むと拳を振りかぶって殴り飛ばし、

「お前は何もわかってねえ！ そんな事情。こんな戦いを引き起こした事の原因にはならねえよ！」

おい、お前わかってるのか。お前らがそのお姉ちゃんの為だけに、どれだけの人間の不幸にしてきたか！

ふざけんなよ、お前。自分たちだけ魔具でのうのうと願いを適えて、他はどうでもいいってか！ 馬鹿じゃねえの！？」

千冬は動けないようだ。千秋と令が殴り続けているのを黙っている。太郎も同じく、令の中で状況を静観。

お互い式神や神憑の力で力が増幅されている所為か、すぐに二人の顔は血の色に染まった。

「それでいいさ。過去が変わったなんて、僕ら以外誰も気がつ

きゃしねえっての!」

「お前、本気でそれ言ってるのかあ!」

「本気じゃなきゃ、こんな事いわねえよ!」

そして、千秋の本気の一撃が令の顔面を捉え、令は大きく吹き飛ばされると気絶した。

令が気を失った事により、神憑の力が解除され太郎は再び顕現した。そのまま、ゆつくりとしゃがみ、

「……意地はってんなよ。馬鹿」

と口にする。千秋と千冬の方を向き、本気で睨む。肩で息をしている千秋と千冬はその視線を真つ直ぐに受け止めた。

すると、上空から何かが降りてくる気配。いや、落ちてくるだ。太郎が視線を向けると、傷だらけになった

紫と碧が地面に墜落し、その後、傷だらけとなった千春と千夏の式神が降り立った。これで、残る戦力は一人。

式神を解除した千春と千夏が真面目な顔で、太郎を見据え、

「降参してください。私たち、令の仲間を殺したくないし」

「そ。これ以上やるってなら。マジ殺すからね!。……うん」

戦力差は致命的だった。紫や碧でも勝てなかった二人も加わり、令が気絶している為、無装すらない。

そんな絶望的な状況であっても 太郎は笑った。

「いや、降参はしねえよ。そして、令も殺させねえ。悪いけど、お

「前ら潰すわ」

「火鬼風情がね……分際わきまえるよ。ちょっと変わってるとはいえ、お前はただの悪鬼なんだからさ」

ただの悪鬼　という言葉に太郎はまた笑う。最近忘れがちだったが、自分は確かに悪鬼でしかない。人間の言語を覚えただけの悪鬼だ。

「はっ、言うねえ」

太郎は言語を得た事によって、ただの悪鬼ではなくなった。本能だけではなく、理性が生まれ、概念を得た。

経験ではなく、紛れも無い過去を。直感ではなく叶えたい未来を。本能ではなくリアルな現在を。

太郎はゆっくりと息をつき、過去から律に昔教えてもらった式神の召還の仕方を思い出した。

シッパイシタ。ムズカシイ。

気にするな太郎。お前には炎の力があるじゃないか。それに、僕と違って鬼憑ができるしな。

オセジ？　オヤジ？

お世辞であっている。が、ふむ。お世辞ではないぞ。フオーというのかな。おお！　また一つ言葉を覚えたな！

律のあの時の微笑を太郎は覚えている。ゆっくりと、自分の内面を探り、自分の根源を探していく。

そして、見つけた。あの時にはまだ無かった、確固たる自分自身が時を経て感じられた。

その根源とゆっくり同調し、勢いと共に、外へと出していく。自分の殻を打ち破るように、悪鬼から脱皮するように。

「な……っんだって！」

千冬を始めとして四つ子達は絶句していた。眼前に居たたただの上級悪鬼が、式神の気配を発しているのだ。

姿形にも若干の変化が見られた。右腕部分に赤い装甲が纏わりつき、強化されている。

更に両肩には禍々しい形の肩当から赤い炎の翼が噴出していた。これが、太郎の式神。名前はまだない。

そして、太郎は一度軽く跳躍し、炎を撒き散らして一瞬で手負いの千秋へと接近すると、

「だがよお」

思い起こすのはこの戦いが始まる少し前の話。令と紫が大学の飲み会でそのまま泊まりとなった日。

令の父親も仕事で家で居なく。九我山の本家には、太郎と令の母親の二人だけだった。

なあ、母ちゃんよ。何で、俺の名前って太郎なんだ？

あら、気に入らない？

いや……そうじゃねえけどさ。今日、姐さんにちょっと馬鹿にされたからよ……

あらあら。じゃあね、太郎ちゃん。これは、律ちゃんと令君には絶対に内緒よ？

ああ。で、何なんだよ？

右腕につけられた装甲がスライドし、背中 of 炎を一転集中。それは太郎の手につく手甲へと集中。

千秋が防御体勢を取るが、それでも気にせず太郎は腕を振りかぶり、

「俺の名前は」

太郎の名前の意味はね、長男って意味なの。そして、令君が産まれる前に

私のお腹に居た子につけるはずだった名前。私の体が弱い所為で産んであげられなかった子の名前なの。

……そ、そんな名前を俺みたいな悪鬼が貰って……いい、いいのかよ？

良いのよ。だって、太郎ちゃんは。律ちゃんの弟分で、令君の兄貴分でしょ？ だから、胸を張って名乗ってね。

私は、紫ちゃんもそうだけど。太郎ちゃんだって本当の子供みたいに愛してるから

拳を思い切り千秋へと叩きつけ、一転集中させた炎を解放。膨大な炎が一気に溢れ出すと共に、胸を張り、太郎は我が名を叫んだ。

「火鬼なんてダセエもんじゃねえ　太郎って超かつけえ名前なんだよ！　覚えとけ！」

炎と衝撃にやられ吹き飛んでいく千秋を見て、再び千春と千夏は式神を発動。千春が一瞬で青竜刀を振りかぶり、振り下ろした時にはもう、太郎は炎の翼とステップを繰り返して、三人から距離を取り、空中へと飛翔。千夏の朱雀がすぐに飛翔形態へと変形し、太郎へと迫る。だが、一向に距離が縮まらない。

「な、何でよー！」

それもその筈、千夏の飛行速度は人間の体が耐えられる程度。だが、悪鬼である太郎にはそれは関係ない。

人間の何倍も体が強い為に、千夏よりもシャープに、そして、千夏よりも若干早く飛行が出来るのだ。

複雑な軌道を描いて太郎が再び迫る。千夏は接近させないために、朱雀の装甲に収納したミサイルを全弾発射。

だが、それすらも太郎には効果が無かった。今の太郎に何も怖いものは無い。四つ子ですら大した脅威に見えない。

この力ならば、令を守れる。この力なら、先ほどした律との約束を果たす事が出来る。そんな実感があつた。

(半分泣いて頼むんじゃねえよ　　ったく！)

右腕のパーツが稼動、剣の形へと変化。それに炎が巻きついていき、太郎はすれ違い様に朱雀の両翼を破壊。

煙上げてプラントへと落下していく。それを確認すると、太郎は急降下し、今度は千冬の玄武へと迫った。

(こっちは、一生かかっても返せねえ程の借りがあんだからな！)

太郎の右腕が再び形状を変え、槍の状態に。玄武は、ミサイルや砲台から弾を発射するが、太郎には意味が無い。

そして、勢いを利用して玄武の硬い装甲を貫き、ありったけの炎を叩き込み、吹き飛ばした。

残るは、千春だけ。四つ子の式神は全員発動はしているが、殆ど戦闘不能に等しかった。

「で、形勢逆転したが、どうする？」

「っ！」

「だんまりかよ。早く決めてくれ」

「……駄目。駄目！ 駄目え！ こんな所で諦めたら駄目なの！ お兄ちゃんが、お兄ちゃんがまた孤独に！」

パニックに陥ったのか、千春は頭を抱えて独り言を叫び始めた。そして

「何で皆寝てるの！？ 決めたじゃん。何があっても、お兄ちゃんとお姉ちゃんをまた会わせてあげようって！」

「姫ちゃんとお兄ちゃんとお姉ちゃんの家族の形を取り戻そうって。ねえ、あれは嘘だったの？ ねえ！ ねえ！ ねええッ!？」

千春の魔具の力が暴走し、触手のように周囲へと広がっていく。

それらは、朱雀、白虎、玄武の式神に絡みつくだけ

ではなく、千秋、千冬、千夏の体までをも取り込み、青竜と合体していく。足りない部分は魔具で補われ、

四つの式神が合体した巨大な竜の式神へと成った。流石の太郎も、これには開いた口が塞がらない。

「こいつも、お兄ちゃんか……」

太郎は詳しい事情は知らない。だが、この四つ子達の兄への執着ぶりは異常だった。よほどの過去があるのだろう。

だからといって負けてやるわけにはいかない。太郎は飛翔し、翼から炎を放つが、全く効いた気配は無い。

多分、中心部分に居た千春の暴走を止めなければいけないのだろう。千春は今、見境なしに攻撃を放っている。

余波で兵器プラントの大半が崩壊している。これなら、目的はほぼ達した。一度、令達を連れて体勢を立て直そう。

そう思い、太郎が令達を回収しようとした時だった。青竜の怒り狂った瞳が、気絶している令達を見据えたのだ。

「邪魔するから……アンタらが邪魔するから、お兄ちゃんが！ お兄ちゃんが！」

竜の所々から、砲台が出現し、その全てが令達へと照準を定める。太郎は、全ての炎を翼に集めて加速。

そして、竜の咆哮と共に、その全てが発射された。

爆音が轟く音で、九我山令は意識を取り戻した。空気が埃っぽい、喉が若干むせる。そして、熱い。

顔を上げると、そこには炎の翼が見えた。それは良く見た背中だった。子供の頃から何度も背負ってもらい、いつも見ていた背中。太郎の背中だった。

「太郎くん……？」

太郎の様子がおかしい。太郎から式神の気配を感じる。あまりにも変わった状況で令はついていけなくなった。

そして、何故か太郎の体から粒子が溢れ出した。おかしい。自分は神憑の力を発動させていない。

確かめてみるが、発動はしてなかった。すると、太郎の膝が崩れ落ちた。その間にも粒子化は続いていき、

「太郎くん！ 太郎くん！」

令の悲痛な叫び声がプラントに響き渡った。

第42話：神憑が泣いている (前書き)

次回完全未定

## 第42話：神憑が泣いている

「太郎くん！ 太郎くん！」

その声で太郎は意識を取り戻した。令の顔を見してみる限り、どうやら傷はないようだ。良かったと。太郎は笑う。

あの一瞬では、炎の力を最大限に発揮して、令達の盾となるのが精一杯だった。

その代償として太郎は攻撃の全てを受けきった。いかに式神を発動させてようと、あの物量には耐えられなかった

らしい。自分の存在が損傷しすぎて、世界に還って行くのがわかる。それでも、最後の力を振り絞り、

「令、逃げる……」

「太郎くん！」

太郎の体が完全に粒子化した。令が触っていた太郎の体も、今では完全な粒子となってしまうている。

令はそれを涙をこぼしながら、抱きしめると神憑の力を発動。粒子の一粒ですら逃さないように、

その全てを体内に取り込むも、変化が起きたのは右腕の部分だけだった。反意思が足りてないのだ。

そのまま無言でゆっくりと立ち上がり、今まで聞こえていなかった竜の咆哮にようやく気がつく。

「お前が太郎くんをやったのか……？」

竜は答えない。ただ、暴走し、周囲を破壊していくだけ。令はのろろと竜へと歩いていく。

攻撃が肩を掠めるが、興味すらわかない。無意識に、極力存在感を消して歩いていた令は、竜の足元までいくと

炎を顕現し、竜を何の手加減もなくただ、殴りつけた。体が大きい為か、あまり効果が無いように見える。

無装を顕現し、大剣へと変化させ、竜を力任せに斬りつけた。途端に悲鳴をあげ、竜が令を睨む。

「よくも太郎くんをやったな……！」

竜を殺す。ただ、それだけに集中して令は巨大な竜の体を走り出し、顔の部分を目指す。

途中砲台や、触手のようなものが令の行く手を阻むが、全て斬りおとして行く。阿修羅の如き強さだ。

だが、その代償として令の体は血に塗れ、息が上がっている。それでも、止まらずに令は走ったが、

「っ……！」

竜が発した風により、令は吹き飛ばされ元の場所へと転がった。

力が、足りない。もつと、力を。

令はゆっくりと後ろを向き、倒れている紫と碧の姿を見つけ、唇を歪める。力なら、あるじゃないかと。

そして、倒れている碧を起こし、体に触れると強制的に神憑の力を発動。碧の体が粒子化していき、

令の体の中へと吸い込まれ、収まる。と、胸の奥が苦しくなった。何故だか、涙が止まらない。

「こんなんじゃない駄目だ……」

そして、紫の方を向くと紫は気絶から覚めたようで、令の事を驚いたような瞳で見ている。

そんな紫の表情を全く気にせず、淡々と令は言葉を紡いでいく。

「紫ちゃん。太郎くんがやられちゃった。あいつ、殺そうよ。でも、強いんだよ。力が足りないんだよ」

「れ、令。あんた、どうしたん？」

「どうもどうもないよ。ほら、早く神憑の準備して。ねえ」

と、令は紫の手を掴む。だが、紫は怯えたように手を振り払うと、

「ちょ、ちょっと落ちつきいや。まずは状況の確認から……」

そう言うも令は話を全く聞かない。やがて、イラつきが最大限に達したのか、無理矢理紫の手を引いて

引き寄せると強引にその体を抱きしめた。紫は顔を赤くしたまま、ただ抱きしめられている。

「早く神憑しようよ。ねえ、紫ちゃんは僕のこと嫌いな？ 碧ちゃんは無意識が無いから受け入れられたけどさ。

紫ちゃんは意識があるから拒まれると、発動できないんだよね。

ねえ、いい加減に答えてくれないかな？」

「嫌いなわけじゃないん！ で、でも令なんかおかしいで！ てゆか

……太郎がやられたって……何がどないなっとなん！？」

「そんなの、僕だって知りたいよ。      ああ、もう。 いいから僕のものになっちゃえよ！」

そして、神憑の力を発動。紫が呆けた表情のまま、粒子と化し、令の体の中へと吸い込まれた。

三人と神憑をするのは初めてだった。どんな影響が起こるのかもわからない。だが、そんなのは今の令には

関係が無かった。どんな影響があろうと、あの竜は殺す。そして、変化が起きた。体の中が熱い。

熱した鉄が体の中に入っている感覚だ。体中に痛みが走る。その痛みに堪えるようにして、令は上着を引き裂く。

それでも熱と勢いは止まらない。溢れ出した反意思が令の体の表面をコーティングしていく。

体が黒く染まっていき、髪の色は白へと。そして、力任せに拳を竜目掛けて振ると、余剰な反意思が放出され、

竜の半身を力任せに破壊。だが、竜はすぐに体を生成し、令の事を再び睨み付けた。

「      いいよ。殺してやる」

体が熱いが、心は冷えていくばかり。令は、軽くステップし、だが一瞬で竜の下まで辿り着くと、

紫の式神、威光を足に発動させ、強引にその体を蹴り上げた。轟音と共に上昇する竜の体。冷たい瞳で

令はそれを見据えると、打出ノ拳を今度は発動。巨大化した両腕で、邪魔だといわんばかりに竜の巨大な体を

掴むと、何のためらいも無く握り潰した。流石の竜体の一部を切り離し、式神がついてる部分以外を切り離すと、

上空へと飛翔。そして、朱雀の口が大きく開いたのを確認。次の

瞬間、膨大な熱線が令へと降り注ぐ。が。

「そんなもの……！」

一直線に向かってくる熱線に正面から立ち向かい、拳に三つの属性の力と反意思を集中させ、無理矢理弾き飛ばすと、令は冷たく笑い、竜へと接近。竜は、右腕に装着されていた巨大な青竜刀を閃かせ、令を叩き潰そうとするが、威光状態となった令の右腕に難無くヒビを入れられてしまった。

「もういいや。死ね」

令が無装を顕現させ、レールガンを構えた。放電と威光の光が周囲を埋め尽くし、一瞬で竜の体を破壊し尽す。そして、青竜の中で、式神の痛みがフィードバックしていた千春は、ようやく我に帰った。

目の前に居るのは、本気で自分達を殺しにきているかつての幼馴染。当然だろう。好き勝手に暴走して

彼の大切な仲間を殺してしまったのだから。それをやったのは、暴走状態にあった自分。

だからせめて 妹や兄達だけでも逃がそう。そう決意し、千春は悲しそうに笑うと、魔具を操作して、

他の三つの式神を切り離そうとした。だが

「お姉ちゃん！ 何してんのよー！ 早く体勢立て直さなくちゃ、ねー？」

「ああ、白虎はまだ動けるよ。下半身の力の供給の制御は僕に任せ  
て」

「玄武のフィールドもほぼ修理完了。うん、これで次のレールガンは防げるね」

兄や妹が通信でそう声をかけてきた。千春は驚きを隠せない。自分勝手に暴走して、勝手に

式神の制御を奪ってこんな状態にしてしまったというのに。何故と、問う前に答えが帰ってきた。

「お姉ちゃんは一番自分を責めてるみたいだけど、それは違うよー」

「僕らの罪は平等だ。兄さんも姉さんも姫も悪くない。これは、僕達四人で背負うべき業さ」

「春があの日気持ち悪くなったのだって、元々は俺と秋兄が開発した新製品の所為だったしね。

今回だってそう。俺達が不甲斐なかったから、春に全部責任が行っちゃった。うん、僕らも悪い」

「皆……」

「だからさ、お姉ちゃん。今を倒そうよー！　それで負けて死んでも、アタシは悔いが残らないよー」。

そしたら、後は最強の遠音ちゃんに任すしかないけどねー。それとお兄ちゃんにまた……かな」

力が湧いてきた。自分達は四つ子で良かったと思う。その所為で、兄が孤独になったとしても

悪いが、良かった。千春は操縦桿を握りなおし、魔具の力で破壊箇所を修正していく。

無駄なく、精密に、全力で。四人の魔具の力が合わさり、竜は人型へと姿を変えた。そして千春は、

外部スपीカーを設置し、令へと声を上げて宣戦布告をした。

「令、私達を止めたかったら、全力で殺しに来なさい！」

令は千春のその宣言を聞いて、苛立ちと共に再びレールガンを引き金を引いた。だが、今度は竜から

現れた黒の装甲板がそれを防ぎ、竜が朱雀砲を放ちながら、一気に距離を詰めてきた。

「ふうん。まあいいか」

令も接近し、拳に三つの属性の力を集中した。そして竜の右腕の青竜刀を見据えると、更に威光を発動。

刃と拳が拮抗し、青竜刀の刀身部分が半分に分れた。それだけでは終わらない。

続けて風と雷を放ち、一瞬竜の動きを止めると、打出ノ拳で竜の体を掴み、プラントへと叩きつけた。

轟音と共に竜が地中にめり込み、令は特大の雷撃を竜目掛けて振り下ろした。苦悶の悲鳴をあげる竜。

（れ、令……ちょっとやりすぎちゃっう？）

（ねえ、紫ちゃん。太郎くんのことをこの中に感じる？　ねえ、感じないでしょ？）

それもこれもあいつらが悪いんだ。あいつらのせいで、もうじき太郎くんが消えちゃう。

悲しいよね。僕、とても悲しい。でも、それ以上に、僕は今あいつらを殺したい！

(あたしかて、悲しい！ でも、こんなやり方じゃあいつだって絶対喜ばんよ！)

(あー……もう五月蠅いなあ。ちょっと待ってて。 もう殺すから。話はその後でね)

(令！)

紫の制止も聞かずに、令は再びレールガンを構え、威光を発動。そして、今度は更に打出ノ拳も発動。

令のレールガンを持つ腕が巨大化し、レールガンもそのまま同時に巨大化していく。

平常時であれだけの威力なのに、巨大化したらどれほどの威力が出るのだろう。ただ一つわかるのは。

四つ子達は確実に令の手によって殺されてしまうこと。そして、令が引き金を引こうとした時だった。

(……)

令の中で、それまで黙っていた碧が暴れだした。風の力が暴走し、苦悶の表情になる令。そして

(何やってんだオメエはアツ！)

太郎の声が聞こえた。それだけではない。微かにしか感じられなかった太郎と碧の意思が令の中で

どんどんと大きくなっていく。溢れんばかりのエネルギー。それ

を感じると意識が引つ張り込まれ、

令は自分の中を見ていた。暗闇の中に浮かぶ自分の姿。涙目の紫。怒って腕組みをしている碧。

そして、ボロボロで存在が若干づれてはいるが、確かに太郎がそこに居た。

(太郎くん……)

(太郎くん……じゃねえよ！ この馬鹿野郎！)

怒号と共に放たれる太郎の拳。意識の中だが、妙に痛みをリアルに感じる。それに戸惑っていると

碧も接近してきて、令の腹部に蹴りをぶちかまし、最後に涙目の紫が令の頬を引つ叩いた。

(だって……太郎くんが殺されたんだよ。だったら、もう殺すしかないじゃん)

(それが、お前の答えなのか?)

(……)

(思い出せよ、令。お前の戦う理由を。お前さつき引き金引かなかったじゃねーか。

んな事する理由は一つだ。お前は、あの四人を救おうとしたんだよね?)

そうだった。令の目的は、殺しあうことじゃなかった。頭の中が冷静になり、先程まで自分がしてきた

事が急に恐ろしく感じた。そう、自分は本気で四つ子を殺そうと

していたのだ。

すると、空中に浮いていた兵器生産プラントが急にその体を傾けた。出力が低下しているのか、

どんどん降下していくのが目に見えてわかる。しかも、その下には結界の広がった十文字の本家。

竜は慌てたように起き上がると、半壊している体も気にせず、プラントを何とか押し返そうと奮闘を始めた。

それを意識の中で青ざめて見つめる令を見て、ようやく太郎は表情を緩めると、

(じゃ、今から救いに行くか？ まだ、終わったわけじゃねーぞ)

太郎が令に手を差し出した。

(……反省したようだね。じゃ、私も)

碧も笑って手を差し出し、

(ほら、何呆けた顔してるん？ ……さっきまでの威勢は何処へいったんよ?)

紫が少し照れた口調で睨み、やがて手を差し出した。差し出された三つの手を令は暫く眺めた。

そして、思う。そうだ。まだ、終わっていない と。まだ、自分を進めると。令は三つの手をとった。

すると、意識が急にクリアになり、体の中から膨大な力が溢れ出した。先程までの、無理矢理な

力ではない。洗練されていて、何処か懐かしい感覚。

「あれ？」

何故だか、涙が止まらない。悲しくなんてないのに、とても嬉しいのに。自分ではない何かが泣いていた。  
途端に令の中で何か弾けた。頭の中を、情報や見たことのない景色や、感じた事のない思いが  
よぎっていく。そして

(……令君、どうしたの？ 泣いてみるみたいだけど)

「うん。僕が泣いてるんじゃない。きっと、僕の中の神憑が泣いている」

令は神憑の真の意味を知った。これが、どんな力なのか。何の為に生み出された力なのか。

何故かはわからないが、急に頭の中に弾けたのだ。きっと、これが過去の九我山の悲願なのだろうと予測。

神憑は異端ではなく、願いの産物。遠い、遠い約束を守る為に神様がようやく授けてくれた力。

「うん」

一度頷き、令は飛翔を開始した。

十文字千春は青竜の中で青ざめていた。プラントをどうにか受け止めてみたものの、そのあまりの重量に押しつぶされそうになっている。しかも、自分達は竜に全ての魔力の力を注ぎ込んでしまった為に、暫くは魔力の力を発動できそうにない。頭の中は焼ききれる寸前だった。それでも、何とか諦めずに、

「お姉ちゃん！ 朱雀砲なら」

「無理よ。幾ら夏の朱雀砲でも、流星にこれを破壊するのは難しい。下手したら半分に分かれて屋敷に……」

「じゃあ、玄武甲で」

「すまない。全力で回復に努めているが、令からのダメージで殆ど使用不可能なんだ」

「っ！ じゃあ、どうするんだよ！ このままぶつかったら、あの結界でも持たない。」

僕らは、お母さんやお父さんや姉さんを奪っただけじゃない、兄さんの命まで奪ってしまうのかよ！」

それだけは嫌だ。と四人の心は一つになった。親からの愛も、妻の命も自分達が奪って

しまったというのに、兄は四つ子に昔から優しくかった。殴られた事は一度も無く、怒られた事ですら

殆ど無い。何時も困ったように笑うが、全て解決してくれてきたのだ。尊敬に値するほどに兄が好きだった。

だから

「式神の暴走を使おう」

という意見が出たのは必然だった。

「式神を暴走させて、竜を爆発させる、か。うん、計算上はプラントぐらい完全に消滅させれそうだね」

「だねー。私、怖くないよー？ だって、皆一緒でしょー？」

「うん。それしかないね。これが、私達への罰だと思う。運命って、本当にあるんだね」

竜が発光した。四箇所の四神の部分が咆哮して、エネルギーを暴走させていく。荒れ狂う力が

プラントを削り、その中心に居る四つ子達の傍には莫大なエネルギーが集まっていた。

死ぬのは怖い。だが、兄の命を奪うほうがもっと怖い。後悔なく、式神を無理矢理暴走させている

四つ子の顔には確かな笑みがあった。だが

「馬鹿か、お前らは」

という声と共に、光る足が竜へと炸裂。一応、手加減はされていたようで、体は殆ど壊れていないが

プラントから吹き飛ばされ、再びプラントが降下を始めてしまう。慌てて竜が戻ろうとするも、

その前に令が小さな体をプラントへと押し付けて、押し返そうと奮闘を始めた。

「れ、令！ アンタ何を」

「つか、お前無理だよそりゃ！ いいから、さっさと離れるよ！」

だが、令は不敵に笑い、

「太郎くん！」

と名前を呼ぶ。そして、令の体に太郎の式神である炎の両翼と、右腕への攻撃装甲が出現した。

令は両翼から炎だけではない、風と雷の翼を広げて段々とプラントを押し返して行き、

「碧ちゃん！」

と今度は碧の名前を呼び、両腕に打出ノ拳を顕現。巨大化させた腕で、プラントを思い切り

ぶん殴り、空中へと高く上昇させ、

「紫ちゃん！」

と最後に紫の名前を呼び、自らも無装を顕現。レールガンへと形を変えて、紫の威光も同時に発動。

四つの式神の力が重なり、令はレールガンの照準を再び落下してくるプラントへと定め、

引き金を引いた。発射音は無い、だが、轟音を立ててプラントが一瞬で消滅した。細かな破片が地上へと

落ちていくこうとするが、令はその全てを両翼から撃ちだした三つの属性の力で破壊し尽し、

最後に呆然としたままの竜の一部へと狙いを定めて、三つの属性の力を放つ。一瞬で竜は戦闘不能

状態に追い込まれ、落下していく。そして、千春が敗北をかみ締めながら落下に身を任せていると、

「よし」

半壊した青竜の隙間から、令の姿が見えた。先程までとは違い、何時もの九我山令の顔で。

千春は唇をかみ締め、令を睨む。だが、それもすぐ消え、悲しそうにただ一言。

「……これで、満足？」

「いや、まだまだ。千春、”俺”とお前の会話は、他の三人にも聞こえてるのか？」

「多分ね。まだ、スピーカーが生きてればの話だけど」

「そか。ならいいや。あんまこういう説教くさい事を友達に言うのは好きじゃないけど、言わせて貰うよ」

まだ自分達の事を友達だと思っている事に呆れつつ、千春は無言で先を促す。

「やっぱり、過去は変えちゃ駄目だね。俺だって、変えたい過去ぐらいある。」

神璽さんと一緒に由加さんのお風呂を覗いて、後でお姉ちゃんと紫ちゃんに半殺しされたのだったそう。

俺の生まれだって、そう。もし、俺が生まれなければって何回も考

えた事がある」

「……………それが、何なのよ？」

「うん、でもさ。俺の今って結構幸せなんだ。そりゃ、過去に辛い事は幾つかあったさ。

だけど、より良い未来に変えたいって思いながら生きていたら、いつの間にか今に辿り着いてた。

俺だって九我山の人間。人だって殺したことがある。でも、俺はその人を殺した過去を無かった事にしようとは思わない  
全てを受け止め、それでも醜く生きていくのが俺の業だと思っている」

「それは……………」

「お前達がやっているのは、そういう事。お前達のお姉さんの事は、本当に残念だと思う。

でも、お前達はその後に大量の人間を殺した。きつと、それで人生狂っちゃった人だって絶対居る。

無しにしたいよな。悲しすぎるもん。だけど　それやっちゃったら、お前らもう人間じゃねーぞ？」

「……………」

「諦めろとは言わない。でも、それは人として間違ってる。お前らがまたやるうとしたら、

俺は何度だってお前らをぶん殴って止めてやる。でも、殺さない。だつてな　」

そして、令は笑うと、

「俺だつて過去は変えたくない。お前らがいない世界なんて、寂しすぎるよ。」

これが令の答え。四つ子達が人の道を外れるのなら、何度ぶん殴つても元の道に戻す。

四つ子の気持ち痛いほどわかるから。令はこの選択をとった。それで、恨まれても構わない。

今は恨まれていても何時かわかつてくれるかもしれない。その未来への可能性を、令は選択したのだ。

それを千春だけではない。千夏も、千秋も、千冬も、それを理解した。だから、涙が溢れた。

「わかつてる……令の言うことわかるよ！でも、そしたらお兄ちゃんが……お兄ちゃんがまた。」

「そこは蒼二さん次第だ。でも、俺は信じてるよ。千島蒼二が、安易に戒さんの夢潰して終わらせる人じゃないって。

だから、少しは期待してほしい。過去にすぎるんじゃないって、未来に期待してほしいんだ！」

四つ子の返事は無かった。だが、これ以上動くつもりはないよう  
でゆっくと地上へと降下していく。

暫くは考える時間が必要だろう。と判断し、令は十文字特区にあるビルの屋上へと着陸した。

そう、まだ終わっていない。神憑への答えと、太郎の体の問題が残っている。

(紫ちゃん、碧ちゃん。一回僕の外に出てくれる？自分の構成をギリギリ保てるだけ反意思を残して)

(……うん)

(ええで)

その返事の後に、紫と碧の姿が再びこの世に顕現した。だが、その顔は浮かない。

二人は知っているのだ。ギリギリまでの反意思を残してきたが、とても上級悪鬼である太郎を構成

し直すほどの反意思は残っていないという事に。太郎も、それをわかっているようで何も言わない。

それらの思いを全て受け止め、令は一つ太郎に問いを出す。

( 太郎くん。人間になりたい？ )

( は？ ……ま、そりゃなれるもんならなってみたかったけどよ。わかってんだろ、俺はもう終わりだ )

「終わりじゃないよ。僕と太郎くんの未来は、まだ続くんだ。多分、これが九我山の始祖の望んだ事。」

悪鬼や鬼神と共に生きて死にたいという願いを叶える為の力なんだ。そう、悪鬼と鬼神を人間にする事だね」

令の見た情報の中には九我山の始祖の無念の気持ちと、その当時に交わされた約束が詰まっていた。

共に生きて死にたい。素晴らしい願いではないか。だが、時代がそれを許してくれなかった。

だから、九我山の始祖は未来へと力を託した。何時か、自分達の思いを継いでくれる人間が現れる事を信じて。

何故神憑を令だけが使えるのか。それはわからない。だが、心次

第で、神憑が発動できるものだと言っている。

(人間、か……。よっしゃ、令。悪いが、まだ死ぬには早すぎる。せめて、お前の初彼女ぐらいはみてえしな)

太郎のそう快活に笑う声が聞こえた。もう、迷う必要は無い。令は高らかに叫ぶ。

「太郎くん！ 願って、自分の在り方を！ どんな風になりたいかを！」

令の体が発光し、太郎が令を媒体に存在を変換していくのがわかる。由加に反意思の制御の仕方を

教わったのが幸いと出たか、太郎の変換は順調に進み、令はその力を外へと向けて放出。

光が令の中から飛び出し、そこに現れたのは 目つきの悪い、だが太郎の面影を残す、

「あ、あれ？」

一人の子供だった。ご丁寧に、太郎が着ていた服まで小型化されて再現されている。

年は小学校低学年だろうか。太郎は人間に変化した自分の体をまじまじと見つめて、

「なんじゃこりゃあああっ！？」

と子供特有の高い声で絶叫を上げた。碧はそんな太郎にとことと駆け寄ると、



神憑を使って協力するけど」

「……ちゃうわ。あたしが、人間になったら、もうほぼ不死でもない。再生も早くない。」

雷神の力や、この身体能力が残るって保障も無い。そしたら、あたしはただの人間の女の子や。」

ただでさえ、教会に顔が割れてんに、あたしは自分を守る力ももうないんよ……」

そ、そしたら……あんたと神憑もできへんし、でも、それでもあたしと一緒に居て……守ってくれるん？」

紫の表情は真剣だった。それを見て、令はこの空気は危険だと本能的に悟る。何かが、非常に不味い。

紫と自分の関係が崩れる、あるいは極端な変化を遂げようとしているのがわかる。

一つ選択を間違えば、取り返しがつかない。冷や汗を再び感じつつ、令は真剣に考えて喋っていく。

「も、勿論守るさ！ 僕は、そんな薄情な男じゃないしね」

「……じゃ、じゃあ……そしたらあたし、あなたの言うとおりにするわ」

「言うとおりにって？」

「さ、さっき言ってたやん。……あー……あなたのモノになれとかどうとか。……うん。」

中途半端は嫌いやねん。も、もし守ってくれるんだったら あたしは、ほ、本気であんたのものになったる……！」

数秒間思考が停止した。そして気づく。自分は生まれて初めて、女の子に告白されているという事実に。

紫の事は大切だ。大学の友達よりも優先度は上。だが、異性として意識した事は滅多に無い。

だが、しかし目の前に居るのはどこから見ても女の子だった。何時もの紫ではない。これは、千載一遇のチャンスだ。

幸いな事に碧はまだ飛び回っている。恥ずかしそうにもじもじしている紫もレアなだけに可愛い。

「ゆ、紫ちゃん。ぼ、ぼぼ僕は……！」

「うん……」

令が意を決して言葉を紡ごうとしたその時、爆音が鳴り響いてピルの一部へと攻撃が仕掛けられた。

ギリギリの所で直撃は免れたようだ。紫はとっくに戦闘モードに入っており、遠くの空を睨んでいる。

結界の一部がひび割れ、空中に浮かぶ船が何隻も現れた。だが、一之瀬凜の空船とは全く違う。

その下に車で乗り付けてきた人間も、ユニオンではない。しかも、十名家でもない。

「賞金稼ぎっ!?　なんで、あいつらがこないな所におるんやっ!」

紫の驚いた声が響き渡った。

第43話：だって愛してるから (前書き)

今回は告知できなくてすいません。

### 第43話：だって愛してるから

三枝万里は、息を殺して物陰に隠れていた。ユニオンと十名家の戦いが始まって数十分。

戒によって避難させられていた万里だったが、ようやく監視と護衛を振り切って、十字字特区へと帰ってきたのだ。

傍目から見ても激しい戦いだ。何より、ユニオンは相当強い。下手をすれば、雨龍を始めとし、全員が

やられてしまう。なら、どうすればいいか。簡単な事、頭を叩いてしまえば良い。

(千島蒼二さえ倒せば……)

頭を失えば、統率も乱れる。そして、こちらには六道の紡が居るのだ。瓦解したユニオンなんて彼女の

頭脳の前にはほぼ無力も同然。「ふう……」と息を吐き、万里は布都御魂を抱えて、ビルの隙間を

走り出す。ユニオンの本陣は、先程ビルの屋上から発見した。距離は、そう遠くは無し。

守りの布陣はザルに等しい。完全攻撃中心な布陣であった。

(でも、それが可能なのは。単独戦で強いからですね……)

塔を守っているのは、遠音、紡、凜の三人だ。雨龍や千里前進組の防衛に当たっているのだと予測。

だから、サイドには空きが多く見られる。慎重にいけば、本陣近くまではこういうのが得意な万里には

余裕だ。だが、そこからが問題。本陣には護衛の隊員も居るだろうし、千島蒼二も居る。

流石の万里でも、他の隊員を相手にしながら蒼二に勝つのは不可能だという事はわかっている。

（だから、三十秒。布都御魂を限界まで使って、一撃で致命傷を与える……）

成功率はそこまで高くは無い。だが、やるしかない。万里は考えながら、移動していく。

ビルの隙間と隙間を。なるべく体に負担をかけないように。そして、ついに本陣の一部が見えた。

隙間から伺うと、本陣のすぐ前は既に戦場になっていて、悪鬼と人間。そして

「うーちゃん……」

二階堂雨龍が必死に戦っていた。多分きつと、自分の為に、そして戒達家族の為に。

昔からそうだった。雨龍は、何時だって誰かの為に戦っていた。そして、万里はそんな雨龍を好きになった。

今回の件だつてそう。あんな酷い事を言われた理由も戒の電話を盗み聞きして知ってしまった。だが

「ごめん。それでも私は、貴方と一緒に居たいんです」

万里の背中に炎の翼が灯った。今こそ 激戦が続いている今こそ、動くときである。

そのまま一気に上昇。狂乱の力も使い、身体能力も上昇。炎の翼をユニオン本陣に撃ち込みながら、

万里は蒼二の姿を探し 見つけた。氷の盾で身を守っている。

万里は一気に下降し、蒼二へと迫る。

ユニオン側も万里の存在に気がついたのか、攻撃の方向が一斉に万里の方を向く。それでいい。と

万里は笑い、

「布都御魂あ！」

鞘から刀身を引き抜き、布都御魂が光る。そして、布都御魂を中心に周囲一帯に風が吹き、全ての

式神が消えた。誰も彼もが、突然起きた事態に困惑する。その間にも万里は加速し、接近していくが、

「応戦準備っ！」

蒼二の一喝により数人は落ち着きを取り戻し、戦闘態勢へと入るも刀を持った万里の敵ではない。

万里はユニオン本陣に降り立つと、布都御魂を一撫でし、

「布都御魂、第二形態」

再び発光する布都御魂。刀身部分の存在が不鮮明となり、次の瞬間雷の刃として周囲一帯を襲う。

鞭のような剣筋が稲光となって、周囲一帯を蹂躪。時に弾け、時に跳ねの斬撃によって、

大半が昏倒していく中、予想したとおり、蒼二は緋眼を使って万里の攻撃を全て回避していた。

布都御魂第一形態の効力は、残り十数秒。時間が無い、と万里は狂乱の力を使って走り出すが、

「うん。やっぱり、式神を消す魔具だったんだね。有効範囲は広域、持続時間は一分以内かな」

上空からの声。聞いたことがある声。上を向くと、天美運命が落ちてくる所だった。万里はステップし、何とか上空からの砲撃を避けた。冷や汗が、背中を伝う。もう、時間が無い。

「だったら、反意思で攻撃すればいい。ま、運命達みたいな鬼神限定の対抗手段だけど」

「っ！」

万里が接近するよりも早く、運命の下半身から九尾が飛び出した。その先端に、変換された

反意思の光が灯る。そして、九本の狐を模した狐砲が万里へと迫った。万里は直撃をのみ見切り、残りは布都御魂で弾く、が。

「若いね」

九本の反意思が形を変え、槍のように変化すると、万里の体をギリギリ避けるようにして

四方から攻撃を仕掛けた。結果的に、万里の動きは封じられ、そして布都御魂の効力も限界を迎えた。

運命は、阿修羅姫を再び顕現させて万里へと突きつけるが、

「運命！ 油断するなっ！」

万里はまだ諦めていなかった。炎翼を顕現させて、槍を焼き尽くし、再び飛翔。大規模な力を使ったので、

布都御魂第一形態の力は数分は使えないだろう。だから、頼れる

のは第二形態と己の力のみ。

戦力を地味に削いだのが功を奏したか、式神による攻撃も先程までとは違い、苛烈ではない。

だが

「俺が出る。運命、暫く連絡と指示を頼む」

「わかった。あの子、相当強いよ」

「知ってる。狂乱の三枝の次女つつたら、剣術においてはあの莉王も認めてた程だからな」

千島蒼二が出てきた。氷の蛇が八頭を持つ氷の蛇が一瞬で顕現し、その一頭の上に乗って

蒼二が上昇してくる。そして、空中に足を一步踏み出す、とそれに合わせて空中に氷の足場が顕現。

並大抵の式神ではできない芸当だ。そして、更に一步進むと蒼二の周囲一帯に丸く、広い氷のステージが完成した。

万里と暫く見詰め合う蒼二。足場に靴をつくがつかないかの距離で浮いている。まず、動いたのは万里だった。

「ふっ！」

呼吸と共に炎翼が炎を吐き出し、加速。蒼二も構えを取った。そのまま布都御魂を一闪。鈍い音がして、

ぶつかりあう修羅紅雪と布都御魂。硬い。一度刃を放し、更に二撃、三撃と叩き込むも相手の顔は涼しい。

そして、蒼二が今度は踏み込み、刃が万里を狙う。が、容易い。剣の技量ならこちらが確実に上だ。

だが、今は式神戦である。蒼二の刺突を紙一重で避けた万里だが、

背後に違和感。炎翼の炎を噴出させ、

蒼二の膝に足を乗せて一回転し、空中へと飛翔。次の瞬間、先程まで万里が居た位置の下から氷の蛇が

巨大な顎を広げて足場をぶち破ってきたのだ。

「ま、剣術は上だつてのは認めるわ。郁人が剣で潰しきれなかったのを、俺が潰せるわけねーしな」

「っ」

「だが、戦いつてのはそれだけじゃねえって話だぜ。お嬢ちゃん」

万里が訝しげな顔をしていると、視界の端に光が見えた。それも、二発。慌てて動こうとした時には

既に遅かった。二発の光は、万里の炎翼だけを綺麗に打ち抜き、かき消すと共に、飛行能力が完全に削がれた。為す術もないまま頭から落下していく万里。

「相変わらず良い腕だな。庄屋さんは」

そう呟く蒼二の言葉から狙撃されたのだと万里は判断した。蒼二は、八頭を持つ氷の蛇を引き連れて落下していく

万里を追いかける。何とか空中で回転して体勢を立て直した万里。その頃には炎翼の回復はギリギリ間に合う

か間に合わないかといった所。やがて、地面まで数メートルまでと迫った時に万里は再び炎翼を顕現。

全力で炎を噴射し、激突はどうにか防いだが、その頃には既に、八頭の氷の蛇が口を大きく開けていた。

「終わりだ」

蒼二がそう呟くと共に、大量の氷柱が万里へと発射されるのが見えた。いかに狂乱を使おうとも、

布都御魂を使おうとも、回避は不可能に近い。終わりゆく自分の人生が見えた気がした。そして、愚かだったとも。

万里はお腹を一度擦り、

「ごめんなね……私、馬鹿だった」

雨龍の好意も、与えてくれた全てを万里は駄目にしてしまった。

酷い女だ。醜い女だ。

好かれなければ良かった。懐かなければ良かった。今まで、雨龍が傷ついてきたのは、自分の為だ。

それをこうして最も最悪な形で奪ってしまう。雨龍との子も、自分自身も、雨龍が守ろうとした全てを

万里は結局自分で奪ってしまうのだ。ごめんなさい。ごめんなさい。心の奥底から感情があふれ出す。

尻餅をつき、布都御魂にすぎるようにして腹部だけは守ろうとしながら万里は涙を流し、呟く。

「ごめんなさい……み”んな”……ごめんな”ざい……」

現実には容赦なかった。氷柱がもう既に近くまで迫っている。狂乱を使っているからこそ、知覚が遅い。

かといってこの量では全て避けるのは不可能に等しかった。後、数メートル。後、ほんの少し

「り……万　　っ！……里　　万里いつ！」

声が聞こえた。必死な声だ。感情が声に乗っている。何か

弾ける音。大地を蹴る音。それも一緒に聞こえた。

良く知ってる声だ。そして、久しぶりに聞く声。ずっと昔から、何時も一緒に居てくれた人の声。

最後まで分かり合えないと思っていた人の声。そして、万里の眼前で光が一闪。巨大な光　姉の式神の光だった。

全力で放たれた乖離の光は、蒼一の氷柱を全て断ち切り、乖離の名の下に、力の結びつきが離れた。

離れ離れにされた力は不安定となり、だが存在はそのままに断たれたまま万里を避けるようにし、地面へと突き刺さる。

「あ……」

無数の氷柱が世界を覆い、何も見えない。ただ、氷柱の透明な輝きと、姉の悲しそうな顔だけが見えた。

よくよく見てみると、姉の体は傷だらけだった。返り血なのか、自身の血なのかわからない程に汚れている。

服の破れた場所からは変色した肌。ここまで来るのに、どれ程千里は傷ついてきたのだろうか。万里にはわからない。

ふらふらと、何とか布都御魂にすがって立ち上がり、千里と向かい合う。正面きって、向かい合うのは久しぶり。

やがて、千里が手を動かす気配。殴られても仕方が無い、と思っていた万里は大人しく目を瞑る

「え……」

が、抱きしめられていた。千里の体全体が震えているのがわかる。暖かい、懐かしい匂いと感触がした。

「もう……止めてよね。こんな危ない事をするの……どうしてっ！  
？ どうして避難してなかったのよ……っ！」

「ごめんなさい……。一緒に居たかったから。全部無くなったっていい。うちちゃんとお姉様が居なくなったら、私もうどうしていいかわからなかったんです。だって、愛してるから　何よりも大事だったから……」

千里の問いに万里も本心を告白した。人殺しだっていい。普通の生活なんて送れなくなっただけいい。

一生二階堂に屈して生きても良かった。雨龍と千里さえいれば。雨龍と千里さえいれば、何があっても辛くない。

それをぼつぽつと語っていく。千里は震えながら、そして黙ってそれを聞いた後に、やがて一息つき

「……私達つたら本当に馬鹿ね。私たちのエゴを、貴女に押し付けていただけだったのね……」

一番重要なのは万里の気持ちだったのだ。それを、雨龍と千里は無視していたような気がする。

勝手に決め付けて。勝手に万里の気持ちをわかった気になって。千里はずっと勝手だった。

かつて八つ当たりをした時も。今救おうとした時も。だが、もう気持ちは伝わった。千里は、万里から体を離し、

「……ずっと、ごめん。色々言いたいけど、これだけは今伝えたいから」

「……は、はい！」

二人は分かり合えた。今はもう、何も言う事はない。二人は、同時に式神を顕現して、一気に氷を吹き飛ばした。

氷が晴れ、広がった世界ではまだ戦火が続いている。驚きに目を見張った千島蒼二の姿も見えた。

万里と千里は同時に駆け出し、蒼二へと迫る。流石の蒼二も、真剣な表情になって万里と千里目掛けて走り出した。

蒼二の式神からコンセプトが抜け落ち、黒い二本の小型チェーンソーへ。万里と千里の呼吸を合わせた一撃を、

二本で同時に受け止めるが、狂乱の力は凄まじい。流石に二人の狂乱使い相手では力では分が悪いようで

蒼二は近くにあった壁へと叩きつけられる。

「蒼二！」

本部の建物の上に立っていた運命が九つの狐砲を放つが、千里は乖離にオーラを集中させて、九つの砲撃を

全て叩き斬ってしまった。万里も、炎翼を展開して炎の羽のけん制を放つ。その間に蒼二は体勢を立て直し、

再び修羅紅雪を顕現。だが、何かがおかしい。力が　とまで思った所で千里はその違和感に気づいた。

下を向き、その瞬間氷の蛇が地面を突き破って現れ、千里の体へと激突。

「あ……お、お姉さまあ！」

轟音を立てて空中へと勢い良く吹き飛ばされた千里。だが、その体は空中で何かによって受け止められた。

黒い鋼を合わせて作られた一匹の龍。その上に、怒りに顔を歪めた二階堂雨龍が千里を抱えて立っていた。



第44話：その名前、大嫌いなんだよ  
(前書き)

O r z

としか言いようがない生活です。

#### 第44話：その名前、大嫌いなんだよ

雨龍の姿を見つけると、万里は慌てて上昇し、黒龍への背中へと降り立ち、今度は雨龍と向き合った。

万里の瞳から、何かを察したのか、雨龍は呆れたようにため息をつき、”何時もどおり”万里の頭に軽く手を乗せると、

「もう何も言わねえよ。黙って、俺についてこい」

「……はい！　うーちゃんは、私が幸せにしますっ！　もう、勝手はしません。私だけの命じゃないですし……」

万里の物言いに雨龍はポカンとした顔を作ると、顔を赤らめてそっぽを向き、電子端末を投げて渡す。

そこには十文字特区の全容を示した地図が表示されていた。

「ルート37を通って、52B番に行け。そこに回復施設があったら、千里の手当て頼むわ」

「了解しました。死んじゃ駄目ですからね、お父さん」

「っ　!?!」

万里は雨龍の返事を聞く事なく、千里を抱えて飛び去っていった。耳が赤かったのは気のせいだろうか。

まあいい。と雨龍は一度頷き、蒼二を睨んだ。反りは合わないが、嫌いなタイプではなかった。

だが、万里に手を出した分の報いは受けさせると決意し、雨龍は

ゆっくりと黒龍と合体した。

「雨龍……っ」

「蒼二、来るよっ！」

相手はユニオンでも最強格の天美運命と千島蒼二。普通に考えて分が悪い。勝てない。

でも、引けない。ここで雨龍が勝負すれば、戦況は圧倒的にこちらの有利だ。万里や千里の為に、

戒や未希の為に、かつて、自分を助けてくれた希の為に、雨龍は負けられない。

「いつくぜええっ！」

黒龍との合体が上手く行くと、雨龍は更にコンセプトを発動。紡から聞いた情報を下に、蒼二と同じ力。

神威発動体勢に入った。黒龍の装甲に赤いコンセプトが張り付き、存在が変質していく。

体の色は赤銅。形態も変わり、機械的な色が更に多くなっていく。サイズは若干大きくなったぐらいだろうか。

赤銅色の 機械龍となった雨龍は、背中についたブースターを噴射し、加速した。

「神威か……っ！」

猛烈な勢いで突進する雨龍を正面から見据えると、運命が蒼二の前に出て、突進してくる雨龍を受け止めようとした。

そして、直撃。轟音が鳴り響き、腕の部分が悪鬼化した運命と雨龍の拮抗が始まる。鬼神の力をもってしても

衝撃は強力だったようで、運命は辛そうな表情をしている。蒼二は、すぐに走り出し、修羅紅雪で斬りかかる、が

「っハ！」

機械龍の装甲がスライドし、変形を始めた。飛行龍から、龍人の形へと。そのまま、口を大きく広げ、

機械龍の口の中に光が生まれた。危険を察知した運命はすぐに離れる。そして、咆哮と共に、破壊の

エネルギーが機械龍の口から照射。顔を動かして周囲一帯に破壊の光線が振りまかれる。

蒼二と運命は阿修羅姫と修羅紅雪で何とか防御したものの、本部の方にもその被害は及んでいた。

「っ　あそこ潰されたら、状況は最悪になっちまうぞ！」

「任せて！」

躊躇い無く運命は振り向かず走り出し、機械龍は運命に向かって再び口を開く。

「させるか　　っての！」

蒼二は修羅紅雪を突き出して、氷柱を大量発射した。機械龍の分厚い装甲には大して効果はないだろうが

やらないよりはやったほうがマシという所。案の定、機械龍は煩そうに蒼二の方に顔を向け、

「　　っ！」

地面から出てきた氷の蛇に啜えられて上空へと持ち上げられていく。蒼二もすぐさま真下から氷の蛇を

呼び出し、頭の上に乗って上昇していく。機械龍は氷の龍の口の中に砲撃を叩き込み、破壊すると

蛇から距離をとろうとするが、蒼二がそれを許さない。八頭全てを操って、時にけん制し、時に噛付き、

機械龍を射程圏内より遠ざからせない。自身も氷の上を滑ったり、跳んだりして、機械龍に追いつこうと

するが、向こうも向こうで予知の力を使い、中々近づけさせない。やがて、埒があかないと判断した機械龍は、

「死ネ！」

全力で口からの砲撃を八つの蛇目掛けて放った。破壊のエネルギーがその内の四頭を完全に破壊し、

蒼二は直前に他の蛇に飛び移る事で何とか砲撃を避けていた。そして、一瞬動きが止まった機械龍目掛けて

全力で蛇を向かわせる。距離が、詰まる。機械龍の繰り出した爪を修羅紅雪ではじき、横への一閃。

だが、機械龍は上昇してそれを回避すると、蒼二の頭上から火球を放つ。

「盾！」

蒼二の言葉と共に、周囲に氷の盾が出現し全ての火球を受け止めた。更に蒼二は蛇の頭を素早く反転させ、

自らはブーツと蛇を氷で完全にくっつけ、落ちないように固定するともはや自分の身の向きすら構わずに、

雨龍目掛けて突進を開始。四頭が一気に襲い掛かり、ついに蒼二の乗っていた一頭が機械龍を捉えた。

凄まじい勢いで突進し、そばに建っていたビルを突き破って地面へと叩きつけるようにして叩きつけた瞬間。

「っ ……!？」

自らの氷の蛇を突き抜けて、雨龍の砲撃が再度放たれた。回避できるタイミングでは無かった。

それでもなんとか体を反らし、修羅紅雪を突き出して受け止めようとしたが、相手の威力が高すぎた。

修羅紅雪もろとも破壊のエネルギーが埋め尽くし、蒼二の右肩を掠めて行く。

「 ……痛っ!」

右肩に激しい痛みと共に体が吹き飛ばされていく感覚。瓦礫を転がり、ようやく体が止まると蒼二は体の

異常を気にしながら起き上がった。右腕があまりよろしくない。その事に何故か笑ってしまう。

怪我するのは久しぶり。最近ではずっと格下とばかり戦ってきた気がする。それ故に雨龍の思いの強さがわかる。

「よお、雨龍。 ……お前、強くなったな」

と声をかけてみる。暫く待つと、氷の中から半壊した機械龍が現れた。仕方がなさそうに、雨龍は一度

機械龍を消すと緑色に輝く瞳で蒼二を正面から見据え、

「どうしても ……俺たちの行動を認めないのか？」

「ああ、認められない。お前たちは、卑怯だよ。何人もの命を奪い、

それを無かった事にする所か、  
私利私欲の為に俺たちの集めたコアを奪って、身勝手な願いを叶え  
ようとしているただの悪党だ」

「悪い。無駄な議論だったか……」

「だな。意見は平行線。やはり、これで決着をつけるしかない  
みてえだ」

同時に動き出す蒼二と雨龍。お互い式神は構えていない。緋眼も  
予知も使っていないかった。

お互い全力で戦ってきた為、余力が殆ど残っていないのだ。ただ、  
純粹な殴り合いがそこにはあった。

子供の喧嘩のように拳をぶつけ合い、意地と意地でぶつかりあっ  
ている。

「らああああああアアアッ！」

「うらあああああああぁぁっ！」

最後の最後の力を振り絞って雨龍は予知の力を発動した。一瞬だ  
が、蒼二の拳の軌道が見えた。

後はタイミングを合わせて、カウンターを入れれば勝ちだ。雨龍  
はうつつすらと笑みを作る。

蒼二の言うこともわかるが、こちらはもう引けない。負けを認め  
た所で、待っているのは極刑だろう。

国を乱し、これだけの戦争をやったのだ。もはや自分達が生きる  
為には、勝つしかない。

そして、迫りくる予知で見た蒼二の拳の一撃が来た。タイミング  
は先ほどと同じ。雨龍は体を動かして

回避しようとしたが、

「驕ったな、雨龍」

蒼二は緋眼を発動していた。先ほど雨龍が予知で未来を予測したのを確認したのだ。雨龍の予知は完全な

未来が見えるわけではない。ただ、洞察力、判断力が跳ね上がり、そこから相手の行動を読むだけ。

それを知っていた蒼二は、雨龍に先に力を使わせたのだ。結果的に、軌道は同じだが速さがまったく違う

蒼二の拳は雨龍の顔面に直撃し、受身も取れないまま雨龍は地面に転がった。その胸を更にブーツで踏みつけ、

「俺の、勝ちだ……！」

修羅紅雪の召喚は不可能なので、紅雪を雨龍の首もとに突きつけてそう宣言した。

対する雨龍は、蒼二を睨むのをやめ、達観したような顔を浮かべると、

「ああ、俺の負けだ。　　殺すなら、さっさと殺せばいいじゃねえか」

「……俺は、今回のこの事件は対話で解決できた。そう思っている。今でも、それは望んでいるよ。」

だが、何か足りなかった。お互いが妥協できる何か足りなかったんだ。

教えてくれ、雨龍。何故十文字戒は今動き出したんだ？　十年前ではなく、何故今なんだ？」

蒼二が一つだけわからない事。それは、希が亡くなってから十年経っているのに、何故今動き出したのか。

チャンスはいくらでもあった。神々の黄昏事件の時だって、コアを持ち運ぶぐらい、十文字の当時の力を

もってすれば簡単だったはず。だが、あの時十文字は早々に撤退していったのだ。わけがわからない。

暫く黙って考えていた雨龍だったが、やがて観念したように口を開き、

「未希だ……戒と希さんの娘の未希が、希さんに会いたいつって、行方くらましたんだよ……」。

だから、戒や俺らは未希が危ない手段を取らないうちに、希さんを取り戻そうって考えて動いて、この有様だ」

「娘か……成る程な。存在は知っていたが、まさかその子が引き金になっているとは思わなかった」

「未希に手え出すんじゃないぞ。あの子は、何も悪くねえんだ。ただな……純粹なだけなんだよ。」

まだ善も悪も分かっちゃいねえんだ。ただ、一度でいいから希さんに会いたいだけなんだよ……っ！」

雨龍が再び怒気をこめた瞳で蒼二の事を睨んだ。反応から察するに、雨龍にとっても大事な子なのだろう。

未希さえこの場にいれば、戦闘は収まったかもしれない。だが、いないのはどうしようもない。

「雨龍、その未希はどこにいるのか見当すらついていないのか？ その子と、話したいんだが」

「はつ。馬鹿かテメエは。ンなの教えるわけねーだろ。未希には、絶対危害を加えさえねえからなあ！」

「約束する。何があろうとも、その子には危害を加えない。頼む、雨龍。」

もう、こんな戦いを長引かせたくないんだ。十文字の為に、俺たちの為にもその子が必要なんだ！」

雨龍の言葉に正面からぶつかると蒼二。目をそらさず、真剣に雨龍を見てその声を出した。

その蒼二の思いが少しは通じたのか、渋々とだが雨龍は口を開いた。

「……さっき現れた、変な小僧からの情報だ。テメエら側の、鬼塚って勢力と一緒にいるんだとよ」

「鬼塚だと!？」

鬼塚、ユニオン側。その単語から導き出されたのは、弟と母の姿。そういえば、少し前に蒼二は遙と電話をした。

その時、話のついでに聞いた気がする。光希に友達ができた。年上の女の子。素性が不明な子。

そして、その名前はミキ。蒼二の中で全てが繋がった。未希と、何の因果か光希は一緒にいる。

「……ありがとう、雨龍。お陰で何とかかなりそうだわ」

そういい、蒼二は雨龍に突きつけていた紅雪を解除し、携帯電話を取り出し始めた。

「馬鹿じゃねーのっ!?! やるならさっさとやれ、俺は回復したら  
テメエの仲間をまた襲うぞお!」

だが、二階堂雨龍はそれを許さない。蒼二は暫くポカンとした顔  
をしたが、やがて真意を理解した。

雨龍は引けないのだ。仲間の為に。愛する者の為に。馬鹿だとは  
思う、だがそんな馬鹿も嫌いじゃない。

満身創痍で突っ込んでくる雨龍に、蒼二は最大限の敬意と、部下  
をやられた怒りを込めて、

「見事だったぞ、二階堂雨龍っ!」

と紅雪で胸の辺りを一閃。致命的ではないが、当分動けないだろ  
う。更に、氷が雨龍の体に纏わりつき

体の自由を奪った。雨龍は満足そうに一度笑い、すぐさま痛みと  
敗北に顔を歪ませると、

「うるっせえ……その名前、大嫌いなんだよ」

ゆっくりと地面に倒れ付した。

第45話：全てを終わらせるために

（前書き）

突然の投稿すいません。

事情はブログの方を見て頂けるとわかると思います。

後、

小説トップページからアンケートページへ飛べるようにしました。

五分以内に終わるようなアンケートなので、

皆さんよろしかったらご協力お願い致します。

## 第45話：全てを終わらせるために

鬼塚二郎は、かれこれ二時間ほど車の運転に集中していた。鬼塚家から十文字特区は未希から住所を聞くに

そこまで遠くはない。日帰りできるぐらいの距離だった。未希はひたすら青い顔で恐縮し、黙っている。

無理もない。と二郎は若干の不安を覚えた。お母さんに会いたかった。もう、そんな優しい願いじゃすまない

限界まで状況は悪くなってしまっている。光希に電話を借りたが、蒼一と遥緋どちらにも連絡がつかなかった。

兎に角急ぐしかない、と少し苛立ちながら運転していると、

「二郎さん……」

「ん？ どうしたんだい？」

努めて明るく優しい声で話しているとは思うが、未希にそれを感じられる余裕があるかどうかが問題。

「ユニオンっていう人たちと……お父さん達がぶつかって結果的にどういう事になっちゃうんですか？」

未希の目は真剣だった。下手に隠してもいずればわかってしまう。だが、真実は重い。

暫く返答に迷う二郎だったが、

「君にとっては重い答えだけど、それでもいいかな？」

と前置きを一つおいた。対する未希の返事は強く頷く。それだけ目を見てみると、ある種の覚悟が感じられた。

仕方がない、と二郎はため息をつき、未希の望む答えを自分なりに示していく。

「ユニオンというのは正直、俺も二郎の記憶でしか知らないんだけど。十名家の八神派が中心になって

作られた組織なんだ。四条、五月、七海、八神、九我山だったかな。それに、千島、浅葱が加わり、戦力的には

俺の主観だが、数の点から見て若干ユニオンの方が優勢だとは思うね。ただ、向こうには最強の十文字戒がいるんだよ。

その二つがぶつかるって事は、もう日本が真つ二つと同じ。五行はその辺りの抗争に全く興味がないしね」

「やっぱり……」

「だから、止めなくちゃね」

「はい……やっぱり、神様って全部見てますね。ずるい事をして、お母さんに伝えようとしたから

私に罰を与えてるんだ……。魔具は、何だっしていい力じゃないって。皆があんなに教えてくれたのに……」

お父さんだって、悪い人じゃないのに。ちょっと馬鹿だけど、私にとっては凄く良いお父さんなのに……」

二郎の知っている十文字は酷いものだった。戦闘マシンとでも言うのだろうか、鬼神から見ても

異質だと思うほどの家だと思っていたが、どうやら今の十文字は違うらしい。未希を見ているだけで良くわかる。

異質な家ではこんな真つ直ぐな、人の為に泣ける子等まず育たない。それに少し笑みが浮かぶ。

本当の悪人ではないのだ。これなら、どうにか対話が上手く行くかもしれないと少しだが、気持ちが軽くなった。

その時、

「あれ……？」

「何ですか、この音？」

座席後方で、何かが震えるような音が聞こえる。未希が訝しげに思い、後ろを振り向くと

「もしかして、光希……？」

と声を上げた。そして、後部座席の後ろの部分から「あはー」と千島光希が、後頭部に手を当てて現れた。

しかも、その手には現在も振動している携帯電話が握られていた。まず、二郎はこれに驚いた。

光希の気配はこれまで全く感じなかった。乗ってる事さえ気づかなかった。鬼神である自分が。

「い、ごめんなさい二郎兄ちゃん。僕、どうしてもついでにきたくて。そ、それに今、お兄ちゃんから電話あったよ」

「む……」

蒼二と連絡を取るの、重要な事項の一つだ。もうそろそろ、十文字特区だ。先に電話しておくのもいいだろう。

二郎はジェスチャーで光希に電話を取るのを促すと、光希は嬉し

そつに頷き、電話を取った。

「あ、お兄ちゃん？ 久しぶり。……んー？ 何言ってるのか聞こえないよー？ 後ろで何かうるさいよー？」

暫く電話していたが、背後が煩く全く聞こえなかったらしい。渋々と一度会話を切つて、光希は二郎に  
会話の内容を報告。

「何か全然聞こえなかった。お兄ちゃん、ガサゴソ音をしてハアハア息遣い荒いし、何してるんだらう……？」

「み、光希のお兄さんって大丈夫なの……？」

未希が何故か顔を赤くして、苦悩したように頭を振っている。大体、どんな事を想像しているのかはわかる。

流石にこのまま誤解させておくのは可哀想なので、二郎は未希の方を向き、

「未希ちゃん、安心して。光希の兄はそのようなキャラじゃない。九年前から変わってなければね」

「そつだよ、未希ちゃん。僕のお兄ちゃんは目つきが凄いいけど、優しくて良いお兄ちゃんだからね！」

そのようなやり取りに、ようやく未希の緊張が解けたようで、笑いが漏れてきた。ただただ光希の感謝するばかりだ。

電話が繋がらないのは仕方がないので、そのまま二郎は光希を乗せたまま十文字特区に向かう事にした。

もし、戦闘になつてもこの二人ぐらいなら守って撤退もできる。

とまで考えて、二郎は一つ光希に言い忘れていた事に気がつく。

「ああ、光希。一つだけ言い忘れていた事があつたんだ」

「んー、何？」

「君の式神を次に召喚する時は、本当に危険だと思つた時、もしくは君が本気で怒つた時だけだ。

それ以外の時に安易に呼び出さないほうがいい、幸か不幸か、君の式神の力はとても危険なんだ」

「僕の式神って……何の能力もないって、お父さんに笑われるようなのなんだけどなあ……」

「それは、前までの話だよ。兎に角、約束してくれ。わかつたね？」

「はい！」

二郎がそう言うと、光希は笑って手を上げた。今は笑っているが、次に召喚した時、きっと光希は笑えないだろう。

そんな未来が簡単に予想できる。母親が、本当に光希と同じような力を持っていて良かったと思う。

知らなかつたら、下手したら自分まで巻き込まれていた。だが、光希なら大丈夫だろうという確信も何処かにあった。

そんな事を考えていると、未希が「あっ……検問」という声を上げた。それと同時に、二郎の顔が曇る。

「っ！ これは……っ」

どうみても相手は堅気ではない。すなわち、これは結界に近づか

せない為のユニオンか十名家のどちらかが

張った検問だ。このままでは、間違はなく追い返される。力

ずくで、通り抜けるしかない。と、二郎が

ゆっくりと車を停車させ、降りようとすると、

「と、止まれ！ 止まりなさいああい！」

後方から凄まじいスピードで二人乗りの赤いバイクが速度を落とす事なく突っ込んできた。

前に乗っているのが、男。後ろに乗っているのが不自然な事に、上品な格好をした女の子だった。

ヘルメットをかぶっている顔はわからない。だが、次の瞬間女の方から式神の気配が膨れ上がった。

「お退きなさい」

容赦のない、凜とした声の後に衝撃。次の瞬間には検問が粉々に砕け散り、男達が白目を剥いて

空中に吹き飛んでいる光景が見え、最後には強く地面に叩きつけられた。

「滅茶苦茶だな……」

車の中では未希と光希が興奮したように騒いでいる。それを視線で嗜め、二郎は再び車を発進させた。

先程の二人組は相当暴れまわっているらしく、道の端には倒れた人間や建物の残骸が多く散らばっていた。

それらを器用に避けながら暫く進んでいくと、開けた場所に出た。眼下には、それなりに大きな街も見えた。

「あ……ここです。ここが、十文字特区です」

住宅街が非常に多い、だがビル何かも幾つか見える。現在は平穩そのものな風景が見えるが、

よくよく目を凝らすと、偶に歪みのようなものが見える。結界の耐え切れない部分だ。

「多分。戦闘はもう始まっている。危険だから、このまま十文字の本家まで突っ込むよ」

「えっ？ は、はい」

「……うん」

二郎はアクセルを踏み、更にスピードを上げ一気に結界の中へと進入した。全員が式神使いで良かった。

特に結界の影響も無く、二郎は一度車を止め、外に出た。未希と光希もそれにつられて、同じく外に出る。

「そんな……」

十文字特区では激しい戦闘が行われていた。轟音や悲鳴が鳴り響き、爆発もそこから起きている。

二郎にはそれがとても懐かしかった。かつて、常に戦場に身を置いて頃の感覚が段々蘇ってきた。

ゆっくりと息を吐き、レヴァティーンを顕現させ、光希と未希を背後にやると、

「気をつけてください。油断すれば、簡単に死にますから」

死ぬ　と言われ、未希は顔を青くし。光希はその辺りの事は既に教わっていたのか、真面目な顔で

周囲を伺っている。どうやら、戦場に来るのは初めてではないようだ。まだ、こんな子供なのに。

と思うも、今は頼もしい。先程の気配を消す技巧といい中々の才能も持っているようだった。

そして二郎は再び口を開き、

「では、行きましようか。全てを、終わらせる為に」

と言うと二人を連れて走り出した。

海山天音は、燃え尽きる寸前の命を何の感情を浮かべることなく、冷静に観察していた。

眼下には出血が止まっていない、意識もない上司の姿がある。そして、表には出さないが、天音の心の中は揺れていた。

助けるべきか、否か。千島蒼威は自分の上司だ。偶にウザったいが、嫌っては居ない。だが

「剣菱お兄ちゃんの、復讐の相手だよね……」

自分の命の恩人であり、初恋の相手が、何時か殺すと決めていた人間。あの優しい剣菱が、一番憎んでいた相手の一人。

二階堂特区のテロ事件の後、天音は何とか生還を遂げ、退院した

頃には全てが終わっていた。

村雨達は二階堂特区から去っており、重大犯罪者集団、死罪六神となってしまうていたのだ。それがとても、寂しかった。

天音の父はテロによって死亡。母は居ない。唯一の肉親は兄のみ。その兄も、天音を食べさせる為に

働きすぎて何時しか体を壊してしまった。そして、天音は生きてまた再会する為に、治安が安定した二階堂特区の

治安維持部隊へと入った。体制が変わった二階堂特区は中々にやりやすく、前よりは良い街になりつつあり、

偶にだが、仲の良かった剣菱、暁、ナナシ、村雨の誰かが訪ねてくれるようにもなった。

だが、最初に村雨が現れなくなった。それについて聞くと、剣菱達は話題を無理矢理逸らそうとする。そして次に、

暁とナナシが現れなくなった。もはや、訪ねてきてくれるのは剣菱だけ。天音もその頃には成長していたので、

三人が死んでしまったという事だけが漠然とわかり、同時に病気がちだった兄もついに亡くなってしまった。

そして、神代戦争の後に剣菱も姿を現さなくなり ついに、天音は独りになった。

(そう……)

誰も心を許せる人が居ない。それは、天音の式神の原因の一つだった。天音の式神の力は、天音に心を許した

人間の式神をカード化し、天音の力としてしまう力。二階堂特区に長く居た所為か、周囲にそれは知れ渡り、

村雨、暁、剣菱、ナナシの式神を使える天音は腫れ物のように扱われ、だが、他に行く所もなく、天音は

ずっと二階堂特区の片隅で鍛錬だけを積んで生きていた。それが変わったのは数年前だろうか、

「こんちわー！ ユニオンからきました、牧島竜胆でっす！」

ユニオンという名前は天音も知っていた。神々の黄昏事件を解決した千島蒼二と十名家の八神派を

筆頭にした組織だ。牧島竜胆は、その人材スカウトの為にわざわざ天音を訪ねてきたという。

久しぶりに人と話せるのは嬉しかった。だが、それでも適当に扱った。もう、人の式神をコピーしたくない。

嫌われるのは嫌だ。仲良くなった人が居なくなるのはもう嫌だった。だからまず、自身の式神について話すと、

「ん〜……平気じゃない？ アタシさ。式神使えないもん。ってゆーか！ アタシ、牧島郁人の式神なんだよねえ」

「……は？」

「だーからあ。アタシは、式神なの。するってーとお、天音ちゃんにはアタシと仲良くなっても平気なのさあ」

本当に式神らしかった。証拠もいきなり紋様の中から郁人を引っ張り出して説明も始めた。

そして、竜胆と本当に仲良くなっても式神はコピーされない。逆に郁人とは距離を置いたが、久しぶりに楽しい。

千島、八神という名が引かかったが、生活が危うかったのでそこは我慢する事にし、

天音はそのままユニオンへと入り、こうして今、千島蒼威の下についているというわけであった。

人間関係は上手くいっていない。竜胆を除けば、仲が良いのは数人程度。この世界に生きる身として、式神

をコピーされるといふのは自分の弱点を晒すようなものだ。だから、天音も竜胆以外とは距離を保っている

だが、千島蒼威だけは違う。ウザったいぐらい絡んでくるのだ。地味にムカつく事に、下心とか全く無しで。

「……っ」

だから、天音は迷っている。剣菱の敵である蒼威を代わりに殺すか。それとも、馬鹿だが面倒見の

良い上司を救うべきか、と。迷ってていいのは、後数十秒程度。

蒼威の出血は酷く、危険な状態だ。

やがて、天音は目を瞑りしばしの黙考。十秒ほど考えた所で、ついに決意を秘めた目を開き、

「八神村雨、紅椿」

と口にし、蒼威の胸の傷口に刃を突き立てた。あの日、この式神の持ち主がそうしてくれたように

第46話：命を懸けるに、相応しい理由です

（前書き）

告知忘れてました！ すいません！  
二話連続投稿です

## 第46話：命を懸けるに、相応しい理由です

一之瀬凜は上空から冷静に状況を観察していた。

現在、自分の守る塔にはユニオンでも最大級の戦力が雪崩れ込んできていた。対するこちらにも、数は多い。

統率された悪鬼の群れに加え、自分の空船が数百隻。守りは前線の船と悪鬼に任せて、凜は奥の方にある

巨大な軍艦型の空船の中で待機していた。弾幕を張り、近づけないようにしているが、それも時間の問題。

「……仕方ありませんね」

一度、目を閉じ楽しかったあの頃を思い出す。希と一緒にいた時間は、本当に幸せだった。

優しい暖かさに包まれ、嫌な事は全て忘れられていたあの至福の時。だが、それを壊したのは自分自身。

だから、もう一度会いたい。そして、大事な未希にもあの優しさを分けてあげたい。

「命を懸けるに、相応しい理由です」

凜の決意が固まった。ゆっくりと目を開けて再び戦況を確認。戦術を再び頭の中で組みなおし、

「全空船。前進しなさい」

と命令を下した。

対するユニオン側は気合で前進を進めていた。空船から発射される弾幕を潜り抜け、少しずつだが前進し

強大な力を持つ式神使いが空船を各個撃破している。上空からは、梨香と狂、そして律。

地上からは奏、莉王、時雨の三人を中心として攻撃を仕掛けている。空中組は狂と梨香を中心とした

対を作りつつ、化け物じみた突貫力を持つ律が孤軍奮闘を繰り広げており、地上は暴れまわる莉王の

フォローを奏と時雨と周囲の人間でフォローに回っているという感じだった。そして、一隻の空船に重槍を構え、

特攻した律は、遠くにある一番巨大な空船を睨み、

「あの馬鹿……っ」

と言葉とは裏腹に心配そうな口調でそう呟く。すると、自分から数メートル離れた甲板を突き破って、

莉王の剣王の光り輝く刃が現れた。ジツとしてては巻き込まれる。そう判断した律は、慌てて筒を取り出し、

「風鬼」

と口にした。次の瞬間、筒から反意志の光が溢れ出し、かつての太郎と色違い 緑色の鬼が現れ、

すぐに律の体の中へと吸い込まれる。緑色の装甲が律の各所に出現し、風を纏って律は空船から飛び降りた。

そして、重槍の力も発動。重力のかかる向きを、自身の直線状に

設定し、律は重鎗を構えて弾丸のように飛び出す。

轟音と共に、一隻の空船が貫かれて破壊された。更に律はそのまま他の空船に取り付き、破壊を重ねていく。

「ちょ、律さん。先行しすぎですつてばあ！」

後に続く梨香の遠距離攻撃部隊は、どんどん戦線を広げていく律に翻弄されていた。

梨香個人でならついていけるのだが、今回連れて来ているのはまだ梨香の隊でも新人の域を出ない者ばかり。

ある者は初めての实战にまだ慣れてないのか緊張した面持ちで、またある者は、怯えが混じっている。

仕方が無い。と梨香は軽く鼻を鳴らした。梨香自身も始めての实战は緊張したのだ。

「仕方ないなあ……狂さん。フォローお願いしますか？」

と梨香はすぐ傍で下と連絡を取りつつ、風の障壁を発生していた狂へと声をかけた。

「いや、梨香さあ。お前障壁張れねえだろうが、俺がこいつらのフォローしとくから、お前が前線に出てくれ」

「うげっ!? わ、私女の子ですよ！」

「先行しているのも女の子だ。相性的にはお前が一番なんだ。陸人みたいに突っ込んでだよ」

「あの人と一緒にしないで下さいよ……。私、あんな馬鹿みたいな芸当できませんもん！」

口ではそう反抗しつつ、梨香は渋々とだが前に出た。そして、狂は満足そうに後ろへと下がる。

梨香のスキルアップを狙ったのだが、上手く行ったようである。やはり、梨香はあの陸人の娘だった。

純血とは思えないほどの判断力と動体視力で、空船の弾幕を掻い潜り、律の死角に回っている空船を

冷静に撃ち抜いていた。

「どうみてもアイツと同じくらいの芸当かましてるじゃねーか……」

やはり蛙の子は蛙だと判断し、狂はヤレヤレとため息をつくと下の方で奮戦している奏へと通信を飛ばした。

上空から狂の通信が来た。嬉しさが奏の中に込みあがってくる。

だが その通信が取れない。

絶え間なく迫りくる悪鬼に念同と地神の攻撃を継続している為、意識が外せない。

周りにいる式神使いも頑張ってはいる。だが、十名家たる自分達と比べると若干力が弱いのも事実。

それに、ここまで忙しいのは総大将である一人の男が原因でもあった。

「ふっははははっ！ 楽しい、楽しいぞお！ 感情の波が乗ってくる！ ははっ！ もっと来おい！」

四条莉王が単独突撃し、地上の悪鬼と大抗戦を繰り広げていた。その為か、悪鬼達は指揮系統が

分断され、防御ではなく攻撃主体の構えでこちらに迫ってきてい

る。当初は、時雨の考えた作戦の下、回りこんで挟み撃ちという方法をとってたが、開始数秒で莉王がこの様の為続行不可能。

「し、時雨さん。どうしましょう……」

と奏が振り返ると、そこには対戦車ライフルを構えた八神時雨がニヤニヤ笑いながら立っていた。

瓦礫によじ登り、重場の力を応用してかかる負荷の分散を設定すると、発射。悪鬼が粉々に砕けて

更に貫通した弾が他の悪鬼をも引き裂いていく。それに満足する事なく、時雨は次弾を発射。

「し、時雨さん……？」

尋常ではない時雨の様子に恐る恐る話しかけると、時雨は一度撃つのを止め、達観したように笑うと、

「戦略なんざクソつくらえだよね！ うははは！ もついい、奏ちゃん後は任せた。僕もあの馬鹿を見習うとする」

「え……？」

何かストレスでも溜まっていたのか、時雨は気持ちよさそうにライフルを連射していく。ユニオンの部下達も

困惑しているようだが、忙しさがそれを許してくれない。悪鬼と必死の表情で交戦していた。

奏もふと振り返ると、ゴリラみたいな野太い腕をした悪鬼が石の斧を構えて奏に振りかぶっていた

「あ　っ」

慌てて念同を発動させ、一瞬動きを止めると地神の力を発動。大地から勢い良く岩石を発射させて

悪鬼を吹き飛ばし、何とか事なきを得る。　いよいよ本格的にまずい。一度体勢を立て直す必要があった。

こそこそと奏が最前線から身を引こうとすると、

「あら。お姉さま。どちらへ行かれますの？」

正面に七海家の面々を引き連れた妹の七海神楽が立っていた。奏の心にはあっつと光が差していく。

七海神楽は自慢の妹だ。それこそ、七海を一人で任せても良い位に出来る子な妹である。

本音を言うと、奏は自分が一番無能だという事は理解していた。人間的に上な姉に、力の強い妹。

それに挟まれて生きてきたのである。だが、そんな事は億尾にも出さずに奏は優しい笑顔を作ると、

「この有様だから、一回体勢を立て直そうとね。でも、かぐちゃん達が来てくれたから安心だわ。

お姉ちゃん。ちょっと、上空にいる狂さんと通信したいから、暫くこの辺りお願いできるかな？」

「構いませんよ。その為の私達ですから。後、先程五月の舞香から連絡がありました、こちらに

来るそうです。颯太さんが敵に回られたから、五月は大忙しらしいですよ。それでも、風香さん達は二日酔いで寝てるらしいのですが」

「舞香ちゃんかあ……なんていうか、颯太さんの悪い所と、風香さん達の悪い所を煮詰めて  
ちよつと優しくしたような子だからねえ……私、三年前のお正月にはお餅を口に詰め込まれたし……怖いな」

「あれはお姉さまが悪いのです。泥酔して、颯太さんに介抱なんてされますから。」

舞香はああ見えて重度のブラコンですからね。章介さんが現れてからは若干マシになりましたが……」

章介 その名前を聞いて、奏はそれ以上の話題を続けるのを止めた。今でこそ、普通だが。

件の男、神代章介が発端となった数年前の事件の際には舞香と神楽は若干心の傷を持っている。

奏はそれを少ししか知らない。本人だけが知っていればいいと思いい、これからも聞く事はないだろう。

ただ、あの事件の際に初めて妹の涙を見た奏としては姉としても個人としても色々と複雑なのであった

「と、とりあえず……私は狂さんと連絡取りますから、少しの間時間稼ぎをお願い」

「ああ、はい。わかりました 皆さん、行きますよ」

そういうと神楽が右腕を掲げた。同時に、七海の人間が式神を構成して駆け出していく、何時もどおりに。

神楽の正面を空けて、左右に散会するように戦線を張った七海に神楽は満足したように頷き、

「式神召喚を致します。皆様準備はよろしくて？」

そう言つと大きな返事が返ってきた。神楽は一礼をして、式神を召喚。すると、肩にエレキギターが現れた。

それを抱えると、下部についていたシールドが地面へと勢い良く突き刺さった。

神楽は弦を弾いて、音の調整をしていく。自分好みの音になるまで、世界から切り離されたかのように。

そして

「ロックンロール、ですわ」

神楽の演奏が始まった。荒々しく、自分好みの音を紡ぎ出し、やがてそれはシールドを介して大地に伝わり

神楽の望む任意の場所に強大な音の衝撃波として吐き出された。

轟音が一瞬響き、悪鬼の体が

バラバラに砕け散っていく。段々とテンションが上がってきたのか、神楽の頬が赤く染まり、

「あはっ。あはははははっ！　くれじいふおーゆーっ！」

その発言を皮切りに、神楽の歌が始まった。破壊の衝撃波が周囲を蹂躪し、悪鬼が悲鳴を上げている。

ライトハンド奏法まで始めた妹の姿を見ながら、奏は暫くぼかんと口を開け、やがて思い出したように

通信無線を取り出すも、妹が五月蠅すぎて会話にならない。

「か、かぐちゃ　も、もう少し、静か　」

「へーい！　本日はお日柄も良く、ファッキン・グッドですわねー  
」

神楽の念動も発動し、文字通り、大地が踊った。念動によって周囲の瓦礫や、破壊された悪鬼の破片までもが跳ね上がり、ぶつかり、ライブ会場のような激しい踊りとなって神楽の周囲を囲んでいた。

神楽お付の七海はそれをわかっていたかのように、そそくさと陣形を変え、再び悪鬼を殲滅していく。

「……あら？」

神楽の音のトーンが若干下がった。奏は今しかない！と判断し、通信機を使って狂へと連絡を取った。

話したい事もあったが状況が状況なので下と上との連絡事項だけを事務的に報告しあう。

その間神楽はボーッと遠くを見ていた。見たくは無い。だが、見してしまう。戦闘音の隙間に、バイクのエンジン音。

赤い一台のバイクがこのような荒れ果てた大地を物ともせず、疾走している。

「……遅いですわよ。この、クソ野郎共」

「え？ え？ な、何ですか彼らは？」

突然現れた赤いバイクに驚きを隠せない奏を尻目に、神楽はゆっくりと微笑を作った。

対する赤バイクに乗っている二人組も軽く手を上げ、運転していた方が上空を指差し、神楽は一度頷く。

これだけで、意思の疎通が出来るのだ。それが、嬉しくて、今はとても悲しい。そして、走り出す赤バイク。

神楽も再び正面を向き、ピックを構えなおすと、

「だっ、だっ、だっ、だっ。だっだっだっだー！」

そう歌いながら、コードを弾いていく。増幅された衝撃がシールドを伝って、大地を揺るがす。

「だっだっだっだっだー！」

神楽の瞳から零れ落ちる一粒の涙。同時に、赤バイクが車体を空中目掛けて構えた。

そして、二つの式神の力が同時に発動。バイクにかかる神楽の衝撃波から守るようにして一つの力が発動。

車体が一気に空中へと投げ出され、ぐんぐんと上昇していく二人を乗せた赤バイク。やがて、その高さが最高点に

達した所で、運転していた男が車体から身を投げ出す体勢を整え、後ろに座っていた女がすぐにハンドルを取る。

「じゃ、紡先生によろしく。……まさかとは思うけど、大義名分を振りかざして殺す気じゃないよね？」

「さあ？ その時の気分次第ですわね」

男の方はその答えにため息をつくど、車体を大きく蹴って跳躍。そのまま、空船の一つへと乗り移った。

女の方は落下していくが、何か式神の力を使っているのか何の衝撃も無く地面に着地し、走り出してしまった。

それを見て一息つき、男は被っていたヘルメットを脱ぎ捨て、

「さて、かぐちゃんからのお願いだ。きつちり覚悟決めないと」

男 神代章介の両腕にグローブが現れ、軽く左腕を振った。途端に、真つ二つに切り裂かれる空船の一群。

更に右腕を大きく振り、広範囲に渡る空船が真つ二つにされ、地上へと落下していく。

それに満足し、頷いていると不意に接近する気配を感じた。その方向を向くと、槍を携えた軽鎧に身を包んだ女性の姿。

「む。君は何処の子だい？ 先程下に落ちて行ったのは舞香っばかっただが、知り合いかな？」

「あ、はい。あ、あの、俺。神代章介つて言います。かぐちゃんと舞香に命令されて、ここまで着たんですけど……」

そう章介が自己紹介すると、軽鎧の女性 律が目を見開いた。

「ほお……君が、あの寄生型鬼神事件の。成る程、弟達から話は聞いていたよ。私は、八神律だ。」

君が出会っている筈の太郎と九我山令の姉に当たる。令の話が本当なら頼もしい増援だ。協力してくれるかな？」

「も、もちろんです。俺に出来る事なら……」

「私はアレだ。あの奥にあるあのばかどかい空船見えるだろ？ あそこに一人どうしようもない馬鹿が居てな。」

ぶっ飛ばしに行きたいんだが、生憎あの小心者が大量に罾を仕掛けていてね。中々近づけないんだよ」

「はあ……」

章介も目を凝らして状況を分析してみたが、中々近づけなさそう

である。空船の数が圧倒的であるし、

魔具製の罾が仕掛けられているのも確認。唸る律と章介。良い手が思い浮かばない。

すると、上空から二人の乗っている空船の甲板へと、梨香が降り立った。警戒したように、私服の章介を見ると、

「この子、誰ですか？」

「神代章介君だ。ほら、あの寄生型鬼神事件の……と、昔の話を蒸し返すのは失礼だな。悪かった」

梨香もあの事件の事を思い出したのか、気まずそうに章介の事を見た。だが、二人の目にはあの事件への同情の

色は無かった。ただ純粹に過去の話を蒸し返した事を謝罪している。それに章介は曖昧な微笑を返し、

「いいんですよ。俺はあの事件を悔いていませんし。この神代という名が、貴方達にどんな意味を持つとも。

あの事件を受け入れ、仲間達と一緒に神代章介として歩んでいくと決めましたから……」

章介の目には強い決意が備わっていた。梨香と律はそれ以上何もいう事なく、ただ前を向いた。

すると梨香の無線に連絡が入った。地上に居る莉王からだ。そろそろ遥緋が心配なので、決着をつけたいと。

そして提案される莉王からの戦術の提案。梨香の顔に笑みが浮かび、章介もその作戦を承諾した。だが

「……一つ、不安がある。すまないが、ここは梨香と章介君に任せたいかな？」

「え……？ まあ、私は平気ですけど」

「俺もです」

「じゃあ、任せたよ」

章介と梨香のそのまま手を振ると、律は風を纏い空中へと舞った。  
この不安が現実ならなければいいと思いつながら

## 第47話：信じれば、素晴らしき未来はここに在る

「ふははっ。ふはははははっ！ ユニオン四条部隊、総攻撃開始っ！」

ユニオンの地上部隊の式神の力が一気に発動し、上空の空船へと襲い掛かった。既に地上の悪鬼は

七海神楽の広範囲式神攻撃により討伐がほぼ完了していた。それだけではない

「んじゃ、こつちもやつかね」

上空に居た狂の部隊が地上の攻撃と交差させるようにして、式神の力を解き放った。

交差した力の群れが空船を蹂躪し、その船体を一気に消滅させていく。当然、空船達は凜の命令にて

力を避けるように分散した。上下左右に分散されては、式神の力も追えない。分散した空船はすぐに反撃に

転じ、上方、下方の逃げた空船はシールドを展開すると特攻するようにして地上部隊と空中部隊に

特攻するようにして襲い掛かるうとしたが、

「行かせないよ」

真ん中辺りの半壊した空船に乗っていた神代章介がそう呟き、式神の力を発動。

両手を一度に振り下ろし、章介のグローブから粒子が飛び出した。それはすぐに空船の前面にまで

散布されると光の線へと変わった。これが章介の式神の能力。光を操り、任意の場所や形に物質化させる力。

形成された数本の線は、そのまま空間に固定され空船達はそれにそのままの勢いで突っ込み、切り裂かれた。

そして、左右に散開していた空船は後方から砲撃していたが、

「神威……っ！」

梨香がそう呟くと、周囲に飛び交っていた梨香のコンセプトが穹蒼に貼りつき、その形を変化させた。

穹蒼の形が更に大きくなり、鋭角的なデザインへと変化した。それと同時に、暴風が吹き荒れ、梨香はそれを

冷や汗をたらしながら何とか制御下においた。そして、手に巨大な風玉が顕現し、

「っ……っ！」

それを弦にひっかけ、発射。巨大な風玉は数メートル先まで飛ぶと、通常の三倍近い、数百発の矢へと変化した。

その全てが梨香の制御下に置かれ、梨香はそれを二つに分ける、とその二つを左右の空船へと全てぶつけた。

風の矢に貫かれ、成す術もなく空船は欠片も残らないくらいまでに破壊されてしまった。

そして、最後に残ったのは巨大な一隻の空船。全長で軽く一キロはありそうなほど巨大な空船だ。

「流石に……でけえな」

「ええ。近くで見ると、より巨大さがわかりますね……」

章介は梨香とそう会話すると、自分の乗っていた空船を一度手を振り、真つ二つにすると最後の空船へ

光の線を繋げ、その上を走り出した。その間に梨香は下方を向いて状況のチェック。それと同時に

耳にさしていたイヤホンから莉王の声が聞こえ、

「梨香。こちらは準備完了だ」

「はい。では、今から誘導しますね！」

「じゃ、俺も行くぜ。今度は令のプラントの状況確認にいかねえと」

部下を引き連れて飛んでいく狂に手で挨拶をすると、梨香は神威を解除する事なく、

風玉をもう一度練り上げると再び弦に引っ掛けて、地上に向けて発射。今度は矢に変化しない。

風玉のまま地上に放たれ、這うようにして地上を移動した。

そして、地上に居た莉王、時雨、奏、神楽を風の中に取り込むとそのまま上昇を開始し、空船上空で風を解除。

「はっははは！ 久しぶりだなあ、凜よ！」

「ちょっとはテンションを抑えなよ……」

「莉王様、相変わらずですね……」

「何というやら、私。もう疲れましたよ……早く善に会いたいです」

空船に向かって落下していきながらばやく三人と一人テンションの高い莉王。そして、空船の一部分の着地  
すると莉王は剣王を抜き放ち、周囲を伺う。時雨と奏と神楽も同時に周囲を伺う。その内に梨香と章介も  
空船に辿り着き、莉王達と合流した。

「敵の最後の一隻だというのに……やけに静かですね。クソ興奮が  
ですわ」

「うむ。それは俺も思っていた。何より、心眼を最大まで上げて  
いるのに、凜の感情が全く聞こえん。

それと神楽……貴様も相変わらずだな。クソをつけるのはやめな  
さいと言っただろうが」

「クソ無理ですわ、莉王様。式神使った後は特に……うふつ。あつ、  
またテンションが……」

「ああ、もう。でも、何か府に落ちないね……もしかして……」

と呟いたのと同時に空船が大きく振動し、前部分と後る部分に大  
きく分かれた。前部分に居た莉王達が  
ポカンと見上げる中、後半部分の空船はそのまま前進し、ユニオ  
ン本陣の方へと向かおうとしている。  
すぐに莉王達は式神を再召喚し、後る部分の空船へと攻撃しよう  
としたが、

「ぬう……」

莉王達の居た前面部の甲板以外の建物の屋根が全て爆発し、その

中からは改造された数体の巨大な

鬼型の悪鬼が現れた。その全てが完成作であろう、魔具を携えている。中々に厄介な敵であった。

莉王は舌打ちし、剣王を構え、神楽も再びギターを担いでいる。大地が無い奏は式神が使えないので

時雨がサポートする形になってしまった。章介は無言で拳を上げ、梨香も同じように構えた。

「あ、梨香。ウチの嫁さん何処に行ったか知らないかな？」

「律さんでしたら……気になる事があるといって何処かへ行ってしまうましたが……」

「ふむ。律は凜の親友だからな。ヤツならこれを読んでいたのだろう。だから、ここは俺様達で相手をしようか」

そう言うと莉王は戦闘を始めてしまい、それを皮切りに乱戦が始まった。時雨は心配そうに空船の飛んでいった方向を見上げると、

「全く、僕も連れて行って話だよ……バカ嫁め」

何とか莉王一派を撒いた凜だが、空船の中で俯いていた。散々空船を破壊された為か、体に式神の

ダメージがフィードバックし、痛みに呻き続ける。全身の震えを

何とか堪えると凜は一度立ち上がり、

モニターに映ったユニオン本部を睨みつけ、自分を奮い立たせる。まだ、まだ終われない

ここで全て諦めるわけにはいかないと

「の……ぞみ……」

無意識に手を伸ばしても、何も無い。かつて、手を取ってくれた彼女はもうこの世にはいない。

これ以上式神で戦うのは不可能だった。あれ程の数の空船を召喚したのだ。当たり前だ。

だが、ユニオンの大多数の足止めはできた。後はもう、戒や仲間達に任せるだけだ。

自分の役目は、後一つで終わり。もはや前進する事しかできない空船を、本部にぶつける事だけ。

「ごめん……ごめんね……」

本来あるべき幸せを壊してしまった原因は全て自分にある。希を傷つけ、そこから始まった。

あの日、自分を受け入れていたら。希を最後まで信じていれば。空船はこんな戦場の十文字特区

ではなく平和な十文字特区の上を飛んでいただろう。凜と希と未希で空の散歩をしながら

お茶を楽しんでいたのかもしれない。だが、それは二度と叶えられない願い

「未希……と、……幸せ……にね……」

未希はとても良い子だった。希の面影を残し、戒の才能を完璧に

受け継いでいる優しい子。

凜だけではなく希の関係者全員に愛された希望の子。希の笑顔の為なら、凜は命だって惜しくない。

人並みの幸せは要らない。未希と一緒に居る時にだけ感じるささやかな幸せだけで十分過ぎた。

薄れ行く意識を必死に繋ぎ止めていると、空船のセンサーが音を立てた。誰かが、空船に向けて

式神を構えている。凜は目を見開き、モニターをチェックすると、正面のビルに人影を見つけた。

そして、それを見た瞬間。意識が完全に覚醒し、思わず声が漏れてしまう。

「律さん……」

拡大すると、八神律が仏頂面で空船の事を睨んでいるのがわかった。

八神律は腕を組んで高速で飛んでいる空船を睨みつけた。一之瀬凜の事は良くわかつている。

追いつめられた時の凜は何時でもひたむきで、直情的だった。それは学生の頃から、ずっと変わっていない。

それが好きでもあったし、今ではとてもそれが律を苛立たせている。

「何をやっているんだお前は……」

目的はユニオン本陣への特攻であろう。莉王達を撒いた後に、地上部隊から攻撃を受けてもはや空船は

ほぼ操縦不能になっているように見える。兎に角、真っ直ぐユニオン本陣に向かう事に特化していた。

自分が最後の砦　そして、律はゆっくりと目を瞑り、

「お前達、出て来い」

律の腰に吊るされていた筒から粒子が飛び出し、隠形鬼、風鬼、金鬼が現れた。

律に寄り添うようにして顕現した鬼達は一度咆哮し、飛び上がると律の鬼憑の力によって変換。

「令……これが、私なりの九我山への答えだ！」

粒子化した鬼達はそのまま律の中に入るのではなく嵐のように吹き荒れ、近くに居た十文字側の悪鬼を巻き込むとその存在を粒子の変換し、嵐のようにビルを包み込んだ。上級悪鬼である

四鬼達の命令には流石に操られた悪鬼も抗えなかった。これが、律と令の最大の違い。

令は対等に存在を認め、力を得る。律の場合は、上級悪鬼と契約を結ぶ事でその下の悪鬼をも操る力だ。

どちらも同じ力の範囲だが、令の方が九我山の意味を体現している。だから　律には神憑が使えないのかもしれない。

そんな事をふと思った。令は物心ついた頃から太郎と紫が当たり前のように居た。だが、律は違う。

それ故の契約と共存の差。だが、それでも律は自分を否定しない。この力が間違っているとも思わない

「来い、お前達！　私が全て受け入れてやろう！」

粒子の嵐が律を中心に収束していき、そこに残ったのは闇色の仮面と軽装という出で立ちの律の姿。

重槍を顕現させ、空船を仮面の下から睨みつけると律の体がふつと浮き、次の瞬間急速に空船へと上昇。

空船も律の存在に気づいていたのか砲門を開き、律へと砲撃を開始。律は敢えて避けなかった。そのまま

正面から突っ込み、砲撃を弾き飛ばした。金鬼の能力である。更には、拳に闇色の光を蓄積させると、

数瞬後にそれを解き放ち、空船の前面部分に大穴を開けた。船体が大きく傾いたが、それでもすぐに

体勢をユニオン本陣側へと向けた。律はそれに舌打ちすると、更に上昇し、空船へと取り付いた。

「凜っ！ おい、凜っ！」

律が大穴を見て怒鳴りつけると、そこに居たのは頭部から出血をしながらも律を睨んでいる凜の姿。

そして、ゆっくりと破壊された空船の内部を歩き、二人は相対した。こうして、敵意剥きだしに向かい合う様は

学生の頃に戻ったかのよう。律と凜は同時にそれを感じ、律は微笑を。凜は口の端を苦々しげに曲げた。

「懐かしいな。高校の頃もこうだったね。どちらかが喧嘩を売って、こうして良く屋上で向かい合ったものだよ」

「ええ……。ですが、今回だけは負けるわけにはいきません。貴女を殺してでも、私は目的を果たします」

「……相変わらずだな。いや、”僕”の一番嫌いな出会った頃の一之瀬凜に戻ったか。全部手に入れようとして！」

全部犠牲にして！ 本当に大事な物に気づかず、一人ぼっちでよく屋上で泣いてたあの時の一之瀬凜と一緒にだよ」

「貴女に……貴女なんか！ 私の気持ちができるものですかっ！ 私がどんな思いで生きてきたか。」

あの日、希を傷つけたから……！ 戒も、皆も、未希も……不幸になっちゃった。私が希を信じていれば……

親友だったのに！ 誰よりも愛してたのに……っ！ 私なんかがいなければ……」

涙を流しながら律への気持ちを吐き出していく凜。だが、律はそれを冷たい瞳で見据え

「バカか、お前は」

「っ!？」

「お前の気持ちは正直、事情を殆ど知らん僕にはさっぱりだ。お前がどんな思いで生きてきたかもわからない。」

でもな、凜。私は今、猛烈に怒っている。これ程の怒りは久しぶりだ。何故だかわかるか……?」

「そんなもの、わかるものですか……っ!」

「お前が、私の仲間の命だけではなく」

「うるさいわよっ！ もう、黙って！ 貴女なんか……貴女なんかにイイイイっ!」

声を荒らげて、ヒステリックに凜は叫ぶと律へと襲い掛かった。

手には、魔具製の短剣。

突進してくる凜をに膝蹴りを叩き込み、更に一撃加えようとする  
と、虚空から光輝く一隻の小さな空船が現れ、

律へと突撃。思い切り壁へと叩きつけられ、思わず咳き込んでし  
まう。その隙に凜は立ち上がり、

魔具から電撃を放出すると、律の顔が苦痛に歪む。だが、律もそ  
れで終わらない。すぐに立ち上がり、

凜の胸倉を掴むと、

「説教するつもりはないがな……凜、お前は間違っているぞ！」

「間違つてなんかいません！ 何がおかしいんですか！ 母と子を  
会わせてやる事の、何が悪いんですかっ！」

「ああ、それもいいじゃないか……。だがな、お前のやり方は最低  
だ。何だ、今の特攻は！」

この問題はお前が死んでどうにかなるものなのか！？ お前がユニ  
オン本陣に特攻した所で、

私達は絶対に勝つぞ！ それこそもう手段を選ばん。全身全霊を持  
つてお前達を殺す！」

「そ、んな事……」

「だがね。過去から彼女を取り戻しても、そこにお前が居なきゃ、  
意味がない。この戦いは、お前達側

の誰を殺しても、根本的解決にはならないんだ。だから、僕……う  
ーん。いや、私はお前達

を殺そうとはしていない。きっと、他で戦っている連中もそれがわ  
かっている筈だ。

ウチのバカ弟なんかはその辺考えてなさそうだがね。まあいい。兎

に角私が言いたいのほだな……」

と一つ咳払いをし、

「過去は取り戻せない　もう、あの子はお前が幸せにしてやるしかない。逃げるなよ、一之瀬凜。」

過去もお前の罪も受け止めて、償えよ！　お前が奪った分を、お前が与えてやるしかない」

「そんな事……簡単に……貴女に……」

「希ちゃんに報いたいのなら、希ちゃんが一番喜ぶような方法でやれよっ！

一度しか会ってないが、私にだってわかるさ。彼女が、君が死んで喜ぶような人間ではないって事ぐらいはな！」

律は凜の体を壁に叩きつけ、そう怒鳴った。律のその剣幕に凜は一瞬怯み、やがて

「わかってます……でも……でも、未希が……未希が……希に会いたいです……」

「……私からは何も言えない。難しい問題だよな。私も息子が今は二人も居る。北斗と南斗って名前なんだ。この世界で時雨と同じぐらい愛しい存在だ。子供の願いは叶えてやりたいよな。その気持ちはわかるよ……」

律は凜の泣きじゃくる凜の手に頭を乗せた。凜はそれを拒んだが、何度でも律は手を乗せ続けた。

そして突然、空船の船体が大きく振動をした。凜の力がついに限

界を迎えたのか、墜落しているように感じる。

凜は細かい呼吸をしながら目を細めていて反応しない。意識が限界に近いのだ。脱出しようにも墜落の勢いに

体が船体に釘付けされているのと、凜を抱えていては流石の律も満足に動けない。

「お、おい凜。しっかりしろ」

「……………の……………ね……………」

「遺言のつもりか、おい？ 信じてみるよ 素晴らしき未来を。

私の読みではウチの旦那様がギリギリ助けて

くれてその後、アレだ。私はお前の前で時雨とキスするんだ。そうしてエンディングを迎え っておい！」

どんどん加速していく空船。やがて、地上が見えてきた。最悪なことに、住宅地のだ真ん中だ。このままでは

流石の自分でも死んでしまう、と律が珍しく焦りかけた時、不意に勢いが緩んだ。目を凝らすと、近くの民家の

屋根の上には最愛の人の姿があった そう、八神時雨がボロボロの格好で式神の力を使っていた。

疲れたような顔だが、律に気づくと何時も笑みで手をこちらに振ってきた。律はそれに仮面を外し、

満面の笑みで答え、凜の頬を二回ほどペシペシ叩いた後に一言。

「ほら見るよ、信じれば、素晴らしき未来はここに在る それにわかったら？ 私の旦那様はな、世界一かつこいいんだ」



第48話：貴方は、人の命をなんだと思っているの (前書き)

次回遠音編！

#### 第48話：貴方は、人の命をなんだと思っているの

海山天音は、蒼威の止血と応急処置を終えるとその体を担ぎ上げた。

若干重いと感じたが、蒼威はそこまで上背があるわけではない。普段から体を鍛えている天音には苦ではない。

女の身一つで生きていくには兎に角鍛錬を積むしかないのだ。そのまま周囲を警戒しながら、天音は

十文字特区をユニオン本陣目掛けて歩いていく。周囲には、天音の式神であるカードが何枚か浮いていた。

「全く、何で私が……」

天音が蒼威を殺さなかった理由は、自分でも未だに良くわからない。ただ、殺すのなら剣菱がやるべきだと思ったただけだ。

天音が蒼威を殺しても、きっと剣菱は喜ばない。というよりも、自分の師匠達全員が喜ばないだろう。

暁も村雨もナナシも何度も天音を普通の生活に戻そうとした。だが、天音は断固としてそれを受け入れなかった。

この世界に居れば、剣菱達と繋がっていられる。それだけが、家族を失った天音の支えであったからだ。

「ん……？」

重い女だ　と自重気味に笑いながら歩いていると前の方から人の気配。すぐに身構え、カードの一枚に念じる。

カードはすぐに一本の禍々しい剣の形を作り、天音はそれを口に咥え、様子を伺う。そして

「し、四条さん……」

「ええ。……下がっててください」

四条。と相手方の名前が聞こえた。ユニオン内部に四条という名前は数人ほど。四条家から出向している者。

その他には、有名どころでは二人。四条莉王。そしてその妻

四条遥緋。自分が今担いでいる千島蒼威の娘。

声から察するに女だ。式神の気配も相当な熟練者の感じがする。

天音は一息つき、片腕を上げて気配のする方へと身を出した。

「ユニオン戦闘課、千島蒼威隊所属、海山天音です」

予想通り、目の前には四条遥緋が棒を構えて立っていた。その後ろには見知った治療系の式神使い達の姿があった。

個人訓練や合同訓練で良く怪我をする天音は世話になっている。

そして、ゆっくりと蒼威をその場に降ろすと、

遥緋が血相を変えて駆け寄ってきた。

「お父さん！ お父さんしっかりして！」

「危険な状態です。応急処置はしておきましたが、すぐに治療が必要でしょう」

「は、はい」

輪廻転生の力を発動させ、蒼威の体を再生していく遥緋。天音は

噂には聞いていたが、反則的な式神であると思った。

だが、失った体力までは回復できないようですぐに他の治療隊員が蒼威に駆け寄り、式神による治療を施していく。

遥緋はようやく一息つけたようで、天音に向き直ると、

「えつと……お父さんを助けてくれてありがとうございます。私は、四条遥緋。貴女は……海山さんだったけ？」

噂で聞いた事があるよ。何期か前に凄い強い女の子の式神使いが入隊したって。本当にありがとう。

海山さんが一緒に良かったわあ」

天音の腕をとってぶんぶん振るう遥緋に苦手な感情を覚え、天音は手を引くと、

「いえ……。上司ですし。じゃ、私もう行きますんで。失礼します」

「あ……うん。あの、本当にありがとうございます！」

遥緋の視線が何故か辛くて、天音は振り返ることなく歩き出した。

十文字本家内の庭では、十文字戒と海原沙姫のにらみ合いが続いていた。先程の沙姫の言葉以降、戒は固まったまま。

十年前、自分が起こしたあの事件の被害者。家族を殺された。それは、戒も知っている。海山という名前にも覚えがある。

著名な夫婦だった。一人娘だけが見つかっていない。まさかその娘があのだ金稼ぎ集団、鎚木の幹部になっていようとは

夢にも思わなかった。どれ程の修羅場をくぐったのだろう、目は人殺しの目。式神を構えている様も、圧力がある。

「十年前ぶりでしょうかね……あの事件から、長かったようで短かった気もします」

「ああ……。そうだな。もう、希が死んでから十年か。そして、俺が君から両親を奪ってから十年でもある」

「はい」

「それで、今日は何をしに来たのかな？ 俺に復讐しにきたのか？ だとすれば、君にはその資格がある。

だが、殺されてやるわけにはいかない。君が俺を殺しにくるなら、俺も全力で君を殺そう」

「それは、貴方次第ですよ。今すぐこの馬鹿げた事を辞めてくだされば、私は何もしません」

「その様子だと、全部知ってるみたいだな？」

「色々情報集めましたから。この十年、それだけを考えて生きてきました。何故、貴方達はあの事件を起こしたのかそして 憎くて手当たり次第破壊したのに、何故貴方達は”遺族への賠償”を続けているのかもね」

そう 戒達は、後にあの事件の真実を知ったのだ。希を傷つけた人間達が、未希を救おうとしてくれたのだと。

あの事件は、誰も悪くなかったのだと。悪鬼という存在を知らなかった勇敢な人間達の誇りあるべき行動だと。

数年前にそれを知った戒達は、遺族への賠償を遠まわしに行った。それしか、出来なかったのだ。

「わかったんだ……後に、希を傷つけていた人間達が未希を救おうとしてたつてね。」

だが、こちらを妻を殺されている、そう簡単に割り切れるものじゃない。だから、今回の事件は全てなかった

事にしたい。あの日、トラックさえ突っ込んでこなければ、全てが上手く行く。俺達はあのまま家族旅行に行き、

君もお母さんとお父さんとまた一緒に居られる！俺達が壊した全てが帰ってくるんだ。何故、それを止める」

「ふざけないでください……っ！」

「何がだ？」

「じゃあ、私のこの十年は何だったのよっ！ 何度も何度も死に掛けて、何度も何度も屈辱を味わって！

そんな簡単に割り切れない！ パパとママに私がどれだけ会いたかったと思う！？ 毎日よ！

でも、貴方達が殺したから会えない！ だから十年かけて受け入れたのに！ 一人でも生きて行こうって！

何でまた貴方達は私達の気持ちを踏みにじるのっ！？ 貴方は、人の命をなんだと思っているの？」

涙目でそう沙姫が怒鳴った。戒には、沙姫が何故怒っているか理解できない。

沙姫や大半の遺族達は十年かけて、死んでしまった者の死を受け入れた。辛く、苦しい十年だった。

愛する人に会えない。それは戒達も同じ。ただ、戒達には全てを

変えられる力があつた。魔具という力が。

世界に反抗できる力が。だが、他の人間にはそれは出来ない。死んでしまつてはもう、どうしようもないのだ。

それが、両者の意見の差となつてしまつていた。

「……っ。最終通告です。止めてください。でなければ、貴方を殺します」

「……悪いが、断る」

「未希ちゃんの為ですか？」

「……そうだ」

「そう　もういいです。十文字戒。私は、貴方を殺しますっ！」

沙姫の持っていたツインブレードが激しく振動。光が刀身から溢れ出し、沙姫の体を覆っていく。

見た事のない力だ　と戒は警戒を強める。蒼威と戦つた時のダメージもまだ抜けてはいない。

森羅万象を発動させ、五指に炎を灯し、沙姫の様子を伺う。ジリジリと、少しずつ間合いを詰めてきている。

「っは！」

ツインブレードが振るわれた。光が刃となり、戒の喉を切り裂かんと振るわれる。それを避け、飛び上がった。

もう片方の手に雷の槍を持ち、五指の炎と共に雷の槍を沙姫目掛けて叩き付けた。激しい炎と雷が

十文字家の庭に広がり、すぐに収束した。その中心にあつたのは、

ツインブレード。それと同時に、光が倍加。

沙姫の全身を包んだ光が更に広がり、力が増加したのを感じる。

「吸収型か……」

森羅万象と一番相性の悪いタイプだ。だが、それでも戒は負けるわけにはいかない。

沙姫は強い。あのぐらいの年で、あそこまで式神を使いこなしている子は久しぶりを見る。

まだ子供　そんな考えは打ち捨てて、戒は沙姫へと迫る。対等の相手として、そして確実に倒す為に。

未希が見る十文字特区は変わり果てていた。見知った場所は完膚なきまでに破壊され、

そこら中に瓦礫が転がっている。その中に、一之瀬凜の空船の残骸を見つけて、未希は益々顔を青くした。

二郎と光希の後に続き、歩いている足取りにも力が無い。だがようやく決心がついた気がする。

これが、自分の引き起こした事だ。十文字生まれの意味を、完全に理解していなかったのも悪い。

何時だか遠音が言っていた。

「君は、日本でも最高峰の家の娘だ。君の発言一つで、世界が変わるといっても過言じゃない。

だから、よく考える事だ。考えて、考えた結果の発言なら、私は君の力になる。全てから守ってやる」

その言葉が強く押し掛かる。本当に、世界が変わってしまったからだ。あの平和な十文字特区が、このような状態になった。近くに見える公園では、幼稚園の頃、千春や千夏と良く遊んだ。

今自分が居る通りも、良く遠音と一緒に買い物に行く時に通っている道だ。その全てが、壊れている。

「未希ちゃん。大丈夫？」

ふと顔を上げると、光希が心配そうな顔をして立っていた。二郎も心配そうに未希を見ている。

「大丈夫。自分のした事を、実感しているだけだから」

「……そう。一つ、質問があるんだけどいいかな？」

二郎は、そう言う十文字特区の奥の方にある家を指差した。白い靄のようなものがかかっている。

強化された結界だ。未希は見覚えがあった。四つ子達と共同開発した、強い防御結界。戒の式神にも耐えた程だ。

「アレはなんだい？」

「私の家です。防御結界が張ってありますね。……お父さんの式神でも破れなかったから、壊すのは難しいです。

……困りましたね。あそこに反意思が沢山集っています。多分、お父さんはあそこに居るんでしょうけど、

このままじゃ入れません。あの、三つの塔から力を供給されてるか、三つ全部倒さないと……」

「ふむ……。森羅万象でも駄目なら、レヴァティーンでもちよつと  
厳しいか……」

「多分、遠音ちゃん達も戦ってるから、皆を探して話し合えばお父  
さんこんな事止めてくれるかもしれません」

「しかし、場所がわからん。きつと、塔付近は激戦区だろうしな。  
そんな所では、君達の身が危険だし。

……む。一つだけ知ってる気配がある。これは、ガルムの孫のか。  
アイツもここに居るのか……」

「ガルムの孫、ですか？」

「六道紡って名前だったかな……？ 未希ちゃん、その名前知って  
る？」

「は、はいっ！ 紡先生は偶に勉強を教えてくださいました。すっごい  
頭が良いんです。

何でも知ってて、色んな定理や公式を私に教えてくださいました。昔は  
良く先生の家に遊びに行きましたし……」

「じゃ、とりあえず状況見ながら紡の方へ向かおう。ここらじゃ、  
ユニオン本陣に行くよりはずっと近いし」

二郎はそう言うつと再び周囲を警戒しながら、歩き始めた。その後  
ろに光希が続き、同じく周囲を伺う。

未希はその二人の背中を見て、何か似ているものを感じる。タイ  
プは違うが、根本が似ている。

そんな不思議な感覚。驚いたのは光希の事だ。こんな戦場でも、  
全く同じじゃない。自分より、年下なのに。

と未希は不思議に思い、聞いてみる事にした。

「ねえ、光希は怖くないの？」

「うーん……ちょっとだけど。お父さんとか陸人おじちゃんに、色々練習に付き合ってもらったから。」

あの人達の方がよっぽど怖いよもう。僕が泣くまでやるからねっ！でも、終わった後はいっぱい褒めてくれるけど」

「そうなんだ……」

「二人とも、もう行くよ！」

二郎の声に頷くと、光希と未希は走ってその後を追う。が、急にその足を止めた。誰かの気配がする。

二郎がまずそれに気づき、次に光希も気づいた。緋眼を発動させ、何時でも動ける体勢に変えた。

暫くの沈黙。光希の緊張が高まっていく。そして、足音が聞こえた。早い。きつと走っている。息遣いが聞こえた。

近い。もう少しだ。そのまま待つ数秒。曲がり角から、赤い髪の男が走ってきた。その頭にはサングラスが乗っている。

「ありやりや？ 何で十文字の娘さん……っと、おお！ 鬼塚組に千島の坊ちゃんもいる！」

快活に笑い、そういう赤髪の男に二郎はレヴァティーンを突きつけ、

「お前は誰だ？ ユニオンか？ それとも、十文字派か？」

そう問うも赤髪　　太宰巡は笑ったまま頭を掻き、口を開く。

「俺は、太宰巡つす。いちおー、鍋木の幹部補佐だったかな。今回は、ちよつと観光にね」

「何故、俺達の事を知ってる？」

「そりゃ、アンタの家襲つたの俺の部下だからさ。いやはや、大変遺憾に　　つと」

巡の発言の途中に、レヴァティーンが振るわれた。が、巡は光を纏った指一本でそれを受け止めた。

二郎の心に驚きが生まれる。本気でなかったとはいえ、こんな簡単に斬撃を止められたのは初めてだ。

ただ者ではない。レヴァティーンを引き戻し、今度は確実に殺せる力を込めていく。だが、巡は両手を上げ、

「降参だつて。俺、アンタらと揉めるつもりないつす。つーか、逆に俺と一緒に居る方が危険つすよ？」

「何だと？」

「いやだつてほら。　　もつ、来てるしね」

巡がそう言うと同時に、指先から光を放った。二郎を避け、その背後へと。一瞬悲鳴が響き、何かが倒れた。

見ると、男が二人倒れていた。その傍らにあるのは式神。持ち主の意識が無くなったと同時に、

消えようとしている。巡に集中しすぎていて気がつかなかった。

まだ、実戦の勘が戻っていないと舌打ち。

「何だ、鎬木かあ……外れだな」

何の感情も無く、巡はそう言うと踵を返そうとして、止まった。辺りが何時の間にか日陰になっている。

上を見上げると、何の前触れも無く戦艦が現れた。しかも、下方に取り付けられた砲台がこちらを向いている。

迷ったのは一瞬。未希と光希を優先しようとして走り出したが、

「痛っ」

「邪魔だ！」

迎撃しようとした巡とぶつかってしまった。二人して倒れ、その瞬間、砲撃が雨のように降り注いだ。

不味い　と光希が未希の方向を向いた時、未希は光希の手を握り、二郎へと手を伸ばした。

だが、遅い。寸前の所で間に砲撃が降り注ぎ、

「逃げろ！」

「すいせん。式神の力を使いますっ！」

そして、未希と光希の姿が消えた。

## 第49話：救せるものか、この世界と自分自身を

牧島郁人の部隊を確認。七海遠音は自虐的な笑みを作り、屈伸をして迎え撃つ準備を始めた。

郁人の姿はまだ見えない。だが、郁人の部隊は凄まじい勢いで突進してきている。かなり強い。

前線に敷いた悪鬼達を物ともせずはこちらへと向かってくるのが見えている。だが、遠音に焦りの感情はない。

というよりも眼中にない。目的は郁人だけ。今日、全てを終わらせる為に

「ま、余興と洒落込もうかね」

近くにあったコンテナを軽々と持ち上げ、遠音は獰猛に笑った。

そのままコンテナを軽く上げ、回し蹴りをかました。

蹴り上げられたコンテナは空中で完全に壊れ、中に入っていた大量の剣型の魔具が広がった。

それら全てが、遠音の超動の制御下に置かれ、郁人の部隊目掛けて襲い掛かった。圧倒的な物量が

襲い掛かるが郁人の隊は一步も引かない。

「進めえええつ！」

南野喜一が怒号と共に武神を引き抜き、その能力を発動。結果的に、遠音の魔具の群れは弾かれ、大地へと突き刺さった。

遠音はそれに笑うと、自身も走り出し、悪鬼を踏みつけて一気に加速。そして適当に近くにあった一本を引き抜き、

牧島部隊へと襲い掛かった。相手は、熟練した剣の式神使い達。それでも遠音は引かない。

超動と身体能力を駆使して一瞬その内の三人の背後に回ると、魔具の力を発動し、炎の斬撃をくらわせた。

更にもう一人に拳を一撃叩き込み、最後の一人を持ち上げて近くの人間にぶつけると、今度はそちら目掛けて走り出す。

「ははっ！ おいおい、こんなモノかい？ さっさと郁人を出してくれよ。物足りないな！」

「では、副隊長が相手を」

視界の端で蹴りの気配。遠音は体を曲げて避けると、その相手である南野喜一へと向き直った。

超動により一番近くにあった剣を手にとると、喜一目掛けて襲い掛かる。喜一も前に出て、応戦。

遠音の猛烈な斬撃を全て受け止めるが、圧されている。当たり前だ。喜一は純血。力の差がありすぎた。

だが、遠音が渾身の一撃を振り下ろした瞬間、喜一はそれを避け、持っていた剣を遠音へと叩き付けた。

が、遠音の腕によりその一撃が受け止められた。硬い。それでも喜一はめげずに、剣に力をこめた。

そして、喜一の式神の力が発動。遠音の腕に剣がめり込み、思い切りビルへと弾き飛ばした。

「副隊長、郁人さんは？」

「まだだ。もう少し耐えるしかないみたいだね」

「ですが！ 悪鬼の相手でも厳しいのに、あれが相手では副隊長が

「だが、七海遠音に勝てるのは郁人さんだけだよ。もう少し、頑張ろう」

そう言つと喜一は油断なく遠音を叩き付けたビルを睨みつけた。あの少しの戦闘でも疲労感が凄まじい。

一撃一撃を避ける度に、死にそうな程のプレッシャーが襲い掛かってくる。改めて、自分達の隊長はとんでもないと思う。

あれ程の相手と互角に戦つてのけるのだ。自分にはできなくはないが、死ぬ覚悟でやらなければ不可能だ。

そうこう考えている内にビルの瓦礫の中から再び七海遠音が現れた。深刻なダメージを受けている様子はない。だが、それでも

「負けられないよな」

再び遠音に向かつていく喜一。今度こそ、七海遠音に油断や慢心はない。気を引き締めて向かうが、

「悪いが、本気を出させて貰おう」

一瞬で、背後に回られた。

「っ」

早すぎる。裏拳が顔にめり込み、更に腹部へ三発。反応すら難しい。剣を振るうも、当らない。

隙を突かれて顔を二発。最後に蹴りが一撃入り、成す術もなく喜一は吹き飛ばされていく。胃の中の物があふれ出そうなのを

堪え、立ち上がるうとするも力が出ない。仲間達が喜一を助けよ

うと迫るが、遠音の起こした超動と魔具の混ざった台竜巻に  
吹き飛ばされ、呻いている。 七海遠音は強すぎる。絶対に勝  
てない。そう、自分達では。

「さっさと郁人を出してくれよ。いい加減、イライラしてきてるん  
だ」

「も……う少し、俺たちと遊んでけよ！」

「牧島部隊まだ終わってねーぞコラア！」

そう挑発するも、遠音は興味なさそうに欠伸をすると、悪鬼達に  
手を上げた。遠音の指示に従い、武器を構えて

のそのそとこちらに近づいてきた。応戦しようとするも、遠音の  
攻撃が強力過ぎて立つのすら困難である。

だが、それでも諦めずに全員が立ち、攻撃を仕掛けようとしたと  
きだった。

「フラガラツハ・改式完全起動完了。リンドウシステム正常。  
郁人、準備おつけー！」

そう、声が聞こえた瞬間。視界が光に包まれた。圧倒的なエネルギー  
ギーが周囲を埋め尽くし、悪鬼を跡形もなく消し去っていく。

その後、空中から降り立ったのは、牧島郁人。新しいフラガラツ  
ハを片手に持ち、何時もの黒いコートを着て遠音を睨みつけた。

二人の視線が絡み合ったのは、一瞬。遠音は猛然と飛び出し、持  
っていた剣を叩き付けた。が

「フラガラツハ」

郁人も遠音の剣にフラガラツハをぶつけ、一撃で遠音の剣を破壊。更に刀身に纏わりついてきた反意思が遠音に襲いかかった。

爆発へと変化し、遠音を巻き込むがそれだけでは終わらない。郁人は更に一步踏み出し、

「灼っ！」

従来までのフラガラツハとは違い、変形が存在しない。存在がブれた次の瞬間には形態が変わっていた。

刀身が巨大化し、噴出した反意思が回転。遠音へと刺突を放った。遠音はそれを拳で挟んで受け止め、

郁人は更に柄から反意思を噴出させ、高速で移動。ビルへと叩きつけるが、遠音の蹴りが郁人の腹部に炸裂。

だが、鉄のように硬い。よく見ると、郁人の体には紋様が浮かんでいる。竜胆が居ないのに何故？

という疑問が湧くが郁人がその前に方向を変えた。天井の壁を何枚もぶち抜き、屋上にてようやく動きが止まると。振りかぶって一撃。

屋上へと叩きつけられる遠音。苦悶の声を漏らし、体勢を立て直そうとするが、

「竜胆！」

「あいよー。雷撃砲セツトアップ」

何処からか竜胆の声が聞こえた瞬間、フラガラツハの形態が再び変わった。刀身が消えており、柄の先には砲が見えた。

そして、郁人の意思によって雷撃砲が回転しながら発射され、雨のように雷撃を遠音目掛けて降り注がせた。

だが、その前に大量の剣が現れ何本か爆発しながらも、遠音の身

を守った。そして、遠音はゆっくりと立ち上がると、顔に手を当て、

「はははっ！ いいねえ、本気で私を殺そうとしていた。ははっ！  
それに、フラガラツハもまた変わったようだ。

君の式神がまさかフラガラツハの中に入っているとは、驚きだ。  
全く、私が使っていたフラガラツハとは遠くかけ離れてしまったよ」

「……………」

そう 神璽と由加が直したフラガラツハには新しい機能がつけられていた。先程二人に確認した所、どうやら

リンドウシステムと名前をつけたらしい。竜胆をフラガラツハの中へと吸収し、制御を全て任すことによる操作性の向上。

また、竜胆の奪った式神の郁人への付与をフラガラツハを介して一瞬で行えるようになったのだ。

（これで、一緒に戦えるねえっ！）

フラガラツハを持ってから確かに郁人は強くなった。逆に、竜胆はほとんど必要なくなってしまったのだ。

最近ではもはや足手まとい。遠音に自分を壊された時から竜胆はそう感じていた。自分は、式神なのだ。

郁人の力になりたい。郁人を守りたい。郁人を愛したい。それが竜胆の願い。神璽と由加はその力を与えてくれた。

「ああ、行くぞっ！」

「あいよあー！」

灼形態を解除し、通常形態に戻すと遠音へと再び迫る。遠音は、

ダーインスレイヴを手に取り、郁人を迎え撃つ。

一瞬の攻防、身体強化コンセプトのお陰で遠音の早さにもついていける。上段からの一撃を捌き、わき腹へ。

遠音はそれを左腕でガード。空いている足で郁人の腹を蹴り、勢いを利用して後方へと跳び、

「ダーインスレイヴ！」

ダーインスレイヴを腰溜めに構えて、突く。巨大な黒の刀身が郁人目掛けて襲い掛かるが、郁人は冷静だった。

「フラガラツハ・煉！」

フラガラツハが細身の剣へと変化し、ダーインスレイヴの黒の刃にぶつかると、その存在を吸収し始めた。

白いフラガラツハの反意思の光と黒のダーインスレイヴの光が螺旋状に渦を巻き、刀身に固定。

郁人はフラガラツハの柄の部分折り曲げ、銃剣形態にすると大地を思い切り踏みしめ、発射トリガーを引いた。

「っ まさか！」

螺旋の弾丸が凄まじい勢いで遠音に迫る。あまりの速度に遠音も焦った。だが、何とか回避し

一瞬動きを止めた瞬間

「コンセプト、”Thunder”セットアップ 対象、フラガラツハ・郁人」

「了解」

郁人の体とフラガラツハに一瞬雷光が迸ったかと思うと姿が消え、次の瞬間には遠音の眼前に存在していた。

フラガラツハの斬撃がダインスレイヴを襲い、柄に仕込まれたダインスレイヴの核が、フラガラツハに叩き潰された。

「くっ  
」

後ろへと跳躍する。　　が、郁人の体が再び雷光を発し、またも遠音の目の前に突然現れた。

力任せにフラガラツハを振り、その一撃を遠音は自身の腕で受け止めた。鈍い音が響き渡り、若干の亀裂が入る。

振りぬかれた一撃によりそのまま吹き飛ばされたが、超動を使い、何とか勢いを殺して停止。

「自らを雷にするとはね……恐れ入ったよ」

そう、郁人はコンセプト、”Thunder”を自身とフラガラツハに付与し、自らが雷になったのだ。普通、そんな事はできない。だが郁人の場合は違う。竜胆が全ての式神を制御し、同じ式神としてその全ての力を使い方を感じて

操作出来ているからこそその芸当だ。　　だが、遠音は笑った。これこそ、自分の最期に相応しい相手だ。それに、遠音自身にまだ隠し玉はある。

「さて、じゃあ私も本気を出そうかね。　　本当に、これが最期だ」

遠音の目つきが真剣な物に変わり、そして全ての感情が抜け落ちた。人形のような表情になった遠音の体から

黄色のコンセプトが現れ、その体全体を紋様が優しく包む。服の

一部が裂け、遠音の黒い手と足の部分が変化し、鮮やかな黄色の装飾が成され、若干フォームが刺々しくなると、変化が終わった。

「神威……ですか」

「ああ。紡が教えてくれてね。この中じゃ、私と他に数人が使えたのかな。じゃ　行くよ」

遠音が大地を蹴って加速した。速度はさほど変わっていない。再びフラガラツハを構えて迎撃体勢をとる。

郁人から一メートル程の距離で着地、その勢いを利用して遠音のハイキックが郁人の顔目掛けて走る。

それをフラフラガラツハで受け止めるが　重い。威力が先程とは段違いだ。手が衝撃で痺れるが、それを無視

して郁人はフラガラツハを横薙ぎに振った。紙一重で遠音は屈んでそれを避け、大地が爆発させるような勢いで地を蹴り、

その勢いのままアツパーを放つ。　　こんなのをくらったら、頭が吹き飛ぶ。

「っ……」

フラガラツハの刀身でギリギリ受け止め、その勢いのまま郁人と遠音は上昇。先に体勢を立て直したのは、遠音。

体を回転させ、回し蹴りを空中で放った。直撃はしなかったが、郁人は左腕を蹴られ、吹き飛ばされていく。

だがしかし、これで遠音と距離を取れた。一度体勢を立て直そうと、吹き飛ばされた先の半壊した民家の屋上に着陸。

遠音はあのまま一度着陸したはずだ。

「郁人！ くるよ！」

竜胆の警告の声が響く。そう、七海遠音はまだ空中に居た。不自然に空中に止まり、足の辺りの空間が何かおかしい。

何かが就職しているような気配。再び、遠音が足を振るう。何か  
が足から撃ち出された。 風だ。

凝縮された旋風が郁人目掛けて襲い掛かってくる。

「フラガラツハ・凶」

フラガラツハの刀身が消え、光の刃が顕現した。そのまま、数メートル伸び、上空で枝分かれすると、

凝縮された旋風から郁人を守る盾として機能し、直撃した風を霧散させた。そして、郁人は形態を解除し、

再び遠音の姿見据えようとするが 居ない。咄嗟に背後を向くも、居なかった。

「こつちだっ！」

上空からの声。何も考えずに横っ飛びで移動すると、先程まで郁人の居た場所に遠音の足がめり込んだ。

その勢いから遠音は止まらずに、郁人へと連続攻撃を仕掛けた。

上段中段下段。拳や蹴りと、バリエーションが多い。

冷静に一撃一撃を弾きながら、郁人はジツと遠音を見た。よくよく見ると、遠音の顔には披露が浮かんでいた。

息も荒い。何より、顔に血の気がなかった。

（まさかこの人 っ）

遠音の蹴りを力を込めて弾き飛ばし、郁人は左腕で遠音の腹部を

殴りつけた。だが、それと引き換えに痛みを

我慢したまま繰り出された遠音の拳が郁人の胸を打ち、その威力にアバラが何本か変な音を立てた。

そのまま後ろへ飛ばされるも、何とか堪え遠音を睨みつけると、

「やっぱり……」

遠音が血を口から吐き出していた。苦しそうに何度も咳き込み、更に吐血。だが、目だけは死んでいない。

ギリギリと戦う人間の目で、相変わらず郁人への警戒は続いていた。それに耐え切れなくなったのか、

郁人は悲痛な顔を作ると、感情のままに怒鳴った。

「何でだよ……何でそこまでするんだよっ！ アンタ、神威に体がついてこれてないじゃないか！」

「……それが、どうした。君に勝つ為なら、この命なんて惜しくない」

「何でっ！」

「……赦せるものか、この世界と自分自身を。この命は、私のものじゃない！ 希のものだ！」

希が居たから……今まで生きてきた！ 希がいなかったらもう、とつくに私は自殺でもしてるさ！

郁人、君ならわかるだろう。この世界で力がない事の絶望を。ただの、負け犬だ！ その中でも両手両足の

なくなつた私はもう人間扱いされなかった！ でも、彼女だけは希だけは言ってくれたんだ！

私と友達になりたいって！ 私の傍に居たいって！ だけど だ

けど私は　っ！」

更に咳き込み、血を吐きながら遠音は郁人へと走り出した。その目からは、涙が零れている。

一瞬油断した郁人は、反応が遅れ、遠音のタックルを正面からくらった。咄嗟に後ろへととび、威力を

殺すがそれでも衝撃は大きい。更に二回跳躍し、郁人はようやく止まると、

「何だよ、これ　」

周囲に突き刺さって居た全ての魔具が雨のように郁人一人目掛けて降り注いでいた。

このタイミングでは回避できない。雷化しても確立は低い。郁人は決意を固め、正面から魔具を迎え撃とうとする。

遠くには絶叫しながら、遠音が走ってくるのが見えた。見ているのすら辛い。やはり、遠音と自分は似ていると思った。

過去の自分がフラガラツ八を手に入れてなかったら、あんな風になっってしまったのかもしれない。

がむしゃらに。目的のために。大切な人のために。自分の身を犠牲にして　。

（郁人、大丈夫だよっ！）

（竜胆……）

（郁人ならきつとできるよっ！）

竜胆の一言が、郁人に力をくれる。当ても無い。可能性も低い。だが、それでもやれそうな気がするのだ。

ずっとそうだった。竜胆が応援してくれたから、何時でも一緒に居てくれたから、郁人はここまでこれた。

（だから、呼んでよ！ アタシとフラガラツハの名前を！ 信じてよ！ アタシとフラガラツハの力を ）

竜胆の言葉に郁人は目を見開き、やがて口の端を上げて笑うと、

「 ああ、疑った事なんかねえよ。」

そう言いフラガラツハを正面に構え、優しく撫でると、  
獰猛に笑い、その名を呼ぶ。愛しき人と、最高の相棒の名を

「さあ、行くぜっ フラガラツハ・竜胆っ！」

第50話…いねから一生守りあって生きていこう

(前書き)

間が空きます。

## 第50話：これから一生、守りあって生きていこう

「輝きってわかるかな？」

「わかるけど、何の輝き？ 宝石とかの話かい？」

「ううん。人の輝き。じつくりと人を見てるとね。偶に、輝きが見えるの。人の魂の輝きって言うのかな？」

「ああ、そんな表現方法は、昔から小説ではよくあるね」

「きつと、作者さんには、人の輝きが見えるのかもね。私にだって、見えるぐらいだし」

「君は特殊だ。だが、私にも言いたい事はわかる。現在進行形で、輝きが見えているからね」

「ええっ！？ 遠音ちゃん凄い！ どこに輝きが見えてるの？ 私と一緒に輝きかなあ？」

結局、希が光り輝いているとは言わなかった。世界で一番大切な友達。一生、付き合っていきたい。

生まれて初めてそう思った。妹や両親よりも、大事だと言える。希がああ頃の私の全てだった。

誰にでも優しく、幸せを振りまいてくれる。凜や千里もすぐに仲良くなつたと聞いたが、当たり前だと思う。

「はしゃぐなよ。お腹の中に子供が居るんだろ？」

「はい。あ、そういえばこの子女の子だって。戒君大喜びでさ、今からもう絶対嫁にはやらんって一人で怒ってた」

「光景を予想するに容易いね。絶対、親バカになるなアレは」

「そうだね。私がちゃんと止めてあげないと。戒君かなりバカだし、そこも好きだけど」

あの時の希の顔を今でも覚えている。若干不安そうなの、それでいて、不安を隠す笑顔。

「ねえ、遠音ちゃん」

「何かな？」

「もし、の話だけだよ」

「うん」

「この子が生まれて、私が居なくなっちゃったらさ。遠音ちゃん、この子を守ってくれる？」

自分は人間じゃないから何時までこのままで居れるかわからない。あの時、確かに希はそう言った。

私は希の事を怒った。そんな事を言うものじゃない。もしの話は好きじゃない。大丈夫、きっと上手く行くと。

そのまま暫く会話が途切れ、希はまだ不安げに顔を落としている。そして、見かねた私が、

「命に代えても、守るよ」

「え？」

「私は、お前の子を守ってやる。お前が、私を守ってくれたように。私の命ある限り、ずっとだ」

そう言つと、希は安心したように笑つた。その笑顔を一生守りたかつた。一緒に生きて、死にたかつた

「フラガラツハ・竜胆っ！」

フラガラツハの外装が全て弾けて飛んだ。残つたのは柄と、コアと、刀身のみ。

残りの外装は全て郁人の体へと付着し、鎧を形作っていく。白銀の鎧が郁人の全身を優しく包み、

フラガラツハのコアからあふれ出る反意思から郁人を守つた。これが、フラガラツハの追加された形態。

全てから郁人を守りたいという竜胆の願いを体現する形態。そして、ほぼ同時に無数の魔具は郁人へと襲い掛かる。

敢えて避ける事はしない。フラガラツハを握り締め、反意思を全開に。破壊概念を命じた反意思の光が、襲い掛かる

剣を一度振つただけでほぼ全てを破壊した。

「凄い……」

この形態の威力は凄まじい。余分な外装が無い分、細かい力は仕えないが、その恩恵としてこの威力。

溢れ出る反意思から竜胆が守ってくれている。あらゆる攻撃から、フラガラツハも守ってくれている。

牧島竜胆　自分の式神。子供の頃から一緒だった。家を追い出されても、何時も笑顔で励ましてくれた。

危険な仕事をするのは何時も竜胆だった。言葉にできない程の感謝がある。

「なあ、竜胆」

「なあに？ 郁人」

「この戦いが終わったら、結婚しよう。誰にも文句は言わせない。これから一生、守りあって生きていこう」

「うっわ、郁人さあ……」

「何だよ？」

「こういう時にそゆ事言うキャラって、例外なく皆死ぬんだよねえ」

「簡単だ。死ななければいい。俺が第一号になってやる！」

「……うんっ！」

竜胆の声に後押しされるようにして、郁人は駆け出した。残りの

魔具も、郁人目掛けて襲い掛かってくる。

不思議と怖くない。踊るようにして、郁人は魔具の大群を避け、フラガラツハを振るう。反意思の光が迸り、

光に飲み込まれるようにして魔具達は消滅していった。更にその反意思をフラガラツハは吸収。

一撃一撃ごとに威力が上がっていく。そして、遠音が見えた。消し飛ばされた魔具にはもう興味がないのか、据わった目で郁人の事を睨みつけていた。

「遠音さん。決着、つけましょう」

「ああ、決着だ」

遠音と郁人が同時に駆け出し、遠音の拳と、郁人のフラガラツハが拮抗。激しい光が迸る。

「郁人、良く味わえよ　これがっ！」

思い返すのは、子供の頃。全てを失った。両手足と共に、歩むべき未来を。

何度死のうと思ったかわからない。だが、両手足がない自分は、死ぬ事すらできなかった。

何もできない。手首を切ろうにも、手首が無い。刃物が持てない。屋上から飛び降りようか。だが、足がない。屋上まで一人で行く事ができない。

何も、できなかった。一人では、生きていけなかった。家族には、見捨てられた。

それでも、一人だけ居たのだ。この姿を見ても友達になりたいって。傍に居たいって言うてくれた人が。

握手ができなかった。彼女は、遠音を優しく抱きしめた。同情も

憐憫もなく、ただ親愛を込めて。

「私の」

希が死んだ。この世界から居なくなつた。世界が真つ暗になつたような感覚。虚無感に包まれた。

その頃には、新しい手足を手に入れていた。自由を手に入れていた。それでも、友達だつた。

だが、遠音には手足なんか要らなかつた。また、歩けなくなつても良かった。物に触れなくても良かった。

ただ、希に帰ってほしかった。でも、帰つてこない。遠音に残っていたのは、約束だけ。

約束だけが希と唯一繋がっていた。遠音は、十文字家の母親役として希との約束を果たす為だけに、

未希の世話を始めた。希の面影を残す、少し寂しがりやな子。そして、優しい子。

「最期の、一撃だつ！」

一年が過ぎた。二年が過ぎた。三年が過ぎた。何時の間にか、遠音は自分の心境の変化に気づいた。

心が、癒されていたのだ。希を失つた。だが、もうさほど悲しくない。心に蓋が何時の間にかできていた。

それを作つたのが、未希と戒。二人の優しさが遠音を救つと共に、遠音を不浄へと突き落とす。

戒に恋してしまった。戒の優しさが愛おしく、切ない。厭らしい。不浄だ。許されない。希への冒涇だ。

希は自分を救ってくれたのに。自分は希の思いを穢した。そんな自分が悲しくて、殺したい。

何時かに怯え、何時かを待ち続けた。そして今日、ようやくゴー

ルが見えてきた。

「そうかよ」

子供の頃は優秀だった。牧島で誰よりも可愛がって貰った。自分の人生は揺ぎ無いと勘違いしていた。

だが、竜胆を召喚してから、全てが変わった。皆が手のひらを返したように離れていく。初めての絶望。

ただ生きているだけ。楽しい事も、あの日から無くなった。ふて腐れ、竜胆を呪う毎日。

一人じゃなにもできない。牧島から捨てられては生きてはいけない。必死におべっかを使う毎日。

やがて、追い出された。二回目の絶望。だが、竜胆だけが手を差し伸べてくれた。一緒に、居たいと。

竜胆は何でもしてくれた。家事から雑務まで。お金だって竜胆が危険な事をして集めてくれた。

「でも、俺は」

転機が訪れた。千島蒼二や浅葱梨香と関わった事から、何かが変わった。竜胆が、力を得た。

世界が一変。牧島に復讐を果たすも、何かがしっくりこない。更なる力を求めて、十名家と接触。

戦闘に参加。だが、竜胆が居なければ無能なんだと再び実感。異世界に閉じ込められる。

竜胆が居ない自分の無力さを感じる。何もできない。殺されたくない、また会いたい。

そして、遠音と出会った。フラガラッハを貰った。そして、四人を犠牲にしてフラガラッハを手に入れた。

「絶対、アンタには屈しねえっ」

守る。それが生きがいになった。あの四人の意思を継いで、守り続ける。郁人の世界が広がった。

共存できる世界を目指して多忙な業務に襲われる日々。楽しかった。忙しいけど、楽しかった。

初心を忘れる事無く、郁人は生きた。全ての出会いに感謝を、なんて気取った事を言うわけじゃない。

ただ、一人じゃないという実感から人の為に生きようとしただけだ。全ての力に嫉妬していたあの頃と違って

「っっ！ そうか……」

フラガラツハの刀身に若干のヒビが入る。だがその前に、遠

音の拳が砕けて消えていった。

振り下ろしたフラガラツハをすぐに引き戻し、刺突できるように構え、郁人は見た

「私の負けだ。これで、全部終わる。私の不浄も全て、この世界から消えてなくなる」

そう言い、七海遠音が笑ったのを

郁人の見た事がない、心からの笑顔で

満ち足りた、満足そうな顔で

これで、全て終わると言わんばかりに

半壊した両腕をだらりと下げ、遠音は笑っている。だが、郁人は一つ不自然な点に気がついた。それに、どうしようもない怒りが湧く。勝手に攻撃してきて。勝手に諦めて、命を奪わされようとしている。勝郁人は怒りをそのまま声に出し

「ふざけんなよ」

フラガラツハに反意思を纏わせ、

「アンタ、泣いてるじゃんかよっ！笑ってても、涙こぼしてるじゃんかよっ！」

白銀の刃を作り上げると、

「認めるよっ！まだ、生きたいんだろっ！まだ、どこかで自分の人生に期待してんだろ」

正面から涙を零している遠音を見据え、

「アンタあの時言ったじゃんかよ！I・I・I B e O k 大丈夫、きつと上手く行くって！」

フラガラツハを遠音の胸に突きつけると、

「何でそれを信じられないんだよっ！こんな誰も救われねえ結末で、本当にいいのかよっ！」

反意思を風に変えて遠音の体を吹き飛ばした。周囲の瓦礫と共に、遠音は飛ばされ その奥。

黒い塔に瓦礫が炸裂し、ヒビが入りグラグラと揺れた。そして、ダメ押しとばかりに遠音の体が叩きつけられ、

塔がついに音を立てて崩れた。背後で状況を見守っていた郁人の部下達から歓声が響き渡り、

郁人もフラフラッハを掲げてそれに応える。だが、その表情もすくなく曇った。見た事のある戦艦が中に浮いている。

一之瀬凜の空船ではない。それよりもずっと前から戦っていた相手のものだ。

「教会……何で日本に」

塔の真つ二つになった部分から、遠音は空を見上げていた。

まだ、生きている。悔しい。

郁人の言葉が重く胸に押し掛かる。ずっと自分が目を背けてきた本心を言われてしまった。

だが、それを受け入れる資格があるのだろうか。と考える。それに、生きてはいるが、体が殆ど動かない。

この式神を召喚していなければ確実に死んでいた。これも、不浄だとまたも遠音は決め付ける。

「希……」

希と話したい。そんな資格はないとわかっているが、話したかった。洗いざらいぶちまけて、

希に嫌われて、どこか人気がない場所で死にたくなった。だが、怖い。希は遠音の全てだった。

希に嫌われて、果たしてどうなってしまっただろうか。ショック死でもするのだろうか。

考えても答えは出ない。首を動すと、戦況が見えた。四つ子のプラントは墜落している。負けたらしい。

空船の姿が見えない。凜も負けてしまったのだろうか。紡は見えない。丁度、死角になっている。

だが、一瞬捉えた。目が、認識した。そう

「未希……っ!？」

近くのビルの階段を十文字未希が登っていた。何故 疑問が湧く。家出から帰ってきたのだろうか。

あの情報屋はどうしたのだろうか。しかも未希の隣に居る少年は誰なのだろうか。

確認したい事が山ほどあった。それでも、体は動いてくれない。だが、遠音の心に何かが灯ったのは確か。

何かが起きようとしている。それでも、自分はここで止まっていればいいだろうか 決断の時は、近い。



第51話：愛しく、忌まわしき過去と決別する為に

（前書き）

恐ろしい事に、四ヶ月ぶり…！  
予定より多く、三話連続でいきます。

第51話：愛しく、忌まわしき過去と決別する為に

六道紡は戦いを始めてからずっと目を瞑っていた。隣に居る颯太も、特に話しかけてくる事は無い。

反意思を散布して周囲の状況を伺ってみるが、状況はかなりの劣勢。ほぼ全員が追い込まれている。

だが、紡の所にはまだ誰も来ていない。散布した反意思を介して状況を確認すると、適当に仕掛けてみた底なし沼

のトラップに神璽が物の見事に引っかかっていた。しかも、由加も一緒に巻き込んでいる。

「……………それはないだろ……………常識的に考えて……………」

ぎゃあぎゃああと喚きながらお互いに責任を擦り付け合う神璽と由加。颯太も千里眼で見れていたのか、

呆れたような顔をしている。と、バイクのエンジン音が聞こえた。何処かで聞いた事のある音だ。

颯太に尋ねてみようと思顔を向けると、珍しく焦りの感情が浮かんでいた。冷や汗も見える。

ポケットからハンカチを取り出して、拭いてやると、颯太がぼつりと言。

「……………舞香が来た」

「はいはい。妹なんだから嫌わないであげなよ」

「嫌いじゃない。愛してる。勿論、家族として。でもあいつ怖い。すぐ怒る。子供の頃からずっとそう」

（舞香も素直じゃないなあ……………）

紡の知っている五月舞香は重度のブラコンだ。颯太の前ではツンツンしているが、兄が他の女と会話

しているだけで相手を始末しようとする危険人物。数年前にあったとある事件の時も、何回も襲いかかってきた。

それも、本気で。理由は簡単なもの。颯太が紡に惚れているから。だから、殺す。どんな理屈だよと当時は思った程だ。

「三年ぐらい会ってないんだろ？ 偶には心温まる兄妹の会話でもしてあげなよ」

「うん……………」

そうこうしている内に、舞香の乗った赤いバイクが、颯太達の目の前に止まった。状況から察するに、

ユニオンと足並みを揃えるわけではないらしい。バイクから見て、章介と来たのだろうと予測した。

「やあやあ、舞香。久しぶりだね、そのバイクがあるって事は、章介も一緒かな？」

「話しかけないで下さい穢れます不浄です同じ空間に存在しているだけで不愉快です殺します。章介がよろしくと言っていましたが、ええ、多分あの世の貴女のお父様によるしくって事でいいわけです殺します」

機械的にそう言い、式神を発動させようとする舞香。相変わらずだ　と紡は笑みを漏らす。

それが余裕と感じ、舞香の怒りが更に上昇。だが、その前に颯太が一步前に出た。

「舞香。酷い事を言うの駄目。紡可哀想」

「お兄ちゃん。何言ってるの？　ちょっと話にならないからすっこんでてくれる？」

「駄目。紡に謝る！」

「殺した後で謝る。それでいいじゃない」

「紡、お前の義姉になる！」

(ああ……愚かで鈍感な颯太君……地雷を踏んだな……)

舞香の目に涙が一瞬浮かんだ。だが、それはすぐに消え去り、明確な殺意を持った目になった。

その怒りに呼応して式神が発動。同時に、大地がめくれ上がった。舞香の式神の効果だ。

【神ノ手】。それが、舞香の式神名。何本もの舞香だけに見える手の式神が一齐に、颯太と紡に襲いかかる。

無双バットを顕現し、それを迎え撃つ颯太。それでも、一度に飛

ばせるのは数本。

「舞香！ 何を怒ってる！」

「お兄ちゃんの……バアアアッカツ！」

怒声と同時に、更に手が増殖。あらゆる大きさの手が、颯太を無視して全て紡へと突っ込んでいく。

それに紡は不適な笑みを返すと、足の裏に反意思を集中させて、加速。無数の手を同じく反意思を付与した手で器用に弾くと、舞香のすぐ傍にまで接近した。その速さたるや、颯太でも驚く程であった。

「舞香。悪いが、これが今の私と君の差だよ」

「ッ！」

「それと、颯太君はウチにお婿に来たいみたいだ。だから、六道颯太になるって事だね」

「ふざけるなっ！ それは、掟破り！ 混血同士が子供を作っちゃ……！」

舞香の平手打ち。だが、紡にそれが当たるわけがなく逆に腕を取られて羽交い絞めにされた。

「我々は六道だ。掟なんかに従ってては研究なんかできない。それに、誰にも文句を言わせる

つもりも、私達の子を研究対象にさせる気もない。私と颯太君で、六道を変えるんだ！」

断固たる口調でそう言い、紡は手から反意思を放出すると、舞香を困って球形の反意思の檻を作成。

中で物凄い勢いで暴れまくる舞香。それでも、檻はひび割れる気配すら見えない。音すらも聞こえない。

颯太も状況を見守っていたが、やがてすごすごと紡の傍までやってくると、

「実家に送り返す。姉達に後任す」

「ふむ。妙案だね。では、無双バットで打ってやってくれたまえ。座標の修正は私が行うから」

「わかった」

話を終え、無双バットで檻を打ち、舞香は東に向かって飛んでいってしまった。

それを何処か安堵した目で見つめてから、紡は小さく、だがはっきりと聞こえる声で呟いた。

「さて、出てきなよ。亜矢子ちゃん」

近くにあつた瓦礫から斧が投げられ、同時に由加が飛び出した。

紡は笑い、颯太は無表情のまま

戦闘体勢に入った。紡は緋眼を発動させ、颯太も千里眼を発動し、油断無く由加へと迫る。

由加は低く腰を落として前進。まずは颯太の懐まで一瞬で移動。

颯太が無双バットを振ると共に、

触らないように避け、颯太の右足を蹴り上げてバランスを崩させる。背後からは、紡が拳に反意思を集中させ

迫ってきていた。

「っふ！」

だが、それよりも由加が放った拳の一撃の方が早かった。拳が紡の肩に命中し、拳に溜めていた反意思を解き放つ。

爆発。紡が痛み顔に顔を顰め、バックステップで後退。その頃既に、由加は紡の方を見ては居なかった。

体勢を崩した颯太が、そのままもう一度無双バットを振ったのだ。狙われているの膝の部分。バックステップでかわし、

足元に領域を顕現。領域から飛び出した闇色の腕が颯太の足を掴み、放り投げたが、颯太は受身をとって事なきを得た。

「流石、亜矢子ちゃんだ。純粹な格闘戦でここまで上をいかれるなんてね」

「同意。由加は強すぎる。でも、俺達負けない」

同時に駆け出す紡と颯太。由加も再び腰を落として構え、二人を迎え撃とうとする。まずは、颯太から。

無双バットを振りかぶった所で、紡が違和感に気づいた。そうだ。何故、由加一人なのかと。

「颯太く　っ！」

「っーちゃん。珍しく考えなかったね」

足元から異質な振動。戦闘によるものとは明らかに違った。颯太が異変に気づいた時には、もう既に遅かった。

地中から闇色の光が溢れ出し、颯太を巻き込んで上空へと消えて

いった。寸前で半身だけ避けたが、颯太の体からは

煙が噴き出しており、痛みを肩を抑えて耐えていた。そして、穴からひよっこり顔をだしたのは、榛名神璽その人。

「ようよう。良い空気になってるみてえじゃんかよ！」

「勇一君……」

「どうよ、つーちゃん。君が仕掛けた落とし穴からここまで穴を掘って進んできたんだぜ！」

「予想もつかなかったよ。畏にかかったふりをして、そこから私と千里眼の索敵範囲外である

地中から強力な一撃。君の私生活の態度からも、今までの戦闘スタイルからも外れた、最良の一手だ」

「いやまあ、落とし穴はガチで気づかなかったんだけどね……」

ヘラヘラと笑った後、神璽は急に表情を変えた。滅多にみれない真面目な顔になり、仲間の由加も驚いた程だ。

「じゃ、戦おつか。俺もユニオンの幹部だからさ。俺達の王が、この戦いを止めたがつている。

戦う理由と命を懸ける理由はそれで十分。だから、俺達の本気の技でつーちゃんを倒すよ」

紡は外面はヘラヘラ笑っているが、内心冷や汗をかいていた。あの榛名勇一が本気になっている。

何時もヘラヘラしているムードメーカーの彼が、本気を出す。それに敗えて、紡は笑顔で応えた。

「恨みっこなしだよ。私には、遠音ちゃん達のような、希ちゃんへの深すぎる思いはない。友達だったけどね。」

「ただ、未希は大事な生徒なんだ。とても優秀で、優しい子なんだ。私は、彼女の答えを見届けねばならないんだよ。」

「それが、あの子に色々余計な知識を与えてしまった、私自身としても、教師という立場からの責任でもあるからね。」

「フーちゃん。じゃあ、行くよ。」

「来たまえ！」

神璽は集中すると、由加に手を差し出した。それだけで、由加には神璽が何がしたいのかがよくわかった。

手を繋ぎ、自身の体にある結晶と相手の体にあるコアを感覚器官を通して認識させ、それを共有させる。

半分に分かれたれていた九尾と九尾の意思を反意思と共に外に巡らし、自分達の体をすっぽりと包み込ませた。

「ハハハ……流石に、これには油断が出来ないな。」

紡と颯太に目の前に現れたのは、三頭を持つ銀色の九尾の狐だった。九尾は、口を開けて一度大きく咆哮した。

「大気が揺れ、それだけで統率されて由加と神璽の部下と戦っていた悪鬼達が怯んでしまう程に。」

流石に、これは油断できない。紡は領域を広げて颯太を乗せると、空中へと飛翔。地中から幾つもの蛇の砲門を

顕現させ、蛇砲を九尾に向けて放ったが、更にもう一度の咆哮で全て捻じ曲げられてあらぬ方向へと飛んでいってしまう。

「っ！」

「紡、防御俺。攻撃お前！」

「了解した！」

颯太の体から緑色のコンセプトが発せられ、無双バットへと纏わりついた。神威である。

無双バット本体が巨大化し、無数のトゲが取り付けられただけで、変化は終わったが、問題はその威力だった。

トゲの一本一本。無双バット本体の大きさは次々に変わり、九尾の放った狐砲に触れると、その全てを弾き返した。

九尾はすぐさまその巨体からは想像できない速さで移動すると、狐砲を難なく回避。だが、追撃として狐砲は撃たなくなった。

（颯太……っ！）

（流石に、強い）

そうこうしている内に、紡と颯太は目と鼻の先まで来ていた。そして、

「バジリスク、解放」

紡の全身を暗黒の反意思が包み、蛇の形を作った。蛇は三又に別れ、三つの頭部へと成ると、九尾へと噛み付く。

九尾の絶叫。蛇は絡みつき、九尾の体を完全に押さえ込むと自身の体と共に、九尾も元の反意思化させていき、

球形を形作っていく。堪らず神璽と由加と九尾は合体を解除して、反意思を全て吸い込んで元に戻した。

「っ！」

バジリスクの球体の中から無数の蛇の頭が飛び出し、蛇砲を神璽と由加目掛けて一斉発射。

空中を飛んで避けるも、あまりにも数が多すぎた。そして、こちらから攻撃しようにも、球体の上にはバットを構えた颯太。

「神璽」

「ああ、防御は任せな」

神璽と由加は足に反意思を溜めて加速すると、バジリスクの球形を指して飛翔。無数の蛇砲が襲うが、

前面に反意思の膜を張った神璽により、上手くいなされていった。流石に不味いと思ったのか、颯太が前に出た。

それでも構わない。神璽と由加はそのまま特攻。紡がバジリスクの顕現を解除し、通常形態に戻った。

だが、顔色は芳しくない。遠目に見ても、疲弊している事は明らかだった。

「つーちゃん！」

「……同情するなよ。今は、勝負の時間だ」

紡の目は死んでいない。言葉をかけた由加は顔を引き締め、頭の中に居た疲労している紡の存在を消した。

相手は、万全。そう考えるべきだ。紡は荒く呼吸して、無理矢理体を引き締める。だが、それでも落ち着かない。

今にも崩れ落ちそうだ。そんな紡の背中に、優しく颯太は手を当

てた。

「紡、勝ちたいんだな？」

「お見通しか」

「俺、本気でやる。殺すつもりで。お前を勝たせてやる。この命かけて」

「颯太君。一つ間違っているな」

「？」

紡は颯太の腕を握り、

「私は、君と二人である二人に勝ちたいんだ。愛しく、忌まわしき過去と決別する為に！」

そう言うと颯太は感動に打ち震え、間近に迫っていた神璽と由加に迫った。お互いが、射程距離に入った。

紡は最大限の反意思を練り上げ、球体を作るとそれを颯太目掛けてトスした。それを、颯太は無双バットで打つ。

全力で打たれた球を神璽が正面から受け止める。その手には、消滅概念を命じた反意思。濃度の濃い破壊の反意思を消滅させ、自分達の総ての反意思をその上から由加がかぶせ、制御下におく。

「つ！！！！」

絶叫を上げ、紡と颯太が神璽へと迫った。だが、それよりも早く

制御下においた反意思を二人は望む形へと変えた。

それは、一振りの巨大な大剣。その柄を二人で持ち、

「つーちゃん」

「悪いけど、私達の勝ち！」

振り下ろされる大剣。紡は逃げなかった。まだ、二人で勝つ事を諦めてはいなかった。

颯太が前に躍り出て、神威状態の無双バットで大剣を弾き返そうとする。そして、二つの大きな力が拮抗。

負けたのは、無双バットの方だった。式神が破壊され、気絶する瞬間颯太は無理矢理神璽と由加から

大剣をひったくり、あらぬ方向へと投げ捨てた。そして、意識を失い落下していくのを紡の領域が拾う。

「流石だ。愛してる！」

紡が距離を詰め、神璽と接近。神璽の右腕に残り少しの反意思が集中したのを感じた紡は、

その右腕に自分の拳を当て、反意思を流し込んだ。更に溜め込んだ反意思の波長を狂わせ、暴走させてやる。

神璽の右腕から鮮血が噴き出し、更に爆発してゆっくりと神璽は地上へと落下していった。

後に残ったのは、紡と由加だけだった。お互い、浮いている力すらも弱ってきているのか段々と下降している。

「最後に残ったのは、私と君か」

「うん。決着つけよ」

「ああ」

由加が拳を握って固め、振りかぶる。紡も残りの反意思を総て集中させた。

お互い、下降したまま動かない。機を伺っている。攻撃力で劣る紡は、笑顔を見せて由加へと話しかけた。

「亜矢子ちゃん。過去は、果たして変えてはいけないものなのかな？」

「私は、認めない。この世界は、皆で積み上げてきた過去によって成り立っている。誰か一人、過去を変えたら」

もう、私の今大好きなこの世界は、違う世界になっちゃう。皆辛い。皆悲しい。だけど、それが世界なの。

自分ひとりが悲しいからって、過去を変えるのは、他の人の過去を否定すると一緒。だから、私は認めない！」

「成る程。……正論だっ！」

紡が加速して拳を振りかぶった。遅れて由加も拳を振るう。由加と目が合った。その瞳は揺るがない。

筋力の問題ではなかった。反意思の問題ではなかった。先に届いた拳は、由加の拳だった。

一瞬の躊躇。それが紡の敗因となってしまったのだ。痛みを意識が薄れ、落下していく前に、紡は呟く。

「まさか、私と同じ気持ちとはね……どこまで私達は似てるんだろうね……」

第52話・貴女を思い続けて（前書き）

2

## 第52話：貴女を思い続けて

相も変わらず戦闘が続く十文字特区。

だが、風向きが変わってきた。外部からの侵入者が確認され、更にプラントが陥落した。

蒼二はその状況を部下から次々と飛んでくる報告と照らし合わせながら、次の手を模索していた。

雨龍と戦うのに熱中した所為か、本陣からは大きく離れてしまった。頼みの綱の竜胆は交戦中との事。

十文字本家はもう目と鼻の先だ。どうにかして、あの壁を破ればほぼ詰みである。

だが、その手段が思い浮かばない。自分が全力を出し切っても、あの壁は破れそうにない。

「お兄ちゃん。お兄ちゃん。聞こえる？」

「遥緋か。ああ、聞こえている」

神璽が作ったユニオンの重役のみに支給される無線から遥緋の声が聞こえた。

「お父さんは何とか平気だったよ。海山さんが応急処置をして、守ってくれてたから」

「海山……？ ああ、海山天音か。確か、四期前に入ったヤツだっ

たな。戦闘能力は幹部クラスだが、人間関係に非常に問題があるって、誰かの報告書で読んだ気がするな」

「そうかなあ？ まあ、何か昔の由加ちゃん見たいな子だったけどね。とりあえず、私はお父さん連れて一度本陣に戻ってる最中。莉王さん達ともそろそろ合流地点。空船は完全に無効化して、今は塔を倒してるんだけど、莉王さん達も結構ダメージが酷くてね。指揮は杜若さんが引き継いでくれてます」

「了解。杜若からは既に報告を受けた。残りは、郁人と神璽達の所か。踏ん張ってもらうしかないな。本陣の指揮は運命の全権を渡してあるから、運命の指揮下に入ってくれ。俺も応急処置が済んだらまた連絡する」

「了解。気をつけてね」

「ああ、大丈夫だ」

遥緋との通信が切れた。再び回線からは部下の報告が流れてくる。それに逐一返事をしながら

蒼二はポケットから包帯と傷薬を取り出し、雨龍との戦闘で貰った負傷の応急処置をしていく。

周囲に敵の気配はない。だが、相変わらず戦闘の爆砕音が響き渡る。

「覚悟してたけどな……だが、ここまでの大規模は、やっぱりキツい」

教会や賞金稼ぎとは幾つか小競り合いをしてきたが、それはまだ小競り合いで済んでいた。

ここまで徹底的な対立は、ユニオン発足以来初であろう。報告によると、既に重傷者は48名。

死者は7名。これは、悪鬼にやられたものではないらしい。十字、もしくは謎の外部からの侵入者。

「だが……」

報告によると、十字側の悪鬼は大した攻撃はしてこないらしい。兎に角、守りに特化した行動をとる。

また、数件の報告によると、戦闘不能状態に持ち込まれた隊員が、悪鬼に殺されるのを覚悟していた所、

悪鬼は隊員を無視、もしくは仲間の方へとその身を投げられたという。

「その報告から判断するに、やはり外部の線が濃厚だな」

「正解つすね。流石、千島蒼二さんだ」

そう独り言を呟くと、背後から声がかかった。油断していたとはいえ、失態である。

音もなく蒼二は立ち上がり、包帯を締めながら、修羅紅雪を顕現させると、声をかけた相手を見据えた。

赤髪の上にサングラスを乗せた少年。何人かが、報告してきた少年だ。全員が言った、危険人物だと。

「君が、太宰巡君かな？」

「へえ、流石ユニオン代表だ。六道のおねーさんぐらいかな？ 俺

を最初から知ってたのは」

「太宰巡。教会に世界最高額の賞金をかけられた、テロリスト。一名の仲間と共に、各支部を破壊。ここまではまあ、少し調べればわかる。問題は、その後。太宰って名前は、俺も少し前まで知らなかったんだがよ。とある縁から偶々知ってな。驚いたぜ。あの五行を統べる家があったとはな……。火渡、水無瀬、木ノ本、土師、金剛。その上に立つのが、太宰。その本家が、あの天道なんだよな？」

「……詳しいっすね。ま、そんな事はどうでもいいっすよ。天道は滅び、太宰ももう俺だけっすしね」

「そうか。で、俺に何の用事なんだ？」

「ハハハ。鋭い事で。いやね 取引をしようかなーってね」

「取引？」

「ええ。この戦いが終わったら、俺をユニオンで雇ってください。無論、高給取りじゃなくていいっす。

ヒラからのスタートでいいんで。住居は社員寮以外の場所が良いな。俺以外にもう一人住むんで」

「……何が目的だ？」

「それは雇ってからの楽しみ。話せる事は全て話すつもりっすけどね。で、俺を雇うと何がいいのか

っつーと。まず、俺は強い。本気でやりゃ、アンタにも負ける気は

ありません。次に、俺さつき弱点発見

したんすよねー。あの十文字本家を守ってる壁の弱点をね。さ、どうします？ てゆーか雇ってくださいよー」

「……俺の一存じゃ決めかねるな。だが、他の幹部に紹介はしてやる。だから、壁の弱点だけ要求する」

「ちょーっと、寂しいなあ。ま、いいんですけどね。ちょっと考えりや、わかる事です。いいですか？

あの表面的な防御力に惑わされないで下さい。あくまで、壁のあるトコしか守れないんすから。

だったら、壁がない場所から侵入すりゃいいって話つすよ。ここまで言えば、わかるつすよね？ 地中つす」

「そうか……っ！ あの壁は、ドーム型か。よし、ありがとう。太宰巡。約束は守る」

「お願いしますよー」

ひらひらと手を振る巡から視線を外し、蒼二は十文字本家目掛けて走り出した。

その間にも、部下に指示を飛ばしていく。そろそろ、戦闘が始まってかなりの時間が経過していた。

もはや、増援を待っている暇はない

「俺だ。十文字本家への侵入方法を見つけた。地中からだ。時間がないので、先行する」

「う……っ」

「未希ちゃん、大丈夫？」

相手の攻撃のショックで耳が鳴っている。何とかそれを堪えながら、未希は立ち上がった。

流石というべきか、光希は怪我一つない。周囲の警戒をしながら、気を失った未希の容態も見ていたのだ。

「さっきのは、未希ちゃんの式神？」

「うん。私の式神は、瞬間移動する式神だから。条件は、認識できている空間のみだけどね」

「凄いなあ……」

「光希の方が凄いわよ。私より年下なのに、ずっと場慣れしてるし、この状況にも動じてない」

「お父さん達によくいじめられてるからねえ」

快活に笑う光希だが、未希には信じがたい事だった。普通の子な

ら、状況が理解できずに泣いている。

ある程度訓練を受けた末希だって辛いほどなのだ。それでも、光希は笑顔を崩さない。ヘラヘラしている

ように見えて、相当芯の強い子だという事がわかる。

「それでも、凄いんだよ……。勉強ができるよりも、ずっと偉大よ」

「何か、照れるね」

そう言うと光希は頭を掻いて笑った。そんな光希を見て、不思議と末希の心が決まった。

この戦いには関係ないのに。光希は何も悪くないのに。それなのに、光希は恐れずに此処に居る。

異常だとは思うが、今の末希にはそれがとても頼もしい。きっと、一人ではここまでこれなかった。だから

「光希。私、決めたよ。皆に私の今の思いを伝える。そして、光希のお兄ちゃん達にもちゃんと謝る」

「うん。きっと、許してくれるよ。お兄ちゃん。何だかんだで優しいし」

末希の心が固まった。全部が全部自分が悪いとは思っていない。だが、原因は自分にある。

力が湧いてきた。末希は前方にあつたまだそこまで戦闘で壊されていないビルを見つめ、作戦を立てていく。

出来る事は魔具の力。それと、武神による瞬間移動。だが、これは先程全力で脱出した為に、使うと

体への負担が大きい。何かあるかわからないので、体力を残しておくに越したことはないだろう。

心を落ち着けて計算に計算を重ね、魔具の理論も頭の中で構成。周囲の反意思の流布率も悪くはない。

「うん。決まった」

「そう。じゃあ行こうか。僕もついてくよ」

当たり前のように光希はそう言い、笑った。

「……何で、光希は私にそこまで協力してくれるの？ 友達だけださ。でも、ここは怖い場所。」

光希が逃げ出しても、私は光希の事を嫌ったりしない。むしろ、逃げてくれた方が……心が楽だった」

少し厳しめの言葉を未希は光希に投げかけた。それでも、光希は特に表情を変えなかった。

だが、目には断固たる決意の光。もう、仮初の言葉を投げかけても意味がないようだった。

「お父さんが言った。何時か、僕を頼ってくる女の子が居る筈だつて。お兄ちゃんもそうだったつて。」

だからね。その時は笑って協力してやれつて。最後の最後までその子の為に頑張れつて。」

それが、僕が緋眼を持っている理由だつて。だから、未希ちゃん。僕を頼つて 本気で、力になるから」

光希の言葉が胸に染み渡る。不覚にも、嬉しくて少し泣きそうになつてしまう未希。

目を一度擦り、光希の手を一度握り、

「光希。お願い、私一人じゃ、多分無理。光希に助けて欲しい」  
そう言うと、光希は満足したように緋眼を発動させた。未希の手を引いて、ビルの中へと駆け出す。  
エレベーターは幸い生きていたようだった。大事をとって、十階まででエレベーターを止めた。  
そして、そこからは階段を使って屋上を二人は目指した。未希がその中でも驚いたのは、光希の子供とは思えない程の運動能力と、危機察知能力。途中、何回か瓦礫が落ちてきたが、光希はその全てに冷静に、そして力強く対処していた。かなりの鍛錬を積んでいる事がわかった。

「未希ちゃん。大丈夫？ 一回休む？」

しかも、未希の体調まで気遣う余裕もある。未希はそれに首を振り、拒んだ。

皆が辛いのに、自分だけ休んでいるわけにはいかないからだ。愛すべき家族達は今、自分の為に戦っているのだ。悲鳴を上げる体に鞭を打ち、そしてようやく屋上へとたどり着いた。

屋上からはよく戦場が見えた。悪鬼と戦う人間達。その中で、未希は幾つか見知った式神を見た。

半壊した黒龍。今は数人の集団に取り囲まれていた。破碎された巨大な空船も遠くの方で燃えている。

「雨龍君……凜ちゃん……ごめんね……」

涙を零したのは一瞬。次の瞬間には、感情を制御し、魔具の準備を始めた。未希の手が光り、次々と

機械が生まれていく。光希はそれを未希に言われるがままに設置し、四台程それを設置すると、

未希は空に手をかざし、一度両手を合わせ、その後に大きく手を広げた。

「お願い……っ！」

未希の手から光が溢れ出し、その光はすぐに魔具製シャボン玉となり十文字特区に、ふわふわと流れていく。

溢れ出した大量のシャボン玉がビルはおろか、十文字特区広域をすぐに包み込んでしまった。

一瞬。戦闘音が止む。このシャボン玉何だろうという疑問が、十文字特区内全員に湧き、本当に一瞬、全ての音が止まった。

そして、未希は息を思い切り吸い込み、心からの気持ちを口にした。

「皆、戦うのを止めてくださいっ！ 私は、十文字未希です！ ユニオンの人達も、お父さん達も、もう戦うのを止めてください！ ユニオンの皆さん！ 今回の事件は……全部、私が悪いんです！ 私が、お母さんに会いたいです！ ……会いに行くって勝手に出てっちゃったから！ こんな事になっちゃったんです！」

未希の声。未希の姿。その全てがシャボン玉を通して、十文字特区内に居る全ての人間に届いた。

ボロボロの姿で。涙声で叫ぶ少女。ユニオンの動きが自然と止まり、困惑しているのを格隊長達が止めていく。

変化があったのは、十文字派だった。墜落した竜から這い出た、千春、千夏、千秋、千冬は、

「姫だ……」

「姫が帰ってきた……」

「ああ、帰ってきた」

「でも、何処に居るのー!？」

魔具の力の供給源への逆探知で未希の姿を探そうとするが、ここまで数が多いと中々見つからない。

ユニオンに鉢合わせしないように、慎重に四人で未希の下へと当てもなく走り続けていく。

「お父さん。遠音ちゃん。凜ちゃん。千里ちゃん。万里ちゃん。雨龍君に春ちゃん達、紡先生もごめんなさいっ！」

全部、私の所為だよねっ！私がお母さんに会いたいなんて言うから……。私、わかったの！

一人で旅に出て。色々な人と会って、色々新しいことを考えて。私が出ろつとした事がどんな事かって事がわかったの！」

蒼二の攻撃の後に、ユニオンから身を隠すため黒龍を再召喚し、中に隠れていた雨龍はその声を聞いていた。

あの未希が、泣きながら、ポロポロになりながら、自分のしてきた事を反省している。それが、辛かった。

未希を泣かせている原因は、自分達がした事。雨龍を笑わせてくれた人の娘を泣かしたのだ。

「終われねえな……終われねえよ！なあ、黒龍」

「うむ。……行くのか？ 雨龍」

「勿論だ！」

兩龍の声と共に、黒龍が再び立ち上がった。周囲に警戒していたユニオンもこの状況では攻撃出来なかった

らしく、そのまま空へと飛翔。万里と千里を逃がしたルート目掛けて、黒龍を高速飛行させていくと、

黒龍の背面に衝撃。原因が何なのかはすぐにわかった。

「兩龍。あの子を探しなさい。すぐに行くわよ」

「ええっ！ 姫ちゃんの所に急ぎましょう」

「万里！？ 千里！？ …… ああ、了解。飛ばすぞオ！」

黒龍の背中い万里と千里が飛び乗っていた。ぐんぐんと上昇し、上空から全てを見渡そうという魂胆だ。

そして、一度言葉を切っていた末希の言葉が再び紡ぎだされていく。

「私がしようとしてた事は、命への冒険だって！ 間違った方法でやった結果に、意味はないんだって！」

そっだよね。誰かを泣かして幸せになっても、それは幸せとは言えないよねっ！ 私だけがお母さんを失ってる

わけじゃないよね！ お母さんは、死んじゃった！ もう、この世に居ない！ でも、まだお母さんは世界に生きてるって！

私や皆が、お母さんを思い続ける限り、お母さんはこの世界に生き続けるんだって！ だからさ もう、いいの。

ユニオンの皆さんに悪い事しちゃったから……謝ろう！ 皆で謝って、また皆で一緒に暮らそう！ お母さんを思い続けて！」

そのまま未希の泣き声が響き渡った。墜落した空船に座って頂垂れていた凜は、その言葉に涙を流した。

未希の成長が嬉しかった。未希が答えを出した事が嬉しかった。未希が、希への答えを出した。

だから　と、凜は立ち上がる。今度は、凜が自分自身の言葉で未希と希に向き合う時が来たのだ。

「行くのかい？」

少し離れた場所で時雨にぎゅーっと抱きついている律が凜にそう問う。自分が今鬼憑状態にある事を

忘れていた律にぎゅーっとされている時雨は、半分命の火が消えかけている。

「ええ。今回はご迷惑をおかけしました。また、次の機会にお会いしましょう」

凜は笑顔でそう言うと、先程までの休憩で少し回復した最後の力を振り絞って、空船を起動させた。

暫く進んでいると、疲弊し、へたり込んでいる紡と颯太を見つけた。近くには、榛名神璽と棗由加もいる。

「貴方達はどうしますの？」

空船の外部スピーカーで呼びかけた。紡と颯太はすぐに立ち上がり、

「生徒が泣いているんだ。力になるのが教師の務めだろう」

「同意」

「じゃ、”神璽”君。”由加”ちゃん。我々は行かせて貰うよ。最後のケジメだ、お幸せに」

紡が颯太の手を引いて飛翔を開始。空船の甲板に着陸し、紡は周囲の反意思に働きかけ、

未希の存在の逆探知を始めた。四つ子よりも反意思の制御が上手な紡は、四つ子の探索した範囲を

全て認識、除外し、すぐに未希の場所を特定した。ここより少し離れたビルの屋上。探索が終了すると、

すぐに紡は体内の反意思を操作し、思念を十文字派全員へと送った。これで、全員が未希の場所を認識した。

「む……」

それが終わると、嫌な気配を紡は感じた。式神でもない、コンセプトでもない。知らない気配が増大。

シャボン玉が次々と壊されていく。その原因はすぐにわかった。反対側から白い炎が溢れ、破壊しているのだ。

その威力は絶大。戒の森羅万象並みに強力な力だった。

「紡！」

「ああ、わかってる！ 何かが居る！ 全員気をつけてくれっ！」

白い炎は一度大きく膨れ上がると爆砕した。その衝撃で、十文字特区を覆っていた無数のシャボン玉は全て消えた。

晴れた視界に広がったのは、数十隻の空船と似た戦艦。地上にも、戦車が存在している。どれもが見た事ないもの。

だが、船についている旗には見覚えがあった。一つは「鎬木」と書かれた旗。もう一つは、

「教会……っ！」

海外の最大勢力の一個中隊のシンボルが描かれた旗。白で覆われた海外最悪の悪鬼狩り専門組織がそこに居た。

すると、一隻の船が前に出てきた。甲板には巨漢の男が見える。

鎬木の現在最大権力者、桐ヶ谷巖。

桐ヶ谷は、不適な笑みでマイクを取ると、

「十名家十文字派に告ぐ。これは、国からの正式な依頼だ。この国の調和を乱し、裏の不文律を私事で破った

十文字派の処刑を、国は我等鎬木と教会アジア支部に依頼した。ユニオンはすぐに、戦線を退いてもらおうか。

もう一度言う。これは、国からの正式な依頼である」

第53話・その約束だけは（前書き）

3

### 第53話：その約束だけは

「十名家十文字派とユニオンに告ぐ。これは、国からの正式な依頼だ。この国の調和を乱し、裏の不文律を私事で破った十文字派の処刑を、国は我等鎚木と教会アジア支部に依頼した。ユニオンは今すぐに、戦線を退いてもらおうか。もう一度言う。これは、国からの正式な依頼である。拒めば、ユニオンも反乱分子と見なす！」

鎚木の声明を聞いて、由加は心の中で舌打ちした。国は、十名家の十文字派を切り捨てたのだ。

しかも、国は自分達ユニオンに一言も話さず、独断で鎚木と教会と手を組んだ。下手すれば、この策略の目的は

ユニオン諸共潰すつもりなのかもしれない。冷静に思考を加速させていく。この状態で手を出せば、ユニオンは崩壊する。

パトロンは十名家の八神派が多いが、土地や権利などの土台となる事項は、国の協力がなければやっていけない。

「……打つ手無し」

「みただいな。とりあえず、現状は見守るしかねえか」

神璽が感情を隠した声でそう言い放つ。悔しいのは神璽も同じ。だが、組織という体面上何もできない。

とりあえず、指揮は全権を神璽に委任し、各小隊との連携をとってもらうことにした。

その間も由加は考える。何か、戦闘行為に参加できる大義名分は無いのかと。否。何もない。

自分達が今まで戦ってきてしまった事がその理由だ。ユニオンは降ろされ、指揮系統があちらに委譲された。

「由加さん!」

稲光と共に、郁人が突然目の前に現れた。相当激しい戦闘だったのか、傷だらけのボロボロの姿である。

そして、空に浮かぶ巨大な戦艦を睨む。どうやら気持ちは同じなようだった。すると、運命も瓦礫を跳び越えて

やってきた。これで、幹部が四人。蒼二は先程十字字本家に突撃してしまった為、四人でやるしかない。

「歯がゆいね。国に連絡取ったけど、完全無視。どうやら、本気で十字字派を潰すみたいだね」

「うん。気持ちはわかるけどね。国にとって最大の脅威だったんだから。ここで、十字字派が滅べば

再び主権は国に戻るし。私達は、出資者の関係上、今は国に従うしかないんだから」

「……海外から出資者を募ろうにも、大半は教会の勢力ですしね。安価で雇える賞金稼ぎに、

これを期に完全に日本進出を目論む教会か。俺達にとっても、正念場ですね」

どうするべきか。答えはでない。ユニオンの隊員達もきつと不安

に思っているのだろう。

幹部がすっかりしなくてはならない。しかも、長が不在なのだ。暫く状況を静観していると、鎬木が動き出した。

進軍し、そして一際大きな戦艦が主砲を取り出した。その照準の先は

「まさかあいつ等　！」

「え………？」

未希が思いを伝え終わると、一瞬で魔具が全て破壊された。その後から出てきたのは、知らない勢力。

先程攻撃してきた戦艦と似ている。更にその後の相手方の発言。十字派の処刑。心が崩れた。

へたり込み、呆然と未希は戦艦を見つめる。処刑。処刑。処刑。頭の中にはその単語しか浮かばない。

光希が何かを叫んでいたが、何も聞こえない。砲身が現れ、こちらを向いた。逃げなきゃ

「み、光希………」

体が動いた。光希だけでも逃がさなきゃいけない。式神を発動させようとした。頭が痛い。

魔具を大量に作った所為で、体力、精神力共に限界を迎えてしま

った。体が痙攣し、倒れてしまう。

最後の力を振り絞って光希に手を伸ばす。光があふれ出した。発射されたのだろう。

「ごめ……」

涙で滲む視界の端に、女性が現れた。見たことがある。大切な人。母と慕った人。

七海遠音が、ボロボロの体で発射された光目掛けて走っていた。未希は、無意識の内に、

「 助けてっ！ お母さん！」

と叫んだ。遠音は母ではない。本人からも、母と呼ばないでくれと子供の頃に言われた。

それでも、未希にとって遠音は母親みたいなものだった。参観日には、いつも来てくれた。

悩みがあると、すぐに相談に乗ってくれた。寝る前には本を読んでもらったり、何時も傍に居てくれた。

どんなに嫌な事があった時も味方として助けてくれた。そして、今回も

「 ツ！！！！！！」

絶叫。破壊の光線を正面から遠音は受け止める。例えこの身が滅びようとも、未希だけは守る。

約束したからだ。命ある限り、未希を守ると。郁人と戦って、満身創痍だ。それでも、未希の命を守りたい。

光が収束していく。後に残ったのは、煙を上げる遠音。膝をつき、前のめりに倒れそうなのを必死に堪える。

「未……希……？ 大丈夫……かな？」

両腕の手首辺りが消滅している。体にかかった負担は常人ならとつづくに死んでいる。

それでも、遠音は笑った。未希が心配しないように。ただずっと虚勢を張り続けているのだ。

「遠音ちゃん……！」

未希は最後の力を振り絞って、遠音に抱きついた。遠音も震える手で、未希を抱きしめ返す。

言葉はなかった。ただ、お互いが生きている事を確認している。それだけで十分だった。

攻撃は終わったわけではない。教会・鎬木の戦艦から次々と人間が現れて、このビルに迫ってきている。

他の戦艦も移動を開始し、ビル全体を囲うような陣形をとる。

「っ……。未希、逃げるんだ」

「嫌だよ！ 私の所為なんだよ！ だったら私が最後まで」

「駄目だよ。未希。君が死んだら、私は君のお母さんに顔向けが来ない。

約束したんだ。命ある限り、君を守ると。その約束だけは、守らなくちゃ……」

「でも遠音ちゃん！ 死んじゃいそうじゃん！ 嫌だよ 遠音ちゃん  
死んじやったら私！」

「いいんだ。私は、此処で終わる。不浄だから。今日、終わらなきゃいけないから……」

遠音は半分存在していない右手をかざし、握りつぶす。すると、空を飛んでこちらに迫っていた

教会の人間達の何人かが潰れて地上へと落ちていった。向こうも黙ってはいない。攻撃をしてくる。

体はもう動かない。遠音は、超動の力だけで教会・鎬木に死んだような目で応戦していた。

「不浄って……。遠音ちゃんが、お父さんの事を好きな事？」

「なっ!？」

遠音の目に光が戻った。気づかれてしまっていたのか。未希の目が怖い。愛した子に軽蔑されるのが怖い。

瞳から涙が零れていく。絶対に知られなくなかった事を、どこからか未希は知ってしまった。

感情がごちゃごちゃになり、遠音は子供のように泣きじゃくった。心が壊れていく音。だが、未希は遠音を

再び抱きしめ返し、

「ごめんね……。でも、それは不浄何かじゃないよ！ 仕方ないじゃない！ 遠音ちゃんだって人間なんだから！」

「でも私は、君のお母さんを裏切った……!!」

「完璧な人間なんて居ない。誰にだって醜い部分はある。遠音ちゃん達は過去を想いすぎだよ……」。

今を生きてない。ずっと、お母さんが居た頃にすがってる。だから、

何時までも抜け出せない。

私もそうだった……お母さんに会いたかった。でもね。もう、私達はお母さんの居ない世界で生きていくしかないんだよ！」

「でも……」

「お母さんだって、自分が遠音ちゃんの幸せを邪魔してるなんて思いたく無い筈だよ！ 友達だったんでしょ!？」

未希はそう言う泣きながら遠音の胸にすがりついた。もう、これしかなかったのだ。

泣き落とし。そういえば悪く聞こえるが、そこにある感情は真実。遠音の幸せを心から願っている。

そして遠音もようやく、答えが出せない事に気づいた。そう、だからまだ、生きるしかないとわかった。

「……わかったよ、未希。これが終わったら……話し合おう。私達、皆でな……」

「うん！」

教会・鎚木の攻撃は苛烈さを増していく。瓦礫に隠れて今はやりすごしているが、時間の問題だ。

もう一度あの主砲を撃たれては流石に厳しい。すると、遠音はようやく光希の存在に気がついた。

「……誰かな、あの子は？」

「あ！ うん！ この子、光希って言うの。千島光希。お兄ちゃんがユニオンの代表なんだって！」

「えっと……はじめまして。千島光希です」

実を言うと光希。未希と遠音の心温まるやり取りに感動してしまい。邪魔をしてはいけないと

ずっと気配を消していた。遠音ですら気がつかなかった程だ。遠音は光希の正体を聞いて

驚愕している。光希はそれを冷静に見つめていた。悪い人じゃない。そんな確信が生まれる。

しかも光希にはそんな事よりも、ずっと気になっている事があったのだ。

「……光希君か。ウチの子がお世話になったようだ。君も一緒に逃がすから安心してくれ」

「ううん。大丈夫です」

「……え？」

「未希ちゃん。僕、式神使うから。ちょっとどいてて」

そう言うと光希はずんずんと歩き出した。未希と遠音はあまりの発言に呆然としてしまう。

ようやく理性が働き、止めようとした時には既に光希はビルの屋上の端に立っていた。

ゆっくりと、鎚木・教会を見つめる。白い服を着た教会は無表情。私服の鎚木は笑っていた。

「僕、我慢したよ……」

あの一発目の攻撃から、光希は頭にきていた。この人達は、未希の思いを踏みにじったと。

未希が必死になって作った魔具を破壊。あれだけ熱の籠った演説に対し、笑っている者も居る。

子供心なりに、これはイジメだと判断した。

「だから……もういいよね？」

イジメは父に絶対に許されない行為だと教えてもらった。イジメに対しては、本気を出していいと

父に教わっていた。だから光希は、ゆっくりと両手を上げる。

「おじさん達が悪いんだよ……」

二郎の式神に触れてから、ずっと光希の中で何かが叫んでいた。異常なまでの攻撃衝動。

強大な力があれからずっと光希の中で蠢いている。それでも、光希は平静を保ち続けた。

だが、ようやく解禁を迎えてみれば。残酷で純粋な子供心に、嗜虐心が目覚め、

「出てきて、僕の式神！」

光希のグローブが顕現。膨大な式神の気配が周囲を蹂躪し、鎬木・教会の動きが止まった。

右手の手甲には赤い玉。左手の手甲には青い玉。それぞれの属性は、炎と氷。

右手に、藍のレヴァティーンが顕現。左手に、蒼二の修羅紅雪が顕現した。そう、光希の式神は

最初に触れた二つの式神を複製する式神。蒼二や藍でも最初は抑

え切れなかった神威の力が  
光希に制御できるわけもなく、

「あつ……………！」

炎の塊がレヴァティーンの中から落ちた。制御から離れた炎は全力で燃え盛り、炎の嵐が吹き荒れる。

あまりの恐るべき威力に鎬木は物怖じし、教会は危険だと判断したのか戦線を下げた。

「光希……………凄……………」

「えへへ……………」

ふらりと光希は後ろに倒れた。当たり前だ。まだ9歳の光希に神威の制御は負担が強かった。

召還できたのは一瞬。それだけでも大惨事にならなかったのは奇跡に近い。

光希が倒れたのを確認した教会・鎬木が再び進撃を開始。先程の光希の攻撃が恐怖を植えつけたのか、恐ろしいほど苛烈な勢いで攻撃だ。しかも、十隻以上の戦艦全てが主砲を開いている。

「お待たせしました！」

「未希！ 大丈夫か！？ 心配かけやがって！」

空船と兩龍達がビルを守るようにして突然現れた。紡が反意思の膜を張り、攻撃を届かせないようにする。

復活した青竜、朱雀、白虎、玄武も居る。皆が未希を守る為だけ

に命を投げ出してまで集まっていた。

「皆……ごめんなさい！ 私の答え、聞いてくれたよね？」

全員が頷き、誰も文句を言わなかった。もう、未希の答えを受け入れたからだ。過去は変えない。

未希がそう願うのなら、彼等はそれに従うだけ。その為ならば、命だって惜しくは無い。

希の居ない明日を生きて行くと決めた。各人が、ユニオンと戦い得た考えも含まれ、全員の心が一つになる。

未希に幸せになってほしい。最初の願いと変わらないが、中身が大きく違った。

未希が自分自身の考えで、見つけた幸せを現実のものとする。大人達が勝手に決めた事ではない。

「つ。にしても、きちいなア！ 紡い！ ちゃんと膜張ってるのか」

「神璽君に散々反意思使わせられた所為で……こっちもキツいんだ！」

「空船もそろそろ限界のようです……！」

状況は絶望的。だが、未希だけは諦めるわけにはいかない。防御を中心としながらも、どうにか策を練る。

紡が考え出したのは、一転集中防御にて未希の安全を確保した後、未希自身が式神によって脱出するというもの。

だが、難しい。未希は優しすぎるのだ。きつと、自分達の事を見捨てて逃げる事はしないだろうと予測。

だから、厳しい言葉を浴びせるしかない。その憎まれ役は、自分

で良いだろう。紡はふと笑うが

「む……」

巨大な光が十文字派・鎬木・教会の間目掛けて照射され、同時に両勢力の動きが止まった。

両勢力が目をやった先には、棗由加が空中に浮いている。その後ろにはユニオンの一個中隊。

「何の真似だ？ 棗由加。この戦いにユニオンはもう関わるなど言っただけだと思っただけだ……？」

桐ヶ谷が空船上から、由加へと問う。その目には発言次第ではたただでは済まさないという事が伺える厳しさが見える。

教会・鎬木側の攻撃の矛先がユニオンにも同時に向けられた。それでも、由加は不適に笑うと、

「ユニオン規約第四章・十二条。緊急時における代表の不在についての措置。これにより、幹部の半数の承認があればユニオンは独自の指揮系統を執る事が可能とされる。更にもう一条。身内が悪意ある攻撃に晒された時の対応によりユニオンはあらゆる勢力、あらゆる権利に関係なく、独自の行動が可能とされる！」

「それがどうした！ まさか、十文字派が身内とでも言っつもりか？ そんな詭弁で、国が納得すると思うか！」

「いや、違う。お前達は、ユニオン代表・千島蒼二が実弟、千島光希に攻撃を仕掛けた！」

ユニオン幹部・棗由加は全幹部に提案する！ 以上の権利の執行に

より、ユニオンは独自の判断にて行動させて頂きたい！」

由加は空中に魔具のモニターを設置し、ビルの屋上に居る光希の映像を映し出した。

正直にいえば、由加達も光希の存在に気がついたのはほんの少し前。あの炎が無ければ気がつかなかった。

しかもまだ光希が何故ここに居るのかもわからない。それでも、やるしかなかったのだ。

そして、由加は隣のビルに居た神璽を見つめた。それに、神璽は笑顔を返し、

「榛名神璽。承認するぜ！」

それに満足そうに頷き、今度は違うビルの屋上に居る郁人を見つめた。郁人も同じように笑った。

「牧島郁人、承認します！」

そして最後に運命は阿修羅姫を掲げ、高らかに叫んだ。

「天美運命、承認だよ！」

神璽。郁人。運命の承認により、ユニオンは再び独自の判断で、どの勢力や権力も気にせず戦いに

参加することが可能となった。三幹部がそれぞれの武器を構えたと共に、ユニオン総員も再び戦闘体勢へ。

由加は一度大きく息を吸い込み、

「ユニオン総員に告げる！ 十文字派を援護し、鍋木教会連合を叩き潰せ！」

そう怒鳴ると、ユニオン側から喝采の声が上がり、再び戦闘が始まった。

激戦が続いていた十文字本家の庭で、海原沙姫はついに崩れ落ちた。

戒は全身からかなりの出血をしており、満身創痍だ。それでも、その目から光は消えていない。

強い相手だったと戒は思う。だが、このタイプが弱点である森羅万象に対して、戒が何もしていないわけがなかった。

このタイプの相手に対する戦略は既に立てていたのだ。

「簡単な話だ。君の体が限界に達するまで力を存分に吸収させてやればいい」

沙姫の式神は力を吸収する力。戒は常に全力で攻撃し、沙姫の消費量と供給量のバランスを崩した。

その結果、沙姫はついに力を制御できなくなり、暴発させた。その結果として、今は気絶している。

戒は止めをささなかった。何度この子に恨まれても、殺されかけても、この子を手にかけるのは間違いだ。

「……君は俺を一生恨んでくれて構わない」

沙姫の目には涙の筋が見えた。それに無意識に目を背け、戒は全てのコアを空中に浮かした。

時を越える魔具の構成は既に頭の中に完成している。後は望むだけだ。時を越えたいと。

コアが反意思に還って行き、やがて闇色の穴が一つ現れた。

「これが、時を越える魔具……」

時を越える魔具は不安定な状態にあるのか、不自然に大きさが変わっている。今にも暴走しそうな勢いだ。

鼓動のように脈打ち、流石の戒でも一瞬入るのを躊躇ってしまっただが、一歩進めば希にまた会える。

かつて戒の全てだった女性。今でも忘れていない。愛している。

「うっ」

心が痛んだ。頭の中に、先ほどの遠音との会話が再生された。遠音は言った、自分の事を好きだと。

その言葉にどれ程の勇気が込められていたかを戒はわかっていた。世界で一番大事だった友達の

愛した人に好きだと告白したのだから。正直に言えば、戒も嬉しかった。それでも、戒は何もできなかった。

最大の勇気と友情と愛情に、何もなかった自分が腹立たしい。

「……お前が生きていてくれたら、俺はきつと」

その先は口にしない。腹が決まった。戒は足を一步前に進めた。すると、違和感。足元から振動。

次の瞬間、地中から氷の蛇が顔を出した。その開いた口の中には、千島蒼二の姿があった。

「千島蒼二……っ！」

「十文字戒……っ！」

そして、二人が互いの名を呼んだ瞬間、時を越える魔具は大きく広がり二人を飲み込んだ。

第54話：総力戦（前編）（前書き）

ファイナル投稿！

## 第54話：総力戦（前編）

「ユニオン総員に告げる！ 十字派を援護し、鎚木教会連合を叩き潰せ！」

由加が高らかにそう叫んだ瞬間、戦闘が再び始まった。

蒼威を回復施設まで戻すのを終えた遥緋は、再び自分の隊へと合流していた。緊張で、冷や汗が伝う。

教会と戦った事は何回かあったが、得体のしれない力を使うのだから、全力でやるしかない。

ロッドを強く握り締め、緋眼を発動。敵の守備ラインに踏み込むために、猛然と走り出す。

「撃てええ！」

「殺せえええっ！」

鎚木側の式神の攻撃が迫り、遥緋は輪廻転生を解除。コンセプトを盾のように顕現させ、全ての攻撃を死滅。

スピードは落とさない。目標は、雑居ビル群。そこに数十人の鎚木が陣形を張っている。

相手の顔が恐怖に染まるのを遥緋は見た。瓦礫を跳び越え、ロッドを手加減無く顔面に叩きつける、と同時にベルトにつけていた小物入れに手を突っ込み、破片を取り出すと近くに見える窓に投げ入れた。

ピンを外した手榴弾を分解した破片だ。輪廻転生の力により、元

の形が再生され、次の瞬間には爆発が走った。

「突っ込んで！」

遥緋に続いていたユニオンの隊員達が怒号を上げて一斉に突っ込んできた。油断せず、遥緋は更に先に進む。

すると、拳銃の式神を構えた数人が陣形を組んで遥緋を待ち伏せていた。一瞬、判断に迷う。

終式で一気に殲滅するか、それともコンセプトで防御か。だが、ある事に気づいた遥緋はスピードを落とさず、

瓦礫に飛び乗ると、上目掛けて跳躍。銃口が空中の遥緋へと向かう。

「ふむ。以心伝心とはこの事だろうか！」

刹那、遥緋の背後から光があふれ出した。一直線に向かってくるのは、光の刀身。四条莉王の式神だ。

巨大な光の刃の一撃に巻き込まれ、大爆発が舞い起こる。遥緋は瓦礫を上手く避けて、莉王の剣の上に着地。

「莉王さん！」

心眼で遥緋の言わんとしている事をすぐ理解した莉王は剣王を振り回して、近くにあった高層ビルを斬った。

直前で再び空中に跳び、落下していた遥緋は二発の斬撃の後、再び刀身に乗って崩れていくビル目掛けて走り出す。

「敵、七！」

輪廻転生の死滅を発動。すれ違い様に三人の体に拳の一撃を叩き

込み、殴られた箇所は死滅して使い物にならなくなった。  
絶叫が響き渡るも、遥緋が更に奥へ行こうとした瞬間。銀色の閃光が視界をよぎった。

「っ！」

体中が切り裂かれる感覚。ロッドで防御したものの、殆ど意味がなかった。だが、再生を発動した遥緋にダメージはない。

一度回避しようとするも、不意に近づいてきた小さな影に蹴られ、遥緋は空中へと投げ出された。

最後に見たのは

「子供？」

まだ小学生ぐらいの女の子が、中指を立てて笑っていた。緋眼を発動させてどうしたものか、と考える。

一方、地上から遥緋が落下するのを見ていた莉王は、特に心配はしていなかった。あの程度の事では、死なない。

そんな信頼がある。それと同時に、不穏な気配を感じていた。

「……………」

賞金稼ぎに囲まれている。だが、心眼を発動させているのに心が読めない。それも、囲んでる五人全員から。

と、全員が動き出した。見ている限り、大した使い手ではなさそうである。まずは、一人の首を刎ねようと、剣王を

振った。だが、斬った感触に違和感。相手の首は吹っ飛んでいく。それと同時に、背後から殺意を感じた。

振り向く。何もなし。岩が転がっているだけ。

( 莉王さん。正面、銃口 ！ )

遙緋の心が流れてきた。その瞬間、体が勝手に動き、岩目掛けて  
剣王を振るう。

「痛っ！」

甲高い声。岩から出血が見えたと思えば、次の瞬間には、岩が何  
時の間にか拳銃を持った少年の姿になっている。

背中には今、自分がつけた斬り傷。背中に刺青をいれている少年  
は傷口を気にしながらも、莉王に一枚のカードを投げた。

「ぬー！」

カードではなかった。手榴弾だ。剣王の光の刀身を最大限にまで  
広げ、莉王は身を守った。

直後、爆発。すぐに、光の刀身を解除し、様子を伺うとそこには  
何もなかった。少年の姿も。残りの賞金稼ぎも。  
それどころか、爆発した形跡すら見当たらない。

「マツリ！ こっち！」

遠くの方で、女の子に手を引かれて逃げていく先程までの少年の  
姿が見えた。あれが、賞金稼ぎの鎬木。

あんな子供までもが、戦いに参加している。しかも、自分の意思  
で。明確な殺意を持って。

「舐めてると、痛い目を見そつだ……」

秋月狂は仮設拠点に戻り、中隊規模の指揮を行っていた。

戦況は勢いだけは完全にこちら向きだが、このままではあまりよろしくはない結果に向かっている。

こちらは何時間も十文字派との抗争を行ってきたのだ、精神的にも体力的にもかなり厳しい状態だ。

「因幡隊。桂木隊。損害拡大。救援要請がきています。四条分隊も包囲され、防戦状態です」

「敵、式神砲撃七　来ます！」

「障壁展開！」

轟音と共に、隊員の式神による障壁が張られ、今回の砲撃も何とか防ぐことが出来た。

本当に、あの戦艦は厄介だと狂は舌打ちした。空船以上の防御力と火力を誇り、常に小型、中型艦隊も

排出してくる。それが、戦場全体に大きさは違えども四隻。どうにかして、潰さなくてはならない。

自分が全力で特攻すれば、沈められる自信がある。だが、指揮官としてここを離れるわけにもいかないのも事実。

「狂さん！　誰かが一人、大型艦に向けて攻撃をしています！」

「はあ？」

バカか。あの大型艦にたった一人で勝てるわけがない。蒼二達幹部連なら別ではあるが、一介の隊員にそのような

事は不可能だと判断し、狂は部下が空中に投影した映像を見た。そこには、一人の女性が映っている。

「あ。これ海山つすよ。俺の同期で一人、めっちゃ強かったヤツなんすよ」

部下の一人が声を上げた。

「海山……？ あー、何か聞いた事があるな」

確か とまで、思い出しかけると、映像の中の女性。海山天音は動き出した。

海山天音はイラついていた。

何故かはわからない。教会に対しても、鎬木に対しても、特に敵意というものは持っていなかった。

だが、今ははっきりと断言できる。こいつらは、ムカつく。嫌なヤツで、最低のクズ共だと。

先程のシャボン玉の少女の件で、大体天音はこの事件が何だったのかを理解した。つまりは、母を助けたかった。

天音だって、過去は変えたい。何度も、あの人達とまた会いたいと思っっている。

「だけど」

彼女は、それを命への冒瀆だと言った。あんな小さな子供が、何処かでそれと自分を重ねているのだ。天音は唇の端を吊り上げ、

「お前達はそれに対し、何をしたんでしょうかね」

問答無用の暴力。それは、天音が一番嫌うもの。二階堂特区で掃いて捨てるほど見てきた。

天音は走った。全力で。滴木と教会側の攻撃が迫る。

「ナナシ 箆絡！」

カードを一枚手に取り、闇色の剣を取り出し、指で弾く。箆絡から発せられた音が周囲に残っていた十文字派の悪鬼に届き、天音の支配下へと入った。滴木側に攻撃を仕掛けされると共に、天音の盾としても使った。

一瞬。第一包囲網を突破。

「御崎暁 霹靂！」

天音の両腕に雷が灯った。箆絡と霹靂の力が重なり、巨大な雷の刃を作り出す。間髪おかず、天音は雷の刃を横薙ぎに振るった。一度振るい、すぐに手元に引き戻すと共に、

「っは！」

刺突。箆絡から雷の刃が矢となって放出され、大型艦の側面に激突した。轟音と共に、大型艦が大きく揺れる。

流石に、これには教会側も油断や慢心は無くなった。大量の小型

や中型艦と共に、両者の戦力が天音に集中。  
だが、天音は不適に笑った。

「八神村雨 紅椿」

刀が顕現されると共に、血の霧が周囲を満たし、天音の姿が見えなくなった。血の霧の中を、天音は走る。

制御下にある血が教えてくれる。相手が何処に居るのかを。紅椿を使い、一人ずつ斬っては、紅椿に血を吸わせる。

その度に紅椿は血の霧を更に深くし、天音の存在を隠すどころか、大型艦まで飲み込もうとしていた。

大型艦は一度上昇。そして

「主砲っ！？ おいまだ、仲間が」

鎚木側の誰かが悲鳴を上げた。教会側は、仲間諸共天音を吹き飛ばすつもりらしい。

流石の天音もこれは危険だと判断し、霧を一旦解除し、自分の周囲に集めて巨大な血の盾を作った。

何千層にも及ぶ凝固した血の盾だ。一撃くらいは持つてくれるかもしれない。その時だ。巨大な風玉が大型艦に

ぶつかると共に。仲間達が ユニオンの隊員たちが一気に、大型艦へと攻撃を仕掛けた。

天音がそれを呆けた顔で見ていると、一人の男が目の前に降り立った。名は知っている。秋月狂。

「……お久しぶり、というべきでしょうか」

「そうかもな。まさか、剣菱達が大事にしていた君が、ユニオンに居ると思わなかった」

「竜胆に誘われたので。ただ、それだけです」

天音は狂から目を背け、再び大型艦を見つめた。

「戦うのか？ その、あいつ等から受け取った力で」

狂が後ろから声をかける。

「受け取ったんじゃないやありません。奪ったんです。それに戦うのは、私の意志です」

「そか。なら、俺は何も言わねえよ。ただ、君は俺の大切な仲間達が大切にしていた子だ。

何かあったら俺を頼って来い。それぐらいは俺にだって出来るし、あいつ等もきつと喜んでくれると思うよ」

そう言つと狂は天音の頭の上に手を置き、普段の落ち着いた笑いとは違い、昔のように獰猛に笑った。

「さあ、行くぜ。遅れんなよ!」

「はい!」

風が舞い起こり、天音と狂は空中へと投げ出されるように加速した。狂の絶妙な力のバランスにより、

天音は自在に空中を移動し、大型艦の正面へと回った。同時に、狂の瞳が緋色に染まり、

「極点神舞……!」

四本の巨大な風の槍が、大型艦隊を押さえつけると共に、ユニオン隊員たちは距離をとって攻撃を開始。

剣菱お兄ちゃん。

暁お兄ちゃん。

村雨お兄ちゃん。

ナナシ君。

「私、後悔してないよ。皆は怒るかもしれないけど、多分私の居場所、戦場しかないだろうから」

先程までの三人の式神を顕現。両腕に霹靂の雷。片手には霹靂と紅椿が握られている。

そして、最後に一つ。

「真砂剣菱 天照！」

紅椿と箆絡を合わせ、雷と熱線の刃を作り出した。大型艦が攻撃してくるが、全て周囲に散布した

血と悪鬼によって天音に攻撃が届くことは一切無い。そして、

「見せてやれよ、天音。かつて、裏の世界を恐怖に染めた、四人のバカ野郎共の力を！」

「言われなくても！」

一閃。光の刃を振り下ろし、大型艦を真っ二つに天音は断ち切った。轟音と共に、大爆発。

下の方から喝采が上がった。誰もが、天音を見て声を上げている。久しぶりの感覚だった。

それを聞いて、天音は誰にも聞こえないように一言呟く。

「でも、意外と悪くない場所なのかもね」

ビルの屋上で、未希達は黙って状況を静観していた。

全員が、ユニオンの行動に驚いていた。まさか、自分達と共闘する道を選ぶとは思わなかったからだ。

沈黙が場を支配し、そしてそれを破ったのは全ての始まりの人物。未希だ。

「皆……私、お父さんに会いに行くよ」

近くに居た遠音は何も言わなかった。ただ、黙って紡を見つめる。暫くその視線を受けていた紡は、

観念したように笑うと、指を二回振った。それだけで、紡が守っていた塔の魔具が真っ二つに折れ、

十文字本家を覆っていた結界はついになくなった。

「未希。覚悟を決めたね？」

「……うん」

未希はビルの屋上から自分の家を見つめた。楽しい思い出が詰まっていた場所は、今戦いの傷跡で

殆ど原型を留めていない。庭にある闇色の穴が見える。ふと横を見ると、光希が近づいてきていた。

未希はため息をつき、

「貴方つて、本当に物好きね」

「えへへ」

光希の手を握り、式神の力を発動。未希と光希の体が消えて、二人は魔具の穴の中へと入っていく。

残された遠音達は、

「あの子が答えを出したんだ。私達も、答えを出そうじゃないか」

その遠音の一言に、全員が頷いた。紡は遠音に駆け寄り、回復概念を反意思に命じて体の復元を行う。

雨龍と凜と千里はビルから離れ、ユニオンの援護へ。万理はここで、体の回復が完全でない遠音の護衛。

四つ子達も回復したそれぞれの式神を率いて、ユニオンの戦列に加わった。

それを遠音は黙って回復を受けながら見ている。既に、腕の復元は行われた。残りは失った体力だけ。

「なあ……紡」

「何かな？」

「私は、戒の事が好きだ。愛してる」

「……うん」

「だけど、今なら思える。それでも、希は私の事を許してくれると。これは、馬鹿女の自分勝手な思い込みかな？」

「そうかもね。　　だけど、私も同意見なんだ。希ちゃんは、結局君を嫌う事なんて出来ないと思うよ」

体力がようやく戦闘を行えるレベルにまで戻ったのを遠音は感じた。ゆっくりと立ち上がり、戦場を見る。

全ての幸せが詰まっていた十文字特区のこの有様を。自分達がしてきた事の結果を。

「謝るのはこれで最後だ。私は約束を守り、未希を死ぬまで守るよ。だけど、その代わりに私は過去の君から、戒を奪う。　　ごめん」

跳躍。圧倒的な身体能力で空中に跳んだ遠音は、中型艦の一つに降り立った。高速でステップを踏み、

滴木を次々と殴り倒していく。心が幾分か軽くなったからか、体が非常にスムーズに動く。と、超動で体を曲げ、

急遽着地位置を変更した。そして、同時に本来の着地位置が大きくひしゃげてへこみ始めた。

「教会の執行者か。噂には聞いてたけど、本当に居たのか」

遠音の目の前に一人の屈強な男が立っていた。男は一度手を組み、

「trance」

と呟くと目を見開いた。筋肉が膨張し、体全体に紋様が走る。それと同時に全身を鎧が覆って行き、

頭からつま先まで全て包まれると、変化が終わった。これは、油断できない。そう判断し、遠音も集中を高める。

ステップを踏み、一步で相手の懐まで。向こうは突きを繰り出すも、紙一重で避け、腹に一撃。

轟音と共に、男が吹っ飛んでいくがそこまでのダメージは無いようである。飛ばされながらも、空間から槍を

取り出して、そのまま受身体勢へ。更に遠音は速度を上げて走った。だが

「ぐっ！」

背後から一撃。何時の間にか、もう一人鎧の大剣持ちが遠音を攻撃していた。体勢が崩れ、甲板の上を

転がっていくも、すぐに立ち上がったが

(早いな)

既に男二人は攻撃態勢に入っていた。現在、遠音の武器は己の肉体のみ。魔具は全て郁人に壊されてしまった。

打つ手なし。だが、それでも一人は倒そうと遠音が拳を振り上げた瞬間、

「どーん、ですわ」

遠くから凄まじい勢いでギターが吹っ飛んできた。器用にギターは男二人に直撃すると、くるくると回転して

甲板の隅に居た七海神楽へと戻っていった。その隣には、姉の秋月奏も立っている。

「おーよしよし。ディック。良い働きですわね」

「かぐちゃん。お姉ちゃん、ものを投げるの感心しないな」

「ディックが投げて欲しいと言ったんですもの。クソ仕方ありませんわ」

言い合いを続ける神楽と奏に対しても、何の反応を見せない男二人は黙って、神楽と奏に襲い掛かった。

高速で迫る男達に対して、神楽は笑顔のままギターを振り上げ、

「せっかちなクソ殿方達ですわね。ディック。女性の扱い方というものをクソ教えて差し上げては？」

念動の力も合わせて、一人の男の顔面目掛けて振り下ろした。轟音が鳴り響き、男の上半身が甲板に

めり込んだのを確認すると、神楽はすぐ自らの体を回転させ、ディックのボディを思い切りもう一人の男に叩き付けた。

「がアッ！」

吹き飛んでいく男に対し、ディックのシールドが伸びてその体に突き刺さると、

「うん。クソ良い音で鳴いて下さいませ」

神楽がギターをかき鳴らすと同時に、男の鎧がはじけとぶと、血

飛沫を撒き散らして甲板に転がった。

それを見て、遠音は微笑を浮かべた。あの何時も奏と自分の後ろに隠れていた妹が、随分成長したと。

「お礼を言うべきかな？ 妹達よ」

「いいえ。一応、血の繋がった姉妹ですから。一時のわだかまりは忘れて、助け合いましょう」

「わだかまり、か。私は特にお前達の事を嫌いになつたわけじゃないけど。もっと、大切なものが出来たんだ」

遠音の言葉に、奏は微笑を返し、

「私ものです。今度、我が家に遊びに来てください。お姉さまの甥っ子をご紹介します。

それと、かぐちゃんも確か今、彼氏が来てるんでしたよねー？」

そう言つと余裕の笑みを浮かべていた神楽の顔が耳まで真っ赤になり、動揺し始めた。

「ち、ちちち違いますわ！ 章介さんは……そんな……その……まだ……」

章介。覚えておこう。と遠音は心の中にひっそりと名前を刻み、やがて動揺する神楽の肩に手を置くと、

「お姉ちゃんから一つだけ、アドバイスだ。恋愛成就の秘訣は、その人を想い続ける勇氣。これが重要だと思うね」

と言い、久しぶりに姉としての優しい笑顔を作った。

ユニオン本陣。医療テントの外で浅葱陸人と神崎森羅は手当てを受けながら戦況を見守っていた。

気持ちでは明らかに勝っている。だが、まだ状況は五分五分だ。

気合はあるが、まだ敵の数の暴力が強い。

それでも陸人と森羅は動かなかった。ここで、待つべき者が居るからだ。

「……………」

「……………」

無言で立ち続ける二人に、周囲の者は声をかける事ができない。

二人とも、真面目な表情で戦局を見守っていた。

そして、暫くすると医療テントの中が騒がしくなった。誰かが言い合いをしているようだった。

暫くすると、医療班の人間を引きずるようにして出てきたのは、タバコを啜えて、何時ものように笑ってる千島蒼威。

「ちよ！ ちよお！ 蒼威さん。まだ無理ですってば！ 貴方、ち

よつと前まで死ぬ寸前だったんですよ!？」

「悪いな。だが、行かなきゃならねえんだ。てゆうかしつこいぞ。えいっ」

ボコつと首筋に手刀を入れて気絶させると、ずるずると引きずってテントの隅に隠し、蒼威は何事もなかったかのように陸人と森羅の方を見た。

「さア、いくぜ。準備はできてつか？」

それに、陸人は満面の笑みで答え、森羅も微笑を返した。

「今まで暢気に寝てたヤツがそういうか。コンディションは最高に決まってんだろ。なあ、陸人？」

「お、おうよお！ コンビーフって結構美味しいよな！」

「違えよ馬鹿」、と蒼威は笑いながら呟き、森羅が呆れた目で陸人を見ながら後に行く。

陸人も腕を組んで頭を抱えたまま、それに続いた。その間に通信機を持った蒼威は全てのチャンネルを

オープンにして無差別に語りかけ始めた。

「おい、お前らア！ 俺様が復帰したぞ！ すぐに状況ひっくり返してやつから、もう少しかけ気張れやア！」

## 第55話：総力戦（後編）

鬼塚二郎は、十文字特区を全力で走り回っていた。

先ほどの魔具の力によって、未希と光希の生存は確認した。それにほっとする間もなく、二郎は先へと進む。

とりあえず、情報を共有する為に顔を知っているユニオンの人間を探しているのだが、未だに見つからない。

それどころか、ユニオン側にまで賞金稼ぎと間違えられて攻撃されそうになった事もあった。

「くっそ……！」

珍しく二郎にしては、焦りながら走っていると、境界の艦隊に向けて九本の光が突き刺さるのが見えた。

運命の狐砲だ。過去に戦った時に、あれには散々苦戦した思い出が蘇ってきた。

二郎は狂化し、身体能力を限界まで上げると、ビルの上を飛び越えながら狐砲が発射された地点まで走り出した。

そして、見つけた。長刀を持った天美運命が最前線で部下を率いて戦っていた。

「変わったな、あいつ」

運命の戦闘スタイルは過去と全く違っていた。昔は凶悪な特攻馬鹿だったが、今は周りの力を借りたスタイルだ。力の流れが合理的になり、昔のように体力切れをしなくなっている。二郎はそれを見て、微笑を作り、着地した。

ユニオンの何人かが二郎の方を見た。だが、気にせず二郎は運命の傍まで走り、

「おい、運命」

声をかけた。運命は声に反応し、振り返るとまじまじと二郎の顔を見た。

「……す、スルト!？」

「そつだ。詳しくは省くが俺は今」

「いやあああああああああ!!! お化け! スルトのお化け! なんまいだー! なんまいだー!」

二郎が続きを話そうとすると、運命は絶叫を上げて手を両手に合わせながら走り出してしまった。

陣形が一気に崩れ、ユニオンの隊員達にも動揺が走る。そして、その隙について教会・鎬木が進行を始めた。

「化け物はお互い様だろうが……!」

二郎も追おうとするが、教会側の攻撃が邪魔だ。レーヴァティンの炎を最大まで練り上げ、大地に叩きつける。

荒れ狂う劫火が周囲を蹂躪し、悲鳴と怒号が響き渡る。ユニオン

側はぽかんとした顔で、それを見ていた。

すると、運命の足が止まっていた。どうやら、二郎の攻撃によりようやく冷静さを取り戻したようだ。

「スルト、何でここに居るの？」

「話せば長いが、俺は千島光希と十文字未希の護衛だ。あの二人は今、何処に居る？」

「報告によると、二人とも時をかける魔具の中に入ったみたい。運命達は、十文字派の護衛だよ」

「大丈夫なのか？」

「多分。蒼二が先に中に侵入してるはずだし」

「わかった……。では、俺はお前らの援護に回る。幸か不幸か、教会には借りもあるんでな」

「うん！」

運命はそう言うと、阿修羅姫を掲げ、

「皆、助っ人が来てくれたよ。勝利まであと少し。気張ろうよ！」

狐砲をぶちかまして自ら斬り込んで行った。二郎もそれに続く。本当の意味で鬼神の如き強さの二人に

ユニオン側も活気を取り戻して、攻撃を仕掛け始めた。

雨龍やユニオン達と共闘していた三枝千里だが、敵の数が多すぎた。何時の間にか、周囲は全て敵。敵は数の多さを利用して、力の強いものから少しずつ潰していく魂胆のようだ。

まずは、あの中で一番防御力の低そうな自分が狙われたと、千里は冷静に判断していた。

それでも、余裕は崩さない。気持ちで負けたら、本当に殺されてしまう。迫り来る教会と鎬木を片っ端から

斬っていく。唯一の希望は、距離が近い為に銃撃が無いという事。

「っは！」

気合と共に、乖離のオーラを飛ばす。密集戦には非常に効果があり、数人が一気に倒れるが

そこにすぐさま教会が駆け寄り、回復させてしまう。厄介だ。斬られた側は怒りと共に、再び迫ってくる。

それでも千里は止まらなかった。否、止まれなかった。止まったら、死ぬ。攻撃はそれ程までに苛烈。

「っ！」

正面から四人の斬撃。狂乱の力を最大限にまで発動し、弾き返すと共に、千里の心がはじけた。

不味い。と思った時には、時既に遅し。心が一瞬で飲み込まれ、殺戮衝動が全身を満たす。

体全体が殺す機能に特化し、千里は更に速度を上げて次々に殺していく。

「があああああああっ！」

雄叫びを上げ、斬って、斬って、更に斬る。何時の間にか、千里の周囲には死体と怪我人の山が築かれていた。それに、千里は笑った。特に楽しくはないが、笑った。狂乱に飲み込まれた為、まともな思考が出来ない。

鎬木が撤退をはじめ、教会が取り残された。一人も逃がす気はない。教会の何人かが鎧を纏うが、気にしない。

「死ね！」

だが、突如として敵の攻撃が苛烈さを増した。拳の一撃を腹にもらい、狂乱で強化された体ですら崩れ落ちるほどの

痛みと衝撃が千里を襲う。猛烈な吐き気と口の中に血の味がした。立てない。苦しい。呼吸ができない。

動かなければ。しかし、体は動いてくれない。

「つか……っは！」

どうにか声を絞り出す。敵の攻撃が自分に向けられたのを、何処か他人事のように千里は見ていた。

死ぬ。きつと、死ぬ。客観的に死が見え、ようやく追いついた心が同時に絶望に染まっていく。だが、

「突っ込め！」

戦況が変わっていた。教会の群れが何かによって斬り開かれている。その答えはすぐにわかった。 剣だ。

無数の剣を構えたユニオンの隊員達が、凄まじい速度で戦況を変えていくのが見えた。その先頭に居るのは、

かつての恋人、南野喜一。小柄だが、周囲を仲間に囲まれながら

前線へこようと、休む間もなく剣を振っていた。

脅威に思った教会側が喜一達へと人員を向け始めた、千里はその隙に空中へ大きく跳ぶと、回転しながら幾つもの首を刎ねた。

背後からの攻撃。前方からの物量。指揮系統が段々と崩れ始め、乱戦状態に陥った。そして、ふと背中が触れ合った。

千里が後ろを向くと、相手も後ろを向いていた。同時に、気まずそうな顔になる。

「何よ」

「別に……」

そんな会話をしている内に、敵が再び迫る。二人は自然に互いの死角をカバーしあいながら、敵と切り結んだ。

踊るようにして千里と喜一はステップを踏み、教会と鎬木を斬っていく。それだけで、かつてとは比べ物にならない程

お互いの成長がわかった。それと共に、段々口数も増えていく。

「かなり上達したね。龍一を殺したのも、納得だわ」

「頑張ったからね。血で血を洗うような人生も送ったよ」

「そう……。私としては、平和に暮らしていればいいなと思っただけ」

「俺も男だからね。プライドってもんがあるんだよ。数年経ってようやく、借りを返せた」

忌まわしき過去がお互いの頭の中に蘇る。あの日までは、楽しそうに何時も二人で笑いあっていた。

元に戻りたい。そんな淡い希望はお互い持っていたが、それを口にする事はできなかった。

だが、それは今までの話。千里は、未来へ進むことにしたのだ。希が居なくなつて、と自分を奮い立たせる。

「喜一君。あの時は、ごめんね」

「いや。俺の方こそ悪かった。絶対、殺してやるって思ってたから、そんな姿を君に見せたくはなかったんだ」

「……………」

「……………」

再び沈黙。千里と喜一の気持ちは一緒だった。だが、その最後の言葉は何となく言いづらかった。

黙ったまま戦闘をこなす事数分。段々お互いがお互いにイラついてきた。先に痺れをきらせたのは千里だった。

「ああもう！ 何か言つてよ！ 待ってるんだから！」

「いや、君が言いたそうにずっとともごもごしてるから俺は待っててあげただけだつて！」

「じゃあいいです！ 言いたい事は喜一君が言つてくださいー！」

「うわ！ ずるい！ ……じゃあ言つてやるよ。千里ちゃん。今、付き合つてる男居る？」

「居るわけないでしょー！ 喜一君の事あれからずっと忘れられなか

「つたんだから！ そのお陰でもう三十路よ！」

「俺だって忘れられなかったよ！ でも女の子が次々寄ってきてさ。断ってばかりいたらホモ疑惑ついたんだよ！」

怒鳴りながら、恥ずかしさをどうにか隠して会話していく。顔が沸騰しているように熱い。

そして、お互いの背中に寄りかかりあい、千里と喜一は何処か子供のような顔でお互いの最後の言葉を発した。

「三十路になった責任とって、彼氏に戻るよ」

「うん。ホモ疑惑になった責任とって、彼女に戻るわ」

十字街特区の中心部では最大規模の戦闘が起こっていた。教会・竈木側は数で圧倒しているにも関わらず、押されていた。名だたる有名な式神使いがこの場所に集合し、猛烈な勢いで暴れているために、数よりも質が勝っているのだ。

「郁人。ついてこいよ！」

「はい、神璽さん！」

上空の大型艦目掛けて神璽と郁人が飛び上がった。郁人はフラガラッハと共に雷化し、神璽は反意思であらゆる攻撃を相殺しながら大型艦へと接近。ユニオンの幹部が二人だ。教会と

鎚木の攻撃が二人に集中した。神璽は、体中の反意思を

右腕に集中させ、拳形の衝撃波を大型艦へ炸裂させた。その隙に郁人は間近まで接近。

「フラガラツハ・灼」

突撃用の大型剣へと変化したフラガラツハで一気に大型艦を貫いた。それでも郁人の勢いは衰えない。

空中を縦横無尽に駆け回り、何度も大型艦へと突撃し始めたのだ。圧倒的な威力とスピードになす術もなく大型艦は

爆砕して消えてなくなった。地面に落ちていく教会と鎚木は何とか着地し、自分達がユニオンに前方を阻まれている。

後退すれば、本陣のある一番大きな大型艦隊の場所。あの場所を落とされたら、完全に積みだ。

もはや、逃げ道なし。鎚木と教会は一点突破を目指して数の差で脱出をしようとした。目指すは、手薄な場所。

生き残りたい本能から全力で攻撃してくる教会・鎚木側に流石のユニオンも次々と倒れて行く。そして

「流石、森羅だけ。お前の予想通りにここにきたな」

「さてはお前占い師だったのか！」

「アホな事言つてねえで、さっさと終わらせんぞ」

千島蒼威。浅葱陸人。神崎森羅の三人が現れ、次々と敵を蹴散らしていく。陸人が豪腕を振るい、森羅が残りに水で攻撃。

蒼威は大我の形を犬に変えて、次々と襲い掛からせていく。ありえない。その場に居た全員の心が一つになる。

たった三人で何故　と。段々と鎚木の足が止まってきた。教会

も一度蒼威達から距離をとる。背後に、大型艦隊が見えたからだ。教会・鎚木側は陣形を取り直し、攻撃する構えを見せた。すると、陸人が一步前に出た。

「っしやああああああ！ 真・必殺技を見せてやるぜ！」

陸人の体から赤い紋様が出現し、その全てが拳へと集中。式神の気配がぐんと上がり、そして

「あ、やばっ」

陸人の爆轟の形が変わると共に、火花が散り始め、

「っ！」

いち早く状況を察した蒼威が、大我を巨大な手の形に変え、陸人の体を掴むと思い切り投げ飛ばした。

次の瞬間。陸人は大爆発を起こした。神威を制御できなかったのである。教会側はそれを予想できていなかった。

突然の爆発に動揺が走り、陸人の自爆には慣れていたユニオン側はその虚について一気に攻撃を始めた。

そして蒼威は視界の端に、ボロボロになり服についた火を地面を転げまわって鎮火している陸人を発見。

「森羅あ。消化頼むわ」

「わかった。本当に、人間爆弾だな、アイツは……」

森羅が外れていくと共に、蒼威は戦闘へと戻った。すると乱戦を潜り抜けて、遥緋が棒を振り回してやってきた。

蒼威が包帯だらけなのに戦闘をしているのを見ると、びっくりしたような声をあげた。

「お父さん！ こんな所で何やってるのよ!？」

「うるせー！ 引退記念だ。最期に一花咲かせにきたんだよ！ お前も娘なら協力しろや！」

「……もう、仕方ないなあ。じゃ、一気に突破するよ」

蒼威と遥緋の両目が同時に濃い緋色に染まった。終式を発動させた二人は一撃で敵を倒しながら戦場の道を切り開く。

やがて、一隻の大型艦が眼前に迫ってきた。攻撃は苛烈さを増すが、遥緋と蒼威は輪廻転生の死滅と、大我の盾を

駆使して、お互いの死角をカバーしている為、大きなダメージはない。蒼威は大我の羽を作って空中へと飛翔。

「引退記念！ スーパー俺様ブレード！」

全ての大我が集まり、巨大な剣を作ると蒼威はそれを思い切り振って大型艦を真っ二つにした。

そして遥緋の輪廻転生が残りの破片全てを分解。それを満足そうに見て、蒼威は地面に斜めに刺さった剣の柄に着地。

懐から煙草を取り出し、しばし迷ってから箱ごと握りつぶしてポケットにしまうと、座り込んで眼下を見ながら言った。

「気張れよな。次世代共」

蒼威から少し離れた場所では、回復した空船が鎚木を蹴散らしながら高速で走っていた。目的は、陽動と残党の始末。

凜が操り、律と時雨が防御と攻撃を担当している。律は重槍を振り回し、次々と敵を屠っていく。その余りを時雨が潰していた。

「なんていうか……どちらが男性だかわかりませんね」

「ふむ！ 時雨は草食系だからな、仕方ない。よ、夜は肉食系だけどね！」

「はいはい、変なデマ流さない」

すると律。眉を吊り上げ時雨を見た。

「君、SMとか好きじゃないか。寂しいことに要求された事ないけど」

「チキンで変態、と」

凜の言葉に、律はむっとした顔を作った。凜は涼しい顔でそれを受け流して相変わらず空船の操縦をしている。

「時雨はチキンじゃないぞ。勇気に溢れててかっこいい男なんだ。取り消せ」

「はいはい。チキンじゃないですねー」

「ちょっと！ 変態は取り消さないの！？ ねえ、むしろそっちの方が重要なんだけど！」

時雨のつつこみをよそに、取っ組み合いを始めた律と凜。空船の操縦と攻撃と防御のバランスが崩れ、空船は大きく回転して

地面に突っ込んだ。どうにか体だけは守った時雨は手すりに掴まってようやく起き上がる。喧嘩していた筈の律と凜は何時の間にか脱出して、何事もなかったかのように再び攻撃を始めていた。

「時雨、何をやってるんだ！ 手をかしてくれ！」

「二人じゃ厳しいんですよ！」

「……はい」

空間を歪めて攻撃をあらゆる方向に曲げながら、時雨は嫁とその友人の後にすぐすぐと続いた。

その様子を由加とと紡と颯太と莉王は少し離れた場所から見ていた。

「人間、ああはなりたくないものだ」

「あの十名家の女傑二人組は相変わらずタフだね。同じ女として、少し羨ましく感じるよ」

「大丈夫。紡。俺守る。タフじゃなくても平気」

「うわ。颯太が惚気るとか奇跡を見てるみたい」

由加は斧を振りながら驚いた声を上げる。それに紡は微笑を作り、颯太は顔を赤らめてそっぽを向いた。

莉王は相変わらず豪快に笑い、

「はっはは。颯太も大人になったな。幼馴染として純粹に嬉しいぞ」

そう言いながら剣王で周囲一帯をなぎ払った。余裕そうではあるが、体力はそろそろ限界を迎えそうである。

紡や颯太も由加と神璽との激戦で殆ど力を使い果たしてしまっている。軽口を叩いてはいるが、半ば強がりのようなもの。

すると、莉王が遠くに何かを見つけた。しばし黙考した後、ニヤリと笑う。

「俺様達頑張ったからな。そろそろ、若いのに気張ってもらおうとしよう」

「ああ。何で彼はこんな時でも何時もの態度で居られるのだろうね。どんな体力だよ」

「確かに、あの余力ありまくりな態度は異常。全く戦闘に集中していない」

「しかもかなり良い位置。あそこからなら、いける！」

令は紫と神憑状態で走っていた。この距離ではレールガンは危険なので、金属バットを持っている。

戦闘自体はキツくない。だが、それよりもずっと紫の態度が厳しい。あの後から、まともに令の顔を見ようとしなない。

しかも、目を合わせなければ合わせないでじっと見ているのだ。今は合体しているからいいものの、何も喋らないのが余計に怖い。

後ろを走っている太郎と碧は碧がさつきからずっと太郎に構いはなしな為、助け舟にすらなってくれない。

「令。令。聞こえる？」

すると、由加から通信が入った。すぐに返事を返す。

「何ですか？」

「そこ、今一番手薄で人員も少ない。だから、令。単独先行であの一番大きな大型艦を破壊して。私達が陽動して、人減らすから」

「え、ええ！？ 僕がですか？」

「この事件は九我山特区から始まったよね。だったら、幕を引くのに相応しいのも令だよ。君なら、出来る。皆信じてる。やってくれるかな？」

由加の言葉を考える。確かに、この事件は九我山特区襲撃事件から始まった。この戦いを経て、令の中は色々変わった。

自分の家に対する思い。姉に対する思い。伝わる力への思い。戦いへの思い。友人への思い。そして、紫への思い。

姉は言った。どんな場所だろうが、どんな立場だろうが。お前はお前の意思を貫きなさい、と。令の意思はただ一つ、決着をつける。全ての過去への。

「わかりました。九我山令。その命令を承りました」

「了解。サポートは任せて」

由加との通信が切れた。それと同時に、令は自分の中に居る紫へと声をかけた。

(紫ちゃん)

(何?)

(そのさ……九我山特区。家に帰ったらさ。話をしようよ。その、色々)

(ええけど。その前に一言欲しいな。あたし、こっに見えてめっちゃ今不安やねん)

(……あー。その、ぼ、僕のものにな、なれよ!)

一瞬の沈黙。その後、紫の爆笑が起きた。令は顔を真っ赤にしながら動きを止めた。ひとしきり笑うと、紫の笑いも落ち着いた。背後では突然止まった令を、碧と太郎が怪訝そうな顔で見つめているが気にしない。

(びびりながら言うとは、まだまだ子供やねえ。……ま、一応合格点や)

(そりゃ、どうも。だから、力を貸して。このままここで死ぬのは嫌だよ。僕今、漫画的には死亡フラグビンビン状態なんだから)

(りょーかい。……じゃあ、行くで!)

紫との同調率がぐんと上がった。神憑の出力があがり、令の周辺で激しい稲妻が踊る。そして、碧と太郎へ向き直った。

「通信は聞いてた?」

「……うん。力、貸すよ」

「当たり前だ」

「じゃあ、碧ちゃんはもう一度僕と神憑。太郎君は、サポートお願い。折角人間になったから、死んじゃ駄目だよ」

「……うん！」

「お、おう！」

碧と手をつなぎ、神憑を発動。再び令の髪は白。体は反意思でコ  
ーティングされ、黒く変化した。

同時に太郎も式神を顕現。令も雷と風を迸らせ、一度しゃがむと  
全力で大地を蹴って、空中へと飛んだ。

猛然と、指定された教会側の集団へ。敵が気がつき、攻撃をして  
くるが碧の風に全て阻まれ、残りは太郎の炎が撃ち落した。

無装をロッドの形に変化させ、威光、雷、風を付加させ、振り回  
す。嵐のように周囲一帯を蹂躞するが、何人かが範囲から逃げた。

空中へと飛び、全員が砲撃型の式神を顕現させ、令を狙う。だが

「そこっ！」

「はあああっ！」

光の糸と風の矢によって、全員が撃ち落された。見ると、梨香と  
見た事の無い男が攻撃したようだった。

「令君。援護は任せて！」

「ああ！ ありがとう！」（戦場で新彼氏？ 梨香ちゃんやっぱス

ゲー！ 流石肉食系！

そう言い放ち、令は更に加速。由加達の陽動が功を奏したのか、敵の本拠地である大型艦へと至る道を一気に飛ぶ。

背後からの攻撃には全て太郎が対応してくれているが、子供の体になった太郎はどこか辛そうであった。

「太郎君。離脱して。後は僕で何とかする！」

「だ、だけだよ！」

「今は、太郎君の方が年下なんだよ。今度は、僕が守る番だ。太郎君が、ずっとそうしてくれたように！」

「令……。すまねえ。体が厳しい。落ちる！」

「うん！」

太郎が無事離脱したのを確認すると、令は速度を上げた。本拠地まではもう目と鼻の先だ。すると、令の接近に気がついたのか。

大型艦が空中に浮かび始めた。他の大型艦も大きかったが、これは更に大きい。だが、それ故に狙いやすかった。

打出ノ拳を顕現させて、全力で殴る。だが、硬い。船体が少し傾いた程度に終わってしまう。それと共に、大型艦の苛烈な攻撃が始まった。もはや、防御はない。令一人に全ての攻撃を集中させていた。流石に厳しい。

高速で移動するも、圧倒的な物量が相手では長くはもたない。短期決戦と行きたいが、敵は硬い。その時だった

「令！」

令の周囲を黒い無数の装甲が囲った。千冬の玄武甲だ。出来た防  
御空間に千春。千夏。千秋もそれぞれの式神に乗って現れた。

「苦戦してるようじゃない。手伝うわ」

「借りは返すよー！」

「僕等天才だからね。さっきの滅茶苦茶な合体から、ヒントを得て、  
三人で狙撃兵器となり合体形態を思いついたんだ」

「お前達……！」

千春の青竜が剣の形に変化し、その刀身を真つ二つに割った。そ  
の隙間に朱雀砲が入り込み、合体。

白虎爪は格部分に分かれ、砲身の固定器具となる。令はその上に  
着地し、紫の威光を発動。更に無装を顕現させ、

レールガンの形に変えた。朱雀砲からケーブルが延びてきてレ  
ールガンへと合体すると、レールガンが無効化し、  
トリガーと発射を連動させた。全てのエネルギーを朱雀砲へと集  
中。そして、守っていた千冬が悲鳴のような声をあげた。

「後十秒が限界！」

「了解！ 令、引き金を引くのはお前だぜ」

「ああ。わかってる！」

きっかり十秒後。玄武甲が弾け飛んで、再び夕日が流れ込んでき  
た。令は照準を大型艦に定め、

「良い夕日だ」

トリガーを引く。何倍にも増幅されたエネルギーが渦を巻いて大型艦へと直撃した。流石の硬い装甲でも、防げなかったようで

エネルギーは大型艦を一瞬で消滅させた。これで、今回の令の戦いは終わった。下から喝采が上がっているが、令は闇色の光に覆われている十文字本家を見つめ、

「後は期待してますよ。千島蒼二さん」

そう言うと体力の限界を迎え、前に倒れた。

## 第56話：最後に、握手を

「蒼二君。起きてください」

そんな声が聞こえて千島蒼二は目を覚ました。見慣れた部屋の天井。そう、千島家の自室だ。

視線の先には、女の子が一人。寝ぼけた頭で蒼二はその女の子の名前を口にした。

「朱音……」

「朱音……。じゃないですよ。何時だと思っているんですか」

御崎朱音がそこに居た。何故か、大人びていると思った。何故かはわからない。

そんな疑問はすぐに消え、蒼二はゆっくりと起き上がった。時計を見ると、午後二時。確かに起きるには遅い。

部屋にはベットが二つと勉強机が二つ。一つは自分のもの。もう一つは朱音のものだ。何か違和感。

「……なあ。俺、最近まで何してたっけ？」

記憶がこんがらがっている。頭の中に様々な情報が溢れかえっていて、上手く纏められない。

すると、朱音は持っていた洗濯籠を置いて優しく蒼二を抱きしめた。

「あんな事がありましたからね……いいでしょう。眠気覚ましには丁度いいかもしれませんね。」

昨日、蒼二君はやつと病院から帰って来たんですよ。神々の黄昏事件で、人間は本当に追い詰められましたから。

天美運命に千島藍。とても辛い戦いでした……。十文字戒が来てくれなかったら私達、今頃死んでましたよ」

朱音の言葉に蒼二の中に記憶が溢れかえった。神々の黄昏事件ラグナロクという鬼神集団と人間の戦い。

戦死者は過去最大規模。日本で最強の数の十名家の直系も何人が殺されてしまうという痛ましい事件だった。

九我山家の長女。五月家の長男、三女。二階堂家の損害が特に酷く、長男、三男、頭首までもが死んでしまった。

名だたる名家の直系ですら特に強かった三人の鬼神に殺されてしまったのだ。本当に恐ろしい事件であった。

「……いっぱい、死んだんだな」

「はい」

暫く無言の時間が流れた。朱音は蒼二の手をとって立ち上がらせてやり、

「少し、風に当たってきてはどうですか？ 今日、良いお天気です。私はこれから洗濯物を干すので」

そう言うと朱音は優しく蒼二の頭を撫でてベランダへと行ってし

まった。

一人残された蒼二は、一息つくくと部屋の戸を開けて廊下に出た。何時もの家だ。だが、何か足りない気がする。

階段を下りていく。リビングに入ると、妹の遥緋が板チョコを啜えてテレビを見ていた。

「あ、お兄ちゃん。おはよー」

「……おす。ンなもんばつか食ってるよと太るぞ」

「別にいいもん。時雨ちゃんも、私はもう少し太ってた方が好みだって言ってくれたし」

「は？ 何で時雨がそんな事言うんだよ」

蒼二がそう言うと遥緋が眉を吊り上げて、少し怒ったような顔で蒼二の事を見た。

「当たり前じゃん。だって、私。もう、時雨ちゃんの彼女なんだよ？ お兄ちゃんが複雑なのもわかるけどさー」

「……え」

遥緋の言葉に再び蒼二の中から記憶が溢れ出した。神代戦争の少し後だったか。何時の間にか、

遥緋と時雨は付き合いだしていたのだ。元々、蒼二と遥緋は子供の頃から時雨に懐いており、

付き合い合った事に対して何か昔の関係が無くなってしまったような気がして、随分とあの頃は遥緋と言い合いをしたのだ。

「あ、ああ……そうだったな」

「今日だってデートの約束だったんだけどさ。九我山さんちの長女、律さんだっけ？ あの人がこの前の戦いで

亡くなっちゃったから、時雨ちゃんお葬式行ってるんだ。私としては、結構複雑だけどね。律さんも時雨ちゃんの

事好きだった見たいだし。でも、亡くなっちゃった方を悪くは言いたくないし……」

ぼつぼつと語る遙緋に、蒼二は何も言えなかった。

そのまま踵を返し、「外に出てくる」というと、遙緋の返事は聞かずに靴を履いて、家の外へと出た。

ぶらぶらと歩き、地下一階にある朱音や遙緋とよく一緒に行く喫茶店へと入る。

「いらつしゃいま……せ」

ウェイターに声に一瞬の動揺。蒼二が見上げると、同級生の村松信吾が制服を着て立っている。

何故か、親しそうに手をあげて挨拶しそうになった。この同級生とは同じクラスだが、上手くいっていない。

一回殴りあいの喧嘩をして、蒼二が一方的に殴ってからは近寄ってこなくなったのだ。

「禁煙で」

「はい。どーぞこちらへ」

無愛想な対応に気を悪くする事もなく、蒼二は席へとつきこーヒを注文した。

今日は何処か上手く行かない。何かがおかしいと感じる。それでも、そのおかしさはよくわからない。

一度、蒼二は記憶を整理する事にした。二年前に秋月罪歌と知り合い、父を探す旅に出た結果、朱音と知り合った。

そして、神代兄弟と戦い、鬼神の存在を知る。朱音のお陰もあつてか、どうにか仲の悪かった父や妹とも和解し、

最後の戦いの時に、罪歌達の誤解も解けた。そして、この前まで神々の黄昏事件に関わっていた。

結晶を埋め込まれた男女。名前はよく覚えていないが、一度だけ共闘した。そして、祖先との出会い。

結果的に九尾の狐。ラグナロクを自分達は滅ぼしたのだ。

(千島藍か……。親父達が結局最後は倒しちゃったけど、あいつは強かったなあ)

今でもあの恐怖は覚えている。冷房が効きすぎているのか、はたまた恐怖からか、寒気を感じた。

それから目を背けて、コーヒーを啜っていると、再び店のドアが開き、知った顔が入ってきた。

「ういつす。何やってんの?」

「暁さん。ういつす」

朱音の兄の御崎暁が笑顔で蒼二の方へと歩き、正面の席について同じくコーヒーを注文した。

「学生が羨ましいぜ。こっちは、このクソ暑いのにこんな格好で外回りだしよ」

暁はそういい、タバコを一本口に咥えると着ていたダークスーツを指差しておどけた。

蒼二はこの暁が嫌いではなかった。朱音の兄なのだ。まず嫌えるわけが無い。暁も暁で蒼二を

弟のように可愛がってくれている。時雨の他に唯一兄貴分として頼っている大切な存在だった。

「お疲れさまです。今日は、ナナシや剣菱さんは一緒じゃないんですか？」

「あいつなら、今日は休み取ってた。やっぱり、あいつも鬼神だからな。ラグナロクや九尾の狐の鬼神を

ちゃんと叩いてやりたいって、今頃ユグドラシルの跡地に居るんじゃないかな。剣菱は、仕事辞めて二階堂特区に

行ったよ。俺らが昔可愛がってやった子がついに天涯孤独になっちゃったらしくてな。これから、一緒に暮らすんだとよ」

御崎戦争にて、敗北した御崎家は家の歴史に終止符を打った。朱音と暁はと剣菱は浅葱家に雇われており、

狂や罪歌やナナシは八神家で暮らしている。まだまだ、他の家からの扱いは悪いが、ここ数年でこれでも随分マシになった。

「大変そうっすね。……俺も、将来どうしようかなあ」

「千島は継ぐのか？」

「一応、長男なんでそのつもりです。ただ、ウチの駄目親父がなあ……。もう働きたくないの一点張りです」

「あのおっさんも、もう一人子供でもできりゃ、変わるんだらうけ

どな」

そのまま、暁との会話を終えると一緒に店を出て蒼二は一度家に帰宅した。すると、家の前に見慣れた車。

時雨のよく乗っている車だった。近づくと、軽くクラクションを鳴らされ、時雨が窓から顔を出した。

「やあ、蒼二」

「おお、時雨か。どうしたんだ？ 葬式だって遥緋から聞いてたけど……」

「ん。……まあ、ちよつと早くついたからね。今日は一応、デートの約束してたし。約束は守ろうかなって。

……いや、ごめん。ちよつと蒼二に無神経すぎたかな。やっぱり、家にまでこられるのは嫌だったかい？」

時雨が少し気まずそうに蒼二を見て言う。兄とその弟と妹のような関係とは違い、今は男と女の関係。

最初は何か嫌だったが、今ではそうでもない。むしろ、ここまで気を使える兄貴分の事を更に尊敬した。

「いいや。楽しんできてくれよ。今日は親父も母さんもいないみたいだし、久しぶりに朱音と二人なんだ」

「ん……。それにしても、何か変な気分だね。蒼二と僕が、こんな会話をするなんて」

「そうだな。俺達も、少しは大人になったんじゃないの？」

時雨とお互い笑いあっていると、玄関から慌てた遥緋が飛び出してきた。蒼二は手を振ると時雨に背を向けた。

珍しく遥緋も気合の入った服装をしている。小声で「せいぜい頑張れよ」と声をかけると、遥緋もニヤリと笑い、

「今日、帰らないかも」

と小さく呟いて時雨の車に乗ってしまった。あの妹がそんな事を言うとは思いつかなかった。

気がつかないうちに変わっていく。蒼二自身も、周りも。車が走り去ると同時に、家の玄関をくぐった。

靴を脱いで、家にあがる。リビングに行くと、奥にあるキッチンでは朱音が料理をしていた。

「ただいま」

蒼二がそう言うと、朱音も顔を上げて笑顔を作ると、

「お帰りなさい。蒼二君」

優しくそう言葉をかけた。蒼二の中に暖かい感情が芽生える。素直に言える、俺は今幸せであると。

御崎朱音が愛おしい。世界中の何よりも。朱音と一緒になら、何も怖くない。ずっと生きていける。

「今日は遥緋ちゃんが居ませんからね。久しぶりに、二人きりですね」

「ああ。本当に、久しぶりだ」

何故だか、涙が零れた。

それから数年後、蒼二と朱音は結婚した。

仲間達も何人か結婚している。意外だったのが、暁の結婚相手。どのような経緯を経たのか、驚く事に

梨香といきなり結婚をしていた。時雨と遥緋は高校卒業と同時に結婚しており、子供が一人居る。

蒼二は蒼威から千島家を任せられ、現在最大の懸案事項である海外勢力の侵攻に対して、八神と手を組み

十名家の半分以上と結託した。戦いは未だ小競り合いで済んでいるが、それもそろそろ限界を迎えている。

「ククク！ 最高に笑えるわね！ 外人風情に金で魂を売るなんて！ 本当に賞金稼ぎってクズすぎるわ」

「お、お姉ちゃん……。喋りながら壁を壊すのやめなよ」

会談にて、五月風香が最近手に入れた情報を話しながら自分達の居る建物を壊し始めたので

慌てて全員で止めた。蒼二がそれを呆れた目で見ていると、近くに居た三枝万里が暗い顔で話しかけてきた。

「すみません……。風香さんは、颯太さんと舞香さんが亡くなってからずっとあんな感じなんです……。相当ショックだったみたいで」

「確か、神々の黄昏事件で亡くなった長男だよな」

「はい。我々十名家はあの事件で多大な被害を被りました。九我山の律さん。五月の颯太さん。舞香さん。そして、二階堂の直系の壊滅……。それだけではありません。四条の頭首もあの戦いの後から行方不明。本当に、辛く悲しい戦いでした。その傷も、未だ癒える事はないです。舞香さんだけじゃなく私も含めて」

よくよく見てみると、五月風香の目には深い悲しみの色が見えた。三枝万里も、話していてどこか辛そうだ。

心がひどく痛んだ。よく知らないのに。殆ど会ったことも無いのに、蒼二には彼等の死がとても悲しい。

そんな事があり、会議は終わった。結局、その後数年は小さい小競り合いはあったものの、教会の侵攻は無かった。

千島蒼二は思う。

色々問題はあるが、この世界が好きであると。それは、子供が生まれたからであろうか。

千島蒼二と千島朱音の子　千島蒼介。朱音の体の都合上、二人目は厳しく、蒼介は一人っ子となった。

だがそれでも、蒼二は出来る限り家にいた。朱音にはもう、戦いから退いてもらい、遥と一緒に家事を担当して貰っている。

遥がここ数年病気がちだからだ。

「何かね。蒼二と遥緋が結婚したら、安心してどっと今までのツケがきちやっただみたい」

その言葉に蒼二はこっさり涙した。家の生業上、何時死ぬかわか

らない。でも、自分は力になれない。

遙は蒼二達が戦っている間、ずっとその重圧に耐えてきたのだ。蒼威も完全に仕事を辞め、遙と一日を過ごす

事に全力を尽くしている。蒼威は本当に遙の事を愛しているのだ。両親の強い絆に、蒼二は朱音と自分を重ねた。

だが、幸せなはずなのに。満たされているはずなのに。蒼二の心には何時も何かが引っかかっているのだ。

「ちょっと、散歩しねえか」

朱音の手を掴む。温かい体温が伝わってくると共に、気持ちも温かくなった。だが、何かが引っかかる。

「ええ。いいですよ」

朱音と蒼二は並んで町の中を歩き出す。

高校生の時からずっと住んでいるこの町は、蒼二の中でも大切な場所のひとつだ。

だが、何か他に大切な場所がある気がしてしまう。これよりも、もっとずっと愛おしい場所が

「お兄ちゃん」

声が、聞こえた。

「お兄ちゃんってば」

視界の端に、子供の姿が見えた。全く見た事もない子だ。だが、見た事がある気がしてしまう。

蒼二の視線に気づくと、子供は走り出してしまった。今は、朱音

と手を繋いでいる。この手は、離してはいけない。

心がそう叫んでいると同時に、子供を追いかけるとも叫んでいる。

「蒼二君……？」

「っ！」

蒼二は手を離し、走り出した。

全速力で、緋眼を使い、がむしゃらに子供を追いかけていく。子供はありえないくらい早い。

ほぼ自分と同じ速さだ。一向に差は縮まらず、開きもしない。それでも、子供は路地を駆けて行く。

暫くそれが続くと、開けた場所に出た。公園が近くにあるマンションだ。見た事がないのに、見た事がある。

「ほーら！ 悠華！ そっちいったよー！」

「よっしやあああ！」

公園では母親と娘らしき子が、キャッチボールをしていた。とても、楽しそうで、幸せそうに見える。

休憩も兼ねて蒼二が公園の中に入ると、娘がボールを変な方向に投げてしまい、それは蒼二の方へ。

「すいませーん」

母親が駆け寄ってくる。蒼二はゆっくりとボールを拾い、顔を上げて渡そうとすると、硬直してしまった。

何処かで見えた事がある。小柄でショートカット。特徴的な瞳。大人とは思えない程の童顔。

「あ……」

涙が溢れ出てきた。何か大事な事を忘れていた。

それでも、やっと思い出せた。心が、体が、彼女の事を覚えていた。そう、天美命がそこに居たのだ。

ここは、現実ではない。まやかしの場所。もう、決めた筈だった。御崎朱音の居ない世界で生きていくと。

「おめでとугоざいます」

命の体が幻影のように消え去り、風景も変化していく。闇が周囲を侵食し、満点の星空が見えた。

蒼二は、夜の草原に居た。だが、ライトアップされたようにそこは明るい。光源は星だけの筈なのに。

誰かが歩いてくる音がして、振り返るとそこには御崎朱音が居た。先程までの大人の姿ではなく、あの時のままだ。

「お久しぶり、というべきでしょうか？」

「そうかもな。やっぱり、アレは嘘だったんだな」

悲しそうに朱音を見ながら、蒼二はそれでも笑った。

「あれは、貴方が”御崎朱音”を救えていた時の未来ですよ。幾つか可能性があったうちの、一つです」

御崎朱音を救えていた未来。よくよく思い出してみれば、相違点がかかりあった。

剣菱達が生きている代わりに、十名家側に何人かの死者が出てい

た。あの場で神代を倒した為に、

神璽と由加とそこまで関わらなくなった。郁人とも、そこまで仲良くならなかった。それが、あの未来。

「貴方は、世界わたしに勝ちました。あれは私が見せていた幻覚です。流石に、時を越えられるのは不味いんですよ。

魔具というバグにも困ったものです。ですから、この場合にだけ限り、私はルールを犯し、介入するんですけどね。

しかし、弟君凄いですねー。あんな人間初めて見ましたよ。ま、そのお陰で貴方は私に勝ったんですけどね」

その言葉を聴いて、蒼二は目の前に居る朱音が大体どんな存在なのか理解した。

それを踏まえて、一つ。

「お前は、ただ朱音の姿を借りているだけなのか？」

「先程までのあの未来での御崎朱音は本物です。今だって、大半は本物なんですよ？

私も忙しくてですね。この会話はプログラムですし。この会話の内容以外の話題の時は、本物の御崎朱音です」

「そうか……」

「今まで何人かが私と戦いましたが、勝利したのは貴方達が初めてです。ですから、貴方達に資格を与えます。

時を越える魔具で過去を戻す資格を。ま、私にはもう、貴方がどうするかわかってるんですけどね。

ですから、この姿で現れたというのは私なりの最大級の贅辞です。

この”世界”わたしに勝った珍しい人間という事でね」

「よくわからんが、もういい。朱音と最後に話をさせる」

「はいはい。貴方がこの話題やめれば自動的に切り替わるんですけどね」

そう言うと御崎朱音は一度黙った。蒼二も一度黙り、頭の中で内容を再確認した。ここが、ある意味では終着点。

だが、蒼二は止まるつもりはない。これからも、進み続ける。だからこそ、ここで一度けじめをつけたかった。

「よお、朱音。本当に久しぶりだな」

「ええ、お久しぶりです。本当にまあ、遅しい男性になっちゃって。あの頃のヒネた子供と同一人物とは思えません」

「そんなに変わったかな？」

「変わりましたよ。こうして見ているだけで、蒼二君の成長がわかります。きっと、幸せなんでしょうね」

「……もう、結婚して子供も居るんだ。嫁さんはお前と違って、チビで童顔だけど怒るとめっちゃ怖くてな。嫁さんはお前と違って、チ

娘は蒼華ってんだ。目つきの悪さが俺に似ちゃってさ……女の子なのに……煉次なんか、既に捻くれててな……。

他にも……色々あったぞ……遥緋は莉王と結婚したし、時雨も律と……光希って弟も生まれたし……」

途中から涙声になってしまった。何時の間にか、下を向いて涙を零しながら蒼二は朱音に語っていた。

まだもつと、語りたいた事は沢山ある。泣いてる場合じゃない。だが、蒼二の心は決壊していた。

すると、ふと頭の上に手が乗せられた。朱音の手だ。あの頃と変わっていない。何時も、朱音はそうだった。

自分の心配をしてくれた。自分の話をちゃんと聞いてくれた。弱気になれば慰めてくれていたのだ。

「頑張りましたね。遥緋ちゃんがあの変人と結婚したのは驚きですが……」

「朱音……」

頭から手が離れた。蒼二はそれに気づき、再び朱音を正面から見据え、指で涙をはらう。

「行くんですか？」

「ああ、俺はお前の居ない未来を生きていくよ。全部背負って、死ぬまで世界の安定の為に生きると決めたから」

「まだ、その約束覚えていてくれたんですね」

「当たり前だ。こう見えて、義理堅い方なんだぜ」

「そういえば、そうでしたね。蒼二君は、そういう人でした。だから私は、貴方に託す事ができたんです」

そう言つと、お互いに笑みを漏らした。あの頃に戻ったかのような懐かしい感覚。

だが、もう戻ってはいけないというのはお互いわかっている。だ

から、と蒼二は一步前に出た。

「お別れだ。最後に、握手を」

「はい」

朱音の手を握る。あの頃と、同じ感触。心が落ち着いていく。蒼二は笑顔を作り、朱音もそれに笑顔で返した。ゆっくりと朱音の体が消えていく。同時に、蒼二も消えていく。お互い、自分の在るべき場所に帰るのだ。

「蒼二君」

「何だ？」

「貴方の進む道が正しい道かはわからない。でも、貴方が正しいと思っただ道を進んでください。それが、蒼二君の世界の真実ですよ」

「……ああっ！」

そして、二人の姿が完全に消えた。

## 最終話：13分35秒の奇跡

千島蒼二はゆっくりと、目を開けた。

見えるのは、星空。ここは、宇宙だろうか。だが、呼吸は出来る。下は透明になっていてわからない。

先程までの鮮明な記憶はまだ残っている。御崎朱音を救っていた未来。そして、最後にした会話。

蒼二は選んだのだ。あの未来よりも、この未来を。かつて、愛しかった人との未来を選択せずに。

「お兄ちゃん！ 良かった！」

近くに立っていた光希が、蒼二が目を覚ましたのに気づいた。蒼二は暫くそれを黙ってみていたが、

やがて一つの不自然に気がついた。何故、ここに弟が居るのだ。まだ、あの夢の続きなのか？

と思うも、あの朱音が行っていた。弟君が云々と。だから、この光希は本物なのだろう。それはわかっているが

蒼二はどうも弟が一回り大きくなったように感じた。子供っぽかった弟が、男になりかけている瞬間というのだろうか。

「光希、どうしてここに居るんだ？」

蒼二がそう聞くと、光希は少し離れた場所に立っていた未希を手で指し示した。

釣られて未希の姿を見る。未希は何故かビクツと震えた。それで

も、蒼二の視線から逃げる事はない。

未希の姿は、写真で見た希という少女によく似ていた。これが、今回の事件の発端の子なのだ。

何処にでも居る、普通の女の子にしか見えない。蒼二は威圧はよくないと思い、座ったまま喋りだす。

「君が、十文字の未希ちゃんかな？ 俺は、光希の兄の千島蒼二だ。ユニオンの長もやっている」

「お兄ちゃん。あんま未希ちゃん睨むのやめてね」

「に、睨んでなんかねえよ！ 個人的に、結構フレンドリーに接してるつもりなんだが……」

光希の突っ込みに、蒼二は内心傷ついていた。睨んでないのに、頑張っ接しているのに、

どうしてここまで子供に嫌われるのだろうか。やはり、笑顔の練習は大事なかもしれない。

そんな事を思い、すぐに頭の中で打ち消すと蒼二は会話を続けた。若干、笑顔と言う名の薄ら笑いを浮かべて。

「ここまで来たと言う事は、全てわかっているという事かな？」

「はい。私がした事で、外がどうなったか全て見てきました」

「それを見て、君はどう思った？」

「辛く、悲しい戦いでした。本当に、それしか思えなかったです。その一端に、自分の責任がある事も

理解しました。だから、私は此処へ来ました。お父さんを止める為

に。ユニオンの代表に、謝罪する為に」

頭の良い子だ。と蒼二は判断した。この年頃の子供が話せるような内容ではない。

この後どうするかは既に頭の中にある。第三勢力が外で進行している事も。大体何なのかはわかっている。

最低限の処理だけ済まし、後は仲間に託して此処まで来たのだ。

「未希！」

そんな事を考えていると、十字戒が離れた場所から立ち上がった。森羅万象を発動させ、油断無く

蒼二達を睨み付ける。あれだけの怪我をしているのに、よくここまで余力があるものだ。と蒼二は感心した。

(子供への愛、か……)

式神を構えている父を、未希は正面から見ている。戒も、娘の様子がおかしい事によろやく気がつく。

森羅万象を解除し、ゆっくりと未希に向かって歩いていく。未希も、歩き出した。段々と速度が速くなり、

未希は走って戒の胸へと抱きついた。戒も、優しくそれを受け入れて、腰に手を回す。

「お父さん……ごめんね。私の所為で……」

「いいんだ。これぐらい平気だよ。もう少し待っている。今、お母さんに会わせてやるからな」

戒が蒼二を睨んだ。蒼二も油断無く腰を落とし、構えをとる。だ

が、戒の袖を未希は引つ張った。

目に涙を溜めて、戒の事を見ると震える声を絞り出しながら戒へ  
と思いを伝えていく。

「お父さん。駄目なんだよ……過去は、変えちゃ駄目なんだよ」

「未希……」

未希は下げていたバッグから一枚の封筒を取り出した。見た事がある。卒業式に戒が受け取った感謝の手紙。

未希から貰ったものは、家の金庫に大切に保管してある。という事は、これは母への手紙。

出したいけど出せなかった母への感謝への手紙だった。それを、大切そうに未希は抱きしめると、

「本当はね。お母さんに伝えたかったただけの。お母さん居ないけど、私は大丈夫だよって……」。

皆が居るからね。偶に寂しいけど、泣いちゃうぐらい寂しくないよって。お母さんの事、覚えてないけど大好きだよって」

「……そう、か」

戒は未希を抱き寄せると、再び抱きしめて頭を撫でてやる。今回の件は、この子に辛い思いをさせてしまった。

戒は今でも希の事を愛している。だが、どこか諦めていたのだ。希は、奇跡のような存在であったから。

未希を希に会わせてやりたいというのも本物。だが、もう戒も慣れてしまっていたのだ。希のいない世界に。

そして、怖かった。あの時、守れなかった希を再び愛すると事を。それを隠し、未希の為と全てを偽っていた。

戒は、蒼二に向き直る。せめて、娘だけは守る為に。膝をつき、更に手をつけて頭を下げた。

「千島蒼二」

「何だよ」

「十文字派は、ユニオンに全面降伏する。賠償として、十文字の全権限。全魔具。十名家システム。

その全てをユニオンに委譲する。だから、俺の仲間とこの子の命を奪うのは勘弁して欲しい。

それでも足りないと言つのなら、俺の命を持っていくがいい。だから頼む。他の奴等は見逃してやってくれ！」

「私からも、申し訳ありませんでした！」

未希も戒を習って手について頭を下げた。光希のじとつとした視線が痛い。これでは、確実にこちらが悪人だ。

だが、こちらもユニオンの長だ。組織を運営する者として、中途半端な同情や態度は絶対にしてはいけない。

たとえ、子供の目の前であろうとも。蒼二はゆっくりと歩き、戒と未希の下まで行く。

「十文字派は、完全にユニオンの傘下に入ってもらふ。勿論、先程の権限。魔具。システムも当然貰いつける。

そして、事の発端の十文字家に関しては、現在建設中の舞浜特区完成までの無償奉仕と技術提供を

してもらふ。お前達の魔具凄いな。あれさえあれば、舞浜特区は俺の理想形に更に近づくとこの事で。

あ、後。もう頭上げるよ。親子の土下座なんて、正直そんなに見た

いもんじゃねえしな」

戒の腕を引つ張り、立たせる。驚いたような表情をしている戒は、蒼二から目をそらす。

「いいのか？ 俺は、お前の父親を多分……」

「あのおっさんならピンピンしてるらしいぞ。それに、これでようやく引退してくれんだろ。」

「やっつと、ウチの母さんも安心できると思うわ。光希もお父さんがずっと家に居る方がいいよな？」

「何だかんだで何時も居るけどねー」

光希の言葉に蒼二は苦笑を隠せなかった。戒と未希もそうだったらしく、こんな場所なのに笑いが漏れる。

蒼二は懐からタバコを取り出し、火をつけてゆっくりと座り込むと、未希を見た。

「全てを背負う覚悟はあるかな？」

「……は？ 何の話ですか？」

「君が、過去に行くという話だ。折角、ここまで来たんだからな」

「い、いやだつて！ 過去を変えるのは駄目だつて……！」

「変えなきゃいいんだ。会うぐらいなら、何も変わらない。これは、ある意味残酷な提案なんだぜ。」

君は、お母さんを見殺しにしなければならぬ。死ぬと分かっている

るのに、救ってはいけないんだ」

「っ」

「お兄ちゃん！」

光希の厳しい声が飛ぶが、蒼二は気にせず続けた。戒も蒼二の言いたい事がわかったのか、静かにしている。

「それでも、それが君の幸せな未来に繋がるならば、君は過去へ行くべきだと思う。

全てを知って、全てを背負って、未来を生きるんだ。それは、確かに価値ある事だと、俺は思うんだ」

蒼二の言葉が胸に響いた。未希は暫く黙考する。自分の理想の未来を思い浮かべる。

数分が経っただろうか、未希は顔を上げた。決意を込めた瞳で蒼二を見据え、答えを出した。

「私、過去に行ってきます」

蒼二達は空間内をくまなく探し、一つの扉を見つけた。古めかしい扉だ。その割りに上の部分にはモニター。

モニター部分には、数字が表示されている。『13:35』と。戒が予想するに、これは過去に居られる時間だ。

あれほどの反意思を注入しても、この程度の時間しか過去に存在する事が出来ないのだ。時を越える魔具が

どうして文献でしか残っていないのかがよくわかった。過去の十文字では、これを扱うのは不可能だ。

精々、数秒が限度。しかも、蒼二が体験した世界との勝負に負けていたと予想する。すなわち、過去を変えた者は居ない。

「準備できたか、未希」

「うん。ちゃんと、手紙を魔具にしたよ」

「そうか……」

「お母さんに会ったら、伝える事はある？」

「愛していた。そして、守れなかった事への謝罪を」

「わかった」

そこで一旦未希と戒の会話は途切れた。そして、未希が扉を開けようとする、戒は低く呟いた。

「希は、お前の成長を楽しみにしていたよ。だから、きっと喜んでくれると思う」

「うん。じゃあ、行ってきます」

蒼二と光希にも手を振り、未希は扉を開けた。そして、白い空間

目掛けて勢いよく飛び降りていく。

座標の修正や、時間の設定等は戒が全てやってくれている。落ちていく感覚の中で、時たま映像が見える事がある。

未希自身の少し前の映像から、小さい頃の事。未希自身が覚えていない映像も見えた。本当に、過去を遡っている。

やがて、希の葬式をやっている映像が見えた。まだ若い皆が泣いていた。今では想像できないような大声を上げて。

「お母さん……」

皆に本当に愛されていたのだ。自分の母は。当事の未希は、千春の腕の中ですよと眠っている。

そして、映像が終わると世界が見えた。見た事のない町だ。ここが、母の亡くなった上泉町だと認識した。

ゆっくりと降りて行くと、かつての父達が絶叫しながら町を破壊しているのが見えた。全員が泣いている。

声を上げて、全てが嫌になったかのように。辛かったが、未希は目を背けなかった。これは、実際に起きたことなのだ。

「……」

やがて、ゆっくりと着地。急がなければならない。13分35秒後にかつての戒達が来る時間に設定したのだ。

戒達と会ってしまったのは、過去が変わってしまう。未希は路地をこそこそと歩き、ついに母の姿を見つけた。

ボロボロで存在がぶれている。偶に、光り輝く存在になったと思えば、人間らしい外見をどうにか保ち続けていた。

その胸に抱かれているのは、自分自身。母は、自分を安心させる為に、頑張って人間の形を保とうとしていたのだ。

「じゅめんね……」

母の声が聞こえた。予想していた声よりずっと幼い。その声に釣られるようにして、未希の足は勝手に進んだ。

その気配に気づいたのか。希は未希を守るように抱きしめ、警戒するような声を出した。

「どなた？」

「あ、あの……その……じゅ、十年後の……その、十文字、未希です」

ただたどしく言うが、未希の心は絶望に染まっていた。いきなりこんな事を言い出しても、信じてくれるわけがない。

まずは、信頼してもらおう事が重要だった。緊張しすぎて、頭の中身が吹っ飛んでしまっていた。

30パターン程会話内容を考えていたのに、いざ会ってみればこのザマである。恥ずかしくて、まともに顔が見れない。

「あら……お顔見せてくれる？」

「は、はい」

何故か乗ってきた。未希は警戒されないように無防備を示して近づき、しゃがんで母と視線をあわした。

自分に似ている気がする。年もかなり近い。当たり前だ。母といふよりも、姉といった方が理解されやすいだろう。

希は暫く未希を見ていたが、やがて綺麗な笑顔を作ると姿勢を正して上着を脱ぐ。優しく畳んでその上に、

十年前の呑気にすやすやと寝ている未希を置いた。

「お久しぶり……の方が正しいかな？ 私の事、覚えてる？」

「信じて、くれるんですか？」

「当たり前じゃない。自分の娘だもの。わからないわけないじゃない」

母の手が、未希の頭の上に置かれた。それだけで、ずっと我慢していた心が決壊しそうになる。

駄目だ。泣いちゃ駄目だ。迷惑がかかる。それでも、涙が零れた。嬉しいのに、悲しくないのに、涙が止まらない。

「お母さん……」

「うん」

「お母さん……！」

「うん」

「お母さん……お母さん！」

泣き叫び、未希は母に抱きついた。わんわんと泣き喚き、子供の頃に戻ったかのように泣いた。

ひとしきり泣くと、心が落ち着いた。泣き叫ぶ事で、ようやく心が冷静に戻った。母の温もりが愛おしい。

離れたくは無かった。それでも、残された時間は少ない。未希は体を離すと、

「魔具でね。時を越えて来たんだよ」

「あらー。そうなの。便利な時代ねえ」

「でもね。やっちゃいけない事だったの。色んな人にいっぱい迷惑かけちゃった」

「……そう。そうだよ。ちゃんと、謝れた？」

「うん。謝った。一年間ぐらいね。お仕事のお手伝いしたら、許してくれるって」

「そう。偉いわね。ちゃんとごめんなさい出来る子になってくれたんだ」

「来年から中学生だし。……だから今日、これを渡しにきたんだよ。お母さんへの感謝の手紙」

未希はバッグから、魔具の手紙を取り出した。母に渡し、開けるように促す。

希が封筒を開くと、光が飛び出した。キラキラと綺麗に輝く光達へ、すぐに希の中に吸い込まれていく。

そして、希の中に未希の全ての記憶が溢れかえった。この十年。未希が見てきた全ての物が希に伝わっていく。仲間の事。愛する家族の事。今日どうやってここまで来たのか。希は瞬時に理解し、未希を抱きしめる。

「皆……バカだよ。私なんかの為に、あんなにボロボロになっちゃって……迷惑かけて……」

母が泣いているのを未希は理解した。必死に抱きしめ、未希もまた泣いた。暫く二人ですすり泣く声が響く。  
未希の先程作った時計のアラームが鳴る。残り、五分だ。そろそろお別れしなくてはならない。

「時間？」

「うん。……後五分で、帰らなきゃ」

「そうなんだ……」

一瞬の間が空く。ついに耐え切れなかった未希は、涙を零しながら話し始めた。

「ごめんなさい……お母さん、助けてあげたいけど。駄目なの。過去は変えちゃいけないの！」

命への冒涇なの。お母さんの体治して、助けてあげられるけど、私、お母さん助けちゃいけないんだ……」

「うん。わかってるわ。だからね。最後にお母さんのお願い一つ聞いてくれる？」

「う、うん。何でも言って！」

「お母さんを魔具にしてほしいの。お母さんの気持ちを手紙の魔具にして、未来に伝えて欲しいの。」

お母さんも思うんだ。確かにね。過去は変えちゃいけない。でもね。未来は変えてもいいんだよ。

お母さんの思いが未来に届けば、きっと皆踏み出してくれる。過去じゃなくて、ちゃんと未来を見てくれる」

希は、未希の頭に優しく手を置いて髪を撫でてやる。それが嬉しくて。堪らなく落ち着いて。

「だから、お願いしていい？」

「……………うん」

「ごめんね。未希ちゃんには……………辛い思いばかりさせちゃって。本当はね。参観日も行ってあげたかった。お誕生日には、好きなもの作ってあげたり、好きなものを買ってあげたりしたかった。良い事をしたら、褒めてあげたかった。もっともっと、ずっと愛してあげたかった！」

希は未希を思い切り抱きしめ、自分の思いを伝えた。それで、もう後悔はない。死ぬのも怖くない。

未希が、会いに来てくれた。十年後から時を越えて。もうそれだけで、自分の最後の心残りは満たされたのだ。

「お母さん……………お母さぁん！」

時間的に見ても、母の残りの反意志の残量を見ても今逃せば全てが終わってしまう。

未希は、意を決して魔具の力を発動。母の思いを掬い、それを形にする。初歩的な魔具の応用だが

未希は油断する事なく、一つ一つの工程を愛しみながらこなしていく。やがて、希と未希の体が光を帯び始めた。

ねえ、お母さん。

お母さんが居なくて、辛いよ。

寂しいよ。

悲しいよ。

偶に泣いちゃう事だって実はあるよ。

でもね。

私には皆が居るよ。

お父さん達は心配性でね。

小さな事ですすぐ大騒ぎするの。

遠音ちゃんは、それを見て何時も呆れてるの。

凜ちゃんとか他の皆も、優しいんだよ。

心配しなくても平気だよ。

うん。

だけど、安心して。

私は、幸せだからね。

エピソード：The past should give us hope) 昔

これまで応援してくださった皆様に最大限の感謝を。  
本当にありがとうございました。

十字架とユニオンの抗争から、半年が経過していた。

ユニオン代表、千島蒼二は静かな殺気を発しながら、招待されたホテルのスイートルームに座っていた。

正面に居るのは、教会アジア支部の支部長だ。完全に蒼二に萎縮しており、忙しなくハンカチで汗を拭っていた。

「24人だ」

ずっと黙っていた千島蒼二が、ぞつとするほど冷たい声でそう呟いた。萎縮しながらも支部長は、疑問を声に出した。

「どういう意味でしょうか……」

「この前の戦いで、ユニオン側の死者数です。よくもやってくれましたよ。日本の首脳陣からの依頼を盾とし、

俺達の仲間を24人も殺してくれたのですからね。あれは、避けられるべき戦いでした。俺達は十字架派の戦力を

ほぼ全部削いでいたし、後は彼等が行為を止めてくれれば、話し合いという形で一応は幕を引いたというのに」

「それですが、我々は依頼された身ですので、あくまで日本の首脳陣に責任があるのでは？」

支部長がそう言い返すと、蒼二は本気で支部長を睨みつけ、

「その首脳陣の記憶を探ってみると、散々貴方達が彼等をそそのかしているような記憶ばかり出てきたのですが」

そう言い返す。流石に、そこまで探られていては支部長も二の句が継げなかった。そのまま、蒼二は冷たい目で

支部長を睨みながら言葉を続けていく。

「我々は、報復として貴方達教会側の執行者狩りを行わせて頂いている。きつちり、24人です」

「な……!!」

蒼二が横に居た部下に目配せすると、空間上に幾つもの映像が浮かんだ。その数、きつちりと24個。

映っているのは幹部全員と、ユニオンでも戦闘力の高い式神使いばかり。その足元には、教会の人間が24全ての

映像の中に倒れ伏していた。流石に支部長もこれには声を荒らげた。

「ユニオンがそのような態度ならば、こちらも対応の対応をさせていただきますが!」

「最初に潰そうとしてきたのは、そちら様です。我々はできれば、これで今回の件については水に流したい考えなのですがね。」

そこまでやりあいたいならば、我々は本気でそちらを潰します。容

赦なく、徹底的に」

「それが、ユニオンの本質なんだな！ 鬼神の保護や世界の安定を謳ってはいるが、やはり我々を潰して　　！」

とまで言いかけた所で、蒼二は机の上に足を思い切り乗せ、その音で支部長を黙らせた。

「お前達は何も学んでいないようだな。ここ十数年で起きた様々な大きな事件の引き金の大半は、お前達教会の行為の積み重ねだ。神代戦争も、神々の黄昏事件も。全て根底にあったのは、鬼神への迫害からくるものだった。

このまま、お前達をのさばらせておけば、何時かきつと取り返しのつかない事になる。だから、俺はユニオンを作った。

世界の安定の為に。少しでも多くのこの世界に生きる者達が、安らかに生きていけるように。この世界は、変わらなくちゃならないんだ！」

凶星をつかれた支部長はついに激昂し、

「では仕方ない！ お前達、この男を殺せ！ 責任は全て私が持つ！」

と言った瞬間に、背後に居た部下の一人に殴られて、首が変な方向に曲がった。正面に居た蒼二は、特に表情を変えない。

それに感心したのか、部下の男はパチパチと寒い拍手を送り、堂々と死体となった支部長の横に座った。

「驚かないのですね」

「アンタからは嫌な気配を感じたからな。絶対、何かするだろうとは思っていたよ」

「ほお……。ともあれ、我等の支部長が申し訳ない発言をした。我々教会側は、今回の件についてはユニオンに謝罪しよう。」

だが、我々にも我々の正義や、思想がある。きっと、これからも相容れないでしょう。その時は、戦うという事で」

「ああ。わかりあえないのならば、どちらかが滅ぶしかない。その為の悪ならば、俺はそれを背負って死んでいく」

「私もそのつもりです」

そして、会話が止まった。蒼二はもう用事はないとばかりに立ち上がると、部下を引き連れて部屋から出て行ってしまった。

後に残されたのは、物言わぬ死体。部下だった男。変わらず部下な数名の男達。

「サリア様。これで、よろしかったのですか？」

部下の一人が、座っていた男。サリアに声をかけた。サリアは、忌々しそうな表情を作る。だが、口は笑っていた。

「千島蒼二の目は本気だった。あの男の言った言葉は全部真実だよ。だからこそ、怖いんだ。日本はバグが二つもあるからね。」

執行者の数も随分と減らされちゃったし。また、鍛えてくしかないよねえ……。それに、完全にユニオンに嫌われるわけにはいかないでしょ？」

「一番の事でしょうか」

「そう。太宰巡がユニオンの傘下に入ったみたいだから、暫くはユニオンに逆らわずに平和にやっていきたいね。  
そして、チャンスがあれば一気に攻め入って、アレを取り戻す。その為なら、執行者24人ぐらい安いもんだよ」

サリアはそう言うと、指を一度弾いた。それだけで、蒼二が座っていたソファアーが白い炎に包まれ、一瞬で燃え尽きた。

### 都内某所・ファミレス

「でさ。お父さんと遠音ちゃんったら、凄いきくしゃくしてるのよ。五秒以上会話続かないし。

何だかんだ理由をつけて、なるべく一緒に居ないようにしてるし。信じられる？ お母さんが

手紙で、お父さんの事をよろしく頼むって言ってるのに。凜ちゃん何かはやっと肩の荷が下りたみたいでさ。

婚活ブームにあやかって、ようやく結婚する気になったみたいなの

よ。それなのに遠音ちゃんときたら……」

ファミレスの奥の二人がけのテーブルにて、未希はマシニングのようにまくし立てた。

正面に座っている光希は、相変わらずニコニコ笑いながら、素直に未希の話に耳を傾けている。

「男のプライドと、女のプライドかな。お父さんは、どう声をかけていいのかわからないし。」

遠音さんも、アプローチしたいけど。それは恥ずかしい行為だと思っっているんじゃないかな」

「光希って結構男女関係に関しては、大人よね……」

「神璽にーちゃんが色々教えてくれるから」

「神璽さんって、あの幹部のイケメンよね。あそこまで内面と外見のギャップが激しい人も珍しいわ」

「あーもう」と未希は頭を掻いて暴れた。季節は夏なので、当然服は薄着だ。目のやり場に困った光希は

笑顔のまま、視線を落とすと、未希が首からさげているアクセサリーが目についた。

「それ、可愛いね」

「ん？……ああ、これね。入学祝に遠音ちゃんが買ってくれたんだ。と言っても、もう辞めちゃうんだけどさ」

「転校じゃん。お兄ちゃんの会社の学校なんだよね？」

「そうよ。優秀だから、是非来てくれって言われたの」

この半年間でユニオンの本部は完全に移動し、此処から電車で暫く行った所の、舞浜構造改革特区という場所に

腰を落ち着けたのだ。数年はかかると思われていた施設の建造だが、十文字の尽力により、凄まじいスピードで

工事がなされ、既に半分以上の稼働率が見られていた。それにより、来年度から学校が開かれるようになり、

その為の生徒集めの結果、未希にも声がかかったというわけであった。

「光希は来ないの？ 再来年から、中学生よね？」

「うーん。二郎兄ちゃんの家近くの学校も捨てがたいんだよねえ。付きっ切りで指導してもらえるしさ」。

でも、お父さんとお母さんは舞浜特区に引っ越すみたいだし。あ、そつえばウチのお父さんずるいんだよ！

最近訓練で負けそうになると、すごい卑怯な手を使うの。この前何か、僕のケータイ奪ってさ。

未希ちゃんに凄いエッチなメールを送ろうとしたんだから。仕方ないから、負けを認めたフリをしてお母さんに言いつけたけど」

「あ、相変わらず楽しそうなお父さんねえ……」

その後、二人はファミレスを出て駅へと向かった。これから、舞浜特区の見学会があるのだ。

こちらの地理に詳しくない未希を案内する為に、今日光希は呼ばれてここに居る。電車を乗り継いで、数駅。

窓の外には海が広がった。海を埋め立てられて作られたまだ建設

中の舞浜特区の姿も見える。

電車を降りて、改札を抜ける。まだ本公開ではない為に、人通りはそこまで多くなかった。まだ時間があるので、

二人は少し遠まわりをする事に決め、のんびりと散歩をしながら会話を始めた。

「本当に、光希にはお世話になりっぱなしだよな」

「そう?」

「今回の件だって、半年前だって。光希が居なければ困った事だらけだよ。とても、感謝してる」

「何か、改めて言われると照れるね」

「謙遜する事はないわ」

ああ、と光希は心の中で自省をした。未希は多分気づいていない。どうして、自分がここまで頑張ったのか。

めんどくさがりやの自分が、どうしてこんな場所まで来たのか。半年前だって、どうしてあそこまで命を張ったのか。

徹宵の家で、未希と会った日。目を奪われた。心の中で、今までと違う感覚が目覚めた。つまりは、そういう事なのに。

「でも、もう大丈夫よ。過去が、希望をくれたから。未来を見ていく事に決めたから。二度とあんな事は起こさない」

「過去が、希望を……」

あの日、未希が過去から持ち帰ったもの。それが希望なのであり、

未希のあのアクセサリーに入っているものでもある。

すると、未希の手が光希の手に重ねられた。未希はこっちを見ない。顔を赤くしたままそっぽを向いている。

「学校まで……こっしない？」

「いいけど……」

と光希も若干緊張に震えた声で言うと、未希の顔に自らの顔を近づけた。そして、耳元で小さな声を出す。

「未希ちゃんのお父さん達が見てるよ？」

「はっ!？」

未希が驚いた声を上げた。光希は相変わらずの笑顔で、淡々と続けていく。

「さつきから僕に、恐ろしいほどの殺気が集中してるもん」

ファミレスからずっと殺気を感じていた。というよりも、未希と会う度にそれは感じていたので、

光希にとってはもうそれが普通になってしまっていたのだ。未希は顔を他の意味で真っ赤にして声を上げた。

「ちょ、ちょっとやだ! どんだけあの人、娘のプライバシーに関わるうとしてくるのよ!」

「そりゃ、未希ちゃんはお嬢様だしねえ。仕方ないと思うよー?」

「そこ！　ヘラヘラ笑ってない！　逃げるわよ！」

未希が光希の手を引いて、走り出す。光希も満面の笑みでそれに  
応え、走り出した。何時か、二人の未来が交差する場所へと

あとがき

というわけで、終わりました緋色の眼シリーズ。

大体二年近くかかってしまいました。ですが、一番書けてよかった  
と思えるような作品でした。

これで千島蒼二達を主軸とした話は終わりです。これからも、色々  
と戦いは続くでしょうが。

蒼二が朱音に言った言葉、あれが全てです。

蒼二には幸福な最期はないかもしれませんが、あの言葉を貫いて死  
んでいくでしょう。

思えば長い作品でした。

千島蒼二14歳からここまでやってきました。

蒼威、陸人、森羅なんかは15歳から書いています。そんな蒼威も今ではおじいちゃんです。

とても長い時間を書けた事が素直に嬉しいです。

それでは、これにてあとがきを終わります。

これまで数年に渡りお付き合いただいた読者の皆様、本当にありがとうございました。

最期に。

もしかしたらやるかもしれない次回作の宣伝なんぞを。

一応、話の軸と設定だけは作ってあるんで。

## 舞浜掲示板

新着10件表示

・【三十路の】万里先生の魅力について議論するスレPart8  
【アイドル】(太宰炎) 13:28



- ・ 中等部から高等部三年までゼミと呼ばれるクラスに所属。（面接や試験のある所も）
- ・ 卒業後は家を継ぐ者。ユニオンに所属する者。外部の仕事につく者。外部への進学。基本的にその四つ。
- ・ 中等部より寮に入る。家庭の事情によっては、自宅登校も可能。
- ・ 午前中は一般の授業。午後より、各自ゼミに入り教員の指導により学習。
- ・ 一部成績優秀生徒は、高校卒業後二年の専門研究員制度有り。
- ・ 賞金稼ぎ行為禁止。
- ・ 純血、混血、鬼神の差別発言、行為禁止。（処罰対象）
- ・ 家の権力の誇示禁止。（ユニオン代表曰く、親の威光振りかざして威張ってんじゃねーよ、とのこと）

来年度学園内運営役員一覧（決定済のみ掲載）

生徒会長（八神北斗）

副会長（八神南斗）

副会長（皇太郎）

書記（四条莉那）

会計（天美月乃）

風紀委員長（千島光希）

風紀副委員長（二ノ宮明海）

女子寮長（津上青嵐）

男子寮長（天城総一郎）

舞浜学園式神使い序列（非公式、発行生徒会、会長コメント付）  
今年度のゼミ対抗戦、学祭の個人戦結果とアンケート結果より。

一 千島光希（高等部二年）所属：御坂万ゼミ  
入学以来無敗の俺の親戚っ！　そして長身年上キラー！　俺の未希  
さんをよくもおお！

二 天城総一郎（高等部二年）所属：千島ゼミ  
爽やか笑顔の問題児。この人の笑顔は99%嘘でできてるよっ！  
新人生は気をつけてねっ！

三 津上青嵐（高等部一年）所属：浅葱ゼミ  
ウチのママ上様と同じぐらい怖い女。つか、破壊神？　マジでチン  
（以下不適切な為削除）

四 八神北斗（高等部一年）所属：十文字ゼミ  
俺！　地味に四天王じゃ一番弱い！　でも一番常識と良識のある人  
間だという自負があるね。

生徒会長の独断と偏見による先生とかゼミとか紹介

十文字ゼミ（十文字戒）　ご存知十名家最強の先生。偶に重  
度の親バカ事件を起こして娘さんにしばかれていますけどね！

浅葱ゼミ（浅葱陸人）　肉体を鍛えたいならこの先生に  
ついていくべし！　勉学は保障の対象外だけどね！

千島ゼミ（千島蒼威）　ふらっふらと良く姿を消す先生！  
ゼミに入るなら逃亡パターンを把握するとやりやすいよ！

神崎ゼミ（神崎森羅）

イカしたイケメン先生。女生徒が

多いけど、皆先生目当てが多いから、出会い厨ブギャーwww

八神ゼミ（八神正宗）

他の先生が濃い所為か、凄くまと

もに鍛えてくれる先生。でもスパルタ。我らが祖父！

十文字遠ゼミ（十文字遠音）　クールな格闘系先生。勉学もばつち

り！　中級者向けな先生だよ！　偶に逢引してっけど。現在休暇中。

七海ゼミ（七海神楽）

ロックと、パンクとクラシックを

愛する一番変な先生。音楽好きな人は是非！

御坂ゼミ（御坂雨龍）

舞浜高校の悪の吹き溜まりの原因

と呼ばれる先生。でも、結構優しいよ！　特に奥さんには！

御坂万ゼミ（御坂万里）

マジ可愛い！　俺の心のオアシス

！　でも……剣を持たせると超怖いんだよな……現在最強のゼミ。

石動ゼミ（石動大和）

イケメン。このゼミは生徒もイ

ケメンばっか。そして、ナルシスト率100%の恐ろしいゼミ。

有馬ゼミ（有馬空我）

初心者向けのゼミ。力に自信の無

い人に力の使い方を教えてくれる！　空我先生は優しいよ！

風早ゼミ（風早碧）

属性系の武器を使う人が多いゼ

ミかな！　風早ゼミに長くいる人はロリコン扱いされちゃうよ！

六道ゼミ（六道颯太）

寡黙だけど、教えることはちゃん

と教えてくれる笑顔の素敵な先生。帽子がトレードマーク！

太宰ゼミ（太宰巡）

若々しくて遊んでそうな先生。

ゼミ長がしっかりしてるから、もってるようなゼミだね！

海山ゼミ（海山天音）

まだ若いけど、めっちゃ強い先生。

でもちょっと無愛想で怖い。ゼミの雰囲気は良いよ！

五月ゼミ（五月舞香）

これまたちょっと変わり者の先生。

ゼミの人も変わり者が多いって感じ！　よく司書の先生と睨みあっ

てるね！

出雲ゼミ（出雲霧人）

教師の中で一番まとめで、一番や

さしくて、そして多分日本で一番のラッキーボーイ。嫁さんすげえ！

来栖ゼミ（来栖胡桃）

結界士専用のゼミ。毎年来栖先生

と一緒に居たくて無理矢理入ろうとする奴が居るから困る（経験者は語る）

来年度行事予定（暫定版）

学園行事

四月	入学式
五月	ゼミ合宿1
六月	体育祭、中間試験
七月	期末試験、夏休み
八月	補習
九月	二学期開始
十月	文化祭（三日間開催）
十一月	中間試験 三年生修学旅行 一年、二年野外授業
十二月	期末試験、冬休み
一月	三学期開始
二月	ゼミ合宿2 学年末試験・卒業試験
三月	卒業式

生徒会長の切ナイ独白

今年度は色々騒がしかったね。先生方もここ数年で一番疲れたって顔してたよっ！ ご苦労様です！

思い返せば、問題だらけの一年だったね。生徒会選挙でまさか体育

館が爆発するなんて誰が予想できる？

他にも、とある女生徒が陸人先生に脅迫まがいの求婚をしたりね。体育祭では三日ほど行方不明者出たりもしたね。

文化祭事件なんか危うく俺ら退学になりかけたし（笑）……本当に怖いのは、これら全ての事件に青嵐が関わってる事だけ……

後期ゼミ合宿は平和だったけど、期末試験でとある上級生二人の戦鬪の余波だけで重傷者多数だったりもしたなあ……。

うん。来年は平和にやっていこう。そう思った矢先に俺らの中で一番危険な親戚達が転校してくるって話が出るし……。

ま、来年も皆楽しくやろうぜっ！ というわけで、愛すべき在校生諸君。来年度にまた会おうっ！

#### 生徒会役員の一年を振り返ったの反省

今年度も兄が言うように忙しかったけど、皆が楽しんでくれたら幸いだと思ってるよ。

僕らは馬鹿ばっかやってたけど、その根底にある理由は楽しみたい。それだけなんだ。

だから、来年はちょっと真面目になって副会長権限を使って女子生徒のスカート丈の改善や、

水泳の授業での白ススキ水の許可や販売等を学校側と協議していきたいと思ってる。

（副会長・八神南斗）

反省する事はないな。全力でやった。だから、上の馬鹿兄弟は海より深い反省をしてほしい。特に兄の方。

（副会長・皇太郎）

北斗が滅ばなかったのが残念。あら、本音が出てしまったわ。反省

ね……とりあえず、北斗がどうしたら滅ぶのか考えてたら一年経ってしまった気がするわ。南斗は若干大人になったわね。偉い偉い。

コータローはこの一年ずつと走り回ってたわね。来年も期待してるわ。というか、貴方が会長になったら？

莉那も頑張ったわね。大方北斗に言いくるめられて生徒会に立候補させられたのでしょうけど、

貴方の頑張りは皆知ってる。だからもつと胸を張りなさい！ 貴方、お母様と違って大きいのだから

北斗は……どうでもいいや。来年度からあのふざけたヘラヘラ顔を学校で見ない事を祈っているわ。

（会計・天美月乃）

今年はいっぱい頑張りました。来年も先輩方と一緒に頑張りたいです。

弟も編入してきますし。皆さん、私共々よろしくお願いします。

（書記・四条莉那）

陰謀だつ！ 何で生徒会長の反省が

一番下なんだよ！しかも何？俺の

場所だけスペース狭いし、月乃の陰謀

だな！ クソ！ そんなに俺の

（会長・八神北斗）

## 編集後記

北斗、頼むからもう少し自重してくれ。会報だすだけで、精神的な疲労が半端ない。（皇太郎）



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6329c/>

---

緋色の眼 ~ PAST ~

2010年10月17日14時47分発行